
遊戯王GX 静かなる力

紅煌蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GX 静かなる力

【Nコード】

N6790K

【作者名】

紅煌蒼

【あらすじ】

デュエルアカデミア編入試験の数ヶ月前から不思議な夢をみるようになった主人公、たかはなきょうや立花京哉編入試験が近づく度に毎日見るようになっていたそして試験当日のデュエル…一つの奇跡が起こる

第零話 夢（前書き）

さあ始まりましたイエイ！

えーねえうん、とりあえずたのしーくのんびりまたぐりいかせて
もらいますねはい

それじゃ第零話スタートです！

第零話 夢

またこの夢か…今から数ヶ月前くらいから見て来た夢…何も無いこの部屋…出ようにもドアからは出れない…しかし窓からは出れる。いつもの様に窓から外に出る。普段はこれで終わるのだが今日は違った…景色が変わると誰かが居る…俺は全く知らない人だが俺を呼んでいる…何度も…何度も…そして近づくに行くが近づけない、そして俺に一言…貴方を待つて居ます…と…そして暗闇の中へ墜ちた…次も聞こえた…目覚めの時が来た…と何がだ…？何が…そうか、編入試験があつたな…忘れる所だった…さあ起きようか、まだ見ぬ友の為に…新たな生活に…

第零話 夢（後書き）

まあ変なスタートですが勘弁して下さいな
編入試験では白いクロノスが相手です（肌的な意味で）

第一話 試験での奇跡（前書き）

奇跡と言っても精霊との出会いですが…

暖かい目で見て頂ければ嬉しいです（笑）

それではどうぞ！

名前ミスにより訂正しました

第一話 試験での奇跡

「…またあの夢か…」

しかし今日は違ったな…

「…あつやバいつ！今日編入試験だった！時間は…まだいけるな、よつと」

俺はベッドから勢いよく立った。俺は立花京哉、デュエリストだと正直強い部類じゃ無い。前々からデュエルアカデミアに行きたいと願っていて今日の編入試験さえ通れば…という所まで来た

「さてと、準備おっけーだ…」

まあ自己紹介はこれくらいにしておこう、俺は家を出て急いで試験会場まで走った

そこで貰った番号は113番、まあまあだな。

（この時に十代より下なのは解答欄を全てずらしてしまった為）

筆記はまあスルーで実技に入った

大抵は教師と良い勝負や勝利があったが俺の3人前にいた…確か遊城十代だったな…まあそいつが古代の機械巨人を操る教師に逆転勝利した

「へえ…なかなか強いな…」

補助カードが強いわけでは無い

「引き…がすげえ」

思わず笑みが浮かんできた

「次、113番、立花京哉！」

さてさて、出番だ。相手は誰かなあつと

「その前に…つと」

俺は自分のデッキをデュエルディスクに入れて会場に向かった

「相手は…あの古代兵器の人か…」

「それデーワ、始めルーノ」

「はい、よろしく願いします」

「デュエル！」

「私のターン、ドロー！古代の機械騎士を召喚、ターンエンドなノーネ」

古代の機械騎士…確かデュアルモンスター…

「俺のターン、ドロー」

さて、手札には…

「古代の機械騎士には勝てないなあ…じゃシャインエンジェルを準備表示で召喚しターンエンド」

とりあえずリクルートをして…

「私のターンなノーネ、ドロー。歯車街を発動、これにより古代の機械と名のついたモンスターは一体生け贄を減らせルーノ」

それなら…巨人が出てくる！

「古代の機械騎士を生け贄に古代の機械巨人を召喚！シャインエンジェルに攻撃なノーネ！」

貫通に魔法も罫も使えない…

「くっ！」残りは1800…

「シャインエンジェルの効果発動、戦闘破壊された事に攻撃力1500以外のモンスターを特殊召喚する！俺はサイレントマジシャンLV4を特殊召喚！」

「どう足掻いても私の勝ちなノーネ、ターンエンド」

確かにこのままでは負ける…だけど

「強大な力には屈しない…それが俺のデッキ！ドロー！」
来たかつ！

「手札からレベルアップ！を発動！サイレントマジシャンはLV4から8へ進化する！来いっ！サイレントマジシャン」

この時俺の視界が真っ白になった。ただ分かるのは…

「待つて…居ました、マイスター」

俺の目の前にサイレントマジシャンが立っていた…

第一話 試験での奇跡（後書き）

どうでしたかね…なかなか変ですが…次話の更新を頑張っていきま
す！

第貳話 友との出会い（前書き）

はい！参話です！えつと…とりあえずキャラは結構非似かもしれないので許して下さいな
またぐり見て頂ければ幸いです！
それではスタートです！

第貳話 友との出会い

気付いたのはアカデミア前に居た時だった

「…編入したみたいだけど…全く記憶が無い」

あの日は他の人に聞くとところサイレントマジシャンLV8召喚後攻撃しオネストにて攻撃力アップ、古代の巨人を破りレベルダウンをして決めたという

「うゝん…まあ考えも仕方ない、とりあえずオシリスレッドで今から歓迎会みたいだな」

まずは情報(?)を集めるか。RPGの基本でもあるしな…7を付けるなよ

「おゝい！」

呼ばれて振り返るとそこにはクロノス先生に勝っていた…

「遊城十代君…だったかな？」

「そうそう、よろしくな！えっと…」

「俺は立花京哉、京哉で良いよ」

「おう、よろしくな京哉！なあなあデュエルしないか？デュエル！あゝこういうタイプかあ…ま、そんな予感はしてたよ

「構わないよ、でもまずはレッド寮に行かないと」

「まだ時間はあるし大丈夫だって！なあゝなあゝやろうぜゝ！」
まあ良いか

「とりあえずここじゃなくてレッド寮の付近にしよう」

「ああ、良いぜ！早く行ってデュエルしようぜ！」

俺達は(十代に引っ張られる様に)走って行った

レッド寮ではちっこい奴が居た

「あ、アニキ！ようやく来たッスね！遅いッスよ！」

「わりいわりい翔、京哉を連れて来たからさ」

「よろしく、立花京哉だ」

「僕は丸藤翔ツス、よろしくね京哉君」

「それじゃやろうぜ京哉！」

「そうだな、始めようか」

俺と十代は向き合った

「お手並み拝見するぜ十代」

「ああ！楽しいデュエルをしようぜ！」

「デュエル！」

第貳話 友との出会い（後書き）

こんな感じかな十代は…お次は十代とのデュエルを書きますのでまたぐりとご鑑賞下さい

第参話 学園初デュエル（前書き）

以前書いてあったけどミスりました…誠に申し訳ありませんm（
ー）m

訂正+変更もしたので見て頂ければ嬉しいです！

第参話 学園初デユエル

「俺のターンからだドロー！」

そっぴや十代のデッキはどんなのだったかなあ…

「早速行くぜ！俺は手札から融合を発動！手札のE・HEROフエザーマンとE・HEROバーストレディを融合、来い！E・HEROフレイムウイングマン！」

右手が竜のような腕をし右側が赤く左側が緑の戦士が現れた　これがクロノス先生を破ったカード…かあ

「俺はカード伏せてターンエンドだ」

「俺のターンか…ドロー」

まずは様子見、と行こうか

「シャインエンジェルを守備表示で召喚してカードを伏せてターンエンド」

「俺のターンドロー、E・HEROクレイマンを召喚して行くぜ！フレイムウイングマンでシャインエンジェルを攻撃！フレイムシュート！」

竜のような右腕でシャインエンジェルを貫く

「更にフレイムウイングマンの効果発動！戦闘で破壊したモンスターの攻撃力分を相手ライフに与える！」

「何っ！？くっ！」

フレイムウイングマンの右手からの炎を受ける

京哉LP4000↓2600

なるほど、何かしらの強化で古代の巨人を破壊したのか…

「シャインエンジェルの効果発動、戦闘破壊された事によりデッキから攻撃力1500以下の光属性モンスターを特殊召喚する！俺はサイレントソードマンLV3を特殊召喚」

「レベルモンスター？…クレイマンじゃ勝てねえ…ターンエンドだ」

しかしここからが見せ場だぜ十代

「俺のターン、ドロー！スタンバイフェイズ時サイレントソードマンLV3の効果発動！このカードを墓地に送りデッキ又は手札からサイレントソードマンLV5を特殊召喚する！進化せよ、サイレントソードマン！」

サイレントソードマンの身体が光り少年の姿から青年へと変わる

「す、すげえ…」

「攻撃力10000が2300に化けたツス！」

「さらにサイレントマジシャンLV4を召喚！」

白い衣装を纏った少女が現れる

「行くぜ十代！」

まずは先に…

「サイレントソードマンLV5でフレイムウイングマンに攻撃！」

サイレントソードマンは高く飛び一刀両断しようとする

「くっ！伏せカードオープン！ヒーローバリア！モンスター一体の攻撃を無効にする！」

防がれたけど…

「サイレントマジシャンLV4でクレイマンに攻撃！」

杖から白い球体を飛ばしてクレイマンを破壊する

「くっ！」

十代LP4000↓3800

クレイマンは倒せたけど…厄介なフレイムウイングマンを残したか…

「カードを伏せてターンエンド」

布陣は揃ったぜ、十代！

第参話 学園初デュエル（後書き）

はあ…マジ文才ねえ…マジ小説家は偉大だ！ガーゼットだ！↑アヤ
マレ

このようなミスもございますが御許しを！
2は明日書きます！

第四話 学園初デュエル！ 2（前書き）

昨日は申し訳ありませんm（――）m
今後このような事が無いよう努力致します
次は十代との後半戦です！
それではどうぞ！

第四話 学園初デュエル！ 2

十代 LP3800

京哉 LP2600

「次は俺のターンだ！ドロー」

「この瞬間サイレントマジシャンLV4の効果発動！相手がカードをドローする度にこのカードに魔力カウンターを乗せる」

「どうなるんだ？」

「それは乗ってからの楽しみ…ってね」

「じゃあ乗る前に倒す！手札からE・HEROスパークマンを召喚
！」

…1600かあ…

「更にR・ライトジャスティス発動！このカードはE・HEROと名のつくカードの枚数分相手の魔法・罫を破壊する！」

「ならチェーン発動和睦の使者！このターンのエンドフェイズまでモンスターは戦闘破壊されず戦闘ダメージは0になる！」

「ならカードを伏せてターンエンド！」

「俺のターン！ドロー！」

ようやく来た！

「俺は手札から魔法カードレベルアップ！を発動！」

「試験に使ってたカード！」

そのとおりだぜ

「自分フィールドのモンスター一体を墓地に送りデッキ又は手札から条件を無視して特殊召喚する！」

俺はもちろん…

「サイレントマジシャンLV4を墓地に送る！さらなる高みを目指せ！」

サイレントマジシャンの身体が光り大きくなる

「これが俺の切札、サイレントマジシャンLV8特殊召喚！」

は先ほどの幼さが無いキリツとした女性が現れた…がちらつと俺を見たが正面を見る

「?…気のせい…か。」

「攻撃力3500…すげえー!」

「行くぜ十代!サイレントマジシャンでフレイムウイングマンを攻撃!サイレントバーニング!」

飛び上がり杖から先ほどより大きな球体を飛ばす

「伏せカード発動!攻撃の無力化!攻撃を無効にしてバトルを終了させる!」

やるなあ…

「さすがだな、ターンエンド」

「俺のターンドロー!へへっやっぱデュエルは楽しいな京哉!」

何か引いたようだな…恐らくこれは俺の負けかな

「ああ!そうだな」

「でもこのデュエル俺の勝ちだ!手札からフィールド魔法、摩天楼・スカイスクレイパーを発動!」

フィールドにいくつもの高層ビルが立つ

「まさか…ヒーロー強化カード!」

「そうさ、このカードは相手に攻撃力の高いモンスターが居る時E・HEROの攻撃力を1000上げるカード!」

クロノス先生を打ち破ったコンボ…か

「バトル!フレイムウイングマンでサイレントソードマンを攻撃!フレイムシュート!」

高い位置から一気に急降下しサイレントソードマンを貫く

「くっ…!そして破壊したモンスターの攻撃力分をダメージ…負けか…!」

負けちゃったなあ…

第四話 学園初デユエル！ 2（後書き）

がっちゃ！が無かったですねえ…次に書きますよ
次くらいに精霊とヒロインが登場します〜

第五話 新しい出会い（前書き）

今回はデュエル無し＋ヒロインズの登場です
まあパクリ気味ですが…そこ勘弁です！
ではでわ第五話どぞっ！

第五話 新しい出会い

… 負けたなあ

「ガッチャ！楽しいデュエルだったぜ、京哉！」

「負けたけど楽しかったな」

… こいつ等に悪いなあ

「それよりアニキ、そろそろ歓迎会始まるッス！」

「そうだった、行こうぜ京哉」

「早くしないと怒られるな」

俺達は食堂に入って行った

「あの人が立花京哉君やな…」

「そうみたいだね」

「でもあんまり強う無かったなあ」

「でも楽しんでたし… 楽しんでる顔はかつこよかった」

「そうやな… そろそろウチ等も戻るか」

「ボク達の方も始まるし…」

「せやな」

二人の女生徒が女子寮に行った

翌日…

「… きて… さい… 起き… い…」
また夢… か？

「起きて… 下さい… スター…」
でもはつきり聞こえるなあ…

「起きて下さいマイスター」

「うう…ん？」

目をあけて見るとそこにはサイレントマジシャンLV8が…おかしいなあ…ソリッドビジョンか？「早く起きないと朝ご飯食べられませんよ、ほら早く」

触れた…つてええっ！

「な…なな…」

「ようやく起きましたねマイスター」

そこにやどえらい美女が…つて

「なんでサイレントマジシャンが…ここに…」

「なんでつてそれは私達がマイスターの精霊だからですよ」

は？精霊？いやいやいやいやいやいや

「どゆこと全く解らないんだけど…」

「だから私達がマイスターの精霊ですよ、ね？サイレントソードマン」

サイレントマジシャンが見た方を見るとサイレントソードマンが…つてええ！居るの！？しかもLV7！？…そうか…わかったぞ

「夢だ、うん。夢を見てるんだうん。よし寝よう」

再び布団を被ると

「駄目ですよ！早く起きて着替えて下さいマイスター！」

あっさりベッドから叩き出された

…んで

「なんで俺がこんな目に…」

俺は着替えが終了して今の状況を啞然としている

「致し方ありません、マスターは我々を引き寄せた御方なんです。

我々は貴方に引き寄せられたに過ぎません」

…でも俺触れるぜ

「マイスターは特別なんですよ、触れるなんて珍しいですよ」
珍しい…ねえ

「でもなんで「おはよー！京哉！」…」

そこに十代が入って来た

「…じゅ、十代…おはよう」

「せ…精霊だー！」

ええ！見えてるの！？

「おおー！すげえ！京哉の精霊か！？俺遊城十代！よろしくな！コイツはハネクリボーだ」

「クリクリ〜」

「わっ、可愛い〜」

サイレントマジシャンがハネクリボーを抱きしめ頬擦りしている。
というか…

「十代も精霊がみえるんだ」

しかもハネクリボーって言うちっちゃなの…

「まあな、でも他の奴は見えないから変な目で見られるけど…」
まあそうだろうな

「それより飯食いに行こうぜ飯！」

「そうだな、それじゃ行こう」

「我々はここに居ますので…」

「わかった、取りに来るから」

「可愛い〜」

「クリ〜」

…サイレントマジシャンがしっかり掴んでるから脱出出来ない…哀れなハネクリボー…俺達は食堂に向かった

第五話 新しい出会い（後書き）

というわけでもうやく登場のサイレントズと影だけのヒロインズでした！

朝っぱらの投稿ですが許して下さい…

次は翔君覗きをするの回です

第六話 いつの間にか目付けられた… ストーカーじゃないから良いけど（前書き）

修正バージョンです。まあ読みを修正しただけですが… 残りの修正を投稿次第最新話を投稿します

第六話 いつの間にか目付けられた… ストーカーじゃないから良いけど

…それから数日が過ぎ…

「…レッド寮でなんで無駄に料理が美味いんだ…」
魚にしてもエビフライにしても美味い

「他は豪華らしいツス」

豪華さは要らんよ

「飯食ってから授業かあ…サボるか」

「おお！京哉、そりや良いな！」

「良くないツス！ちゃんと授業に出ようよ」

そうは言ってもなあ

「授業嫌いだし…」

実技以外は

「毎日の授業が実技だったら良いのになあ…」

「そふえふああおほつふあしゅうたい（訳…それは思った十代）」

「そんなの駄目ツス！」

はいはい…

「とりあえず今回は出るか」

「じゃあ京哉、俺の瞼に目書いてくれよ」

よし来た！任せてくれ

はあ

「終わったなあ」

「疲れたぜ…あれ、翔は？」

「なんか用事だから先に戻ってくれツス！…だって」

「ふん…帰っても暇だし…」

「俺は帰って寝るかな」

暇なときの正しい過ごし方なんだなこれが

「仕方ねえ俺もそうすつか」

そうしてレッド寮に向かって行った

その頃…

「うーん…結局これ誰ツスかねえ…？」

翔は手にラブレターを持って女子寮の風呂を覗ける場所に居た。ず
っと唸っているうちに…

「きやああああ！覗きやあああああ！」

「えっ！？いや僕はここに…」

「こつち見ないで！」

ヒューン

「げふう！」

翔は石鹼やら鹽やら何やらを投げられ捕縛された

その夜…

ピピピッ…

「何だよ…人の眠りを妨げやがって…」

音源は携帯（うしきの）からでメールだった

「何々…ハア！？」

間抜けな声を上げた時

「京哉、大変だ！翔が…」

「ああ…こつちも来た」

覗きで捕まるとか情けないぞ翔…

「どうしますかマイスター…？」

そりゃあ…

「助けに行くか仕方ない」

「なら早く行こう！」

「あいよっ！」

着替えの時間、わずか20秒

そして俺達は女子寮に向かった

女子寮には女子が6人

「翔！大丈夫か！？」

「あ、アニキいゝ京哉君」

「ようやく来たわね」

彼女が頭みたいだな

「私は天上院明日香よ、彼がこの娘達を覗き見たって聞いてね」

天上院が少しずれると3人の女生徒がおり一人は赤くし一人は怒っ

ており一人は苦笑いをしていた。翔よ…情けない…

「確かにレッド寮は男ばかりかだけどさあ」

わざわざ除きに行くとはなあ…

「ち、違つよゝ京哉君！僕は呼び出されて…」

なんだ違つのか…

「…と言つてはいるが？」

「認めないわよそんなの！」

「そうですね！明日香さん達を覗いた罪は重いですわ！」

だよねえ…

「ちなみに天上院、アンタは覗かれたのか？」

「一応…ね」

あゝ翔よ、お前は死亡確定な。見ろ、外野の二人がすっごい目をしてるぞ

「とりあえず…彼を解放して欲しいなら二人ともデュエルして勝てたらこの事は黙っててあげる」

なるほどね…

「そのデュエル買った!」

「だけど1対2は…」

「そこで一人は私と、もう一人はこの娘達のうち一人選んでデュエルして」

そっか…それなら

「十代、頼めるか?」

「ああ、任せろ!」

天上院は十代に任せよう。んでもう一つと

「ようやくキミとデュエル出来るわぁ…ウチ等の中で誰がええ?あ、そーや。ウチは坂上倭や」

一人は今喋った関西弁茶色のショート娘…倭ね

「ボクは赤坂凜だよ」

赤髪の長めが凜

「私は神谷喬…」

黄色のロングが喬…

「立花京哉だ…ごめんな」

「へっ?」

「ふえっ?」

「えっ?」そりゃいきなり謝られたらそうなるな

「ダチが迷惑かけてしまったから…アイツは今泣きそうに天上院と十代のデュエル見てるが心から反省してるからさ…」

許して貰えるとは思ってないが…

「別に構わんけど?」

…え?いいのかよ…

「ウチ等は京哉君とデュエルしたかっただけやし…」

…えーそんなのに使わないでよ…

「それよりボク達の中では誰が良いの?」

誰って…誰でも良いんだが…

「じゃあ…君で」

「ええ？」

俺が指命したのは喬だった

「良いなあ喬ちゃん」

「え…えと…お願い…します」

おとなしい娘だな…

「ああ、よろしく。それじゃ始めるぜ

」「デュエル！」

「私から行きます…ドロー」

さすがにこんなデュエルにサイレンズは使いたくない…

（何故ですか？マスター）

お前達は俺の相棒だ…ここで煩わせたくない。それに…約束もある
しな

（…分かりました、どうぞお気をつけて）

サンキュ、ソードマン

「モンスターをセットしてカードをセットしてターンエンド」

リバー…だが、このデッキは…リバーを恐れない！

「俺のターンドロー！俺はE・HEROエアーマンを召喚！」

翼があり翼にローターが付いたヒーローが出てくる

「E・HERO！？」

「そんなも持ってたんか！？」

「エアーマンの効果発動！デッキから手札にHEROと名のつくモ
ンスターを加える、俺はE・HEROアイスエッジを手札に加える」
さてさてつと

「バトル！エアーマンでセットモンスターに攻撃！」

ローターが回りそこから竜巻をセットモンスターに攻撃したがセッ
トモンスターはアクアマドルだった為に反射ダメージが与えられた

京哉LP4000↓3800

「ならカードをセットしてターンエンドだ」

「私のターン、ドロ―…アクアマドールを生け贄に氷帝メビウスを召喚します」

氷帝は確か魔法やトラップの破壊カード

「メビウスの効果によりセットカードを破壊します」

メビウスは吹雪を起こし俺のセットカードのミラーフォースを破壊した

「バトル、メビウスでエアーマンを攻撃します」

メビウスが手から氷の塊を飛ばしてエアーマンを落とした

「くっ！」

京哉LP3800↓3200

「ターンエンドです」

Side凜

「やっぱあんまし強う無いなあ…」

確かにまだまだ甘いけど

「ボクは京哉君が勝つと思うよ」

「根拠は？」

根拠は…

「目…かなあ…」

まだ負けて無い目…いや、勝つ目

「確かに…ここでミラクル起こしたらすごいで」

とても楽しみだよ京哉君

S i d e 京哉

なんて強い…けど…

「俺のターン、ドロー！」

退けば負ける！だからここは…

「E・HEROアイスエッジを召喚！効果発動！手札を捨てることで相手にダイレクトアタックを出来る！」

現れた氷の戦士は喬にタックルをする

「っ！」

喬LP4000↓3200

さらにアイスエッジは喬のリバースカードの炸裂装甲を破壊した

「このカードが直接攻撃でダメージを与えた時相手の伏せカードを破壊出来る、カードをセットしてターンエンド！」

「……………」

あれ？どうしたんだ…？

「私…男の人に初めてダメージ与えられた…」

…え？マジか？それはマジで？

「私のターン…ドロー」

もしかして怒ってる？

「デュエル…今まで男の人とはつまらなかった…でも不思議と今とつても楽しい…」

…よかった、楽しんでる…

「私は団結の力をメビウスに装備してディープダイバー召喚します」
攻撃力が4000…

「この楽しい時間も終わりです…ありがとうございました…メビウスでアイスエッジを攻撃します」

確かに通れば負ける…でもな

「伏せカード発動、ガードブロック！戦闘ダメージを0にしてカードをドロー！」

「っ！それではディープダイバーでダイレクトアタックします」
くうっ！

京哉LP3200↓2100

「ターンエンドです」

すげえな…

「確か…喬って言ったな？」

「うん…」

「すげえ強いよ…今の状態の俺じゃ太刀打ち出来ないほど…」

実際に考えると今のが除去されたならかなり痛かった…けど…

「俺の…勝ちだ」

「っ！」

「俺のターン…」

手伝って欲しい…俺だけじゃ無く彼女…喬達の為に…答えてくれ

「ドロー！…手札からミラクルフュージョンを発動！墓地のアイスエッジ、エアーマンをゲームから除外、これが切札の一人！E・HEROアブソルトZERO！」

S i d e 凜

「す、凄い…ホンマにミラクル起こした！」

さすがに…こんなタイミングでミラクルは…

「…確かに凄いね」

これは京哉君の勝ちだね

Side 喬

「ア、アブソルート…ZERO!？」

そこには真っ白な氷の戦士が立って居た

「だけど攻撃力は2500…私のメビウスには及ばない」

自殺行為？そんなわけない、あの目で

「アブソルトZEROはコイツ以外の水属性一体につき500ポイントアップするんだ」

「けどまだ…そうか…」

「そう、俺は手札から2体目のアイスエッジを守備表示で召喚し、更に攻撃力がアップする」

攻撃力4000…相殺狙い？

「まだだ！手札から巨大化発動！アブソルトZEROに装備！魔法カード大嵐を発動！」

巨大化…攻撃力6500…そして大嵐で攻撃力が戻った…

「行くぜ…アブソルトZEROでメビウスに攻撃！絶対零度！」
フリージングアットモーメント

右腕が刃に変わったアブソルトZEROがメビウスを両断する

「きゃあああっ！」

喬LP4000↓0

負けた…初めて男の人に…そうしていると彼が寄ってきた

「大丈夫か？」

心配そうな顔をして居た

「大丈夫です…」

私は少し俯いて居た…カッコ良かったから…

「そっか、立てるか？」

そう言っただけは手を差し出してくれた

「はい、ありがとうございます」

とっても優しい…そして楽しかった…

「喬ちゃん大丈夫？」

倭と凜が声をかけてきた

「ごめん…負けちゃった…」

「ええよええよ、ウチ等も見とって楽しかったし」

「それにしても京哉君強いね」

「うん…そうだね」

京哉…名前、覚えておくからね

S i d e 京哉

さて、十代の方も終わったし…バレずにかえるぞ

「ったく…んのバカ」

翔を軽く小突く

「いてっ！何するんすか!？」

「不明なもん貰いやがって」

「仕方ないツスよ！靴の所に入ってたんスから！」

「まあまあ、翔も無事なんだから良いじゃねえか、早く帰って寝ようぜ」

まあそうだな、眠たいし

「お、着いた。んじゃさっさと寝るかあ、また明日な」

「おう！」

「おやすみツス」

俺達はそれぞれの部屋に戻り就寝した

第六話 いつの間にか目付けられた… ストーカーじゃないから良いけど（後書き）

こんな事もありますがお許しください

第七話 賭け決闘（前書き）

さあ今回は新デッキその2！何故サイレントデッキは使わないかは
…秘密

それではどうぞ！

第七話 賭け決闘

第○話！翔、風呂を覗くからはや半年…

「そんなに経って無いッスよ…せいぜい2日と8時間ッス」

ちっ！突っ込む所は突っ込みやがって…

「それにしても実技は嫌ッス…」

「そうか？俺は楽しみだぜ、な！京哉」

「誰とも出来るのが良いところだな」

実際に昨日と翔の覗き事件前までにブルーの生徒を8人程完膚なきまでに叩きふせている

「よう十代、京哉」

そこへスリースワンプアース事三沢が来た

「よう三沢、デッキの方はどうだ？」

「良い感じだな、この分だと6番目も出来そうだ」

「6つもあるんか？作り過ぎや無いか？」

そこに倭と凜が来た

「属性によつて考えいるんだ、6もあつて当然だ」

「でもそれなら京哉君も二つだよな？」

ちよっ！凜、それ内緒だつて！

「本当なんスか？」

「見せてくれよー！」

「興味深いな」

あゝえつと…

「すまないが見せれないんだ、秘密事項だ」

他人に渡せないって事だ、それがダチでも

「えゝ駄目なのかよゝ」

「デュエルになら使つて良いけど…基本はサイレントデッキだから
本当に申し訳無いな…」

「まあ無理なら仕方ないな」

「ところで喬は？」

「喬ちゃんならそこで実技始めるで」

倭が指を指したところでは互いのデッキを混ぜ今から始めるところだった

「お願いします」

「喬ちゃんとデュエル出来るなんて僕幸せ…ぷきゃぎゃ」

「あう…」

うわぁ…可哀想に…

「あの人確か喬ちゃんファンクラブKKKの人…」

「と、KKKてなんスか…？」

「K（今日も）K（可愛い）K（喬ちゃん）」

…よく解らん

「ちなみにウチと凜ちゃんのやつもあるんよ？ウチがYYY（言う事に勇気を与える倭ちゃん）で凜ちゃんがRRR（凜々している凜ちゃん）や」

まてまて、倭のと凜のやつ意味が解らんぜ

「とりあえず喬の応援っ」と

あう…この人嫌…嫌な目で見る…

「おーい喬！」

この声…

「京哉…」

良かった、救い船…

「平常心平常心、落ち着いてな？」

「…うん」

喬は笑顔で応える…でもさ

「気のせいかな？周囲の視線が痛い…」

「あゝあれはファンクラブの人らやなあ」

…よう解らん！アイツ等は

「ぷきやぎや…喬ちゃん笑顔可愛いなあ」

…雑音だ、よしっ集中…

「僕喬ちゃんの為なら何でもするよ」

「早く始めよう…」

「デュエル！」

「僕優しいから喬ちゃんに先攻を…」

「私は後攻で良い」

ほう…珍しい…

「ぷきやぎや、それなら僕の先攻ドロ」

ここから先は言わずもがな…え？だって次のターンでオーバーキルされたなんて言えないだろ？

「ようやく俺か」

長かったなあ…喬の次からは倭↓凜↓天上院↓十代↓三沢↓翔↓万丈目↓俺だもん…ここに居るのは上のメンバーに万丈目を引いた人員だな…寂しい

「んで俺の相手はまたブルーか」

「君みたいな落ちこぼれに僕らブルーが負けるなんてね」

居るよなあ…大して強く無いのに過剰意識。まあ俺も強く無いけど

「そもそも勝てるのはサイレントデッキのおかげさ、そこでだ」

なんだ？

「僕が勝つたらそのデッキを貰うよ」

声を潜ませて言ってきた…って

「何！？…ふざけるなよ…」

「もちろん賭けだよ」

「…そつちもデッキ賭ける…なら吞んでやる」

（駄目ですマイスター！）

誰が渡すかよ！俺の相棒を

（しかっ！）

（我々を賭けれる程自身があるんですね…）

当たり前だ

（わかりました、ではお任せしましょう）

（ソードマン！）

（ここは主に任せよう）

（…わかりました、マイスター…）

（駄目ですマイスター！）

（誰が渡すかよ、お前達を）

（ですが…！）

（我々を賭けれる程自身があるんですね？）（当たり前だ、でもお前達は出さない。奴には痛い目にあって貰う）

そうサイレンズに告げ俺はデッキを取り出した

「始めようか、デュエルだ！」

「…デュエル…」

「僕から行こう、ドロー！僕はコマンドナイトを召喚、さらにカードをセットしてターンエンド」

「俺のターン…ドロー…」

手札を見て理解出来た…もう終りだ、あんまり速攻で終わらすのは性に合わないけどな

「なんだい？手札事故かい？まあ事故するようなデッキを作るなん

て所詮落ちこぼれだね」

ああ、どっからどう見ても事故…でも終りだ

「手札からサイクロンを発動、伏せカードを破壊」

これでな…

「手札から装備魔法未来融合―フューチャーフュージョンを発動！

デッキから融合に指定するカードを墓地に送り融合召喚する」

俺は…

「デッキからサイバードラゴンと機械族全てを墓地に送る」

な…

「なんやて！？」

「それにサイバードラゴン…何で京哉君が…？」

ウチ等皆驚愕していた、サイバー流では無い京哉君がサイバードラ

ゴンを使ったあげくデッキの機械族を全て墓地に送ったからや

「墓地に送ってなんの意味が…」

なんやろ…

さてと、コイツだ

「選択するモンスターは…キメラティックオーバードラゴン！」

現れた機械の竜は…

いくつもの首があつた

「そ、そんな事が…」

「更にキメラティックの効果発動、このカードが融合召喚に成功した場合このカード以外を墓地に送る」

そ、そうしたら…

「キメラティックオーバードラゴンは破壊する」

「カイザー！」

「亮！さん！」

「お兄さん！なんで…」

「遊城十代と立花京哉のデュエルが気になってな…」

カイザーの気を止めるなんて…流石やな

「でも京哉君どう見てもアレが切札…」

誰もが見てわかる…アレが切札やって

「その切札を墓地に送る事に意味があるのだろう」

カイザーも来たみたいだな…

「そんな切札を破壊するなんて自暴自棄かい？」

「…このターンで終わらず、手札からオーバーロードフュージョン発動！」

「な、何っ！」

「墓地のキメラティックを含む機械族モンスターを全て除外し闇属性の機械族モンスターを融合召喚する」

「ま…まさか…」

そう…その…

「まさかだ、キメラティックオーバードラゴン！」

再び現れたキメラティック…

「攻撃力は…」

16800…

「あ…あり得ないノーネ…」

誰もが思った言葉をクロノス先生が言った

「そんな…そんな…」

「キメラティックの攻撃！エヴォリユーションレザルトバースト！」

キメラティックの一斉攻撃によりコマンドナイトは一瞬にして散っていき

「うわああああ！」

相手は吹き飛び俺の勝ちとなった

第七話 賭け決闘（後書き）

はいどう見ても未来オーバーです。何故主人公は3つもあるのか。それは次のお話で。

第八話 真相（前書き）

最後を修正しました。やはり2人は出したいと思いましたので

第八話 真相

アレから3日が過ぎた…俺達は食堂に居た、あの時に見ていた生徒、十代達だ

「教えて貰おう、お前がサイバードラゴンを持っていた理由…」

「E・HEROを持つている理由もね」

仕方ないよなあ…派手にし過ぎたし…何より…

（マイスター…）

（…わかってますね？）

サイレンズの視線が痛い

「わかりました、話しますよ…ただし他言無用でお願いします」
皆は頷いた

「何故俺が持っていたか…それは…」

それは今から5年前…

俺は親の都合で引越しを繰り返して友達なんか居なかった…そして5回目の引越した時に俺は初めて友達が出来た…隣に住む兄妹で俺はその人達をお兄ちゃん、お姉ちゃんと言って慕っていた…
「お兄ちゃん、お姉ちゃん！今日は何して遊ぶの？」

「今日はこれさ」

そして俺に遊戯王を始めるきっかけを作った人達だった

「遊戯王？僕やり方知らないよ？」

「私達が教えてあげるよ、京ちゃん」

「とっても面白いぜ？」

俺は二人に教えて貰いながらどんどん上達して行っただがそれも一時の安らぎ…数ヶ月後に俺は引越しをしなければならなくなった

「…そう…京ちゃん引越ししなきゃ駄目なのね…」

俺は泣いていた、初めて出来た友達であり実の兄や姉のように慕っていたからだ

「嫌だよう…ヒック…まだ一緒に居たいよう…」

仕方ない事だった、でもやっぱ辛い

「京哉、これを」

お兄ちゃんは俺に一つのデッキを渡してきた、俺はデッキを見て驚いた。そのデッキにあったカードは…

「サイバードラゴン…」

亮さんご名答。

「当時は知らなかったが後にその兄さんはサイバー流だった…って訳だ」

「…成る程…だが…」

サイバー流は正統後継者がいる…相手をリスペクトするデュエリストを…

「その辺りは分かりませんが…兄さんはコレを俺に“預けた”そして月日が経ち…」

一年前…俺の家に二つ荷物が届いた…送り主はあの兄さんと姉さん
「なんだろう…珍しいな」

引越しても長期休日などを利用して遊びには行っていたが…

「とりあえず…開けよう」

荷物を開けてみるとそこにはデッキケースが一つと封筒が一つ入っていた

「デッキケース？」

手にとってみるとそれに添えてあった手紙が落ちた。それを見た俺

は絶句した…

兄さんが…

姉さんが…

死んだ…

俺は手紙を読み始めた…そしてこう書いていた

京哉へ

いきなりの手紙と荷物、ビックリしただろう。でも俺は言わねばならない、俺の家は父が業務で失敗した為に多大な借金を抱えてしまった為に一家心中する事を…無理矢理会社を辞めさせられたあげくに俺達を殺そうとした。俺は葵と一緒に逃げたけどもう駄目だ。だから俺は葵と一緒にこれ等をお前に託す、一緒にある封筒は葵がお前の為に手に入れた大切なカード。そしてそのデッキは俺の魂。むざむざあんな父親に斬り刻まれてたまるか！俺達はもうこの世には居ない…けどこのデッキとカード…そしてお前に渡したデッキを俺達と思ってくれ。そしてデュエルを楽しんでくれ。俺からはこれくらいしか言えない…お前と別れるのは残念だがそのデッキが示してくれる、俺達の行く道を…それじゃあな

デッキを見てみた…そのデッキは兄さんの魂であったE・HERO…だった

そして俺は封筒の方も開けてみた

すると中には手紙と2枚のカードがあった

京ちゃんへ

いきなりごめんね、私達もう会えない所に行かなきゃいけないの。
だから…ごめんね。同封したカードのマジシャンの方は私、剣士の
方は兄・海度と思って使って欲しいの。昔…京ちゃんに私が京ちゃ
んのお嫁さんになるって話、守れないよ…本当に…ごめんね…私達
を使っで楽しんでね…それじゃあばいばい、京ちゃん

封筒から出てきたカードはサイレントマジシャンとサイレントソー
ドマン…そして気付けば…俺は…声を殺し泣いていた

ボク達は重くなった、まさかそんなに悲しい過去があつたなんて知
らなかつたから…

「京哉君…」

とっても悲しい過去。聞いてしまつて申し訳無く思つた

「すまない立花…お前にそんな過去があつたなんて…」

「いや、いいんです。兄さんと姉さんは俺のデッキの中に生きてま
すから」

京哉君は優しい笑みを浮かべていた、とっても優しい笑みを

「本当にすまねえ京哉」

「良いつて、それよりデュエルしようぜ、十代！次は負けねえぜ」
暗い空気を払拭するように言つた

「あ…ああ！E・HERO同士で勝負だ！」

「望む所だ！俺達のE・HEROを見せてやるぜ！」

そう言つて京哉君と十代君は外に出た

「あつ！待つて欲しいッス！」

「面白そうだな、見させて貰おう」

「そうね、彼らの見てて面白いし」

「そうだな」

三沢君、明日香さん、亮さんも出て行つた

「凜、私達も…」

「そうや、京哉君ともやりたいからウチ等も行こう！」

「うん」

ボク等も京哉君を追いかけた

「…京ちゃんの良い友達を持ったね兄さん」

「そうだな…デュエリストとしても技量も素晴らしい」

「フツ…いつか追いつくんじゃ無い？」

「その時はまた離すさ」

二人は京哉を確認し二人はアカデミアの方に港へ向かった

第八話 真相（後書き）

修正版はどうでしたか？やはり師匠キャラは出すべきだということ
で変えましたので

第九話 万丈目さんだーになる前（前書き）

文がおかしかったために修正バージョンです

第九話 万丈目さんだーになる前

真相を話してから数日が過ぎた…

「…俺がですか？」

「そうなノーネ、シニョール万丈目とデュエルするノーネ」
万丈目とデュエルする事になった

「おお！いいじゃん！俺もやりたかったなあ…」

十代、出来るならなら変わってもらいたい…

「なんでも万丈目からの希望だつてさ」

他の奴選べよ

「まあわからなくも無いツス…京哉君ブルーばかり倒してんスカ
ら…」

いやいや、好きでブルーとやってる訳じゃ無いって

「そういえば京哉はサイレントデッキばかりで一回だけサイバー
を使ったな」

「三沢君居たんだ」

「居たよ！今来たばかりだが」

どうせまたクロノス先生の罠だろうなあ

「とりあえず明日模擬デュエルするらしいから…さつさと寮に戻っ
て…」

「デッキの調整ツスカ？」

「新しい料理の開発だな」

「…「だあー！」」」

見事にこけていただいた
そして翌日…

「ただいまより、シニョール万丈目とシニョール立花とのデュエルーを始めるーノ」

大歓声…ハア…

「この人はどれだけ俺がブルーに潰されるのを希望するんだよ…」

「フン！今までブルーを叩いてたな、だが貴様は今日俺様によって倒される！」

おーおーエリート意識全開だねおい。そんなに断言しよって…どーせ目立ちたいだけだろ

「京哉ー！頑張れよー！」

「頑張るツスよー！」

「京哉君頑張るんやで〜！」

「応援してるよ京哉君！」

「ファイト、京哉」

応援ありがとう、そしてファンクラブの子達視線が痛い。殺意と嫉妬の眼差しは辞める

「それでーわ、始めるーノ」

もち頑張らせて頂くよ

「それじゃ始めようか、エリート万丈目君？」

「フン！せいぜい足掻くがいい！」

「「デュエル！」」

「先攻はシニョール万丈目からなノーネ」

「俺のターンドロー！俺は手札から前線基地を発動！手札からYヘツドドラゴンを特殊召喚！更にZメタルキャタピラーを攻撃表示で召喚、カードを伏せターンエンド」

あれは…

「ユニオンモンスターだな」

「ユニオンモンスター？三沢君何それ？」

「特定のモンスターに装備出来るモンスターや」

「モンスターをモンスターに装備出来るんすか？」

「そうだ、効果は様々だが一番の共通点は装備モンスターが破壊される時の代わりになる事だな」

「へえ」

三沢と倭、解説をありがとう

「俺のターン、ドロ―…モンスターが2体か…どうするか」

しかも2体ともユニオン。倒せないこたあ無いが…手札にモンスター無し…かあ…

（マイスター…申し訳ありません…）

（何、お前達は悪く無いよ。引寄せれなかった俺の失態だ）

（ですが…）

（安心しろ、お前達を使って負ける事は無い！）

（マイスター…）

さてと会話も終わった、始めるぜ

「カードを2枚セットしてターンエンド」

その時に周りはざわついた

「モンスターを出さないだと…貴様舐めているのか！？」

「コイツ等を使って舐める事なんかしない、ただ事故しただけさ」

そう…ただの事故だ…勝利へのな

マイスターのフィールドには伏せカードが2枚、比べて万…万…なんでも良いです、万なんとかさんのフィールドはユニオンモンスターが2体に前線基地…

「マイスター…」

…ここで万丈目がモンスターを出して総攻撃されたら負けだな

「俺のターンドロ―！俺はX―ヘッドキャノンを召喚！さらに三体を除外してXYZドラゴンキャノンを召喚！」

Xヘッドを上にもドラゴンを真ん中、Zメタルを一番下にした合体モンスターが出てくる

「それが切札モンスターか？」

「まだだ！XYZドラゴンキャノンの効果発動！手札を1枚捨てることでカードを1枚破壊する！俺が破壊するカードは最初に伏せたリバーズカードだ！」

それなら…

「選択したカードをチェイン発動、威嚇する咆哮！攻撃はさせんぜ」

「チツ…なら前線基地の効果でW―ウィングカタパルトを守備で特殊召喚してターンエンドだ」

青い…なんかよくわからないのが出てきた

「俺のターン、ドロ―！手札から強欲な壺を発動！2枚ドロ―」

ここですよやく…モンスターカード

「俺はシャインエンジェルを召喚してカードを伏せてターンエンド」
今はコイツで防ぐしか無い

「フン！そんな雑魚など潰してやる！俺のターンドロ―！V―タイガージェットを召喚！VタイガーとWウィングを除外してVWタイガーカタパルトを召喚！」

虎のジェット付きがカタパルトの上にのり…まあとりあえず変なのだ

「VWタイガーカタパルトの効果発動！手札を捨てシャインエンジェルの表示形式を変える！」

シャインエンジェルが攻撃表示になる

「行くぞ！XYZでシャインエンジェルに攻撃！」

シャインエンジェルに一斉放火が当たる

「ちっ！シャインエンジェルの効果発動！デッキからシャインエンジェルを特殊召喚する！」

「ならVWでシャインを攻撃！」

「ぐ…サイレントマジシャンLV4を特殊召喚！」

京哉 LP4000 ↓ 2000

「チツ…ターンエンドだ」

「俺のターン…ドロー！」

全てコイツに賭ける…

「…悪いな万丈目、俺の勝ちだ…」

「何い！この状況で出任せを…！」

「おおっ！出たぜ、京哉の勝利宣言！」

見せてやるぜ！

「サイレントソードマンLV3を召喚！手札からレベルアップ！を2枚発動！対象はサイレントマジシャンとサイレントソードマン、次なる高みを目指して進化せよ！サイレントマジシャンLV8、サイレントソードマンLV5特殊召喚！」

「来た！」

「京哉の」

「切札や！」

けどまだまだ

「次が最終進化…手札から魔法カード発動！収縮！XYZの攻撃力を半分にする！」

「チイツ！だがまだ…」

終わらねえよ！

「リバーズ発動！レベルアップ！」

「な、何い！」

「最初にあつたのはブラフだったのか！？」

「よく破壊されなかったツス…」

「対象は…サイレントソードマン」

最終進化だ…

「現れる！サイレントソードマンLV7！」

さらに大きくなったサイレントソードマンが現れた

「ば…馬鹿な…」「最後だ！サイレントマジシャン！XYZに攻撃！サイレントバーニング！」

サイレントマジシャンが放った攻撃によってXYZが破壊された

「ば…馬鹿な…こんな事が…」

「サイレントソードマンでVWを攻撃！沈黙の剣！さらにオネストを発動！切り裂け、沈黙の刃よ！」

「うわああああ！」

悪いな万丈目…

「俺は更に高くなるんでな」

こんなので敗けられないからな

俺は振り返り十代達の所に行った

第九話 万丈目さんだーになる前（後書き）

修正しましたがまたおかしい文を見つけましたらご指摘をお願いします

番外編 空気男の相手（前書き）

初めての番外編です…三沢がメインで出てきます。空気男に清き存在感を！それではどうぞ！

番外編 空気男の相手

「暇だ…とてつもなく暇だ…」

万丈目を叩いてから3日が過ぎた…

「万丈目とやってからブルーがビビリやがったからなあ」

正確にや万丈目親衛隊と言うべきか

「まあマイスター…そうおっしゃらずに」

暇だから仕方ないが…

「なんなら私が剣を教えましょうか？」

…どこで使えるんだ？

「森の中とかに使えるかと」

俺は何しに行っているんだ

「まあ剣術つてのも悪くは無いな」

「それならマイスター、私の魔法も…」

「それは無理だ」

「そ、そんな…」

泣きそうな顔をするな！罪悪感にみまわれる！

「京哉、居るか？」

そこに三沢がやって来た

「よう三沢、俺にようか？」

「ああ、7番目のデッキの制作を手伝って欲しいんだ」

ナイス三沢！暇潰し確定！

「わかった、手伝うよ」

（そういう事だ、すまんなソードマン）

（仕方ありません、またの機会にしましょう）

（マジシャンもごめんな）

（いえ、せっかくのご友人のお誘いは無下にできませんよ）
すまないなサイレンズ

「ところでどこで作るんだ？」

「無論俺の部屋だ」

「わかった、それじゃ行こうぜ」

「その前に倭君達も呼んでくれ、いろいろな意見を聞きたい。後十代は呼ばないでくれ」

…成る程…

「対十代デツキか」

「そういう事だ」

俺は倭達に連絡しイエロー寮に向かった

「…来てみたものの何この部屋…」

「何って俺の部屋だ」「数式ばかりや…」

そこには壁や天井に数式がびっしり書かれていた

「こんな所によく居れるな…俺だったら狂ってそうな気がする…」

「既に抵抗してる娘居るけど…」

入口を見ると凜が震え喬が入れようと頑張っている

「凜、頑張ってる…」

「うう…ボク無理だよ…数式見ると…になっちゃうんだよ…」

「…」の部分が気になったが気にしないでおう、うん

「んで三沢はどんなデツキを作るんだ？」

対十代となるとやっぱり融合封じがベストだが…

「とりあえず融合封じるのはいるな」

だろうな…後…

「E・HEROは融合素材モンスターのパワーが足りないから魔デツキを使うのも有りじゃないか？」

1番高くて2600…だったか？

「でもそれやと融合されたら終いやで？」

「それなんだよなあ…」

「融合禁止区域とか…」

「融合失敗とかどお？」

「うーむ…」

その他弾圧やホルスの案も出たものの決定には及ばない

「まずあの引きをどうにかしないと…」

そつだ、あの鬼の引きにはまず誰もかなわない

「それは言わないお約束やで三沢君」

「…だよなあ… やっぱり融合を封じをメインにしたら？」

「私もそれが良いと思う」

その後… 1時間に及ぶ会話の後に

「よし決まった。皆の意見を取り入れた結果だ」

三沢は俺達にデツキを見せなかった。後の楽しみだとさ

「ようやくだったな」

「後が楽しみやわ」

「そうだね…」

「三沢君には悪いけどボクはこの部屋から早く出たい…」

「4人ともありがとう、コレで十代を倒せそうだ。この後俺は用事だからすまないな」

「良いってことよ、それじゃ帰るか」

「そやな、ほな三沢君頑張つてなあ」

「またね…」

「うう… ようやく解放されたよお」

俺達はイエロー寮から出て行った

「この後暇やから京哉君の部屋行ってすごさへん？」

「ボクは大賛成ー！」

「いい、京哉？」

…は？俺の部屋？

「汚いから止めとけ」

実際は汚いどころかかなり綺麗にしているけど

「ウチ等が綺麗にするよ？」

「いや、カード散らばってるし」

「ボクが片付けるよ」

「かなり臭うし…」

「消臭剤とか持っていけば大丈夫だよ…」

…もういいや

「分かった分かった」

3人は嬉々として遊びに来、俺が主夫のような活動をしているのがバレた

ちなみに後日三沢は十代とデュエルをして敗北した。そりやね…謎にハニワが入ってたからな。手札に3枚。本人も入れた記憶が無いらしい

番外編 空気男の相手（後書き）

寂しいと思っていたら今回はゲストがいらっしやいました

葵「初めまして〜兄と心中しました山本葵です！」

海度「同じく兄の海度だ」

いやあ死人お二人様かあ…生きてるほうが良いなあ

葵「呪いますよ？」

海「憑いて此方側に来て貰うか」

誠に申し訳ありません

葵「だって出番がアレだけって酷いですよ…」

海「まあ本編では死人だから仕方ない…だからこそこういう場所に
出番を！」

大人しくさつさと成仏しろ！それが京哉のためだ！

葵「京ちゃんはまだまだまだ子供よ！私達が見てないと意味が無いの！」

海「最初の遊城十代とのデュエルもてめえの都合で負けさせやがっ
て」

主人公には負けないと

葵「京ちゃんが主人公でしょ！？」

海「主人公が主人公に勝てなくて意味が無かるう！」

なんというアチャシロ。だってえ…京哉は玉無しだもん

葵「もう作者は最低です！」

海「その言い訳ごと空間に吞まれるがいい！デ。バ。デ。ングド。イ。ー！」

勇者王ボイスバンザイ！

葵「作者は消えましたし次回予告行きますか。遂に逢える京ちゃんと私…京ちゃんの部屋に侵入し私は京ちゃんのアレをアレして更にアレを…」

海「それじゃ皆またみてくれると嬉しいよ、それじゃな」

葵「私と京ちゃんの熱いデーパーは！？…」

海「そんなの要らん！それじゃな」

葵「私の京ちゃん…（泣）」

第十話 新デッキ（前書き）

海度「おい作者、新デッキってどういう事だ」
そういう事だ

葵「まさか以前のデッキ達はクビ…」

海「クビなぞさせるか！さあ作者よ…腹部を掻き出されるか胸部を
めった刺しにされるか選べ」

まあ落ち着ける、れれれ冷静になれ

葵「今やっちゃっても意味ないよ、本編を見て決めよ」

海「それもそうだな、逃げるなよ作者」

任せろ！逃げるのは苦手だが隠れるのは得意だからな

海「…隠れても許さん」

それじゃあ本編どーぞ！

海「無視かよ…」

第十話 新デッキ

「…うん…」

俺は今まで所持していたカードを部屋に散乱させ見ていた

「京哉君おつはよー…うわ！何これ！」

ドアが思いきり開きそこに凜が居た

「凜？どうした？」

「暇だったから遊びに来たんだけど…散乱したこのカードは何？」

「ああ、新デッキを作るんだ」

「新デッキ？」

「うん、今まであるデッキは全部葵姉と海兄が作ってくれたからな…サイレントも足りなかったLV8とLV7を渡してくれたからさ」
そう、今回の新デッキを作るのは葵姉と海兄を超える事を目指す一歩だ

「じゃあ京哉君はサイレントデッキもE・HEROもサイバーも使わないの？」

「もちろん使う。あれは俺達を繋ぐ一つの『鎖』だから」

そう、鎖なのだ

「どついつ時に使うの？」

「勝たなきゃ駄目な時に使う。それ以外は俺の新デッキを使う」

「…分かった、ボクも手伝うよ」

「本当か？有難い」

「ボクのも持つて来るから待っててね」

そう言つて凜はダッシュで出ていった

「元気な奴だ」

とりあえずデッキはどうするか…凜が戻つて来るまで俺はひたすら考えていた

「…てか、何か人増えてない？」

部屋の入口には凜から喬、倭、三沢、十代、天上院、翔が居た
「俺は前の礼だ、手伝わせて貰うよ」

「ウチ等も持つて来たからおおいに使ってくれてかまへんよ」

「京哉…困っていたらお互い様だよ」

「私も持つて来たから使つてね」

「俺にも相談してくれよー、手伝うぜ！」

「僕も前のお礼ッス！」

いや、有難いのは山々なんだが…

「凜と三沢と翔はわかるが…」

他には何かしたかな俺…まあ仲間だから良いけどさ

「大丈夫や、ウチ等は京哉君の手作りおやつを待つとるなんて思つてへんから♪」

…だろうな！というか…

「その噂十代達は何処から仕入れた」

十代達は一斉に倭に指を指した…つて

「お前かああああ！」

俺はツツコミ七つ道具のハリセンで倭を叩いた

「あたっ！何すんねん！」

「バラすなって言つたやろ！何でバラしてん！」

思わず関西弁になつてしまった、ツツコミつていやあ関西弁だろ

「何で京哉は関西弁でツツコミしてるのよ…」

有り難う天上院、ツツコンでくれて

「ウチの口はビッグシールドガードナーより堅いねんて言つてたやろ！」

「お、思わず滑らせてもうてんて！」

「ウソく倭ちゃん寮の人に『ねえ聞いてーなあ！』って言つてたのボク見たよ！」

「私も見たよ…『京哉君つて主夫なんや！』つて他の人に言つてた

…」

…もう開いてるじゃねえか…

「そこは…そうや！アレを攻撃されたら攻撃表示に変わるやん！あん時変わっててん！」

誰に攻撃されたんだ…

「わかったわかった、手伝いの礼に作るから」

「…「やったー！」」

もうどうでもいいや…

「実は私も楽しみだったのよ」

「うおー！京哉マジか！美味しいの頼むな？」

「俺も楽しみだ」

「京哉…楽しみにしてるね」

さて、俺含めて8人か…何作ろうかな…なんて考えて俺達は食堂に行った

「…ねえ京哉、一つ聞いていいかしら？」

「なんだ？」

「コレってただのクッキーよね？」

皆の目の前には大量に積まれたクッキーがあつた

「そうだけど…もしかして口に合わないか？」

「むしろその逆よ…美味し過ぎるから聞いたのよ」

「まあ多分市販の方が美味しいから大丈夫だって天上院」

「いや、市販よりも美味しいから…後天上院は違和感があるから止めて欲しいのだけど」

「そう？んじゃ明日香で」

まあ何より十代と倭はガッツリ食ってるし凜と喬もゆっくりだが食べてるし三沢と翔は驚きながらも食ってる…まあよししよう

「それで京哉はどんなデツキを作るんだ？」

十代がクツキーを口に含みながら聞いてきた…つか

「食いながら喋るな、行儀悪いぞ」

「わりいわりい、んでデツキの内容はどんなのにするんだ？」

「とりあえず今候補は戦士、天使、虫、帝かな」

「帝ってなんスか？」

「帝は炎帝テストロスや風帝ライザーなど何帝とつくモンスターのデツキだ」

「生け贄も一体だけやし各種能力もあつて攻撃力全部2400やし」
流石秀才達だ

「俺がある余りで考慮すると一番作りやすいのは戦士だ」

俺の今の余りの中に切り込みやコマンドナイトなどの優秀な戦士族や連合軍などのサポートがあるが…

「何かしつくりこないんだよな…」

そうなのだ、思ったより個人的に合わないのだ

「どうしてなんだ？」

「なんて言うかな…物足りない感じがするんだ」

「それが何かわかるのか？」

「いや…わからないから考えてたんだ」

皆真剣に考えてくれた…デツキとしては大丈夫なのだが個人的な決め手が無いのだ…何が足りないかカード見た矢先、1枚のモンスターが閃いた

「そつだ、これだ…コイツだ！」

「何かわかつたんスか？」

「ミスティックソードマン…必要なのはあのカードだ！」

俺達は全員でカード収集し編成して完成した

第十一話 新たな力 力と書いて半身と読む！（前書き）

新デッキ完成し後に出会った新たな精霊、力と書き半身と書いて友と呼ぶ！アブソの精霊を出すか迷っている作者です…新デッキのデュエルの相手は凜にしようと思いデュエルは次に書きます
ではどうぞ！

第十一話 新たな力 力と書いて半身と読む！

皆に協力してもらって完成した新デッキ

「マイスター満足そうな顔していますね」

「まあな、新デッキ完成したからな。俺達の新しい家族だ」

「我々の家族ですか…流石主、我等を見て下さるとは」

「今までお前達を使って来たんだ、家族…いや…それ以上、俺の半身だ」

そして海兄と葵姉の魂だ

「マイスター…」

「感謝致します」

「いいつて、これからも期待してるからな。さつてと、寝るとしよ
うか」

「はい、おやすみなさいマイスター」

「よい夢を、我が主」

「おう、おやすみ」

次の日俺は

「だから貴方は何なのですか！マイスターは今お休みなられている
のでお引き取り下さいと言っています！」「だから俺は彼に確認す
る必要があるんだ！何故俺を喚んだのかを！」

「冷静になれ、二人とも。あまり大声だと主が起きられる」

「…もう起きたって」

こんな気分の悪い起こされ方だった

「それでキミは誰だい？」

追加されている一人の剣士を見る。一目わかるけど…

「お初にお目にかけます、私はミスティックソードマン。此度貴方様が作って頂いたデッキより参上致しました」

ミスティックはそう言って頭を下げた…デッキより参上て…

「俺がデッキを作ると精霊が出てくるのかよ…」

いろんな意味ではた迷惑な事だ

「いえ、偶然かと…」

偶然でも迷惑だ

「マイスター…朝からお騒がせして申し訳ありません…」

まったくだ

「今朝の4時だぞ…外真つ暗だぜ…」

寝不足過ぎる…

「申し訳無いマスター、しかし俺はいち早くマスターにあってご挨拶をと…」

「その気持はわかった、けどタイミングっつのを考えてくれ。今俺はものすごく眠い、今日の午後に話は聞くから」

「わかりました、なら一つ…お答え下さい」

「何？」

「何故この俺をお喚び？」

「喚んだ覚えは無いが入れた理由ならある」

「それは…いったい？」

「俺が好んだからだ、お前だけじゃなく今まで使ってたデッキ達も…な。頼りにしてるぜ」

「…有難い御言葉、身に染みました。全身全霊マスターを支えましょう」

「ああ、お前達もな」

「ありがとうございますマイスター」

「我等のお力、存分にお使いくだされ」

「俺もお前達を倒されないようしていくな、それじゃもう一寝入りとするか。おやすみー」

「じつくりおやすみください」

俺は再び眠りについた

第十一話 新たな力 力と書いて半身と読む！（後書き）

今回は死人お二人様がお忙しいらしくゲスト無し…寂しいですな
三沢「…おい…」

でもまた死人とかいうと呪われそうなんでやめときしょう

三「おい作者」

でもやっぱり寂しいんでゲストを呼んだのですが…来ないんですよ
…どうしたんだろうか三沢は

三「ここに居るぞ！」

あゝ居たんだ

三「おい！お前が読んだんだろう！」

んなこたあどーでもいいや、さぁお便りタイムだ！

三「そんなものは無い！」

とりあえず三沢、このハガキの入ったケースから1枚とつてくれ

三「仕方ない…ほら」

ペンネームパンツだけは許さないさんからのお便り！

三「ノーパン主義！？」

何故敗けられない決闘で使うはずのサイレントデッキは最初の十代
戦で敗北してるんですか？

三「まあそうだろうな、主人公が早くも敗けたな」

理由は簡単、作者の都合です

三「最悪だな」

ああ最悪だ！しかし人間は勝利だけで成長するものじゃない！

三「確かにそうだ」

という作者の都合で敗北させた

三「まあ…良いだろう」

んなことより次回はミスティックの初陣！暖かい目で見てくださ
いな

三「俺の存在も覚えてくれよ」

第十二話 ミステイクの初陣（前書き）

お待たせしました…部活やら宿題やらで更新遅れました…今回も駄文確定なんで気にせず見て頂ければ嬉しいです！それではどうぞ！

第十二話 ミスティックの初陣

して先ほどの会話の後に寝入り再び起床…もちろん寝不足確定
「やっぱり二度寝は駄目だな…」

ヤバイ…授業に身が入らない

「十代は完全に爆睡…俺も寝よう」

臥せて終わるまで睡眠モードに切り替えた

その後起きたのは皆実技に移動した時だった、起こしくれよ…

さて今日は新しいデッキ、ミスティックで行こうかな

（今日は頼むぜミスティック）

（お任せくだされマスター！）

意気込みは良し！

「今日の相手は…」

「相手は京哉君だ…」

そう言われて見ると凜が居た

「凜かあ…」

「え…もしかしてボクじゃ不満なの…？」

「あゝ違う違う、楽しみだって事」

「うん」ボクも楽しみだよ」周りを魅了する笑顔をありがとう、ほ

らゝ来たよファンクラブからのお熱く痛々しい視線

「それじゃ始めるか」

「そうだね」

「「デュエル！」」

「それじゃボクのターンから、ドロ―」

そっぴや凜のデッキってどんなのだろう

「んーと…ボクは…これにしよう。神獣王バルバロス召喚！バル

バロスは生け贄無し召喚だと攻撃力は1900になるんだよ」

…泣いていい？どう見ても敗北率が上がった…

「カードを2枚セットしてターンエンドだよ」

内1枚はスキルドレインと見た

「バルバロス…か…厄介な…俺のターン、ドロ」

手札はまずまず…

「んじゃ早速、手札から増援を発動。切り込み隊長を手札に加える」
まあ妥当な線だろ

「切り込み隊長を召喚、切り込み隊長の効果によりミスティックソードマンLV4を特殊召喚」「早速新デッキなんだね」

「早くデッキ回りを見たいからな」

しかしどうするか…

「それじゃ連合軍発動、カードを1枚伏せターン終了だ」

コレで様子見といくか

「ボクのターン、ドロ…それじゃあ…伏せカード発動、スキルドレインだよ」

凜LP4000↓3000

やっぱりスキルドレインとバルバロスのデッキ…

「それでパンサーウォーリアー召喚、スキルドレインの効果で生け贄無くても攻撃出来るからパンサーウォーリアーで切り込みに攻撃！」

切り込みがパンサーウォーリアーによって剣ごと斬られた

京哉LP4000↓3600

「チッ…まずいな…」

「さらにバルバロスでミスティックソードマンに攻撃！トルネードシェイパー！」

さすがに…

「それは無理だ！伏せカード発動！収縮！バルバロスの攻撃力を半分にする！迎撃だ、ミスティック！」

ミスティックソードマンが収縮したバルバロスを斬った

「くうっ…ボクのバルバロスが…」

凜LP3000↓2600

「ボクはカードを伏せてターン終了…」

「立花ああああ！貴様ああああ！」

「レッドの分際で凜ちゃんを悲しませるとは最悪だな！」

「所詮レッドはレッドでしか無いな！」…後で奴等を完膚なきまでに叩きのめす

「ごめんね、京哉君」

「いやいや、凜は悪く無いから」

悪く無い悪く無い、後でアイツ等を笑いながら沈めるからさ

「俺のターンに入る前、凜のエンドフェイズにミスティックソードマンLV4の効果発動。このカードを墓地に送りデッキ又は手札からミスティックソードマンLV6を特殊召喚！こい、ミスティックソードマン！」

ミスティックソードマンLV4に竜巻が発生し威圧感漂う剣士が現れた

「来たんだ…切札」

「ああ、んじゃ俺のターン。ドロ―！俺はコマンドナイトを召喚。

さて、行くぜ！」

まずは…

「ミスティックソードマンでパンサーウォーリアーに…」

「伏せカード発動！威嚇する咆哮！」攻撃が防がれたなあ…

「カードを伏せターン終了だ」

「ボクのターンドロ―！」

どう来るか…

「ボクは手札から野生解放発動！パンサーウォーリアーの守備力を攻撃力に加算するよ！パンサーウォーリアーでミスティックソードマンに攻撃！」

狂気したパンサーウォーリアーの剣を受けミスティックソードマンは斬られた

京哉LP3600↓2300

「すまんなミスティック…だけど退場はまだ早い！伏せカード発動、命の綱！」

強化を兼ねたカード…次で決める

「手札を全て墓地に送り攻撃力を800アップさせミスティックソードマンをフィールドに戻す！」「う…ボクは…ターンエンド、そしてエンド時にパンサーウォーリアーは破壊…」

狂気したパンサーウォーリアーは苦しみながら消えた

「それじゃあ…俺のターン、ドロー」

凜の場に何も無し…

「終わりかな？ミスティックで凜にダイレクトアタック！」

「きゃあああ！」

凜LP2600↓0

その後…凜と会話しようと思いつくとRRRの連中が奇襲という名のダイレクトアタックを仕掛けて来たのは言うまでも無い

第十二話 ミステイクの初陣（後書き）

うわぁ最後までくだ：

倭「くだくだ過ぎや！」

がふう！…良いキックじゃないか

凜「京哉君に負けちゃったなあ…」

喬「仕方ないよ…京哉だもん」

流石主人公だ！

倭「それにしても作者文才無すぎやろ…」

気にしないで下さい！マジ悩んでます！

凜「喬ちゃんとボクは京哉君とデュエルしたから次は倭ちゃんだね」

倭「ウチのデッキは強いから負けへんで」

主人公補正を強化しよかな：

倭「あかんで！ウチ必ず負けるやん！」

まあ次はデュエルシーンはナッシングなんで次も楽しんで見て頂ければ嬉しいです！それでは！

倭「またなあ」

凜「ばいばい」

喬「また本編でね」

葵「…ねえ海度兄さん」

海度「言うな…気にしているから」

番外編 病人の1日（前書き）

皆さんこばにちわ！

今回は病気になった京哉の話です

馬鹿の筈なのにねえ

ん？ということは京哉は馬鹿じゃないってことか

まあいいや、それではどうぞ！

番外編 病人の1日

「…暇だ…暇過ぎる」

俺はベッドで寝ながら呟いていた…それもそのはず、今から2日前に遡る…

「へつくしゅ！…あゝダルっ…」

「どうしたんだ？」

「三沢か。いや何今朝からくしゃみと身体のダルさがすげえんだ」

「それは風邪じゃ無いのか？」

「だろうなあ…」

「保険室に行くか？」

「ああ、そうする」

それで保険室に行った所

「完璧に風邪ね…今日は寮に戻って休みなさい」

鮎川先生はそう言って薬を渡して俺を寮に帰らせた。

「んで2日たった今も治らないと…」

風邪なんか今まででなつた事無かつただけどなあ…

「大丈夫ですかマイスター？」

「ああ、大丈夫」

「退屈なのはわかりますが寝て病気を治すのも一つの勤めですよ主」

それはわかつてる…でもさ…

「退屈なのは変わらないし…」

「俺達に何か出来る事があれば何なりとおっしゃって下さいマスタ

」

「ああ、ありがとう」

とりあえず授業はどうしようか…そうだ

「ツインソード、授業の方を見て来てくれないか？」

とりあえず略す、面倒だからな

「わかりました」

「お任せくだされ」

ツインソードは教室に向かった

「また変わったようにまとめましたね」

「まあ…な」

…フルネームも長いし…

「この間にお前達の名前考えるか」

今まで礼になつていているしこれから礼になるしな

「私達に名前…ですか？」

「そうだ、どんなのがいい？」

「マイスターから頂けるならどんな名でも…」

どんなのもって…

「それはどうだろうなあ…俺が変なのにしたり恥ずかしいのにした
りするかも知れないぜ？」

「マイスターはお優しい方なのでそういうのには致しません」

笑顔で言い切つて下さりありがとうございます

「それじゃな…」

どういうのにしようか…サイレントマジシャン…サイレント…サイ

…違うなあ…

「…ん…」

考える…考える…ひたすら考える…考えたが

「すまない…思いつかない」

無い脳なりにがんばったのだが…

「いえ、私は構いません」

でも少し残念そうだな…ん？待てよ…一つあった

「アオイ」

葵姉…サイレントマジシャンの瞳が俺と初めてあった葵姉に似てる。
優しくて強い瞳…

「えっ…？」

「それがお前の名前だよ」

「アオイ…はい、京哉様」

笑顔だった、とても眩しく感じた

「サイレントソードマンはカイト、ミスティックソードマンはアキ
ト…どうかな二人共」

帰ってきたツインソードマンに事情を言い提案した名前を聞いてみ
ると二人共頭を下げた

「我等に名前を頂けるとは…嬉しく思います我が主」

「ありがたき幸せでございますマスター！」

「お前達も俺は名前呼びで構わないよ、俺の半身なんだからな」

「わかりました京哉様」

「これからの活躍をご期待くだされ京哉様」

あゝそれでも様付けか…まあいっか

「京哉君遊びに来たで〜！」

身体を起こしてデッキ達を見ていたらドアが開いた。勢いよくドア
開けたのは倭だった

「元気だな相変わらず」

「元気やのはウチの取り柄やん」

元気だけだな

「あゝ今変な事考えたやろ？」

「いや…ところで凜と喬は？」

今日は珍しく3人行動してないな

倭は俺の近くに来て座る

「凜ちゃんも居残りで喬ちゃんはKKKから逃げとるよ」

「何で凜は居残りなんだ？」

「計算の抜き打ちがあつたんよ。凜ちゃんそれで最下位なんよ」

…そつえば凜は計算式みたらどうかなるって言つてたな

「んで喬はファンクラブに追われてると…」

アイツ等完璧変態じゃないか

「ウチも追われたけど何とか撒いたから今日は来うへん」今日はつて…

「いつも追われてるのか？」

「せやで」

鬱陶しさはこの上無いな

「ところで体調はどうなん？」

「まあまあだな、明日から行ける」

流石にこれ以上は休めんし

「そーなんか…はよよーなつてな」

「勿論だ、早くデュエルしたいしな」

まだやって無い奴等ばかりだし

「それじゃウチはそろそろ…つとと」

倭が立ち上がるとふらついた

「どうした倭？」

それを俺は支えた

「いやゝ最近寝不足やったから寝て無いんよ」

「何か悩み事とかで？」

「悩み事じゃ無いんよ…」

まあ倭は悩む性格じゃないか

「今失礼な事考えへんかった？」

「いや…」

なんでこんなに勘が鋭いんだ

「それじゃ寝て行くか？」

俺の部屋は一人だから上のベッドが空いてるしな

「え、いいん？」

「構わないぜ」

「それじゃ失礼しまゝす」

そう言つて俺のベッドに入つて来た… っ

「何で俺が寝てるとこに！」

「だってウチ高所恐怖症やし」

「だからつてなあ…」

「京哉君温かいなあ…」

腕を掴んで頬擦りするな

「おい、倭！」

「…すう…」

…寝ちまつたよ…

「…とりあえず誰も来ないのを祈ろっ、うん」

そう考え俺も眠りに落ちた

京哉君と寝とつたらこんな夢を見た

ウチと…

京哉君と…

凜ちゃんと…

喬ちゃんが…

楽しく

仲良うしとる夢

今まで寝とつて見た夢は過去の夢…皆ウチを嫌う夢…デュエルした相手から…それを見た周囲から…心友から嫌われる夢…ウチは独りになってたんや

でも今の夢はちゃう…

皆笑つてた…

ウチは京哉君より先に起きた

その時ウチは涙を流してた

悲しいからじゃなく

嬉しくて

楽しくて

待ちわびてたんや

こんな夢を…現実を

番外編 病人の1日（後書き）

今回はサイレンズに集まって貰いました

アオイ「ようやく呼んで貰えました」

カイト「元々出番が少ないからな我等は」

京哉君の切札だしね

ア「マイスター京哉様には感謝の言葉しか有りませんよ」

カ「デュエルでご期待に添えよう」

…フツ…

ア「作者さんなんですかその笑みは？」

いやぁ最初に負けてるし…

カ「それは貴方の設定だろう」

何の事かな？次は倭とのデュエルすなあ。次はサイレンズの出番だよ

ア「大活躍間違い無しですね！」

カ「主の期待以上の活躍しよう」

次は負けさせる設定を…

ア「選んで下さい、吹き飛ばされると」

カ「斬り刻まれるのと…どっちが良い？」

伏せカード発動！強制脱出装置！サラバだ！

ア「待ちなさい！」

カ「アオイ、落下地点を見据え仕留めるぞ！」

ア「うん！」

葵「私…かなり」

海度「言うな…泣きそうになるから」

第十三話 嫌われる理由

俺が病気が治ってからの話だ

「俺とデュエル？」

「うん、ウチとやって欲しいんよ」

倭からデュエルの誘いが来た

「良いけど何処でするんだ？」

「こつちや」

俺は倭に連れられて行つた

そして着いた所は港、灯台の下だった

「ここやで」

うゝん潮風が良いねえ

「ところで今まで俺とするの嫌だったのにどうしたんだ？」

「え…うん、何となくや」

「まあいつか。さて、楽しもうかな」

「う、うん…そやな…」

なんか歯切れが悪いな

「どうかしたのか？体調でも悪いのか？」

「え！いやなんも無いで！」

「そうか？まあ大丈夫なら良いけど」

少し心配だな

「んじゃデツキは…」

「サイレントデツキで頼めへん？」

御指名が来たよ珍しい

「ウチも…誰にも見せてへん本気ので行くから…」

ほう…

「楽しみだな」

「「デュエル！」」

「俺から貰うよ、ドロー！俺はサイレントソードマンLV3を召喚！更に手札からレベルアップ！を発動！LV5に進化！カードを伏せターンエンド」

「ウチのターン、ドロー！」

どんなデッキか楽しみだ

「手札から魔力儉約術発動」

確か魔法のライフコスト無効…だったか？

「手札から終焉へのカウントダウンを発動、20ターン後ウチの勝利になるカードや」「終焉へのカウントダウン…」

ライフ2000という莫大なコスト無し…更にロックだな

「カード4枚伏せターンエンドや」

終焉1ターン目

ロック程厄介な存在は無いが…伏せ4枚か

「俺のターンドロー」

大嵐かサイクロン系が欲しい所だが…

「俺はサイレントマジシャンLV4を召喚、バトル行け！サイレントソードマンで…」

「伏せカード発動、グラビティバインドや」

チツ…俺の天敵の一つか

「カードを伏せターンエンド」

終焉2ターン目

「ウチのターンドロー…特にやること無いから終了や」

終焉3ターン目

「俺のターンドロー」来ない…か

終焉4ターン目

「ターン終了だ」

「ウチのターン、ドロー…ウチは強欲な壺発動、カード2枚ドロー」

それでターン終了や」

終焉5ターン目

「俺のターンドロ―！シャインエンジェルを攻撃表示で召喚！ターンエンド」

終焉6ターン目

「ウチのターンドロ―、…ククク…」

何だ？今の笑みは

「伏せカード3枚全て発動、運命の火時計」何！？それは…

「終焉へのカウントダウンを3ターン進める、そして時の飛躍ターンジャンプ発動！全てのカードを3ターン進める、コレを後2枚発動」

コレで合計…

「12ターン進んだ」

残り2ターン…倭が終了宣言したら1ターンか

倭が京哉を連れて港へ行くのを凜とついて行くとそこには終焉デッキとサイレントデッキでデュエルをしていた

「喬ちゃんアレ…」

「うん…あんな皆から嫌われるデッキを使ってたんだ…」
しかも一気に12ターンも進めるなんて…

「倭ちゃん…」

私達は心配そうに見ているしか出来なかった

さて、どうする…残り1ターンでどうする…

「ごめんな…京哉君…」

「…え？」

いきなり倭が謝った

「ウチ、こういうバーンとかロックデッキ使いやねん」

…でも前の時は…

「アレは気分で作ったバーン無しのビートダウンデッキ…初めて作ったし面白う無かったら崩すつもりやったんや」

そうだったのか…

「ウチな、昔からビートダウンって言うのを使うの苦手やってん」

「だからバーン系とか終焉デッキか」

「んでな、この終焉デッキを使ってから友達がおらんようになってん嫌われるデッキ…」

「ずっと寂しかったんや…辛かったんや…地方の大会出ても嫌われるし…罵声は来るし…」

…そうだったのか

「んでアカデミア来た時凜ちゃんと喬ちゃんが友達になってくれたん…」

「俺もダチだろ？」

「入ってすぐやないやん」

確かにそうだったな

「すっごい嬉しかったん…でもウチは怖いねん…」

俺は何がと聞かなかった、俺も分かるからだ。そして言った

「嫌われる事が」

昔の引越しを繰り返してたからな、良く余所者って嫌われてたな
「それに最近夢見んねん…」

夢…？

「どんな夢だ？」

「皆…ウチから離れて行く夢や…十代君…翔君…明日香さん…凜ちゃん…喬ちゃん…京哉君も…」

そうか…

「この終焉は…ウチの友達との終焉…ウチを孤独にさせる…でも…でも？」

「もういややねん！ウチはもういやや…独りはいやや…」

悲痛な言葉…独りの辛さ…俺にもわかる

「誰にも言えへんかった…けど今なら言える…京哉君…助けて…」

倭は涙を流していた…見たこと無かった…元気が取り柄の娘が辛い顔をしていた

「…カード伏せてターンエンドや…」

「俺のターン…ドロー」

終焉か…

「確かに嫌われるな、そのデッキは」

倭は下を向いていた辛そうに

「だけどな…ダチの為なら…」

終焉なんか迎えさせるかよ

「仲間の助けてなら…俺は勝つ！」

行くぜ！ラストターン！

「手札からサイクロン！」

対象は…

「グラビティバインド破壊！」

冴えたな…俺のドロー

「更に手札からレベルアップ！を発動！対象は…サイレントソードマンLV5」

サイレントソードマンの身体が光輝き更に風格のある戦士が現れる

「サイレントソードマンLV7…見参！」

頼むぜカイト、アオイ！

（お任せ下さい京哉様！）

（我等の力で助けましょう）

「京哉君…」

倭…今…

「助ける…サイレントソードマン、サイレントマジシャンでダイレクトアタック！」

「変われ小娘え！伏せカード発動！スケープゴートオ！」

何だありゃ！

（終焉に眠っている闇の意思です！）

（アレを破りましょう、主京哉）

「サイレントソードマンLV7の効果、コイツが居る限りフィールド上の魔法は全て無効！」

スケープゴートのカードは消滅

「ば…バカな…」

「倭は返して貰う！サイレントバーニング！沈黙の剣！」

アオイの法撃、カイトの剣撃が闇を斬った

倭LP4000↓0

その時に倭は崩れた

「よつと…ヒューっ！あぶねえ」

ナイススライディング俺

「倭…ん？」

デッキがバラバラになっていて終焉へのカウントダウンを俺は手にとった

（貴様なかなか強いな…俺と組もうぜ、そうすりゃナンバーワンに…）

「興味無いな」

そう言い放ち俺は終焉へのカウントダウンを破りさいた

（ま…待て！話せば…ぎゃあああ！）

しかも何回もな

その後俺の部屋で倭、凜、喬の3人娘で会話をしていた。凜と喬は俺達のデュエルと会話を聞いてたようだ

「倭…私達がそんなのしないよ」

「そつだよ、ボク達心友だもん」

「ありがとう…ありがとう…」

倭は2人に泣きながらお礼を言っていた。「ここは3人で話すのが
1番だな」
そう考えられないように表に出た

第十三話 嫌われる理由（後書き）

作者正座中…

京哉「おい作者…前書きデタラメ書いてんじゃねえぞ
すみません…でもさあ呼び出されたらさあそう

京「考えない」

そすか…流石主人公

葵「あーっ！京ちゃんだー！」

京「ん？ごふお！」

京哉君がだいたい150mくらい吹き飛びました

京「あ…葵姉…痛い…」

葵「京ちゃん」

すりすり

京「ちよっ！やめっ！頬擦りするなって！」

葵「京ちゃん」

海度「京哉…諦める、今のお前でもその捕縛からは逃げることは出
来ん」

京「か…海兄…助け…アーツ！」

葵さんに奪取されました

海「なら作者、俺達で次の紹介をしよう」
そうだね

海「作者、次くらいに原作を出すべきだと思っが」

大山辺りだそうかな？

海「デツキは覚えているのか？」

俺が記憶してたら天と地が反対になるくらいスゴいぞ
海「例えの規模は凄いが記憶は凄くないぞ」

照れるじゃまいか

海「誉めてない」

まあいいや…大山で

海「デッキは？」

タツグフォースの奴にしよう

海「それで良いと思うが…作者、一つ気になった所が」
なあに？

海「原作オリジナルカードを使っているが良いのか？」

気にするな…俺個人のオリカは作らんし出さん

海「ふん…」

ということでは次は大山かもしれない

海「かもって…」

第十四話 謎の野生児登場！（前書き）

.....

京哉「おい作者」

言いたい事はわかってます…遅れた事ですね

京「そうだ、今なら理由を聞いてやる」

部活で忙しいのと怪我って

京「二つ共意気込みで何とかなる」

なりません

京「まあいい、今回はドロ―大好きターザンが相手か」

今回はヒーローが出番です

京「次回からは更新遅れないようにな」

はゝい、それじゃ本編どうぞ！

京「どうぞ

第十四話 謎の野生児登場！

購買に行ってみると十代達が居た

「よう、何やってるんだ？」

「あ、京哉君。今アニキがドローパンをしてるんす
ドローパン？」

「何だそれ？」

「知らないんすか？」

「パンの中身がランダムで何がでるか分からないからドローの練習
にもなるんだなあ」

へえーそんなのあるんだ

「それでアニキは幻の黄金のタマゴパンを引き当てようとしてるん
す」

「……………」

真剣な眼で頑張るなあ十代

「…俺のターンドロー！」

おっ、十代が引いたぞ

「モグモグ…ぐわあ！…納豆パン…」

何それ！そんなのあるの！？

「くう〜黄金のタマゴパン食いてえ〜」

俺さっきの納豆パン食いてえ

「俺もやってみようかな、トメさんは？」

「あそこッス」

「トメさ〜ん」

俺はトメさんに許可（？）を得てドローパンの山を見た。こうして
見るとなかなか緊張するねうん

「頑張れ京哉！」

「頑張つて黄金のタマゴパンを引き当てるッス！」

「気張れ〜京哉〜！」

（頑張つて下さい京哉様）

（コレこそ鍛練の成果を見せる時です）

（いつもの引きで頼むぜダンナア！）

（クリクリ〜）

…精霊ズ黙つて欲しい…しかも俺はタマゴパンより納豆パンを食つてみたい。ま、気楽に引くか

「んじゃこれ」

適当に引くと皆一斉にズツコケた

「普通に取るなよ〜！」

「デュエルの時みたいにドロ〜しないといけねえッス！」

「ちよつと寂しいんだなあ」

（かつこいい京哉様が見れると思いましたが…）

（勢いが足りませんよ我が主）

（ダンナア〜しっかり引いてくれよ〜！）

「ええい！文句を言うな！たかがパンだろうが！」

仕方ない…食うか

「引いたパンは…」

具無しパン…中身はカードが入っているぞ

京哉はカードを3枚手に入れた

1枚目 ホルスの黒炎龍LV4

2枚目 ホルスの黒炎龍LV6

3枚目 ホルスの黒炎龍LV8

…なあにこれえ

京哉はホルスレベル一式手に入れた

ちゃちゃちゃつちゃちゃん

「これは喜ぶべきそれとも頂垂れるべき？」

「うわぁ…ホルス一式って…いろんな意味で凄いッスよ…」

また新しい家族が増えたじゃまいか

「ごめんねえ実は黄金のタマゴパンはもう無いんだよ…」

トメさんが申し訳無さそうに言った

「どうしてッスか？」

「最近黄金のタマゴパンだけ盗まれていてね…」

いろんな意味で凄いぞソイツ

「素晴らしいドロースキルだな」

それをデュエルに活かせよ…

「よし！今日からその犯人を見つけるぜ！」

十代は張り切って言った、が…

只今の時刻夜の8時、結局犯人を見つけられず購買に居た…ってか

「何でお前等居るの？」

いつの間にか倭、凜、喬が居た

「だって…」

「ボク等…」

「とても…」

「…暇だった（んや／んだもん／から）…」「…」

まあ探してくれるなら良いけど

「皆お疲れさま、ささお夜食だよ」

そう言つてトメさんはおにぎりを出してくれた

「ありがとうトメさん！いただきま〜す」

早速十代ががつついた

「うめえ！」

「とても美味しいんだな」

「美味しいツス！」

「おにぎりだけでこんなに美味しいねんな。ウチおにぎり舐めとったわ」

「とっても美味しくていいね喬ちゃん」

「うん…美味しい」

「それにしても結局犯人見つから無かったな」
手掛かりが無さすぎるな

「そうツスねえ…」皆で夜食を食べていると
パリン！

ガラスが割れた音になった

「今の音は！」

「チツ！見つけた！」

「待て！」

「アゝアアゝ！」

アゝアアゝて…ターザンみたいだな…

「って感心しとる場合じゃねえ！」

俺もソイツを追って行った

「ようやく追いつめた！」

俺達は森の方にその野生児を追いつめた

「タマゴパンを盗みやがって！」

盗みは良くないしな

「アナタ、もしかして大山君！大山君よね？」

トメさんが謎の男に確認の質問をすると男は

「お久しぶりですトメさん…」

そう言った。てかトメさん知り合いだったんだ

「まさか…行方不明者…」

喬が呟いた

「何それ？」

「明日香さんから聞いたんだ…」

へえ…アカデミアも大変だな

「それで何故お前は黄金のタマゴパンばかり盗んだんだ！」

十代結構怒ってるな、そんなに食いたいのかタマゴパン

「俺は昔は引きが弱くデュエルでも大した引きは出来なかった、ドローパンもタマゴパンを引き当てる事は出来なかった…」

そりゃ難儀なこった

「そして俺は修行に出た…そして気付いたんだ！」

「何をツスか？」

「ドローとは自然の流れで出来るものだ！俺の様に…風の様に…」

…何を言うかと思えば…

「そして俺は極めた！ドローを！」

いや極めるって言ってもな…

「それを試したのがドローパンって事やね」

「そつだ！そして俺は10回連続タマゴパンを引き当てたんだ！」

「連続つてとっても凄いな！」

まあ…連続はね

「くう…この日をどれだけ待っていたか…」

ガチ泣きしてるよこの人

「後は実戦で試すだけだ…おいお前！」

…指を指した為俺は後ろを見た

「お前だお前！」

…え？俺？

「そつだ！俺とデュエルしろ！お前からは俺と似た感じがする！」
止める、お前みたいな感じはしない

「はあ…理由はどうかあれ挑まれたんだ、受けるしか無いな」

そう言つて俺はデュエルディスクを構えた

「ドローの真髄、見せてやる！」

大山という奴も構えた「デュエル！」

俺と野生児とのデュエルが始まった

第十四話 謎の野生児登場！（後書き）

まずは出会いだけにしました

今回の更新は作者の都合で遅れてしまつて申し訳ありません
多忙だったので…次回からは早くいきます

第十五話 野生児、大山のドロー（前書き）

ご指摘を頂いたので修正バージョンです！

第十五話 野生児、大山のドロ―

「俺のターン、ドロ―」

先攻は頂く！

「シャインエンジェルを攻撃表示で召喚！カードを1枚セットしてターンエンド」

さて、どう来るかな…

「俺のターンドロ―！手札から凡骨の意地を発動！」

凡骨の意地ねえ…狙いは

「エクゾディアやな」

倭、俺の台詞を取るなよ

「更に暗黒のマッドドッグを召喚！マッドドッグでシャインエンジェルを攻撃！」

あ、シャインエンジェルが喰われた…犬が人を食う姿ってなかなかグロいな

「シャインエンジェルの効果発動、戦闘破壊された時デッキから攻撃力1500以下の光属性モンスターを特殊召喚する。俺はサイレントソードマンLV3を特殊召喚！」

布石は揃ったぜ…

「ターン終了だ」

「俺のターンドロ―！」

さあショータイムだ

「スタンバイフェイズ時にサイレントソードマンLV3の効果発動！このカードを墓地に送りデッキ、手札からサイレントソードマンLV5を特殊召喚する！デッキから特殊召喚！」

「何だと！」

「早速来たぜ！京哉の切札の一つ！」

「更にカイザーシーホースを召喚！」

基本的にこのデッキは生け贄が少ないがアタッカーとしては十分

「これで京哉が先制を取れる…」

「バトル行くぜ！サイレントソードマンでマッドドッグを攻撃！沈黙の剣！」

サイレントソードマンの剣が駄犬を斬った

「うう！」

大山LP4000↓3600

「まだだ！カイザーシーホースでダイレクトアタック！」

カイザーシーホースの槍（？）で大山を貫いた

「ぐわぁ！」

大山LP3600↓1900

「ターン終了」

後1撃だぜ大山さんよ

「俺のターン…」

大山が急に眼を閉じた

「窮地にこそドローは冴える…ドロー！」

よく分からないなアイツ

「凡骨の意地の効果発動！ドローフェイズのドロー時に通常モンスターだった場合相手に見せる事により更にドロー出来る！」

そして見せたカードはマッドドッグ

「ドロー！」

次は封印されしものの右腕

「ドロー！」

次は大木炭18

「ドロー！」

次は封印されしものの左腕

「ドロー！…っち！」

ん？舌打ちしたって事は終わったな

「案外早よう終わったなあ…」

倭が俺と同意見を出した

「俺は大木炭１８を守備表示で召喚！カードを２枚伏せてターン終了！」

「おおっと！エンド時に王宮のお触れ発動」

念のためつてな

「俺のターンドロー！…大山、悪いな！俺の勝ちだ！」

「何っ！」

さあイツッショータイム！（サ。ラ。戦風）

「手札からレベルアップ！を発動！レベルモンスターを一体墓地に送る事で更にレベルを飛躍させる！サイレントソードマンＬＶ５を墓地に送り手札からサイレントソードマンＬＶ７を特殊召喚！」

さらなる威圧を纏いカイトが登場した

（頼むぜカイト！）

（お任せ下さい、主）

「くっ！だが速攻魔法発動！収縮！」

無駄だ！

「サイレントソードマンＬＶ７の効果は魔法カードの効果全て無効にする」

それにより収縮が抹消していく

「そして２体目のカイザーシーホース召喚！行くぜ、大山！サイレントソードマンで大木炭１８を攻撃！沈黙斬り（サイレントスラッシュ）」

１８がカイトにより斬り刻まれた

「くっ…くそ！」

「２体のカイザーシーホースでダイレクトアタック！」

「ぐわあああああ！」

大山LP1900↓0

「Finish！」

俺は片手を握り上に上げる

「おおー！京哉すつげえ！」

「京哉君凄いッス！」

「次のドローは…くそっ！」「惜しかったな大山。ドロー補助を使っているとは言えたった5回の連続ドロー＋初期手札から4パーツ揃えるとはな」

「京哉君見破ってたの？」

「まあな、アイツの表情を見てるとわかるよ」

大山を見てみるとトメさんが大山に話かけた

「大山君…」

「…うう…本当は黄金のタマゴパンが食べたかったただけなんだ…」
だからといってなあ…

「盗むのはどうかと思うぞ？」

「うう…すみません…トメさん…」

「いいのよ大山君…」

はあ…これで一件落着くと

「それにしてもデュエルを見てたらやりたくなっただぜ！翔！京哉！隼人！帰ってやろうぜ！」

「出たッス…アニキの悪い癖が…」

「それが十代らしいんだなあ」まあとりあえず

「事件も解決したし解散するか、それじゃ夜道気をつけてな3人共」
「うん！」

「京哉も気をつけてね」

「また明日なあ…」

俺達は各寮に戻った

余談だが大山は一時期戻ってきたが再び修行に出たという

第十五話 野生児、大山のドロ―（後書き）

以後ミスを見つけ次第お願いします！

御礼！アクセス5万突破！（前書き）

気付きました…何故だ！

京哉「坊やだからさ…」

お前に言われたら苛つくうキイイイイイ！

御礼！アクセス5万突破！

あれ？タイトルが変だなあ…

京哉「待て！変じゃない！事実だ！」

マジか！こんな小説に5万もアクセスしてくれるなんて…

京「それだけ皆さんが見て下さったんだ、御礼の言葉をさあ言おう」
感謝感激フタエノキワミアーツ！

京「意味解らんわ！」

がふう！…いいパンチじゃ…無いか…バタツ

京「ふう…読者の皆さん作者の意味解らん行動は申し訳ありませんでした。それとアクセスして頂きありがとうございます！今後とも暖かい眼差しをお願いします！」

それはそうとこの次に書くのは超番外編！

京「なんだそれ？」

今までは番外編と書かれていても少しだけ本編に続いているんですよ。超番外編はまつつつつつつつたたく関係無く書かせて頂きます

京「つまり記念の作品か」

その通り！いろいろなキャラにあゝんな事やこゝんな事を…ゲツヘツヘツ…

京「また変なスイッチが…くらえ！ユニバああああああああああああああああああああス！」

ぎやああああああああああああああ！ハリー…かつこいい…ぜ…ガクツ

京「全く…こんな作者で申し訳ありませんでした…それでは超番外編お楽しみ下さい！」

ついでなんで主人公設定を…

名前 立花京哉

たちはなきようや

身長 170

体重 64

外見 ふつづの髪型で眼が青（髪型はご想像にお任せします）

使用デッキ サイレント ヒーロー（預かりもの） キメラテック
（未来オーバーでは無い） ミスティック

性格 ふつづに優しい

オシリスレッドで十代達と同期。勉強をまともにしないくせにカードの内容を記憶しているなどレッドにはいないタイプ。“デュエルとは楽しむ事である”の理念の下どんな状況でも楽しむ。いろいろな面にて鈍感である

みたいな感じです

それでは超番外編お楽しみ！

御礼！アクセス5万突破！（後書き）

ということですよ！誠にありがとうございます！これからも暖かく見ていただければ嬉しいです！

5万アクセス記念！超番外編！突撃隣のアカデミア寮！（前書き）

5万アクセスありがとうございます！これからもよろしく願います！

5万アクセス記念！超番外編！突撃隣のアカデミア寮！

「おはようございます〜。ファンクラブＹＹＹを勝手に創られた坂上倭です〜」

「同じくＲＲＲの赤坂凜です〜」

「ＫＫＫの神谷喬です…」

「今回は超番外編ということで突撃隣のアカデミア寮を行いたいと思います！」

「倭ちゃん張り切ってるね」

「うん…」

「ウチはこういうイベント大好きやもん」

「それで何をするかと言うと今から各寮を回り寮の状況、寮の料理を食べていきます」

「食べるの？」

「料理に関してはヨ。スケの隣の。ご飯と似たようなもんや」

「私それ知らない…」

「それはまた後で倭ちゃんがＤＶＤ見せてくれるから早速始めよう！」

「おー…」

「ウチヨネ。ケのＤＶＤ持ってへんって！」

3人娘女子寮前

「まずはボク達が住んで居る女子寮！女子は必ずブルーなんです」

「なんでだろうね…？」

「ウチ作者に聞いてみたけど…」

「けど？」

「知らんって」

「…無能め」

「り…凜!？」

「ふえ?どうしたの喬ちゃん?」

「い、いや…何もないよ…」

「ふうん…まあいつか。それでは中に入って行きましょう!」

3人娘女子寮内喬の部屋

「これがボク達の寮の中です!」

「流石に他人のは見せられへんから3人で話し合った結果一番綺麗な喬ちゃんの部屋にしてんなあ」

「う…うん、ちよつと恥ずかしいけど…」

「基本的にこんな感じですよ。豪華なベッド、鏡台、窓やカーテン。とりあえず豪華なんです」

「ちなみに当然やけど男子禁制やで」

「変な人が来ない様にガードマンも居るよ…」

「次は食堂にレッツゴー!」

3人娘女子寮内食堂

「豪華!の一言仕方ないよ(汗)」

「ちなみにバイキングとかが基本やで」

「頼めばなんでもいけるかも…」

「ちなみに今は昼頃、バイキングの中身は…いろいろです」

「略したらアカンよ凜ちゃん」

「こんなにあったら言うのはちよつと…」

「確かに面倒やな」

「それじゃ次行こつか…」

「そうだね」

「次は男子ブルー寮に行こか」

3人娘男子寮に移動

「次はここ、男子ブルー寮!」

「中等部から上がってきたエリートの方々がおるんよ」

「ちなみにカイザーの称号を持つ丸藤亮さんも居ます…」

「それより倭ちゃん見つかったら不味いよ…」

「そういう凜ちゃんと喬ちゃんもや…」

「隠密に行こ2人とも…」

3人娘男子寮内潜入中

「はい、侵入出来ました」

「でも油断は禁物や…」

「小声でね…」

3人娘男子寮内丸藤亮の部屋に移動

「今回お部屋の提供は亮さんです」

「亮さんに相談したら許可してくれてん」

「流石亮さん…」

「それでは部屋の状況です」

「基本的には女子寮と変わらないんやね」

「女子寮の部屋から少し豪華さを省いた位かな…」

「そうだね、この後食堂に行きたいんですが…」

「ちよつと…ねえ…」

「ファンクラブの人達が居るから…」

「亮さんに事前に聞いてみるとバイキングだそうです」

「女子寮と変わらないんや…」

「皆の衆!噂は本当だ!凜ちゃんと倭ちゃんと喬ちゃんが居るぞー!」

「見つかった…！」

「急いで逃げよう！」

「あらほらさっさ」

「倭…それ何？」

「気にしたら負けや、それじゃ次はイエロー寮や！早よう逃げんてえ〜！」

3人娘イエロー寮に逃亡

「はあ…はあ…い、イエロー寮です…」

「つ、疲れたあ〜」

「2人とも大丈夫…？」

「き、喬ちゃん…はあ…元気だ…ね…」

「うん、普段から体力つけてるから…」

「う…ウチ等休んどくから…喬ちゃん頼めへん…？」

「うん…任せて…」

3人娘の内2人一時離脱、喬イエロー寮内

「え〜つとイエロー寮の中です…ブルー寮に比べて質素というか…普通って感じがします…早速部屋を見てみましょう」

喬、イエロー寮見知らぬ人の部屋

「え〜つと…無断では無いです…一応管理者の先生には許可は頂きました…名前は忘れましたけど…部屋の中はやはり至って普通です…イエローは中部又は高等部でブルーに入れなかった優秀な方が居ます…中はこれくらいにして次は食堂に行きましょう…」

喬、イエロー寮内食堂

「えっと…食堂です…食事は普通の食事が出るらしいです…逆に普通じゃない食事が見たいです…」

「喬くんじゃないか、どうしたんだ？」

「三沢さん…今取材の様なものをしています」

「取材？新聞でも出すのか？」

「いえ…来年の後輩の為にアカデミアの寮はどういうものかという取材です…」

「なるほど、良いことじゃないか。俺も何か手伝う事があれば手伝うよ」

「いえ…後はこの食事をしてイエロー寮は終わりですので…献立はなんでしょうか？」

「今日かい？今日は煮魚だったよ」

「わかりました…ありがとうございます」

「どういたしまして」

喬、イエロー寮内食堂にて食事中

「ごちそう様でした…」

喬、離脱した2人と合流

「喬ちゃんおかえり」

「どうやった？」

「普通だったよ…」

「にはは…次はレッド寮だね」

「そうやなく、休めたし行こか」

「うん…行こ」

3人娘レッド寮

「はい着きました」

「他の3つと比べたらボロっちなあ…」

「言っちゃ駄目だよ倭…」

「ここは成績が危ない男子生徒、いわゆる落ちこぼれと言われる方々が居ます」

「デュエル弱い知識があんまし無いとか扱いが酷いんや」

「デュエルに関しては例外が居るんだけど…」

3人娘思考中…

ボツ！

「…：京哉（君）：／／／」

「呼んだか？」

「…えっ！い、いや呼んでないよ（へんよ）！」「」

「そう？次はレッド寮の部屋だろ？俺の部屋使いなよ」

「うん、そうするね」

「2階の1番奥に行こ」

「うん…」

3人娘レッド寮2階京哉の部屋前

「今から部屋に入りたいと思います」

「部屋の提供は立花京哉君や」

「遊城十代君と並び称されるレッドの2強です…」

「それじゃ扉オープン！」

ガチャッ

「相変わらず綺麗やね」
「そうだね」
「でも他と比べると質素だね」
「そうやな…部屋狭いし」
「アカデミアから遠いし…」
「何より全体的に古いね」
「いろいろみしみし言ってたしなあ…ん？」
「この匂い…京哉の料理…」
「行こう！」

3人娘レッド寮食堂内

「…いただきます！」
「…どうぞ召し上がれ、ああ…俺の昼…まあいい。食事中なので俺が説明します。えゝレッド寮の食堂。ふっつゝに質素、ええ質素。エビフライは凶器さ」
「…ごちそう様でした！」
「はいお粗末様でした」
「えーこれで全部の寮を見回りました！」
「突撃隣のアカデミア寮はどうやった？」
「少しはアカデミア寮（この小説の）を理解できたと思います…」
「記念だったからねえ」
「また本編でお会いしましょう！」
「それじゃせゝの…」

「…ばいばい！」

オマケ

「ところで京哉君」

「何？」

「今日のオヤツはなんや？」

「…あり得ん…」

5万アクセス記念！超番外編！突撃隣のアカデミア寮！（後書き）

ネタ要素が少ないような…こんな作者ですがこれからもお願いします！次回もお楽しみ下さい！最後に…

ユニバアアアアアアアアアス！げふう！
京哉「それではまた」

第十六話 おかえり！万丈目！サンダー？んなもん知るか！（前書き）

今回はオリジナルを含ませてもらいます

京哉「どんなのだ？」

これの前の大山の時にあれって思う方が居ると思いますが気にしないで下さいね、今回はタイトル通りですが…内容が変わります

京「ほほう…楽しみだな」

それではどうぞ

第十六話 おかえり！万丈目！サンダー？んなもん知るか！

今日は朝から何も無くどうやって過ごそうか考えたんだ…なのにな…
「おお京哉君、授業が終わったら私の所まで来てくれますか？」

途中で鮫島校長と会って呼び出された…悪いことしてないよホント

んで今校長室前、十代を呼んで来るように追加で言われたから十代と一緒に来た

「校長が俺達を呼ぶなんてな」

「何の用だろうか…失礼します、立花京哉です。十代も連れて来ました」

「おお、入ってくれたまえ」

入ってみると何か他の人も居た

「君達が噂の遊城十代君と立花京哉君か」

「校長、この人は？」

「デュエルアカデミアノース校の校長市ノ瀬君だ」

「よろしく、2人とも」

「よろしく！」

「よろしくお願いします…ところで俺達を呼んだ理由は？」

「実は明日ノース校との交流戦を行うんだ、そして我が校の代表として君達2人のどちらかを選出したいんだが…」

「おおー！スゲー」

交流戦かあ…

「その選出をこの後デュエルで、俺は辞退します」京哉君…

「ええ…どうしてなんだよ！」

「いや…十代の方が俺より魅せるデュエルが出来ると判断したんで…」

実際は他校にデッキをバラしたくないってのが本音

「なんなら我が校からもう1人出しましょうか？」

「それが良い！いや…2人頼めるかな？3対3でやるうじゃないか」
「それが良いですね」

…そんなに俺を出したいのか

「それより校長先生、俺の相手というのは…「俺様だ！」…万丈目？」

「さんだ…」

「てめえ！サンダーさん呼び捨てするとは！」

「サンダー？」

フリーザーだがファイヤーだが知らんがな

「俺の名前は万丈目！」

「サンダアアアアア！」

るせえコイツ等…！名案が1つ思いついた！

「校長先生、5対5にしませんか？日にちも明後日にして」

「面白そうですが…何故明後日に？」

「今日はもう夕方ですしノース校側も代表5人、万丈目は高確率で確定なんで4人決めますしデッキの調整云々で明日1日費やしましょう。こちら側も人材を決めまないといいけませんし」

「う…む…市ノ瀬君はどうだね？」

「私は構いませんよ鮫島校長」

「ではそうしましょう、人材決定は明日アカデミア生徒で出たい者を立候補制で行います」

よし！これで俺は出なくて済む！

「ちなみに十代君と京哉君には必ず出てもらいます、よろしいですね？」

…Why?

「やったな！京哉！」

「…わかりました」

俺の…俺の…策が…

後曰…

「今日〱ハここ〱で校長か〱ら重大な発表があるノーネ」

クロノス先生喋り方相変わらずうぜえ…

「え〱明日、ノース校の方々と5対5の交流戦を行いたいと思います。既に枠は2つ、遊城十代君と立花京哉君が出る事で埋まっております。残り3つは立候補制で選びたいと思います。出たい者は本日中に校長室にくるように。以上！」

…やっぱり強制かよ…

選出をやるため今日は早く終わった

「それにしても以外ね、あなたが出るなんて」

「最初に断ったよ俺は。でも校長が出したらしく強制的だった」
交流戦なんか出たくないなあ

「それよか明日香と三沢、お前等出ないのか？」

「一応行つたんだが既に決まっついていてね」

「私出たかつたなあ交流戦」

「じゃあ俺とかk「嫌よ」そつすか…」

「それより後の3人誰なんスかね？」

「案外カイザーとか出てそうだな」

「あれ？知らないのか？」

「何がだ？」

「お兄さん海外のアカデミアに留学しに行つたんスよ」

「いつくらいからだ？」

「お前が休んでた時だぜ？」

そんな時があつたな…そんな時か

「ちなみに万丈目のアホは何故向こうに？」

「三沢君と退学をかけてデュエルして負けたんス」

アホだ…アホすぎる

「皆ここで何してるの？」

振り返ると毎度お馴染み3人娘が居た

「よう、俺の愚痴を聞いてもらってた」

「他校とのデュエルを愚痴るなよ…面白そうじゃん!？」

そう言ってもなあ十代

「他の学校から狙われるのは堪らん…」

既に経験済みだし

「その台詞から言うとな勝つ自信たっぷりやん…」

「まあな、俺達が負ける訳ない」

そう…“俺達”はな…

「ところで京哉…私達も出るから…」

「お前等だったのか、残りの3人」

「そうだよ、他の学校と戦えるチャンスって滅多に無いもん」

確かに他校の強さを確認出来るのはいい

「それより順番決めとデッキの調整するか」

「そうやな…昼食べたら集合って事でまた後でなあ」

俺達は寮に戻って行った

「…それでさ…集合って毎回俺の部屋だよな」

昼食をとった倭、凜、喬、十代が俺の部屋に居た

「気にしたら負けやで」

「俺の部屋は娯楽施設ではなあああい！」

「とりあえずデッキの調整だろ？」

お、珍しい。十代が止めた

「さっさと始めるか…よし3人共デッキ見せてくれ」

「…え?何で?」「」

そりゃそうだろ…

「調整するには皆のデッキの特徴を押さえにやならないからな」

俺と十代はともかくこの3人は具体的にはよく分からないからな

「まずは喬から見せて」

「うん…」

デッキを受け取る…ふむ…

「水中心だが…最上級はメビウスか…」

いつそのこと違う類いにするか…

「私メビウス好きだし…それに…ゴニョゴニョ…」

それに？なんだ？

「信じて貰えないと思うから良いよ…」

…ああなるほど。見えてるから大丈夫だ。さっきから隠れてるメビウスよ

「とりあえずメビウスはフェイバリットかあ…なら」

確か…この辺に…あった

「ほら、コイツ使いな」

渡すカード4枚、同名カード2枚ずつだ

「コイツで組んでみな、強くなると思うぜ」

「…うん…やってみるね」

「何を渡したんだ？」

「勝つためのパーツさ。次凜見せて」

「はい」

むう…相変わらずのスキドレバルバかあ…

「モンスター破壊をするのがねえな」

お、十代。その通りだ

「バルバロスだからこれで大丈夫だと思うが一応これ入れて見るか…十代、これ1枚あるか？」

「あああるぜ、ほら」

「京哉君十代君ありがと」

「最後に倭」

「これや」

…は？

「これってさあ…」

目の前には…大量の

「余りカードや」

…なるほど

「いくら倭の為だからって壊したからな…予備は？」

「解体したで？」

仕方ないよな

「作るか、皆手伝ってくれな？」

「…うん（おう）！」「」

「おーきになあ皆…」

カード見てみると…

「炎属性が多いな」

結構優秀なカードが揃っていた

「一時バーンデッキ考えとったからなあ」

「ば、バーンって…」

「あ、あはは…」

嫌なデッキ考えるな

「よし、んじゃさっさと作るか」

そして時間がたち…

「出来た…ウチのデッキ…」

午後7時によやく完成

「かなーり話したな」

「まあ完成したしいいんじゃないか？」

まああんなに喜んでるからいつか

オマケ

「腹減ったぜ」

まあ7時だしな

「ボクもだよ」

「でも帰る頃には食事終わってるね…」

「2人共すまんなあ」

仕方ない

「3人の飯は俺が作る」

「「ホント（本当ノホンマか）！？」」

「ああ、食堂で先生に言えば大丈夫だよ」

「京哉、俺の分は無いのか？」

「当たり前だ十代。今日はエビフライだぞ」

「うゝん仕方ねえな」

その晩、食堂は賑やかになった。理由？そらファンクラブを持つ（勝手に設立されたんだが）女子3人が女つ気の無いレッド寮の食堂に要るんだ、興奮するに決まってる！…という男子のわけわからんのが理由だ

第十六話 おかえり！万丈目！サンダー？んなもん知るか！（後書き）

京哉「5対5つてよく無茶な要求を…」

ムダ。モ無き。革を見てちよつと思いついた

京「まあ面白いわな…見てる側は」

そうだな…それより…

京「何だ？」

避ける準備…葵「京ちゃああああん！」京「ごふう！」遅かったか…

葵「京ちゃん…京ちゃ〜ん」

京「あ…葵姉…止めつ…」

海度「すまない…また止められ無かった」

京「海兄…止める気…更々無いだろ…」

海「勿論だ（二カッ）」

京「海兄の代わりに作者…」

京哉よ…

京「作者…」

D A G A K O T O W A R U !

京「作者あああああああ！」

葵「京ちゃん…可愛い〜」

スリスリスリスリ

京「ちよつ…葵姉…胸…苦し…」

葵「京ちゃんお姉ちゃんの胸が良いの？しょうがないね、京ちゃんだけだよ？」

京「ちよつ…止めつ…あああああああ！」

京哉の雄叫びが聞こえるが聞かなかった事にしよう。次回は5対5です

視点は決闘の順番（十代無し）で書いていきます、それではまた

第十七話 氷帝だけが私の力じゃ無いよ？（前書き）

修正バージョンです

第十七話 氷帝だけが私の力じゃ無いよ？

皆さんこんにちわ…神谷喬です…ノース校との5対5のデュエルの先鋒として出る事になりました…順番で言つと…

先鋒 私

次鋒 凜

中堅 倭

副将 十代さん

大将 京哉

となってます…なんというか…陰謀ですかこれ？でも…

「テレビ局が来ているとは…」

正直ドキドキしてる…ところで何で来てるんだろう？

「多分万丈目グループの差し金だな」

「京哉…」

万丈目グループ…かの有名なボンボングループです

「見た感じ万丈目君の強さを全国に広めるって所やね」

そうなんですか…

「それより喬ちゃん、頑張つてね」

「うん…」

京哉が考えてくれたデッキ…

「勝ちに行くよ…メビウス」

「勿論だ…マスター」私達はデュエル場に立った

「わ、ワタクシの姿がテレビに写ってるノーネ！」
そんな事はどうでもいいですクロノス先生…

「それでゝは、デュエルアカデミィア同士の5対5の交流戦を始め
るノーネ！」

『わあああああ！』

歓声が凄い…

「まゝずわゝ我がアカデミアの代表！先鋒はシニョゝラ神谷喬ナノ
ーネ！」

『わあああああ！喬ちゃああああん！』

「あ、あはは…」

応援してくれるから手は振っておこうかな…？

「対するはゝノース校四天王の1人、シニョゝル木梨良平ナノーネ
！」

「ふっ…」

『きやあああああ！良平様ああああ！』

…成る程、あの人だね。私の相手、でも何故こつちのアカデミアの
女子が興奮してるんだろう？

「君が相手かあ…レディを傷付けるのは性に合わないんだがね」

「この場に立った以上決闘者です」

「そうだね、それじゃ始めようよ。僕の強さに魅了されないように
ね」

苛つく…こんな変態いたような…名前は…

「喬！」

思考していると声が聞こえそつちを見ると京哉が居た

「せんべつだ！」

そして京哉は1枚カードを飛ばし私は受け取った

「良いの？」

「ああ、勝ってこいよ！」

「…うん！」そして相手を見据えた、あれ？何か対戦相手が嫉妬の
眼差しをしてる…京哉に

「両者準備は大丈夫ナノーネ？」

「「はい」「それでゝは、デュエルスタート！」」

「デュエル！」

「僕から行かせて貰おう、ドロー」

レディが云々言っていた割りには先攻を取るんだ…最低だね

「僕はゴブリンエリート部隊を召喚カードを2枚伏せてターンエンドだ」

ゴブリンエリート部隊 攻2200

「私のターンドロー」

伏せカードが2枚…穴系なら厄介だけど…私の手札にモンスター上級が1体…

「それじゃ洗脳ブレインコントロール発動、ライフを800払ってゴブリンエリート部隊のコントロールを得ます…」

喬LP4000↓3200

まずこれで仕掛けてみよう…

「ゴブリンエリート部隊でダイレクトアタック」

「ふっ…伏せカード発動、魔法の筒さ」

魔法の筒でだったんだ…メビウスがあれば2枚破壊出来た…2200は今は痛い

喬LP3200↓1000

『てめええええええええ！喬ちゃんをおおおおおお！』

「ふっ…このデュエル終わったら君は僕の虜だよ」

気持ち悪い…ナル…ナル…ナル何とかだと思う

「カードを2枚伏せてターン終了です、そして洗脳ブレインコントロールの効果は無くなりそっちに戻ります」

「僕のターンドロー、ふっ…僕の勝ちだ…」

「伏せカード発動、和睦の使者。このターンの戦闘ダメージを0に

します」

「悪あがきだね、まあいいや。ゴブリンエリート部隊を生け贄に偉大魔獣ガーゼット召喚カードを1枚伏せてターン終了だ」

偉大魔獣ガーゼット 攻4400

「私のターン……」

必ず勝つ……京哉がくれた力で

「ドロ……私は手札からデビルズサンクチュアリを発動、攻守0のデビルメタルトークンを召喚します」

魔法陣が現れ全身銀のモンスターが現れ頭には相手の（名前忘れました）顔が写ってます

デビルメタルトークン 攻0

「さらに手札からおろかな埋葬を発動、デッキからカードを1枚墓地に送ります」

私が送ったカード……京哉、使わせてね

「私は伏せカード発動、リビングデッドの呼び声。墓地のモンスターカードを1体攻撃表示で特殊召喚します」

「さつき喬ちゃんが送ったカードだね」

喬ちゃんとか言わないで、気持ち悪い

「墓地から光帝クライスを召喚」

光帝クライス 攻2400

金色の帝が出てきた。京哉からの力です

「攻撃力2400ならガーゼットには勝てないよ？」

「……光帝は召喚ターン攻撃出来ないけどフィールド上のカードを破壊出来る。私はガーゼットとあなたが先程伏せたカードを破壊しま

す」

光帝の輝きでガーゼットと伏せてあった、激流葬が破壊された

「バカな…ガーゼットが…」

「破壊した枚数あなたはカードを引いて下さい」相手は2枚ドロしました

「私はデビルメタルトークンを生け贄に風帝ライザーを召喚します」

風帝ライザー 攻2400

風を纏う緑の帝…これも京哉の力

「風帝ライザーの効果発動、召喚に成功した時フィールド上のカードを1枚デッキの一番上に戻します、私はリビングデッドの呼び声を戻します」

これによりクライスは破壊されますが…ごめんね、京哉…

「バトルいきます、ライザーでダイレクトアタックします」

「うわあっ！」

相手LP4000↓1600

「私はターン終了」

「ダイレクトアタックは驚いたけど…僕のターン、ドロ」

ナル何とかはくっという声をした後

「カードを1枚伏せてターンエンド」エンド宣言をしました

「私のターンドロ」

…京哉がくれた最後のカード…1つ前のドロで引いたけどここでは使わないかも…

「それでは、ライザーでダイレクトアタック」

終わりですね…

「伏せカード発動、収縮！ライザーの攻撃力を半分にする」

風帝が…ちっちゃくなりました…ちよつと可愛い

風帝ライザー 攻2400 ↓ 1200

ナル何とかLP1600 ↓ 400

「これで終了かい？次のターンで僕の勝ちは決定だけどね」

「何を言っているの？私の勝ちです…」

「何？攻撃も終わったのにまだ勝利を確信しているの？」

「私は風帝を生け贄にします」

京哉の力…最後に貸して

「邪帝ガイウスを召喚します」

邪帝ガイウス 攻2400

黒く闇を纏う帝…京哉が直前にくれた力…

「邪帝の効果発動、召喚に成功した時フィールド上のカードを1枚除外します」

私が対象にするカードは

「邪帝を除外します」

その宣言に会場はざわめいた。邪帝が自らの身体を消し始めました

「自爆かい？それじゃ尚更僕の…」

「邪帝が除外したカードが闇属性だった場合相手に1000のダメージを与えます」

邪帝は消えきる間際に相手に黒い球体を飛ばしました…

「な…何だって！うわあああああ！」

あ、思い出しました。ナルシストだ…

ナルシストLP400 ↓ 0

「勝者！シニョーラ喬ナノーネ！」

ナルシストは膝をつきました、その後歓声が…

「うおおおおお！喬ちゃああああん！」

「素敵だ喬ちゃああああん！」

「俺と結婚してくれえええええ！」

最後のは聞こえない事にしよう…するとナルシストが来ました

「良いデュエルだったよ、どう？僕と付き合わない？こっに見えて僕の家はお金も「お断りします」何故だい？僕みたいになかつこよくお金持ちとなら「おおーい喬！」…」

声をかけられ振り返ると来てくれた

「すげえな！喬！」

「かつこ良かったよー喬ちゃん」

「流石やで喬ちゃん」

皆が来て褒めてくれた…後から京哉が来た

「京哉…勝ったよ」

「ああ、お疲れ様。先鋒だったから緊張したろ？大丈夫か？」

「うん、京哉が見てくれたから…大丈夫だった」

「そっか、後は休んでくれ」

「うん…あ、それと」

私は客席に戻る前に凜を見た

「次、頑張つて」

「うん！頑張るね！」

凜にエールを送って私達は席に戻った

第十七話 氷帝だけが私の力じゃ無いよ？（後書き）

今後こんなミスが無くなれば良いなあ

喬「どうかな？」

京「似合うよ」

…クソが…「ああん!？」いえ何も…

第十八話 ボクの辛さ、君の優しさ（前書き）

みなさん久々の更新だす！

京哉「遅かったな」

ストーリーでの手札の枚数とか手札状況とか禁止カードの出現を回想しまくってた

京「しっかりしろよ」

まあとりあえず本編をどぞ！

第十八話　ボクの辛さ、君の優しさ

こんにちは！次鋒の赤坂凜です。今回は私が中心となります

「…やっぱり駄目だなあ…」

駄目なんだ…ボクこういうの

「京哉君が見てるのに…」

今頭が空回りしてる…緊張してるんだ

「しっかりしなきゃ！」

私は頬を叩いて気合を入れた、喬ちゃんが勝ったんだ。ボクも勝とう。そしてデュエル場に立った

「それでーわ！次鋒戦を始めるノーネ！」

『わあああああああ！』

「まーずわ！ノース校代表！ノース四天王の一人、清本流ナノーネ

！」

『わあああああああ！』

ノース校側から声援が聞こえます

「この戦い、必ず勝つ！」

『わあああああああ！』

勝利宣言だ！凄いなあ

「そして我がデュエルアカデミア代表！可愛いー容姿とは裏腹に強者を叩くギャップの持ち主！赤坂凜ナノーネ！」

『うわあああああ！凜ちゃあああああん！』

集中…集中…

「いきます！」

「女か…つまらないなあ」

失礼な人だよこの人

「デュエルに男女は関係無いよ、始めよう」

「何度も言うが俺は必ず勝つ」

「両者準備はよろしいノーネ？デュエル開始ナノーネ！」

「デュエル！」

「ボクのターンから、ドロー！」

…手札は十分！

「ボクは神獣王バルバロスを召喚、このカードは生け贄無しで召喚した場合攻撃力は1900になる」

神獣王バルバロス 攻1900

「カードを1枚伏せてターン終了」

「俺のターン、ドロー！」

どんなデツキかな…

「俺はモンスターをセット、更に太陽の書を発動！対象は自分のセットモンスター、ダミーゴーレム！」

えっ…！

ダミーゴーレム 攻800

「ダミーゴーレムの効果発動！互いのフィールド上のモンスターのコントロールを入れ替える！」

くっ！そんな効果が…でも！

「伏せカード発動！スキルドレイン！ライフを1000払ってフィールド上のモンスターの効果を無効！」

凜LP4000↓3000

「スキルドレインの効果によりバルバロスの攻撃力は3000に戻るよ！」神獣王バルバロス 攻1900↓3000

「なら俺はカードを2枚伏せてターン終了だ」

まさかいきなりコントロール奪取…びっくりした

「ボクのターン、ドロー！」

これは…

回想

「凜！」

「あ、京哉君」

「これ、使ってくれ」

「いいの？」

「俺は使わないしな、絶対勝てよ」

「うん！」

回想終了

京哉君がくれたカード…

「ボクは手札にあるパンサーウォーリアーと神機王ウルをゲームから除外」

京哉君から貰った力、そして今の私の最強のモンスター！

「獣神機王バルバロスU^{ウル}rを特殊召喚！」

ボクの前に機械と合体したバルバロスが現れた、これが京哉君のくれた力

獣神機王バルバロスU^{ウル}r 攻3800

「バルバロスU^{ウル}rはダメージを与えられ無いけどスキルドレインがあるから関係無いよ、バトル！バルバロスでダミーゴーレムを攻撃！」

「伏せカード発動！」

バルバロスの槍でダミーゴーレムを貫いたけど

「くっ！なんでダメージが…」

凜LP3000↓800

ダメージが反射して来た

「伏せカードの1つ、デイメンションウォールだ」

それなら理由はわかる

「伏せはもう1枚…攻撃せずにボクはターンを終了」

「終了宣言時発動、破壊輪、フィールド上のモンスター1体を破壊した後お互いのライフに攻撃力分のダメージだ！対象は大事にしていたようだな、バルバロスU^{ウル}rだ！」

「そんな…」

京哉君がくれた力が…

「きゃああああ！」

凜LP800↓0

流LP4000↓200

負けた…

「女にしては頑張ったな、まあ敗者には代わりはしないがな。代表がこんなに弱いんじゃないのアカデミアも知れたもんだな」

流という人は笑いながら戻って行った…ボクも戻ろう…

戻っていると席のほうから

「代表で負けたとか情けないな」

「まあ所詮は単なる見かけ倒しだったな」

「なんで明日香さんじゃ無かったのかしら」

…という暴言が聞こえた…もう慣れっこだから大丈夫…

「凜…」

通路を歩いていると京哉君と会ってしまった

「ごめんね京哉君…負けちゃった」

笑顔を努めなきゃ…

「いや、いいよ…それより…」

「大丈夫だよ？慣れっこだもん」

そう言ったら京哉君が抱きしめてきた…というかボクの頭を京哉君が胸に押さえてきた

「京哉…君？」

「泣け…今はな…泣いて良いからな…」

「…ひうつ…！…ひつく…あああああ！」

ボクは我慢出来なくて泣いてしまった…

「…悔しいよお…ひつく…あんなこと…言われて…ひうつ…悔しいよお…」

「うん…悔しかったよ、俺も…」

「ひつく…ええええ…辛かったよお…」

「ああ…辛かったな…」

「ええええ…うええええ…」

「落ち着いたか？」

「うん…ありがとう京哉君」

「どういたしまして、とりあえずここで見ててくれ」

京哉君は気を利かして保険室に連れてくれた

「うん…」

「凜…」

「…なあに？」

「もう1人で塞ぐなよ。俺に喬に倭、他の皆だっているんだからな」

「うん、わかった」

「それじゃな」

「京哉君！」

「うん？」

「頑張つて！」

「もちろんだ」

京哉君は笑って退室していった

「…本当にありがとう京哉君…大好きだよ…」
だから…負けないでね

第十八話 ボクの辛さ、君の優しさ（後書き）

凜ちゃん敗北…

京哉「破壊輪で禁止じゃ無かったっけ？」

アニメは使用してたからね

京「成る程な」

そして今回のゲストは赤坂凜ちゃん

凜「どうも」

自分で書いておきながら…やっぱボクツ娘萌え！

京「死んでこいくそ作者」

というわけで凜ちゃんにはこれを着てもらいましょう！

凜「ウエイトレスさんだ」

早速行つてらっしゃい！

数分後

凜「どう…かな京哉君？ボクに似合ってる…かな？」

京「ああ、ぴったりで可愛いよ」

凜「あ…ありがとう…何か飲み物入れてくれね！？」

京「ああ、ありがとう」

さあこんな奴等はほうつといて次回は倭の出番！それでは次回に…
ポーン！

第十九話 ウチの次への布石や（前書き）

次を書けました！倭が中心です！
それではどうぞ！

第十九話 ウチの次への布石や

皆こんにちわゝ中堅の坂上倭や。凜ちゃん負けてもーたけどしゃーないわな…それにしても…

「京哉君に抱かれて羨ましいわ…」

別にあのシーンを覗いてたわけやないで？たまたま次の為に通路行ったら居ったからそれを見ただけや。ほんまやで？

「多分保険室に連れて行ったんやろなあ…ほんでその先は…」何考えてんだよ」あだっ！何すんねん！」

京哉君からチョップくらった

「お前がくだらない妄想してるからだよ」

「ええやん！保険室」ベッドインやん！あだっ！」

次ハリセンや…

「誰もそうは思わん」

冷たいわあ京哉君

「それより次大丈夫か？」

「もちろんや、例え負けても相手が嫌がるように殴りまくったる！」

「その意気だ、頑張れよ」「ウチにプレゼントは無いん？」

「仕方ないな」

そう言くと京哉君は軽く抱いてきた…って

「いいいいきなり、ななな何すんねん！」

「お前に見られたからな…仕方なしな」

ううゝセコいで京哉君…

「まあ正確には俺からのプレゼントは全て倭のデッキに入れてるか無いだよ」

「じゃあそう言えばいいやん」

「お前それでも抗議してくるだろうが」

「当然や！」

やれやれと京哉君に呆れられた

「とりあえず、だ。そのデツキは出来たばかりだからな、無理はするなよ」

「無理はせえへんけど…勝ちに行くよウチは」

ニツと笑った。当たり前やん！

「頑張つてな、まだ後ろは残ってるから心配はするなよ」

京哉君も笑って返してくれた…さて

「ノースの相手にたつぷり痛い目をあわすか」

ウチはデュエル場上がった

「それでえゝわ！中堅戦を始めるノーネ！」

『わあああああああ！』

客席でも五月蠅いけどここも五月蠅いわ…

「先ゝずは！我がデュエルアカデミゝアから中堅！関西弁を喋ゝりたまにみせゝるドジゝな一面で生徒を魅了するアカデミアの雪月花の最後！坂上倭ナノーネ！」

『来たああああああ！倭ちやあああああん！』

「応援ありがとゝなあゝ」

とりあえず京哉君に手振るわ

「対するゝわ！ノース校、鬼の狂士郎と呼ばれたデュエリゝスト！

桐山京士郎ナノーネ！」

『うおおおおおお！行けー狂士郎おおおお！』

「俺様が居る限りノース校に敗北は無い！」

前の万丈目君と似たタイプやなあ

「てめえが俺様の相手か？なんかひ弱だなあ」

「それはデュエルしてみな判らんよ」

「両者準備完了ノーネ！それではデュエル開始ナノーネ！」

「デュエル！」

「俺様から貰う、ドロー！」

よかった、ウチはまだパーツが足りて無い

「切り込み隊長を召喚！効果により切り込み隊長を特殊召喚！」
切り込みロック！？」

「厄介やなあ」

「更に永続魔法波動キャノン発動してターン終了だ」

ロックによる波動キャノンでフィニッシュ…懐かしいわあ

「ウチのターン、ドロー！」

ウチの手札は…とりあえず先ずはこれや

「手札から二重召喚発動！このターンウチは2回通常召喚が出来る
！」

そしてこれや！

「プロミネンスドラゴン2体召喚！」

炎を全身に纏ったドラゴンが現れた

「プロミネンスドラゴンの効果は他に炎族が居る場合攻撃対象にされない、2体居るから2体共攻撃対象できひんで。カードを2枚伏せてターン終了や、んで終了時にプロミネンスドラゴンの効果で相手ライフに500のダメージや！ダブルプロミネンスファイヤー！」
2体のプロミネンスドラゴンが口から火球を京士郎って人にぶつけた
「ぐうつ！」

京士郎LP4000↓3000

とりあえず先制は仕掛けたで

「俺様のターンドロー！…終わりだな」

「勝利宣言なんてえらい自信やな」

「勝ちだからな、俺は手札からターンジャンプを発動！1ターンたった波動キャノンを対象にして波動キャノンを3ターン進める！」

「そらしゃーないわな…ってそんなわけ無いやろ！伏せカード発動

「サイクロンや！波動キャノン破壊や！」

「ぬうつ…コモンドナイトを召喚してターン終了だ」

「ウチのターンドロー！」

来たでミスターホームラン君！

「ウチは超熱血球児を召喚や！」

現れたのはどつからどうみてもパ。プロ君のモンスターや

超熱血球児 攻500

「ふん！そんな雑魚で何ができる！」

「雑魚や無いわ！超熱血球児は他の炎属性1体につき攻撃力が1000上がるんや！」

超熱血球児 攻500 ↓ 2500

「いきなり化けやがった…だが「切り込みロック」により攻撃は出来るん」チツ…」

「ウチはもう1枚の伏せカード発動、血の代償。ウチはライフを500払って通常召喚を行うで」

倭LP4000 ↓ 3500

「ウチは3体目のプロミネンスドラゴンを召喚！ターン終了時にプロミネンスドラゴンの効果でダメージ！トリプルプロミネンスファイヤー！」

「ちいっ！」

京士郎LP3000 ↓ 1500

「ウチのターンは終了や」

これは勝ったで…

「俺様のターンドロー！…ふん！」

「なんや？まだ手があるんか…？」

「俺様は3体モンスターを生け贄に！」

「3体生け贄！？」

「神のカードとか無しやで！？」

「ギルフォード・ザ・ライティングを召喚！」

ギルフォード・ザ・ライティング 攻2800

…そう来たんか…

「カード効果は3体の生け贄召喚に成功した場合相手フィールド上のモンスターを全て破壊…」

「確かバルバロスの劣化版やったはず、しかもウチの手札は0…」

「そうだ！ギルフォード・ザ・ライティングよ！敵を全て薙ぎ払え！」

ギルフォードの一振りによりウチのモンスターが一掃された

「負けかあ…」

「そうだ！貴様の負けだ！ギルフォード・ザ・ライティングにデーモンの斧を装備して貴様にダイレクトアタック！」

「きゃあああ！」

ギルフォード・ザ・ライティング 攻2800 ↓ 3800

倭LP3500 ↓ 0

「勝者！京士郎ナノーネ！」

「うわあああああああ！」

「流石狂士郎だ！」

強いわ…

「所詮は女だな！この程度ならデュエルなんか止める！」

そう言つて戻つて行つた…むっちゃん力つく！と思つて振り返ると明らかに恐ろしいオーラを京哉君が出してた

「き、京哉君、気にしたらあかんで？」

「オツカレヤマト、アノフタリハマカセロ。リンノカタキモフクメテチリニカエシテヤル」

完璧頭がアベンジャーモード（ウチ命名）入つとる

「つ、次十代君やったな？見にいこか」

とりあえずはよこの場所から逃げよ…京哉君怖すぎや…

第十九話 ウチの次への布石や（後書き）

京哉「おい作者」

なあに？

京「俺にあんなの付けんな！」

ばちこーん

あふう！…いいハリセンの威力じゃまいか…

京「駄目だコイツ何とかしないと…」

今回は倭がゲストです

倭「京哉君いつもお疲れやなあ」

京「いつもコイツの相手はしんどい…ってその服は？」

倭には某幸運星の制服を着ていただきました

倭「なかなかいいわこれ」

京「なかなか似合ってるよ倭」

倭「そ、そんなお世辞ゆーてもなんもでーへんで？」

まあ相変わらずな京哉はほっというて次回は最終戦、京哉視点からスタートです！それでは！

第二十話 俺の怒り、彼女の気持ち（前書き）

はい！第二十話です！

京哉「ようやくだな」

今回は京哉がキレます

京「何故？」

理由は本編にて！ではどうぞ！

第二十話 俺の怒り、彼女の気持ち

さて、ようやく俺の番だ。十代も万丈目のアホに勝ったしな

「にしても万丈目が副将つて事は万丈目より強いってことか？」

いやあえて万丈目が副将に入ってたって事があり得るな

「相手は誰かな？楽しみにだ」

デッキはお前だアキト、頼むぜ

「任せてくれ旦那！」

ちなみに3人共以前は呼び方は京哉様だがそういう質では無いので好きに呼んでいいと言ったらアオイが「京哉様」、カイトが「主」、アキトが「旦那」となった

「久々だったからな、後の2回はヒーローとサイバーで叩きのめす」

「だけどこれ勝ったら終わりだろ？」

「何言ってるんだ？凜と倭を雑魚呼ばわりしたゴミを消し炭にするんだ」

いや消し炭じゃもの足りないか…更にそこから…くくく…

「旦那怖すぎる…」

「主程仲間思いで怒らしたくない存在ですよ…」

「京哉様、頑張つて下さい」

さて、フィールドに上がろうか

「おっ京哉！」

「よう十代、流石だな」

「へへつまあな。次必ず勝てよ！」

「当たり前だ」

「それでえゝわ！5対5交流デュエル大将戦を始めるノーネ！」

『わああああああ！』

観客スゲーよ

「我々がアカデミーア大将！レッド寮のWエース、サイレントキラ
ーこと立花京哉！」

『……………』

え！？何この空気！？お前出てくんなよみたいなオーラ！？

「頑張つて、京哉…」

「京哉君最後決めたれ〜！」

「京哉〜頑張れよ〜」「頑張るツス〜！」

三沢と明日香は普段通りだから許す！ああ…ありがとう喬、倭、十
代、翔…俺はお前達という友を持って幸せだ…

「対するノース校大將は〜！ノース校内美女子ランキングNo.1
！如月涼ナノーネ！」

「……………」

『うおおおおおお！涼ちやああああああん！』

両アカデミアからは涼ちゃんコールが流れた（男子のみ）。その涼
つて娘は顔を真っ赤にしていた

「君が大將？俺は立花京哉、よろしくな」

「…は、はい…よろしくお願いします…」

「両者準備はいいノーネ？それでえ〜わ！デュエル開始ナノーネ！」

「デュエル！」

「でゅ、でゅえる…」

ん〜なんというか覇気が感じられん

「俺から行こう、ドロ〜」

ふむ…手札は良好つと

「切り込み隊長を召喚、効果により手札から4レベル以下を特殊召
喚する。ミスティックソードマンLV4を特殊召喚」

まあ毎度お馴染みだな

切り込み隊長 攻1200

ミスティックソードマンLV4 攻1900

「カードを1枚伏せてターン終了」

「わ、私のターン…ドロー…」

さて、どんなデッキかな？

「あ、貴方のモンスターを2体生け贄に捧げます…」

…は？

「そういうタイプのモンスターかあ…」

うーん…まさに予想外デース

「貴方のフィールドに熔岩魔神ラヴァゴーレムを守備表現で特殊召喚します…」

熔岩魔神ラヴァゴーレム 守2500

いやー捕まったなあ。ここラヴァの檻の中だよ

「私は永続魔法の平和の使者を発動してターン終了です…」

うわぁ…完璧ロックだな。その時…

『相変わらず陰険だな！』

『正々堂々と戦えよー！』

『もしかして弱いからロックに頼ってるのか？』

などと暴言をノース校側から吐いてきた、イラッと来たよ今の発言

（旦那、俺も旦那の怒りがわかったぜ。コイツ等は最低すぎだ）

今すぐにでも奴等を殺りたい（誤表じゃないぜ？）がああ涼んで娘に失礼だからな

（旦那結構紳士だよ）

それがデュエリストさ

「俺のターンドロー！」

「スタンバイフェイズ時にラヴァゴーレムの効果により1000のダメージを受けてもらいます…」

「ぐっ…」

京哉LP4000↓3000

「俺は切り込み隊長を召喚、効果によりミスティックソードマンLV2を特殊召喚」

ミスティックソードマンLV2 攻900

「バトル！ミスティックソードマンLV2と切り込み隊長でダイレクトアタック！」

「きゃああ！」

涼LP4000↓1900

よし、遅れたがダメージ！すると…

『おいおいふざけるなよ！』

『所詮は雑魚だな！』

『さつさと負けて引つ込め！』

…奴等は相当俺の堪忍袋の緒を切りたいうんだな…

（まだ抑えましょう旦那！）

そうだな、冷静に行こう

「俺はターンエンド」

「私の…ターン…ドロ…」

辛いだろうな…

「カードを2枚伏せて貴方のモンスターの2体生け贄にしましてラヴァゴーレムを召喚します…」

2枚目か！？

「ううっ…ターン終了です…」

辛いよなあ…あの罵声は

「俺のターンドロ…」

「スタンバイフェイズ時にラヴァゴーレムの効果でダメージを受けて下さい…」

京哉LP3000↓1000

「俺は伏せカードリビングデッドの呼び声を発動、墓地のミスティックソードマンLV4を特殊召喚、更に手札からレベルアップ！を発動、ミスティックソードマンLV4を墓地に送りデッキからミスティックソードマンLV6を特殊召喚！」

さあ、俺達の怒りを奴等に見せてやろうぜ、アキト！

（もちろんだ旦那！）

ミスティックソードマンLV6 攻2300

「更に手札からサイクロンを発動！平和の使者を破壊！」

「あ…」

サイクロンにより平和の使者が崩れた。その時だ…次の言葉で完全にキレた

『おいおい！所詮は雑魚デュエリストだったな！さつさとやられちまえ！』

ブチッ

「黙れええええ！」

俺の声が一気に周囲を黙らせた

「何が雑魚だ！？フィールドに立って無いやろうが雑魚って言うてんじゃねえよ！！そもそも今この場に居なかった奴がほざくなあ！！そして！ギリギリで勝った奴もそうだ！相手をリスペクトしやがれ！エリートを気取るなあ！てめえ等は最初から！生まれた時からデュエルが強かったのか！？負け無しかったのか！？無敗なのか！？無敗の奴は今すぐ手え挙げる！？？」

一通り見渡すと誰も居ない、当然だ

「他人を雑魚と呼び自分はエリート気取り？ハッ！笑わせてくれるぜ！はつきり言うが貴様等にデュエリストを気取る資格もデュエリストとして闘う資格もねえ！貴様等は人間のクズだからな！」言いたい事は言ったぞ俺は

「デュエルは自分と相手の誇りと意地とプライドを懸けて闘う！それを貴様等が、そして俺達が貶す資格は無い！」

席を見渡した後驚いている涼を見る

「これで俺達の邪魔をする奴は居ない、続けようか。涼」

「…は、はい…」

「ラヴァゴーレム2体を攻撃表示にし俺は手札からハンマーシユートを2枚発動、フィールド上の攻撃表示の攻撃力の一番高いモンスターを2体破壊する。ラヴァゴーレム2体を破壊」

上からハンマーが2つ振り下ろされ2体のラヴァゴーレムが潰され檻から脱出した

S i d e 倭

「ラヴァゴーレムを自ら破壊した？」

三沢君が驚いとるなあ

「確かにミスティックソードマンでとどめになるけど…」

「いや、京哉は攻撃しねえ」

「……えっ？」「……」

ウチと十代君以外の周りは驚いた

「何でなんスカアニキ？」

「今とどめさして勝っても京哉君は面白く無いからや」

「でも今攻撃しないと次に相手からのとどめを受けるかも知れないんすよ！？」

「成る程…あれだけ豪語しておいて互いの本気を見せずに終わるってのは嫌な気がするわね」
流石明日香さんやな、判つとるわ
「まあ見てなつて、次の京哉のターンから振り出しに戻すからよ」
ウチ等は再びデュエルを見ていた

S i d e 涼

京哉さんの場には攻撃力2300のミスティックソードマン…対して私の場の2枚は実はブラフと呼ばれるもの…通常魔法2枚
「負け…ましたね…」
でもあの人は私の代わりに言ってくれました『貶す資格は無い』と…それだけで嬉しかったんです…
「俺は攻撃せずターン終了だ」
えっ…
「攻撃…しないんですか？」
私は恐る恐る聞きました
「ああしない」
彼はしっかりとした目をして言いました…そして私は悟りました
「私のターン…ドロー」
その目に…私は応えます！

S i d e 京哉

「私は伏せカード発動、恵みの雨。互いにライフを1000回復します」覇気が出てきたな…

涼LP1900↓2900

京哉LP1000↓2000

「更に伏せカード発動、死者への手向け！私の手札を1枚捨ててミスティックソードマンLV6を破壊します！」
すまないなアキト…

（これも旦那と本気でやりあう為、喜んで破壊されよう！）
感謝する…

「私はターン終了です…」

「俺のターン…なあ涼」

「はい…」

「ここから互いの本気、ぶつけ合おう！」

「は…はいっ！」

第二十話 俺の怒り、彼女の気持ち（後書き）

キレただろ？

京哉「ああキレた、あれは許せなかった」

だろうな…俺も許さないし。ちなみに続きは遊戯王Rの最後の夜行戦がモデルです。それはそうとブリザードプリンセスを3枚集めよう！あれは可愛い！

京「良いけど金無いだろ？」

ぐう…それを言うな

最後に…Side。。。とか付けて見ました！ご感想等をお願いします！

第二十一話 決着！そして…（前書き）

はい！後編でございます！

京哉「そろそろセブンスターズ入れたらどうだ？」

その前にタッグデュエル入れる

京「さいですか…」

それではどうぞ！

第二十一話 決着！そして…

本気のデュエル…俺は彼女に言った

「ドロー…さて、お互いの手札の枚数では満足にデュエルは出来ないな」

「はい…」

よって…

「天よりの宝札を発動、互いは手札が6枚になるようにドローする」
俺は6枚、涼は3枚ドローした

「俺は手札から増援を発動、レベル4以下の戦士族を手札に加える。
俺はコマンドナイトを加える」

さあ始めるぜ

「コマンドナイトを守備表示で召喚、カードを2枚伏せてターン終了だ。お前が強いって事を俺や皆に見せてくれ！」

コマンドナイト 守1900

「はい！私のターンです！ドロー、私はフィールド魔法水の都アトランティスを発動します！」回りが水に囲まれその中に海底神殿が現れる

「このカードは手札の水属性モンスターのレベルを1つ下げて攻撃力と守備力を200上げます！私はジェノサイドキングサーモンを召喚します！」

ジェノサイドキングサーモン 攻2400 ↓ 2600

来るか…攻撃に…？

S i d e 涼

サーモンを出したのは良いのですが京哉さんの伏せカードは2枚…
ですが

「ここで躊躇っついては前に進めません…」
なので私は…

「ジェノサイドキングサーモンでコマンドナイトに攻撃します！」
「勝負だ！まずは1枚目の伏せカード発動！」

S i d e 京哉

攻撃宣言！

「勝負だ！まずは1枚目の伏せカード発動、血の代償！ライフを500払ってモンスターを通常召喚する！俺は切り込み隊長を召喚！更に効果により2体目のコマンドナイトを召喚する！更にコマンドナイトは表側の時自分フィールド上の戦士族は攻撃力400アップさせる！2体居るから全ての戦士族は攻撃力は800Pアップする！」

切り込み隊長 攻1200 ↓ 2000

コマンドナイト×2 攻1200 ↓ 2000

京哉LP2000 ↓ 1500

「更にコマンドナイトは他にモンスターが居る場合、攻撃対象に出来ない。更に切り込み隊長の効果によって切り込み隊長にしか攻撃出来ない！」

「それなら切り込み隊長に攻撃します」

切り込みがサーモンに一呑みにされてしまった

「2枚目の伏せカード発動！ガードブロック！バトルによるダメージを無効にし1ドローする！」

S i d e 涼

凄いです…一気に3体召喚した上にダメージが無効されるなんて…

「私はカードを1枚伏せてターンを終了します！」

それにこの人…京哉さんとのデュエルはとっても楽しいです！

「俺のターンドロー！手札から戦士の生還を2枚発動！俺はミステックソードマンLV4、6を手札に加える！」

対戦相手を思いやり

「モンスターをセットし手札から太陽の書を発動！俺のセットモンスター、ミステックソードマンLV4を表側攻撃表示に変更！」
自分が信じるものを貫き

「更にコマンドナイト2体の効果によって攻撃力がアップ！」

ミステックソードマンLV4 1900 ↓ 2700

そしてかつこいいです…

「行くぜ、涼！」

「はい！」

S i d e 京 哉

「バトルだ！ミスティックソードマンLV4でジェノサイドキングサーモンに攻撃！」

LV4は大きく跳び斬りを仕掛ける

「伏せカード発動します！攻撃の無力化です！」
剣が渦に巻き込まれる

「バトルは終了か…ならカードを1枚伏せてターン終了だ」

「私のターンですね、ドロー！私はアトランティスの戦士を召喚！」
アトランティスの戦士 攻1900 ↓2100

「更に私はカードを2枚伏せてターン終了です！」
まだまだ行くぜ！

「俺のターン、ドロー！バトル！ジェノサイドキングサーモンをLV4で攻撃！」

「伏せカード発動します！血の代償です！ライフを500P払ってジェノサイドキングサーモンを生け贄に海龍ダイタロスを召喚します！」

涼LP2900 ↓2400

海龍ダイタロス 攻2600 ↓2800

「なら対象を変更してアトランティスの戦士に攻撃！」
伏せカードは発動するか！？
「くうっ！」

涼LP2400↓1800

「発動しなかったのか？」

「はい…次で必ず京哉さんを倒しますから！」
最高だ！」

「俺は今最高に楽しいぜ！涼！ターン終了時に戦闘破壊したLV4を墓地に送りLV6を特殊召喚！」

（再び参上ってな！）

ミスティックソードマンLV6 2300↓3100

「私もです！京哉さん！私のターンドロ！私はダイダロスを生け贄に海龍神ネオダイダロスを特殊召喚します！」

海龍神ネオダイダロス 攻2900↓3100

S i d e 涼

ネオダイダロス…私のこのデッキ最強で切札…効果は海を墓地に送ればこのカード以外のフィールドと手札のカードを全て墓地に送る事が出来ます…ですが…

「京哉さん、このカードの効果は知っていますか？」

「海を墓地に送る事でそのカード以外のフィールド上と手札のカードを全て墓地に送る…だ」

そうですね…ですが！

「私は効果を使わずに貴方のミスティックソードマンを倒します！」
これが今の私の恩返しだから！

「ああ！来い！」
「いきます！」
「バトル！」
「ネオダイダロスで！」
「ミスティックソードマンで！」
「ミスティックソードマンを！」
「ネオダイダロスを！」
「攻撃！／迎撃！」

S i d e 観客、喬

今京哉のミスティックと涼さんのネオダイダロスがぶつかりあった
「何故彼女は効果を使わないんだ？」
「きっと京哉への御礼じゃないかな…」
私はそう思う…凜も昔はそうだったから
「何にせよ見てるこっちも面白いデュエルやわ」
「そうだね倭…」
自分達だけじゃなくて観客までこんなに熱く、楽しませるデュエル
は初めてみた…流石だね、京哉。どっちが勝ってもおかしくないけ
ど私は京哉に懸けるからね

S i d e 京哉

首が4つ位ある海龍神にアキトは立ち向かって行った

「いきます京哉さん！伏せカード発動！ライジングエナジー！手札を1枚捨てて攻撃力を1500アップさせます！」

海龍神ネオダイダロス 3100 ↓ 4600

「私は勝ちます！」

「だが俺は負けない！伏せカード発動！ハーフシャット！」

モンスター1体の攻撃力を半分にし戦闘による破壊を無効にする！俺はネオダイダロスを対象にする！迎撃だ！」

（もちろんだ旦那！うおおお！）

地面から大気が発生しダイダロスが身動き取れなくなったそこをアキトが斬った

海龍神ネオダイダロス 4600 ↓ 2300

「きゃあ！」

涼LP1800 ↓ 1000

よし！勝った！

「…私の負けですね…ターン終了です」

海龍神ネオダイダロス 2300 ↓ 3100

「俺のターンドロー、3体目のコマンドナイトを召喚」

ミスティックソードマンLV6 3100 ↓ 3500

コマンドナイト×3 2000 ↓ 2400

「更に手札から装備魔法団結の力を発動、ミスティックソードマン

に装備。4体いるため攻撃力は3200アップ」

ミスティックソードマンLV6 3500↓6700

「行くぞ、涼」

「はい…」

「アキト、ネオダイダロスを攻撃」

（了解だ旦那。楽しかったぜ、強敵よ）

アキトの一閃によりネオダイダロスが沈黙した

涼LP1000↓0

「…ふう…楽しかったぜ涼！」

「はい！私もとても楽しかったです！」

涼は満面の笑みを浮かべ俺と握手した

「しょ、勝者！立花京哉ナノーネ！」

その言葉の後に鮫島校長と市ノ瀬校長、十代達が拍手した後、皆から暖かい拍手を俺達2人は貰った。そして数日後…

「大ニユースス〜！今日転校生が来るらしいッス！」

万丈目はあのデュエルから再びこっちに帰って来て残りは帰った。ただし出席日数等でレッド寮からだけど

「へえどんな奴が来るんだ？」

「何でもかなりの美少女らしいッス！」

そりゃ男子どもは息巻いてるな

「まあそれは置いてさっさと教室行こうぜ？また怒られっぞ」
時間が時間だ、かなりヤバイ

「いつけねえ！翔、京哉！走るぞ！」

「もちろんだ」

「ま、待つてよアニキ！京哉く〜ん！」

そしてギリギリで到着。翔遅すぎな

「それで〜わ授業を始めるノーネ。その前に転校生が居るので、紹介するノーネ。入ってくるノーネ」

そして入って来た女子は…

「皆さんお久しぶりです、如月涼です。ノース校から転入しました。どうぞよろしく願います！」

一礼した後満面の笑みを浮かべたら男子の方から涼ちゃんコールが流れた。相変わらずこういうコールは五月蠅いの極みである

「京哉さん！」

授業が終わった後涼に声をかけられた

「よっ！びつくりしたぞ、まさか転校生として現れるとは」

「市ノ瀬校長がこちらのアカデミアの方が私に良いと言ってくれまして」

へえ…あの人優しいな。デュエル終わった後トメさんのキスを奪われて激昂してたあの人がなあ

「それに…京哉さんも居るので…」

頬を赤らめて言っている…しんどいのか？

「俺関係あるのか？」

「もちろん大有りです！」

そんな当然のように言われても…

「京哉く〜ん！」

声をかけられ振り返ると倭達が来た

「あれ？転校生やん」

「確か如月涼…だよな」

「はい！如月涼です！」

「ウチは坂上倭や」

「ボクは赤坂凜だよ」

「私は神谷喬…」

「倭さんに凜さんに喬さん！」

「そうやで〜これからよろしゅーな〜」

「はい！よろしくお願いします！」

4人は会話しながら帰った

「よし、俺も帰るか」

男達の殺気をガン無視しレッド寮に戻って行った

余談その1

その日の内にレッド、及びイエローのみで涼親衛隊ことK.L.が結成（意味は可憐な涼ちゃん）。涼ならRじゃないかと気にしたが言うのは止めておいた

余談その2

夜、レッド寮にて“涼ちゃん歓迎会！”（提案は倭である）が行われた。料理は全て俺が行って片付けを4人娘でしていた。終始レッド寮男子は某破壊者の様に発狂していた（十代、翔以外）。ちなみに万丈目と三沢と明日香が何故居たのかは知らん

第二十一話 決着！そして…（後書き）

京哉「なんという最後の夜行戦」

だろ？夜行戦にするって。なので天よりの宝札はアニメ及び原作にしました

京「今改めて考えるとなかなかチートだなあれ」

リアルじゃ弱すぎな

京「まあな」

という訳で今回は如月涼ちゃん（ナースコス）で登場！

涼「こ、こんなにちわ…ど、どうかな京哉さん…？」

京「とても可愛いぞ」

涼「はう／＼／！？」

京「え？おい、涼？おーい？」

放心状態だな

京「俺何かしたか？」

さあどうだろう？次回はデュエル無し！皆の休日の風景を書きます。

それでは！

祝！10万アクセス！（前書き）

す、すげええええ！誠にありがとうございます！

祝！10万アクセス！

な、なんだと！あざーっす！

京哉「おおー10万越！」

倭「こんな作品に10万も…」

凜「ホントありがとうございます！」

喬「これからもお願いします…」

涼「皆さんには感謝感激ですよ」

それでは！今回の企画！“アカデミア関係者に聞いてみた！5人に
対する大質問大会！”

京「大会で…」

今回の企画はこの箱の中からランダムにハガキを引きその質問に答
えるという企画！

倭「よくありがちなあ…」

それでは行きます！まず1枚目え！

凜「どれどれ？えっと…私達に質問、京哉君のどこに惹かれました
か？」

京「どういう意味だ？」

喬「京哉…少し耳塞いで」

京「良いけど？ん」

涼「京哉さんが耳を塞いだので、せーの」

4人「……優しい所全部」……

もう良いぞ京哉

京「了解だ、じゃ次」

2枚目え！

喬「京哉に質問、4人の中なら誰がお嫁さんが良い？」

4人思考中…ボフツ！

倭「そんな、あかで京哉君…まだウチ等学生やん…」

凜「そ、そうだよ。ボクだってそりゃあ求められたら駄目だけど

…」

喬「それでも喬が私を求めてくれるなら…」

涼「私は大丈夫ですよ！」

京「…なんのこっちゃ…まあ俺は嫁は取る気無いんで決めれません」

4人「……はうつ！」「」「」

次！3枚目え！

涼「え〜つと私達き質問、俺達と付き合って下さい」

4人「……嫌です（や）」「」「」

次！4枚目え！皆に質問、この中で誰が1番強い？

4人「……京哉（君ノさん）」「」「」

京「皆強いと思うが？」

ラストお！作者に！作者しねえー！つて誰じゃあああああ！これ送った奴あああああ！しかも箱のカード（ハガキ）の7割がこれってどういう事じゃあああああ！

5人「……そういう事（だノじゃないかな？ノやノですね）」「……」

うわああああああん！こうなったら爆弾で俺もろとも消してやるうううううう！

サッ

ジュツ、バチバチバチ…

はあっはっはっはあ！皆死ねえ！

京「と盛り上がって居る所悪いんだが…」

なんだ京哉！説得しても止めねえぞ！

京「それ爆竹だから」

…え？

バチバチバチ…パチパチパチパチイ！

あつちいいいいいいい！

京「馬鹿は放っておくか。えゝ10万アクセス、ありがとうございます！
ます！」

倭「今後ともどうぞよろしく願います！」

凜「本編でも頑張つて行きます！」

喬「作者は下手ですが暖かい眼差しで見てくだされば嬉しいです…」

涼「それでは皆さん！」

5人「……………本編でも会いましょう！」「……………」

祝！10万アクセス！（後書き）

ホントありがとうございます！次は記念の超番外編です！

第二十二話 新しい奴が仲間入り（前書き）

ええ、ちよつとした事情にて超番外編より先に話を進めます。後書きには今後の事を書きます
では本編をどうぞ

第二十二話 新しい奴が仲間入り

どうも…京哉です、今俺の目の前で非常にダルい事が起こってます
「貴女絶対京哉様を狙ってました!」

「狙って無いもん!私のはたまたまお兄ちゃんに拾われたんだもん!」
「だから京哉様をお兄ちゃんなんて言わないでください!」

「お兄ちゃんはお兄ちゃんだもん!」

今俺の目の前でサイレントマジシャンLV8のアオイとブリザード
プリンセスのアリスが言い争っている。そもそも何故こうなったか
…今から1時間前の話である

「やっぱ俺は海兄みたいには無理だな…」

「あの人とは比べるな、断然お前よりか我がマスターの方が上だ」
アブソルートZeroことゼロ（昔に海度兄さんに命名された）と
部屋で話をしていた。まあ彼も精霊だったと最近知ったんだ。昔は
海兄が死んだ時は塞ぎ込んで精霊としては出て来なかったが最近の
俺を見て信頼出来る人間と見てくれた

「俺が見据えてるのは海兄を越える事だもんな、わずか1年で越え
られる訳がない」

「当然だな」

それにしても腹減ったな

「購買行ってドローパン買うか」

「ならば俺達は待つておこう」

「ああ、カイトと仲良くな」

「結構仲良いですよ我等は」

「そっか、それはなにより。それじゃ行ってくる」

それで15個位袋に入れて持って帰ってる途中、廊下を歩いていたら
「ひつく…ひつく…」

と泣き声が聞こえた

「質悪いなあ…」

人は俺以外居ないし少し暗いし、まあとりあえずは泣き声が聞こえる方に行くとかカードが落ちてたんだよな

「へえ…ブリザードプリンセスってカードか」

とりあえず拾ったよ、なかなか強いし勿体無いし。（この小説ではカードを1枚拾うとそのカードが既に3枚ある状態になるという謎の現象が起こります。by作者）するとき…

「ようやく…ようやく見つけてくれた…」

の声と共に目の前が真っ白になった。アオイの時と一緒にだった。すると俺の前にはブリザードプリンセスが立って居た

「貴方が…私のマスター？」

「いや、落ちてたから俺がマスターって訳じゃないけど…」

「そう…」

あつと…元氣無くなったようだな

「どうしてここに？捨てられたのか？」

「判らないの…気付いたらここに…」

可哀想に…誰にも気付かれずにここで泣いていたのか

「じゃあ本当の持ち主が見つかるまで俺が所持しとくよ」

「え？本当…？」

「ああ、本当だ。持ち主が見つかるまでデッキも作るよ」

そう言っただけでブリザードプリンセスの頭を撫でる。というか何故か俺精霊に触れる上に触ったら実体化するんだが…

「ありがとう！え…っ」と

「俺は立花京哉、呼び方は自由で良いよ」

「それじゃあお兄ちゃん！」

お、お兄ちゃんねえ…

「まあいつか。よし、行こっか…名前はアリスだ」

「名前まで…ホントありがとう!」

「いやいや、それじゃ行こうアリス」

「はい!」

そして部屋に着くなり喧嘩の勃発

「それにお兄ちゃんは私の事好きだもんね!」

「京哉様!?!」

もう助けて…

「京哉…いい?」

そこに喬が来た

「ナイスタイミング喬!助けてくれ!」

「京哉どうしたの?」

「コイツ等が喧嘩を始めて止まらないんだよ!喬のメビウスと同じで精霊なんだよ!」

「京哉…精霊見えるの?」

「ああ!とりあえず助けてくれ!」

「わかった、やってみるね」

ここに天使が…

S i d e 喬

とりあえず理由を聞いてみよ

「どうかしたの?」

喧嘩している2人に聞いてみた

「喬様、この娘がここに住むって言い出して…」

「だってお兄ちゃんが私のマスターだもん！」

「お兄ちゃん？」

「そう、お兄ちゃん」

「だから京哉様をお兄ちゃんだなんて言わないで下さい！」

「だってお兄ちゃんはお兄ちゃんだもん！それにお兄ちゃんは私の事大好きだし！」

…はい？

「今なんて？」

「お兄ちゃんは私の事が好きって」

へえ…京哉がそんなことを…

「それは3人で京哉と話さないかね」

そう思い京哉を見ると居なかった

「皆で探すよ」

S i d e 京哉

あゝようやく脱出出来た

「とりあえずうろつろするか」

ドローパンは確保してるから…

「レッド寮はヤバイ、イエロー然りブルーは知り合いが居ない」

という訳で港のヘリポートで食事中

「あれ？京哉君、何してるの？」

「よほお凜、ひはひよっとほへほへははほふはひへほへへひふっへふ」

(訳：よお凜、今ちよつと俺の部屋がカオス化してここで飯食ってる)

「京哉君何言ってるの？」

「まあ聞けよ」

「な、成る程：京哉君大変だね」

苦笑いして言ってくれたよ

「というか凜達精霊所持していたんだ」

なんとびつくり4人娘は全員精霊が見えるのだ！

「ボクはこの娘何だけど：名前はリアだよ」

へえ：荒野の女戦士かあ

「デッキの問題か？」

「そうなんだよ」ボクのデッキがスキルドレインの上にパワータイ
プだから効果が発揮しないんだよ：そうだ！京哉君、ミスティッ
クデッキ見せて！」

「ん？構わないが：はい」

俺はアキトのデッキを取り出して渡すと凜は真剣に見る

「リィン、探したよ」って取り込み中？」

下から声がしたから見てみると荒野の女戦士が居た

「もしかして：アタシの事見えるの？」

「勿論だ、リア。俺は京哉」

「初めましてだねキョウヤ」

「よお、久しぶりだな」

「あれ？アンタ居たんだ」

「ああ、俺はマスターからアキトって名前貰ってる」

「わかったわアキト、その代わりにアタシにはリアって呼んで」

「了解だ」

「お前達知り合いか？」

「幼なじみって奴ですよ旦那」へえゝ知らなかったな

「住んでた所が隣同士なのよ、コイツ昔は弱かったのに成長したわねえゝ」

「う、五月蠅え！」

まあ最初攻撃力900だしな

「ところでキョウヤ、リンはなんでアンタのデッキ見てんの？」

「お前を活かしたいんだって」

「ああゝ成る程ゝそれよりキョウヤ、これ食べれるかな？」

そう言つて差し出してきたのはハネクリボーゝゝって

「それ十代の精霊だ！」

すかさず奪還、ハネクリボーにも触れたよ僕

「残念ゝゝ」

「クリクリゝ」

人懐っこいなコイツ、俺に擦りよってるよ

「おおゝいハネクリボーゝゝ！」

十代が来た

「よ、十代。ハネクリボーならここだ」

ハネクリボーを離すとハネクリボーは十代の下に言った

「クリゝ」

「ハネクリボー！良かったゝ居なくなつたからびっくりしたぜゝ」

「すまない十代、コイツが原因だ」

「指、指さないでよアキト」

「おお！新しい精霊だ！俺遊城十代、よろしくな！」

「アタシは荒野の女戦士のリアよ」

流石十代、直ぐに空気に慣れるな

「ところで十代、飯どうする？食つて無いならドローパン食おうぜ」

「おお！良いなそれ！俺買つて来るぜ！」

えっ…今大量にあるんだが…

で今日の前には大量のドローパン

「十代、何個買った」

「んゝざつと20個位だな」

「食えるの全部？」

「だから助っ人にウチがおんねんや」

「でその袋の中身は？」

「ドローパンや」

「見積もって25はあります、はい

「合計60個：まあ超空腹だから今は」

俺達ならば出来る！

「行くぜ！2人共！」

「逝こか！」

「ああ！逝くぜ！十代！倭！」

「「「俺等^{ウチ}のターン！ドロー！」」」

それで今の現状、喬とアオイとアリスに見つかり質問攻めされている。

十代、倭は14個ずつ食った所でダウン。

凜は俺のデッキを見ながらデッキを考えながらメモ中。

アキト、リアは昔話で盛り上がっております

「はあ…何で俺がこんな目に…」

「「「京哉（様／お兄ちゃん）が悪い」」」

そんな理不尽な…

「はあ…」

誰か助けてくれゝ

オマケ

十代、倭、京哉が引いたパンと個数

京哉 15個（買った分は説教後に食ったb y本人）

黄金のタマゴパン 1

具無しパン 8

デイスティニーパン 1

激辛カレーパン 1

フォアグラパン 2

タマゴパン 2

本人談 具無しパンキツイ…納豆パンが引きたい！（一度も引けておりません）

十代 14個（食いきれねえ分は京哉に奢りだ！b y本人）

伊勢エビパン 2

タマゴパン 2

豆腐パン 4

カレーパン 3

メザシパン 3

本人談 黄金のタマゴパン食いて〜！

倭 14個（食いきれなかった分は京哉君にプレゼントや♪by本人）

納豆パン 14

本人談 納豆パン14個ってウチそんなギャグスキルいらんわ〜！

第二十二話 新しい奴が仲間入り（後書き）

京哉「新キャラじゃあまいか」

ラバーズランク06だ

京「何それ？」

何でもございません、それでは今後の発表です

京「わーわー」

ゆつくりなみのボイスをありがとう。えーオリ力は作らず出さない事にしてましたが…急遽変更しまして皆様からオリ力を募集、それを出すという方針に決まりました

京「いいのか？」

気にしたら負けです。では早速頂いた朱さんありがとうございます！

京「効果は上手くいけば強いな」

口調はこちらの独断とヘンケンにより決めさせてもらいますね

京「もし気に入らないのなら一言お願いします」

後モンスターなら精霊かどうか一言お付け下さい

京「以上か？」

以上です、それでは

葵「また次回」

京「葵姉久しぶりだ」

葵「だってコイツが出してくれないもん」

京「俺が頼んだからなでは皆またな」

葵「京ちゃんひど」

超番外編！デッキ公開！（前書き）

お待たせしました！今回は2名程デッキ紹介です！無い脳で頑張つてますのであり得んと思います！ではどうぞ！

超番外編！デッキ公開！

京「今回は10万アクセスを記念しまして！」

倭「ウチ等4人娘と！」

凜「京哉君で！」

喬「皆のデッキを」

涼「見せて行きましょう！」

京「デッキ解説として三沢大地をお呼びしました」

三沢「ど、どうも！出来る限り説明していくぞ」

倭「それじゃ最初は！」

凜「ボクのデッキで！」

喬「凜のデッキのコンセプトはデメリットを消す事」

涼「スキルドレインを絡ませてますね」

三「それじゃ見ていこう。モンスターからだ」

上級

バルバロス×3

バルバロスUr×3

下級

パンサーウォーリアー×3

不屈闘士レイレイ×3

ジエネティクワールフ×3

神機王ウル×3

カードガンナー×1

計19枚

京「すげえパワーデツキだな」

三「うむ、これにスキルドレイン…まさにパワーになるな」

京「なんと言つても俺が渡したバルバロスU「が使われてるから嬉しいな」

凜「そりゃあ京哉君がくれたんだもん、使わなきゃ」

三「…次は魔法を見ていこう」

サイクロン×1

ハリケーン×1

大嵐×1

野生開放×3

抹殺の使徒×1

封印の黄金櫃×1

死者転生×2

ライトニングボルテックス×2

次元融合×1

強欲な壺×1

計12枚

三「成る程な、バルバロスU「は墓地のを除外しても召喚出来るから手札をコストにするカードと次元融合を使つて展開か」

凜「そんな感じだね」

京「トレードインは入れないんだな」

凜「バルバロスを良く使うから入れて無いんだ」

三「じゃあ次は罫を見ていこう」

聖なるバリアミラーフォース×1

サンダーブレイク×3

スキルドレイン×3

血の代償×1

リビングデッドの呼び声×1

砂塵の大竜巻×3

計12枚

京「サンダーブレイク入れてるな」

三「まあ万能的除去カードには代わりないからな」

凜「少しモンスターの比率が低いのが悩みなんだ」

京「確かにほかの割合が高い」

三「事故率は？」

凜「結構高いよ、罨が手札に来るとか…」

三「後砂塵か…」

凜「サイクロンの代わりになるからね、入れてるんだ」

京「それでは総計枚数です」

モンスター 19枚

魔法 12枚

罨 12枚

京「凜、足して何枚だ？」

凜「ええ！？ボクに振るの！？」

涼「簡単ですよ、凜さん」

倭「頑張れー凜ちゃん」

喬「頑張つて、凜」

凜「ううゝ…ええつと…12+12で…23?じゃない…24!それ
れに19だから…ええつと…43!」
京「良くできました!」

ナデナデ

凜「エヘ…」

「「羨ましい…」」

京「んじゃ次は…「ウチが良い!」了解、次は倭だな」
倭「ウチのデッキはコレや!」

モンスター

混沌帝龍×3

京「待て待て待て待て!」

倭「どうしたん?」

京「そんなカード入ってなかっただろうが!」

倭「後から入れてん」

京「入れんな!没収!」

倭「ああ!ウチの混沌帝龍が!」

京「ちゃんとしなさい」

倭「しゃーないなあ…コレや!」

モンスター

上級

ファイヤーウィングペガサス×3
竜の騎士×3

下級

超熱血球児×3
プロミネンスドラゴン×3
UFOタートル×3
炎の精霊×3
憑依装着ヒータ×3

計21枚

210

京「ファイヤーウィングペガサスで…懐っ！」

倭「たまたまあったから入れてみたんや、でも基本はプロミネンスと球児やから出番無いんよ」

三「竜の騎士が入ってある理由は？」

倭「見ての通りウチのデッキはバーンが入っとるやろ？サイクロンとかの単体除去使われた時の伏兵みたいなやつやね」

三「成る程な…それじゃ次は魔法だな」

魔法

サイクロン×1
ハリケーン×1
レベル制限B地区×1
貪欲な壺×1

強欲な壺×1

バーニングブラッド×3

融合×3

計11枚

京「ゆ、融合！？使う要素あるのか？」

倭「後から見せるで、このデッキで最高のバーンモンスターやからな」

三「楽しみにしておこう京哉」

京「そうだな。バーンに近いのは良いが平和の使者は入れないのか？」

倭「考えてんけどあのオッサンは邪魔や、ロックかけれるけどウチのデッキは殴るからな。体制立てるまではええけどやっぱ邪魔やねん」

京「倭が言うなら反論はしないよ、次は畏だな」

畏

ラストバトル！×3

京「はいストップ」

倭「どうしたん京哉君？」

京「禁止を3枚も入れない」

倭「ええやん！純粹な殴りあいやで！」

京「ちゃんとやれ、やらなきゃ口聞かない」「すみません必ずきちんとしてます京哉さん」よろしい」

罨

火靈術 紅×3

重力の網グラビティバインド×1

聖なるバリアミラーフォース×1

自業自得×3

停戦協定×1

魔法の筒

計10枚

三「流石バーンだ」

倭「ちやうって三沢君、ビートや」

三「だがどうみてもバーンだ」

倭「ビートや」

三「バーンだ」

倭「ビートや」

三「ビー「バーンや」…」

倭「ハッ！まちごうた！」

京「とりあえず総計だ」

モンスター 21

魔法 11

罨 10

計42枚

京「ところで言ってた融合の使い道は？」

倭「それは本編で知るか」

京「何故？…って成る程、作者が書いててしんどくなっただか」

涼「みたいですわね…」

喬「だらないよ作者？」

京「所詮作者だな」

…ちくしよおおおおお！

ダッ

三「作者！？」

アアアアアアイ！

凜「まさか！」

キアアアアアアン！

倭「おおっ！」

フラアアアアアイ！

パリイイイイン！

京「さて、第1回デッサン発表。作者の無い脳を絞って考えたが満足して頂ければ有難い、それでは」

？「京哉、私の紹介はどのようになつてらっしゃいますの？」

京「お前の紹介は次話でな。次話登場何だから頑張れよ姫」

？「当然ですわ、それでは皆様ごきげんよう」

超番外編！デッキ公開！（後書き）

次回も新しい精霊です！

朱さんの提供です！最後だけですみません！口調はこんな感じです
がどうでしょう？次話には登場させます！

第二十三話 狂喜とはまさにこの事（前書き）

こやつも修正バージョンです

第二十三話 狂喜とはまさにこの事

「いいいいいいつやつほおおおおおう！」

今俺は猛烈に感動、いやそれ以上のもう表現出来ない程嬉しい！

「ど、どうしたんだよ京哉！」

「きよ、京哉君が狂ったツス！」

誰も…誰もこの喜びを理解出来ない！

「だ、大丈夫京哉君！？」

「何か拾い食いして当たったんか！？」

本当に…この喜びだけは！

「京哉…」

「京哉さん…」

「なんて嬉しいんだ…なんて感謝すべき瞬間なんだ…」

ちなみに場所はレッド寮の食堂、いつものメンバーである

「一体どうしたんだよ京哉！」

「これを見てくれ…」

そう言つて十代に渡したのは一通の手紙…今日授業後の話だ

「手紙…ですか？」

「そうだにや」。送り主は秘密だにや」そう言つて大徳寺先生は俺に手紙を渡し教員室に戻つて行つた

「誰だろ…親か？」

封筒を破り中身の手紙を読んだ…

「…嘘…だろ？」

手紙の内容はこうだった

京哉へ

久しぶりだな。まさか俺達が生きてたなんて思わなかっただろ？今書いている俺ですら奇跡だったと思うよ。今俺達はインダストリアルイリユージョン社ことI2社で働いている。会長であるペガサスさんが俺達を助けてくれたんだ。いやゝ海に投身して死んだと思っただがなあ…俺生きてて良かったよ。それじゃな、葵と共に今度遊びに行くからな。

追伸 一緒に入っているカードは新作で葵と一緒に作ったものだ、コイツ等は精霊だからしつかり使ってやってくれよ

そして2枚のカードが入っていた、名前は

戦姫 イザナミ

混沌術士フェリエル・エントリオ

と書かれていた。まあダツシュで寮に戻ったよ、勿論海兄の筆記確認に。そして全部一致…

「生きてた…海兄と葵姉が…生きてた…」

気付けば俺は皆が居た食堂に

「iiiiiiiiityyffooooooo！」

と狂喜しながら入っていた

「良かったじゃねーか京哉！」

「ホントツス！」

「びっくりやねーホント！」

「今度ボク達に紹介してね？」

「会うの楽しみだね京哉」

「会ってみたいです」

ホント良い友を持った…ありがとうな皆…

「それでそのカードってどんな能力だよ！？」

十代、わくわくするのは判るが…

「残念ながら今は見せられないんだな」

「ええー何でだよ」

「デッキに投入済みだからなーわざわざサイレントデッキを分けた
かいがあつたよ」

（すまん二人とも）

（仕方ありませんよ、慕っていた方からの贈り物を最大限に使いま
すからね）

（我々は主が勝てるならば分けようと全力を尽くすまで）
感謝するよ二人とも…

（唯一の氣に入らない所はあの娘が一緒の所ですね）

（私も氣に入らないけどお兄ちゃんの為だからね）

またか…いい加減仲良くしてくれよ…

（出来ませんね）

（出来ないよ）

…ハア…

「辛そうやな京哉君」

小声で倭が言ってきた

「ホント助けてくれよ…」

「でも見てて楽しいやん♪」

止めてくれ…

「それより明日の授業楽しみですね」

ん？明日何かあったか？

「タツグデュエルだね〜ボク楽しみだよ」

タツグデュエル、ねえ…

「羨ましいッス…楽しめるなんて…僕なんか足を引っ張るだけッス…」

「そう落ち込むなよ翔」

「そうだよ、翔」

「何やったら今からタツグデュエルしとく？」

「良いですね！」

「分け方どうしよう？」

人数が奇数だなあ…

「三沢でも呼ぶか。呼べば偶数だしな」

とりあえず男の割合を上げるよう

「待たせたね」

連絡して15分後に三沢が到着した

「それじゃコレを皆で引こ…」

そう喬は言って箱を出した

「これは？」

「三沢君が来るまでボク達を作ったんだよ」

「簡単なクジやね」

「同じ番号を引いた方がタツグの相方という訳です」

「成る程、それじゃ引こうか」

順番は十代↓凜↓翔↓三沢↓涼↓倭↓喬↓俺の順で引いた。そして

組まれたタッグは…

十代&涼

喬&凜

三沢&倭

俺&翔

…となつた

「それじゃ相手を決めようよ」再びクジを戻しシャッフル（という名で箱をただ横に振る）して代表1人が取る。結果…

三沢&倭VS十代&涼

俺&翔VS喬&凜

となり更にトーナメント形式にすると倭が言い出した為一回戦は三沢チームVS十代チームとなつた

「それじゃ始めよう！」

凜が開始宣言をしたいと言い出し宣言した

「あれ？京哉君どこ行くんスか？」

「デツキを忘れてたから取りにな」

「わかつたツス、頑張れゝアニキいゝ！」

翔は応援を始めた

「さて、出てきていいぜ二人とも」

そう言うのと二人の精霊が現れた。イザナミとフェリエル・エントリオだ

「全く…私^{わたくし}を待たせるなんて…有り得ませんわ…」

「そう言うな、京哉殿も友人との会話は大事なのだからな」

「それはそうですが…」

「すまないな二人とも。とりあえず名前は…」

「イザナミで結構ですわ」

「私は京哉殿の決めた名前で構わない」

それなら…

「イザナミはそのままだから姫と呼ばせて貰うよ」

「別に構いませんわ」

「フェリエルは…フェルでいいか？」

「構わない」

それじゃ

「よろしくな二人とも」

明日はとりあえず…

「姫、初陣よろしくな」

「全て私にお任せ頂きますわ」とりあえずカイトと組ませるか…そう思い俺はカイトのデッキを手に取りデュエルディスクにデッキをはめた

表に出てみると中盤だった

「十代チームは個々のデッキで三沢チームは属性を統一してきたか…」

とりあえず観戦といきますか、明日が楽しみだぜ

凜ちゃんの開始宣言で始まったんや。とりあえず先にルール解説や

それぞれ1ターン目は攻撃宣言出来ない

どちらかの場が空いている場合空いているプレイヤーにダイレクト
アタックが出来る

ライフポイントは8000である

プレイヤーは相手の伏せカードやモンスターカードの効果を使用が
出来る

こんな感じや

「それじゃデュエル開始！」

「」「」「デュエル！」」「」

第二十三話 狂喜とはまさにこの事（後書き）

しんどいです…

京「なら修正するな」

いや、体調の方な

京「そつちか」

第二十四話 奪われたデッキ。怒りの京哉（前書き）

お待たせしました！

文化祭で忙しくて更新出来ませんでした！

次話は早く書けるように頑張ります！

装備魔法を修正しました！

第二十四話 奪われたデッキ。怒りの京哉

「ふわあゝ」

あゝよく寝た。やっぱ授業は寝るもんだな

「クロノス先生が凄い目付きで見てたで」

知るか、んなもん無視だ

「京哉よく寝るね」

「俺から授業の睡眠を取ったら授業を真面目に受ける変な俺しか残らねえよ」

「それで良いんじゃないんですか？」

「涼ちゃん駄目だよ…真面目に受けるのは」
受けるのが当然だぞ

「それよりタッグデュエル楽しみだな！」

「元気だな十代は」

「デュエルとかになると元気になるッスから…」
それもそうだな。そして…

「勝者、丸藤翔&遊城十代ナノーネ！」

十代と翔が組み勝利した。つーかアイツ等侵入禁止の廃寮なんかに入ってたんだな。そのペナルティで相手は懐かしいなあ…迷宮兄弟。遊戯と一緒に叩いたつけ…デュエリストキングダムで。その話はまた次回な

「今日の授業はこれまでナノーネ」

よーやく終わったなゝ

「京哉指名されなかったね」

「珍しい事もあるねんなあ」

「たまたまだって、それじゃな」

「うん、バイバイ」

「また明日お会いしましょう」

俺は4人と別れて寮に向かった

夜、俺は十代達の部屋で会話していた

「それじゃ十代、俺はもう戻るな」

「珍しいな、もう寝るのか？」

「デッキの調整してからな、んじやおやすみ3人共」

「おう、おやすみ京哉！」

「おやすみツス」

「おやすみ〜」さて、明日の為に調整つと

「…ようやく戻ったね、サイレントマジシャン。待っていてね…ぐふふ…」

「こんな物かな、後はフェルの問題か」

「闇の魔法使いが京哉殿は少ないですな」

うゝむ…やっぱブレイカー1枚と見習いじゃ發揮しにくいな

「サモンブリストとか投入…いや、駄目だ」

「エンデュミオン殿はどうでしょうか？」

「エンデュミオンか…検討してみるよ。とりあえず光で固めとい
て…まずはこれで良いか、もう少し待っててくれフェル」

「わかりました、それではおやすみなさい京哉殿」

「ああ、おやすみ」

俺は机の上にアオイ達のデッキを置いた。この時朝にあんな事件が起ころうとは思ってもよらなかった

そして朝…

「なあああああいいいいいいいい！」

何処にもない！何故だ！何処いった！

「な、何だ今の！？」

「朝っぱらからうるさいぞ！」

「どうしたんスカ京哉君！」

「無い無い無いナイナイナイ…なあああああいいいい！」

「な、何が無いんだなあ！？」

「サイレントマジシャンが…デッキごと盗られた…」

「…「な、何いいいいいいいい！」」「」」

「結局見つかったん？」

「いや、無かったんだ…誰が京哉のデッキを…」

「窓が無理矢理開けられてたよ」

「最低な方ですね」

「…はああ…」

「京哉…」

どこいった…アオイ…アリス…

「幸い今日は授業が無い、皆で探そう」

「本来は俺は喜ぶべきだが本気の京哉を潰さないといけないからな、この万丈目サンダーも手伝ってやる」

「私も手伝うわ」

「皆…」

「ボク達も忘れないでね」

「うん…」

「ウチも探したるさかい元気だし」

「私も探します」

「ありがとう…借り作っちゃったな」

「気にすんなって」

俺達はひたすら探し回った、が…

「見つからない…」

くっそ…全く見当たらねえ…

「十代、どうだった？」

「すまねえ、見当たらない」

「こつちもだ」

「ボクの方も駄目…」

校門に十代、翔、三沢、明日香、万丈目、凜、喬、倭とは合流した

「くそっ…一体何処に…」京哉さん！」涼？」

涼が走って来た

「ハア…ハア…み、見つけました！…い、今デュエルに…使われて

…」

「何iiiiiiiiい！何処だ涼！？」

「こつちに…」案内頼む！」ってキヤアアアアア！」

「お、おい京哉！」

Side 涼

い、いきなりお姫様だっこされてダッシュされました…京哉さん大

胆です…うう恥ずかしい…

「何処だ!？」

「こ、こちらの先の岩場に…」「了解だ!うおおおおお!」キヤアアアアア!

心配なのは判りますが私を忘れずにいいいいい!

S i d e 京哉

到着!すると下から声がした

「サイレントマジシャンでダイレクトアタック!サイレントバーニング!」

「うわあああ!」

見るとレッドの制服を着た生徒がブルー男子に敗北した

「き、君が何で京哉君のカードを…」

「これはあのドロップアウトが譲ってくれたんだよ。俺はもうこいつ等是要らないって、ぷきゃきゃ」

あんのクソ豚野郎!

「それより君のそのカード貰っていくな」

「か、返してくれよ!京哉君がくれた大事なカードなんだよ!」

「やゝだねゝ、京哉君の部屋はいつぱいカードあるからまた貰いなよ。僕ちん次は十代君のヒーロー貰うからさ」

…駄目だ…怒りが…

「京哉さん、落ち着いて下さい!冷静になりましょう、冷静に!」

「…C o o lにあの豚を殺してくる」

「京哉さん!」

大丈夫…二度と俺のデッキを触らせない様にするだけだ

「おい貴様」

「あ、コレは京哉君。サイレントマジシャンありがとう！あとブリザードプリンセスもね。ぷきゃきゃ」

「貴様か、俺のデッキを奪った奴は」「奪った？失礼だね、僕たちは君から貰ったんだよ」

「貴様…」

「そつだ、君の残りのデッキ頂戴。今夜取りに行くからさ」
ふざけてやがるな…

「…良いだろう「ヤッター！」ただし俺とデュエルして勝てたらな」
もうこいつはデュエリストとして見ない

「君が僕に？無理無理！今の君は切札が無いんだよ？」

「関係無い、さつさと構えろ」

「仕方ないなあ」

二人とも、俺の怒りに力貸してくれ

『勿論です主』

『あの下賤な輩を私が切り捨てますわ』

「「デュエル！」」

Side 涼

は、始まってしまいました…

「おおーい涼ー！」

「皆様こちらです！」

十代さん達に連絡しておきました

「アイツは3年の物部じゃないか！？」

「知ってるのか三沢！？」

「ああ…ブルー男子の中じゃ最低レベルのデュエルをするんだ。アイツの家は万丈目程じゃないが金持ちでアイツはデュエルに負けそ

うになったらアカデミアを辞めさせるという脅しをするんだ」

「最低やん！」

「ここからはイエローの先輩に聞いた話だがアイツに勝ったデュエリストはカード、デッキを紛失して辞めていったらしい。そして彼は辞めた奴のデッキを“貰った”という口実にデュエルに使用している」

「じゃあアレは…」

「京哉のデッキ…」

「セコいッス！」

「あんなのがデュエリストの端くれなどこの万丈目サンダーが認めん！」

「止めにいきましょう！」

「ああ！行こうぜ！」

「はい！」

私達は京哉さんのもとに向かった

S i d e 京哉

「僕からいくよ、ドロー！」

手札は最高だ…どう料理してやろうか

「僕はフィールド魔法シャインスパークを発動、シャインエンジェルを攻撃表示で召喚してターン終了だ！」

シャインエンジェル 攻1400 ↓ 1900

屑が…そのデッキを使うのは1万年と2千年早い！

「俺のターンドロー」

姫、出番だ

「戦姫―イザナミを召喚！」

『私が全て切り捨てますわ!』

戦姫―イザナミ 攻1900↓2400

「すごい!ぐふふ美人。僕それも貰おう」

『き、気持悪いですわ…』

「さつさと叩く!装備魔法神剣・イザナギをイザナミに装備する!」

イザナミ 攻2400↓2900

「バトルだ!イザナミで攻撃!神剣切り!(ゴッドスラッシュ)」

「いたゝい、イザナミちゃんのを僕は受け取ったよ!」

『…京哉、さつさと片付けましょう』

わかっている

「神剣・イザナミと戦姫―イザナミの効果発動!最初に戦姫の効果、戦闘破壊したモンスターのレベル×200攻撃力が上がる!更にイザナギの効果、破壊したモンスターのレベル×200のダメージを相手に与える!シャインエンジェルはレベル4だ!」

イザナミ 攻2900↓3700

物部LP4000↓2700

「良いなあそんなに強くて可愛いカード持ってて、シャインエンジェルの効果で僕はサイレントマジシャンLV4を特殊召喚するよ」

サイレントマジシャンLV4 攻1000↓1500

「カードを2枚伏せてターン終了だ」

「京哉!」

十代達か…

「あ、十代君だ。このデュエル勝ったら君のデッキ貰うからね」

「誰がお前」誰がお前ごときに大切なカードをやるか！」京哉……」

「俺のデッキを奪った罪、そして他の奴から奪った罪を俺は許さん！」

「五月蠅いなあ、僕ちゃんのターンドロー、ぷぷぷ…来た来た。僕はレベルアップを発動、サイレントマジシャンをLV8にするよ」

サイレントマジシャンLV8 攻3500 ↓ 4000

「……」

（京哉様……）

「伏せカード発動、和睦の使者」

「ちえ…まあいいつか。更に魔法カード二重召喚発動、魔導戦士ブレイカー召喚して生け贄にブリザードプリンセスを召喚するよ」

ブリザードプリンセス 攻2800

（お兄ちゃん…）

二人とも、そんな顔するな

「出すタイミングを失敗したな」

「いいんだよ、僕ちゃんは永続魔法平和の使者を発動してターン終了、コレで君のカードは全て僕ちゃんの物」

「京哉君……」

「俺のターン」

来たな…カイト

『我が剣であの外道を叩きましょう』

「ドロー！」

「京哉君の勝ちやな」

「ええ！？」

「何故なの？」

「切札引いたね…」

「あの顔はそうですね」

「羨ましい…何故奴にはこんなに良い女性が付きまとう！」

「万丈目…お前の気持ちは判る」

「三沢君居たんだ」

アイツ等の会話はスルーしよう

「俺は強欲な壺を発動、カードを2枚ドロ。イザナミを生け贄にサイレントソードマンLV5を召喚」

サイレントソードマンLV5 攻2300

「えっ！何で!？」

「待つて、まだするよ」

「手札から使者蘇生を発動、蘇れ！戦姫―イザナミ！」

『これで生け贄の分のお咎めは無しですわ』

イザナミ 攻2400

「甘いねえ、僕ちんの場合は3500の“僕ちん”お嫁兼切札と2800の“僕ちん”お姫様が居るんだよ？」

「手札からレベルアップ！を発動！サイレントソードマンをレベルアップ！」

頼むぜ、カイト！

『御意!』

サイレントソードマンLV7 攻2800

「それでも2800だよ？」

「コイツはありとあらゆる魔法を無効にする！バトルだ！イザナミでサイレントマジシャンに攻撃！」

「そんな事したらイザナミが！」
「自爆？面白く「ダメージ計算時手札からオネスト発動！」な…！」

イザナミ 攻2400↓5900

（すまないアオイ…）

（いえ…京哉様の為なら苦しくはありません…）

（ありがとう…ちゃんと助けるからな）（はい！お待ちしてます）

俺達は目会話をしアオイは姫の一閃により斬られた

「うわああああああ！僕ちんの…僕ちんのお嫁が…」

「他人のカードを嫁扱いは気持ち悪いわ…」

物部LP2700↓300

「イザナミの効果でサイレントマジシャンLV8のレベル分攻撃力がアップ」

イザナミ 攻5900↓7500

「サイレントマジシャンの攻撃力を足して7500だから…え…つと…」

「1600上がったんだよ凜」

「計算簡単なんですけど…」

「うみゅ…」

…スルーしよう

「よくも僕の嫁を…許さないぞ…！」

「サイレントソードマンでブリザードプリンスに攻撃！」

『はあっ！』

（二人ともすまない！）

（主の勝利は判りきってますので大丈夫です）

（ありがとうお兄ちゃん、デュエルでは使ってね）

カイトはモーニングスターをくらいアリスは沈黙の剣により斬られ
2体が消滅した

「相手のフィールドはから空きだ！」

「ど、どうせ終わりだろう！さっさとエンド宣言しろ！」

「何勘違いしてやがる」

「むひっ？」

「俺のバトルフェイズは終了してないぜ！」

「何い！？お前のモンスターは攻撃し終わったじゃないか！」

「…ああ成る程」×9

「伏せカード発動！リビングデッドの呼び声！俺が墓地から呼ぶの
はサイレントソードマンLV5！」

サイレントソードマンLV5 攻2300

「ひっ！」

「サイレントソードマン！あの最低豚野郎に攻撃！沈黙切り（サイ
レントスラッシュ）」

「ぴぎゃー！」

物部LP300↓0

「そんなあ…僕ちんの…嫁とお姫様が…」

「いつまで私物化してやがる、さっさと返しな」

「嫌だ！これは僕ちんのだ！」

「今更何言ってんだよ！それは京哉のдар！」

「違う僕ちんのだ！僕ちんが立花の部屋に入って貰った物なんだ！」

「侵入しとる時点で犯罪やないか…」

倭は呆れていた…まあそうだろうな

「いいからさつさと返しな」

問答無用でデッキとレッドの男子に上げたカードを取る

「ほら、君は確か木原利光君だったな」

「あ、ありがとうございます！」

「それじゃ帰ろうか。迷惑かけた」

「全くだ！次からは盗られるなよ！」

皆ぞろぞろと帰って行くが…

「うわあああああ！」

あのクソ豚野郎が俺目掛け突進してきた

「…！」

腹に一発蹴り入れると

「ごふあ！」

豚野郎は飛ばされて海に落ちた

「……………」×10

「さて帰ろう」

各々が帰るまで終始無言だった

翌日…

「何だ？両方から妙な圧迫感が…」

右腕にアオイ、左腕にアリスがくっついて寝ていた…

「…ぐっすりかよ…」

まあいいや、まだ時間は早い。俺も寝よう…

そして遅刻したのは言うまでもない

第二十四話 奪われたデッキ。怒りの京哉（後書き）

はあ… 攻撃名、コンボ共にセンスなさ…

こんな小説ですが見て頂き感謝感激です！

次は早く書けるように頑張ります！

第二十五話 未だに残ってるドロパン（前書き）

お待たせしました…忙しくてかなわないなあ…明日からテスト1週間前だし…また遅れると思いますのでご了承下さい
それではどうぞ！

第二十五話 未だに残ってるドローパン

「…今ここで言いたい事が一言ある」

「なんでしようか？」

「何故こいつがあるんだあああああ！」

今日の前には17個のドローパン

「クールになるんだ俺、そうCoolに」

「この間食べ切ったはずでは？」

そう、アオイの言うとおり。自分の分は食い切った…ん？自分の分は食い切った…自分の分…自分…Σ（。□。；）

「十代達か！！」

「呼んだか京哉？」

「良いところに！十代、お前こないだ何個ドローパン食った！？」

「え？14個だけど…」

「お前が買った個数は！？」

「20個だぜ！」

「いやいやいやいや！」

「お前6個食って無いじゃん！」

「6個は俺の奢りだよ」「まてまてまてえい！買ったんなら責任持つて食えよ！」

「えゝいいじゃねえかゝ。倭だつて食って無かったんだし」

「アイツが居たな！やああああまとおおお！」

女子寮までBダッシュ！ダッシュ中にメールにて呼び出し！完璧！

さあ着いた、さあ着いたよ

「あ、京哉君。ようやくウチの気持ちに気付いてくれてんな」

「お前こないだ何個ドローパン食った？」

「へ？14個やけど…」

「それで何個買った？」

「25個や」

「残りの11個食べよ！」

「それは…京哉君にプレゼントや」

「いやいや！買った分くらい責任持つて食べよ！」

「食い切れへんかってんよ…」

「だからってなあ…」

「ん〜じゃあウチとデュエルして！京哉君が勝ったらウチがドロ―パン食うわ。負けたら食ってな〜ウチを」

「ドロ―パンは了承するがお前は食わない。今からでいいか？」

「京哉君酷いわ…明日でええか？今日はちょい用事があってな」

「仕方ない…わかったよ」

俺は渋々了承した。変な形となったがお前とのデュエルは楽しむぜ倭

S i d e 倭

ようやく既成事実を突きつけれるチャンスやわ〜

「覚悟しいや京哉君…5人には悪いけどウチが嫁になる瞬間やで」
明日勝つのが楽しみやわ」

S i d e 京哉

レッド寮に戻ると荷物が届いていた。今回は海兄からでは無く葵姉からだ

「カードの補充と新デッキのモニターねえ…葵姉いつも通りで良か

った」

葵姉は新デッキを作ったらず必ず最初に俺が使わされていた

「まあ本人が来たら来たで困るが…どれ、デッキ見るか」

「すげえ変わってるなあ…このデッキ。まあ見る限り面白そうだ

「明日コイツを使うか」

「お、そろそろ晩ご飯だな。今日はエビフライじゃないか！

次の日

「それでーわ！デュエルを始めるノーネ！」

まさか授業で対戦するとは思わなかったよ…

「はようやるか京哉君」

「そうだな、楽しむとするか！」

「デュエル！」

「ウチからや、ドロー！」

やる気満々だったなあ倭は

「フィールド魔法バーニングブラッド発動！UFOタートル召喚し
カード2枚伏せてターン終了や」

UFOタートル 攻1400 ↓ 1900

「俺のターンドロー！」

ふむ…悪くはないが…

「俺は魔法カードおろかな埋葬を発動、暗黒のマンティコアを墓地
に送りカードを1枚伏せてターン終了時に墓地に送ったマンティコ
アの効果発動！手札又は自分フィールドの獣、獣戦士、鳥獣族のい
ずれかを墓地に送りこのカードを蘇生する！」

送るカードはコイツだ

「俺は幻獣クロスウィングを墓地に送りマンティコアを蘇生する！」
暗黒のマンティコア 攻2300 ↓ 2800

S i d e 倭

幻獣：聞いた事無いカードや

「ウチのターンドロー！」

お、来たで！でももうちょい待とか

「ウチはUFOタートルを守備に変更してプロミネンスドラゴンを
守備表示で召喚してターン終了時プロミネンスドラゴンの効果で相
手ライフに500のダメージを与える」

U F Oタートル 攻↓守1000 ↓ 600

プロミネンスドラゴン 守1000 ↓ 600

京哉LP4000 ↓ 3500

どう来る京哉君、ウチの布石は揃つとるで？

S i d e 京哉

最初のダメージは仕方ないか
「俺のターンドロー」

クロスウィングがまた来たな

「手札から天使の施しを発動！3枚ドロして2枚捨てる」

引いたのはロッキザード、クロスウィング、ワイルドホーンか。
クロスウィング2枚を捨てるか

「俺は幻獣ワイルドホーンを召喚！」

幻獣ワイルドホーン 攻1700↓2600

「攻撃力2600！？」

「幻獣クロスウィングの効果は墓地にある時「幻獣」と名の付くモンスターは攻撃力を300Pアップさせる。俺は墓地に3枚、よって900P上がっているんだ」

「はあ、便利やな」

「まあな、んじゃバトルと行くか！ワイルドホーンでプロミネンスドラゴンに攻撃！」

うゝむ：外見はケンタウロスみたいだな

「貫通持ちだから気をつけろよ！」

「ええ！？うわっ！」

倭LP4000↓2000

おなじみの罵声の大群、さあ無視だ無視

「うゝ先に言つといてゝな」

「わりいな。マンティコアでUFOタートルに攻撃！」

「UFOタートルの効果でUFOタートルを召喚や！」

「ターン終了だ」

「ウチのターン！」

S i d e 喬

「京哉スゲー！」

「一体いくつデッキ持ってるんスかね？」

「気にしたら駄目だよ翔君」

翔の言うとおりだけど…あの幻獣は面白いね

「このあと出所を京哉さんに聞いてみましょう」

「そうだね」

倭はあのカードがあるし…まだ逆転出来る

S i d e 倭

「ドロー！」

ウチが引いたカードは強欲な壺…そして手札には融合、場にはU F O 亀。強欲はまだ温存やな…やけど打撃は与えとくで！

「手札から融合発動！手札のプロミネンスドラゴンと場のU F O タートルを融合！」

S i d e 京哉

何い！

「素材から…いや、条件はアブソリュートに似てる！」

「そうや、そしてウチの切札！起爆獣ヴァルカノン！」

起爆獣ヴァルカノン 攻2300

「コレが…倭の切札！面白え！」

「ヴァルカノンの効果発動！このカードの融合召喚に成功した時相手モンスターを選択してこのカードと一緒に破壊して墓地に送る！そして墓地に送られた相手モンスターの攻撃力分相手ライフに与える！ウチは…」

どっちに来る！

「暗黒のマンティコアを選択！融爆！」

ヴァルカノンがマンティコアの正面に接近し爆発した

「ぐうううう！」

京哉LP3500↓700

「ウチはカードを伏せてターン終了や」

面白い、面白いぜ倭！

「ここから逆転劇と行こうか！俺のターン！」

「マンティコアは戻さへんの？」

「ああ！ドロー！」

死者蘇生か…まだ使うべき所じゃ無い

「俺は幻獣サンダーペガサスを守備表示で召喚。バトル！ワイルドホーンでダイレクトアタック！」

伏せは何だ！？

「伏せカード発動！聖なるバリアミラーフォース！」

ちっ！やっぱ止めになんねえか

「カードを1枚伏せターン終了」

幻獣サンダーペガサス 守備2000

「ウチのターンや、ドロー」

Side 倭

気い良く引いたのはええけど…どう打開しよう

「守備2000は堅い方やな」

とりあえずこれや

「ウチは炎の精霊を召喚や」

炎の精霊 攻1000↓600

「頼むでフレイ」

『私に任せなさい』

ウチの精霊や、行くで！

「炎の精霊でダイレクトアタック！」

『行くよー！』

「くっ！」フレイが火の粉を京哉君に撒き散らした

京哉LP700↓100

「炎の精霊は相手にダイレクトアタックが出来てダイレクトアタックが成功する度に攻撃力が1000P上がるねん。ターン終了」
うおおおおお！と親衛隊の人等が雄叫びを上げとる。うるさくてかなわんわ

炎の精霊 攻600↓1600

「残りライフ100…俺がここで逆転カード引いたら楽しいよな」
あの目：ウチが大好きな目や。あの目になったら必ず引いてくるのが京哉君や

「例え引いても今回は必ずウチが勝つで！」

「悪いが負けねえよ！ドロー！」

S i d e 京哉

「ドロー！」引かせて貰ったぜ！

「手札から死者蘇生を発動！墓地のワイルドホーンを蘇生する！更にサンダーペガサスを守備表示で召喚！」

倭が見せた切札、次は俺だ！

「このデッキの切札、見せてやる！場には3体の幻獣、よって手札から幻獣神バハムートを特殊召喚！」

幻獣神バハムート 攻3000 ↓ 3900

現れた幻獣は威圧があり気高かった

「コレが…京哉君の切札…」

「行くぜ倭！バハムートで炎の精霊に攻撃！神の爆裂弾！」
ゴッドバースト

「きゃあああああ！」

倭LP2000 ↓ 0

「ナイスデュエルだったぜ倭！」

俺は拳を前に出しそう言々と大歓声が起こった。十代のガツチャミ
たいに今度からもこれ使おう

「あゝあ…17個も食べなあかんのか」

「まあまあボク達も食べるからさ」

「そうだよ倭」

「私ドローパン初めてですから楽しみです」

倭はいつもの3人を呼んで食べたそうだ

おまけ

凜 4個

激辛カレーパン 2

カレーパン 1

キムチパン 1

「ううゝボク辛いの駄目なんだよゝ」

涼 4個

アンパンマン 4

「凄いです！袋を開けたらアンパンが喋ったんです！」

喬 4個

フォアグラパン 1

キャビアパン 1

具無しパン 1

黄金のタマゴパン 1

「京哉のご飯の方が美味しかった。また食べたいなあ」

倭 5個

納豆パン 5個

「もう納豆パン嫌やあああああ！」

第二十五話 未だに残ってるドロパン（後書き）

今回は幻獣を登場させました！神崎さんどうでしたか？次の所持者は葵になりますが…

次は番外編を入れてようやく三幻魔に突入です

番外編　ボクの恋心は彼の優しさから（前書き）

書きたくなつた…難しい

自分なりに頑張つて書いたので結構微妙です…なんか申し訳ありません

番外編　ボクの恋心は彼の優しさから

「弱っちいな赤坂は」

「成績も悪いしそんなので良く中等部にいるよな」

「アカデミア辞めちまえよ、雑魚」

やめて…やめてよ！

「あゝあ、さつさとやめねえかなあ」

嫌…嫌…

「貴女みたいな人が同じブルーなんて吐き気がするわ」

「レッドに負けるもんな、あんなパワーデッキ使っておいてさ」

やめて…もう聞きたくないよ…！

「助けて…誰か…助けて…京哉君…！」

「り…ん…りん…凜！」

「はっ！」

ボクが起きると教室だった…寝てたみたい

「凜大丈夫か？」

隣には京哉君が座っていてボクを心配そうに見ていた

「あ、うん…大丈夫だよ」

心配かけちゃ駄目だ…笑顔笑顔

「うなされていたみたいけど…」

「ちよつと怖い夢見ていただけだから大丈夫だよ。それじゃボクも
う行くから…」

「わかった。だけど何かあったら俺に言ってくれ」

「うん、ありがとう京哉君」

ボクは購買の方へ向かって行った

ボクは購買で少し考えていた。リア達のデッキを考えているからだ
「装備中心にしようかな…」

「どんなのでもリンが作るなら大丈夫だってアタシは信じてるから」
「任せてね」

とりあえずカウンターでデッキ考えよう

「あ、あれRRRの赤坂凜ちゃんじゃねえか」

「本当だ。ねえねえ凜ちゃん」

ブルーの男子が3人ボクに絡んできた。多分2年生2人と1年生…

しかもボクの事を知ってる人だ

「なんででしょうか？」

「暇かい？暇なら俺達とデートしようぜ」

ナンパだねこれ…

「すみませんがやる事があるので」

「いいじゃねえかよ」デートしようよ…お、これ凜ちゃんのデッキ
？」

一人の2年生がボクのデッキを取り上げた

「返して下さい」

「いいじゃねえか、戦士デッキか」

最低…人のデッキを取り上げた挙げ句に見るなんて

「俺達もデッキ制作手伝うからデートしようよ」

デッキを持つて無い2年生がボクの肩を掴んだ

「お断りします。早く返して下さい」

「凜ちゃんがOKしてくれるなら返すよ」

「鳥島さん、デュエルで決めましょ。アイツ弱いんで勝てますよ」

後ろに控えていた1年生がデッキを持つている人…鳥島にそう囁いた

「良いなそれ。デュエルで俺達が勝ったらデートしよう！」

しまった…今日実技が無いからバルバロスの方は置いてきている

「今日は完成していないそのデッキしか無いのでお断りします」

ボクはデッキを取り上げた

「それでは失礼します」

ボクが帰ろうと荷物を持ち購買から出ようとした時
「待てよ、せっかく島ヶ谷さんと鳥島さんが誘ってるのに断るのかよ」

2年生に助言していた1年生がボクの腕を掴んだ

「離して、帰りたいの」

「いいからデュエル受けるよ!」

「嫌、ボクは帰る」

「さっさと受けるよ!」

「あうっ!」

1年生はボクを突き飛ばした。勿論地面に倒れる。周りに人が数人来たけど皆中等部の人だった。購買のセイコさんやトメさんは居ない
「なんだ赤坂か、じゃ助けなくていいか」

やめて…そんな事言わないで
「そのままやらねえかなあ」

嫌…嫌…

「ほら、デート行こうよ」

島ヶ谷がボクの腕を掴んだ

「嫌っ!」

ボクは強く振り切ると

「この…良いから来い!」

島ヶ谷が強く掴んだ

「嫌!やめて!」

助けて…誰か…

「さっさと来い!」

誰も助けてくれない…

「助けて…誰か…」

今ボクから出る言葉は

「助けて…京哉君…!」

先程別れた人の名前…多分来ないのはわかっていた
「い、いでででで！」

急にボクを掴んでいた手が離れた

「お、お前…立花！」

そう…ボクを助けてくれたのは京哉君だった

S i d e 京哉

全く…購買の方が騒がしいと思って来てみたらコレか

「は、離せよ」

「断る、凜が嫌がったのに離さなかっただろう？」

俺は更に握ると

「いぎやい！」

もはや悲鳴にもならない声を上げた。この辺りでやめてやろう

「か、帰るぞ！」

3人は逃げるように帰って行った

「大丈夫か凜？」

「うん…大丈夫だよ」

俺は凜の手を取り起こした

「何でこんな事をされたんだ？」

「それは…今ここじゃ…」

「んじゃ移動しよう、こつちだ」

「え？ちよ、ちよっと京哉君？」

俺は凜の手を掴み港の方に行った

S i d e 凜

ボクは京哉君に引つ張られる形で港に着いた

「さて、話して貰っていいか？凜がいじめられる理由を」

「…うん…」

ボクはデュエルがとても弱かった。筆記も中の下、デッキの構成なんか全然分からず誰も教えてくれなかった。両親は学校の事を全く気にしてくれずそれが中等部の2年くらいまで続いた

そして中等部の2年の冬にボクは我慢の限界で両親に泣きついた。今まで無関心だった両親は真剣に聞いてくれて父は知り合いにデッキを作って貰うように依頼、そして出来たデッキは魔導サイエンティストとカタパルトタートルを利用したデッキだった。ボクは中部で着々と勝利を重ねていった…けどそれが気に入らない生徒達がボクのデッキを奪ってボクの目の前で燃やした…それが中等部3年の最後の月。何故だろうか…何故ボクは嫌われるんだろう…そして高等部に入る前にボクはスキルドレインのデッキを完成させた…その時に出会ったのが倭ちゃんと言った。二人ともとてもボクに優しくしてくれて悩みも打ち明ける事が出来た。なら二人がずっと友達に居るって言うてくれて…とっても嬉しかった…一緒に居たら昔の事なんか忘れれた…

「けど出来なかった…ボクを良く知ってる人がいつも侮辱してきて…この間の学校対抗も…」

京哉君は黙ってそして優しくボクを見てくれていた

「京哉君…教えて…ボクはどうしたら良いの…？」

「…悪く、俺には分からない」

…やっぱり…か…

「けど…言える事は一つある」

「…え？」

京哉君はボクに指を指して言った

「自分を貫け、これだけだな。周りから何を言われようが自分を貫くんだ」

「…自分を貫く…」

この言葉…ボクは素直に嬉しかった

「例え負けても自分は精一杯やった、ならそれで満足するんだ。そして精一杯やったの結果は誇りを持つべきなんだ」

そうだね…そうなんだ

「ありがとう京哉君」

「どういたしまして」

ボクのお礼に京哉君は笑顔で返してくれた…京哉君の優しさ…

ボクの恋心は君の優しさから始まったんだよ、京哉君

番外編　ボクの恋心は彼の優しさから（後書き）

凜「作者あああああ！」

ハッハッハ！

凜「逃げてるんじゃないよ！」

だって怖いもん！

凜「こんなの書くからだよ！うりゃ！」

ちよい！ナイフ投げんなよ！ちよっ！それ不味いつて！

凜「ザ・ワールド！」

うぐっ！

凜「タンクローリーだあああああ！」

どがばきやずしゃどかーん！

凜「そして時は動く」

いぎやあああああああああああああああ！

凜「…ふう…はっ！」

京哉「こ、この状況は…？」

凜「どうしよう…京哉君に見られた…」

京「また作者だな！？怪我は無いか凜！？」

凜「あ…うん！大丈夫だよ！」

ち…違う…俺は被害者だ…

京「まだ生きてたかこの迷惑作者！RXキイイイイック！」

ぎやあああああああああ！誰が…判…るんだ…そのネタ…

京「安心しろ、十代と翔と利光には見せたから判る」

いや…読…者のはな…し…ガクッ

京「ふっ…かっこいいいな…南光太郎こと倉田てつをは」

凜「京哉君…今度ボクにも見せてね」

京「ああ！けどBlackから見た方が良くからBlackを先に貸すよ」

凜「ありがとう！それじゃ今から取りに行こ！」

確にかっこいいよな…

京「まだ生きてるか！リボルゲイン！」

ぎゃああああああああ！次は…ようやく…セブン…スター

…ズ…編…ドーン！（作者が爆発した音）

京「ふう…こんな作者だが許してくれ皆、それじゃまた本編で」

第二十六話 セブンスターズ！しかしメンバーが3人多かった上に何故が大食

早く更新出来て嬉しいです！

今回は以前現れた木原利光君がかなりキャラが変わってます。その説明はあとがきにて、ではどうぞ！

第二十六話 セブンスターズ！しかしメンバーが3人多かった上に何故が大食

「平和だなあ……」

授業も終わり帰ろうとした時

「ア、アニキ……！」

利光が俺に向かって走って来た

「……なあ利光、アニキは止めろって言ってるだろ？」

「いや、止めねえッス！アニキは俺のデッキを強くしてくれた上にくれたレアカードを取り戻してくれた！俺の心から尊敬するアニキだ！」

はあ……俺はたまたま落ち込んでいた利光を見て相談に乗りデッキ強化しただけなんだがなあ

「それよりアニキ！マスター鯨島が呼んでますぜ！」

俺はヤクザか何かの頭領か

「マスターって……まあいいや。とりあえず行こう」

「へい！」

だから俺はヤクザか！

「校長先生失礼します」俺が入ると十代、三沢、明日香、万丈目、

クロノス、凜、倭、喬、涼が居た

「遅いノーネ！」

「すみません……それで校長、話とは？」

「はい……皆さんにコレを守って頂きたいのです」

そう言つて小さな箱を取り出して俺達に見せた。中には金色の……なんだろ？とりあえずパズルのピースみたいなのがアツた。ちなみにパズルと言つてもあのパズルじゃないぞ、良くある木で出来た奴だ。あれなんて言うんだろ

「校長先生、これは？」

俺が無駄な説明をしていると十代が鮫島校長に聞いていた

「これはこの島にある三幻魔と呼ばれるカードの封印を解く鍵です」

「さ、三幻魔あ！？」

俺は思わず声を上げてしまった

「京哉君知っているんですか？」

皆が注目した、正直言いますと知ってますはい、むしろ全部持ってます

「い、いえ…聞いた事はあるだけで…その…知り合いがI2社に入っていて危険カード欄に入っていました」

嘘です、葵姉からさいきょーカードだから京ちゃんに使いこなせるかなかな、なんて手紙に書いてましたはい

「そうなのです、このカードはとても危険なカードでしたのでこの島に封印しましたが…このカードを狙う敵が現れました」

「それはいったい誰なんです？」

三沢が聞いている

「彼等は正体は判らないのですが…セブンスターズと名乗っています」

セブンスターズ…？事は7人か…ん？

「校長先生、此方は人数が随分多いのですが…」

相手が7人に対して此方は10人

「そこですが…凜君と涼君と倭君と喬君中で1人選んで頂き1つ鍵を守って頂きたい」

うわ…なんという押し付け。でも誰が…

「私がやります」

喬が拳手して言った。良くやるな…立候補なんて

「3人は良いのですか？」

「私達敵には4人で守りたいのですが向こうは1人なので流石に4対1は行えません。喬ちゃんを信じて私達もデュエルをみます」

倭がそう答えた。う…む…良いこと言うじゃないか

「それじゃ決定だな！必ず守るぜ！」

十代が取り…

「十代だけには任せられないからな。この万丈目サンダーが守りきるう！」

万丈目が取り…

「三幻魔の復活はさせない！」

三沢が取り…

「必ず守ってみせます」

明日香が取り…

「うむむ…仕方ないノーネ」

クロノスが取り…

「皆の思いに答えます」

喬が取り…

「三幻魔云々はともかく外道デュエリストは叩きのめしますよ」
最後の1つを俺が取った

「それでは皆さん、頼みます。ああそれと京哉君」

「なんででしょうか？」

「もう少し話があるので残っていただけれますか？」

話？なんだろ？

「わかりました」

「それじゃ俺達は先に行くぜ京哉」

「ああ」

十代達は全員帰って行った

「鮫島校長、話とは？」

「君がサイバードラゴンを持っている確認だが…山本海度君のデッキですね」海兄を知っているのか

「そうです、何かあったらコレを使えと言われましたから…」

鮫島校長は何か考えていた

「ふむ…わかりました、海度君から連絡があり近日中にアカデミアに来るとありましたからその報告も兼ねて呼び止めました」

マジか！？海兄が！

「わかりました、あとコチラから1つお話が…」

「なんでしよう？」

俺は葵姉からの三幻魔について話した。もっとも俺のが大丈夫って話だけだが

「わかりました、まあ君はカードを大事にするので悪事は働かない
と思っていますので」

「ありがとうございます、それでは失礼します」

さっさと帰って新デッキ作成しよつと

「…でなんで俺の部屋に居る5人共」

「俺はアニキをこの女達から守るためッス！」

「とっしー酷いわ」

「ホントだね、ボク等京哉君のご飯を食べに来ただけなのに」

「利光それじゃ嫌われるよ？」

「京哉さんご飯お願いします」

…とりあえず部屋が狭いわ！

「部屋が狭いので喧嘩なら外でやってくれ」

相手にしてられん…

「アニキは渡せねえ！」

「そやつたら京哉君賭けてデュエルや！」

「いいぜ！そつちは誰が相手になるんだ？」

「涼ちゃんや！」

「…え？私？」

コイツ俺の飯が食いたくて涼を指名しやがったな

「よし！決まったから表出る！デュエルだ！」

「京哉さん…」

意気揚々と利光は出ていったが涼は俺をうるうるした目で見ていた

…そんな目するなよ…

「とりあえず頑張れ涼」

するとパアツとなつて

「頑張ります！」

と元気に言つた…アイツだけおかず増やすか

「さてと、今日の料理は何にすつかなあ」

俺は自室の冷蔵庫を漁り始める

「多分部屋に冷蔵庫持ち込んでいるの京哉だけだよ…」

「喬ちゃんそれ言っちゃったら駄目だよ…」

「先に3人は食堂に行つててくれ」

「…はい…」

…多分アイツ等の事だ、レッド寮の醜い執念を持った男子が来るだろうな

S i d e 利光

相手は如月、デッキ内容は全く知らない。だけどどんなデッキでもこのアニキが組んでくれたデッキには敵わねえぜ！

「それじゃやろうぜ！」

「楽しませてもらいますね」

「デュエル！」

「俺から行くぜ！ドロー！」

この手札なら勝てるぜ！

「仮面竜を守備表示で召喚！カードを2枚伏せてターン終了だ！」

仮面竜 守1100

「私のターン、ドロー」

さあ来い来い！

「私は死者への手向けを発動、手札を1枚捨て仮面竜を破壊します」
…へ？それじゃ効果出ないじゃないかよ！

「更に私は大嵐を破壊します」

お、俺の竜の逆鱗と炸裂装甲が…

「私は手札から死者蘇生を発動します。墓地に捨てたダイタロスを特殊召喚します」

ダ、ダイタロス…厄介じゃねえか！

海竜―ダイタロス 攻2600 ↓2600

「更にディープダイバーを召喚」

ディープダイバー 攻1000

攻撃されても400…まだ持つ「フィールド魔法アトランティス発動、水属性モンスターは攻守が200あがりレベルが1つ下がります」…へ？っ…事は…

ダイタロス 攻2600 ↓2800

ディープダイバー 攻1000 ↓1200

「…\（+×+）／」

「2体でダイレクトアタックです」

利光LP4000 ↓0

「良いデュエルでした、またしましょうね」

S i d e 京哉

さて、作るの決定だ。行くか

「あん？利光が真つ白だ」

まあだいたい予想は出来るな。1キルされたようだな

「アニキ…すまねえ！負けちまったぁ！」

俺が食堂の入り口に着いたとたんにダツシュで利光が俺のもとに来てジャンピング土下座してきた…痛そう

「まあ…ドンマイ、手札はどうだった」

そう言っていると見せてきた

「威嚇する咆哮あつたじゃねえか」

「今更使えば良かったと後悔してるツス…」

「あんな攻め方をする奴が他にも居るんだ、次のデュエルからはコレを教訓に頑張れよ」

「ウツス！アニキ！」

そろそろ飯作らないとな

「それじゃトシも食おうぜ」

「と、トシ…ありがてえツス！アニキい！」

泣くなよ…そんなに嬉しかったのか？

「作るから待つてくれよ」

「ウツス！」

俺は引戸を開けると

「遅えよ京哉！」

「早く作つて下さいツス！」

「楽しみなんだなあ」

「ご相伴に預かるわね京哉」

「この万丈目サンダー様が食いに来てやってるんだ、不味いの作っ

たら承知しないからな！」

「そう言えば俺は久しぶりに食うな、今回も楽しみにしているよ」

「京哉君はよ作って〜な〜」

「ボクも限界だよ〜」

「大変なら私手伝うよ京哉」

「私もです京哉さん」

「私も頂くにや〜」

『京哉君ゴチッス！』

… やっぱり… 早いとこ作るか

おまけ

「京哉さんこれは？」

俺は涼の前に春巻が3つ入った皿を置いた。ちなみに今晚は中華料理だ

「トシとのデュエルしたお疲れさまって意味合いも含めての特製春巻さ」「ありがとうございます京哉さん」

笑顔でお礼を言ってくれた

「京哉！俺には！？」

「無いよ十代」

「何でだよ〜！」

我慢しろよ、それ以前に美味しいの食ってるだろ

「あ〜！なんで京哉君スペシャル春巻食べとるんや！ウチにも分けて！」

「うるせえ！これはアニキからのお疲れさまって意味合いも含めてた春巻だ！てめえにやるか！」

「なら力づくでも奪ったる！」

「こいやあ！」

「喧嘩するなら皿洗いと料理没収な」

「すみませんでしたあ！」

全く…こいつ等は…

「京哉君！おかずおかわりッス」

「こつちも頼む」

「あいよお！」

「手伝うよ京哉」

「すまないな喬」

まだまだ材料はあるんだ、作るぞー！

追加で鮫島校長とトメさんとセイコさんが途中で乱入（原因は大徳寺先生）したため更に仕事が増えてしまった。代わりに明日全体的に休みになったから構わないけどね

第二十六話 セブンスターズ！しかしメンバーが3人多かった上に何故が大食

京「それじゃ教えてもらおうかな」

良いでしょう、京哉はロリコンであり、小さな娘を見ると発情して

4人娘「……マジで!?」……」

京「ちがーう！砕ける作者あ！爆砕点穴！」

ぐうはあ！漢字が違う気が……

京「うるせえ！それよりさっさとトシが変わった理由を答えろ！」
ちえっ……わかったよ

京哉のデュエルを見る↓すげえと思う↓目標にする↓あの時のデュエルと蹴りを見る↓かつこいと思う↓まずは気弱な気持ちを克服するためモデルを探す↓たまたま持ってたミ○ミの○王を見た↓こんな感じに京哉君の子分になりたい↓なりきりにくく落ち込む↓京哉に声をかけられる↓チャンスと思いデッキで悩んでいると相談する↓相談終了後にアニキと呼ばせてくれとセガール↓今に至る

京「……いろいろツツコミ所満載なんだが……」

気にするな

京「それで次は？」

実はアクセス数が20万を超えた為に超番外編に入る！

京「おせえ！すまない読者の皆、こんなメンバーで」

それより4人が真っ赤になって京哉を見てるぞ

京「お前等気にするな、コイツの」

倭「京哉君さいてーや」

凜「まさか幼児体型に興味があつたなんて」

喬「気持ち悪いよ京哉」

涼「もう犯罪者ですね」

京「……………」ダッ

あ、京哉が泣きながら逃げた。嘘だったのに

4人娘「……」嘘お！ま、待って……！……！

京哉さまあwというわけで次回は超番外編です！皆様20万もアク
セスありがとうございました！

おまけ2

京「……………」グスッ

倭「あ、開けて……な」

凜「ボク等が悪かったよ」

喬「ごめん京哉……」

涼「すみません、本当にすみません！」

京哉は部屋に入り鍵をかけベッドに潜り込みひたすら泣いたとさ

祝！20万アクセス！（前書き）

タイトル通りです！本当にありがとうございます！

祝！20万アクセス！

すっげえ！皆様には感謝感激の65乗です！

京哉「こんな駄文に20万も御覧になりありがとうございます！」

今回は京哉とトークショウと逝かせてもらいます！

京「つまらないが許して下さい」

今回は京哉君のプロフィールだ！前回書いたのですがちよーてきとーにしてみましたのね！

京「胸を張って言っなよ…」

それではイキマショー！

名前 立花京哉

年齢 15歳

身長 173？

体重 70？

好きな物 親友 家族と呼べる存在 家事

嫌いな物 他人を貶す奴 外道な奴

基本デッキ サイマジ中心魔法使い サイソ中心光戦士 ミスソ中

心戦士 気分で作るデッキ多々 葵が考えたデッキ

容姿 A - (ももえ基準。4人娘と葵からはAランク)

性格 他人には優しいが押し切りや同情にやや弱い

趣味 基本的にはオタク(葵と4人娘曰く現実と2次との区別がつ

くため別に構わないとの事)

説明

主人公、基本的な高校の勉強は馬鹿だがカードの事になると頭がフル回転するレッドには居なかったタイプ。自分の事でミスするなどおちよこちよいな所がある。また家事のレベルが高く一般料理のフルコースを作る事から家の建築までなどありとあらゆる才を発揮す

る（カイザー曰く無駄無い才能だ）。また格闘技を3つ（空手柔道テコンドー）に剣術、さらに弓や銃にナイフ投げなども習得しており家事にいろいろ使用している（剣術は最近でカイト曰く物覚えが早いので有難いです」

京「え？何これ？なんてチート（人間的な意味で）」

ちなみにC Vは中村悠一だ

京「お前の趣味止めい！」

もちろん嘘だ

京「…まあいい、つか格闘技なんざ何に使うんだよ…」

んゝ氣にくわない奴を蹴るとき？

京「完全に俺が犯罪者じゃねえか！」

レイに氣に入られるのだから犯罪者決定だ！

京「このクソ作者ああああああああああああああああああ

ああ！」

ぎやああああああ！

作者はかめはめ波により1000のダメージを受けた

やるじゃ「コレがスーパー京哉のビッグバンアタックだ！」グギヤ
アアアアアアアア！

スーパー京哉のビッグバンアタックにより作者は10万のダメージを受けた

ま、まだま「りゅうううううううけえええええええええん！」

———！
↑もはや声にならない叫び

スーパー京哉の龍拳により作者は15万のダメージを受けた。作者は死んでしまった

パーティーが全滅した

京「すっかりしたぜ！それじゃ次は超番外編です。俺が遊戯を知ってるかが書かれます。ご期待下さい」

それじゃ皆！番外「復活したのか！ビッグバンかめはめ波あああああー！」

この後に作者の行方を知っている者は居ない

祝！20万アクセス！（後書き）

超皆に感激！これからもお願いします！ご感想もお待ちしておりますの
でじゃんじゃんお願いします！

超番外編！決闘者王国！（前書き）

えゝ事前に言いますが決闘者王国に關しての年は独自の設定を施してます。実は京哉達と遊戯の歳の差があまりはつきりしていませんので今更ながら遊戯と京哉達の差は3年という設定にしています。今更ながら申し訳ありません

それでは超手抜き超番外編をどうぞ！

…ちなみに今回ののは20万越記念として本編にも触れるように書きました

超番外編！決闘者王国！

「京哉君手紙が来てるにや」

「ありがとうございます」

只今とある休日のレッド寮、まあお馴染みメンバーだな。手紙はまた葵姉辺りかな

「凄い人知り合いなんて京哉君凄いにや」

「誰からだよ京哉？」

「まてまて十代…差出人は…あ、遊戲からじゃん」

『な、何にいいいいいい！』

うるせえー！鼓膜破れるかと思っただぞ！

「何で京哉君が決闘王武藤遊戲さんから手紙が来るんスか！？」

「しかもさつき遊戲つて名前呼び捨てしたやんな！？」

「答える京哉！何故武藤遊戲から手紙が来た！」

いや、いきなりだから何故って言われても俺は知らないっての
「それより手紙は何て書いてあるの？」

あつ凜っ！てめえ！取り上げるな！

『ふむふむ…』

そして皆して見るんじゃない！

「すっげー！遊戲さんに家に招待されるなんて羨ましいぜ！」

「京哉さん、遊戲さんの写真をお土産としてお願いします！」

「ア、アニキ俺もお願いしやす！」

「じゃあウチはサインを！」

「ボクも！」

「貴様！この万丈目サンダーにもサインをよこせ！」

だから嫌なんだよ…知られるの

「ところで京哉は何で遊戲さんを？」

喬の質問に皆俺に視線を向けた

「はあ…仕方ない、話すよ。アレは中学1年の春休みの時」

「決闘者王国？」

俺は春休みに葵姉と海兄と遊戯王で話していると葵姉から決闘者王国の話が出てきた

「うん、この間全国大会でデュエルモンスターの産みの親であるペガススさんから貰ったものなんだ」

「お前が2年になってからなんだが俺は仕事があつて葵は大学で行けないんだ」

「でも俺はそんなに強く無いし…」

「大丈夫だよ！京ちゃん私たちに勝てるんだから！」

「俺もこの間負けた時にはビックリしたよ」

「だから、行つておいで京ちゃん」

「俺達の代わりにさ」

その時俺はしぶしぶ受け出発の日に2人とも見送つてくれた。そして船が出、夜に俺は甲板で月を見ていたら

「城之内君！」

つて声が聞こえたから見ると1人海に落ちていた。海に落ちたカードを拾つていたようだ。

「これは助けないと！」俺は縄でくくつてある浮き輪を落ちていた人に向けて投げた

「これに捕まってくれ！」

「ありがてえ！」

その人は浮き輪に捕まり俺は引き上げた

「城之内！大丈夫か？」

引き上げたときに2人の男性と女性が走ってきた。2人の友達つてのはわかった

「すまねえ遊戯、これしか回収出来なかった」

「ううん、ありがとう。君も城之内君を助けてくれてありがとう」

「いやいや、困っていたらお互い様だよ。え〜っと…」

「あつ僕は武藤遊戯、よろしくね」

「俺は城之内克也だ！助けてくれてありがとうな！」

「俺は本田ヒロト、城之内を救ってくれてサンキュー」

「私は真崎杏子、ホントにありがとう」

「俺は立花京哉、京哉で良いよ」

こうして俺達は友達になった。その後島に着き俺と遊戯達は別々で行動した

「コレでスターチップ7個かぁ」

俺は順調にスターチップを集めて行っていた。その時たまたま洞窟の方に行くとき遊戯達が入ってくのを見えたんだ

「遊戯達じゃないか、行ってみよ」

俺は遊戯の後を追って行った

「遊戯！」

ようやく追いついたよ。なかなかアイツ等足が早かったなあ

「京哉君！どうしてここに？」

「遊戯達が入って行くのが見えてさ…城之内、なんでここでデュエルしてたんだ？」

見ると気味の悪いフィールドが展開したままだった

「ああ、1人で用を足したらここに拉致されてよ。ゴースト骨塚って奴に挑まれたんだが…なんとか勝てたぜ」

最初は城之内に負けるとか弱っ！とか思ったな

「城之内も無事だったし戻ろうぜ」

本田の1言で道に戻ったけど

「あぁっ！」

道が塞がれてしまった

「この野郎！開ける！」

俺の蹴りで開けたが崩れそうだったから言わなかったけど

「卑怯だな…城之内に負けたからって閉じ込めるとはな」

怒りものだったなアレは

「洞窟を進もう、それしか無いよ」

うゝむ…遊戯なかなか冷静だったな…まあいいや

ひたすら俺達は進んだ。途中城之内が骨とか見てびびってたけど

「出口だ！」

光が差すのが見え俺達は走って行った。そして着いたのがデュエルリングだった

「待っていたぞ！」

「この先に進みたくば！」

「我等を倒して見せよ！」

迷宮兄弟と出会った

「…んでデュエルした結果俺が出した沼地の魔獣王とデーモンの召喚を融合させてブラックデーモンズドラゴンを融合召喚しシフトチェンジを利用して勝ったってわけだ」

ん？デュエルの描写が無い？申し訳無い…作者がその辺りを記憶して居なくて書けなかったんだ、このカス野郎！（皆様申し訳ありません！by作者）

「かゝすげえぜ京哉！」

「遊戯さんと知り合いだけじゃなく一緒にデュエルまでするなんて羨ましいッス！」

「流石アニキッス！惚れるッス！」

「しかも7個集めるなんて普通に凄いやん…」

「京哉君桁外れだよ…」

「強さの秘訣教えて京哉？」

「あつ！私もお願いします京哉さん！」

「いや秘訣って…んゝああ、あつた

「自分のデッキを愛し信じる事、必ず逆転出来ると信じカードを引く事かなあ」

まあ嘘では無い。俺も負けてはいるものの1度たりともカードを…

皆を見捨てた事は無いからな

「なあなあ！その後は！？」

「その後は俺はスターチップを揃えれずに終了したけどペガサス会長は葵姉をゲストとして呼んだから代わりに俺もゲストとして遊戯の勝利を見届けたさ」

決闘者王国話の後にバトルシティの話になり勿論話した。上位まで上がったものの遊戯に負けたからと言ったらまた騒がしくなりやがった。すると…

R R R R R…

「京哉、携帯鳴ってるよ」

ホントだ、俺のだったのか

「はいもしも『遅いぞ京哉あ！俺が掛けて来たのならさっさと出る！』だあー！いきなり怒鳴るなよ海馬あ！」

『何にいいいいいい！』

しまった！やつちまった…

「京哉海馬さんと電話してるのか！？」

「しかもまた呼び捨てッス…」

「凄いッスアニキ！俺アニキに着いていきやす！」

「ウチに代わってーな！」

「それならボクも！」

「私もお願い京哉」

「私も話をさせて下さい！」

「貴様あ！今までどれだけ伝説のデュエリストと話して来た！俺様と代われ！」

『外野が五月蠅ぞ京哉！』

誰のせいだと思ってるんだよ！

『まあいい、冬休みに入ったら海馬コーポレーションに來い！冬休みの間なら貴様を雇用してやる、わかったな！』

「はいはいわかったよ海馬、んじゃ冬休みにな」

ピッ

…なんだこのオーラは！十代とトシと翔以外から邪氣が！？

「……」「海馬さんと話させるー！」「……」

ぎゃあああああ！

俺が気付いた時はベッドの上だった…あゝ死ぬかと思った

超番外編！決闘者王国！（後書き）

どうでしょうか？独自過ぎて書いててえ？こんなのだっけみたいな感じになってるかもしれないませんが許して下さい

次は本編を書いていきます。オリ力や意見共々お待ちしております

第二十七話 吸血鬼のくせに血を吸わずに人形にするとか有りか？（前書き）

テストで書けずすみませんでした、これから早目早目に書けるように努力します！

第二十七話 吸血鬼のくせに血を吸わずに人形にするとか有りか？

食事会の次の日の夜、十代はセブンスターズの1人、ダークネスと戦って勝利したもののダメージが仇となり動けなくなっていた

「しかも正体は明日香の兄貴だったなんてな」

俺は翔達から話を聞いていた。え？昨晩俺は何をしていたかつて？
…寮のベッドでアオイとアリスの両サイドからの圧迫イジメによって脱出出来なかったよ…アイツ等寝ながら抱きついて動かせないとか絶対俺をイジメてるだろ！（注意！京哉は鈍感ですby作者）

「十代に見舞いに行つて来るよ」

「そうして欲しいッス」

「十代も喜ぶんだな」

俺は保健室に向かった

「すまない十代、行けなくてな」

「大丈夫だつて」

十代にはとりあえずデッキ調整をしていたと言っておいた…だってイジメられてるなんて言ったらコイツは何を言うか…アイツ等は家族だから親友には悪く言われたくないんだ（注意！京哉は鈍感です！by作者…大事な事なので2回言いました）

「あの人が天上院吹雪か？」

「ああ、明日香の兄さんでもある人さ」

「何故ダークネスに…」

「わからない…」

うーん…謎だ…セブンスターズにしてもそうだし…闇のデュエル…だったな…遊戯とかのを見ていたから存在はわかってたけど実際にあるなんてな

「で体調はどうよ十代」

「おいおい、今頃聞くのかよ」

「まあ外傷は大丈夫そうだな」

「2、3日はかかるって言われてさ」「そうか…俺も気をつけないとな」

「そうだ京哉、コレを受け取ってくれよ」

そういつて渡してきたのは十代が首から下げているやつの逆三角形のタイプだ

「コレは？」

「精霊界の墓守りの長から渡してくれって言われたんだ」

へえ…どういったものなんだコレは

「主京哉、それは魂の試練。ある条件で試練が発生する精霊界のアイテムです」

「カイト、何故そんなのが俺に？」

「私は聞いた事があります。確か渡す条件は主は精霊を、精霊は主を信頼し愛する者に与えられる物です…」

「アオイ…？何故辛そうな顔を？」

「そりゃそうだが旦那、試練はランダムで最悪なやつは“アレ”だからな」

最悪な…やつ？

「アキト、それはなんだ？」

「ごめんねお兄ちゃん、それは言えないんだ」

「言えない試練…？」

「試練が終わる前に主に言ってしまった場合私達が封印されるからですよ京哉殿」

「え？そうだったの！？」

つて姫、知らなかったのかよ！？

「姫まさか…」

「知らなかったわけではありませんわ！その…私は忘れてただけで

すわ！」

…そうッスか…にしても試練…ねえ

「ま、どんな試練だろうが俺達なら乗り切れるからな」

「全く、その自信はどこから来るのだ？」

「まあまあぜ口殿、京哉殿は私達を大事にしていたいただきましたよ、そしてこれからもしていただけますと私は信じていますよ」

「ありがとフェル」

「にしても京哉はたくさん精霊持つてるんだな」まあ…確かに多い、レッド寮の部屋に入っているのが奇跡だけだな

「そろそろ戻るか、しつかり治せよ十代」

「ああ！」

俺は自分の部屋に戻った

「サイレントマジシャンでダイレクトアタック」

「だああああ！また負けたああああ！」

俺はトシと模擬デュエルをしていた。ちなみにコレで6回目である
「アニキ強すぎッス…」

「トシ、お前は戦略が素直過ぎるんだ。高攻撃力を利用出来ずにいるんだ」

まあ簡単に言えばトシは上級を即召喚するのはいいが除去カードを使わずに突っ込み返り討ちにあうパターンが多い

「しかし罫系除去カードがサイクロンだけなのが問題だ」

ドラゴンならスタンピングクラッシュは必要だ

「サイクロン以外俺持って無いんスよ」

…いやむしろサイクロン持つてる方が凄いやうな…

「とりあえずこのカードを」

俺はスタンピングクラッシュを3枚渡した

「ありがとッスアニキ！」

「そうだな…コイツも銭別といこう」

そして渡したカードは最強の融合ドラゴン、しかも2枚

「こ、こんなカードもらって良いんスカ!？」

「ああ、葵姉が枚数ミスでな」

しかしこのミスはミスと言えるのだろうか…奥底の方に眠っていた青眼の白龍を見たときおい!ってなったぞ。しかも手紙で

「海馬さんの許可は得たよ？」

って書かれてたし…っ！か海馬からどうやって許可を得たんだよ

「それじゃアニキ!もう1戦頼むツス！」

「良いぜ、回りのチエツクだ」

飯の時間まで俺達はデュエルをした

そして夜…巷で吸血鬼の噂が流れていたらしくマジで吸血鬼を自称する女が現れたらしい。しかもセブンスターズだ。俺は十代の所に行っていた

「十代、大丈夫なのか？」

「ああ、だから連れて行ってくれ」

「わかった」

十代が大丈夫ってなら大丈夫なんだろうが…とりあえずおぶっていか

「京哉君、僕も行くツス！」

「俺もなんだな」

「あれはクロノス先生！」

俺達が着いた頃に鍵を持っている皆はクロノス先生のデュエルを見ておりクロノス先生の古代の機械巨人がデカイヴァンパイアに破壊

された所だった

「クロノス先生の古代の機械巨人が…」

「シ、シニョール遊城十代、シニョール立花京哉…後は頼むノーネ！」

「クロノス先生！」

「これで終わりよ！ヴァンパイアロードでダイレクトアタック！」

「ペペロンチーノ！」

クロノス先生は敗北してしまった…

「闇のデュエルによりお前を人形に変える！」

「みぎや〜」

しかもクロノス先生が人形にされた！

「私の好みじゃ無いわね…知らないわ」

…我慢ならねえ！人を人形に変えた挙げ句に棄てやがって…！

「おいお前！」

「何よ…って貴方なかなかイケメンじゃない」

「明日！俺とデュエルしろ！」

クロノス先生、仇はとるぜ！

「良いわよ…明日、この時間に私の城で待つわ…ふふふ…」

吸血鬼女はそう言って城の方に消えて行った

翌日

「京哉…」

「喬か…どうした？」

喬が俺の部屋に来た。まあクロノス先生の仇討ちだからな、デッキ調整を授業をサボってまでやってたんだ、心配にはなるよな

「何か嫌な予感がする…京哉、どうしても今日やるの？」

…嫌な予感ねえ

「ああ、やるよ。宣戦布告までしたんだ、やらなきゃな」

それに闇のデュエル…とても気になるしな

「…そうだよ…勝って来てね」

「ああ」

俺は笑顔で答えた。正直勝てるかは判らないけどな

夜…俺達鍵の所有者に翔、倭、凜、涼にトシが城に来た

「来てやったぜ！クソ女！」

開口一番に叫んでやったぜ！

「ようこそ私の城に…」

「御託はいらねえからさっさと始めるぞ」

俺は女の向かい側の階に行った。叩きのめしてやる！

「それじゃ始めましょ」

「『デュエル！』」

第二十七話 吸血鬼のくせに血を吸わずに人形にするとか有りか？（後書き）

ようやく吸血鬼です

京「原作と違う部分があるのは作者が記憶していないのが原因です」
だってアイツのデッキのアンデットで記憶にあるの何回でも帰ってくるゾンビ犬くらいだもん。しかし効果は帰ってくる事しか覚えてない

京「ゴミ作者め！」

るせえ！次は超チートカード、幻魔の扉が登場するぞ！後これから日常で思った事を呟く作者の一言を入れていきますので

京「なにその小野Dの今週のまっがーれ」
ではいきます

京「いや無視かよ…」

エアーマンいつになったら3枚積めるのかなあ

京「無理だから諦めろ」
だよねえ…某熱血元テニスプレイヤーの励ましも無理だよ…それでは

第二十八話 外道に敗北して証を取られるくらいならこれくらいの卑怯はこな

タイトルを見てわかりますが…京哉は負けます！

京哉「まあ仕方ないな」

ん？自分の敗北なのに落ち着いてるな

京「なんかお前の考え読めた」

何い！じゃあこの後の展開言ってみろや！

京「ネタバレと読者さんに嫌われるけど構わないなら」やめて下さい
「懸命だな」

ちくせう…とりあえず本編をどうぞ！

第二十八話 外道に敗北して証を取られるくらいならこれくらいの卑怯はこな

京哉 LP4000

カミューラ LP4000

「私のターン、ドロー」

確かヴァンパイア軸のアンデットデッキだったな

「私はヴァンパイアレディを守備表示で召喚、カードを1枚伏せてターン終了」

ヴァンパイアレディ 守1550

「俺のターン、ドロー！」

にしても攻守1550は半端だな。あんまりリクルート出来ないし
…生け贄に繋がれるのは困るがいかんせんアタッカーが居ない

「俺はモンスターをセットしてカードを1枚伏せてターン終了だ」
とりあえずコイツで次にに繋ぐ！

「私のターン、ドロー」

さあ…どう出る

「私はゴ布林ゾンビを攻撃表示で召喚しヴァンパイアレディを攻撃表示にしてバトルよ！」

ゴ布林ゾンビ 攻1100

「ヴァンパイアレディでセットモンスターに攻撃！」

攻撃までは読み通り！

「セットモンスターは見習い魔術士！効果によりデッキからモンスターをセット状態で特殊召喚！」

「ならゴブリンゾンビで攻撃！」

「再び見習い魔術士！よって更にセット！」

「しつこいわねえ…ターン終了よ」

「俺のターン、ドロー！」

来たぜ！キーカード！

「セットモンスターを反転召喚、水晶の占い師。リバーズ効果はカードを2枚ドローしその内の1枚をデッキの1番下に戻す」

引いたのはアリスとマジシャンズサークル…

「俺はブリザードプリンセスを手札に加えマジシャンズサークルを戻し水晶の占い師を生け贄にブリザードプリンセスを攻撃表示で召喚！」

『お兄ちゃんを人形なんかにはさせないよ！』

アリスで一氣に叩かせて貰うぜ！

「ブリザードプリンセスの効果によりお前の伏せカードは使えない！更に手札から拡散する波動を発動！ライフ1000を支払いブリザードプリンセスは相手フィールドの全モンスターに攻撃する事が出来る！」

「なんですって！」

京哉 LP4000↓3000

まだまだだ！行くぜ！

「更に墓地の魔法使いを除外して混沌術士フェリエル・エントリオを召喚！」

『闇のデュエル…勝たせて貰うぞ』

混沌術士フェリエルエントリオ 攻1800

さて、行くか2人とも！

「ブリザードプリンセスでお前の全てのモンスターに攻撃！アイス

クラッシュハンマー！」

『せーの！でええええええい！』

「うわあああ！」

カミューラ LP4000 ↓ 1050

「拡散する波動の第2効果によりゴブリンゾンビの効果は無効！そしてこれで終りだ！フェリエルエントリオでダイレクトアタック！カオスバーン！」

『はあっ！』

これで終りだろ、クロノス先生の仇う

「甘いわねえ……」

ててねえ！バカな！

「何故だ！何故ライフが……」

「ふふふ……こんなこともあるうともこのカードを入れておいて正解ね」

そう言って見せたのは……

「クリボー……だと……」

手にあつたカードはクリボーだった

Side 喬

京哉の攻撃が防がれた……

「くっそ！惜しいッス！アニキ！」

「いつの間に京哉君対策を……」

「多分吸血鬼やから蝙蝠やな……」

「じゃあ京哉君の戦略はバレバレじゃないッスか！？」

「そういう事になりますね」

京哉…私は信じてるよ

「まだバレたからって京哉の負けじゃ無いぜ！」

「ふふふ…私のターン、ドロー」

カミューラは引いたカードを見て不敵に笑った

「手札から魔法カード闇の指名者を発動、私が貴方のデッキにあるモンスターを指名しある場合は手札に加える」

…どういう事だろう、普通に使えば相手が得をするカード…でも手札破壊があれば話は別…

「私が指名するのはサイレントマジシャンLV8」

「ちっ…俺はサイレントマジシャンLV8を加える」

「更に魔法カード手札抹殺を発動！互いの手札を墓地に送りその枚数分ドローする」

京哉は5枚、カミューラは2枚ドローした

「京哉のサイレントマジシャンが…」

「残念ねえ…これで終わりだなんて」

「どういう事だ！」

キーカードを引いたの…？

「私は幻魔の扉を発動！」

それは聞いた事の無いカードだった…

S i d e 京哉

幻魔の扉…？

「ふふふ…このカードを発動した時、自らの魂を代償に使うのよ…」
「だけど」

吸血鬼女は皆の方を見た

「あの女を身代わりにしたらどうなるのかしら」
まさか奴は！

「逃げる、喬！」

「えっ！きゃあああああ！」

くそっ！喬が捕まった！しかも喬を噛みやがって！

S i d e 喬

うつ…力が…あまり入らない…

「…「喬（ちゃん／さん／神谷君／神谷）！」「」」

「ふふふ…」

「貴様あああああ！」

京哉の怒りが感じる声…

「この娘のおかげで貴方は私に勝つことは出来ない…ふふふ…」
私のせいで…京哉が…負ける…

「ぐ…外道が…」

「外道で結構よ」

駄目…それだけは駄目！

「京哉！私に構わずに勝って！」

今の私にはこれしか言えない

「約束！私との約束果たして！」私はどうなってもいい…京哉だけは…

「く…喬…」

「お熱い言葉かけをどーも、幻魔の扉の効果は相手のフィールドのモンスターを全て破壊して相手の墓地から召喚条件を無視して私のフィールドに召喚する！」

そ…そんな…

「そんな効果無茶苦茶や！」

「このクソ吸血鬼女！アニキと正々堂々と戦いやがれ！」

「嫌よ、なんでそんなことしなくちゃならないのよ」

京哉…お願い…この人を倒して…

S i d e 京哉

『お兄ちゃん！きゃあああああ！』

『すまない…京哉…殿…』

アリスとフェルが幻魔の扉に吸い込まれた…

「どこまで道を外れれば気が済むんだ…！」

そして何故俺はこんなにも無力なんだ…！目の前で…守るべき仲間が困っているのに…何も出来ないなんて…

「すまない…2人とも…」

幻魔の扉を見ると中からアオイが…現れた

「私が召喚したのはサイレントマジシャンLV8よ！」

サイレントマジシャンLV8 攻3500

目が死んでいる…良かった…生きてたら俺が困ってたな…

「その為に闇の指名者を使ったのか…京哉！」

「京哉君！」

三沢…翔…

「京哉！伏せカードを使って！喬の思いを無駄にしてはいけないわ！」

「京哉！負けは認めんぞ！神谷君の思いを踏みにじるな！」

「喬ちゃんと別れるのは辛いけど…喬ちゃんとの約束を守って！」

「喬ちゃんは必ず帰ってくるってウチ等は信じとるから！」

「だから使って下さい！」

凜…倭…涼…

「アニキ！」

「京哉！」

トシ…十代…

「喬…皆がお前の気持ちを受け取ってるぜ」

「うん…だから京哉もお願い」

「終わりがしら？サイレントマジシャンでダイレクトアタック！サイレントバーニング！」

だから俺は…俺は！

「皆にバトンを渡す！」

この鍵を渡してたまるかぁ！

「トシい！」

俺は当たる直前に首からぶら下げている鍵を取りトシに投げる

「つとと！まさかアニキ！」

「十代…喬…トシ…皆！後は頼む！」

そして俺にサイレントバーニングは当たった

京哉 LP3000↓0

俺は膝を着いた。かなり…効くなこれは…

「「「「「京哉（君／さん／アニキ）！」「」「」「」

「貴方！ズルいわよ！鍵を他に託すなんて！」

「へっ…外道に…負けて…証を…取られるくらいなら…これくらいの卑怯は…こなしてみせる…さ」

「き、京…哉…？」

「わりいな喬…お前や皆を…守るために必死で…約束は…無理だった…」

目の前が薄れ始めた時、幻魔の扉から白い手が大量に出てきて俺を掴んだ

「京哉！駄目！」

そして俺は身体事扉の中に引きずりこまれた

S i d e 利光

ア、アニキが…負けた…

「京哉…京哉あ…」

神谷が泣いている…クソツ！

「おいクソ吸血鬼女あ！俺とデュエルしろ！」

「うっさいわねえ…私の人形も消えてしまったし…坊やで勘弁してあげるわ」

ぶつつぶしてやる！俺はアニキが居た場所に行く。するとアニキのデュエルデスクとレッドの上着があった。デッキケースもだ…

「アニキ…力を貸してくれ！」

俺はアニキのデッキをケースに仕舞い俺のデッキをはめ腕につけて構えた

「いくわよ」

「さっさとこいやあ！」

「「デュエル！」」

第二十八話 外道に敗北して証を取られるくらいならこれくらいの卑怯はこな

京哉が幻魔のドアに回収されましたので「京ちゃああああん！
うおっ！なんだなんだ！？

葵「京ちゃああああん！何処なのおおおおお！？」

あ、葵さんが暴走してる！エヴァに負けないぞありやあ！

海度「ありやあ京哉依存性の成れの果てだ」

…海度さんあの怖いです

海「だってアレが起こったら部屋中に京哉の写真貼らねえと落ち着かないんだよ」

………えゝ次は利光とカミューラのデュエルです。ちなみに京哉は次々話で詳しく語られます。それでは「京ちゃあああああああ
あああん！」ぎやあああああああああ！

海「とうとう轢かれてしまった。皆は気を付けてな、それじゃ」

第パソコンアクセスが！？話 8888とかすげえ！（前書き）

いきなりのアクセス数で焦ってしました為に作りました（笑）

なお多少ヤヴァイ事が入ってますのでお詫び申し上げます

第パソコンアクセスが！？話 8888とかすげえ！

今回は作者の気分的なもので書き上げました

まず最初にカオス様、せっかくいただきましたフェリエルエントリオを敗北という形で初陣にさせてしまい申し訳ありませんでした

それではいきます！ゾロ目記念だー！第1回作者の気分で書いてみたデュエルシリーズ！今回の被害者は決闘者王国で最初に遊戯に負けたゴミ野郎です！それではいきます！

「あれ？ここ何処なんだよ」

「ふふふ…ようこそ我が決闘館へ」

「お前何者なんだよ」

「高名のインセクター羽蛾様とお見受けしました、私とデュエルをお願い致します。勝利した暁にはこのレアカード達を差し上げます」
「ひよひよ〜マジでか！？じゃあデュエルだ！」

「「デュエル！」」

「俺のターンドロー！俺は代打バッターを召喚して殺虫剤を発動！代打バッターを破壊して代打バッターの効果でインセクトクイーンを召喚だ！ターン終了」

「私のターンドロー、攻撃力が書かれていないのはこのターンで終わりです」

「なんだとお！」

「手札から融合を発動、手札の3枚のブルーアイズを融合させてブ

ルーアイズアルティメットドラゴンを召喚、バトルです。アルティメットドラゴンでインセクトクイーンに攻撃、更に攻撃後に融合解除を使用してブルーアイズ3体召喚しましてダイレクトアタック、終わりです」

「お、俺の女王様あああああ！」

「それでは闇のゲームの罰として昆虫に欲情するようになってもらいます。それではさようなら」

床がバタン

「うわあああああ！」

終了…後日虫を相手にヤヴァイ事をしている羽蛾が道端で見られた
そうな
ちゃんちゃん

第パソコンアクセスが！？話 88888とかすげえ！（後書き）

京哉「おい作者」

な〜に〜

京「今気付いたんだがコレを投稿してる頃にはもう88888ではないのでは？」

ビックリした為に書いたの：今後この企画はやるようん

京「お前の小説だから俺は何も言わないがこれだけは言っておく、皆様アクセスありがとうございます」

ありがとうございます！今後ともよろしく願います！オリカ、感想共々お待ちしておりますのでしどしお願いします！

第二十九話 唸れ！アニキに譲られし魂！（前書き）

これも修正です

第二十九話 唸れ！アニキに譲られし魂！

利光 LP4000

カミューラ LP4000

「俺のターンだ！ドロー！」

アニキの仇討ちだ！

「仮面竜を守備表示で召喚！カードを2枚伏せてターン終了だ！」

仮面竜 守1100

「私のターン、ドロー。私はピラミッドタートルを攻撃表示で召喚！バトルよ！」

ピラミッドタートル 攻1200

亀に踏み潰されちまった！だが！

「仮面竜の効果発動だ！デッキから攻撃力1500以下のドラゴン族を特殊召喚する！俺はミンゲイドラゴンだ！」

ミンゲイドラゴン 守200

「ふうん…カードを3枚伏せてターン終了」

「俺のターンだ！」

ミンゲイまでには繋がった！そして手札にはアニキがくれたこのカード…

「俺はミンゲイドラゴンを生け贄する！このモンスターはドラゴン族を生け贄する時2体分の生け贄が出来る！俺はタイラントドラゴ

ンを召喚！」

タイラントドラゴン 攻2900

「コレがアニキのタイラントドラゴンだ！」

俺がそう言つとタイラントが吼えてくれたぜ！

「ふうん…でも甘いわね…伏せカード発動するわ、サンダーブレイクよ！対象はタイラントドラゴン！」

サンダーブレイクのカードから稲妻がタイラントに来たが…

「そんなのがタイラントに食らうかよ！」

タイラントドラゴンの頭の秘宝が光だしサンダーブレイクが消える
「どういう事！何故サンダーブレイクが！？」

「タイラントはコイツを対象にとる罠の効果を無効にするんだよ」
攻撃の無力化まで防げる代物だしな

「くっ…無駄な発動だったわ」

「続けっぞ！タイラントドラゴンでゾンビ亀に攻撃い！」
砕け！タイラント！

「単体が効かないなら全体でいくわ、伏せカード発動。聖なるバリ
アミラーフォース！」

くそっ！タイラントが…

「なら！墓地のミンゲイドラゴンの効果発動！コイツを特殊召喚する！更にミンゲイドラゴンを除外してレッドアイズダークネスメタルドラゴンを特殊召喚！」

レッドアイズダークネスメタルドラゴン（長いので次回からレダメ
でby作者） 攻2800

レッドアイズダークネスメタル…コイツもアニキから貰ったカード…

「そんなの出した所でバトルは終わってるわよ」

「るせえ！レッドアイズダークネスメタルの効果発動！1ターンに
1度、自分の手札か墓地のドラゴン族モンスターを特殊召喚する！

俺は手札の真紅眼の黒竜を特殊召喚！更にレッドアイズを生け贄に真紅眼の闇竜を召喚！コイツは自分の墓地のドラゴン族の数だけ攻撃力が300アップする！ターン終了だ！」

真紅眼の闇竜 攻2400 ↓ 3300

そして2枚の真紅眼もアニキのだ…ちなみに俺が持ってた上級ドラゴンはメテオドラゴンとドラゴンエッガーだけで不便に思ったアニキは俺にくれたんだ

「私のターンドロー！」

S i d e 倭

今トツシーが優勢や…けどカミューラには幻魔の扉がある…喬ちゃんとはカミューラの隣で助けに行きたくても場所が場所やからキツイしうつむき眩いとる…

「ごめん喬ちゃん…」

とりあえずトツシー頼むで…

「それにしても京哉はかなりカード持ってたんだな…」

十代君…思ったけど今それゆーとこちゃうつて！

「俺も思っ、今度わけて貰うか」…三沢君空気読もうや

S i d e 利光

ここまでパワーがあればデカイ吸血鬼来ても大丈夫だぜ！

「私はピラミッドタートルを守備表示に変更してカードを1枚伏せ

「ターン終了よ」

ピラミッドタートル 守1400

「へっ！守備なら怖かねえ！

「俺のターン！ドロー！」

「トドメさしてやる！」

「伏せカード発動！竜の逆鱗！コイツでフィールド上のドラゴンは貫通能力を得る！更に俺は手札から龍の鏡を発動！墓地の仮面竜とタイラントドラゴンと真紅眼の黒竜、そしてフィールドのレダメと真紅眼の闇竜を融合させる！」

「5体融合ですって！？」

「まさか…」

「そのまさかだ赤坂！」

「君臨せよF・G・D！」

F・G・D 攻5000

「こ、攻撃力5000！？」

「驚くのはまだ早いぜ」

「コイツは光属性以外のモンスターでは戦闘破壊されないんだ！」

「相変わらず恐ろしい効果ね…」

「カミューラのデッキには光は無い…押しきれぞ」

「けどあのチートが来たら…まあいい！」

「F・G・Dでゾンビ亀に攻撃だ！」

「ぶっこわせえ！」

「うあああああ！」

カミューラ LP4000↓400

「ま、待つて！私も…」

「うるせえ！アニキを消した罪は重え！城と共にくたばれ！」

吸血鬼女は俺に懇願して来たが断つてやったぜ！それよりダッシュだ！

S i d e 凜

ボク達は皆無事だった…ただ1人、京哉君を除いて

「京哉が…京哉が…」

喬ちゃんはずっとこの調子だった

「私のせいで…京哉が…」

「いい加減にしろやあ！」

「アカンて、トッシー！」

利光君は喬ちゃんの襟を掴んで怒鳴った

「利光君落ち着くツス！」

「お、落ち着くんだなあ！」

「うるせえ！神谷！勝手にアニキを殺してんじゃねえ！」

翔君と隼人君は利光君を押さえている…ボクを含む他は見ている事しか出来かった…

「アニキは必ず帰ってくる！そう信じるよ！」

その言葉は喬ちゃんはわかっていて、けど自分が捕まらなければと嘆いていた…

「とりあえず帰りましょ、皆。私達は京哉の帰りを待つしか出来ないもの」

明日香さんのその1言で私達は解散した…京哉君、はやく帰って来てね

S i d e 京哉

…今の現状をありのまま答えよう、一面まっつっつっつしろ！確
か俺は幻魔の扉に吸い込まれたんだが…

「貴方が立花京哉ですね」

声がした方を見ると1体のモンスターが居た。外見はこう言えばわ
かりやすいだろう、ブラックマジシャンっぽいが違うモンスター

「お前は… ■ ■ ■」

「ええ…そうですよ」

「私達の主」

第二十九話 唸れ！アニキに譲られし魂！（後書き）

…ヤバい…マジしんどい…

京「…まあ…ドンマイ」

くそっ…

第三十話 試練開始！到着した先は…（前書き）

皆様おはこん！

今回からネタ重視に走りたいと思います

ちなみに精霊界は独自の設定ですのでそこをあしからず
ではどうぞ！

第三十話 試練開始！到着した先は…

前回のあらすじ

幻魔の扉に吸い込まれた京哉！扉の中に居たのはなんと！

「やらないか？」

ブルーベリー色のつなぎを来たイイオトコだった…

そんな男とは出会って無い！まあとりあえずだ

「俺が主ってどういう意味だ黒の魔法神官？」

ちなみに俺の前に居るのはコイツだ

「主は主です、私達の精霊界の主って事ですよ」

…は？まてまてまて！

「どういう事だよ！精霊界の主って！？」

「まあ正確にはなって頂く方の候補ですね」

「候補って…どういう基準で決めてんだよ」

「まず精霊が見える」

なら十代や凜達も候補だろう

「精霊を複数持つている」

それは俺と万丈目だな…今は

「そして精霊への信頼度」

それは知らんぞ…

「以上により貴方が適任なんですよ立花京哉」

…って言われてもなあ

「ですが実際適任かどうかは判断いたしかねます」

だよねぇ…。そういうのしなくとこつちが困ったぞ…

「よって今から試練を行います。魂の試練がありますね？」

「ああ、あるのはあるが…」

俺は首からぶら下げている三角形のやつを取り出しみせた

ひゅん

ああああああああああああああああ！

「冒険の書にセーブお願いします」

このやろおおおおお！

「あたしとしょーぶしょーよ!」

どうみても？。すつごい？だ。え？なんでこの言葉を知ってるって？いろいろね。ネット見てた時に知って好きになっただよ。ちなみに俺が好きなのは半人の庭師さん。誰だ今ロリコンと言った奴は「ねーねーギョーザー！」

ちなみに目の前の奴はキーメイスだ

「断る、やることがあるんだよ」

俺が来ている場所……それは最弱の里と呼ばれていた。住民を見ると皆バニラのモンスター、しかもアカデミアでも弱いと称されるモンスター達だが……気に入らないなあ

「むー！しょーぶしてくれるならおしえて」教えてくれたらいいよ」

「とりあえず会ってくる。その後で勝負しよう」

「やったー！あとでねきよーやー！」

元気いっぱいだなあ…アリスは元気なのだろうか
「それじゃ会って来ますか」

誰なんだろうか…まあ家を見る限りその辺りと変わらないが…

「失礼します」

扉の前でノック！

カイン！ドン！カイン！ドン！カイン！ドン！カイン！ドン！
ン！カイン！ドン！カイン！ドン！

「ちよつと何をしているんですか！？」

む…誰かと思えばハイ・ブリーステスじゃないか

「何ってノックだが」

「え、いや…そんな真顔で言われまして…」

だってノックじゃん

「普通のノックは扉を叩くものですよ！」

「わかった、扉を叩けばいいんだな」

どかばきぐしやどがーん！

「何しているんですかあああああ！」

「扉を叩けと言ったじゃないか」

「壊す意味の叩くじゃありませんよ！」

えゝそうなんだゝ

「え！？何ですかそのそうなの？みたいな顔は！？」

普通に素晴らしいツツコミだ！ならば相棒は素敵なボケに違いない！

「まあ話は置いて」

「置いてくのですか！？」

まだツツコムか…ボケの意地が…おっと、話を戻さなくては

「この里のトップはこと聞いて来たんだけど」

「ええ…姉さ…ドリアード様ですが…」

ドリアードかあ…あれかなりの人気誇つてた記憶が…オークションで…18万だったかな。この里のは精霊術士の方かな

「ですが御会わせする事は出来ませんよ」

「何故？まさかどこその傲慢アホ社長が経営する会社みたいに予約取らなきゃいけないのか？」

「私の姉さんをそんな方と一緒にしないで下さい！」

可哀想な海馬…拒絶されたぞ…って

「姉さん？お前達姉妹なのか？」

そっくりだけどさ…

「そうですよ、ですが…私なんて…私なんて…」

な、泣き始めた…きつと辛い過去が…

「私なんてあちらでは姉さんの代わりに見られながら ■ ■ ■ する為の道具扱いなんですよー！」

…そしてこの周囲の空気…貴女今素晴らしい爆弾発言しましたよ…だが…

「ハイ・プリーステスさん…」

「うう…なんでしょうか…きつと貴方も私を…」

「俺はどっちも好きだぞ、2人共綺麗だしな」

「……………」

…あれ？慰める為に言ったら赤くなった…まさか！熱か！？（京哉はとても鈍く）

「きゅ」

いきなり「きゅ」とか言って倒れた！

「ど、どうしよう！」

ハイ・プリーステスが倒れた！貴方はどうする！？

A、とりあえず家の中に連れて入りげえっへっへ…

B、そのままルパンダイヴ

C、周りの男モンスター達に襲撃させ襲撃中に自分も入る

D、キスして起こすが起きない為にルパンダイヴを敢行する

「え？何この選択肢！」

思わずツツコンでしまったじゃないか！

「全部アレじゃねえか！」

ちなみに後3分以内に決めなければ自動的にEの服を脱がしてやらないになります。3分間待つてやる

「…何この自称何かの王の台詞…つか普通に家の自室に寝かせるわ！」そんなのやって誰が喜ぶんだ！（京哉はd）

「とりあえず入ろう！自室で寝かせないとハイ・リーステスの熱が上がる！」

その後ルパンダィヴは致しますか？

「しねえよ！」

俺は選択肢にツツコミ家に入って行つた

「ううゝ…ズルいです京哉さん…」

何がだよ…まあいいや。俺が魂の試練を見せたら会わせてくれる事になつたぜ！

「ここです、失礼致しますドリアード様。主様がいらっしゃいましたのでお連れ致しました」

「はい、どうぞ」

んゝ声を聞く限り抜けているな絶対

「ではどうぞ」

「失礼します」

俺が入ると…

「お待ちしております主様ゝ！」

…逆ダイヴされ倒されてドリアードが上に乗っておりますはい

「あのさ…いきなりダイヴしてくるなよ…」

「主様ゝ」

立ち上がるとドリアードに腕を頬擦りされました…進行中でされますですはい

「むっ姉さんばかりズルいです！京哉さん、私も！」

スリスリスリスリ

「京哉さ〜ん」

か…勘弁してくれ…

ちなみに…この状況は1時間かかりました

第三十話 試練開始！到着した先は…（後書き）

京哉「なあ作者」

なんだい京哉よ

京「少し…頭冷やそうか？」

な、なんという気迫！だが…だが…俺は負け「グラヴィトンアアアアアアアク！」ぎゃあああああ！

京「ふう…これで「主様」げっ！ドリアード！」

ドリアード（以下ドリ）「ようやく見つけました〜！」

だきっ

ドリ「えへへ〜」

京「ちよつとドリアード…「あー！姉さんまたー！」次はハイ・プリステスか…」

ハイ・プリステス（以下ハイ）「京哉さん！私も！」

だきっ

ハイ「えへへ〜」

京「…マジで助けて…イジメ受けたよ…」

さあ京哉は無視だ。ちなみに精霊界の設定を多少説明します

私書いている精霊界は主が必ず必要です（条件は黒の魔法神官がおっしゃる通りでは実はありません）

世界の町な村等のランクは外界でしようされているカードの強さが

基となるのですが基本的には種族事の村のトップがよく利用されているまたは独断と偏見基となります。これが一覧です

ドラゴン族 ロードオブドラゴン 理由、名前通りドラゴンを支配出来るからです

魔法使い族 黒衣の大賢者 理由、トップっぽいから

恐竜族 究極恐竜 理由、これが1番トップそう

天使族 基本はゼラートだがクリスティアも負けてない 理由、この2体で迷ってるから

悪魔族 覇王不在の時はハデス 理由、アニメ通り。ハデスは偏見なり

アンデット族 ゾンビマスター 理由、やっぱりマスターの名前に由来

戦士族 フリード 理由、ジェネラルバンザイ！

魚族 シーラカンス 理由、アトランティス時あの子は素晴らしい圧縮をしてくれます

水族 フィッシャーマン 理由、設定上水族は民主主義です（笑）

爬虫類族 ワームキング、エーリアンマザー 理由、最近見ないから↑

獣族 グリーンバブーン 理由、獣と言えばバブーン！

獣戦士族 バルバロス 理由、効果を見る！（笑）

機械族 パーフェクト機械王 理由、これこそ偏見以外の何者でも無い！↑

岩石族 エグゾート 理由、素晴らしい！まるで地砕きの力もじゃ無いか！

最強の里 混沌帝龍 理由、禁止軍団の長でしょ

最弱の里 ドリアード 理由、京哉ハーレム計画の為に！↑

E・HEROの里 ネオス不在時はテンペスター 理由、エリクシラーはなかなかぁ…ちなみにフレンドッグとヒーローキッズ、ネオスペーシアンも住んでいるぞ

他のヒーローは各種族に属してます

長いな…今回は

第三十一話 雑魚とは何とでもなるけど弱いのは中身によるもの（前書き）

今回は手抜きのエユエルの描写がありますがご勘弁を

ではござー！

第三十一話 雑魚とは何とでもなるけど弱いのは中身によるもの

「それでは本題に入りますね主様」

1時間後にようやく解放されたよ…っーか

「主様つてのはちよいとな…」

なーんかこう…違和感というか…だからアオイ達も変えて貰ったんだけど

「主様は主様ですから、それではここでの試練はですね、えーっと…これです」

そう言つてデッキを1つ渡してきた

「これは？」

「この里のモンスター達です。試練は簡単に言つと最近この里の住民が襲撃される事件がありましてこの里の皆を使用して追い払うというのが試練です」

な〜るほどね〜

「ちよつと拝見させてもらうな」

「どうぞ主様」

京哉閲覧中…

「なるほどね…」

「勝てますか京哉さん？」

勝ち負けなら99%負けると誰もが言うが俺は残りの1%だ

「勝てるかは判らないが勝ちに行くよ」

笑顔で言つたのはいいが…これじゃキツいな

「何か条件とかはあるか？」

「特には…ここの方々以外の方を使わなければ問題はありません」

なら大丈夫だな

「いろいろ追加させてもらうよ、勝てる為の秘策をな」

「わかりました、では本日休める場所を御用意致しますのでお休み下さい。リース、主様を御部屋にお連れ下さい」

「はい姉さん」

俺はハイ・プリーステスについていった

「ここです京哉さん」

…広くね？いや、入った時も思ったけどさ…改めて思ったけど絶対外見と中身があって無いだろう。生まれて初めてスイートルームみたいな部屋に入ったがもうスイートってレベル超えてるねうん

「なんか他の奴に申し訳なく感じるんだが…」

「何故ですか？」

いや…家がたいして周りと変わらないのに自分1人がこんなVIPルームみたいな使うのはどうもな…

「用意してくれたのは有難いがただの人間がこんな豪華な部屋を使うのは里の精霊達に失礼と思って…」

「何を言っているのですか？京哉さん精霊界の主じゃないですか」

え、何この娘、当然の如く言ってます…

「いやいや、まだだろう。試練中だし」

「でも京哉さん勝てる為の秘策って…」

…天然って凄いねうん…いや天然じゃなくて俺を信じきってる証言か…

「つーかここで勝っても次の試練があるだろうが」

「京哉さんなら大丈夫です！」

…何その自信…まあいいや

「とりあえず俺外に行ってくる」

「わかりました、それでは」

ハイ・プリーステスは一礼して去って行った…そろそろ行かないと

あの？が五月蠅いからな…

「きよーやー！おそーい！」

「話してたんだよ、それで勝負って何するんだよ」

「んーとね、湖のモンスター達とかけっこ！」

…ふつつつつつつー！

「いいが…飛んでるお前はズルくないか？」

俺はコイツに勝てると思うけどさ

「えー、でも湖のモンスターの方が速いもん！」

…ちよつと気になるな…もしかしてバグロスとかなら笑うぞ

「何処にあるんだ？」

「こつち！ついてきて！」

「うわあああああああああああああああああああ！！！」

只今ひょうすべとツインテールとサイコカッパーとグロスから絶賛逃亡中！

「待ってくださいえ主様あ！」

「ワタシイシヨニアナタトコドモツクル」

「だからアチシ達を拾ってくださいえ！」

「イシヨニシヨクシユプレーシマシヨ」

コイツ等変態だあああああああああああああああああああ
あああああああ！

「きよーやはやーい！」

「酷い目にあつた…」

脱出してきました、ええしてきました。死ぬかと思いました、ええ思いました。第一モンスターと人間じゃ子供なんか出来んだろ…

「そんな大変な事があつたんですか主様」

笑顔で寝巻き姿のドリアードが俺の心を読んできたよって

「何でドリアードが居るんだよ！ハイ・プリーステスも！」

ハイ・プリーステスも寝巻き姿…

「だって主様と一緒に寝たかつたので」

「私もそんな感じです」

…この娘達なんの恥じらいもなく言っちゃったよ！

「お前達は恥じらいとか無いのかよ…」

「主様なら大丈夫ですよ」

「そうですよ」

いやいやいやいや！俺も男の子だよ！男女で寝るのは危険がいつばいなんだよ！

「俺が襲うかもしれないぞ？」

「主様が御望みとあらば…」

「私達は…構いませんよ…」

脱ごうとするな！…はあ…

「何か相手するのが疲れる…」

しかもツツコミ役はハイ・プリーステスじゃ無いのかよ…久々にボケれたのに

「俺は寝るからさっさと出てくれ」

寝たくても寝れんぞ…

「仕方ないですね…行きましょリース」

「はい、姉さん」

ようやく出て行ってくれた…よし、寝よう

翌日、両サイドから2人にサンドイッチを喰らっていたのは言うまでもない。おかしいな…鍵を閉めた筈なのに…まさか！盗賊か何かが2人の部屋に来たからここに来たのか！（京哉h）

「…で襲撃者ってコイツなのか…」

「げっへっへ…精霊界の主とか言うやつだなあ？」目の前には秒殺の暗殺者…この里のモンスターなら確かに秒殺出来るけどさ…

「てめえを倒せば俺様の格が上がるってもんだ！行くぜ！」

「他人様に迷惑をかける餓鬼にはお仕置きしなきゃな」

「きつ…貴様…！」

「「デュエル！」」

「俺は伏せカード発動、レベルリチューナー。このカードはモンスター1体のレベルを2つまでさける。俺はドリアードのレベルを下げる。更に降格処分を発動！ハイ・プリーステスに装備！そしてフィールドにはレベル2のドリアード、レベル1のハイ・プリーステス、レベル2のはにわ、レベル1のキーメイス、レベル2のプチリユウがいる、よって弱肉一色を発動！お互い手札を全て捨てフィールド上のレベル2以下の通常モンスター以外のカードを全て破壊する！」

「お、俺様自身と俺様のスキルドレインが！」

「コイツ弱〜。デッキ構成がなりなさ過ぎる…。雑魚ってならまだしもコイツは酷い」

「全員でダイレクトアタック」

「う、うわあああああ！」

「巻物で古っ！」

「最近のアチラ側で流行ってらっしゃるそうですね主様♪」

「いやいや、流行ってねえよ！」

「そ、そうなんですか!？」

「…まあいいや、何々？」

書かれていた内容、それは…

チエスにて勝利せよ

…いやいやいやいや!おかしいだろうが!デュエルじゃなくてチエスで!

「主様、なんと書かれていたのですか？」

「いや…万魔殿に行けばいいのかそれとも…」

「京哉さん…とりあえずパペットキング様の所に行ってみるのはどうでしょうか？」

え?そんな国があんの?

「どっちの方だ？」

「ここから北に行くと戦士族の皆様が住んでいらっしゃる里がありますのでそこから北西に行きますとありますので」

遠いなあ…まっ!仕方ないか

「長い旅となりますので私達でお祝いをさせて下さい主様。道中のお食事支度さすますので」

…そつえば食事の事すっかり忘れてた

「感謝するよ、ありがとう皆」

夜、野外パーティーが行われ皆でドンチャン騒ぎとなった。ちなみにまた2人からサンドイッチになってたよ…何!?あの娘達!俺を

いじめるの！？めちやくちや痛いんだけど！（最後に京哉は鈍感です）

第三十一話 雑魚とは何とでもなるけど弱いのは中身によるもの（後書き）

京「なあ…次のやつ全く関係無いよな？」

気にしない。チェスの描写はチェックメイトって言うだけだし

京「手抜きにも程があるだろ！？」

気にしたら負けだ！このリア充め！

京「誰がだ！…所で俺が5体揃えるまでのやり方は？説明無いと困るっしょ？」

勿論するよ、行くよ

先行京哉↓二重召喚でドリアドとハイ・プリーステスを召喚↓暗黒の扉と罠2枚駆使↓次のターンに強欲な壺↓キーメイス召喚、罠駆使↓…

まあこんな感じでノーダメ勝利

京「…へえ…」

なんだよその目は！まあいいや。次は戦士族の里だ！

京「皆さんお楽しみに！」

今日の一言

アマゾネスのデッキ作りたい

京「まさか…」

ニヤリッ（「ー」）

第三十二話 ガチガチ近距離勝負！！そして疑わしい仲間（前書き）

連続投稿！頑張った俺！

明日も書けたら良いなあ…ではどうぞ！

第三十二話 ガチガチ近距離勝負！！そして疑わしい仲間

「キング、チエックメイト」

「ま、また僕の負けか…」

やあ皆、京哉だよ。今俺はチエスの里に来てるんだ。またキングに勝ったよ…これでジエノサイドのキングと合わせて35勝だねうん

「また負けてしまったのかパペットキングよ」

「ふむ…京哉殿は御強いですな」

「うむ、まさに我等精霊界を統べるにふさわしい御仁だ」

実はこの里（正確には城）はビックリしたよ…デーモンのチエス達とパペット達が仲がいいんだよ。なんでも昔敵対していたらしいけど互いの名前にチエスが含まれているからってわざわざあっちのチエスを真似て作り勝負した所五分となり仲良くなったそうだ

「キング様、そろそろ次の試練をお渡し下さいませ」

キングの隣に居るのはパペットクイン、この方かなり優しい方でしてね…最初にこの城に来た時パペットポーンに通せんぼ喰らってた方の方が通してくれたんだ

「ってもう来てるのか？」

「うむ、申し訳無いな。御主とのチエスは負けても楽しいのでキングデーモン殿とはまってしまったから忘れておったわ」

「しっかりしてくれよパペットキング殿。我も楽しかったぞ京哉殿」

「いやいや、向こうに戻って暇な時があれば訪れるよ」

「再戦楽しみにして待つておるぞ、これが次の試練じゃ」

そうやって渡されたのは…巻物ではなく

「…三略とかに使われてた木のやつじゃん…何か時代がドンドン古くなってるような気が…」

「それで内容は何なのだ？京哉殿」

ええと…内容は…

戦士族の里に行き最強の剣士達を剣術にて倒せ（拳術でも構わないよ主）

…何これ…剣術？拳術？

「俺にリアルファイトしてこいと…」

「頑張るのだ京哉」

キングのじーさん…俺にデュエリストは向いてないのかな…？

「ですが貴方様は私達の主、これくらいの試練は乗り越えられると期待しておりますよ」

ああ…クイーンはなんて優しいんだ…

「そうだパペットキング殿、宴を行おうではないか。我等が5年仲良く出来たのと精霊界の主が見つかった事の2つを祝う為に」

「おお、良い案じゃ！ルークよ、早速準備いたせ」

「ははっ！」

「我等からも手伝えようビショップ、ルーク！パペット達を手伝え」

「「御意！」」

こうして夜は再びパーティーとなった…

つーかあのダブルキングめ！俺に酒を勧めるなよ！

「京哉ちよつと良いかしら？」

「どうしたインフェルノクイン？」

他の奴がドンチャン騒ぎをしてる中インフェルノクインデーモンが俺に近付き声を潜めて話してきた

「道中気をつけなさい、私達デーモンや悪魔族の中に貴方の存在を快く思わない者が居ます。特に万魔殿のプリズンクイーン、悪魔族のハデスが貴方の命を狙って居るわ」

「オツケー、ありがとうクイン」
クインはいいえと言って俺の場を離れた

そしてチエスの城を次の朝に旅立った俺だが…

「不味いな…囲まれたか…」

周りには首なし騎士が5体

「ようやく見つけました、主」

そう言っただけなのは…

「デーモンの召喚？」

バナラのデーモンだ。コイツはなかなか強いよな、バナラの1体生
け贄は俺も恐怖した

「まさかプリズンクインの手下か？それかハデスか？」

「私は貴方様の命を奪えとプリズンクイン様に言われましたがあの方
方は残忍極まりなく私も困り果てていました所貴方様の名を聞き駆
けつけた所存にございます」

デーモンは俺の前で膝を着き頭を下げ言った。…なるほどね…し
かし嘘の可能性もある…かと言ってここで護衛を申し出してくれる
奴が居るのを直ぐに断るのもな…まあいい。コイツに騙されて死ん
だら俺はそこまでって事だ

「デーモンよ、大義である。貴殿に俺の護衛を頼もう」
「御意！」

デーモンは立ち上がった。そういやコイツ等はどつするんだろうか
「デーモン、この首なし騎士達はどつする？」

「ご心配なく主。この者達は私自身の配下、主を襲う事はありません
ので」

なら大丈夫か…

「それでは行こうデーモンよ」

「ははっ！」

俺達は戦士族の里に歩みを進めた

「主！お待ちしておりました！」

出迎えたのは切り込み隊長、だが切り込みはデーモンを見ると剣を構えた

「デーモンが何故主の隣にいる！」

「切り込み隊長、彼は俺の護衛だ。彼のおかげで今俺がここに居る。彼に刃を向けるのならば俺に向けよ」

「そ、それは申し訳ありません！それでは將軍がお待ちしております故に」

フリードか…アイツはなかなか厄介な効果持ちだったな。まあカイトには劣るがな

「わかった、デーモン。ここの護衛を任せる」

「御意」

うーん…デーモンでなかなか俺に従順だな…演技かどうかはまだ見定める時じゃ無いか

「主、こちらへ…」

俺は隊長に付いて行った

「おお、お初にお目にかかります主。將軍フリードです」

「立花京哉…その主云々関係無しによろしく」

俺達は握手し早速本題に入った

「…相手はアルカナとライトニングか…」

試練は俺を殺す気か！？どう見ても俺死ぬぞ！！

「主に刃を向ける事、お許しください…」

「しかし試練と言えども我等は手加減しませぬ故に」

まあ本気で来ないとこつちが困るっての

「それではルールは戦士代表2名は主に膝を着かせて勝利、主は2人に1撃を入れれば勝利。それでは始め！」

ちなみに俺は素手…っ！事は5割本気だ

「行くぞ2人共！うおお！」

俺は身構える剣士2人に突っ込んだ

「はあっ！」

「ぐっ！見事です…主」

2時間半かけて倒しました。途中の描写が無いのは作者が原因なり

（申し訳ありません！）

「お疲れ様でした主様」

俺に声をかけて来たのはコマンドナイト

「お部屋を御用意致しましたのでお休み下さい。私が案内致します」

「ちよつと待ってくれ」

俺はアルカナとライトニングに向けてこう言った

「また闘ろう、強敵よ」

「「御意」」

2人は返事を返してくれた

「こちらです主様」

俺はコマンドナイトに連れられて部屋に着いた

「ありがとう、コマンドナイト。お前も休んでて良いよ」

「あ…はい、失礼します／＼」

笑顔で俺言ったら何故か赤くなっただぞ？…熱か何かかな？

（京哉は以下略）

第三十二話 ガチガチ近距離勝負！！そして疑わしい仲間（後書き）

今回は各里についての説明です

昆虫族 インセクトクイーンと思わせてジャベリンビードル（笑）

理由、部下を喰らって行動する奴なんざトップに立たせるか！ちなみにインセクトプリンセスは京哉にぞっこんです（笑）

植物族 勿論皆（植物）のアイドル椿姫 理由、皆（植物）のアイドルだからに決まってるだろ！？

海竜族 ネオダイタロス 理由、カードにもあるじゃないか。海竜神の加護って

雷族 創世神良いね！だが俺はザボルグをリスペクトするう！でもやっぱり創世神 理由、守備の高さに蘇生は鬼畜っしょ。しかし精霊界の精霊達の命の為に忙しい為代理がザボルグ

鳥獣族 個人的にアトモが良いけど始祖神鳥シムルグには勝てないな 理由、名前勝ちしてるから

まあこんな感じです。後は個人的に出してる里です

チェスの里（城）

チェスモンスター達（但しパペットのみ）が過ごしている城。最近はジェノサイドキングのようなチェスデーモンが万魔殿を追放され住

んでいる。仲は良好。トップはパペットキング。

万魔殿

チェスデーモンに従わなかったデーモンモンスターが住んでいる。

トップはプリズンクインデーモンだが実際のトップはデビルマゼラ

アマゾネスの里

名前通り。アマゾネスの女王がトップ（最近でた奴ですよ）。

皆様の理想の男性は自分より強い方。勿論京哉に皆様ぞっこんです

今考えているのはこんな感じですね

それではまた明日書ければいいなと思います

祝！30万アクセスえええええス！（前書き）

本当にありがとうございます！
とても感謝感激です！

祝！30万アクセスえええええス！

おおおおおおお！ありがとおおおおございまあああああ
す！

京哉「閲覧していただいた皆様に感謝の言葉しかございません」

うむ、この作品が30万超えるなんておじさん感激だあ

京哉「それで今回はどんな超番外に？」

今回は…考えて無い

京哉「おいおい、どうするんだよ」

ラバーズの妄想でも入れておこな…はっ！良いのあるじゃないか！

京哉「何？」

今回はこれだ！

京哉&ラバーズ、海へゆく

完璧！（　　）b

京哉「ラバーズって誰の事だ？」

そりゃ精霊+あの4人っしょ

京哉「へえ…ラバーズって何だろ」

…この鈍感め！

京哉「何か言ったか？」

いいえ何も…それではごほん

えゝ30万ものアクセスありがとございます！これからも精進し
て頑張りたいと思います！

祝！30万アクセスえええええス！（後書き）

今回の超番外編海！京哉を巡る勝負を書こうと思います！

30万アクセス記念！超番外編！皆で海に行こう（前書き）

今回は短いですが夏の出来事です

では超番外編をどうぞ！

30万アクセス記念！超番外編！皆で海に行こう

「明日海に行かへんか？」

セブンスターズと戦う前の話…倭にそう誘われた

「明日か？授業は無かった筈だし…」

「な～な～京哉君、行こうや～」

「まあいいか」

「よっし！明日の9時にアカデミアの海の家に来てな～」

そう言つて倭は去つて行つた

「…海か…水着無いし俺。まあ泳ぐつもり無いし良いか」

しかし…現実はその甘くは無かつた

「…マジで？」

「マジやで」

俺の目の前に差し出された物…それはドピンクで花柄が入った水着

「…私にこれをはけと？」

「そうやで、ウチ等4人で厳選したんや」

凜、涼、喬を見ると…

凜、ニコニコして此方を見ている

涼、何かを期待する目で見ている

喬、顔を赤くしている

「…恥ずかしいけどはくよ…」

「よっし！」

まあせっかく用意してくれたし…仕方ないか…

「おおーい！」

お、十代達が来た。俺もさっさと入って着替えるか

「きつ京哉…それ…くくく…」

「い、色…ぷぷぷ…」

「じゅ十代、しょ翔君駄目よ…くくく…」

「きよ京哉に…そんな趣味が…くくく…」

「き、貴様…センス良いな…くくく…」

…コイツ等あ…

「に、似合うとるよ…京哉君…ぷぷぷ…」

「京哉君似合うよ…」

「ご、ごめんね京哉…」

「京哉さん可愛いです」

「も…もう駄目だ…」

『あははははははははっ！』

きつ貴様等ああああああ！

「笑うのはコイツの性能を見極めてから笑え！今笑った奴等勝負だ！あそこの沖から此処まで笑った奴1人でも俺に勝てば盛大に笑い今日1日好きにしてい！」

コイツ等に痛い目を逢わせてやる！

「いいぜ、京哉！勝負だ！」

「1人でも勝てば良いなら僕も大丈夫ッス！」

「せっかくの機会ね、1日こき使えるならやるわ！」

「面白い…運動で君に勝つ！」
「この万丈目サンダーに挑んだ事後悔するがいい！」
「今日こそ勝つたる！凜ちゃん達も参加やで！」
「…「嘘お！？」」

「遅い！遅いぞお！」
「くっそー！めちゃくちゃ速い！」
「てかあれホントに立ち泳ぎッスか！？クロールより速いのに！？」
「あ、あり得ないわ…」
「く…くそっ！追い付けない！」
「ば、バカな！この万丈目サンダーが追いつかないだと！？」
「アレ絶対人間ちゃうやろ！！」
「スピードがもうジェットスキーだね…」
「京哉凄いいね…」
「もう泳げないよ…」
「む…ビーチで勝負や！」

「アタアアアアアツクウウウウウ！」
「1人相手に勝てない！」
「と言っか京哉君が何人も居るッス！」
「うらうらうらうらうらあ！」
「び、ビーチボールが沢山に見えるわ！」
「く…判らない！」
「くそっ！何故沢山あるんだ！」
「また入った！？ってどれか判らんやんか！！」
「京哉君凄いい！ボクじゃできないなあ」
「凜…皆出来ないよ」

「外から見てても沢山に見えますね」

「これで8連勝お！」

「ビーチフラッグで8連敗だって!？」

「も、もう京哉君を止められ無いッス！」

「青眼の究極竜で明日香にダイレクトアタック！」

「きやあああ！」

「融合解除発動！究極竜を戻して青眼の白竜を3体特殊召喚！三沢と万丈目にダイレクトアタック！」

「ぐわああああ！」

「サンダーあああ！」

「粉碎！玉砕！！大喝采！！ふははははは！」

「京哉君青眼も持ってたんか!？」

「流石アニキッス！」

「利光、いつの間に来たの？」

「それは聞いたら負けだ神谷！俺はアニキのオーラを感じる事が出来るんだ！」

「気持ち悪いよそれ!？」「京哉さんかっこいいです」

「はー楽しかったな!ん？」

皆を見ると凜、喬、涼以外はボロボロ

「どうしたんだ皆？お疲れのようだけど」

『申し訳ありませんでしたあ！二度と侮辱いたしません!』
どうしたんだコイツ等？

「「「あ、あはは...」」」

後日、すっかり怯えきつた皆と「すげえッス！」とか言っ
て寄って来るトシを俺は目撃した…何かあったのかな？

30万アクセス記念！超番外編！皆で海に行こう（後書き）

という事でした！

次回は次の試練、です

ではでは！30万ものアクセスありがとうございました！

第三十三話 家族喧嘩に他人を巻き込むんじゃない！（前書き）

今回は家族喧嘩についてのお話です

多分ツッコミ所が満載ですが気にしたら負けですので！

それではどうぞ！

第三十三話 家族喧嘩に他人を巻き込むんじゃない！

「主様、將軍がお呼びです」

む…次の試練かな？しかし戦士族の里はいいベッドを使うな…1度仰向けになつたら睡魔がやってくるんだが…

「今行くよ」

とりあえず次の試練は何かな

「將軍、主様をお連れ致しました」

「主、朝からすまぬな。次の試練だ」

そして渡して来たのは…

「…これ何処の言葉だよ…」

なんか鳥とか書いてるよ。まさかヒエラテックとか言うやつか！？
そんなの読めるかよ！

「むう…私も読めぬ…」

いやこんなの読めたら無敗將軍から偉大將軍に名前変えてもらつよ
マジで

「ここから西の方に魔法使い族の里があり、そこから北北東に進めば墓守の長が居るゆえにその者に解析を頼むのはどうだろうか主？」
…次回かかるなあ…ネクロバレーまでがなかなか遠かったから記憶が…

「とりあえずここから向かうよありがとうフリード」

「主も道中お気をつけくだされ、護衛にその者をつけます。しっかりと主を御守りせよコマンドナイトよ」

「ははっ！」

「それじゃ行こうかコマンドナイト」

「はい」

俺はフリードに一礼し里を後にした

え？デーモンか？勿論着いて来てるよ

「しかし読めないやつを渡されても困るんだが…」

「主様、見せて頂いてもよろしいでしょうか？」

もしかしてわかるのか？…ってあり得ないか

「ほら、わかるなら嬉しいけどさ」

まあわからな「昆虫族の里に行き紛争を止めよと書いてあります」

…え？

「わかるの？この文字」

「ええ、以前墓守達と共同戦線を行った時に暗殺者から時間のある時に教えて頂きましたから」

…無敗將軍涙目だな…まあ戦なら彼が上手だろうな

「しかし主、昆虫族の紛争は厄介です。なにせ対立している勢力は3つですから」

…統率力が無さすぎるだろ…1つから3つって…

「まあいいや、行こうか2人とも」

「「御意」」

そして里から200mの位置で里を観察中だ。さっき入ろうとしたとき

「貴様等！何者だ！」

「ここが昆虫族の里と知ってのことか！」

「まさか今の内に我等の領土を奪うつもりか！？」

「上には伝えぬ故に早々に立ち去るがよい！」

と言われて甲虫装甲騎士4人に言われて退去してきたんだよね

「どうしましよ主様」

「このままでは通れませぬな」

うーん…よし！

「侵入しようか、とりあえず2人で依頼めるか？」

「「御意」」

「よつと…見張りは無し…つと」

侵入と言えばHey！からだよね

「とりあえずこのトップに会って話を「侵入者を見つけたぞー！」

ええ！？もう見つかったの！？」

何コイツ等！？もう俺を見つけたの！？」

「捕まえろ！」

うーん…騒ぎ起こして敵対するのはちよつとなあ…それに捕まれば
目通し出来るんじゃないか？

と考えている内に捕まっちゃいました。てへっ

「貴方が侵入者ですね…私の領土に何用ですか？」そうして目の前
にはなんとインセクトプリンセス

「貴女がこのトップ？」

「そうですね、私は無死虫団の長のインセクトプリンセスですわ」
へえ…って無死虫団？

「何それ？」

「貴様！泥棒の分際で姫様に「構いませんわ」ひ、姫様！？」

「無死虫団はある2勢力に対抗して作った勢力、対立している3勢力中1番弱いのです。そこで貴方の力を貸して貰えないかしら、主様？」

あちゃ／＼バレてるな／＼

「こ、この者が精霊界の主！？」

「そうですね、という事で今すぐ拘束を解きなさい」

「は、ははっ！」

カチャカチャカチャカチャ…

あゝ痛かった…このままかと思ったぞ

「それで詳しく内容を教えてくれ」

「わかりましたわ…始まりは数日前…」

お姫様説明中

「…という訳ですわ」

…何それめちやくちやちっさい事じゃん…

「つまり里のトップだったジャベリンビードルが棘の妖精に不倫したとインセクト女王が言い張り否定したジャベリンビードルと喧嘩になり、それを止める為に貴女が独立して今の形になったと？」

「その通りですわ」

アホらし…ただの家族喧嘩じゃん…

「まあ理由は判った、とりあえずどうやって止める」

「これを受け取ってください。私達のカードで構成されたデッキですわ」

差し出されたデッキを俺は取った

「此方に2人を呼び出します。故主様はお休みになってください」

「そうさせて貰うよ、後里の出入口で7人居るのは俺の護衛だから入れさせて貰うぜ」

「構いませんわ」

ああ…ようやく休めるな…捕まっちゃて散々対空砲花の砲撃を受けまくったからなあ…痛かった

「…ホントに呼んできたよこの姫は」

「何故この者と貴方がいるのかしらジャベリンビードル？」

「それは私の台詞だ！娘に呼ばれて来たのに！」

あゝあの姫はコイツ等の娘だったのか。

「何ですって！？あの娘は私の娘よ！貴方のじゃ無いわ！」

「いや！私の娘だ！」

あーもー！ぎゃーぎゃー五月蠅いな！

「さつさとデュエルで決着つけましょうよ、この3人の内1人が勝てばそいつが正しいって事だな」

「面白いわね！良いわ！」

「良かるう！お前達に格の違いを見せてやる！」

…はあ…こんな親を持った姫様かなり可哀想だ…

「頑張ってくださいませ主様」

まあ姫様が応援してくれるのだから良いか

「…デュエル！」「」

京哉 LP4000

女王 LP4000

ビードル LP4000

「私のターンから始めるわ、ドロー！」

インセクト女王はディスク持って無いから目の前にカード展開している（タッグフォースとかのサイコソッカーみたいな感じですよ作者）

「私は代打バッターを守備表示で召喚してカードを2枚伏せてターン終了よ！」

代打バッター 守1200

「私のターンだ！ドロー！」つか2人共1人称が私だから読者はわかりにくいだろうなあ…申し訳無いな

「私はモンスターをセットしカードを3枚伏せてターン終了だ！」

「んじゃ俺のターンだなドロー！」

この手札ならいけるな

「共鳴虫を守備表示で召喚、カードを2枚伏せてターン終了」

共鳴虫 守1300

「私のターンね！ドロー！」

何を出すかな？…まさか羽餓みたいな戦法は「私は手札からトゲトゲの殺虫剤を発動！代打バッターを破壊して代打バッターの効果発動！」してきたね。なんか可哀想…代打バッター

「手札から私自身を特殊召喚！更に代打バッターを守備表示で召喚

「！」

インセクト女王 攻2200 ↓ 2800

「攻撃せずにターン終了よ」「臆したか！私のターン！ドロー！」
ジャベリンの方は何を引いた？目とかちっさいからわかりにくい！
「私は儀式魔法高等儀式術を発動！デッキからネオバグ2体を墓地に送り私自身を召喚！」

ジャベリンビートル 攻2450

…マジで使う奴を初めて見た
「更に墓地のネオバグを2体除外しデビルドージャーを特殊召喚！」

デビルドージャー 攻2800

出た！厄介な昆虫カードNo.1

「これでインセクト女王は攻撃力が上がるそんなの関係無い！倒してやる！」

インセクト女王 攻2800 ↓ 3200

うーん…空気になりつつあるから仕掛けよ

「伏せカード発動！威嚇する咆哮！このターン攻撃宣言はさせない！」

「ちっ！命拾い女王に弱輩者よ！ターン終了だ」

あゝあ…空気から脱出したかっただけなんだが…

「俺のターンドロー！」

おっ！コイツは…

「手札から魔法カード強制転移発動、お互いのフィールド上のモン

スターを入れ替える。俺が対象に取るのは共鳴虫、入れ替えはインセクト女王、自分フィールド上のモンスターを選択してくれ」

「私は代打バッターを選択するわ」

代打バッターと共鳴虫が歩いて行き互いのフィールドに来た

「手札から甲虫装甲騎士を召喚！」

攻1900

「バトル！甲虫装甲騎士で共鳴虫を攻撃！」

甲虫装甲騎士は素早く接近し共鳴虫を叩き斬った

「共鳴虫の効果発動！代打バッターを守備表示で特殊召喚してターン終了だ」

「私のターンドロー！」

ドローカードを見た時にインセクト女王は不敵に笑った

「これで生け贄に困らないわ、コカローチナイトを召喚！」

コカローチナイト 攻800

…出たよ…あの方はどう見ても羽餓のデッキじゃないか

インセクト女王 攻3400 （どのみち1体生け贄にされる為に
予め1体分少なく書きますby作者）

「バトルよ！私自身でジャベリンビートルを攻撃！」

あ、ゴキブリ食われた。ジャベリンビートル名にするんだ？まさか
易々食わせる訳じゃ無いよな

「伏せカード発動！和睦の使者！」

「ちっ！ターン終了よ」

「私のターンドロー！」

…空気だ…ホントにわかってんのかな…

「女王を片付けたいが先ずは貴様を倒す！デビルドージャーで甲虫装甲騎士を攻撃！」

対象俺に変えてきたか

「伏せカード発動、ガードブロック。戦闘ダメージを0にしてカードドロー！」

「ならばジャベリンビートルで代打バッターに攻撃！」

槍に刺された方は女王の方だ…効果出ないな

「リバースモンスター人食い虫！貴様の代打バッターを破壊する！」

…え？マジで？バカかコイツ

「代打バッターの効果発動、手札からインセクトプリンセスを召喚！頼むぜ」

「勿論ですわ」

インセクトプリンセス 攻1900

「私の娘よあ！」

…ホントに可哀想だよお姫様

「あ、あはは…」

「私のターンは終了だ」

「俺のターンドロー！」

引いたカード…ふむ…

「俺は魔法カード大嵐を発動、フィールド上の魔法、罫を全て破壊する」

「くっ！鬱陶しいわねえ…」

「この餓鬼めえ…」

それじゃ先ずはジャベリンからだな

「強者の苦痛を3枚発動！これにより2人のモンスターレベル分の攻撃力がダウン×3となる！」

インセクト女王 攻3600 ↓ 1500

デビルドーザー 攻2800 ↓200

ジャベリンビートル 攻2450 ↓50

人食い虫 攻450 ↓0

「バトル！インセクトプリンセスで人食い虫を攻撃！」

「わかりましたわ、はあっ！」

お姫様のりんぷんにより人食い虫が破壊される…スゲーな

「ぐわあ！」

ビートル LP4000 ↓2100

「更に昆虫族モンスターを破壊した事によりプリンセスの攻撃力は500アップする。ターン終了だ」

インセクトプリンセス 攻1900 ↓2400

「わ、私のターンドロー！コカローチナイトを守備表示で召喚」

「無駄だ、インセクトプリンセスが居る限り昆虫族モンスターは攻撃表示のままだ」

「くっ！ターン終了よ」

「私のターンドロー！ぐっ…ターン終了だ」

「俺のターンドロー。インセクトプリンセスでコカローチナイトを攻撃！」

「ぐあっ！」

女王 LP4000 ↓1600

インセクトプリンセス 攻2400 ↓ 2900

「カードを1枚伏せてターン終了…なああんた等いい加減に仲直りしたらどうだ？」

「何？」

「話しは聞かせて貰ったけどさ…単なる夫婦喧嘩じゃん」

「うつ！」

「そんなので敵対してたら里の皆が困るだろ？それに娘だってそう
だ。ただの喧嘩で此処まで広げてさ」

ホントにちっさい事でしか無いしな

「…」

「全くどれだけ娘が泣いていたか知らんだろ？可哀想に…」

「わ、私のターンドロー」

「だからもうこのデュエルは終了させる、伏せカード発動！破壊輪
！インセクトプリンセスを破壊して全員にインセクトプリンセス分
のダメージを与える！…すまないなお姫様」

「構いませんわ…この勝ち方で頼んだのは私ですので…」

ホントにすまないな…

「お姫様の悲しみのダメージ、お前達でしっかり受ける」

「…すまなかつた女王よ…娘よ」

「ごめんなさい…アナタ、プリンセス…」

女王 LP1600 ↓ 0

ビートル LP2100 ↓ 0

その後、家族会議が行われ今後の事について話を行っていた

第三十三話 家族喧嘩に他人を巻き込むんじゃない！（後書き）

うーん…最後ぐだったなあ

京哉「お前だからな、ぐだって当然」

ひでえ…ひでえぞ京哉あ！

京「なら何でこんなにも深夜帯に投稿する」

実はね…

部活の試合終了↓部内の奴と俺の3人で飯行く↓しんどかったから
21時に寝る↓2時半に起きる↓今に至る

京「お前にしては早いな」

それだけしんどかったって事だよ。次回は最終試練！最終試練は簡単な質問だ、さあその質問に京哉はどう答えるかな

京「それではまた」

今日の一言

最新パック早く届かないかなあ…

京「Amazonで頼んだんだよな」

でもメアド変えたせいで来るか判らん…

京「ばーろお」

第三十四話 突入！最終試験！そして人間界では…（前書き）

本日遅れましたが2本目です…あゝ疲れた…3日くらい私用により
休ませて頂きますね
それではどうぞ！

第三十四話 突入！最終試練！そして人間界では…

「ありがとうございます主様」

家族会議が終わりお姫様が俺に話し掛けてきた

「いやいや、俺は別にな。後は次の試練を待つだけさ」

「それでしたらこれを…」

渡して来たのは手紙…しかも封筒入り…って！

「現代に戻ってるじゃないか！」

思わずツツコミ入れてしまった

「それで内容は…」

明日の朝、貴方を迎えにいきます候

…表現が昔風なのが理解できん…

「迎えにくるのですか…」

もしかして最後なのか…？

「それなら家族で話した事なんです…」

え？何？俺関係あんの？

「私をお嫁に貰ってくださいませんか？」

………はい？

「今なんて？」

「ですから私をお嫁に貰ってくださいませんか？」

…何故そんな展開になった！

「待て、何故そんな話が出てきた」

「実は…」

「プリンセス、ちょっと良いかしら？」

「お母様なんでしょうか？」

「あの京哉って言う子… なかなかいい子じゃない、お嫁に貰ってもらいなさい」

「えっ？ですが主様は…」

「愛の垣根に人間も虫も無いわ！愛を獲得出来ればそれが勝者！一度言ってきなさい！」

「と言われましたので… 私自身は… その… 主様でも… というより今日のおかげで主様が良いのです！」

あゝ… 申し出は嬉しいんだが「認めん！私は認めんぞお！」来たな

親バカ

「大事な1人娘をいくら精霊界の主でも渡せん！」

「…ですがお父様…」

「娘の頼みでも駄目だ！私は認めん！」

…時間かかりそうだ… おっとそうだ

「ちよっとお引きと話してくるよ」

「はい、わかり「認めんぞおおおおお！」… お父様？」

「ひっ！むむむ娘よ… そっそそそんなオーラをださな」

…ん？今悲鳴が聞こえたようだ… 気のせいかな

「デーモン居るか？」

「ここに…」

「デーモン、もしかすると俺はもうすぐしたら人間界に戻るかもしれない」

「それは残念です…」

「そこでだ…お前は万魔殿には帰れぬ場合パペットキングの城を訪れよ、これは俺からの依頼の手紙だ。お前が住めるように書いている」

「ありがとうございます主」

俺はデーモンに手紙を渡した

「後1日、護衛を頼むぞ」

「御意！」

そしてお姫様が用意してくれた部屋で1晩過ごし目が覚めたら

「お前が迎えか？魔法神官？」

「ええ、私です」

周りは真っ白…最初のアレだなうん

「最後の試練を始めます、こちらの扉に入ってください」
そう言われて扉が出てきた

「この先に試練が待っております故」

「…外見めちやくちや幻魔の扉なんだが…」

嫌な予感しかしないのだが…

「考えても仕方ない、入るか」

俺は自らの手で扉を開けた

S i d e 人間界 喬

「やっと三幻魔を封印出来たよ…京哉」

2日前…十代さんがセブンスターのリーダーであった影丸理事長に勝ち三幻魔は再度封印されて私達は元の生活に戻った…京哉が居

ないのを除いて…。鍵の争奪戦中、私達はレッド寮の京哉の部屋に行き掃除や京哉の部屋で過ごしたりして京哉の帰りを待ち続けた。でも…京哉は帰って来なかった…、そして今私は京哉の部屋に居る「主、大丈夫か？」

「大丈夫だよ…メビウス」

私はメビウスに…そして自分に言ったけど…嘘だ。本当は泣きたい…京哉に会いたい…ずっと京哉が私の頭を過っていた…笑った顔…真剣な顔…喜ぶ顔…ずっと過っていた…

「待つてるから…私は待ち続けるから…」

「主…」

だから京哉…はやく「神谷喬だね？」

え？

「だ、誰ですか…？」

声をかけられ振り返るとサングラスをかけ全身スーツの男性が立っていた

「私ですか？そうですね…貴女達を壊しに来ました」

「っ！」

な、何この人…嫌なオーラが…

『喬（ちゃん／神谷／神谷君）！』

「皆…」

クロノス先生以外の鍵の所有者だった皆に凜、倭、涼が来てくれた

「喬！コイツは！？」

「ほう…ちょうど良いですね…貴方方も消す予定でしたし…」

「誰だてめえは！」

「くくく…皆様私の闇にご招待しましょう」

その直後…私達は黒い何かに包まれた

うつ…ようやく目が慣れてきたな

「ここは…？先ほどと違い真っ暗だけど…」
宇宙空間みたいだ…

《貴様が新たな精霊界の主か？》

「っ！誰だ？」

《そう警戒するな立花京哉よ》

《我々は君に最後の試練を与える者だ》

そして黄、青、赤の炎が現れそれぞれモンスターへと姿を変えた

「お、お前達は！」

S i d e 異界 喬

「く…ここは…」

私が目を覚ました時、周りは真っ暗で大きな球体が1つ、そこに皆が居た…。けど明日香や三沢君は気絶してる…。倭達が何か言っているけど球体に音が妨害されているようだった

「お目覚めかな？神谷喬」

「貴方は…！」

私の目の前にあの人が居た

「改めて言おう、私は終焉の意思と申します」

自ら終焉の意思と名乗った男はデュエルディスクを構えて居た

「その貴方が何のようなの？」

「目的は一つ…精霊を持つ貴女方を終焉に落とす事、それでは始めよう」

デュエルは…避けられない…

「京哉が帰って来るんだ…貴方は倒します！」

「「デュエル！」」

S i d e 倭

な、何やこの膜は！？触つても変な感触の上に出られへん！

「くっそー！なんだよこれ！」

「くっ！神谷君に応援が出来ないなんて…おい雑魚共！何か方法は無いのか！」

『オイラ達にも判らないよアニキ』

「フレイはどうや？」

『私でも無理だよー！』

「リアはどう？」

『アタシも駄目ね…』

「喬さんを祈るしか無いですね…」

外からののはとりあえず聞こえる…頼むで、喬ちゃん

S i d e 喬

喬 L P 4 0 0 0

終焉 L P 4 0 0 0

「私のターンドロー！」

この手札なら大丈夫だね！

「私はカードを2枚伏せて次元合成師を守備表示で召喚」

次元合成師 守備 2 0 0

「更に次元合成師の効果発動、自分のデッキの1番上のカードを除外してそのカードがモンスターカードだった場合このカードの攻撃力はターン終了時まで500ポイントアップする」
そして1番上のカードは…邪帝ガイウス
「デッキの上のカードは邪帝ガイウス！ガイウスを除外して次元合成師の攻撃力は500アップ、ターン終了」

次元合成師 攻1300 ↓1800 ↓1300

「いきなりデッキトップを除外する…まあ何が来ても私のデッキには勝てないがね」

「判らない事は早々に決めるのは良くないよ」

「いいえ…決まっていますので、私のターンドロ」

カードを引いた瞬間すさまじいオーラがカードから放たれた…三幻魔の時に感じたのと同じ…

「ふふふ…面白いカードを引きました、罠カードを3枚セットします」

…まさか…そんなわけが…

「フィールド上の罠カードを3枚墓地に送り神炎皇ウリアを特殊召喚！」

神炎皇ウリア 攻0 ↓3000

「何で…貴方がそのカードを…」

「くくく…何でだろうねえ…ウリアの効果発動、相手フィールド上セットされている罠カードを1枚選択し破壊します。私はそちらのカードを破壊！トラップ・ディストラクション！」
破壊された私のカードはガードブロック…

「案外普通のカードを破壊しましたか…バトルです、ウリアで次元合成師を攻撃！ハイパー・ブレイズ！」

くっ… けど！

「次元合成師の効果発動！このカードが破壊され墓地に送られた時、除外されているカードを自分の手札に加える！私はさっき除外した邪帝ガイウスを手札に加える！」

「くくく… 魔法カードを2枚伏せてターン終了だ」

また… じゃあ次はハモン…

「私のターンドロー！」

くっ… 予想外だった… けど！

「手札を3枚伏せてターン終了！」

まだ諦めない！

「くくく… 私のターンドロー… やはり私の勝利が確定だな！強欲な壺を発動！カードを2枚ドロー！」

また… 笑った…。ハモンが来る！

「まずウリアの効果発動！そのカードだ！トラップ・ディストラクシヨン！」

私が破壊されたのは激流葬…くっ…

「怖い怖い… 魔法カードを伏せて自分のフィールドの魔法カード3枚を墓地に送り降雷皇ハモン特殊召喚！」

降雷皇ハモン 攻4000

「ハモンまで…」

なんでこのカードも… まさか… ラビエルまで…

「くくく… ハモンでダイレクトアタック！失落の霹靂！」

私は攻撃は受けない！

「伏せカード発動！攻撃の無力化！モンスター1体の攻撃を無効にしバトルを終了させる！」

これで攻撃は通らない…

「残念ですねえ… ターン終了です」

「私のターンドロー！」

これで凌ぐしか…でもガイウスに繋がれば！

「モンスターをセットしてターン終了！」

「私のターンドロー、ハモンで攻撃！」

「私のモンスターはマシユマロン！戦闘破壊されず1000ポイントのダメージを受けてもらいます！」

終焉 LP 4000 ↓ 3000

「悪あがきを…フィールド魔法失落園を発動」

周りが枯れた木々…枯れた地面に変わった…

「私のフィールド上にハモン、ウリア、ラビエルの内1体以上居る場合1ターンに1度コントロールはカードを2枚ドロウ出来る。私は2枚ドロウ」

引いた時、終焉は笑い始めた

「これは面白い！手札から幻魔の殉教者を発動！」

「幻魔の…殉教者…」

あの時と…十代さんと同じ…

「自分フィールド上にハモンとウリアが居る時に発動可能、幻魔トークンを3体特殊召喚する…そしてこの3体を墓地に送り幻魔皇ラビエル特殊召喚！」

幻魔皇ラビエル 攻 4000

「ラビエルが…」

とうとう現れてしまった…私は…この3体に勝てるの…？

京」とりあえず三日くらい空けてくださいな、それでは

第三十五話 帰還した主は神を呼ぶ！（前書き）

さあ題名から外れます！ええ外れます！

後3日程開けると言っていましたでしたが実はその私用が潰れまして明日も普通に更新できます！

それでは実際の題名からかなり外れた京哉をご覧ください！

第三十五話 帰還した主は神を呼ぶ！

S i d e 凜

「何でアイツが三幻魔を！」

「神谷君！」

「このっ！…アカンわ…」

「喬さん…頑張って…」

喬ちゃん…今は大丈夫だけど必ずあの人は壁を倒して来る…

「京哉君…早く帰って来て…」

普通ならあり得ないけど…ボクは京哉君を信じてるから…

S i d e 喬

「ふははははっ！貴様に私の幻魔は討てぬ！」

確かに…私のデッキは攻撃力が高くて2400…だけど！1体1体は京哉との絆なんだ！

「私のターンドロー！」

幸いこのカードは破壊されなかった、だから発動する！

「伏せカード発動！死霊ゾーマ！このカードは罨モンスターとして
守備表示で特殊召喚する！」

死霊ゾーマ 守800

「それには攻撃出来ませんねえ…」
「だけど…このターンさえ凌げば…！」

「モンスターをセットしてターン終了です」

「私のターンですね…ドロー…くくく…あはははっ！」

「っ！？な…何？」

「何が可笑しいの…？」

「いやあ君が恋しい人が消えた原因を引いたからねえ…」

「っ！何で…何でそれが…」

「魔法カード発動、幻魔の扉」

見たくも無かった…京哉を奪ったカード！

「効果は判ってますね、ちなみにちょうど良いところに精霊達も居ますし…」

「まさか！逃げてメビウス…！」

「私が魂の代価にするのはここにいる精霊達！」

S i d e 涼

そんな！精霊を対象だなんて！

『クリ〜！』

「ハネクリボー！」

『『『ア、アニキ〜！』『』『』

「お前達！」

『や、倭〜！』

「フレイ！」

『ごめん…リン…』

「リア！」

私は見えるけど精霊が居ない…でも喜べる訳がない！

『すまん！主！』

「メビウス！」

喬さんのメビウスまで消えてしまった…しかも私達を囲んでいた膜

が消え始めた

「そろそろ終わりだからね…君達で次に戦う人でも決めておいてくれ…私は君のマシユマロンを特殊召喚しよう、それじゃ…ウリアのトラップ・ディストラクションで最後のカードを破壊、幻魔皇ラビエルでダイレクトアタック…バイバイ…天界蹂躞拳」

ラビエルの拳が…喬さんを殴った

Side 喬

喬 LP 4000 ↓ 0

そんな…負けた…

「ふふふ…約束通り。終焉に落とさせて貰うよ」

終焉の意思の背後から…無数の手が私に伸びて来た…

「『『『喬（ちゃん／さん／神谷君）！』『』『『

駄目だ…助けて…助けて…

「京哉っ！」

思わず目を閉じ呼んでしまった…助けて欲しい人を…

私が無数の手に捕まる事が無く前を見ると幻魔の扉が手を阻んでいた

「バカな！？何故幻魔の扉が！？」

その言葉に扉が開き

「そりゃそうだ、俺が貴様を潰すからな」
私の…いや、私達が待っていた人が…京哉が立っていた

S i d e 京哉

俺は喬をいたぶっていた見ていた、倭のカードに居た奴だな

「何故貴様がここにいます！立花京哉！」

「答えは簡単、貴様を潰す為にアッチ側から帰って来た」

まあ最後の試練は正直選択肢外の事をしたがな

「ぐぐぐ…」

「居るか皆？」

「我等皆ここに居ますよ主京哉」

「まあ入るのに時間は掛かったがな」

「御無事で何よりです京哉殿」

「待つてたぜ旦那！」

「私を待たせ過ぎですわ！」

「お帰り！お兄ちゃん！」

「京哉様…あの…」

「何も言っな、あれは仕方ないからな。次を見ろよ」

「はい…」

皆健在だな…流石俺の家族だ！

「…」「京哉（君／さん）！」「…」

「よう、その気絶グループ含めて無事だな？」

「お前今まで何処に！？」

「それは後回しだ十代！まずはコイツを叩く」

後それと…

「喬」

「…京…哉…？」

俺は振り返り喬の頭を撫でた

「頑張ったな、後は任せてくれ」

「…うん…京哉…」

「ん？」

「頑張つて…」

そんな笑顔で言われちゃあ…

「勿論だ」

頑張らない男は居ないな

「カイト、ゼロ、アキト、フェルは消えた精霊のサルベージ。アオイ、アリス、姫は皆を頼む」

『『『『『『了解！我等の主よ！』『』『』『』』』』』』

アオイ達は喬達を自分達で作った結界に入れカイト達はそれぞれ散った

「さあ断罪の時間だゴミ野郎」

「いくら貴方でも私の幻魔には勝てない！」

「「デュエル！」」

Side 喬

「京哉が戻って良かったぜ！」

「ふん！心配かけさせやがって！」

「でもホンマに良かった…」

…京哉…

「喬様、あの…」

アオイが言おうとしてる事は判ってる…

「京哉が言ってたよね、何も言わなくていいって…だから何も言わないで」

「…私は…」

「京哉が帰って来たんだよ？一緒に喜んで応援しよ」

「…はい」

「でも京哉君デッキどうするんだろ…」

「そうですね…皆さんここに居ますし…」

大丈夫…京哉は必ず勝つから…！

Side 京哉

京哉 LP 4000

終焉 LP 4000

「私のターンドロ―！では早速…」

来るか幻魔よ…

「私は魔法カードを3枚伏せ魔法カードを全て墓地に送り降雷皇ハモンを特殊召喚！」

降雷皇ハモン 攻4000

「更に失樂園を発動！ハモンが居る事によりカードを2枚ドロ―！更に失樂園を張り替えカードを2枚ドロ―！」

…そしてウリアが出てくるか

「畏カードを3枚伏せ畏カードを墓地に送り神炎皇ウリアを特殊召喚！」

神炎皇ウリア 攻0 ↓ 3000

「ターン終了です、どうですか？私の幻魔は？」

「はつきり言うが…お前じゃ今の俺の相手じゃないな」

「なんだと…！」

「わりの手札は完全なんだ…」

「俺のターンドロ―！」

ふっ…幻魔を叩く準備は整った！

「魔法カード迷える子羊を発動、子羊トークンを守備表示で特殊召喚！更に強欲な壺を発動しカードを2枚ドロ―！カードを4枚伏せてターン終了だ」

羊トークン 守備0×2

さて…来いよ幻魔

「私のターンドロ―！」

「その瞬間伏せカード全て発動！まず1枚目！死霊ゾーマ！2枚目！メタルリフレクトスライム！3枚目！ストロングホールド！ラスト4枚目！血の代償！」

死霊ゾーマ 守800

メタルリフレクトスライム 守3000

ストロングホールド 守備2000

「壁ですか…大見得はつてそれですか…」

「甘い…これが俺の勝利の公式だ」

「まあ良いです、私は失樂園により2枚ドロ―…くくく…幻魔皇が来ますよ…立花京哉」

「来いよ、俺は負けないからさ」

「ふふふ…幻魔の殉教者を発動、幻魔トークンを3体特殊召喚し幻魔トークン3体全て墓地に送り幻魔皇ラビエルを特殊召喚！」

幻魔皇ラビエル 攻4000

「更に手札からアースクエイク発動、フィールド上の全てのモンスターが表示形式を変えます…」

…決めにくるな…

Side 倭

どういう事や…幻魔を全て守備にするやなんて

「アイツプレイミス過ぎるだろ!？」

「いや、何か意味があるんだ!」

…アレで多分決めにくるわ…京哉君頑張って…

「私は三幻魔を除外し三幻魔を融合させます」

「………なっ!？」

嘘やろ…あの3体の融合やて!?

「現れなさい!混沌幻魔アーミタイル!」

…三幻魔が合体したモンスター…アカン、ツツコミたい…

「このモンスターは自分のターンの間攻撃力が10000となります」

混沌幻魔アーミタイル 攻10000

…あゝツツコミたい!

「無茶苦茶な外見な上に無茶苦茶な攻撃力だ!」

十代君ナイス！ウチがめっちゃ思った事や！…にしても京哉君大丈夫やんな…

S i d e 京哉

「ふはははははっ！これで貴様は終りだあ！立花京哉あ！」
「終わり？そりゃこっちの台詞だぜ」

「アーミタイルで子羊に攻撃だ！虚無幻影羅生悶！」

「ライフ500支払い血の代償の効果発動！3体のモンスターを生け贄に捧げる！」

「何い！？」

「主の契約の下、我が力の剣よ！現れる！オベリスクの巨神兵！」

オベリスクの巨神兵 攻4000

「…………オベリスク！？…………」

「バカな！だが！攻撃力はアーミタイルが上だ！アーミタイルよ！神もろとも消しされ！虚無幻影羅生悶！」

…アーミタイルよ、今は眠れ…精霊界で三幻魔と共に一時眠るといい

「オベリスクの最上特殊能力発動！フィールド上のモンスターを生け贄に捧げ攻撃力を変化する！ソウルエナジーMax！」

オベリスクの巨神兵 攻∞

「バカな！？…なんて…こんな事が…！」

「そして攻撃宣言したアーミタイルの攻撃がオベリスクに向けて来る」

「や、止めるアーミタイル！止める！」

「迎撃しろ！オベリスク！ゴッドハンドインパクト！」

オベリスクが手を組みアーミタイルを迎撃し破壊は出来ないものの
ダメージの衝撃は終焉へと通った

「うああああああ！」

終焉 LP 4000 ↓ 0

「そんな…私の幻魔が…ひっ！」

三幻魔とアーミタイルは終焉を見下ろして立っていた

「くっ、来るな！来るなあああああ！」

「精霊の怒りを受けてくたばれゴミ野郎」

俺は三幻魔達に拉致られるアイツを無視して喬達の下に行った

第三十五話 帰還した主は神を呼ぶ！（後書き）

京「ヘル！アンドヘヴン！」

待つて待つて待つて！

京「ゲム・ギム・ガン・ゴー・グフオ……」

ちよっ！ホントに止めっ！

京「ウイイイイイイイイイイタアアアアアアア！」

ぎやああああああああああ！

京「ふう……すつきりした。申し訳無い……オベリスクの登場とオベリスクの効果が漫画効果で」

まあね、次は皆に話せよ

京「了解。精霊界の話はどうするの？」

まあクロノス以外の鍵の所有者と利光と翔は見せるから大丈夫だよ。ただ翔にブラマジガールは見せないけど

翔「何でツスカ！」

京「うおい！翔いつの間に！」

翔「どうでもいいツス！何で見せないんスカ！？」

だっってお前下心丸見えだし

翔「うっ！……だって京哉君とアニキはモテてるし……」

京「俺はモテて無いって！」

翔「嘘だっ！倭さん達と良く喋ってる上に女子から声かけられるじゃないか！？」

京「倭達はいつもだし女子達はデッキ診断の話だぜ？」

翔「羨ましいツス！僕なんて……僕なんて……うわあああああ！」

翔は逃げ出した

京「……ドンマイ翔……まあ次話を楽しみにしてて下さい」
それでは！

第三十六話 本当の事の話しと帰還パーティー！（前書き）

今回は三幻神を持つ理由と帰還パーティーです！
ではどうぞ！

第三十六話 本当の事の話しと帰還パーティー！

「なあ京哉、あの後何処に行ってたんだ？」

あのデュエルの後皆で人間界に戻りレッド寮の食堂で俺の今までの経緯を十代が聞いてきた

「話しても良いけど今から話す事は全部実話だからな」

俺はそうして語り始めた…精霊界の事、試練の事、精霊界での出来事、最後の試練…そして俺が精霊界の主であること

「し、信じられないわ…モンスターの精霊だなんて」

三沢と明日香が動揺していた

「しかしここに居るメンバーで明日香君と俺と翔と利光だけが見えないとは…」

帰って来た直後にトシと翔に見つかり飛び込まれたのは今から20分前の事だ

「見えない訳じゃ無いよ、見ようとしてないだけさ」

「どういう事や？」

俺の言葉に倭が聞いてきた

「つまり俺を含めて出会った皆は見たいという自分の意思とモンスターとの波長が合った時によりやく見れるんだ」

（これは作者の設定です）

「じゃあどうすれば見れるようになるんスカ？」

いや実はこれめちゃくちゃ簡単なんだよな…

「まずトシ、お前のデツキ上会いたい精霊を頭で考えて会いたいと願ってみ」

「え？俺ツスカ！？…良いツスケど…」

「考えてからソイツに会うと必死に願う。これで終わり」

「嘘お！これで終わりなん！？」

まあこれは新しく見たい奴がやるんだけどな

「一番波長が会うのは自分が1番良く使うカードだからな。ちなみに俺はトシの精霊が見えてる」

いやあゝ以外なモンスターだな。しかもチビ化してるぞ

「ボクにも見えてきたよ」

「ホントだぜ！」

「ええい！何故俺様はおじやまなんだ！」

『良いじゃないアニキ』

「ホンマや、かわええなあゝ」

「急に出てきたけど…」

「それは今トシが意識しているからな」

「可愛いですね」

もう良いかな。皆が見えてきてるし

「トシ、目開けてみな」

「…うう…うおっ！お前…なんだ！？」

『きゅ』

いやあゝチビ化は焦ったな。しかも3匹も居るじゃん、仮面竜が

「ア、アニキ…コイツ等まさか…」

「そ、精霊」

成功したか、良かった良かった

「トシ成功したから次は明日「ええっ！サイバーブレイダーが居るわ！」明日香も成功じゃないか」

『ようやくね、初めまして明日香…と言えば良いのかしら？』

「そうね…精霊としては初めましてね、サイバーブレイダー」

じゃもう明日香はいいな

「京哉、やつても俺は見えないのだが…」

三沢の場合はキツイな…なんせ6つもデッキあるし…きゅぴーん！
「三沢、これなら波長がぴったりだぜ」

俺は裏のままカードを渡す

「見るなよ三沢、絶対合うからさ」

そうして三沢はトシと同じく目を閉じる。ちなみに渡したカードは…

『初めましてです！マスター！』

「…京哉」

三沢に肩を掴まれた

「なんだ三沢？」

d (、、) ぐっ！

「ふっ… まあこの前お前が気に入ってると言ってたしな。大事にしてやれよ」

「勿論だ！」

渡した精霊はピケルだ。この前三沢がピケルについて俺と論争していたからな

「京哉く〜ん！僕見えないッス〜！」

… なんか原因が判るような気がする

「何を考えてた？」

「勿論ブラ「無理だなそれは」何故ッスか！？」

「お前持つて無いし」

後良からぬ事考えてそうだから

「そうッスね… じゃあ…」

素直にスチームジャイロイドを思っているよ

「ところで京哉、なんで神のカードなんか持ってたんだ？」

おおー！それを今聞いちゃうか十代

「出来れば見せてくれよ！」

「見てもいいが… ほら」

そして出した3枚のカードは…

「あれ？絵柄とテキストと攻撃力が載ってませんよ京哉さん」

そうだ。絵柄、テキスト、攻撃力が真っ白で枠がそれぞれ赤、黄、青のカードだ

「まあ理由があるんだ。あれは最後の試練の時…」

回想 精霊界

「お前達は！」

《何を驚く？精霊界の主よ》

「ラー…オシリス…オベリスク…」

《そうだ、かつてファラオと共に戦いファラオと共に我等は眠りについた三幻神》

「そのお前達が何故…？」

《精霊界、そして人間界に終焉が来ている》

「終焉？…倭のカードに居たアイツか！？」

《そうだ…そして世界を救うために我等は精霊界の主を探していた》
そして俺と波長が合ったか

《そうだ…そして魔法神官が与える試練を全て切り抜けた》

《そして我等が与える》

《最終試練は》

《貴殿の命を握る…》

《立花京哉よ》

《精霊界と人間界、どちらを救う》

…愚問だな神よ

「答えはただひとつ！どちらも救うに決まってるだろ」

《やはりな…我的勝ちだなラー、オベリスクよ》

《流石だなオシリス》

《ちっ…仕方ないか》

…え？何この神達、人の選択肢で賭事してたの！？

《それでは契約だな。立花京哉、我等三幻神を授けん》

「…ってな感じだな契約内容が私用で出さなければオツケーだってさ」

「…えらい軽い神やな…」

「すっげー京哉！はゝ俺も使ってみてえゝ」

「私用では無理だったの」

もう疲れたよ…

「俺寝る…いろいろ疲れた」

「早くないかな京哉？まだ5時だよ…」

「大丈夫…飯には間に合わせるから」

さっさと寝よう…

「それじゃちよつと寝てくる」

「おう！今日はパーティだ！」

はあ…後よろしく

「…アオイ、居るか？」

「はい…」

まだ落ち込んでるな

「いつまでしょげてんだよ」

「…私は京哉様を裏切ってしまったて…普通ならそんな私は unnecessary のに…」

はあ…このど阿呆め…

「アオイ、ちつと歯食い縛って」

「え?」このど阿呆が!「いひゃい!」

はっはっは…ハリセンを食らわしてやったぜ

「き、京哉様!?!いきなり何を?」

「いつまで落ち込んでんだよ、俺は気にしてないってーの」

「で、ですが「まゝ」だ言うか!このっ!」ひ、ひょうやひやまゝ!」

次は頬を引っ張っている。全く…

「主の言葉を聞けない奴はこうだ!」

「いひゃい!ひょうやひやまゝおひゆるひを」

はっはっは…楽しいなあ

「よし、止めておくか」

「うゝ京哉様酷いです」

あ、ぷいっに向いた

「わかったか?もう気にするなよ」

「です」もう一発受けたいか?「いえ…」

それでよし、そろそろ寝るか

「俺は寝るから19時になったら起こしてくれ」

「はい、おやすみなさい京哉様」

S i d e アオイ

「くかー…」

京哉様…ホントに変わらない方です。私達を信じ絶対に裏切ら無い方…

「ご心配かけてすみません京哉様…」

「アオイ…」

「はい」

「また…言ってたら…うゝ…ハリセン…1000発…な…」

「はい！」

貴方は私を信じてくれました…だから私は貴方を守ります！そして…

「大好きです、京哉様」

私の本音…次は起きてる時に言いたいです

S i d e 京哉

「えゝ三幻魔復活を阻止し更に京哉君が帰って来たので全部お祝いするパーティを始めます！」

レッド寮外にて机を十代達男性陣が準備し料理をレッド寮の食堂のキッチンでフル活用し明日香達女性陣が作り、準備した机に置いている。そう、バイキングだ。音頭を取っているのは鮫島校長だ。帰って来たのを皆が用意中に知らせると抱きつかれたよ…心配してくれたのは嬉しいけど苦しかった

「それでは乾杯！」

『かんぱーい！』

ちなみに居るのはレッド寮の皆にイエロー寮の半分、明日香達の料理目当てに来た男子ブルー寮の3割のファンクラブ、女子ブルーがちらほら。そして戦ってくれた皆だ

「うめえ！京哉！これ美味いぞ！」

「ふむ…塩加減もバッチリだな」

「て、天上院君。君がこれを作ったのかい？」

「ええ、美味しく出来てるかしら？」

「も、勿論！」

「美味しいな」

『羨ましいですマスター、私も精霊界なら作れるです』

「そうだな、京哉に頼んで食べに行くよ」

「喬ちゃん初めてやのに美味しいやん！」

「うん…私もこんなに美味しく出来たの嬉しいな」

「凜さんそれ何をかけたのですか？」

「ん…調味料全部だね」

「アニキが作った飯は無いのか！？」

「京哉君は寝てたツスよ利光君」

「そうだった！」

「とっても美味しいねえ」

「本当ですね！」

「ト、トメさんの料理も美味しいですぞ！」

「嬉しい事言ってくれるねえ校長先生」

皆楽しんでるみたいだな

「失礼、君が明日香の友達の京哉君だね？」

声をかけてきたのは吹雪さんだった

「吹雪さん！体調は大丈夫ですか？」

「ああ、君達のおかげだね。ふゝむ…」

何だろうか？

「何でしょう？」

「…君とは良い友人になれそうだ、僕と同じ感じがする」

…俺も同意見だ、同じ祭魂を感じるぞ

「さてここで！京哉君& a m p・十代V S利光君& a m p・翔君の
タッグデュエルを始めます！」

…は？まてまてまて！

「聞いて無いぞ俺！」

「そりゃあウチが今思いついた事やからな」

「…何それ…」

「おおお！流石だぜ倭！」

…まあいいや、せつかくのパーティだし

「それじゃ飯が飛ばない様に机をどけよか」

倭の指示で真っ先にファンクラブが動いた

「京哉君出来たで〜！」

ただ普通に戻したただけだろこれ…

「まあいいつかあ…十代、トシ、翔！楽しむぜ！」

「よっしゃ！やろうぜ京哉！」

「今回はアニキに勝ってみせるぜ！」

「弟分パワー見せてやるッス！」

「『『『デュエル！』『』『』』」

第三十六話 本当の事の話しと帰還パーティ！（後書き）

京哉「ただいま」

アオイ「京哉様お帰りなさい！」

ああ、爽やかな笑顔だアオイちゃん。いつそ俺の「サイレントバーニング！」ぎゃあああああ！

ア「寝言は寝て言うものですよ？」

京「全くだ。大丈夫か？アオイ」

ア「はい、大丈夫ですよ」

…くそう…そういえば明日から練習が6時半から…早いなあ

京「まあドンマイ」

うざっ！死ねよ！

京「だが断る」

ア「馬に蹴られて地獄に落ちては如何ですか？」

うわあああああん！皆冷たいよおおおおお！

第三十七話 Wヒーロー！アニキ分の力を見せてやる！それとデザートだ（前書

今日もこれ投稿後早速寝ます。

でわどづぞー！

第三十七話 Wヒーロー！アニキ分の力を見せてやる！それとデザートだ

十代&翔・京哉 LP4000

利光&翔 LP4000

「俺から行くぜ！ドロー！」

十代から始まったタッグデュエル。俺は久しぶりのヒーローだ、頼むぜロ

『勿論だ京哉』

「E・HEROスパークマンを召喚！」

E・HEROスパークマン 攻1600

「カードを2枚伏せてターン終了だ！」

「よっしゃ！俺のターンだ！ドロー！」

俺が居ない間強くなったか見せてもらうぜトシ

「アックスドラゴニート召喚！カードを1枚伏せてターン終了だぜ」

「よし、俺のターンドロー」先ずは定番と行こうか

「E・HEROエアーマン召喚！エアーマンの効果発動、デッキに眠るHEROと名のつくモンスターを手札に加える。俺はE・HEROアイスエッジを手札に加える！」

E・HEROエアーマン 攻1800

「カードを2枚伏せてターン終了」

「僕のターンドロー！」

翔もあの弱気からの進化見せてくれ

「僕はジャイロイドを守備表示で召喚！カードを1枚伏せてターン終了！」

ジャイロイド 守備1000

「俺のターンだ！ドロー！」

さて…お互い伏せカードはある、どう出ようか

「手札から融合を発動！手札のフェザーマン、バーストレディを融合！現れる！E・HEROフレイムウイングマン！」

E・HEROフレイムウイングマン 攻2100

来たか、十代のフェイバリットカード！

「だがさせねえぜ！伏せカード発動！威嚇する咆哮！」

「くっ…ターン終了だ」

「俺のターンドロー！」

ふむ…どう来るか、トシ

「サファイアドラゴン召喚！」

サファイアドラゴン 攻1900

「手札から魔法カードドラゴニックタクティクス発動！フィールド上のドラゴン族を2体生け贄に捧げデッキからドラゴンを特殊召喚する！こい、タイラントドラゴン！」

タイラントドラゴン 攻2900

このタイミングでタイラントかあ…

「よしバトル！タイラントドラゴンでフレイムウイングマンを攻撃！」

残念ながらそれは断るぜ

「十代、任せろ！伏せカード発動！和睦の使者！」

破壊とダメージはこれで逃れた

「くっそー、ターン終了」

「サンキュー、京哉！」

「ああ！俺のターンドロー」

来たか、行くぜ！

「手札から融合を発動！手札のアイスエッジとエアーマンを融合！
コレが俺の切札、E・HERO！アブソルートZero！」

アブソルートZero 攻2500

「さあ行くぜ！ゼロ！摩天楼スカイスクレイパー発動！」

『おう！行くぞ！』

「まずスパークマンでジャイロイドを攻撃！続けてゼロで攻撃！瞬間凍結！」「ジャイロイドが攻撃対象になった時、僕は伏せカード発動！スーパーチャージ、それにチェーンして利光君のミラーフォース発動！」やるようになった！だが！

「伏せカード発動！魔宮の賄賂！相手の魔法、罠の発動を無効にし相手はカードをドローする！」

本来は便乗とかのコンボなんだが手札コストとかに困る時があるためコイツを入れた…まあそれが原因で負ける時があるけどな

「うう、でもスーパーチャージは無効にならないッス！僕は魔宮の賄賂の分を含めて2枚ドロー！」

これでジャイロイドは破壊した！

「そしてフレイムウイングマンでタイラントを攻撃！スカイスクレイパーシュート！」

E・HEROフレイムウイングマン 攻2100↓3100

「うぐう！」

利光 & a m p・翔 L P 4 0 0 0 ↓ 3 8 0 0

「更にフレイムウイングマンの効果で破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

「「うわあああ！」」

利光 & a m p・翔 L P 3 8 0 0 ↓ 9 0 0

「ターン終了だ」

「くっ…僕のターンドロー！」

翔はカードを引いた時よしと呟いた…切札が来るか

「僕はビークロイド・コネクション・ゾーンを発動！手札のスチー
ムロイド、サブマリンドロイド、ドリルロイドを融合！スーパービー
クロイド・ジャンボドリルを召喚！」

スーパービークロイド・ジャンボドリル 攻 3 0 0 0

「厄介なカードが来たか、来るぞ十代！」

「おう！」

「行くよ、アニキ！京哉君！」

どっちに来るか…

「利光君！」

「フレイムウイングマンだ！」

対象はそっちに来たか！

「十代！」

「わかってる！伏せカード発動！ヒーローバリア！攻撃を1度だけ無効にする！」

「…ターン終了だよ…アニキ達には勝てないなあ」

「全くだな翔」

そう言うなよ

「楽しかったぜ、翔！利光！」

「またやろうぜ！」

「うん！」

「勿論だぜアニキ！」

「俺のターンドロー！バトル！フレイムウイングマンでジャンボドリルに攻撃！」

「くっ！」

利光&翔 LP900↓800

「フレイムウイングマンの効果発動！破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！」

「ぐわあああああ！」

利光&翔 LP800↓0

「そこまでや！十代君と京哉君の勝ち！」

「ガッチャッ！楽しいデュエルだったぜ！」

いやあゝ気持ち良いねこういう決め台詞

「メイニンイベントも終わり最後のイベントや！京哉君お手製のデザート皆で食べるで！」

『やったあああああ！』

何も判らないイエロー男子、ブルー男子、ブルー女子は困惑していた
「それじゃ早速作るか！今回は特別に皆の前で作るぜ！デザートは秘密だ！」

そうして作ったデザートはホットケーキ。最初は小馬鹿にしていた
何も判らない奴等は一皿食べたが一気にがつつき始めた

「相変わらず美味しいな京哉！」

「何でこんなに美味しいんスか!？」

「女の子の舌をわかってる味ね」

「俺も料理を始めようかな…京哉、今度教わりにくるよ」

「バカな!これが貴様のデザートだと!？」

「美味しいツスアニキ！」

「京哉君!ウチにおかわり頼むわ！」

「あつ!ボクも！」

「私もお願い京哉…」

「私もお願いします京哉さん」

「これは美味しいですね京哉君」

「今度私に教えておくれよ」

さあまだまだあるんだ!じゃんじゃん食べ皆!

次の日、食い過ぎメンバー（特に十代、倭、利光）は腹をいためて
休んだそうだ。ちなみに彼等はうなされたようだ、その現場がこちら

「京哉あ…すまねえ…もう…食べ、ない…」 by 十代

「アニキイ…クリイムはもう…無理…おうえ…」 by 利光In
トイレ

「な、納豆もういやや…京哉…君…勘弁して…な…」 by 倭

第三十七話 Wヒーロー！アニキ分の力を見せてやる！それとデザートだ（後書

また感想を言わせてくれ」

京哉「仕方ない、さあ言え」

A m a z o n から届いて開けたらまた入って無かった…しかもシューティングスターも無かったよ…もう覇魔導師いらんよ！
カラクリ完成したから良いけど

京「どっちだよ！」

いやあ〜カラクリ面白いなあ。この小説でも出そう！

京「あれアタッカーシンクロモンスターだろ？どうするんだ？」

出すわけねえだろぶわあ〜か！

京「切り刻んでハムにして店に出そうか？」

すみません京哉さん止めて下さい

京「でどうするんだ？」

勿論募集します！上級のカラクリモンスターのオリ力です！ちなみにカラクリの基本共通効果は攻撃可能なら必ずするのと攻撃対象になった時守備に変更する点が基本共通効果です！導入するか否かは皆様にお任せ致します！それでよろしく願います！

…ぜー…ぜー…無休で言っただぜ

京「お疲れ、んじゃさつさとくたばれ」

…なにこのツンデレマジ死ねよ！（作者自体あまりツンデレは好みませんがツンデレ否定の言葉ではなくツンデレの京哉への言葉です）
京「誰がツンデレだ！この変態作者が！」

うるせえ！俺はクーデレが好きなんだ！

京「いやまあ判らんでも無いが…」

もう寝る…おやすみ

京「そのまま永眠しろクソ作者。はあ…では皆さん、また次回！」
よろしく「さっさと寝ろ！」ぐぶえらあっ！

第三十八話 前風邪でテスト受けてないから今回で良くないとマズい！（前書き

このタイトルですがテストは触れられるだけで行っ事はありません

+ 海度と葵の登場です！

それではどうぞ！

第三十八話 前風邪でテスト受けてないから今回で良くないとマズい！

「来週からテストを行うノーネ」

あゝクロノス久々に見たなあ…それにしてもテストかあ…メンド

「そういえば俺前の受けてないなあ」

だって風邪だったんだもん。家で寝てたんだもん

「京哉前のテスト受けてないよな？」

「風邪だったからねえ」

「今回良くないとマズいツスよ…なんでも成績不優秀者は冬休み無しの勉強漬けらしいツス」

……………

勉強漬けだと！

「鬼かあのかまモドキ目…」

くそう…苛めかここの先生達は

「とりあえず帰ったら勉強しよう。翔、十代。今日は勉強しようぜ」

「ええ」

「でも勉強漬けは嫌ツスから…」

そして授業後俺達は俺の部屋で勉強していた

「京哉、このカードの効果は？」

「ああ、確か守備表示モンスターに攻撃して破壊されなかったらもう1度攻撃出来るだったな」

「京哉君この発動チェインなんだけど…こうなる理由が判らないッ

ス」

「これは非常食で3枚のゴブリンのやりくり上手が墓地に行つて墓地のやりくりが3枚あるから3+1の効果で12枚ドロ―だ」

テストって計算とか英語とかそういうのじゃなくて良かった…俺そ
ういうの全く判らないからなあ

『クリ〜』

『ム〜』

『確かに退屈ですけど京哉様達を待つていましょう』

精霊ズが後ろで退屈そうにしていた。

ちなみにム〜は翔のスチームロイドな

「京哉こんなに来るのになんで受験番号俺より下だったんだ？」

ズブシッ！

「十代…なかなか痛い言葉を言うじゃないか…」

あの時…

よっし！出来た！後は寝よう！

後1分だな！見直し…だ…

しまったあああああ！解答欄をずらして書いてる！

「って事で時間が無さすぎたから出来なかった」

「あゝ…ドンマイッス」

「あゝ疲れたぜ〜！」

「僕も疲れたツス〜」

んゝ時間的にも良いし休むか

「よし、こっからゲームタイムと」

コンコン…

「京哉、誰か来たぜ」

本当だ、誰だろ

「はいはゝい、今出まゝす」

ガチャ

「京ちゃあああああああああん！」

「げぶらぐふおー！」

み…鳩尾…俺に正確なタツクルを正確に鳩尾に当たりに来る人物…

それは

「あ、葵姉…」

「京ちゃん！久しぶり〜！お姉ちゃんは元気だったよ〜！」

あゝ、元気なのは嬉しいけど

「葵姉、早く退いてくれない？」

「やだゝ京ちゃんあつたかいもんゝ」

ちなみに乗られて抱きつかれてる上に倒れてます

「すまん京哉、今の葵は止められん」

そつして出てきたのは…

「海兄！久しぶり！」

「おう、久しぶり。強くなつたか京哉？」

「まあまあね。あ、そうだ。此方は山本海度、今俺に抱きついてるのが海兄の妹の葵」

十代達が空気になつてたよ

「よろしく」

「えへへ京ちゃん」

「よ、よろしく。遊城十代です！」

「丸藤翔です！」

「まあそんなに硬くならなくて構わんよ、俺にタメ語でいいし葵も一緒さ」

…葵姉早く退いてよ…

「ちなみに京哉、葵は半年京哉断ちしてたから多分2週間はこのままだぞ」

「ちよっ！？2週間は勘弁してくれ葵姉！」

「京ちゃん」

うぐぬあああああ！力入れるなああああ！

「それで海度さん、ここに来たのは何でだ？」

「ああ、鯨島校長に用事と丸藤亮とサイバー同士で戦ってみたかったんだが居ないらしいな」

「お兄さんなら海外のアカデミアに留学ツス」

…無視しないで…ああ…視界が…

「ん？やばっ！葵早く退け！京哉が死にかけだ！」

「ええっ！」

さよなら…世界…

「京ちゃあああああん！」

「京ちゃんごめんね？」

誰も助けてくれなかった…しかも皆気づけば退室してた…しかも今葵がまだ抱きついてる…

「あのさ…俺に会ったたびに抱きつくの止めてくれ…」

毎度毎度鳩尾が痛いんだよ…そのせいで鍛えられたけど「だって〴〵京ちゃん可愛いも〴〵ん」

おいおい…俺もう16だぞ…

「はあ…葵姉には勝てないなあ」

「京ちゃんには私には勝てないのだ」

ま、久しぶりにこの笑顔が見れたからいつか

「…「京哉（君／さん）…」「…」

「ん？ぬうおわっ！」

禍々しいオーラを出す4人組と出会った！？どうする京哉！

攻撃 防御 逃亡↑ピッ

駄目だ！オーラに包まれて逃げられない！

「…「何をしてるのぉおぉおぉお！」」「…」

「ぐわあああああ！」

4人組はファイバリットカードを召喚し攻撃した。京哉は9999999999999999のダメージを受けた

京哉は死んでしまった

「そうやったんか」

「京哉が無事って聞いて安堵してたよね…」

「ボクたちもあってみたかったんだよ」

「とっても面白い方ですね」

「皆ありがと。京ちゃんも良いお友達持ってお姉ちゃん嬉しいよ」
この言葉を聞いている今の俺は寮の裏で屋根から逆さに吊るされて

いる…死にそう…

「それじゃ、2人ともここで働くの？」

「ああ、海馬から頼まれてな。教師の枠が2つ程空いているから行けてさ」

ちなみに俺は未だに吊るされている

「京哉…大丈夫なのか？」

「十代、これを外そうとしたら後ろから盛大な攻撃を受けるぞ」
鬼だよあの子達、俺こんな趣味無いよ！

「京哉君の鈍感が祟ったツスよ絶対…」

「面白いから写真を何枚かとおこうか京哉」

「止めて海兄！マジ止めて！」

ぱしゃっ！

夜…

「楽しかったね葵さんのお話」

「うん…京哉が言ってたように優しかったしね」

「京哉さんと言えは何か忘れていないですか？」

「ん…なんやろ…ウチもそれ引っかかって…」

少女達思考中…

『…あぁっ！忘れてた！』

「ぷらーん…ぷらーん…誰か助けて…」

その晩から次の日の昼まで俺は飲まず食わずで吊るされていたままだった

おまけ

「京哉君本当にごめんね！」

「……………」

「葵さんとの話が楽しくって…京哉の事忘れてた…ごめん…」

「……………」

「すみません京哉さん！本当にすみません！」

「……………」

「ウチらが悪かったからホンマに許して京哉君！」

「……………」

1週間この調子で話さなかった

「アニキ！勉強教えて！」

「おう、今行くよトシ」

『京哉（君ノさん）…！』

え？餓鬼だつて？アレのせいではらく縄がめちやくちや怖くなつたんだよ！話したく無くなるに決まってるじゃんか！

第三十八話 前風邪でテスト受けてないから今回で良くないとマズい！（後書き

葵「京ちゃんやったー！ようやく出演したよ」

京哉「俺も嬉しいよ葵姉」

葵「京ちゃん撫でて」

京「はいはい」

なでなでなでなで

葵「えへへ」

海度「京哉、俺には撫でてくれないのか？」

京「男に撫でられて喜ぶバカがいるのか？」

海「お前それゲ「はいストップ！」なんだ京哉？」

京「それは言っちゃったら駄目だって海兄」

海「そうか、それは残念だ」

…ワタシクウキアルヨ

京「知るか、無理矢理話題を振れ」

じゃ振ろうと思ったが無い…どうしょ

葵「なら空気で居なさい。京ちゃんとっても気持ち良い」

…グスン…（ノ　Ｔ）

海「作者ドンマイ」

海度、俺の気持判「るわけ無いだろう」…この冷血軍団め！呪ってやる！

葵「作者鬱陶しいから退いて、バハムート。後よろしくね」

え！？ちよっ！！まっ…じゅん！↑（作者が燃やされて消えた音）

海「それではまた見てくれ、じゃあな」

第三十九話 立場を交換したいって言ってもなあ…（前書き）

…昨日感想が全然来なくて焦ったよ…

今回はカオスさんのオリカが出演します

以前考案して頂いたのですが出せなかったあのカードです
お待たせしましてすみません

第三十九話 立場を交換したいって言ってもなあ…

「今日は新しく先生が来たノーネ」

壇上に立つた海兄と葵姉、勿論容姿は良いので男女からかなりの歓喜が聞こえる

「初めまして、山本葵です。担当は実技と体育です」

「同じく山本海度、担当は実技と数学だ」

「葵先生えええええ！」

「きやーっ！海度先生えええええ！」

はあ…五月蠅すぎな皆

「えゝそれでゝはよろしくナノーネ」

ふわあゝ…眠いから寝るか

「起きろ京哉、次体育だぞ」

三沢に起こされた…よく寝たなあ…

「体育かゝ…嫌な予感がする」

「しかし本当なのか？葵先生の事」

「ああ…ホント。まあ見てたら判る。それじゃ更衣室行こうぜ三沢」

「ああ」

グラウンドに出たとたん

「京ちゃんかつこいいー！」

と言って葵姉が抱きついて来た

「葵姉…、授業早くやろ」

男子からの視線が鬼畜なんだよ

「しょうがないよね…それじゃ頑張つて来るね」

葵姉は女子の方に行った

「…京哉、俺はお前に初めて同情するよ」

「ありがとう三沢…」

今日は野球だった…その時の状況がこちら

「貴様！葵先生とどういう繋がりだ！」

「答える立花！」

と言い寄るエリート思考のブルー男子が言ってきたよ…野球しながら。ちなみに大抵ピッチャーで。そのたびに

「あつぷ！ぜつてー狙つたるアイツ…つてあたあ！」

「痛あ！…うう…次はどんこに硬球が当たった…」

「ちよつ！また…痛い！」

「そろそろうぜえ！うりやあ！」

カイン！

4 打席 1 安打 1 本塁打 4 打点

…アイツ等俺にデッドボールばっかだったよ…しかも満塁で狙ってきたからな

「京哉！今日はどうする？」

「そうだな、三沢も呼んで最終確認してから今日は終わるか」

テスト1日前だから確認程度で終わらすつもりだ

「終わったらパ。プロするか」

「そうだな！」

俺と十代は意気揚々とレッド寮に帰った

「唸れ！SFFことスパイラルフューチャーフィニッシュボール！」

「だあああああ！またそれか！」

「また三振ツス！」

「ふっふっふ…俺の最強投手だから」

「しかしあり得ないな…ダ○ジ○ーブが8回出る上に全部成功だなんて」

いや、俺が驚きだよ…

「おっ、次は十代が投げる番だ」

「しかも次最強投手じゃん！しかもミートデカイ！だけど打つのは大丈夫だ！いけえ！俺のHシンカー！」

「甘い！」

カキイイイイイン！

「嘘お！入ったツス！」

「京哉、まさかとは思うが…」

「ふっ…勿論だ」

「えー！パワーAにミートB！？」

「しかも走力Cに肩Bツスカ！？」

「守力、エラー回避B…スゴいな…」

まああんだけ成功出来ればな

「しかもパワーヒッターに広角打法もちのまさかの打法はオーだ」

（かの有名な一本足打法です）

「投法はトルネードつてのも凄いな京哉」

トルネード取るの苦労したよ

夜…

「よし、お前達の調整も終了！明日は…アオイとアリスにしよう。
頼むぜ」

『お任せ下さい京哉様』

『勿論ぎつたぎたにするよー！』

2人とも大丈夫だな。明日の試験が楽しみだ

「…でさ、なーんで葵姉が俺の部屋来てんの」

「だって私レッド寮の寮長も兼任だよ？皆を起こしにくるのは当然だよ」

アナタイムナンジカシツテマスカ？タダイマアサノニジダヨ？

「俺2時間しか寝てない…」

「あつ…ごめんね京ちゃん、でも京ちゃんには早起きして欲しいから…」

早起き過ぎるよ…！

「少なくとも後4時間半は寝させてくれ…」
眠すぎる…死にそう…

「うん…いいよ…」

はあようやく寝れる…

「葵姉まさかずっと俺の寝顔見てた…？」

「勿論だよ？京ちゃん寝顔可愛いもーん」

只今食堂に居る…変な事されて無いか心配だ

「はい、京ちゃん。ご飯出来たよ」

出てきた料理はメザシに白米、味噌汁に納豆…更に卵焼き

「それじゃいただきます」

「はい、いただいて下さい」

葵姉は隣に座り

「はいあゝん」

卵焼きを箸で掴みしてきた…いや、恥ずかしいんだが

「食えるから問題無いよ」

「久しぶりにしたいの、はいあゝん」

この人は1度始まれば止まらないからなあ…仕方ない

「あゝん…んぐ、んぐ…」

「美味しい京ちゃん？」

「ああ、美味いよ」

そしてこの羞恥プレイが延々と行われた

教室でテスト勉強をしていたら

「京哉君羨ましいツス…」

「どうした翔？」

「朝葵先生があゝんてしてもらったツス！」

とか翔が言ってきた…てか見てたのかよ…じゃ入って来いよ

「案外頼めばしてくれるんじゃないか？」

「…いや、多分無いツスね」

そうですか…おっ

「そろそろだな」

葵姉が入って来て壇上に上がった。まあ男子からかなりの葵先生コールが来たが

「それでは始めますね」

テストが開始した

「十代、どうだった？」

「京哉が出た所があつたから良かったぜ！」

「翔は？」

「僕もアニキと同じッス」

「そういう京哉はどうだった？」

「まあまあだな三沢」

さて、次は実技だな

「その前にちよいとトイレ行ってくる」

「おう！早く戻ってこいよ」

「ああ！」

そろそろ許してやるか

トイレで拒否続けたPDAを見ると…

メール80件

…アイツ等し過ぎな…しかも数件見たがほとんどが反省文

「はあ…」

複数送信つと…

「それじゃ行きますか」

「…またブルーか…」

「そろそろ君をハーレムの座から下ろしてあげるよ」

…ハーレム？俺が？ははっ！あり得ないね。皆友達として接してくれてるだけだし…葵姉は姉さんとして俺を接してくれてるしな

「俺ハーレムじゃ無いんだが…」

「五月蠅い！僕が勝つたら君を取り巻く彼女達を貰うからね！」

「はあ…立場を変えて欲しいのはこっちも同じだっての」

デュエルディスクを構えた

「京哉君、頑張ってな〜！」

「京哉、必ず勝ってね」

「ボクたち応援してるよ〜」

「頑張ってください京哉さん！」

「京ちゃんファイト〜」

あの…君達賭けの対象になってるけど…

「ぐぐぐ…それじゃ始めるぞ！」

「はいはい…」

「「デュエル！」」

京哉 LP4000

ブルー LP4000

「僕のターンンドロー！カードを5枚伏せてジエネティックワーウルフを召喚！ターン終了だ」

ジエネティックワーウルフ 攻2000

…バカだろアイツ

「俺のターンンドロー。モンスターをセットカードを2枚セットしてターン終了」

「僕のターンンドロー！ジエネティックワーウルフで攻撃！」

「ほい罨発動、魔法の筒」

「うわぁっ！」

ブルー LP4000 ↓ 2000

「ぐぐぐ…ターン終了だ」

「俺のターンンドロー、サイレントマジシャンLV4召喚、手札からレベルアップ！を発動。デッキからサイレントマジシャンLV8を

特殊召喚」

『今回早く終わりそうです…』

サイレントマジシャンLV8 攻3500

（だけど攻撃してきたら破壊輪と防御輪のコンボであいつだけダメージをうけてもらう！）

「魔法カード命削る攻撃・サイレントアタック発動。サイレントマジシャンの攻撃力を2000下げて相手に2000のダメージを与えるそれにチェーンして手札のサイクロンを発動、デッキ側を破壊」
「くっ！速攻魔法発動「伏せカード発動、マジックジャマー。手札を1枚切り無効」そんな！」

『行きます、サイレントアタック！』

「わあああああ！」

ブルー LP2000↓0

「俺の勝ち、それじゃな」

「くうう…」

「ああ、君に一言言っておこうか。ちよいとこっち来てくれ」

「な、なんだよ…」

「声を潜めるぞ、多分君の要望を言ったら許可して貰えるかもな…特に葵姉はそういうの聞いたりする人だから」

「本当か！？」

「ああ、だけど断られても俺のせいにするなよ」「も、勿論だとも！」

そのブルー生徒は意気揚々と帰って行った

「俺も帰るか」

ちなみに…その生徒はわずか0、5秒で5人から断られたのも余談としておこう

おまけ

「京哉！粉塵だ！」

「すまない十代、助かったよ」

「おおっと、京哉君達の方に1匹来たよ」

「げっ…マジかよ」

「吹雪さん加勢お願いッス！」

「勿論だとも、華麗に行くよ」

モン。ンを4人でプレイ中、まさか吹雪さんが持ってたのは意外だった

「やべっ！またドリフト！」

素晴らしいハンドリングを持ったレッ。スの2体討伐を実施中だった

第三十九話 立場を交換したいって言ってもなあ…（後書き）

京哉「なあ作者…最近嫌な夢見るんだ」
どんな夢だい？

京「アオイに殺される夢」

アオイ「す、すみません京哉様！」

京「イヤ良いよ。多分疲れてるだけだし」

アリス「私は逆にお兄ちゃんに殺される夢見るんだよ…」

京「す、すまないアリス…」

アリ「平気だよお兄ちゃん」多分全ての元凶は作者だからね」

ギクウツ！バレただと！

京「アイツ窓から逃げようとしてる！いけえ、21体パワーボンド
使用＋リミ解使用のキメラテック！エボリユーションレザルトバー
ストオ！」

甘い！こんなの作者パワーで…作者パワーが発動しない！

京「21レンダア！」

うぐああああああ！

京「ふう…まあ今回も見てくださりありがとうございました、それ
ではまた次話を」

アオ&・アリ「お願いしまーす」

第四十話 明日から冬休み、の！筈でしたが！！テーマパークのモニターしない

今回で2つ目！この調子で3つ目書けたら嬉しいです

今回で京哉がどれだけ鈍感かわかります。ではどうぞ！

第四十話 明日から冬休み、の！筈でしたが！！テーマパークのモニターしない

「アニキ！今日から冬休みですぜ！」

「そうだったな、だが…はあ…明日から地獄だ」

冬休みで地獄…その理由がこれだ

「新テーマパーク？」

『そうだ、そのモニターを貴様にやって貰いたい』

昨日の夕方に海馬から電話でそう言われた

「いつまでだよそれ？」

『貴様のアカデミアの始業式の辺りまでだ』

長っ！何？そんなに使うのか！？

「長すぎないか…？」

『安心しろ、普通ならば全てを周りきるのに1ヶ月はかかる』

…よくそんなドデカイものを日本に作ったな…

「受けても俺は良いけど一度家に帰つてると無理じゃないか？」

『ホテルも全て回って貰うから全て無料だ。なんなら貴様の連れも呼んでいい』

まあ皆が了承したらね

「わかった、書類等は俺の家の方よろしく」

『わかってる』

…という事があってさ…モニターしなきゃいけないのよ

「羨ましいツスアニキ！」

「何言ってんだ、お前も連れてくぞトシ」

「…ア…ア…ニギ」

泣くな泣くな

「それじゃ俺は早く船に乗らないと。1度書類とか取りに実家に帰らないとな」

「わかりやした！それじゃアニキ！また明日ッス！」

「おう、また明日な」

俺はトシの部屋から出て荷物を取り寮を出た

「船かあ…アカデミアに来た時何故か記憶が無かったからなあ…」

気づけばアカデミアの前に居たんだもん

「あつ、京哉」

「喬か」

喬と甲板でたまたま出会った

「喬も帰るのか？」

「うん…京哉に呼ばれたアレに行くから着替えをね…」

「そっか」

「楽しみにしてるよ京哉」

「ああ、せっかくの休みなんだ。楽しもうな」

モニターが面倒だけどな

次の日…

「…皆遅っ！」

集合時間は9時にしたが1時間たっても来ない。ちなみに10時に開園なので既に開いている

「にしてもここすげえな…これ海の上にあるんだよな…」

俗に言う埋立地なのだが…でかすぎるだろ

『おーい！京哉あ！』

ようやく来たか

「すまねえ…遅れた…」

「船が途中で止まってしまったのよ…」

「お陰で3時間で着く筈が4時間になってしまったね…」

「ええい！あのオンボロ船め！」

「ごめんツス京哉君…」

まあ…そういうのは仕方ないか

「それでここが新テーマパークですかい？」

「おつきいですね京哉さん」

「はあゝ海馬コーポレーションは相変わらずやね」

まああの態度で夢が子供達の為だからな。なかなかのギャップだな
アイツ

「そつえば喬ちゃんは？」

凜がキョロキョロと喬を探していた

「ああ、喬なら「ごめん京哉、まった？」ようやく揃ったか」

喬が最後に来た。んじゃ部屋のチェックインだな

「やあ京哉君、遅かったね」

『吹雪さん！？』

第1ホテルに入ると吹雪さんが居た。つーかなんでここに居るのこの人！？

「兄さん！？なんでここに！？」

「勿論僕も楽しむ為さ」

…呼んだ覚えが無いんだが…

「まあいいやチェックインしようか」

最初のホテルはゲストが泊まる高級ホテル、値段もやはり高いもの

のここのテーマパーク、海馬ワールドは…てか海馬の世界で…まあいい。海馬ワールドは月に1度デュエルの世界大会が行われる場所でその時のゲストはここに泊まる

「立花様ですね、お部屋は3人部屋が2つ5人部屋が1つでよろしいですね？」

「はい、お願いします」

鍵を受け取り十代、三沢、倭に鍵を渡す

「えっと部屋割りだが十代、翔、トシで101。三沢、サンダー、吹雪さんで102。女子全員で103を使つて」

「京哉さんはどうするのですか？」

「俺は管理人室で寝泊まり」

そう聞いたトシと倭達は結構落胆して居たが…どうしたんだろうか
「それじゃ荷物置いたらロビーに集合な」

『はい』

「皆揃つたな、それじゃこれ」

そう言つて差し出したのは11本の紐

「これは全員引くと1本に繋がるから繋がってる相手が今日の行動のパートナー」

「その人と一緒にホテルに戻ってくるまで過ごすんか？」

「そうなるな…多分」

「そうだ、んじゃ引いて」

と言うと4人組とトシから「京哉君と一緒に、京哉君と一緒に…」
みたいに呪詛のようなものが聞こえたがきつと気のせいだろう

「いやあ〜楽しみやわ〜」

俺の相手は倭となった。俺となった時ののはしやぎ様は凄かった
「それじゃ何処から回る？」

「ばっ！とパンフレットを開く。…てかこのパンフレットデカインだよ。軽く町の地図になってるもん」

「ん…うりゃ！」

倭がいきなり腕に抱きついてきた

「おい倭…」

「えへへ…今日くらいええやん」

まあ仕方ないつか…にしても一般公開もしてこの込み具合…流石海馬と言っべきか

「ん…まずこれ行こうや京哉君！」

「めっちゃ楽しかったわ！」

「……………」

俺、干からび中…

「だ、大丈夫なん？京哉君…」

「これで大丈夫という奴が居たら爆裂疾風弾をぶつけてやる…」

「あ、あはは…」

ここの絶叫系を舐めてた…時速120kmを生身で体感出来るとかぜってーいらな！人居たの俺達だけだし女性の方は避けてくださーいと言ってたしどゆことよ！しかも観覧車が絶叫化はぜってーおかしい！何あのアナウンス！ランダムで一つ絶叫マシーンになりますって！しかもレールを転がってったよ！他にはブツブツ…

「きつ京哉君、そろそろご飯にせえへん？」

「ん？ああ…時間的にも良いしな。食いに行くか」

S i d e 倭

めつつつつちや嬉しい！京哉君と一緒に回れるやなんて！ん？まてよ、これデートちゃうんか？そうやん！といえばまずやることは京哉君の腕に抱きついて回る！

ふふふ…成功や！いやあ…京哉君暖かいわ…。なんやろ、オーラと言つか葵さんがゆーてた事まんまやわ。暖かくて気持ちええ…はあ…このままいたいわ…。とりあえず何処から回るって聞かれたから早速絶叫やろ！と思て行ったら…

京哉君干からびてもうた…そりゃあんな絶叫全部乗ったらウチも干からびてるわ…何個か乗れんかったけど…そういえばお昼時…やっぱりアレはするべきやな！

「それで何食う？店はここの近くだけで軽く200越えてるけど」
「あぁ！？近くだけで200！？多すぎやろ！？？」

「でさ、何食う？」

…こついつ時はこれや！

「京哉君に任せるわ…」

S i d e 京哉

と言われたのでここに来た。名前はブルーアイズオムライス！…あ

の社長どんだけブルーアイズって付けたがるんだ…しかも途中にキサラカフェとかもはや石…げふんげふん！これ以上言つとキサラさんに失礼だ。ちなみにアテムの世界も俺見に行ったよ。遊戯とアテムのデュエルも見たし

「このブルーライス美味いわ」

ちなみに倭が食ってるのは名前はブルーだがどうみてもただのチキンライスだからな

「オムライス…美味いけど…名前が…」

「京哉君言ったらあかん…ウチもツツコミたいねん…」

やっぱり気にしたら負けか…いや、だが気にしてしまう…だが「京哉君、あ、あ…」

「え？何倭？」

「京哉君、あ、あ…ん…」

…なるほど、そんなに俺に対して恥をかかせたいのか…俺は1人でも食える！（京哉以下略）

「あ、あ…ん」

でもせっかくの好意だ、受け取るか

「あ…んぐっ」

「おいしい？」

「ああ、美味しいよ倭」

よし、仕返ししてやろう！倭なら「ウチ1人で食べれるわ！…」といいツツコミを入れるはずだ！（京以下略）

「はい倭、あ…ん」

ツツコめ、ツツコめ、ツツコめ…

「あ、あ…んぐっ／＼／」

…あり？ツツコまない…しかも多少赤いな

「美味しいで京哉君／＼／」

「そりや良かった」

まあ美味しいならそれでいいか

「はあく今日は楽しかったわ京哉君。ありがとうな」

夕方、俺達はホテルに戻る道を帰って居た

「何、倭が楽しかったならいいよ」

全部絶叫系だったけど……

「それで…ええと…ちよつとこつち来て」

「え？ちよつ！」

倭に人気の無い所に連れて行かれた

S
i
d
e
倭

はあ… 人気が無い所に来たから言うなら今やねんけど… やっぱり告白はドキドキするわ…

「それで倭？ここに連れて来てどうするんだ？」

「ええつと…ええと…その…」

やばいやばいやばいやばいやばいやばいやばい！めちやくちやバクバク言ってる…でも、ここでしないと意味無いわ！坂上倭！一世一代の勝負に出るで！

「きつ京哉君！」

「はい？」

「うつウチは……いや、私……私、坂上倭は、立花京哉君が好きです！
／／／」

こ、告白してもうた……

Side
京哉

…好きです…？ん？どゆこと？今好きって事は昔は嫌いって事なのか…まさか今まで嫌々俺が付き合わせて…お、俺とした事が…だけど今好きと言ってくれたんだからとりあえず俺も返そう

「倭」

「は、はい…」

「俺も好きだよ」

「京哉君…じゃあ！」

「大事な友達だしな」

「……………」

……………えっ！？何この空気！友達だから好きに決まってるじゃん！だから好きって返したのに！

「京哉君の…京哉君の…」

「え？」

「京哉君のアホー！」

「ぎゃあああああ！」

ヴア、ヴァルカノンの砲撃くらった…痛い…

おまけ Side 倭

「ふええええん！」

「こ、告白までしたのに…」

「京哉さんの返事が…」

「と、友達だから好きって…」

「京哉らしい…かな…」

ウチの愚痴を明日香ちゃんと涼ちゃんと凜ちゃんと喬ちゃんに聞いてもらってるんや…

「ど、鈍感にも程があるわ…」

「ひよっとしたら葵さんの言つとおりキスまでしても気付かないかも知れません…」

「そこまですても気付かれないならボクかなり凹むよ…」

「多分私もだね…」

「ふええええん！」

次にチャンスあつたら必ずウチに振り向かせたる！覚悟しいや！京哉君！

第四十話 明日から冬休み、の！筈でしたが！！テーマパークのモニターしない

京哉死ねよ！

京哉「はあ！？何でだよ！？」

お前好きって言われてその返事か！？

京「倭は大事な友達であり仲間だ！好きじゃ無ければ友達じゃねえよ！」

うわぁーコイツマジ空気読まねえ！マジ死んでこいよ！

京「うるせえ！仲間に好きって言って何が悪い！！」

はあ…何かもう…いいや。うん…

京「な、なんだよ…その哀れむ目は」

べつつにいー。次はデートでは無くホテルの移動＋海馬ワールドの視察です…ではまた

京「ちよっ！なんだよマジ！さっきの目説明しろよ！おい待てって！」

第四十一話 こういつテーマパークって絶対こういつ問題起きるよな（前書き）

よし！3つ目達成！今回はケンカ混じりのデュエルです！

…そう言えばジョインが空気に…次くらいに出すか…

それではどうぞ！

第四十一話 こういうテーマパークって絶対こういう問題起きるよな

朝食を取った皆は再び紐を引いた。え？倭？普通に会話したよ？やつぱり仲間っていいね！（以下略…もう書かなくていい？by作者）
「今回俺視察しないといけないから皆楽しんで来てくれ」と一言追加しておいた。ちなみに昨日の組み合わせだが

俺&倭

十代&明日香

翔&涼

凜&喬

三沢&万丈目

吹雪さん&トシ

となつてた。今日は

吹雪さん&明日香

十代&翔

倭&喬&トシ

万丈目&涼

三沢 & a m p ; 凜

となっている

「はぁ…海馬も面倒な事させるなあ」

2日目は警備及び機器の状況報告をリアルタイムで行う…ってさ
「まあいいや。さっさと始めますか」

…それにしても警備は楽過ぎる…始めて東側をうろついてもう3時間…むしろ3時間でここ回りきるのかよ

「後北に西に南に…はぁ確かに全部回るのしんど」

アトラクション数5000だっけ…狭くならないかそれ？んで飲食が1000でゲームが500と…しかも器用な事に1000の飲食店は全く被って無いという素晴らしさ…皆様お疲れさまでした

ザザッ

『立花君、駐車を頼めるかな？』

「わかりました」

トランシーバーかっこいいね！そんな事より駐車場駐車場って

「ここも大丈夫です」『わかりました、では南側を見てきてくださ
い』

「了解です」

「この辺りはだいたい問題無し…」と

ザザッ

『立花君、南側のカィバースライダー付近で騒動が起こったから見てきてくれないか？』

「わかりました」

カィバースライダーは…あっちだな

S i d e 利光

「だからこつちはぶつかって無いっての！」

「はあ！？まだしらばっくれてんのか？おめえが当たったから骨が折れたんだよコイツは」

「いてえよお」

くっ！このド三流共が！！

「もう100万でいいや、100万寄越せ」

「骨折で100万はあり得んやろ！？」

「慰謝料込みだよ、払えねえのならそこの嬢ちゃん2人やらせてくれよ」

「来ないで変態…」

くっそー、カィバースライダー乗ってから次の事で話してたら向こうからぶつけて来たのに！

「嫌ならさっさと払いな」

「嫌に決まってるんだろ！？」

「んだと！」

折れた振りをしている不良（以下不良A）は俺に殴りかかってきた

「うぐう！」

「つてえ…コイツ！」

「「きゃあ！」」

もう1人（以下不良B）が坂上と神谷を捕まえやがった！

「坂上！神谷！」

「ウチらは大丈夫や！」

「手え出すなよ、2人が心配ならな」

くっそー、このカス野郎め！

「大人しく殴られる！」

「ぐわあっ！」

「利光！」

くう…回りは見てるだけだし…

「へっ、もう終わりかよ」

「じゃそろそろこっちで楽しもうぜ」

くっ…アニキ、すまねえ

「それじゃ俺はこっちの金髪からぐうえ！」

「他のお客様のご迷惑となりますので止めてもらえませんか」

この声…まさか…

「あ、アニキ…」

Side 京哉

はあ…やっぱり居たよこういう客

「げっ！警備員！」

「殴り倒せば問題ねえよおらあ！」

ど！おっ！

不良Aのパンチ力がカス。全然痛くねえ、本当に顔面入れたのか？

「暴力は他のお客様のご迷惑となりますので止めてもらえませんか」

手を引き驚く不良Aを無視し喬と倭を捕まえてる不良Bの背後に直ぐに回り

「よつと」

足払いをし不良Bをこかす

「うわあっ！」

「きゃっ！」

もちろん喬と倭もこけかけたから支えた

「大丈夫か？2人共」

「ありがとう京哉」

「ウチらは大丈夫や」

さて、このクズ共だな

「こ、この野郎…」

「ちくしょう…」

何が畜生だバー口お

「仕方ない、アナタ方お客様にチャンスを与えます」

「はあ？」

「チャンスだと？」

まあ簡単なチャンスだ

「ここの警備員はご迷惑をおかけしたお客様にデュエルを挑む事が出来ます、そのデュエルに勝利した場合私共はご迷惑を無視して行きます。負けた場合は勿論連行させて行きます」

これ考えた海馬マジナイスだよ

「へっ、そんなの受けっかよ」

「ちなみに1つ言っておきます、もし挑む場合は私の使用致しますデッキを公開しますが…もう言っておきます。私のデッキはキーマイスやはにわなどのローレベルの通常モンスターばかりしかありません。最高の元々の攻撃力は1200です」

皆わかったかな？あのデッキだよ？

「はっ！なら挑んでやるよ！」

「俺達は童美野町の無敗者だぜ！」

そんな強いデュエリストならプロやってるな

「それでは始めましょうか」

「『デュエル！』」

京哉 LP 4000

不良A LP 4000

不良B LP 4000

「私から始めさせて頂きます、ドロー」

おっ、来た来た。頼むよ2人共

（勿論です主様♪）

（京哉さんのご友人の侮辱は許しません！）

「私は二重召喚を発動、ハイ・プリーステスとドリアードを召喚。カードを2枚伏せて暗黒の扉を発動、ターン終了」

ドリアード 攻1200

ハイ・プリーステス 攻1100

ちなみにトライアングルデュエルの1ターン目は攻撃出来ないんだが…

「俺のターンだ！ドロー！」

あのアホ面共はわかってるのか？

「俺は漆黒のパンサーウォーリアーを召喚！ターン終了だ！」

漆黒のパンサーウォーリアー 攻2000

「俺のターンンドロー！処刑人マキュラ召喚！カードを1枚伏せてターン終了だ！」

処刑人マキュラ 攻1600

「禁止カードやんか！」

「てめえセコいぞ！」

「なんとでも言え！勝てばいいんだよ勝てば！」

「では私のターンンドロー。魔法カード強欲な壺を発動、カードを2枚ドロ。キーメイスを召喚、ターン終了」

キーメイス 攻400

「俺のターンンドロー！手札から2体目の漆黒のパンサーウォーリアーを召喚！ターン終了」

「なあ、そろそろ思ってたけどこいつ等自分達はタッグって理解してんのか？」

「俺のターンンドロー！俺は2体目のマキュラを召喚！ターン終了だ！」

「はあ…何かもう疲れてきた」

「あなたの終了時に転生の予言を発動、二重召喚と強欲な壺をデッキに戻しシャッフルする。そして俺のターンンドロー、強欲な壺を発動、カードを2枚ドロ」

「京哉…今日はドローがかなり冴えるね」

「そつやな…京哉君、友達のピンチなら1番輝くもんな…」

「アニキ…頑張って下さいッス…」

「この状況でデッキに戻したのを引くだと!？」

「てめえ3枚入れてるのか!？」

禁止を使わないと勝てない輩と一緒にされても困る

「カードを1枚伏せてギゴバイト召喚」

ギゴバイト 攻350

「更に魔法カード天よりの宝札。お互い手札が6枚になるようにドローする」

来た来た、次くらいに終わりかな

「追加でカードを2枚伏せてターン終了」

「俺のターンドロー!手札から魔法カードハーピィの羽根箒発動!」
はあ…禁止のオンパレードだな

「伏せカード発動、アヌビスの裁き。手札を1枚墓地に送り無効にし相手モンスターを破壊します。私はパンサーウォーリアーを破壊し攻撃力分のダメージを与えます」
「うぐおっ!」

不良A LP4000↓2000

「くっそ、ターン終了!」

「俺のターンドロー!俺もハーピィの羽根箒発動!」

「んじゃもう1枚アヌビスの裁き。破壊対象はマキュラ」
「うがつ!」

不良B LP4000↓2400

「墓地に行ったマキュラの効果で手札から罠発動！リビングデッドの呼び声！マキュラ蘇生だ！」

あゝなんか普通のレッドのほうがマシなデュエルする…

「ターン終了だ！」

「俺のターンドロ。伏せカード発動レベルリチューナー。ドリアードのレベルを2つ下げる」

まだまだいっけ

「魔法カード命削りの宝札を破壊。私はカードが5枚になるまでドロし5ターン後に墓地に置く」

さあ…終りだな

「ハイ・プリーステスに装備魔法降格処分を装備、レベルを2つ下げる。そしてワイトを召喚」

ワイト 攻300

「雑魚を増やしてなんになる！」

雑魚呼ばわりしやがって、許さん！

「魔法カード2枚発動する！能力調整発動！ターン終了まで全てのモンスターのレベルを1下げる！全てのモンスターはレベル1！よってトライアングルパワーを発動！レベル1モンスターは元々の攻撃力を2000上げる！」

ドリアード 攻1200 ↓ 3200

ハイ・プリーステス 攻1100 ↓ 3100

キーメイス 攻400 ↓ 2400

ギゴバイト 攻350 ↓ 2350

ワイト 攻300 ↓ 2300

「こつ攻撃力が!?!」

さあ…フィニッシュだ

「手札から弱肉一色発動!お互い手札を全て捨てフィールド上のレベル2以下の通常モンスター以外のカードを全て破壊する!」

「うう、うわあああああ!」

「ハイ・ブリーステスとドリアド!それぞれにダイレクトアタック!」

「うわあああああ!」

不良A LP2000 ↓ 0

不良B LP2400 ↓ 0

「それでは連行させていただきます」
俺は不良2人を連れて本部に行った

「アニキありがとうッス」

「京哉君ホンマにありがとうな…」

「流石だね京哉」

「いや、警備の一環だからな。しかし…」

よくもトシをボコリやがったなアイツ等

「大丈夫だなトシ?」

「勿論ッスよアニキ!」

だが心配だな…とりあえず先に次の泊まり場所に行ってもらうか

「喬、倭。こつから西南にあるこの旅館に行ってくれ。次の泊まり場所だからトシを休ませといってくれ」

「うん、わかった」

「任しとき！」

これでよしと

「すまないツスアニキ」

2人はトシを支えながら旅館に向かった

「さて、警備を続けるか」

第四十一話 こういつテーマパークって絶対こういつ問題起きるよな（後書き）

…疲れたので雑談は中止で寝ます…おやすみなさい

倭「よし、寝たわ」

フレイ「ようやくですね」

倭「この駄作者！何で京哉君鈍感やねん！」

フ「です！」

倭「はあ…京哉君が他の女の子とかで悩んでるんならウチは全然オツケーやのになあ」

フ「倭ちゃんそんなのでいいの？本妻じゃ無くて側室でいいの？」

倭思考中…

倭「やっぱりウチは本妻がいい！」

フ「だよね！だったらめげずに京哉君にアタックです！」

倭「そうや！アタックや！」

…何か五月蠅いな…

倭「げっ、もう起きた！逃げるでフレイ！」

フ「です！」

…五月蠅いぞ京哉…むにやむにや…

第四十二話 小さい大会でも出場したからには勝つよな？（前書き）

京哉…死ねよげふんげふん！

どうも作者です！今回は涼ちゃんとのデートです

あんな事させといて気付かない京哉は死ねばいいよ
ではどうぞ！

第四十二話 小さい大会でも出場したからには勝つよな？

「わぁ〜可愛いですね〜」

今日は涼と一緒に回る事となった。思っけどさ俺と回るのに何で喜ぶの？

「土産とか早いけどどうする？食べ物系は最後にした方がいいぞ」

「ん〜そうですね〜：まず自分へのご褒美を買おうと思います」

へえ：自分へのご褒美ねえ：俺は平穩で楽しいなら十分なんだけど

「あつ、これ買ってこよ〜：はい、京哉さん」

俺に渡して来たのはハートの形を半分にしたペンダント

「：俺に付けると？」

「はい！」

：いや、そんなキラキラした眼差しで見られても：まあ別に付けたって困らないしいいか

「：ん〜これでいいか？」

「はい！とってもお似合いです！」

う〜ん：半分なのが良く判らないけど：：というかホントに俺に似合ってるのかこれ？

「それでは次に行きましょう、京哉さん」

「あ、ああ……」

ん〜まあ深く考え無くていいや

「結構回りましたね」

「そうだな〜。でもまだ調べなきゃならんのがたくさんあるからなあ」

数が無駄に多いんだよ！ここは！

「あ、そういえば海馬さんのデュエルの歴史を辿る博物館がありま

したのでそちらに行きましょう」

…確か勝利、敗北とかの歴史もあったな…これを聞いて俺の名前を出すと言われて困ってたけど写真無しという事で許可しといた

「そうだな…行ってみるか」

「はい！」

まあ涼と並んで歩いてたんだが男が涼を振り返って見てきてる…結構モテるよなあ涼。入ってすぐにファンクラブが出来るしな

「京哉さんどうかしましたか？」

「いや、ちよつとな」

「？」

とりあえず海馬の歴史を辿りにいきますか

「あ、あの…」

「どうした涼？」

涼は声を潜めてきた

「何故京哉さんの名前が書いてあるんですか？」

海馬瀬戸が敗北したデュエリスト名のプレートに武藤遊戯と俺の名前が書いていた。しかし俺の映像、写真が共に無い…約束は守ってるようだな

「俺は海馬との勝利数と敗北数が一緒なんだよ。だからだろうな」

「そ、そうなのですか…」

まあ俺の場合デッキを変えてるからな、勝率、敗率が同じくらいなのは仕方ない

「あつ、京哉さん！開館記念に館内デュエル大会やっていますよ？」

「へえ…涼、出てみたら？」

俺がそう言つと涼は首をブンブン降った

「わっ私じゃ無理ですよ」

「いけるって！涼強いし俺も応援するからさ！」

S i d e 涼

「…頑張ります!」

京哉さんが応援して頂けるなら私は勝てます!

「おう、俺は出来るだけ近くに行くよ」

「はい!」

景品は…海外旅行5名分チケット!…ペアなら2人きりだったのに…でも…凜さん達もきつと行きたいですし何より友達で行けるのならやはり楽しいと思います!ええと…条件は館内デュエリスト4人衆を倒してから館内キングを倒す…長いですが…でも京哉さんが居る限り私は負けません!

「それでは私受け付けで申請してきます!」
見てて下さい京哉さん!

S i d e 京哉

「ネオダイダロスでダイレクトアタックします!」

「うがああああ!」

おゝ4人衆相手に全員2ターンキルだ

「京哉さんやりました!」

「ああ、次で最後だ!頑張つてな」

「はい!」

うゝん…報告される度になり痛い視線を贈るのは止めてくれ
「それでは、キングの登場です!」

MCの言葉にデュエルスペースの涼と反対側から現れたのは…

「ふっ…綺麗な方だね。君が挑戦者かい？」

うん…ナルシストだね

「どうだい？このデュエルが終わったら僕とデート」お断りします」
何故だい！？」

「私は既に好きな方とデートしていますので。その方に勝って頂けたら良いですよ？」

と言った涼は俺を見た…もしかして俺がするの？

「ぐぐぐ…なら彼女の代わりに君が僕とデュエルだ！」

「おおっとお！ここに来てキングからのご指名だ！」

えゝやだなゝ。指名されて景品無しは1番質が悪いからさ

「景品の受け取り有りなら良いけど」

「構わないよ！僕は君から彼女を貰う！」

さいですか…じゃあ受けるか

「頑張つて下さい京哉さん！」

「ああ、涼の頑張りは無駄にはしないよ」

俺はデュエルスペースに上がった。よし、今回はネタで行こう

「デュエル！」

「僕のターンドロー！」

え？ライフの表記が無い？作者が次の俺のターンで終わらすつもりだからだろ？

「僕は融合を発動！手札の古代の機械巨人3体を融合し古代の機械究極巨人を融合召喚！ターン終了！どうだい！？」

ふん…作者の思惑通りだったよ

「俺のターンドロー。千眼の邪教神を召喚」

「そんな攻守0を召喚してなんの意味が？」

だってこれ使う為だし

「強制転移発動、お互いのフィールド上のモンスターのコントロールを入れ替える」

「えっ？」

「究極巨人で邪教神を攻撃」

「そっ！そんなあああ！」

「終りだな！これで海外旅行ゲッツ！」

「し、勝者チャレンジャー！」

『うおおおおおお！』

「京哉さん！やりましたね！」

「これが優勝賞品です！」

そして海外旅行チケットを受け取った

「ま、まて！こんなの認めないぞ！」

抗議の声を上げたのは先程のナルシスト

「もう1度だ！もう1度勝負だ！」

えゝ勝ったのに！仕方ないなあ…

「もう1回だけな、ちよつと待っててくれ涼。直ぐに終わらせる」

「はい！」

「次こそは！」

「「デュエル！」」

む…また終わった

「手札から永續魔法生還の宝札を3枚発動手札から魔法カード愚かな埋葬発動、暗黒のマンティコアを墓地に送る」

「ふん！自ら墓地に送るとは！」

「ターン終了時に暗黒のマンティコアの効果発動。フィールド、又は手札から獣、獣戦士、鳥獣族を墓地に送り墓地から特殊召喚する。手札のマンティコアを墓地に送り特殊召喚。更に生還の宝札によりデッキから3枚ドロー」

「ふん！終わりなら」そして墓地のマンティコアの効果発動「また！？」

「フィールドのマンティコアを墓地に送り特殊召喚、そして3枚ドロー」

以下略… 8回目

「…早くしてくれないかな」

相手はただの手札肥やしと思ってたらしくかなりくつろいでる

「9回目のドロ…ようやく揃ったな…俺の勝ち」

「はあ？何を言ってるんだ？僕のライフはまだあるんだよ？」
だって勝ちなのはしょうがないよね…

「エグゾディアが揃ったもん」

「な…何だって！？」

俺の背後の六芒星からエグゾディアが現れた

「な…なな…なな…」

「勝ったから帰らせて貰うぞ、それじゃ涼。帰ろう」

「はい、京哉さん」

俺達は3つ目の泊まり場に行った

「今日はありがとうございました京哉さん」

旅館に着くなり涼はペコリと俺に礼をしてきた

「いや、楽しかったなら良いよ」

まあ最後のアレ以外は楽しかったし

「その…京哉さん…ちよつと良いですか？／／／」

「何？」

「うゝ…うう…えい！」

頬にキスされました

その後の男達からの視線がヤバかった

「きつ今日のお礼です／＼／＼…京哉さん、私もアナタが好きです／＼」

そう言つと涼は女子達の部屋に行った

「まあ俺も友達だから好きだしね」

そんな事を言つて俺は自室に戻つた

おまけ Side 涼

「…そこまでして返答は？」

「…やっぱり…あの反応でした…」

「あ、有り得へん…ホンマに有り得へん…」

「涼ちゃん今でも赤いのに…」

「京哉はもう鈍感の域を越えてるね…」

うう…私すつごく恥ずかしかったのに後で京哉さんが大事な友達だから俺も好きだつて返されました…」

「京哉…いつになったら気付くのかしら…」

「十代さんと同じで子供なのかな…」

「…はあ…」

でも倭さんが告白したつて聞いた時ドキッしましたが…予想外過ぎました…京哉さんホントに鈍感です…

S i d e あの人

ふっふっふ…これはいい事聞いちゃったなあ

「彼女達の為このブリザードプリンスが一肌脱ごうじゃ無いか！」
京哉君と組むのが楽しみだよ

第四十二話 小さい大会でも出場したからには勝つよな？（後書き）

…はあ…

京哉「何だよそのため息は、これで85回目だぞ」

いいいいいいんや！ナンニモナイヨ？

京「ええい！いい加減に言えって！」

うるせえ！この鈍感野郎め！

京「どこがだよ！」

…何かね、はい、もうこの子の相手疲れた…俺寝るわ、バイバイ

京「えっ！ちよっ！待てよ！」

涼「うう…京哉さん…2話前の倭さんと同じ反応を…うう…」

第四十三話 女心と言ってもねえ…他人の心がわかったら苦労しないよ全く…

指摘されましたので改めて変更しました

第四十三話 女心と言ってもねえ…他人の心がわかったら苦労しないよ全く…

「ハッハッハ！楽しいねえ京哉君！」

只今絶賛ナンパ中…何故かと言うと判るだろ？

「いや、俺はそんなに…」

「君は女心を判らなすぎる！だから僕と一緒に理解して行こう！

あ、その彼女…」

「えっ！／＼わっ私ですか？」

「君の瞳に何が見える？」

その人は空に指を指して聞いた

「空…天ですか？」

「ん……………！ジョイン！吹雪ともうします、以後お見知り置きを」

「は、はい！／＼／」

そう、今日俺は…いや、俺達だな。俺達は明日香の兄さんである天上院吹雪さんと回っている…この2人と共に

「しっ師匠！1回で落とすなんて流石です！」

「俺にも教えて下さい！」

万丈目と三沢だ…つか三沢お前ピケルとラヴラヴじゃないのかよ…

「京哉君は何故ナンパしないのかい？」

いや、何故と聞かれまして…

「あの…嫌々は個人的に嫌いですし…」

「何を言う！ナンパは互いの同意を得て行うものだよ！」

「そつだぞ京哉！貴様師匠の言うことに納得出来んか！？」

いや、でもその人にも予定とかあったら迷惑だしな

「そつだぞ京哉」

「三沢…後ろ気をつけるよ…ピケルがスッゴい目で見ている」

「はっ！」

三沢もようやく気配に気付いたらしくおそろおそろ見るとピケルが

素晴らしくそして威圧感漂う笑顔をしていた

「ふっ吹雪さん、おお俺、たった体調悪いんででっかつ帰ります」

「そうかい三沢君、それじゃお大事にね」

「三沢、ここが次のホテルだからな」

さあみつちり絞られてこい

「さ、ささっサンキュー京哉やつや」

三沢はダッシュでホテルに行った…多分白魔導師からプリンセスに
今頃昇格している頃だろう

「それでは続けよう京哉君！」

はあ…こんなのでいいのか？

「って感じなんです」

「貴方…面白い…」

いやあ…会話は楽しいねえ。ナンパしてこいなんて言われたけどや
り方判らないから適当に声かけて会話してたよ

「そこで先輩が…お前はつまらんって言ったら同期の奴が…」

「…ふふ…あつ…私…そろそろ…」

「はい、それでは」

「はい…」

あゝ楽しかった。PDAのアドレスと携帯のアドレス交換もしたし
…結構口数が少ない娘だったな

「どうだった？京哉君」

物陰で見っていた吹雪さんが出てきた

「とっても楽しかったですよ、吹雪さん」

「いや…楽しかったって…」

？俺なんか悪い事言った？

「まだ女心が判りきって無いね京哉君！」

「いや、判りきって無いと言われましても…」

「よし！僕が判らせてあげるよ！デュエルでね！」
…え？デュエル関係あるの？

「デュエルは関係あるんですか？」

「勿論だとも！さあ始めるよ！」

仕方ないか…今回は…超久々のサイバー…いや、あっちで行こう

「デュエル！」

S i d e 藍

…あつ…始まつてる…。皆様初めまして…私…先程あの人と会話をしていた…日下部藍と言います…ここに招待されて土産を買っている時に…あの人…確か立花…京哉さん…でしたか…その人に話しかけられました…。会話は面白いので…つい夢中になってました…別れてから用事を済ませると…立花さんが…男性の方とデュエル…する所でした…

「…立花さん…」

そういえば来年の…進路決まってますん…

「…彼のデュエル…見よ…」

それで…場所決めようかな…

S i d e 京哉

京哉 L P 4 0 0 0

吹雪 LP4000

「俺から行きます、ドロー！」

…この癖のあるカード達…これを使いこなして意味がある！

「手札からカラクリ兵 貳参六を召喚！」

カラクリ兵 貳参六 攻1400

「しつ新デツキ！しかも見たこと無いカードだと！？」

「変わった姿のカードだね京哉君」

「ええ。結構こいつ等は多少癖がありますけれどなかなか面白いですよ」

必ず攻撃しなきゃいけないデメリットと攻撃対象になったら守備になるメリットもあるしな

「そしてフィールド魔法風雲カラクリ城を発動！」

ガガガと機械音が鳴り城が現れた…というかカラクリって感じがあんまりしないのだが…

「そして永続魔法カラクリ解体新書発動！」

俺の目の前に1つの巻物が現れる

「どういう効果かな？」

「カラクリと名のついたモンスターの表示形式が変わる度にカラクリカウンターを乗せ墓地に送った時にカウンターの数だけドロー出来るんです。俺はターン終了です」

「それじゃあ僕のターンドロー」

そつえば吹雪さんて結構強いって明日香から聞いた事あるけど…どれだけ強いんだろうか

「僕はそうだね…激昂のミノタウルスを召喚しよう」

激昂のミノタウルス 攻1700

うわぁー貫通…カラクリからしたらなかなかキツイ相手じゃないか
「カラクリは攻撃対象又は効果対象になったら表示形式が変わると見た、激昂のミノタウルスに攻撃だよ」

すげえ…カラクリの性質の1つを見破りやがったよこの人

「1つ正解お見事です。カラクリの性質は攻撃対象になった場合守備表示になります」

式参六 守備200

「更に式参六が表示形式変更したのでカラクリカウンターが解体新書に乗ります」

カウンター 1

「ダメージは通って貰うよ」

「ぐっ！」

京哉 LP4000↓2500

「式参六の効果発動、このカードが破壊された時デッキからカラクリと名のついたレベル4以下のモンスターを攻撃表示で特殊召喚します。俺はカラクリ武者 六参壱八を特殊召喚します」

カラクリ武者 六参壱八 攻1800

「それじゃあ僕はカードを2枚伏せてターン終了だよ」「俺のターンドロー」

吹雪さんのセットは2枚か…

「それならカラクリ参謀 式四八を召喚！」

カラクリ参謀 式四八 攻500

「カラクリ参謀は召喚した時に表示形式を変える事が出来る！俺が変えるモンスターは参謀の表示形式！更にカウンターが乗る！」

式四八 守1600

カウンター 2

「そして解体新書を墓地に送りカウンター分の2枚ドロ―」

おっ…これならいけるか…

「そして大嵐を手札から発動！」

「くっ！だけど君のフィールド魔法も破壊されたよ」

それでいいんですよ吹雪さん

「このカラクリ城は破壊されて墓地に送られた時に墓地のレベル4以上のカラクリモンスターを特殊召喚出来るんですよ、式参六を特殊召喚！」

「へえ…面白いね」

「でしょ？それじゃあ行きます、六参壹八で激昂のミノタウルスを攻撃、式参六でダイレクトアタック！」

「ぐっ、やるねえ」

吹雪 LP4000↓2500

「これでさっきのダメージ分はチャラですよターン終了」

「京哉貴様！師匠になんて事を！」

うるせえなおじや万丈目め

「それじゃあ僕のターン、ドロ―…うん…それじゃあ僕は暗黒のマンティコアを墓地に捨ててライトニング・ボルテックス発動しよ

う」

あちゃゝ全部破壊されちったな

「そして魔法カード死者蘇生を発動、墓地の激昂のミノタウルスを特殊召喚して手札から装備魔法団結の力を装備しよう」

あ、あらゝ負けたゝ

「京哉君にダイレクトアタックだ」

「くっつ！」

京哉 LP2500↓0

「あっちゃゝ負けたかゝ流石吹雪さんです」

「さ、流石師匠！」

「ありがとう京哉君、万丈目君。さあ京哉君！君に女心というものを教えてあげよう！」

その後…吹雪さんと万丈目と俺でナンパが続けられ途中明日香達女性陣がこの光景を確認、元凶は吹雪さんと万丈目に有りと言って2人は叩かれまくった

Side 藍

「…立花さんの負け…ね…」

…立花さんが勝ったら…入ろうと思ってましたが…

「面白いね…立花さんは…」

決めた…アカデミアに入ろう…

おまけ

「三沢くっておう！」

三沢の部屋に入ると… ぴ、ピケルから凄まじいオーラが！？

『マスターは私がいますのに何故他の方に出すんですか！私が幼いからですか！？私に魅力が無いからですか！？私の事気に入ってるってマスターが毎晩（以下卑猥発言多々）』

「…聞かなかった事にしよう、うんそうしよう」

俺は静かに部屋を出た。ピケル怖いなあ… じゃあ克蘭とかどうなるんだろう… 改めて考えた日にちだった。余談だが説教は11時から始まり終わったのは21時だそうだ

第四十三話 女心と言ってもねえ…他人の心がわかったら苦労しないよ全く…

あのようにミスが多々ありますがお許しください
またのご報告をお待ちします

京哉「この駄作者が」
うるせえ鈍感野郎！

作者の妄想編 もしも京哉がシンクロを使った場合（前書き）

今回はちよつとしたネタです。

またこんなネタが書けたらいいなあ

ではどうぞ！

作者の妄想編 もしも京哉がシンクロを使った場合

さあ皆様始めました、「京哉がシンクロ使った時の口上」タ〜イム！

葵「わ〜わ〜」

海度「ドンドンドン〜」

京哉「…何で2人ともノリノリなのさ…」

葵「だって京ちゃんのかっこいい口上聞きたいもん」

海「俺は逆に京哉のセンスの確認だな」

流石2人だ！よし！最初のお題はこいつ、皆のアイドル！大地の騎士ガイアナイト！

京「レベル6の2600はなかなか…よし出来た！」

葵「頑張つて京ちゃん！」

京「集いし力は疾走する騎士を現す！我が大地を駆け抜けよ！シンクロ召喚！大地の騎士ガイアナイト！」

海「…まあまあだな」

そうかな、俺はちょい微妙だけど…次は最強の破壊効果を持つカタストル！

葵「凶悪だよねカタストル」

京「出来た！」

海「おっ！面白いのやれよ」

京「集結する小さき鼓動、己が力を示す為最強の破壊を呼び覚ます！正義を示す破壊者となれ！シンクロ召喚！AOJカタストル！」

最強なのか？穴とか炸裂で終わるけど…

京「まあ効果的な意味が大きいかな？」

んじゃ次はブリーユナク！

京「まあ出来たから頑張る」

葵「ドキドキ…」

海「次くらいからクソになるな…」

京「うるへー！いくぞ」。氷の世界に眠る龍よ！今こそ姿を現して世界の全てを凍らせよ！シンクロ召喚！氷結界の龍、ブリューナク！」

うわゝ絶対それトリシュとかの方が良いだろ

京「うるせえ！」

じゃゝ最後にあれ。無零！

京「えっ！？難っ！」

葵& a m p ;海「京ちゃんがんば〜」

京「くっ…見物人どもめ…行くぞ」

楽しみだなあ…

京「古に生まれし機械人形よ！今こそ将を呼び覚ましカラクリ率いて敵を討て！シンクロ召喚！カラクリ將軍無零！」

…てな感じでしたが如何でしたか？次は凜とのデートです！それでは！

葵& a m p ;海& a m p ;作「…まったね〜」

京「えっ！？ちよっ！俺シカトかよ！ちよっ！カメラマンさん！無視しないで！ちよっ！ちよっおおおおお！」

余ってしまったら勿体無いので山本葵と山本海度の設定を

ヤマモトカイト
山本海度

年齢 27

身長 191

体重 75

好きな物 デュエル、自分の大事なもの
嫌いな物 大事なものを傷つける奴

趣味 京哉弄り、機械弄り、機械製作

使用デッキ 作者の1軍こと外道ヒーロー（作者が言ってるだけ）、
古代キメラ（古代の機械込みの未来オーバー）

設定

精霊が見え京哉の兄貴分で京哉から海兄と呼ばれている（読者の皆様はうみにいと読んで下さい）。京哉にデュエルの全てを叩きこんだ張本人かつサイバー流でもある（但し途中でとある理由により挫折し我流とする）。家庭状況は最悪で父親から暴力の嵐だった。父親が心中狙いで殺されるが葵と海に飛び込み5日後にペガサスに発見され保護を受けそのまま葵と共にI2に入社。現在は葵と共にアカデミアの教師もやっている。ちなみに海馬コーポレーションの超が付くほどの重鎮で会議以外は海馬には瀬戸や木馬などと呼んでいる。容姿はかなりレベルが高く天上院吹雪と同レベル位にモテる

ヤマモトアオイ

山本葵

年齢 20

身長 162

体重 秘密

好きな物 京哉

嫌いな物 京哉断ち

趣味 京哉と居ること、京哉に抱きつくこと、京哉の為に家事をすること、京哉の為にデッキを作る事

使用デッキ 幻獣、京哉に送った試作デッキ

設定

海度と同じで精霊が見え京哉の姉貴分。葵姉と呼ばれている。3度

の飯より京哉が好きで京哉の前だと人が居ようが居まいが関係無く京哉に甘える。昔、京哉に嫁入りすると言っていた（但し京哉にその気は全く無し）。デュエリストとしてのレベルがかなり高くアテムに2回、海馬に16回勝っている（神のカード込み）が海度には負ける。バイトをしながら大学に行っていたが父親の心中により殺されそうになり海度と共に海に飛び込みペガサスにより保護され海度と共にI2と海馬コーポレーションに入社、海度と同じく若き重鎮となる。容姿端麗で知勇兼備、周りからプロポーズを受けるが全て蹴っている（勿論全て京哉の為）。現在は海度と共にアカデミアの教師兼レッド寮の寮長をしている（レッドの生徒のレベルを上げるという名目の下に京哉と居る為に）。ちなみに京哉を探すし出すのに1分あれば見つける事が可能。京哉断ちした後の探索は通常の5倍である

作者の妄想編 もしも京哉がシンクロを使った場合（後書き）

シンクロは本編に出しません！なのでこっいつ時にしか書けない事
なので書きました！

それでは本編もよろしくお願いします！

第四十四話 昔の友達にあったのはいいが…（前書き）

うんもう京哉死ねばいいよ

はっ…皆様おはようございます！

今回は2話続けて書けたらいいなと思います。

それではどうぞ！

第四十四話 昔の友達にあったのはいいが…

「はあゝ暖かい」

只今凜に絶賛抱きつかれ中、葵姉もそうだったけど俺に抱きついて意味があるのか？そう言えば吹雪さんが…

『女の子が抱きついて来る理由は2つあるんだ、1つは怖いからでもう1つはその人が好きだからだよ』

…という事は倭達3人共俺が好きなのか…安心せい、俺も好きだぜ。大事な友達なんだからな

「京哉君聞いてる？」

「えっ！？ああ、すまない。もう1回頼む」

「もう、京哉君ったら。ボクは京哉君が行きたい所でいいよって言ったの」

むうと言って少し拗ねた顔した凜…

「ふむ、普通に可愛いな」

「何が可愛いのか？」

「いや、拗ねた凜が…って！」

凜を見ると真っ赤になってた…しまった…

「あ…す、すまない…」

まさか俺に怒って赤く…

「う、ううん…／＼」

よかった…怒ってない…てことは照れてるな？

「それじゃここから回るか」

「えっ！あつうん」

それじゃあ楽しむとしますか

S i d e 凜

うっゝいきなり可愛いなんて京哉君ズルいよ。おかげで顔が熱いよ

「京哉君ズルいよ…／＼」

「え？何が？」

「い、いや…別に…」

…前から思っていたけどこの鈍感治らないのかな…でもこの鈍感のおかげで京哉君と居れるんだけど…あゝ何か納得出来そうで出来ないよ！

S i d e 京哉

ふうゝ結構回ったなあ

「後数ヶ所回ったら北側制覇するね京哉君」

「そうだなゝ次は…」

渴いたゝ叫びがゝ挫けそうな胸を突き刺すゝ
♪

ん？電話？

「凜、ちよつとすまない。電話出てくる」

「あっうん、待ってるね」

俺はトイレに入り電話に出た

「もしもし、京哉ですが…」

『オゝ京哉ボーイ！お久しぶりデース！』

「ペガサスさん！？」

電話の主はペガサスさんだった

Side凜

「…遅いなあ京哉君」

ボクはベンチで座っていた。京哉君の入ったトイレの向かい側にあったベンチだから直ぐに判る

「そういえばボク京哉君とデートなんだよね…」
ううゝ考えただけでドキドキするよゝ

「ん？お前赤坂じゃね？」

えっ…こ、この声は…ボクはおそろおそろ声の主を見た

「赤坂じゃねえかよ」

2、3人男の人が居てその中に1番会いたくなかった人が居た

「きつ…桐島君…」

中等部でボクを散々苛め…お父さんが用意してくれたデッキを燃やした張本人が居た…

「あの最弱の赤坂じゃねゝか。こんな所に居るって事はアカデミアは辞めたみてーだな」

「キミと一緒にしないで、ボクは辞めてない」

「何だよ辞めてないのかよ」

鬱陶しい…何でボクに突っ掛かるの…

「それじゃボク友達と合流するから…」

「待てよ、久々にあつたのも何かの縁だ。俺達と遊ぼうぜ」

「嫌、友達待つてるから」

「いいじゃねえかよ」

「嫌」

「っ！…いい加減にしろよ…その友達やアカデミアの奴にあの写真バラされたいか？」

っ！あの写真…

「止めて、お願い！」

駄目…あれだけは駄目…あんなの見たら京哉君に嫌われるっ！

「…判った…判ったからお願い…」

「へへへ…そう来なくちゃな」

ごめんね…京哉君…

S i d e 京哉

ふゝペガサスさんと久しぶりに話したから長引いてしまった

「凜…お待た…せ…あり？」

何処に行っただんだ？電話してみるか

「はあ…はあ…はあ…何処だ凜！」

俺はダッシュで探していた。そりゃあんなメールが来てたんだ、探すしかねえだろ

「すみません！ここに赤茶の髪の色で髪が長めの女の子見かけましたか？」

「ああ、その子ならさっき3人くらいの男と居たよ」

「どちらへ向かったか判りますか！？」

「あっちだね」

「ありがとうございます！」

親切な方で助かった！待ってるよ凜！

S i d e 凜

ボクは京哉君に一言メールを入れた…助けて…って。そして連れて来られた場所はまだ未完成のアトラクション…勿論人は居ない

「ここで何するの…？」

「決まってるんだろ。デュエルするんだよ」

デュエル…また…あの時みたい…でも！ボクは昔のボクじゃ無い！倭ちゃんや喬ちゃんと出会って、転入した涼ちゃんとも仲良くなつた。何より！好きな人が出来たんだ！

「京哉君が居るんだ…負けない！」

「それじゃあ勝って楽しませてもらうぜえ！」

「「デュエル！」」

凜 LP4000

桐島 LP4000

「俺から行くぞ！ドロー！俺は切り込み隊長を召喚！効果でもう1体召喚だ！」

切り込み隊長 攻1200

「切り込みロック…」

「波動キャノン3枚発動して手札からデス・メテオ発動！赤坂に1000ポイントダメージを与えるぜ！」

「くうう！」

凜 LP4000↓3000

「ターン終了だ」

「ボクのターン！」

次のターンで必ず決めてくる！それなら！

「ボクは魔法カード洗脳ブレインコントロールを発動！ライフ80を支払って切り込み隊長のコントロールを得る！」

「ちっ！」

凜 LP 3000 ↓ 2200

手札はこれで決める！

「ボクは切り込み隊長を召喚！効果で荒野の女戦士を特殊召喚！リ

ア、お願い……」

『任せてリン！』

荒野の女戦士 攻 1100

「だがそれだけじゃ俺は倒せねえぜ！相変わらず頭が働いてねえな！」

「ボクの勝ちだよ！二重召喚を発動！鋼鉄の騎士ギアフリードを召喚する！」

鋼鉄の騎士ギアフリード

「なあ！？」

「バトルだよ！ギアフリードで切り込み隊長に攻撃！」

「うぐお！」

桐島 LP 4000 ↓ 3400

「切り込み隊長2体でダイレクトアタック！」

「ぐはあっ！」

桐島 LP3400↓1000

「ボクは…昔のままじゃ無いんだ！荒野の女戦士でダイレクトアタック！」

『えええええい！』

「うがあああああ！」

桐島 LP1000↓0

勝った…勝てたよ…京哉君…

「バ…バ力な…俺が負けただと…」

「ボクの勝ちだよ…だからもうボクに付きまとわないで」
京哉君の所に帰ろう

「お前ら赤坂を捕まえろ！」

「へい！」

帰ろうとしたら桐島君の取り巻きに捕まえられた

「放してよ！」

「へっ、負けちまったが無理矢理してやれば関係無え！」
嫌…嫌あ…助けて…

「止めて！放してよ！」

「それじゃあ…げっへっへっ…」

「助けて…助けて…」

京哉君…

「諦めな、誰もこねえよ」
助けて…

「助けて！京哉君っ！！」

「俺のダチに手え出すたあ良い度胸してんじゃねえか」

怒りがこもり…それでもボクには優しく聞こえた…

「京哉君…」

S i d e 京哉

ふいゝ、やゝっと見つけたぜ

「何だてめえ！」

「聞こえなかったようだな、ダチだって言っただろ」

「京哉君…」

わりいな凜…待たせちまった

「おいそのカス2人、死にたくなければさっさと凜を放せ」

「んだとお！」

「こちとら3人だぞ！」

ダン！

いやあゝ実力行使は嫌だったけど思わず近くの柱を殴っちまったよ。
てへっ

「………」

「3秒間待つてやる。さっさと凜から離れようか？」

爽やかな笑顔で言っであげたらさ…

「……う、うわあああああ！」

情けない声を出して逃げてったよ、ああコイツは捕まえとこ

「ふぐおう！」

「やあ、君が凜を泣かした奴かな？」

「う…あ…」

「ん？どう料理してやるのかな？」

『お兄ちゃん、私に任せて、脳天徒割るからさ』

よし、アリスに任せた！アリスを実体化！

京哉は実体化の魔法を使った。アリスが現れた

アリスの攻撃、グラビトンアイスハンマー

桐島は9999のダメージを受けた。桐島は吹っ飛ばされて気絶してしまった

『終わったよお兄ちゃん』

「おう、さんきゅアリス」

まあこれで懲りたろうな

「京哉君…ありがとう」

「大丈夫だった？凜」

「うん、ボクは平気だよ」

凜が大丈夫ならいいか…ん？

「写真…か？っ！」

「っ！！それは…」

S i d e 凜

見られた…京哉君に見られちゃった…見られなくなかったものを…

「京哉君…それは…」

ボクが真相を話そうとした時

ビリっ！

シユカツ！ボオ！

「きつ京哉君！？」

京哉君が写真を破き燃やした

「それじゃあ北側制覇しに行こうぜ凜」

…京哉君は何も言わなかった、ボクの秘密を見ても何も…

「京哉君…聞かないの？」

「何が？俺が聞く事なんか無いし凜は話す事も無いだろ？それに俺は何も見えてないし」

…京哉君…そんなのだからボクは…

「京哉君ちよつと良い？」

「ん？」

「んっ…」

好きになっちゃうんだよ

S i d e 京哉

只今夜の十代達の部屋です…凜にキスされました…ええされました…いきなりだったからビックリしたよ…。多分アレが凜風の感謝の仕方なんだな…。ん？というか凜はどんな人でもやるのか…

「それだけはちよつとやだなあ」

「何がだよ京哉？」

「いや、こつちの話さ」

「？」

まあ十代に話しても判んないか

おまけSide凜

「…やるわね凜！」

「…凜ちゃんに先越されたわ…」

「私も同感です…」

「凜、京哉の返事はどうだった？」

「…葵さんの言う通りだった…」

「京哉君キスがどうしたって顔してた…」

「…ヤバいくらいに鈍感ね京哉…」

「…悔しいけど助かったというか…」

「でも何故か納得出来ません…」

「京哉…鈍すぎるよ…」

京哉君…早く判ってくれないかなあ

よ、40万アクセス！イッヤッフううううううう！（前書き）

誠に感謝感謝ですよ！

よ、40万アクセス！イッヤッフううううう！

ありがとうございまあああああす！

京哉「いやあゝホントに感謝ですよ」

それと京哉はさっさと死ねよ

京「何でだよ！」

お前もう鈍いつてレベルじゃねえもん！

京「鈍いつて何がだよ！」

はあ…もうこいついや。よし！今から京哉が何故鈍いか検証しよう

京「はあ！？意味わかんねえし！」

京哉の男性ファンの皆さん！京哉をお好きにどうぞー！

『うおっほおおおおおお！』

京「ちよおおおおおお！」

さあ逃げる逃げる京哉あ！さて皆様京哉が何故鈍いのか、その理由がこの映像転写機に眠ってます。皆で見ようではありませんか！それでは…スイッチオン！

Side 京哉 年齢13の夏

京「今日葵姉が来るから楽しみだゝ。早く来ないかなゝ、いろいろ
買い物とか行かなきゃね」

ピンポン

京「おっ、葵姉かな？はいはい」

ガチャ

葵「京ちゃん！久しぶり〜！」

だきっ

京「葵姉久しぶり！あのさ…毎回思っけど葵姉なんで俺に抱きつくの？」

葵「京ちゃん暖かいも〜ん」

京「暖かい？よく判らないなあ…」

葵「うん、暖かいんだよ！それじゃあ早速買い物行こう京ちゃん！」
京「勿論！」

葵「京ちゃん凄〜い。袋18個もよく持てるね」

京「伊達に鍛えて無いからね〜」

不良A「彼女〜お茶しない？」

不良B「俺達がおごるよ？」

京「葵姉相手にしたら駄目だよ」

不良B「んだど餓鬼い！」

不良A「てめえは呼びじゃねえよ！それじゃあ行こうよ」

ガシッ！ブウン！ドサッ

不良B「へっ？えっ？」

京「葵姉凄いいねえ、片手で投げるなんて」

葵「ありがとう京ちゃん、それじゃ行こっか」

葵「今日ありがとうね京ちゃん。荷物家まで持ってきて貰って」

京「いやいや、葵姉の為だもん。当然だよ」
葵「ふふふ…ありがとう京ちゃん。…周りは誰も居ないって」
京「葵姉どうしたの？」
葵「んゝえいつ」
京「んむっ！／＼／」
葵「んっ…ふふふ…京ちゃん可愛い」
京「いきなりどうしたの葵姉！？」
葵「んゝお礼かなゝ、女の子はこういうお礼をするんだ」
京「へえ…あつ、それじゃあそろそろ帰るね。またね葵姉」
葵「うん、またね京ちゃん」

終

葵「懐かしくいい映像だったね」
うおっ！いつの間に！？
葵「んゝ作者君がスイッチ入れた辺りかな」
めっさ最初っからじゃん！
葵「懐かしかったなあ」
京哉とキスしたのが？
葵「ううん、投げ飛ばしたのが」
そっちかよ！っかあんたのせいで京哉が鈍感になったんだぞ！
京「俺は鈍感では無あああああいい！」
葵「京ちゃん鋭いもんね」それよりさっきから京ちゃんを追いかけ
てる人達は？」
ああ、京哉の未来のお嬢さん（嘘）

いらっ

葵「私の許可無く京ちゃんのお嫁さんになるのは認めない…故に貴方達を抹殺しますね。バハムート、行きなさい」

可哀想にバハムート…こういう処理に使われるとは…というわけで京哉は葵さんが原因で鈍感になりました。正確には京哉は素直すぎるって事ですな

京「葵姉！こっちに来てる！ちよっ！あっ…」

じゅっ

葵「きっ京ちゃああああん！」

ざまあ（笑）えっ！ちよっ！こっちに来るなってぐぎやあああああ！

よ、40万アクセス！イッヤッフううううう！（後書き）

今回はアレです！超番外編です！どんなのにしようかな

作者の無い脳をフル回転させておきます！

ちなみに京哉はあのぐらいいから女性の行動はほとんど葵がやる行動という理論がついてます。まあシスコンとブラコンを超えたシスコンとブラコンですね

第四十五話 こりゃまたキャラが面白いね（前書き）

今回はリュウガ様のキャラクターが出演します！
ではどうぞ！

第四十五話　こりやまたキャラが面白いね

「皆様きちんと整列してください！」

今回はカイバーコースターの警備係として工作中、ちなみにこのアトラクションのキャッチフレーズは『皆でブルーアイズの速度を体感しよう！』だって…無理に決まってるじゃん

「あつ、京哉」

「アニキ！」

「よう、トシに喬。お前達でコレに乗るのか？」

「うん、京哉は仕事だよね？」

「まあな。午前中にここで仕事して午後は皆で泊まってるホテルで仕事だな」

全て無料の代わりに俺は仕事しなきゃいけないんだよなあ…ここでの仕事＋報告書だから結構面倒なのよ

「アニキ頑張ってくださいッス！」

「ああ。後前空いたから詰めてな」

「うん、頑張つてね京哉」

喬達は前に進み並んだ

「さて、仕事つと。ああ、そこのお客様。列からはみ出さないで下さい」

並ばすだけでも疲れるよ…

「ふいふようやく落ち着いた」

あり得ない行列だったよ…しかもようやく喬達が乗る番だし

「客はこれ以上居ないし…これで少しは休めるな」

数分位休んだ

「止めて下さい、貴方達には付き合いません」

「そんな事言うなよ」

「俺達と良いことしようぜ！」

喬が男2人にナンパされていた…はあ…またか

「俺が行く」ちよつと待ったあああああ！「お？」

1人帽子を被った客が間に入った

「その子が嫌がつてるだろうが！止めてあげろよ！」

「けっ！何だよてめえは！」

「俺か？俺は通りすがりのデュエリストだ！」

覚えておけと言わんばかりに指をさした

「俺とデュエルしろ！俺が勝ったらその子から離れな！」

「良いだろう！」

2対1かあ…喬の為だ

「俺も加勢しよう、2対1は見逃せないからな」

「良いのかよ警備の兄ちゃん！」

「ああ、ここでデュエルに勝ったお客様は警備の目を見逃して貰えるからな」

ホントにこの条件は良いな。いろんな奴とデュエル出来るし

「ようし！これでタツグデュエルだ！」

「ちっ…だけど警備の奴潰せば良いなら簡単だぜ」

「そうだな、よし！やってやろうぜ！」

「商談成立だな！」

商談成立って商売の言葉だろ…

「さっさと始めようか」

『デュエル！』

京哉& a m p ;帽子君 L P 4 0 0 0

ナンパ男A& a m p ;B L P 4 0 0 0

「よっしゃあ！俺のターンだ！ドロー！」

帽子君から始まった。デッキの確認してなかったなあ…まあ手札から見て…判らん…俺のやつはアオイかカイトか…

「俺は永続魔法の神の居城ヴァルハラを発動だ！効果で堕天使アスモディウス召喚！頼むぜ！」

『任せろ龍牙！』

堕天使 アスモディウス 攻3000

へえ…帽子君は龍牙って名前でアスモディウスが精霊か

「更にアスモディウスの効果発動だ！デッキから天使族モンスターを墓地に送るぜ！」

墓地を確認つと…スペルビア…うわあ…あの客涙目

「更に手札から魔法カード天使の施しを発動！3枚ドローし2枚墓地に送るぜ！」

送ったカードは…アテナ2枚…ふゝむ…

「更に魔法カード死者蘇生を発動！墓地に送った堕天使スペルビアを特殊召喚！スペルビアの効果で墓地からアテナを特殊召喚！アテナの効果発動！スペルビアを墓地に送り再びスペルビアを特殊召喚！スペルビアの効果でアテナを特殊召喚！最初のアテナの効果により1200ポイントのダメージ！」

「なっ何だよアイツの高速展開は！」

ナンパ男A & a m p ; B L P 4 0 0 0 ↓ 2 8 0 0

彼凄いな、息を切らさずにあんだけ言えるなんて

「そして手札からヘカテリスを墓地に送りヴァルハラをデッキから手札に加えるぜ！そして2体目のアテナの効果発動！スペルビアを墓地に送りスペルビアを特殊召喚！スペルビアの効果でヘカテリスを特殊召喚！2体のアテナの効果により合計2400のダメージ！」
「うぐあつ！まっまだ1ターン目何だぞ！？」

ナンパ男A & a m p ; B L P 2 8 0 0 ↓ 4 0 0

「そして俺はまだ通常召喚をしていない！ヘカテリスを生け贄に光神機―轟龍を召喚！2体のアテナの効果で1200のダメージ！終りだ！」

「うわあああああ！」

A & a m p ; B L P 4 0 0 ↓ 0

「よつしゃあああああ！ざつとこんなもんだぜ！」

うゝん、俺居なくても大丈夫だったな

「喬、大丈夫か？」

「あ、うん。大丈夫だよ京哉」

そういえばトシは何処だ？

「利光ならトイレなんだけど…遅いね」

それよりあの帽子君だな

「問題を収束していただきありがとうございます」

「なんのなんの！困ってた可愛い子を見たら助けるのが男の道理！

あの子は！？」

…何だろう…こいつから吹雪さんと似たオーラを感じる

「へっくし！」

「あれ？吹雪さん、風邪ツスカ？」

「うん…ひよつとしたら女の子が僕の噂をしてるのかもしれないよ」

「どうやってその理論に辿りつくんですか…」

「というか三沢君居たんだ」

「居たよ！ずっと一緒だったよ！」

「彼女なら友達の所に行つたよ、ありがとうだつて」

「な〜んだ〜。出来れば口から言つて欲しかったなあ…あつ！もうこんな時間だ！それじゃあな警備員の兄ちゃん！」

帽子君は慌ただしく去つて行つた

「今日は賑やかだな」

「そうだね京哉、所で何であんな嘘を？」

え？何でつて言われましても…

「吹雪さんと似たオーラをしてたから」

「それはちよつと…」

だよなあ…

「神谷あゝ！あ、アニキ！」

「トイレ、遅かったな。それじゃあ俺は仕事に戻るわ」

「うん、頑張つてね」

「また後でツスアニキ！」さてと、残りを頑張りますか！！

S i d e 龍牙

いやあ〜楽しかったぜ！

『今日は珍しく1ターンで終わったな』

「ああ！なんかあの警備の兄ちゃん居たら珍しく回ったぜ！」
いや〜ラッキーラッキー！

『もしや彼が…』

「どうしたんだよアスモディウス？」

『いや、何でも無い』

変な奴だな…それにしてもあの金髪の女の子可愛かったなあ…

「一目惚れしちゃったぜ〜」

『龍牙、その言葉今日で20回目だぞ？』

「良いじゃねえかよ！でもあの子は今まで見た中で1番だったぜ！」
あゝあ…編入するアカデミアであんな可愛い子見当たら無いかなあ

Side 京哉

「え？明後日か？」

『そうだ、俺の代理として出てもらう』

夜、皆で話していたら海馬から電話がかかってきた

「というか開催者である海馬が1回戦から出るのはどうなんだよ」

『ふん、貴様だからこそ1回戦からにしたんだ。俺が行くならそんなことはせん』

こいつセコい…

「まあ全部無料にして貰ってるから構わないけどさ」

『そうか。俺からの要件はそれだけだ』

「わかった。それじゃな」

ピッ！

「はあ……」

「海馬さん何て言っただんだ京哉？」

「明後日海馬ワールドの開園記念デュエル大会の代理に出ろって」

「確かそんなあるってゆーてたな」

「マジかよ！くうく良いなあ京哉！」

「何でもかなりの実力者が集まるって話ッスよ」

海馬からしたらきつと弱いと思うんだろうけど俺からしたらキツイ
だろうなあ……

「京哉頑張って」

「ボク達応援してるからね」

「京哉さんデッキをいろいろ使うので楽しみです」

まあ頑張らせてもらうかな

「それじゃ俺はもう寝るよ」

「俺も寝よう」

「僕も寝ようかな」

三沢、サンダー、吹雪さんは部屋に戻って行った

「私も寝るわ、倭達はどうする？」

「ウチはまだ起きとこかな」

「ボクも起きているよ」

「私は今からお風呂行くね」

「私は飲み物を買って行ってから寝ますよ」

「そう、それじゃお先に寝るわね」

明日香も自分の部屋に帰って行った

「まだ起きてるならデュエルでもしようぜ倭！」

「せやな、じゃあ十代君達の部屋に行こか」

「あつ、ボクも行くよ」

「それじゃあ行くッス！」

十代、翔、倭、凜は十代達の部屋に行った

「それじゃあ私はお風呂に行くね」

喬は風呂の方へ行った

「京哉さん、明日一緒に回れる様に頑張って引きますね」

涼は自販機の方へ行った

「アニキ！京哉はホラー特集あるらしいッス！一緒に俺の部屋でみましょうや！」

「トシ、お前怖いだけじゃないのか？」

「うつ！で、でも俺は見たいッス！」

「俺も風呂入るから後で行くよ」

「よ、よろしくッス！」

トシも部屋に行った

「…さてと、風呂に行きますか」

俺は用意を取りに管理室に行った

「ふい〜」

今俺は露天風呂に入っている。あ〜いい湯だな〜

「疲れ取れる〜」

今まで忙しかったからな〜。ホントにお疲れさんだよ俺

「えっ！？きつ京哉！？」

「え？き、喬？」

え！？何で男湯の露天風呂に喬が居るんだ！？

「な、何で喬が？」

「ここ、混浴だから…」

…ああ、そう言えばそうだったな…

「き、京哉もお風呂に？」

「ああ、まだ入ってなかったからさ」

今俺達は背中を合わせて湯に浸かっている

「…」

ヤバいな…誰も居ないと思ってたが…喬が居たなんて気付かなかっ

た…

「…お、俺あがるよ」

「あ…うん…」

…そんな残念そうな声だすなよ…

「京哉！」

「ん？」

「その…明日、回れたら良いね」

「ああ、それじゃあな」

「うん」

俺は急ぎ風呂を出た

S i d e 喬

…風呂から上がった私の顔がまだ赤い…

「京哉…私…」

多分風呂の熱のせいじゃない…

「私…貴方が…」

これは…自分の気持ち

「私は…貴方が好きだよ…京哉」

だから…私を捨てないで…京哉

第四十五話　こりやまたキャラが面白いね（後書き）

というわけで新キャラクター龍牙君でした。今回は談義無しで…作者が眠気Maxなので…後リユウガ様、龍牙君の性格をあんな感じに行きます！
それでは！

久しぶりの今日の一言

サイドデッキを俺の外道ヒーローに投入したよ

京哉「どれくらい外道さが墜ちるんだろっな」

さあ？

第四十六話 信じるのは大事だね！（前書き）

今回は喬編です！

まあ反応が薄いこのアホんだらですが…

それではどうぞ！

第四十六話 信じるのは大事だね！

「ふふふ…」

只今嬉しそうに喬が俺に抱きついている

「…なあ喬…俺に抱きついて意味があるのか？」

「あるよ」

「どういう？」

「…京哉の温もりを感じれるから」

…どういう意味があるんだ？

「判らん…まあいいや、何処から回るか」

「そうだね…凜とは北側行っただよね？」

「ああ、制覇したな」

ちなみに倭は絶叫系、涼は展示系だったな

「それじゃ西側に行こ」

「了解」

S i d e 喬

やった…京哉と2人きり、3人に遅れをとってしまったけど…私の
思いは必ず伝える

「京哉、あれ乗ろ」

とりあえず京哉と楽しめるだけ楽しもう…ずっとこうして抱いてい
たいなあ…京哉、暖かいよ

S i d e 京哉

「いやあ、楽しんだ！」

「喬の見れない一部も見たし」

「ううゝ京哉、酷い…」

え？何に行つて来たつて？お化け屋敷だよ。喬は西洋のは全然怖くないけど和風は怖いって…出る度に…

「きやあああああ！ひつ、いやあああああ！きつ京哉あああ
あ！た、助けてええええ！」

つて感じで叫んで必死に俺にしがみついていたよ

「意外だったなあ…喬がああいうの苦手だったなんて」

「ううゝ」

まだ俺の腕を抱いて首を横に振ってるよ

「気分直しに飯行くか」

「ううゝ」

こくこくと首を縦に振った…癒されるなあ

「京哉、美味しかったね」

「そうだな」

今回はカレーだった…名前の前には勿論海馬が付いていた…あの社長も自分大好きの度を超えてるな…

「ねえ京哉…あれ」

「ん？」

喬が指を指したのはある看板…そこには『カップルNo.1決定戦！！第1回カップルデュエル大会！！』と書いていた

「せっかくだし出ない？」

タッグデュエルか…そういえば前に帽子君とタッグ組んだけど帽子君の独壇場になってナンパ男ドンマイな結果になったしな

「記念だし出ようか」

「うん」

喬嬉しそうだな…そんなに俺と組むのが良いのかな？

「さあ皆あ！第1回カップルデュエル大会！カップルNo.1決定戦だああああ！」

『わあああああ！』

海馬ミニマムドームでこの大会が行われたんだが…ミニマムって言葉をもう1度勉強してこい海馬。この広さはミニマムじゃねえぞ。大きさが普通にけっこうデカイ武道館レベルだぞ

「さあこの集った10組から頂点を決めるぞおおおおお！」

しかし集まった奴は不良みたいなのがいっぱいだな…ガングロカップルもいれば子供もいる…ブルーベリー色のつながを来た人が男性と組んでる…まあその人の趣味だから良いと思うよ、うん

「京哉、頑張ろ」

「ああ」

まあそれなりに頑張りますか

Side 喬

「勝利…！！エントリーNo.5！決勝へ進出だあああああ！」

ふう…あつ、今順調に勝っていますよ。なんせ京哉が居るから負けるわけに行かないし京哉と組んでるなら尚更だよ…

「次決勝だな喬。頑張ろうぜ」

「うん」

しかも優勝したら海馬ランド優待ペアチケット…京哉と行く為ならたとえデュエルキングが前にたっても今の私なら勝てる！

「私達は勝つ！」

S i d e 京哉

め、珍しく喬が燃えてる…まさか喬もあの副賞の高級海馬牛100g3年分の為に…（海馬牛とは海馬コーポレーションが独自に開発を進め完成した肉がなんと砂漠の熱さに置いていても10ヶ月もつと言われている最高牛！料理職人なら喉から手が出るほど欲しい食材だ！ちなみに家庭ならば冷凍庫にいれてても5年はもつぞ！by 作者）

「アレは俺も欲しいな、絶対に勝とうぜ喬！」

「うん！頑張ろ、京哉！」

目指すは海馬牛3年分の為に！

S i d e 喬

嬉しい…京哉もペアチケットを取りに…

「京哉と私の為に…勝つ！」目指すは海馬ランド優待ペアチケットの為に！

S i d e 京哉

「さあ決勝戦は互いに協力し無傷で決勝に上がったエントリーNo.5！そして此方も決勝へ無傷で上がったエントリーNo.8！」

その声で出てきたのは最初に説明したガングロカップル…無傷って事はなかなか強いんだよね…楽しみだぜ

「それではデュエルスタートお！」

「…デュエル！」「…」

京哉&喬 LP4000

ガングロ LP4000

「俺からな〜ドロ〜」

ガングロ男から開始した、ちなみに俺は保険であるカードを入れておいた。まあ多分使わないだろ

「んじゃ俺は暗黒のマッドドッグ召喚、カードを1枚伏せターン終了」

暗黒のマッドドッグ 攻1900

「俺のターンドロ〜！」

「それじゃあドロ〜時に永續罫発動、パートナー・チェンジ」

「…なっ！？」

パートナー・チェンジだと！？

「ちよつとアンタ！何でそれ使うのよ！」

「お前にはもう飽きたしお前よりあの子の方が可愛いからな〜」

確かお互いの合意の下に完了するはずなんだが…

「お前とあの子で合意したら交替な」

「良いわよ！アンタ何か知らないわ！ほらアンタ！アタシと替わりなさい！」

不味い…喬はこういう押しに弱い

「私は「良いからさっさと了承しなさい！」は、はい…あつ」

…やつちゃったか…

S i d e 喬

…今すぐ自分を殺したい…何で了承しちゃったんだろう…

「それじゃあ頑張ってペアチケット貰おうな？名前は？」

勝手に私の携帯をとって…

「見ないで」

「喬ちゃんか…一緒に貰おうな」

見られた…ホントにごめん…京哉

S i d e 京哉

…とりあえず進めるか

「俺はシャインエンジェルを守備表示で召喚、カードを2枚伏せターン終了」

シャインエンジェル 守備800

「私のターン…ドロー」

喬がメビウスを召喚出来れば良いんだが…

「モンスターをセットしてターン終了」

頼むぜ喬…お前のメビウスが頼みだ

「アタシのターンドロー！岩石の巨兵を守備表示で召喚！ターン終了よ！」

岩石の巨兵 守2000

「俺ターンドロー、二重召喚発動。暗黒のマッドドッグ召喚、2体の暗黒のマッドドッグを生け贄にモザイクマンティコアを召喚」

モザイクマンティコア 攻2800

「手札から装備魔法ビックバンシユートをマンティコアに装備、更に装備魔法魔導師の力をマンティコアに装備してからバトル」

モザイクマンティコア 攻2800↓4700

「マンティコアでシャインエンジェルに攻撃、ブレスファイア」

貫通持ちの上に攻撃強化！

「うぐああああ！」

京哉&・ガングロ女 LP4000↓100

「京哉！」

「おいおい喬ちゃん、俺のパートナーだろ？もうすぐ俺達の勝ちなんだから俺に応援してくれよ」

「くっ！…京哉…」

「シャインエンジェルの効果発動…デッキから攻撃力1500以下の光属性モンスターを特殊召喚する…俺はサイレントソードマンLV3を特殊召喚…」

サイレントソードマンLV3

「ちっ…ターン終了」

「俺のターン…ドロー！スタンバイフェイズを迎えた事によりサイ

レントソードマンはレベルアップする！来い！LV5」

サイレントソードマンLV5 攻2300

「手札からレベルアップ！を発動、サイレントソードマンはLV7に無条件進化！頼む…カイト」

『任せてください主京哉…ですが私の登場はとても久々ですね』

それは作者事情だ。許せ

「コイツが居る限り全てのフィールド上の魔法は効果が無効になる…ターン…終了」

頼む…喬…メビウスを引いてくれ

Side 喬

「私のターン…」

ドローが出来ない…メビウスさえ引ければ良い…だけど引けない…引けなかったら私は…私は…

「喬、カードを引くんだ。俺は喬を信じているからな」

…京哉が私に優しく言ってきた…

「喬ちゃん早く引いてくれよ」

そうだ…引くんだ…京哉の為に！

「ドロー！」

引いたカード…それは…

『よく引いた主。私に任せてくれ』

「メビウス…お願い」

氷帝…そして私の切札の1つでこの状況を打開するカード！

「私は伏せたモンスター、執念深き老婆を反転召喚！岩石の巨兵を破壊！」

「ちょっとアンタのせいで魔法が使え無いじゃない！」

京哉を責めないで…悪いのはこの人だから…

「私は執念深き老婆生け贄に氷帝メビウスを特殊召喚！」

氷帝メビウス 攻2400

「メビウスの効果発動！フィールド上の魔法、罫を2枚まで破壊する事が出来ます！私は京哉の…右の伏せカードを…」

そして…この邪魔な

「パートナー・チェンジを破壊します！」

「なあっ！」

「パートナー・チェンジが破壊された事により本来のパートナーに戻ります」

やつと戻れたよ京哉…

「またアンタと！？」

「けっ！こっちがお断りだよ！」

「ただいま…京哉…」

「おかえり喬、それじゃ締めと行くか！」

行こう、京哉！

Side 京哉

そしてセットで破壊されたコイツが発揮する！

「セットで破壊された荒野の大竜巻の効果発動！フィールド上のカードを1枚破壊する！マンティコアを破壊！」

「お、俺の切札が！」

「喬！」

「うん！メビウスとサイレントソードマンでダイレクトアタック！」

『主の恋路の邪魔は…』

『我等が許しません！』

「「うわあああああ！」」

ガングロカップル LP4000↓0

「きつ…決まったあああああ！ライフ100からの大逆転劇！そして替えられても信じた互いの愛！文句無しの優勝だあああああ！」

喬流石だ。しかし愛ねえ…まっ！ダチを愛するのは基本さっ！キラーン

「優勝商品とその副賞をお受け取りください！」
俺達はそれぞれ受け取った

「京哉…」

「ん？んっ！！」

…喬にキスされた…と同時に会場から五月蠅い歓声が聞こえた

「「ふふふ…」」

いやぁホントに嬉しいなあ

「「海馬牛3年分（優待ペアチケット）が手に入った」」

「「えっ？」」

もしかして…

「「喬（京哉）が狙ってたのってそれ？」」

…同じの狙って無かったのか…

おまけSide喬

「へえ…頑張ったじゃない喬」

「うう…キスしてないのウチだけやんか…」

「倭さん大丈夫です…私も口にはしてませんし…」

「それで京哉君どうだった？ボクと一緒にだった？」

「うん…それよりも副賞を喜んでたよ」

でもそっちの方が京哉らしいね

「…やっぱりアイツ恋愛とか判って無いんじゃないかしら」

「それは思ってたけどあかん…言わんというて」

「逆に皆さんを大切にしてくださいなのが京哉さんですし」

「ゆっくり伝えていけば大丈夫だよ」

「そうだね…」

またチャンスはある…覚悟しててね京哉」

第四十六話 信じるのは大事だね！（後書き）

京哉「なあ…あれって…」

言わんでいい、言いたいのは判る

京「じゃあ何故あんな風に書いたし」

お前絶対に断るじゃん

京「当たり前だろ？喬もそうだし倭や凜、涼だって大切な奴なんだ。意味わかんねえ男なんざひっpegがえしてやるに決まってるだろ？」

何かキミお父さんみたいだね、ちなみに皆は好きなのか

京「勿論！」

どんな感じで？

京「友達として！」

お前死ねよ…キスされてるけど？

京「あれ友達としての一環じゃ無いのか？」

…駄目だコイツなんとかして病院に行かないと…

京「失礼だな！俺は元気だったの！」

あゝもうとりあえずラバーズ、いろいろドンマイ。んじやな

京「おい！待てよ、おい！」

ラバーズ『いつになったら自覚するのかな…』

葵「多分2年後位ね」

アオイ「けっこうかかりますね…葵様」

葵「だって、私がそうしたもん♪」

ラバーズ『葵さあああああん！』

第四十七話 結局俺は最後しか戦わないのかよ（前書き）

どうも皆さん！

今回は以前から考えていた京哉専用デュエルディスクの登場とまさかのキャラの登場です！
ではどうぞ！

第四十七話 結局俺は最後まで戦わないのかよ

喬と出掛けた夜の電話での話だ

「はぁ？また変更？」

『そうだ、今日の昼貴様のデュエルを見た開催MCが以前のやり方にすると言って来てな』

おいおい…せっかく楽しみにしていたのにな

「まあいいや、了解」

『それだけだ。ここで敗北なぞしたらただじゃおかないからな』
キツイ御言葉で…はぁ…仕方ないか

「判ってるよ、んじやな」

「海馬さんまた何か言ってたん？」

「明日変更で俺はトーナメントの王者とデュエルだって」

「へえ…そうなんや」

つてコイツはいつまでここに居るんだよ…

「さつさと部屋に戻らないのか倭」

「あの部屋嫌ゆーてるやん」

最初に部屋の状況を聞いたなら…

海馬とブルーアイズが描かれた絵の裏に御札がびつつつつつつつつしり貼ってあったそうなの

「あんな部屋居たらとり憑かれてまうわ!!」

あゝ確かに怖い…いきなり身体に誰か憑いてるよなんて言われたひにゃ…料理が出来ん

「というわけで今日は京哉君と寝るわ」

「明日香の部屋とかは？」

「隠しカメラあつてんで？」

……は？マジで言ってるの？

「凜の部屋」

「盗聴機が……」

……

「涼のは？」

「隣の男性の部屋と隠し扉や」

……そして最後の皆兼安全牌が喬の部屋……

「ウチが一旦部屋出たら皆もう寝とったから入れんし……」
なるほどなあ……

「んで俺の部屋に来たと」

「そついう事や」

はあ……仕方ないか

「んじゃ寝ててくれ、ちよいと回収してくる」

「了解や」

さてと、報告＋回収作業と行きますか

「……意味わかんねえし……」

回収してびっくりした……

部屋全部で40

隠しカメラ 13

盗聴機 10

隠し扉 10

御札 6

何にも無し 1

「これは酷い…」

もうここグルじゃねえの？

「とりあえず海馬に報告つと…」

あゝようやく終わった…ただいまの時刻深夜3時でございます。さつさと寝ようそうしよう

「ただいま…つと…」

布団を見ると倭が規則正しい寝息を立てていた…ん？寝息を立てると言うのか？

「全く…俺が寝る所ねえな」

ま、報告書書いて寝ますか

「ふわあゝ」

皆おはよう、倭はまだ寝てるよ…ちなみに手なんか出して無いよ？友達にそんな事出来るわけないじゃん

「とりあえず倭の荷物とつて来るか…」

俺は倭の部屋に荷物を取りに行き朝風呂ついでに着替えに行った

「んで今日は自由行動。それだけな、感想報告は無しでとりあえず午前会議（俺命名）にて伝えた」

「明日には帰るから土産等は任せるよ」

「京哉はどうすんだよ」

「俺は昼に備えて調整開始だ」

まあやるつつつても1戦だけだが

「ふゝん、じゃあ俺手伝うぜ！」

「遊びに行かなくて良いのか？」

「ああ！ほとんど回ったしな！」

「僕はお土産買いに行くツス」

「私はまだ回ろうかしらお土産もまだだし」

「てっ天上院君！僕も一緒に回るよ」

「明日香！僕も一緒に回るよ！」

「ふむ…俺は手伝うよ京哉」

「俺も手伝うツス！」

翔、明日香は土産でサンダーと吹雪さんがその付き添いで十代、三沢、トシが俺のデッキ調整か

「倭達は？」

「ウチ等は決まっとるよ」

「やること1つだけだもんね」

「そうだね」

「私ですよ」

『京哉君の手伝い』

あゝ有難いんだが…広い部屋が…管理室だな。もはやアレはLDKのレベル…前に数字が無いだけだし

「それじゃあ皆それぞれ解散って事で」

『はい！』

「ふっ…」

全デッキ解体完了！あっちなみにヒーローとサイバーは海兄に返し

だから俺は持つてきて無いぞ。後力ラクリを省いている。他とは合
わないからな

「やはりここはサイレントソードマンメインがいいんじゃないか？」
「現段階上それが良いと思うで。カイトやアオイは魔法耐性がある
し」

「お触れさえ張つてしまえばたいいコンボが出来るね」
「京哉さんはどんなのを考えてるんですか？」

んゝ…俺の考えかゝ

「光で固めたいのも1つだが…」
そうすればカイトの能力で装備魔法のイザナギが腐る時があるんだ
よなあ…

「装備魔法でのビートダウンも1つの戦法だし…」
どうしようかな…いっそのこと光外道ビート作つて見ようかな…

「なんやったらパックでも買いに行つてそこで考えてみーひん？」

「ナイス、それがあつた」

「けどよ、この近くにあるのか？」

「そういえばこの近くに1件だけあつたよ京哉」

…ああ確かにある…でもさ…あそこの店員が…

「まあ俺買いに行つてくるから皆部屋に居ててくれ」

「俺も行きやすー！」

「俺も必要なカードがあるから行こう」

「ボクも行こうかな」

「凜が行くなら私も」

「私も行きます」

「じゃあ俺もいくぜ！」

「皆行くんかいな！？…しゃーないか、ウチも行くで！」

…全員で行くという事で決定

「ここだ」

「外もそうだったけど広いな！」

まああんだだけデカイと普通に中もデカイわな

「でもなあ…この販売員がなあ「京哉じゃねえか！久しぶりだな
！！」ようモクバ」

『モクバ！？』

そうだ、この販売員は今モクバがやっている。海馬からの調査
と進行状況の確認をしている

「モクバ…って誰だ？」

「十代：モクバつつたら海馬瀬戸の弟だったの」

トシが呆れて言っていた

「海馬さんの弟！？へえー凄いななあ」

ま、そんな十代はさておきと

「モクバこのパックとこのパック、んでコイツを各3ボックスよ
ろしく」

『3ボックス！？』

「あいよ！ええと…320万京哉の給料から引いておくからな！」

「おう、任せた」

そう言われ俺はダンボールを9箱受け取った

「…京哉君…買いきやない？」

ん？そうなのかな？

「結構ダブるんじゃないか？」

「まあな」

「ダブってしまった分どうするのですか？」

「そりゃあアカデミアの寮の皆やアカデミアの先生達に分けたりそ
れでも残るから有り余った分は遊戯王をしたくてもカードが無い子
達にデッキとして作り上げて送ったりな」

だってそうでもないかとカードが可哀想じゃん

「京哉優しいね…」

「コイツはホントに良い奴だぜ！コイツのおかげで遊戯王を出来な

「かった子供達が減っていつてるからな！」

「へえ…気付かないのもその優しさが元かな…」

「流石アニキス！」

「京哉！俺にも分けてくれよ！」

「ああいいよ。さて、デッキ調整しますか」

「店の奥の部屋使っても良いぜ！」

「サンキュモクバ」

俺達は店の奥に入って行った

「ん…どうするかな…」

とりあえずはあれだ、デッキコンセプトだ

「京哉！これ貰っていいか！？」

「ああいいよ」

「それじゃ京哉、俺はこれとこれを貰うよ」

「ああ」

皆はしゃいでるな…まあレッド寮の奴等はアレだったな…猛獣の
様にとつてたからな

「さてと…これとこれと…これ入れて…完成つと」

『ようやく完成しましたね京哉様』

「ああ、明日のデッキだから…それにしても久々じゃないか」

『それは作者の所為と……京哉様の…』

え？最後の方聞こえなかったけど…

『京哉様』

「何？」

『その…私も何処かに連れて行って下さいね』

「ああ、いいよ」

そういえばアオイ達が1番付き合いが長いからな…今度何処かに行
くか

よし！完成！とりあえず完成だ！これで大丈夫だろう

「んゝ時間的に良い感じだしな。そろそろ昼飯に行くか、モクバ。アレをニューカイバーホテルによろしく」

「おう！後京哉これ！」

俺は1つ箱を受け取った

「これは？」

「兄様が京哉用に作ったデュエルディスクだ！」

開けて見ると…何というかディスクがカイトの持つてる剣をデュエルディスクと合体させたものなんだが…

「しかも何この持ち柄」

「持つて抜いてみな！」持つて見ると…

カシャカシャン！

……………

「なっ！すっげーだろ？」

あの…剣になっただけど…

「俺にコイツをどう使えと？」

「んゝ何かの時に使ってくれよ！ちなみにディスク形態だと斬れないし抜いた後も斬れる様にするかしないか出来るんだ！後専用グロ―ブあるじゃん！それは打撃を…」

…何だろう…アイツは俺にリアルファイトしてこいと言いたいのか？

「しかもグローブは指を出してるからカードを持つのに困らない上にデュエルディスク初の自動シャッフル機能搭載だぜ！」

物騒すぎる上に高性能…

「返」返してもお前のディスクもうねえよ」「はあ！？」

「ホテルの奴が回収しちまったからさ」…海馬、俺はお前が憎い！

まあ置いてた俺も悪いんだけど…

「まあいいよ…とりあえずこれで出る」

「まあ兄様の代理だから目立たせてくれよ！」

頑張ります…おっと、これなおしとこ

「皆、俺昼にするけどどうする？」

「俺は1回ホテルに帰るよ」

「俺もだ」

「ウチは京哉君と食べる！」

「ボクも食べに行くよ」

「私もそうしようかな」

「私も食べにいきます！」

「俺はアニキに付いていたいきやす！」

「判った、それじゃモクバ頼む」

「おう！」

にしてもこのディスク良い感じに馴染むなあ

「アニキ！それモクバさんからのプレゼントツスか！？」

トシがディスクを見て聞いて来た

「海馬からだな…」

「変わつとるなあ…この持ち柄なんなん？」

「あつ、ちよつ！それもつたら！」

カシャカシャン！

「重っ！な、なんや剣なつたやん！？」

あちゃーやってしまったか…っ！か取られたらまずくないかこれ

「凄いねえ…京哉君、これ斬れるの？」

「斬れるけど今は斬れないようにしてる危ないから」

「あ、あはは…」

「何と言いますか…海馬コーポレーションの技術はいろいろ凄いですね…」

いや、これは無駄すぎる…

「とりあえず返してくれ、早くなおすから」

「うん」

倭から受け取りなおした

「とりあえず何を食うか」

さて、会場に到着。え？昼飯の描写？作者の都合でカットされたぞ

「1番見える席だから多分判ると思うぞ」

「判ったぜ！頑張れよ京哉！」

「ああ」

まあなるようにならあ

「さあここでの王者が決定したあああああ！」

ようやくかゝはあ…暇だった

「さてそれじゃあ行こうか」

『ようやく出番ですね京哉殿』

『長かったねゝお兄ちゃん』

『行きましょう京哉様』

今回もお前達を頼りにしてるぞ。相手は誰だろうな

Side 倭

「ようやく京哉だな！」

「世界中の有名なデュエリストばかりだったわ」

ウチはさっさと京哉君のデュエル見たかったんやけど…

「あの人確かバトルシテイに居たやんな？」

確か孔雀舞…やったような…

「うん、マリクって人に負けた筈だよ」

そんな人やけど勝てるやんな京哉君

Side 京哉

デュエルの時デッキ弄ってたから見てなかったが…

「相手は舞か」

「あら？京哉じゃない、久しぶりね。海馬瀬戸の替わりってアナタだったの」

「まあ仕方なくけどな」

「まあいいわ、アタシに勝てるかしら？」

「おいおい…以前の俺と一緒にすんなってそれじゃ始めるか」

俺はディスクを起動させた…前と違うから起動しにくい…良い感じのフィットはあるのにさ

「そうね。始めましょ」

「「デュエル！」」

第四十七話 結局俺は最後しか戦わないのかよ（後書き）

京哉「まさかすぎるだろ」

いやぁ個人的に登場タイミングを考えていまして…

京「まあいいや、んでさ…」

なんだい京哉？

京「お前達は俺にリアルファイトしてこいと言いたいのか？何だあのピンポイントのは」

気にしたらM A K E D A

京「気になるだろ！？何だよあの剣は！？」

ちなみにシュベ。トケー。ルにもなるぞ

京「お前の趣味丸出しじゃん！」

うるせえ！本当はなあ！2本にしたかったんだ！

京「ソード力。ミ。イ意識し過ぎだ！」

種の中でアレとア。ト。イ系は許す！後ディープなシ。ー。え？自由？スーパーな遺伝子操作された人？何それ美味しいの？バリーさんだろ！拳神テラカツコよす！

京「判らない方はGoogle先生でS。EDのMSバリエーションをググろう！」

それでは次回は京哉VS舞です！懐かしく行こう！

作&京「デュエルスタンバイ！」

今日の一言

東方人形劇面白かった…

京「やったんだ…最初は何にしたんだ？」

脇巫女さん

京「…あつ、後ろから夢想封印が…」
な！？ぎゃあああああ！」

第四十八話 強い女性デッキと言えばアマゾンネス（前書き）

ご指摘を受けましたので変更しました

それではどうぞ！

第四十八話 強い女性デッキと言えばアマゾネス

京哉 LP 4000

舞 LP 4000

「アタシのターンドロー！」

そういえば舞のデッキってハッピーとアマゾネスの混合だったような…

「アタシはフィールド魔法アマゾネスの里を発動！」

周囲は南国の集落みたいなものに囲まれた

「アマゾネスと名の付いたモンスターは攻撃力が2000アップし戦闘破壊された時とカード効果で破壊された時にデッキから破壊されたレベル以下のアマゾネスを特殊召喚出来るわ！」

リクルート＋攻撃力アップか…しかもアマゾネスは自身で上がるのもあるから厄介中の厄介だ

「アタシはアマゾネスの格闘戦士を召喚！カードを伏せターン終了よ」

アマゾネスの格闘戦士 攻1500 ↓ 1700

「俺のターン、ドロー！」

手札は良好…先ずは…

「王立魔法図書館を守備表示で召喚！」

王立魔法図書館 守2000

「あら、守りから始めるのかしら？」

「どうだろうな、それじゃあアマゾネスの皆さんには悪いけどフィ

ールド魔法魔法都市エンデュミオン発動！フィールドを張り替え、魔法が発動した事で図書館に魔力カウンターが乗る」

王立 カウンター 1

「くっ…それは仕方ないわね」

アマゾネスの格闘戦士 攻1700 ↓ 1500

「そして魔法カード魔力掌握発動、魔法都市に魔力カウンターを乗せ魔力掌握を手札に加える。そして魔法都市と図書館の効果でカウンターが1つずつ乗る」

王立 カウンター 2

魔法都市 カウンター 2

「更に魔法カードトゥーンのもくじを発動、トゥーンのもくじを手札に加えシャッフル。そして更に乗る」

王立 カウンター 3

魔法都市 カウンター 3

「魔力カウンター系の関係…厄介ね」

「まだだぜ舞、王立魔法図書館の効果発動。図書館に乗っている魔力カウンターを3つ取り除きカードを1枚ドロースる。ドロースる！ふっ、まだ終わらしてくれないか」

「更に、魔法カード天使の施し発動！3枚ドロース2枚墓地に送る！」

俺はこの2枚を送る！

「そしてカウンターが乗る」

王立 カウンター1

魔法都市 カウンター4

「そして魔法カード強欲な壺を発動！カードを2枚ドロー！」
更にカウンターが乗るぜ！

王立 カウンター2

魔法都市 カウンター5

「まだ乗るの！？」

「まだまだ！手札にサーチしたトゥーンのもくじでトゥーンのもくじをサーチ！更に王立魔法図書館の効果でドロー！」

王立 カウンター0

魔法都市 カウンター6

「まだ終わりじゃねえぜ！トゥーンのもくじを発動しトゥーン仮面魔導師をサーチ！そして精神統一発動！同名カードを手札に加える！」

王立 カウンター2

魔法都市 カウンター8

「な、長いわよー！！」

「と言ってもまだまだ終わらないんだなこれが、手札から名推理を発動！舞、レベルを宣言してくれ」

「く…8よ」

「まず1枚目、よしラッキー！サイレントマジシャンLV4特殊召喚！」

サイレントマジシャンLV4 攻1000

王立 カウンター3

魔法都市 カウンター9

「運良すぎよ！」

「王立の効果発動！カードドロ！そしてレベルアップ！を発動！こい！サイレントマジシャンLV8！」

『アオイ、定刻通り只今参上です！』

サイレントマジシャンLV8 攻3500

S i d e 喬

「京哉…いつもより速いね」

「すっげー！あんな風に早く回すなんて！」

「もう驚きの連発よ…」

「くっ…何故奴はあんなに回せてるんだ！」

「凄いね京哉君は。亮と良い勝負じゃ無いかな」

「カイザーも早いが今回の京哉はそれ以上に早い」

ドローと魔法の連発に切札へ繋ぐ…やっぱり京哉は凄いね

「あ、あかん！凜ちゃんがオーバーヒートしてる！」

「ふにゃ〜」

「り、凜さん！」

あ、相変わらずだね凜…

S i d e 京哉

まだまだ終わらないぜ！まさにずっと俺のターン！更にアオイの登
場台詞も決まったぜ！

『うう…恥ずかしいです』

「そして墓地の混沌の魔法騎士を除外し混沌術士フェリエル・エン
トリオを特殊召喚！」

『悪を倒せと私を呼ぶ！私は正義の術士！フェリエル・エントリオ
！…決まりましたよ京哉殿』

いや、混沌なのに正義って…まあいいや

混沌術士フェリエル・エントリオ 攻1800

「除外した混沌の魔法騎士の効果発動！このモンスターを攻撃力1
000上げて特殊召喚する！」

混沌の魔法騎士 攻1500↓2500

「確かに昔とは違うわ…」

驚きだらう、観客も驚きの連発だしな

「更に魔法カード二重召喚発動！このターン俺は2回召喚出来る！
そして手札からライトニングボルテックスを発動！トゥーン仮面魔
導師をコストに舞の表側モンスターを破壊！」

「アマゾネスが…（けど伏せカードはミラーフォース…まだ凌げるわ！）」

あの伏せは発動されて無い…だから攻撃反応型と見た

「魔法都市のカウンターを6取り除き墓地から神聖魔導王エンディミオンを特殊召喚！効果により墓地の強欲な壺を手札に！加えた強欲な壺を発動し2枚ドロー！そして王立魔法図書館の効果でドロー！王立魔法図書館を生け贄にブリザード・プリンセスを召喚！コイツは魔法使い1体生け贄で召喚出来る！」

『アリス、参上！決まったよお兄ちゃん！』

ブリザード・プリンセス 攻2800

「い、一気に上級5体！？」

「更にブリザード・プリンセスの効果！召喚に成功した時相手は魔法、罨は発動出来ない！」

「そんな…アタシのミラーフォースが…」

舞には悪いが終りだ

「上級マジシャンズで舞にダイレクトアタック！」

「きやああああああ！」

舞 LP4000↓0

「アンタあんなにされたら太刀打ち出来ないわよ！」

「すまんすまん…手札が良すぎて…」

あんなの後何回出来るか…

「まあいいわ、次にあったら負けないわよ！」

はいはい…MCが言う前に舞は出ていった

「…きつ…決まったあああああ！まさかの後攻1ターンキル！世界中から集め頂点に立った孔雀舞をたった1ターンで倒したあああああ！流石海馬瀬戸の推薦者だあああああ！」

『うおおおおおお！』

「京哉すつげー！」

「やったわね京哉！」

「綺麗に決めたな」

「これは胸キユンポイントプラス100だね！」

「やるじゃないか京哉」

「流石京哉君ッス！」

「かつこいいぜアニキ！」

「京哉君流石や！」

「京哉君凄〜い！」

「とつてもかつこ良かったです京哉さん！」

皆…ありがとう…俺は今猛烈に感動している…

「皆！ありがとう！」

『わあああああ！』

大会は俺の1ターンキルによる勝利にて幕は閉じた…

おまけ

『愚か者！1ターンで勝負を決めてしまふな！！』

「仕方ないだろうが！決まったもんはよ！」

俺は社長から怒鳴られている…1ターンキルしたことによって

『せつかくのキング扱いをしているんだ！もつと観客を楽しませろ

！！』

何だよ！キングのデュエルはエンターテイメント！！とでも叫べば
良いのか！？

「1ターンキルでも観客は十分楽しんでたつての！！」

『五月蠅い！』

ええい！埒があかねえ！

「海馬あ！こんど勝負だ！」

『フン！俺に暇が出来たらな』

「よし！その言葉忘れんなよ！」

俺は盛大に電話を切った…覚悟しろよ海馬あ

第四十八話 強い女性デッキと言えばアマゾンネス（後書き）

ここで一つ…トウーンのもくじはちょっとした演出上タイミングを
ずらしてますのであしからず

またミスがございましたらお願いします

第四十九話　そういえばまだ年明けしてないんだ…気付いてた？（前書き）

遅れて申し訳ありません！

リアルが忙しくて…とりあえず今日は2話投稿します！
それではどうぞ！

第四十九話　　そういえばまだ年明けしてないんだ…気付いてた？

「いやあ〜綺麗に１キルしてもうたな京哉君！」

「いや、あそこまで手札が揃ってたのはびびったよ」

おかげで作者が大変だったけど（大変でした…とても大変でした！
by 作者）ちなみに今管理室にて倭、凜、喬、涼と昼の事で話して
いた

「凄かったね〜！」

「凜…気絶してたよね」

「う…だって〜」

「たくさん数える事がありましたからダウンしてましたよ」
まあ大変だったなアレ…

「それより京哉君、後２０分で新年やで」

「そういえばそうだったな、皆居るか？」

「居ますよ京哉様」

「お呼びですか主京哉」

「もうすぐ新年だからな、皆で祝おうとね」

「もうそんな時期なのか！」

「長かったようで短かったなあ」

「それだけ京哉殿と居るのが楽しかったという事ですよ」

「ま、いろいろと迷惑かけてましたけど」

「言っなよ姫…」

「そうだね、せっかく皆がいるんだから祝わないとね」

「新しく年を迎える…毎度思うがすがしいな主」

「ボクも新年はもっと強くなりたいなあ」

「そうだねリン、アタシも頑張るよ！」

「これからもよろしゅうなフレイ」

「勿論です！倭ちゃん」

「来年はどうなるか楽しみです」

後5分、テレビも新年を迎えるカウントダウンのタイマーが付いている

「明日には帰るから皆部屋に帰ったら準備しとけよ？」

「勿論やつて」

「仕方ないよね、開発再開だし」

「また皆で来たいね」

「そうですね」

おつ、そろそろ…「京哉！カウントダウンだぜ！」良いタイミングに来たな皆

「それじゃあ！カウントダウン！」

「10！」

倭が最初に言い…

「9！」

翔が言い

「8！」

明日香と吹雪さんが言い

「7！」

喬と凜が言い

「6！」

涼が言い

「5！」

トシが言い

「4！」

三沢が言い

「3ダー！」

万丈目が言い

「2！」

精霊達が言い

「1！」

十代が言い

「0！あけまして！」

『おめでとうございまーす！』

俺が締め皆で挨拶！いやあゝめでたいね！

やあ皆、おはよう！すがすがしい新年の朝だね！

「皆、準備は良いな」

「大丈夫だぜ！」

「僕もツス！」

「聞いてたよりも短かったけど楽しかったわ」

「俺様も満足だ。何より天上院君と回れたし…」

「万丈目君、明日香に手は出して無いよね？」

「もっ勿論！」

「俺も久々に楽しめたよ京哉」

「俺も感謝ですぜ！アニキ！」

「ウチも満足や」

「いろいろ楽しかったし」

「何より京哉といれたしね」

「私事です」

皆満足出来たみたいだな

「それじゃあゲートで解散な」

『はい！』

「よしゲート出たな。それじゃあここで解散！皆アカデミアで会おうぜ」

皆バラバラに別れた…筈だったが

「京哉さん！」

涼に呼び止められた

「どうした涼？」

「あの…お願いがあるんです」

「お願い？」

「はい…実は」

少女説明中

「なるほど、親戚の子が涼のデッキを欲しいと」

「はい…」

「だけどなあ…涼のデッキは涼が厳選し丹精込めて作った代物…他人のが欲しいとかでは意味が無い」

「京哉さん、それですが…私に新しくデッキと一緒に作って欲しいんです」

「涼…あのデッキを手放すのか？」

「はい…実は私これと言ったデッキを作れないんです…あのデッキも私の手で作ったわけでは…」

「なるほど…ね…それなら…」

「俺の家行くか、そこでデッキを作ろうぜ」

「えっ…／／／きつ京哉さんの家ですか？／／／」

「…何で少し赤くなってるんだよ…」

「どうする？」

「い…行きます！」

俺達は俺の家に向かって行った

Side 涼

京哉さんの家まで来ましたよ…ドッ…ドキドキします！

「ほら、いいよ」

家は一軒家の3階…って3階建て！？

「京哉さん…3階建ては凄いです…」

「更に地下が2階あるぞ」

…計5階建て…どういふふうに建てたのでしょうか…

「入らないのか？」

「あつ、いえ…」

とつとりあえず入りましょう

「な、何ですかこのカードの数は…」

只今地下に居るのですが…大きくてかなりの数のカード棚があるんです…部屋はアニメやゲームなどで見られる広さの図書館の大きさ

…しかもロボットが5体くらいおりまして掃除と整理をしていました

「さてと、どんなデッキが言い？」

「あ、あの…京哉さん…これって…」

「ああ、余り兼他人に上げてても良いの。大量に入ったからな」

…あ、あり得ません…半端が無いくらいですよこの枚数…

「それじゃあデッキを作るか」

「は、はい…」

京哉さん…こんなお金何処から出るんですか…

S i d e 京哉

いやあ…久々だよ！ホントに！地下だからちゃんとカビに注意しな

『勿論可能です、絞り込みのキーワードは？』
『そうですね…キーワードは…』
『風属性でお願いします』
『わかりました』

Side 京哉

いやゝやっぱり無かったか。え？俺？俺は今買い物してきた所さ。
この辺りの人達俺を覚えててくれて嬉しいな。まあテレビまで出た
からなあ

「あつ！見つけたぜ！立花！」

「ん？」

一人…リーゼントが声をかけて来た

「ここであつたが5ヶ月目え！今度こそ勝つる！」

「お前は……」

「そうだ立花！俺だよ！今日こそ決着をつけてやんよ！」

「……誰だっけ……」

「お…お前…俺は篠崎だよ！」

篠崎…ん…ああ

「あの学校で苛められてた…」

「それは柿崎だ！」

「じゃあ…あの生徒会のお調子者？」

「それは篠山だ！」

「じゃあ…あのあれだ、授業中先生と喧嘩して脱走した…」

「それは清谷だ！」

ん？俺覚えてるの彼らだけだし…

「あ！わかった！」

「ようやく思い出したか？」

「生徒会長だ！」

「それは溝ノ口山本だ！…はあ…もついい、俺帰る…」

「おう、じゃあな芝草原元」 これでしばらくさはらもと、という苗字です

早く涼の様子を見に行くか

「涼？デッキはどうだ…ん？」

「す…す…」

涼は大量のカードの中で寝ていた。その傍らには1つのデッキ

「バーガー、どうだった？」

『この方は素晴らしいです、サンプルデッキを見てそこから作りた
いデッキを自ら考えましたからね。まあ余程応えたらしく寝ました
けど』

へえ…だから寝てるのか…

「バーガー、このカードは俺が後で片付ける」

『かしこまりました』

俺は涼を抱えて俺の部屋のベッドまで運んだ

夜…

「京哉さん、ありがとうございました」

「いやいや、まあそのデッキで頑張ってくれよ」

今夜の8時、涼はこの時間まで寝てたよ。後送っていこうとしたけど「私合気道有段者なんで大丈夫です」って言われたよ

「それじゃあまたアカデミアで」

「はい！あ、京哉さん。ちょっと…」

「ん？んっ！！」

「んっ…」

…キスされた…何！？今キスするの流行ってんのか！？

「……………」

「それでは…京哉さん…またアカデミアで／／／」

「ああ…」

…やっぱり流行してんのか？

S i d e 涼

…やっぱり駄目ですね…だからどつしたという顔をしてました

「…ですが負けません！」

その誓いを立てて私は家に帰った

第四十九話　そういえばまだ年明けしてないんだ…気付いてた？（後書き）

うん、死ね京哉

京哉「はあ？またかよ！」

とりあえず今窓を作ったから飛べ

京「やだよ！」

ちっ…俺自身手を下したいが「京哉に手出しは許さないよ…」なっ
！何！うぐわあああああ！

京「喬サンキュー！」

喬「京哉の為だからね」

この…作者権限により「そんなの存在すると思ってるん？」えっ？
ちよっ！融爆は…あがあああああ！

京「…可哀想に…塊と化した」

倭「京哉君を侮辱した罰や」

喬「流石だね倭」

京「まあコイツは放っておくか」

倭「そやな、それじゃあ次の話も皆みてえな！」

喬「次はようやくアカデミアだからね、京哉が戻るの楽しみ」

京「それじゃあまた小説にて会いましょう！」

ふっ…俺がこんなので死ぬと思うなよ

第五十話 1 キル帽子少年と自称闇狩り（前書き）

マジっかりせいや俺！

第五十話 1 キル帽子少年と自称闇狩り

S i d e 倭

「今日から、新しく、編入生が来るノネ」

皆倭やで。新年始まって早々編入生らしんよ。え？なんで京哉君じゃ無いんやて？簡単や、京哉君今サボっ…んっ！精霊界や。何でも昆虫の里の夫婦喧嘩を止めに行くゆーて行ってるんや

「それでは入ってくるノネ」

そうして入って来た2人は帽子を被ったレッド寮男子と…銀髪の…身長がちょい高めの女子やった

「挨拶をするノネ」

「皆！俺は緋焰龍牙だ！よろしくな！」

帽子の人はえらい元気やな

「黒原暗奈…よろしく」

銀髪の方はクールの一言やな…まあ美人やから男子が息巻いてるのは言わんでも判るやんな

「2人に…わ、午後の実技に出てもらいまーす」

へえ…来て早々可哀想やなあ…京哉君はよう帰って来てな

S i d e 京哉

ふう…ただいま学園の廊下、帰って来たよ…あんのカブトムシまた不倫してプリンセスが俺に助けを言ってきたんだよ…今回はクイン側に着かせて貰ったがな

「はあ…疲れた…」

『お疲れ様です京哉様』

「ああ…全く…お前で癒されるよアオイ…」

『ええっ！／＼／＼その…／＼／』

はあ…ホントにしんどい…

「京哉！」

俺がだらだら歩いていたら十代が走ってきた

「どうした十代？」

「知らねえのか！？編入生が来たんだよ！んで昼からの実技に参加するんだってよ！」

「アニキそれでかなり興奮してるんス」

相変わらずだから十代はさ

「それで今移動してるのか」

「おう！京哉も行こうぜ！」

「ああ」

ま、とりあえず見ましようかね

S i d e 暗奈

さて、海馬瀬戸様のご依頼で来たもののターゲットは居ない…まあ初日から居るとは私も思わないわ

「それでゝは、シニョ〜ラ暗奈。貴女とブルーのシニョ〜ル桐山とデュエルするノ〜ネ」

「判りました」

ま、出てくるまで待ちましょ。これが終われば海馬様のターゲットの1人と合流しましょ

「近くで見ると更に美しいね、僕に付き合わない？」

「お断り、弱い人には興味は無いから」

「君はまだアカデミアに来たばかりだから仕方ないか、僕が勝ったら付き合って貰うよ」

「ま、私は負けないわね」

「くっ…絶対に負かしてやる!」

アナタみたいな人では無理ね…

「デユエル!!」

あら? ライフが書かれてないって事は1キルね

「僕はクリッターを召喚! 手札からモンスターゲート発動! クリッターを生け贄にデッキの上をめくりモンスターを特殊召喚する! 1番上は創世神! 創世神を特殊召喚! 創世神の効果発動! 手札を墓地に捨てクリッターを特殊召喚! クリッターの効果でキラートマトを手札に加える! 強者の苦痛を発動! ターン終了だ! どうだい?」
まあただキモいの一言しか無いわね

「私のターンドロ、残念ね…私の勝ちよ」

「フン! あり得ないね!」

と言われてもこの手札だもの

「私はダーククルセイダー召喚、手札から3枚闇属性モンスターを墓地に送り1枚につき攻撃力を400上げるわ。更に墓地に闇属性が3枚、ダークアームドラゴンを特殊召喚し効果発動。墓地の闇属性を3体除外しアナタのフィールドを一掃」

「うわあああああ! こ、こんな事が! ?」

「2体でダイレクトアタック、終わりで良いかしら?」

「うわあああああ!」

呆気ないわね…この学園に強い人居ないのかしら?

S i d e 京哉

うわあ…可哀想に…ダムド1キルされちゃってね

「あつ、京哉」

倭達と別の場所で見えていたら喬が来た

「よ、喬」

「凄いねあの人…1キルなんて」

まあ芸術だねアレは。基本1キルはロマンだし…クルセイダーとダ
ムドの時点ではぼ勝ちは決定だし

「あゝ！アンタこの生徒だったのか！」

「ん？」

そう叫ばれ見たさは帽子を被ったレッドの奴

「俺だよ！海馬ワールドでその子を助けた…」

……誰だっけ……ん…

「悪い、記憶に無い」

「何い！ほら！天使で1キルした俺だよ！」

「…京哉、手伝ってくれた人は忘れちゃ駄目だよ」

と言われてもホントに記憶に無いんだもん

『貴方はまさか主の…』

「ん？そのアスモディウス…」

「ディウスが見えるのか！？」

「まあね、んで君の名前は？」

「俺は緋焰龍牙！よろしくな！」

「ああ、よろしく。俺は立花京哉だ」

「私は神谷喬です」

「よろしく！あと喬さん！」

「何ですか？」

「一目惚れしました！付き合ってください！」

「ごめんなさい」

即答だったな…つーかよくやるよ、人の目の前で告るなんて
「な…なな…」

「私、好きな人が居るので」

へえ…それは知らなかったなあ…誰だろ

「…う…う…だ、だけど俺は諦めない！」

『龍牙、フラれたのに懲りないな』

「うるせえ！ならもしこの学園のNo.1になったら付き合って下さい！」

おゝすげえ目標、かつこいいね

「…そうだね、考えとくよ」

「うおっし！なら次の奴はさっさと蹴散らしてやるぜ！」
そう言つて龍牙はダッシュして行つた

「元氣一杯な奴だな」

「そうだね、あつそろそろ私は戻るね」

「ああ」

喬も自分の席に行つた…龍牙のデュエル見たら帰ろつ「ようやく見つけたわ」ん？

「アナタ…立花京哉かしら？」

「ああ、そうだ。君はさっき1キルした…」

「黒原暗奈よ、海馬様のご依頼でこの学園に来たのよ」

……………はあ？

「あのさ、よく判らないんだが…」

「ある事を伝えに来たのよ…この学園に悪しき光がくるわ」

「君は一体…？」

何だと聞こうとしたとき、先に彼女が言つた

「私は…闇を狩る闇のデュエリストよ」

第五十話 1 キル帽子少年と自称闇狩り（後書き）

今度こそミスりません！

第五十一話 悪しき光とかわかんねえけど今を楽しむぜ（前書き）

御指摘を受けたので改正しました！

第五十一話 悪しき光とかわかんねえけど今を楽しむぜ

「…悪しき光？」

「そうよ、それをアナタと私でそれを倒すのよ」

…と言われてもさ…ピンと来ないんだが…

「判らないって顔してるわね」

「そりゃな…いきなりそんなの言われてはいそうですかなんて言えないっての」

まあ悪いって事は倒さにやならないって事だよな…でもあの社長そういうの嫌いな筈だったけど…

「ま、今の所は問題は起こって無いんだろ？」

「そうね。今の所は無いわね」

「ならいいじゃないか」

ため息されて呆れられた…

「それじゃあな」

まあ何とかなるだろ

Side 暗奈

「…呆れました…」

海馬様の言っていたのと全く違いました…

『暗奈、そう言うな。主も大変なのだ』

「しかし危険が目の前に迫り始めているのにアレだけ危機感が無いのは頂けないわ…」

『あの方はそういう方なのだろう、気にしては駄目だ』

「…それもそうね」

でも遅くなってからでは駄目よ、立花京哉

S i d e 京哉

「かーっ！美味しい！」

只今食堂にて緋焰龍牙の歓迎会をしている、勿論俺が飯を作った
「これホントに立花が作ったのか！？」

「まあな」

「相変わらずツスね京哉君」

「いいじゃないか翔、この力ボチャコロツケ美味え」

「ホントだな遊城！これまだあるか立花！？」

「ああ」

「すげえがつつくな、ここに倭がいたら「京哉君ウチ等も食べたいって！」…やって来たし

「まだあるから大丈夫だよ」

「やった！暗奈ちゃん入って来てや！」

…はい？

「いや、暗奈ちゃんの二次会を何処でしよかおもてな」

「……………」

「だからといってここに来るなよ…」

「倭と暗奈だけか？」

「皆ダウンしたからウチ等だけやで」

「歓迎会でダウンで…どんなのしてたんだよ…」

「ねえ倭」

「なんや？」

「これ誰が作ったの？」

「そう言って勝手に暗奈が少し食べた焼きおにぎりを見せた

「それ京哉君や」

「…そう…京哉」

すると俺を睨んできた

「…何だよ？もしかしてまづかったか？」

「…明日これ作って渡してきて」

…気に入ってくれたよこの方、よかった

「…考えとくよ」

何故この答えかって？周りの視線がエグいんだよ…特に…

「…何よあの娘…編入生だからといって京ちゃんに…それに京ちゃん…ブツブツ…」

…葵姉の視線が1番エグい…俺でも見えるよ…あのどす黒いオーラ…アレだけで人殺せそうだよ

「……………」

まあ当人は黙々と焼きオニギリを食ってるけど…まあいいや
「さて、それじゃ…皆。せーの！」

『デュエルアカデミアにようこそ！』

今は楽しめますか

「…うう…眠い…」

おはよう皆…今6時なんだ、しかも料理中。何故なら「京哉、まだ出来ないの？」…コイツが原因だ

「暗奈…なんでこんなに早く来たんだよ」

「なんでって貴方のご飯を食べに来たのよ」

…何この人…当然のように言っただよ…

「昨日寝たの何時だと思ってんだよ…」

「私は5時に寝て40分に起きたわよ？」

「睡眠時間短かつ！よくそれで過ごせるな」

…眠い…瞼が…落ちそう…

「京哉、大丈夫？」

「…大丈夫…今から死ぬから…」

「駄目だよ京哉、クロノス先生に当てられたよ」

「え…マジ？」

「シニョール京哉、早く答えるノ…ネ！」

「…すみません、問題をもう1度お願いします…」

こっちは眠すぎて死にそうなんだよ！さつさと問題を伝えんしゃい！

「このチェーン処理について答えるノ…ネ！」

さつさと答えて寝よ…

ようやく実技だ…ふふふ…相手は誰かな…

「眠そうね京哉」

「誰のせいだ誰の」

「ん…クロノス教諭？」

「お前だよお前！」

くそう…余計な体力使わせやがって

「はぁ…それより次お前だつてよ」

「そうみたいね、早く終わらせるわ」

いやもうゆっくりしていつてね

「ダークアームドでダイレクトアタック、終わりね」

「くっ…くそう…」

…俺の願いは届かず…1キル決めましたよはい

「京哉、どうしたの？」「…ああ喬…今俺の目の前に喬という天使

が…」

「えっ…ええ！／＼」

ああ…気分の保養になる…というかテンションが上がる

「よし！次頑張ってくらあ！」

「…あつ、うつつん！／＼頑張つてね」

「おう！」

今俺は最高にハイってやつだあ！今なら鴉天狗の新聞記者にもスピ
ードで勝てる！

そんなテンションで着いたのは良いけど…

「立花！今回はお前かあ！」

…俗に言う死亡なんとかだなこれ…堕天使込みの蘇生バーンとか死
ねる…

「よし、今日のデッキは死亡確定だがアキト君に決めた」

『ちよっ！旦那！？死亡要員とか止めてくれ！！』

…嘘に決まってるじゃねえかよ…3割は

『残りの本気！？』

「どうした立花！？まさかびびったのか！？」

「まさか、どう叩くか思索してたんだよ」

「よっしゃ！楽しませてくれよ！」

「「デュエル！」」

京哉LP4000

龍牙LP4000

「俺のターンから、ドロー」

…これなら大丈夫かな？

「モンスターをセットしてカードを2枚伏せターン終了」
「俺のターンだ！ドロー！」

S i d e 龍牙

…ふふふ…これは最高だぜ！悪いが決めてやるぜ！
「俺は手札から永続魔法神の居城―ヴァルハラを発動！手札からアテナを特殊召喚！」

アテナ 攻2600

まだまだ行くぜ立花！

「手札から天使の施しを発動！カードを3枚ドローし2枚墓地に送る！」

「1枚はスペルビアは確定だな」

「残念だが俺は2枚スペルビアを送るぜ！」

コイツで終わらずぜ！

「ウィクトーリア召喚！」

ウィクトーリア 攻1800

「アテナの効果で立花に600のダメージだ！」
「くっ！」

京哉LP4000↓3400

「行くぜ立花！終わらせるぜ！アテナの効果発動！ウィクトーリアを墓地に送りスペルビアを墓地から蘇生させる！そしてスペルビア

の効果でウィクトーリアを蘇生！2体特殊召喚したから1600のダメージだ！」

そして一斉攻撃で勝ちだ！

「その前に伏せカード発動！激流葬！」

「なっ！」

嘘おん！俺の戦力ズが！！

「ただけどダメージは受けるよ！」

「ちっ！」

京哉LP3400↓2200

「俺が破壊されたのはクリッター、効果により切り込み隊長を手札に加える」

「くっそ…ターン終了だ」

やっちまった…メインの戦力が破壊された！

「俺のターン、ドロ」

S i d e 京哉

さて、流れが此方に変わったぜ…つか勝った

「俺は切り込み隊長を召喚、手札からミスティックソードマンLV4を特殊召喚！そしてレベルアップ！を発動しミスティックソードマンをレベルアップさせる、こい！LV6ことアキト！」

『っしやあ！早速出番だな！』

切り込み隊長 攻1200

ミスティックソードマンLV6 攻2300

「更に団結の力をアキトに装備！更にフィールド魔法ガイアパワーを発動！」

切り込み隊長 攻1200↓1700

ミスティックソードマンLV6 攻2300↓4400

「なっ…」

「わりいな龍牙、俺の勝ちだ。アキトでダイレクトアタック！ノリで鳳凰天駆！」

『えっ！？ちよっ！？…こんな感じが旦那！？』

それっぽい事をするが…

「及第点…いや、それ以下だな」

『なんとおおおおおお！』

「ぐあああああ！」

龍牙LP4000↓0

「楽しませて貰ったぜ龍牙！」「ちつくしよおおおおお！負けちまったあああああ！」

いやあ～楽しかった

おまけ

「鳳凰天駆はこうだ！」

『おお！旦那すげえ！』

『主、どうやって炎を出してるのですか？』

「企業秘密だ」

夜に寮の裏でアキトにひたすら鳳凰天駆を覚えさせていたよ…

『主、そろそろ行かなければ暗奈様が…』

…忘れてた…アイツ食事に関してかなり五月蠅い！遅刻でもしたらいろいろと不味い！

「よし、さっさと戻るか！」

俺はダッシュで戻った。ギリギリだったのは言うまでもない

第五十一話 悪しき光とかわかんねえけど今を楽しむぜ（後書き）

いろいろとミスが多々ありますが頑張つて行きます！

とりあえず更新遅れは合宿と腰痛でした！すみませんでした！

第五十二話 所詮は猿真似、本人になるのは1万年と2千年早い！（前書き）

ようやくです…口調が判らないキャラって難しい…そこに苦戦＋私
用で遅れですみませんでした（汗）
ではどうぞ！

第五十二話 所詮は猿真似、本人になるのは1万年と2千年早い！

「武藤遊戲のデッキ展覧会？」

「そうなんだ！ようやくチケットが手に入ったんだ！」

…遊戲のデッキねえ…何回も戦ったから今更見た所でなあ

「そつえば京哉君遊戲さんと知り合いだったんスよね…もう中身知ってるとか…」

「勿論知ってる」

あのデッキ何気に事故率半端がないからな…よく回ってたのが凄いや
「流石アニキス！」

「マジかよ立花！羨ましいぜ！」

「…とりあえず十代達は見に行くのか？」

「ああ！京哉も行こうぜ！」

…もう内容知ってるから行っても行列に並ぶだけだし…

「俺はいいや…別にやることあるし」

「えーっ！行こうぜ立花！」

「そうだぜ！行こうぜ京哉！」

もう中身知ってたら面白く無いし行列並ぶの面倒だし

「アニキが行かねえなら俺もいいや」

「いや、トシ。お前は見に行け。決闘者王のデッキを見れるなんて
そつそう無いからな。俺は中身知ってるから行っても意味無いし」

「…アニキ…感謝するッス！」

「…何を感じてるんスカ…」

「ああん！？なんか言ったか！？」

「何も言つて無いッス！！」

さあ俺は暇な時間だからデッキ作るぜ！

「ん…」

『どうかしましたか京哉様？』

晩、デッキを思案中だ

「いや、次の実技でちよつと面白いデッキをね」

『どんなデッキですか？』

「内緒さ。でもちよつと作れないから諦めた」

『は、早いですね…』

だつてカード足りなさすぎるもん

「それより十代達何処に…」

P P P… P P P…

『京哉様、PDAが…』

「うん、凜からだ。なにになに…」

「…遊戯のデッキが盗られただと…」

S i d e 凜

ちよつと前に戻るね。武藤遊戯のデッキ展覧会があるって聞いてちよつとフライング気味で倭ちゃん達と来たんだけど…「誰かに盗られた！」って十代君達が会場から来たんだ。だから今犯人を探しているんだけど…

「見当たらないね…」

今皆と別れて搜索してるんだけど…全く見当たらないんだ。一応京哉君にも連絡はしたんだけど…

『だけど他人のデツキを盗むなんて最低な奴だね』

「うん…だから早く「うわああああ！」あの声は翔君の！」

『あつちからだよリン！』

「うん！」

ボクは急いで向かった

「見つけた！翔君！」

「うう…凜さん…アイツが…遊戯さんのデツキを…」

「凄い！凄いぞ！このデツキならもう誰にも負けない！」

そこに居たのはイエローの制服を着た人だった

「その人！遊戯さんのデツキを返して下さい！」

「む！お前は赤坂凜！嫌だ！このデツキさえあれば俺はどんな奴が相手でも負けはしない！」

交渉が駄目なら…力づくしか無いのかな…ボクがデュエルディスクを構えた時

「笑わせんなよ。それは冗談か？それとも寝言か？」

京哉君が木の影から現れた

S i d e 京哉

やれやれ…奪った犯人は猿真似の神楽坂か

「立花京哉！だったらお前でこのデッキの強さを示してやる！！」

「いいぜ猿真似野郎、叩き潰してやる」

そう思つて腰のケースに手を取るが…デッキが無い…しまった…ア
オイ達を忘れた…あるのは内胸ポケットのあるデッキ…仕方ない！
「てめえならこれで十分だ！」

そう言つてはめたデッキは例の大喝采（超番外編を参照）

「ふん！行くぜ京哉！」

「「デュエル！」」

京哉LP4000

神楽坂LP4000

「俺のターンドロー！」

まあ先行は頂いたよ

「ブラッドヴォルス召喚！」

ブラッドヴォルス 攻1900

「カードを1枚伏せターン終了だ」

「俺のターンドロー！」さて、似非遊戯の攻撃はどう来る？

「手札から魔法カード融合を発動！手札の幻獣王ガゼルとバフオメ
ットを融合！来い！有翼幻獣キマイラ！」

有翼幻獣キマイラ 攻2100

「更にカードを2枚伏せ手札が1枚により疾風の暗黒騎士ガイアを
生け贄無しで召喚！」

疾風の暗黒騎士ガイア 攻2300

「上級を2体も揃えたツス！」

「京哉君！」

まあ慌てなさんな、こっからさ

「バトルだ！キマイラでブラッドヴォルスを攻撃！」よし、攻めてきた！

「伏せカード発動！ジャスティブレイク！攻撃表示の通常モンスター以外を全て破壊する！」

「なっ！」

キマイラの攻撃をバリアで守りキマイラとガイアに雷が落ちた…残念な事にキマイラの効果は出るけど

「有翼幻獣キマイラの効果発動！このモンスターが破壊された時バフォメットかガゼルを特殊召喚する！こいバフォメット！」

バフォメット 守備1800

「ターン終了だ…」

「俺のターンドロー」

…さて、次はコイツを出すか

「ミノタウロスを召喚！」

ミノタウロス 攻1700

「伏せカード発動！激流葬！」

ちっ！流されたか！

「仕方ないか…カードを伏せターン終了」

S i d e 凜

「…序盤の勝負は互角…だね…」

遊戯デッキの神楽坂君はそうそうに上級を出して来たけど京哉君に阻まれた…けどそれは京哉君も同じ、攻撃のチャンス逃してしまつた…

「凜ちゃん！」

「倭ちゃん！それに皆！」

喬ちゃんと倭ちゃんに涼ちゃん、そして十代君達が走ってきた

「アイツは神楽坂！犯人は奴だったのか！？」

「戦つてるのは京哉か！？くう、羨ましいぜ！！」

「俺と代われ畜生ー！」

「アニキ！そのままやっちゃえ！」

「まだ始まつたばかりだが油断するな京哉！」

…それにしても…

「ミノタウロスとブラッドヴォルス…どっかで見た組み合わせ…」

…まさか…ね…

S i d e 京哉

「俺のターンンドロー！」

…相手の手札は0だが…相手は遊戯のデッキだし多分手札増強が来るはず…

「俺は強欲な壺を発動！カードを2枚ドロー！更に天使の施しを発動！カードを3枚ドロー、2枚捨てる！更にビッグシールドガードナー守備表示で召喚！ターン終了だ！」

ビッグシールドガードナー 守備2600

「俺のターン、ドロー」

堅いなあ…どうするか…

「俺は暗黒のマッドドッグを召喚」

暗黒のマッドドッグ 攻1900

「そいつを待っていたぜ！伏せカード発動！黒魔族復活の棺！お前が召喚したマッドドッグと俺のビッグシールドガードナーを墓地に送り最上級魔法使いを墓地より特殊召喚する！」

「最上級魔法使いって…いつの間に墓地に送ってたんか！？」

「天使の施しの時…少し京哉がキツイね」

「こい！ブラックマジシャン！」

ブラックマジシャン 攻2500

遊戯の切札…だけどやっぱり猿真似だな

「ターン終了だ」

「俺のターンドロー！」

しかし…モンスターが居ないのは辛いな

「俺は死者蘇生を発動！ビッグシールドガードナーを蘇生させ生け贄にブラックマジシャンガールを召喚！」

ブラックマジシャンガール 攻2000

「ブ、ブラックマジシャンガールッス！僕ブラックマジシャンガールを応援するッス！」

「てめえ！アニキを応援しろや！」

「何言ってるんスカ利光君！今夜限りの恋なんスよ！応援するのが普通ッス！」

珍しく翔が熱弁してるが…周りはドン引きだぞ

「これで終わりだ！ブラックマジシャンとブラックマジシャンガールでダイレクトアタック！ツインマジック！」

「京哉君！」

「伏せカード発動！和睦の使者！」

何とか凌いだ…いやあゝ危なかった

「ちっ！ターン終了だ」

「俺のターンドロ」

さてと、どう攻めるか…

「ん…カード伏せてターン終了」

「えっ！？モンスター出さないで終わり！？」

「ハッハッハ！手札事故か！？」

「さあな。さつさと来いよ」

「言われなくても！俺のターンドロ！俺は手札抹殺を発動！お互い手札を全て捨て捨てた枚数分ドロする！」

たった1枚なのに使うのか？…まあいい、好都合だ

「俺は2枚捨て2枚ドロ」

「俺は1枚だ！」

…やべえ…ほぼ勝った…

「次こそ終りだ！ツインマジック！」

「伏せカード発動、ホーリーライフバリア」

手札1枚捨てる、と…これで全部揃った

「またか！伏せカード発動！光と闇の洗礼！ブラックマジシャンを墓地に送りデッキから混沌の黒魔術士を特殊召喚！黒魔術士の効果で墓地より強欲な壺を手札に加える！そして発動！2枚ドロ！」

混沌の黒魔術士 攻2800

…何かアレの予感がしてきた

「更に墓地のワタポンとブラックマジシャンを除外しカオスソルジャー開闢の使者を特殊召喚！」

カオスソルジャー開闢の使者 攻3000

「ターン終了だ！どうだ立花京哉！これでもまだ猿真似と言うのか！？」

「ああ、猿真似だな」

「何だと！？」

「他人の真似しなきゃ勝てない奴が自分のデッキみたいに満足してんじゃねえ。遊戲が決闘者王になったのはカードを信じ厳選したデッキがそいつだ！そんな心も判らずに勝者面してんじゃねえ！」

「だったらそのドローで逆転してみろ！」

「してやるさ！俺のターン！」

このわからず屋に一発叩き込んでやる！

「ドロー！…ふっ…俺の勝ちだ」

「何だと！？」

「…あゝ可哀想に…あれ引いたんか…」

「そうみたいだね…」

「あ、あはは…」

「京哉君鬼だね…」

俺のその言葉にあるものは怯え始めあるものはキョトンとしあるものは頷いている

「手札から龍の鏡を発動！墓地の青眼の白竜を3枚除外する！」

「バカな！？青眼の白竜だと！？」

「何でアイツがそんなの持ってたんだよ遊城！？」

「あゝ…まあ…寮長が原因だな」

「京哉君に甘々ツスから」

よし、十代と翔は1週間飯抜きだ

「海馬デッキ最強のモンスター！青眼の究極竜！」

青眼の究極竜 攻4500

「くっ！だがまだライフは残る！」

「甘い！甘すぎる！シークリームなんかより！魔法カード次元融合発動！ライフを2000支払いお互い除外されているモンスターを可能な限り特殊召喚する！俺は3体の青眼の白竜！」

京哉LP4000↓2000

青眼の白竜×3 攻3000

「お、俺はブラックマジシャンとワタポンを守備表示だ！」

ワタポン 守備300

ブラックマジシャン 守備2000

「青眼の究極竜でカオスソルジャーを攻撃！アルティメットバーストオ！」

「ぐあっ！」

神楽坂LP4000↓2500

「そして3体の青眼でマジシヤンガール、混沌、ブラックマジシヤンを攻撃！」

「うぐああああ！」

神楽坂LP2500↓1300

「流石だぜ京哉！」

「遊戯デッキに彼処まで…」

「まさに力押しやな」

「あはは…」

さて、もう終わりだな

「さて、お前の負けだ。早くそのデッキを返すんだ」

「まだ負けていない！俺のライフはまだある！」

「…さっきの話聞いて無かったみたいだな」

「俺こそ武藤遊戯を再現出来るんだ！」

「ならここから逆転してみな、お前が武藤遊戯なら逆転のカードを必ず引く」

「見ていろ！皆は必ず答えてくれる！ドロー！」

勢いよくドローはするものの…

「っ！！くっ！何故だ！？何故なんだ！！…ターン終了…」

「やはりな…俺のターンドロー。終わりだ、全ての青眼で攻撃！強靱！無敵！最強！」

「うぐわああああ！」

神楽坂LP1300↓0

「くそ！やはり俺には才能が無いのか！？」

「はあ…お前今まで本気でデッキを作って無いだろ」

「だから何だよ！」

「お前は普段からカードを信じて無いんだよ、物真似ばっかだからな」

「あつ…」

「それに才能は無いなんて事は無い、あそこまで扱えたのは凄いと思うな。なっ皆！」

「えっ…？」

その言葉に遊戯デッキを見たさに来た生徒が出て来て皆神楽坂を褒め称えた。その後神楽坂はデッキを返して問題なく終わった…

と思ったのだが…

「京哉君！京哉君の偽物が！」

「…何？」

…まあ犯人は奴しか居ないよな…とりあえず叩いて来るか…その後
何度も現れその度に叩いて行った

第五十二話 所詮は猿真似、本人になるのは1万年と2千年早い！（後書き）

まさかのクリボー＋カオス2体の攻撃無し…そこを期待していた皆様申し訳ありませんでした…次話の投稿はまだまだ何ですよ…番外編を投稿しなければ…それでは！

第五十三話 ファンて度が過ぎるとこーなるからやだね（前書き）

よし！ようやくだ！

京「やっとか」

このクソ小説をご覧の慈悲深き読者の皆様、長らくお待たせしました
京「もっと謝れクソやろう」

うるせえ！それではどうぞ！

第五十三話 ファンて度が過ぎるとこーなるからやだね

「今日はレッド寮に新しく編入された子を紹介しますね。早乙女レイ君です」

「よ、よろしく」

昼間、葵姉が俺の部屋に突撃という名前の不法侵入を行い早乙女レイの紹介がされた。ちなみに部屋には十代と翔、トシと龍牙が居た「よろしくな！レイ！」

十代は相変わらずだった

「あのさ葵姉…」

「なあに京ちゃん？」

「毎度毎度ノック無しに入るのやめてくれよ！そして俺に抱きつくなよ！」

「えゝ！だつて京ちゃん温かいしノックしなくてもお姉ちゃんには京ちゃんの事はまるわかりだからノックする必要は無いのだ！エヘン！」

「いやいや！そんなの自慢気に胸はつて言われても困るし！」

「せめて居るかどうか確「私にはわかるの！」…さいですか」

言いたくは無いが…葵姉は俺の「ストーカーじゃ無いからね！」…先に言われた…

「京ちゃんを管理してるの！」

「アンタ最低だー！」

まさか過ぎるだろ！

「あ、あの…」

「あつ、ごめんなさい。それじゃあ…京ちゃんお願いね」
「…何が？」

「同室よ、ホントは空気があつたら良いんだけど無くて」
まあそうだろうなあ…しかし…

「な、何だよ…」

「いや、まあよろしくな」

「あ、ああ…」

15にしては身長が小さいと言おうとしたが偏見になってしまつ。まあ気にしないでおこうか

「さて、賑やかな姉さんですまないな」

「い、いや」

はあ…相変わらず疲れるなあ…「あ、あのさ…」

「ん？どうした？」

「あの…「京哉！風呂行こうぜ！」あつ…」

「十代達か」

「ああん！てめえ誰だ！？」

「ひっ！」

トシはレイを見るなりいきなり絡み始めた

「バカ野郎」

「あだっ！ア、アニキ…痛いッス…」

手刀で黙らしたけどな

「全く…俺の近くに来る奴にいちいち絡むな」

「だってもしアニキの身に何かあったら…」

…いやまあその気持は嬉しいようん…

「だけど見る奴全員に仕掛けるのは良くないな」

「す、すいません…」

「反省してるなら結構。それで風呂だっけ？俺は後でいいや」

「わかったぜ、レイはどうする？」

「ボク…あ、いや俺もいいよ」

「そっか…んじゃ俺達は先に行つてくるな」

「また後でね京哉君、早乙女君」

「向こうで待つてるぜアニキ！」

十代達は風呂に向かって行った…作者そろそろ疲れたのか？文が微妙に変になって来たぞ（うるせえ…忙しい上に体ダルいんだよby 作者）

「それじゃ俺はデッキ制作としようかな」

「あのさ…ボいや俺見てていいか？」

「ああ、別に構わないけど」

さうて、改悪でもしよう

「……………」

「じ〜」

「……………」

「じ〜」

…し、視線が痛い…とっても痛い…最初は凄いと行って大量の力ード漁ってただけど次は俺をまじまじ見てきたんだが…

「じ〜」

こんだけ見られてたらやりにくい！

「あのさ…やりにくいからあんまりまじまじと見ないで欲しいんだけど」

主に俺の顔とか顔とか顔とか

「ご、ごめん…」

…何かさっきからおかしい…俺が見たらかなり焦っているし…

「……………」

それにしても室内だったのにず〜っと帽子被ってるな…なんでだろう…気にしたらダメなのだろうか

「ん〜そろそろ風呂に行くか。レイはどうする？」

「ボク…あいや、俺はまだいいよ」

「わかった、それじゃあ部屋番よろしくな」

「うん！んっ！ああわかったよ」

…なんか無理してるみたいだしなあ…
「まあいいや…さっさと行くか」

S i d e 倭

「…暇や…」

今自室に居るねんけどめつつつつつつちや暇やねん…喬ちゃん
は今教室で補習で凜ちゃんは絶賛逃亡中（主にRRRから）で涼ち
ゃんは明日香ちゃんとデッキについて語ってる…暗奈ちゃんも用事
ゆーて居らんし…

ぴきーん！

「…今絶好のチャンス…」

京哉君と一緒に居れるチャンス！早速メールや！

と思てメールしてんけど未だに返して『魂に形があるなら今ここで
散って桜になれ』[♪]」

「京哉君からや…何々…」

ぴきーん

「…よし、行く」

勿論着替え持ってな。またまたチャンス到来や！今回こそ絶対に逃
さへんで！

Side 京哉

ぶるぶる！

「何だろう…今危機感覚えた…」

風呂に入ってるのに寒気が走った…（ちなみに風呂の場所はカイバ
ーマソ（笑）と会える場所だぞby作者）

「しかし…誰も居ねえなあ…」

十代達はさっき入れ違いになったし…

「ま、一人で広々と使えるからいつか」

「そうやで、二人きりで広々と使えるからええやん」

「そうそう、二人きりで…え？」

俺が声の聞こえた方を見ると…

「は…普通にええ湯やなあ…」

…倭が居た…しかもええ湯とか言っ出て出してるオーラが…狩人のオ
ーラ

「どうしたん京哉君？」

…ヤバイ…早く逃げよう…

「あ、もしかしてウチにみとれとったんか？それとも…「俺上がる」
待ってーな！」

しつかり抱きつかれた…背中に奴が…

「ええやんええやん…ウチと気持ええ事やろ…なっ？」

「断る！俺はもう上がるんだ！」

「ええやん…ウチが優しゅうしたるよ…」

「断る！」

「じゃあ…京哉君がウチを「そういう事では無い！」じゃあウチが
したるやん」

「ええい！H A N A S E E！」

「いーやーやー！」

くそっ…埒があかねえ…！！

「…わかった、その代わりに俺からな」

「やった！せやったら…」

倭がようやく離れてくれた…

「隙有り！」

「アラー！」↑某らんらんー

「また今度な！」

足払いしてこかし俺はダッシュで逃亡した

S i d e 倭

「うう…京哉君のアホー！」

ここまでやったのに何で来いひんの！

「でもまたゆーてたな…まだチャンスはある…そつや！まだあるんや！」

絶対諦めへんで！

S i d e 京哉

あゝ酷い目にあつた…

「ん？アレは十代と…誰だ？」

身長はレイくらいで髪が長いな

「あつ、京哉君！」

「翔、あの娘誰？」

「レイちゃんツスよ」

「…はい？」

「実は…かくかくしかじかで…」

「成る程…前の中継で俺を見て恋したと…」

「…かあれ流れてたのか…じゃあもしかしてアレも…」

「ばつちりですぜアニキ！」

トシがぐつと親指を立てた

「…トシ、一週間飯抜きだ」

「そ、それだけは勘弁してくれアニキ！」

そうこうしていたら十代とレイのデュエルが終わった。言わなくても
も十代の勝ちだ

「あ…京哉様…」

レイが泣きそうな顔で俺を見てきた

「まあ…だいたいわかったけど…駄目だろ。勝手に来ちゃ」

「はい…でも私！京哉様が…」

「悪いけど俺恋人とかよく解らない」

「…はあ…」

「だからまずは友達からな」

俺はレイの頭に手を置いて言った

「…うん！」

「けど良く来たよなあ」

まあ十代の言うとおり、よく来たよ

「まあ何はともあれ一件落着ッスね」

「そうだな、一件…」

ぴきーん！

「…落着じゃなかった…」

「どうしたんだ京哉？」

「来る…奴等が…」

「奴等って…？」

「アニキまさか…」

感じる…ヤバい…かなり殺気を放ってる…

「…皆…後は頼む…」

「え？何をだ？」

「俺は精霊界に逃げるから…黙っててくれよ」

俺は…逃げ切る！明日も…明後日も！

だっ！

「逃げ切るんだ！」

S i d e 利光

アニキが走った時…

「逃げちゃ駄目だよ…京ちゃああああん！」

その一言と共にラバーズがアニキを追っかけた…

「な、何スか今の！」

「こええ！」

「俺部屋に籠るわ十代」

「お、俺も！レイ、翔！避難だ！」

「う、うん！」

「逃げるッス！」

おまけ

「くそっ！精霊界に行けねえ！」

「何処行くの京哉…」

「駄目ですよ逃げちゃ…京哉さん」

「くっ！ならこつちだ！」

「あかんよ…京哉君…」

「罪はちゃんと償おうね京哉君？」

「おわっ！だけどまだこつちに！」

「京ちゃん…見iiiiiiiiつけたあああああ！」

「ひぎやあああああああ！」

その後の京哉を見た者は居なかった…

第五十三話　ファンで度が過ぎるところになるからやだね（後書き）

ざまあみる京哉！日頃の行いが悪いからこうなるんだ！

京哉「…新陰流…奥義…転…」

はあっはあっはあっは…ぐぶふえ！

京「…ざまあ…み…ぐはっ」

第五十四話 卒業か…寂しいもんだな（前書き）

微妙に文がおかしくなりつつありますがご了承下さい…後ファイナルフュージョンの使用者があつてるかわかんね
ではどうぞ！

第五十四話 卒業か…寂しいもんだな

卒業式が数日後に控えたある日の俺の部屋だ

「そういえば翔、カイザーはいつ帰ってくるんだ？」

「今日だよ！後数日したら卒業式だからね」

「アメリカのアカデミアってどんなのだったんだろうな！」

「十代はそればっかだな」

なんて他愛も無い話をしていたが後数日したら卒業式。正直カイザ

ー以外は嫌な奴や面識が無いからどーでも良かったけどね

「それでお兄さんの相手はアニキらしいツスよ」

「マジかよ！くうく楽しみだぜ！」

当然だろうな、吹雪さんか十代なら盛り上がるし

「よし！早速デツキを考えるぜ！」

十代は自室に戻った

「元気だなあ…」

「それがアニキの良いところツス。僕もそろそろ戻るね」

「ああ、それじゃあな」

…それにしても…カイザーか…俺も戦ってみたかったなあ

「やっぱり戦いたいんですね京哉様」

「まあな、俺も一端のデュエリストだしな」

「あんなごつい剣持っててデュエリストはどうかと思うぜダンナ…」

「その切れ味試そうかなあ」

「すいませんでした」

「即謝するなら止めておくべきですよアキト殿」

「主にあんまり反抗しないほうが良いですよ、自身の為に」

「まああんまりしつこいと私が叩き潰してるけどね」

「勘弁してくれ…」

…全員出てきたら狭いんだよ！

「狭い！早く戻りなさい！」

『かなりくつろいでいる貴方が言わないで下さい!』

…確かに姫が1番くつろいでいる

『それにしても京哉!最近私の使用確率が悪すぎますわ!』

「知らん、確かに引かないがそれは俺が原因じゃねえ」

『まず運営に掛け合いますよ。そこからですよ姫』

『そうね、行ってくるわ』

そう姫は言ってカードに戻って言った

「…運営で…」

『気にしたら負けだよお兄ちゃん』

『まあ確かに我々の出番が少なすぎますよ主』

…まあ仕方ないだろそういうのは

「とりあえずそろそろ飯つくんねえと亡者が五月蠅いから作るか、
皆は控えててくれ」

『御意』

『わかったお兄ちゃん』

『了解だダンナ』

『了承しました』

『京哉様も御無理なさらず』

今日は何にしようか…後で十代に持って行くか

「飯要らないって?」

「そうなんスよ…」

珍しいな…明日は雪か?

「京哉君今失礼な事考えたツスよね?」

「気のせいだ、それじゃあ後で持って行っててくれ」

「わかったツス」

そんなに深刻になる事が十代…

「それでは、卒業デュエル開始！」

卒業デュエル当日、鮫島校長の宣言と共に十代とカイザーのデュエルが始まり今4ターン進んだんだが…

「…十代らしく無い攻め方だな」

…三沢、久しぶりだな

「運営が出演させてくれなかったからな」

『でもマスターの空気率は他と比べると低いです』

駄目でしょピケル！そんなこと言っちゃめっ！でしょ！

「三沢君居たんだ」

「最初から居た！」

翔は相変わらず酷いな

「確かに空気男の言うとおりやな〜無理して頭っこうとる」

「ちよっ！俺は空気じゃ無い！」

「三沢君五月蠅い」

三沢が明日香に一蹴された

「…ふむ…面白く無い」

俺は立ち上がり抜けようとする

「京哉何処行くの？」

「抜ける、全く面白く無い」

「京哉さん！？」

まあ抜ける理由は嘘だがアレの上にさらに使うから飯の準備と行くか

S i d e 利光

「ちよつとアニキ！」

…めちゃくちゃかつこいいッス！

「俺もばつくれる！」

「あかんで！ちゃんと見な！」

俺だつてアニキみたいに「多分京哉君ご飯作りに行ったんじゃないかな？」…え？

「凜、どういう事かしら」

「うわお！黒原いつの間に！」

「さっき来たからその空気と一緒にじゃ無いわ」

「だから俺は「ボクや十代君って馬鹿…って言っちゃったら失礼だけど頭を使うのって苦手だから普通より倍は疲れるんだ」…俺は…俺は…」

『大丈夫です！マスターは空気じゃ無いです！』

「…ピケル…」

『マスター…』

上の二人は放置して…流石アニキだぜ！

「かゝそんな事の為に立花は抜けたのかよ」

「てめえ！アニキが大切なダチの為にするのにそんな事って言うなよ！」

「そんな事はそんな事だろ！？」

「んだとおゝ！」

「ヴァルカノン融爆や」

ちよっ！まっ…ぴちゅーんぴちゅーんぴちゅーん…（エコー）

S i d e 京哉

…ん？今残機が減ったような気が…

「…まあいいや」

丁度作り終わったし持つて行くか

「あー！腹減ったー！」

Niceタイミング、入ったら十代の腹減ったが聞こえたよ。下に
来てて良かった

「十代！」

「京哉！どうした？」

「飯だ、かれこれ数日は食って無いだろ？多めにいれといたぜ」

「サンキュー京哉！」

俺はかなりデカイ弁当を渡した

「負けたら暫く飯抜きな」

「おいおい！そりゃ負けられねえ！」

「カイザーも頑張って下さいよ、この後卒パありますし」

「ふっ…善処しよう。京哉の飯は食べてみたいしな」

これで楽しくなるぞ絶対

「京哉ごつそさん！美味かったぜ！」

「そりゃどうも、負けんなよ！」

「ああ！」

さつてと、客席で鑑賞するかな

とまあ結果なんだが融合モンスターの攻撃力100000越え勝負で
十代が使用したファイナルフュージョンで相打ちとなった…いやあ
楽しかったねうん。よし！パーティの準備だな

「えゝこれにて卒業デュエルは終了ですが実は丸藤君がどうしても
戦いたいと言う方がおりその方とのデュエルで卒業の幕を降ろした
と思います」

…へえ…プロの人かな

「それでは降りてきて下さい京哉君」

…は？

「アニキすげえ！」

「あつ！立花てめえ！俺と変われよ！」

…謀ったなカイザー…

「京哉君いかへんの？」

「皆さん待ってますよ」

「頑張つて京哉」

「ボクたち応援してるからね」

「無様に足掻いて負ける京哉」

…サンダーが初めて喋った

「運営が原因だ…！」

「さつきから運営つて何の事よ…」

…仕方ないか…しかしせつかくのチャンスだ。ここで無駄には出来ない

「よし、行ってくる」

「京哉！」

向かいから十代が来た

「負けんなよ！」

「…勿論だ十代！」

俺達は互いの拳を軽くついた

「来たか…立花京哉」

「カイザー…アンタとのデュエルは願っても無い事だ…最高のデュエルと行こうぜ！」

「俺もだ…オシリスレッドの2強の強さ、見せてくれ！」

「俺も見せてもらうぜカイザー！最強の皇帝をな！」

「デュエル！」

第五十四話 卒業か…寂しいもんだな（後書き）

京哉「ようやく皆の出番だぜ！」

オラワクワクすっぞ

姫『そんな事より運営！もつと私の出番を増やさない！』

確かに空気が増えつつあるよ…原作＋オリキヤ達の絡みをこれでも思考錯誤して頑張ってたんだ！許せ！

京「漢字間違っただけか？」

気にするな！それではまた！

第五十五話 さらばカイザー！卒業デュエル 後（前書き）

ようやく…ようやくお待たせいたしました！後編です！

それではどうぞ！

第五十五話　さらばカイザー！卒業デュエル　後

京哉LP4000

カイザーLP4000

「先行貰った！ドロー！」

何故先行って？もちろんそっちが面白いに決まってるからさ

「シャインエンジェルを守備表示で召喚！」

シャインエンジェル　守800

「カードを2枚伏せてターン終了！本気のカイザーを見せてくれよ！」

「良いだろう、俺のターンドロ！」

さあどう来る！早速来るかサイバードラゴン！

「サイバーフェニックスを召喚する！」

サイバーフェニックス　攻1200

確か単体魔法、罨を無効にするモンスター…

「バトル！サイバーフェニックスでシャインエンジェルを攻撃！」

シャインエンジェルがサイバーフェニックスの羽で破壊された…相変わらずなかなかの可哀想な役だシャインよ

「シャインエンジェルの効果発動！デッキから攻撃力1500以下の光属性モンスターを攻撃表示で特殊召喚する！」

オートシャッフルだけど流石にサーチは自分でしないといけない…

社長もつと頑張ってくれよ

「俺はサイレントソードマンLV3を特殊召喚！」

サイレントソードマンLV3 攻1000

「サイレントマジシャンじゃ無いのか」

「まあな！最初はコイツが相手さ」

「ならばカードを2枚伏せてターン終了だ」

「俺のターンドロー！」

さあ進化の準備だぜ！カイト！

「スタンバイフェイズにサイレントソードマンLV3の効果発動！このカードを墓地に送りデッキまたは手札からサイレントソードマンLV5を特殊召喚する！デッキより特殊召喚！」

サイレントソードマンLV5 攻2300

「更に切り込み隊長を召喚！効果によりミスティックソードマンLV4を特殊召喚！」

切り込み隊長 攻1200

ミスティックソードマンLV4 攻1900

「行くぜカイザー！ミスティックソードマンでサイバーフェニックスを攻撃！」

「伏せカード発動！ガードブロック！ダメージを無効にして1枚ドローする。更にカイザーフェニックスの効果でドローして伏せカード発動、バイロード・サクリファイスを発動する！」

あのカードは…サイバーオーガのサポートカード！

「モンスターが戦闘された時に発動する。手札からサイバーオーガを特殊召喚する」

…サイバーオーガかあ…かなり嫌な効果だったな

サイバーオーガ 攻1900

「どうする京哉？攻撃に来るか？」

…止めるか…オーガは厄介だからな

「俺はバトルフェイズを終了してターン終了…そして終了時にミスティックソードマンの効果発動、このカードを墓地に送りデッキ、手札からミスティックソードマンLV6を特殊召喚する！頼むぜアキト」

『よっしゃ！俺の出番だな！』

ミスティックソードマンLV6 攻2300

「流石だよカイザー、ライフをキープしてドローまで…」

「ふっ…お前がくれたガードブロックがなければダメージがあったな」

「譲ったカードが仇になったなんて全く思っただけいな、むしろ使ってくれて感謝するよ」

「つかこうでなきゃ楽しくないしな」

「そうか、それでは行くぞ。俺のターンドロー！」

さあ次はどう来るカイザー！

S i d e 倭

…凄いわ…ダメージを受けずにドロー加速、更に上級に繋げよった

…十代君の時も思ってたけど流石カイザーと呼ばれる事はあるわな…

「お、やってるやつてる」

「兄さん遅すぎるから京ちゃんのデュエル遅れちゃったじゃない！」
そこに海度先生と葵さんが来た

「あれ先生、遅かったですね？」

「まあちよつと野暮用でね…カイザーが相手かぁ」

「やつぱり同じサイバー流としては亮はどう見えるんですか？」

吹雪さんが聞いていた…確か海度先生もサイバー使うねんな

「おいおい、俺はサイバー流じゃないって」

「じゃあ何故サイバーを？」

「…我流サイバーだからだ…」

…が、我流で…そんなんありかいな…！

「まあ兄さんは亮君みたいにサイバーエンドは使わないから」

「俺のサイバーはキメラのみ！」

うわぁ…自信満々に言いよった…

「まあアレは本気デツキじゃないしな」

「兄さん…それ嘘。10戦して8戦初期手札に未来融合あるじゃない」
『確率高つ！』

十代君以外はもった…その十代君はとゆーとな

「すげえ！今度俺とデュエルしてくれよ先生！」

…デュエルの申請しとった

「良いだろう、だがまずは京哉のデュエルを見ようか」

S i d e 京哉

「俺はプロトサイバードラゴンを召喚、更に融合を発動する」

一体何が…サイバーツインか？エンドか？

「手札のサイバーオーガ2体を融合！」

「何！？」

サイバーオーガ2か…！！

「サイバーオーガ2を融合召喚！」

サイバーオーガ2 攻2600

「更に手札からエヴォリション・バーストを発動する！」

サイバードラゴン専用カード…フィールドにはサイバードラゴンは無いが…

「くっ！プロトサイバードラゴンか！？」

「そうだ、プロトサイバードラゴンはフィールド上ならばサイバードラゴンとして扱う。破壊する対象はミスティックソードマン！エヴォリション・バーストお！」

『げえっ！活躍無しかよ！』

くっ！アキトが破壊された！

「サイバーオーガで切り込み隊長を攻撃！」

京哉LP4000↓3300

「更にサイバーオーガ2でサイレントソードマンに攻撃！この時サイレントソードマンの攻撃力の半分をサイバーオーガ2に加える！」

サイバーオーガ2 2600↓3750

「ぐうつ！」

京哉LP3300↓1850

「伏せカードはブラフか？プロトサイバードラゴンで攻撃！」

「ぐあっ！」

京哉LP1850↓750

「伏せカード発動！ダメージコンデンサー！受けた戦闘ダメージ以下の攻撃力のモンスター特殊召喚する！こい！サイレントマジシャンLV4！」

サイレントマジシャンLV4 攻1000

「ターン終了！成る程、この為に置いていたのか」

「まあな！さあて、俺のターンだ！ドロー！」

こっからだぜカイザー！

Side 海度

ふむ…ダメージを受けてまであのモンスターに拘るか…アイツらしいな

「立花が押されてるな」

「くっそー頑張つて下さいアニキ！」

「兄さんは京ちゃんのデュエルをどう思う？」

葵の言葉に全員俺の方を見た…

「正直デッキ構成がアイツらしくは無いが戦い方はアイツらしいな」
サイレントマジシャン、ソードマンに拘る…そう考えると伏せはお触れだな

「兄さんもそう思う？まあ京ちゃんのデッキが3つ位に分かれてたから厳選して1つにしたんじゃないかな」

まあ本人がいいなら構わないか…カイザーと呼ばれる相手にどれだけ戦えるか見せてくれよ京哉

S i d e 京哉

さて、最高に絶望的な状況だ…カイザーよりハンドアドバンテージはあるが今逆転のカードが無い…だが

「魔法カード強欲な壺を発動し2枚ドロ―!」

よし来た!コイツ待ちだ!

「手札からレベルアップ!を発動!」

「来るか…!」

「無論だ!サイレントマジシャンLV4を墓地に送りサイレントマジシャンLV8に進化!」

『京哉様の為にも必ず勝利に導きます!』

…張り切ってくれるのは嬉しいけど扱うのは俺なんだが…頼りにしてるぜ

サイレントマジシャンLV8 攻3500

「更に戦姫―イザナミを召喚!」

『ようやく出番ですわ…全くあの運営は…』

姫、それ以上は禁句だ

戦姫―イザナミ 攻1900

「更に装備魔法神剣―ザナギを発動!イザナミに装備する!」

戦姫―イザナミ 攻2400

「バトルだ!カイザー!」

「来い!」

「サイレントマジシャンでサイバーオーガ2に攻撃!サイレントバ

「ニング！」

『はあああああ！』

「くっ！」

カイザーLP4000↓3100

「イザナミでプロトサイバードラゴンを攻撃！獅子穿哮！」

『ちよつと京哉！無理な…もう！獅子…穿哮！』

うわっ！マジで獅子穿哮した…アキトよりセンスあるな

『ダンナ…ひでえ…』

「うあっ！」

カイザーLP3100↓1700

「まだまだ！イザナギの効果発動！破壊したモンスターのレベル分のダメージを与える！」

「何！？」

カイザーLP1700↓1100

「そしてイザナミの効果発動！破壊したモンスターのレベル分の攻撃力アップする！」

イザナミ 攻2400↓3000

「ターン終了！さあ迫ったぜカイザー！」

「流石だな京哉…俺の目に狂いは無かった」

「勿論だ、カイザー！」

S i d e 葵

スゴイ！さすが京ちゃん！アレだけのライフ差を一気に縮めたよ！

「やるわね京哉…今度挑もうかしら」

「おっと、待てよ黒原！まずは俺のリベンジマッチだ！」

「俺も混ぜるよ！二人だけはズルいぜ！」

これだと私や兄さんを抜くのもスゲね

「でも…亮の方はマズイね」

吹雪君の言うとおり…フィールドはサイバーオーガのみ手札は無し…

「でもお兄さんは勝つよ、絶対！」

翔君はやっぱり亮君の応援ね…じゃあ私は京ちゃん応援しようと

S i d e 京哉

「俺のターン…ドロー！」

カイザーが引いたカード…何だ…

「俺は手札から天よりの宝札を発動！」

マジかよ…このタイミングで最強のドローカード…

「お互い6枚になるようにドローする！ドロー！」

カイザーは6枚、俺は4枚ドローする…多分コレがラストドローだな

「…来たか…手札からパワーボンド発動！」

「来るか、切札！」

「お前が切札を見せたように俺も見せよう！手札のサイバードラゴン3枚を融合！これが俺の切札…サイバーエンドドラゴン！」

サイバーエンドドラゴン 攻4000 ↓ 8000

「パワーボンドで倍か…」
「そうだ、行くぞ京哉！」
「来い！カイザー！」
「サイバーエンドで！」
「サイレントマジシャンで！」
「攻撃！／迎撃！」

S i d e 喬

凄い…京哉が押され次で押し返した…数ターンしかたって居ないのにこんなに周りを集中させるデュエル…お互いデッキを信じあっている本気のデュエル…私もいつかこんなデュエルをしたい…どんな相手でもこんなに楽しいデュエルを…

S i d e 京哉

「手札から速攻魔法リミッター解除発動！自分フィールド上の機械族モンスターの攻撃力を2倍にする！」

サイバーエンドドラゴン 攻8000 ↓ 16000

攻撃力16000！！だけど！

「カイザー！発動タイミングが早かったな！ダメージステップに手札からオネストを発動！相手の攻撃力分攻撃力をアップする！」

『力が…みなぎります…これなら…！』

サイバーエンドは発射体制に入っている…

『いきます！はあああああ！』

「サイレントオネステイバーニング！」

サイレントマジシャンLV8 攻3500 ↓ 19500

「京哉…発動タイミングが早かったな」

「なっ…まさか！」

「まだダメージステップは終わっていない…手札より決闘融合バトルフュージョンを発動！」

決闘融合…オネストの融合モンスター限定カード…はあ…負けか…

サイバーエンドドラゴン 攻16000 ↓ 35500

「すまない…アオイ…姫…」

『仕方ありません、私も素晴らしいデュエルに使用して頂いたので悔いはありません』

『次は私達をしっかり使いなさい！』

分かってるよ二人とも

「エターナルエヴォリュションバースト！」

京哉LP750 ↓ 0

「…くっそおおおお！負けたあああああ！」

「ふっ…良いデュエルだった。またいつかしてくれ」

「ああ！」

「学園を頼んだぞ、十代、そして京哉」

「任せてくれ！カイザー！」

俺達は握手をすると

『わあああああああ！』

歓声が響きわたった…これにて卒業デュエルは終了し卒パも無事に終了、カイザー亮こと丸藤亮はデュエルアカデミアを卒業した

第五十五話　さらばカイザー！卒業デュエル　後（後書き）

というわけでした！

京「負けたなあ」

作者権限で負けにしました

京「それで次は？」

番外編がまだあるからそっちを投稿予定、ヒロイン詳細を書かなきゃね

京「ヒロインって誰の事？」

今すぐ飛んでいけ、そして地面に打って死ね

京「断る」

ちつ…あと龍夜様、オリキヤの寮は何が良いでしょうか？

京「事前に聞いとけよクソ野郎」

黙れ、この『それ以上京哉様の侮辱は万死に値しますがよろしいですか？』すみませんでした

京「気にしなくて良いのにアオイ」

アオイ『作者だからっていい気になりすぎです』

京「まあ気にしない、それじゃあ皆、また」

超番外編 今更だけどヒロイン設定（前書き）

今回はヒロイン設定といきます。結構居ますので2つに分けます。
勿論今日中に後編も投稿します

超番外編 今更だけどヒロイン設定

京哉「…何このタイトル」

倭「気にしたらあかんで京哉君」

喬「駄作者がいけないからね」

凜「ボクたちの設定無いもん」

涼「前から不満がありましたから」

ハツハツハ！皆、待たせたよ！それじゃあ早速行こうか！先ずはこの箱に入っているクジを京哉に引いてもらいその順番で行こう

4人『必ず最初に…必ず最初に…』

京「なんであんなに呟いてるんだ？」

まあ最初に引かれた人が京哉に気に入られてるって言ったからね。
さあ引け引け

京「わかった…ドロー」

4人『誰！？』

京「あ、アオイ」

アオイ「はい！？」

4人『ええっ！？』

それじゃあアオイちゃんのステータスなり！

名前 アオイ

身長 162

体重 ご…ぴちゅーん

好きなもの 京哉、京哉の寝顔、京哉の手料理、可愛いもの

嫌いなもの 京哉を敵視するもの、京哉を裏切ること

使用デッキ サイレントマジシャンを起用する魔力カウンター

設定 京哉の切札で第1パートナー。京哉を誰よりも信頼しどんな状況でも京哉を思う心を持つ。仲間にも絶対的な信頼を置いている。ちなみに京哉曰く時々見せる拗ねた顔は可愛いとのこと

イメージCV 高垣彩陽

京「お前声優設定マジでやるのかよ」

勿論冗談だけどね

アオイ「冗談ですか…」

まあまあいいじゃん！次行ってみよう！

4人「次こそ…次こそ…」

京「あ、姫」

4人+1「はあああああ！？」

姫「何故私が入っているのよ！？」

気分とノリ

姫「ぐっ…この駄作者めえ…」

じゃ設定無しにしようか？多分出番無くなるぞ

姫「~~~~~！」

それじゃあゴ—

名前 イザナミ（姫）

身長 164

体重 聞いたら殺しますわ

好きなもの 剣技、静かな風景、京哉の料理

嫌いなもの 最低な奴

設定 高飛車な性格のお姫様。実際どうなのかは知らない（笑）。しかし流石に自分が1番とは思ってはいないが京哉の精霊の中では思っている。京哉に対してはツンケンしているが実は「お待ちなさい！」

どうしたの姫？

姫「殺しますわよ？」

止めて下さい…

京「どうした？」

姫「何もありませんわ！それでイメージCVは！？」
ん…この人かな？

イメージCV 三宅華也

京「マジで？」

うむ、まじだ

姫「な、何ですの？」

京「姫、1度だけ某はイザナミなりって言うてみて。凜々しく」

姫「？まあ良いですわ…こほん…某はイザナミなり」

京&作「トウ力あああああああ！」

姫「五月蠅いですわ！」

二人切り刻まれ中

痛かった…よし、次だ

京「はいよ、ドロー」

4人『次こそ…必ず!』

京「アリスだ」

4人『なんとおおおおお!』

アリス「わ〜い!」

それじゃあ行ってみよう!

名前 アリス

身長 154

体重 秘密だよ

好きなもの 京哉、京哉の手料理、京哉の側に居ること

嫌いなもの ホラー系

設定 京哉をお兄ちゃんと呼び慕う。実際は氷の女王の愛娘だが女王の娘という重圧を嫌い脱走、所有者が現れるも必要無しとの事で捨てられ京哉に拾われる。余談だが他の京哉の女精霊の中では一番ぺた「アイスクラッシュハンマー!」おぐぶえがあ!

京「ナイスヒット」

アリス「えへへ」

良い振りだ、まるで俺が「ミ」の「ミ」じゃない「…しどい…よし!次だ!

京「よし、ドロー」

4人『必ず…必ず…』

京「え」と…ドリアードだって」

4人『…………』

オーラが怖いから帰る

ぽとっ

京「おーい駄作者、なんか落としたぞ…ん？」

アオイ「何を拾ったのですか？」

京「…箱を細工してる図面」

4人『さああああくしゃああああ！』

京「うおっ！4人がエースモンスターを使って追撃始めた！」

アリス「どうなるんだろうね」

姫「まあ分かりきってますわ」

ぐわあああああああああああああああ！

京「あ、吹き飛んだ」

アリス「たーまやー」

姫「汚い花火ですわ」

アオイ「それでは皆様の方は番外編2にいきますね」

超番外編2 ヒロイン設定

ひ、酷い目にあっ た…

京「お前が悪い」

何い！？どっからどう見てもヒロイン設定を欲するあの4人が「ヴ
アルカノン」悪くありませんね、私が悪かったね

倭「ええからはよせい」

はいはい…んじゃ倭からな

名前 坂上倭

身長 163

体重 5「融爆や」ぐぎやあああ！

BWH 上から小さめ引き締まってるそこそこ（だってモデルはは
やてだもん）↑コラ

使用デッキ 機械と炎のデッキ ???

好きなもの 京哉、京哉の手料理、京哉の真面目な顔

嫌いなもの 納豆パン、孤独

設定 容姿はとりあえず全てリリなのはやて。ただしあちらより
ギャグ要員でありツツコミ役、納豆パンから好かれている（笑）精
霊は逆巻く炎の精霊で名前はフレイである。初恋は京哉。終焉の第

一被害者でもある

倭「最後の絶対いらんやろ」

いるな。逆に昔のお前がいたから今の京哉がいるんだ
京「そうなのか？」

そうだ、次は喬に行こうか

名前 神谷喬

身長 165

体重 「……………」秘密だな

BWH 綺麗にぼんきゅっぱーん

使用デッキ 帝 ???

好きなもの 京哉、京哉の笑顔、京哉の真剣な眼

嫌いなもの 男性、自分の家系、孤独、暗くて狭い所

設定 容姿はどう見てもリリなのフェイト。精霊は氷帝メビウス。
実はお金持ちの家系だがそれを嫌い親の反対を押しきり入学。幼い
頃男性に度々拉致され男性不信になり男性とのデュエルは誰だろう
と全勝、京哉に負けた以降も京哉と十代以外には負けてない。ちな
みに京哉が初恋「わああああ！」

凜「喬ちゃん…可愛い♪」

流石フェイトを元にした人…奈々さんかわええ

京「作者しね。それじゃ次は凜か」

名前 赤坂凜

身長 164

体重 「バルバロス」秘密です

BWH 喬よりも小さいが倭より大きい以下きゅっぽーん

使用デッキ スキドレバルバ（作者の考えたの） 下級戦士装備ビート（のつもり）

好きなもの 京哉、京哉の優しさ、友達

嫌いなもの 孤独、計算、勉強

設定 髪の色が赤めでそれ以外はリリなのなのは。残念ながら魔王は無い。精霊は荒野の女戦士、名前はリア。イジメを受けていた過去を持ちながら常に明るく振る舞い周りに迷惑をかけないようにしている。無論初恋の相手は京哉である

凜「魔王って何？」

気にしたら負けだよ

京「最後は涼か」
それじゃあラストだ

名前 如月 涼

身長 161

体重 53

BWH 「倭さんより良いです！」

使用デッキ ダイタロス ???

好きなもの 京哉、料理

嫌いなもの 罵倒、多大なプレッシャー

設定 元イースト校。市ノ瀬校長の計らいで本校に来た。イースト校ではバーン＋フィールド破壊で無類の強さで周りを圧倒、デュエルを楽しんでいなかったが抗戦での京哉の1言で楽しさを思い出し京哉に惚れる。ちなみに精霊はいるがまだ出てきてない

どうだ！満足か！クソツタレ！

京「さて、書き終わったからお前は用済みだ」

なっ何！？謀ったな京哉！うおわっ！

京「残念ながらお遊戯を楽しむ趣味は無いのでね！堕ちろ！」
うぐわぁ！

京「これが！京哉スペシャル！」
うわあああああ！

や、止めろお京哉あ！

京「どうしたんだアイツ」

倭「きつと現実逃避や」

喬「可哀想……」

凜「喬ちゃん……見たら移るよ」

涼「落ち着くまで放っておきましょう」

京哉「まあこんな感じだからこれからもうよろしく！」

倭「ウチ1番設定短かったなあ」

京「気にするな。その分出演数が多いだろ」

超番外編2 ヒロイン設定（後書き）

はっ！俺は一体…まあいいや。設定はあんな感じです！後のキャラクター達も頑張って書きますので応援よろしくお願いします。それでは！

超番外編 京哉の身体が！？（前書き）

やっちゃいました…後悔はしていない…はず
60万越えたので超番外編をどうぞ！

超番外編 京哉の身体が！？

「ふわあ」

おはよう皆。今日もいい朝だね

「顔洗いますか…」

まだ眠いなあ……それと何か胸に重みがあるんだけど……

「よし、スッキリ！」

と顔を上げると...

「何よこれええええええええ！」

私の叫びがレッド寮に響いた

「どうしてこんなになつたんだよ京哉？」

「知らないわよ。私が知りたいくらいよ」

「その話し方ってわざとツスカ？」

「違うわよ！勝手になるの！」

「わざとだったらキモチ悪いんだなあ」

「隼人、殴るわよ？」

「ハツハツハ！無様だな京哉！」

「悪かったわね無様で！」

「立花美人だな」

「言われても嬉しく無い！」

今食堂で十代達で相談しているの…え？トシ？トシは…

「アニキが女に…アニキが女に…アニキが…」

こんな風になつて鬱状態に入つたのよ…はあ…

「あら？その娘だあれ？」

…このタイミングで葵姉…

「あつ！先生…実は…」

しよおおおう！喋るんじゃ…

「あつ！もしかすると京ちゃん！？」

…え？

「何で分かつたの？」

「実は昨日流れ星が流れてね、消えるまでに京ちゃんが少しの間女の子になります様についてお願いしたの」

…流れ星…？

「そんな迷信をマジでして私女の子になつたの…？」

「うん」

…そんなのアリ？

『それは違うぞ』

声が聞こえオシリスが小さなサイズで出てきた

「スゲー！オシリスの天空竜だ！」

「何で居るんだよ！」

『我等三幻神は京哉に力を貸しているからな』

「それでどういう事よオシリス」

『実は魔法使いの里の者が原因でな…下心を持った者が作つた薬が昨晚京哉が食した料理に入つたのだ』

「誰だそいつ…締め上げる」

『黒の魔法神官』

『呼びましたか？』

「貴様ああああ！どうしてくれるのよこの身体！」

『いやあ～以前お会いした時から女の子にしたら可愛いのかもしれません』
「思いやってみましたらまさかここまでとは…」

「流石京ちゃん！私も鼻が高いよ」
…アナタ使い方間違ってる…
「もしかしてさ、葵姉…」
「エ？ナンノコトデシヨウ？」
…完璧に買収されてる…
「何で買収されたの？」
「え…いや…ほら…」
「言わないと一生口聞かな」京ちゃんが精霊界に居た時の写真集」
…はあ…んで、いつ治るのよ」
『3日から1週間くらいですね…』
はあ！？期間長すぎ！！
「解毒薬みたいなのは無いの！？」
『残念ながら…ありません…まあ可愛いからいいじゃありませんか』
「ありませんかじゃないわよ！！」
「授業とかどうするのよ！？」
『なんとかかりますよ、それでは』
あつ！ちよつと！！
「逃げられたツスね…」
「…ふざけてるわね…」京哉くん！御相伴あずかりに来たで」
…げっ」
「よう、倭！」
「神谷もおはよう！」
「やあ赤坂君」
「涼さんおはようッス！」
「十代君おはようさん」
「お、おはよう龍牙…」
「万丈目君おはよう」
「おはようございます翔さん…あれ、後ろの方は？」
…もうバレたよ…ちきせう…
「…京哉なんだなあ」

『え？…嘘…』

「はあ…そうよ…立花京哉よ…」

『……………』

あれ、フリーズ『ええええええええええ！』しなかった…

「ホンマに京哉君！？」

「声とか違うのに！？」

「いつからこうなったの！？」

「誰が原因なんですか！？」

京哉説明中…

「…ちよつと精霊界に行こか」

「そうだね」

「ちゃんとお礼をしないとね…」

「そうですね…」

優しいなあ皆…私涙が出てきた

『GJって…！』

…訂正…優しさの欠片も無いわ…

「それじゃあ…京哉君…ウチとやることあるからちよつと来てや」

「断る、どう考えても変な事じゃない」

「いや…ちよーつと胸ゲフンゲフン！発育を確認したいただけやから」

「今思いきり胸触るって言いかけたわよ！？」

「面白そうだからボクも着いていこーつと」

「私も同感ですね」

「お姉ちゃんも京ちゃんがどれだけ育ったか見たいから見に行く！

！」

「私はい「喬ちゃんも強制や！行くで皆！！」えっ、ちよつ

「皆！助けなさいよー！！」

私は十代達に助けを求めると…

「やっぱこっちの方がいいよな」

「これだとチェーンマテリアルの効果で破壊されないツスからね」

「ならばこっちのカードを使用するべきだ」

「それも良いんだなあ」

「それじゃあ後で俺とデュエルしようぜ丸藤」

お前等あああああああああああああああああああああああ
あああ！

以後は音声のみお楽しみ下さい

「京哉君デカイ！」

「喬ちゃんと良い勝負だね」

「どうしたらこんなになったんですか？」

「知らないわよ！」

「うふふ…京ちゃん可愛い」

「あの…止めて置いた方が…」

「む…えいっ！」

「わひやつ！／＼／」

「い…良い感じの柔らかさや…」

「ちよっ…むう！あうっ！／＼／」

「本当だ…柔らかい」

「良い感じですよ」

「あんっ！…やつまつとっ…り…ん…やめ…りよ…も…」

「京哉ごめん…助けれない…」

「京ちゃんの写真におさめよーっ」と

以下規制が掛かった為放送出来ません

そして夜…

「うう…」

『京哉様…その…』

『アオイ、今声をかけるのは止めましょう』

『ダンナ…可哀想に…』

『ちよつと殴り飛ばしてくるね』

『はは…災難ですな京哉殿』

『油断している京哉も悪いですわ』

ちくせう…これが最低後2日はかかるのかよ…

と思ったが案外早く終わった。次の日には男に戻っていた。よかった…アオイ達が治すように頼んだらしい。皆GJ！

ちなみに…レッド寮の皆に姿を見られていた為に伝説扱いを受け伝説の美人と末代まで受け継がれる…らしい。それと余談だが…

「京ちゃんの歴史が…」

写真は全てお焚き上げました

『ふむ…女体には成功しましたね…次は小さくなって頂きますか…』

超番外編 京哉の身体が！？（後書き）

たらりらりゝ

京哉「作者」

レレレのしゝ

京「ごみ野郎」

五月蠅いな。気にするなよ

京「いやいや！普通気にする！」

超番外編だから良いじゃねえかよ

京「でもさ」

でもへったくれもあるか！俺は書きたいように書くんだ！それが俺の「いい加減にしないと叩つ切るぞ」すみませんでした

京「貯めすぎだバカ」

次はちゃんと書きますから…本編

京「さっさとしろよ」

第五十六話　そして時は遡り…入学式！（前書き）

さて、ようやく新学年となりました

ちなみにこの先を私めは全く考えておりません

京哉「さあここから飛び降りろ」

それではどう…あつ、ちよっ！押すなっ…押すな…ああああああ
ああああああああああああああああ！

第五十六話　そして時は遡り…入学式！

「ふわぁ…眠…」

今俺は入学式に出席している。何故かは入学式が始まる1ヶ月前、カイザーが卒業した後の事だ

「京哉君、在校生代表の祝辞を行なつて頂けませんか？」

いきなり呼び出されて鮫島校長から言われた一言だ

「祝辞…ですか？」

「はい、今年から行おうと思ひましてその代表に困っていたんですが…たまたま京哉君を見かけたので」

え？そんなので決めちゃうの？

「まあ…構いませんけど」

「ありがとうございます！それでは後々連絡しますので」

「はぁ…つまらないなあ…」

祝辞を考えて来てほしいと言われたが正直言つて考えていない

「次に入学生代表の言葉です」

…言葉で…まあいいや…

「代表の入学生は壇上に上がりなさい」

「はい」

ん？あの娘…レッドの服装じゃん…しかも何処かで見たぞ…

「おい見ろよ…」

「レッドの奴が代表かよ…」

「しかも女だぜ…」

「ハアハア…」

…最後のはスルーしよう

「私達…」

以下略

「代表、日下部藍」

日下部藍！？あのときの娘かあ…

「続いて在校生代表の祝辞です、立花京哉君壇上へ」

さつて、なんて言つて乗り切るか

「おいおい見ろよ…在校生代表はレッドらしいぜ」

「笑いが止まらねえなあ」

「でもあの人テレビに出てた人よね？」

「あの時勝つてたけどレッドなら絶対に弱いな」

「この学園も低レベルになったな」

…騒がしい上にそろそろ黙らすか

「…えゝ実はという祝辞は考えていない」

そついうとやつぱりな、やバカじゃない？とか聞こえた

「が言う事は決まった」

「お前等この学園、そして他人を侮辱する奴は覚悟している。以上」

S i d e 藍

在校生代表…立花京哉さんの一言…私を慰めているように感じた…
私がレッドの理由…それは…自分にブルーは相応しく無いから…で
す…。テストの点数が低くたまたま試験官とのデュエルに勝つただ
け…それだけなので校長先生に直談判しお願いしました…何故代表
になったのかは知りませんが…立花先輩が言い終わると…

「なんだアイツ」

「レッドの分際で偉そうにな」

「今度アイツを叩きに行くか」

「うほっ！良い男！」

…最後のは多分無視した方が…いいかな…

S i d e 帝

よう、俺は夜神帝。まあ…なんというか凄いなあの先輩は

「宣戦布告みたいだな」

「そうですね帝君…」

隣に居るのは光明院ヒナタ、俺の幼なじみだ

「…1度デュエルしてみたいな」

「面白そうですね」

今度レッド寮行くか…ちなみに俺はブルーだ…試験は満点で試験官
相手にノーダメだったからな

S i d e 京哉

「京哉君あまりああいうのは良くありませんよ」

「すみません…」

シボラレタ…仕方ないか

「これからは気をつけてください」

「はい…」

まあ…とりあえずはアレだ、歓迎会の準備しないとな

「ところで京哉君、レッド寮の歓迎会には私も呼んで下さい」

…また来るのか校長…そんなに俺の飯美味しいのか？

ということとレッド寮の到着つと

「さて、準備「京哉く〜ん！」どうした翔？」

「レ、レッド寮に女子が住む事になったッス！」

「知ってる」

「そ、そうッスか…」

翔が凹んだ。そんなに凹むか？

「あ、翔。ついでだから歓迎会を手伝って」

「嫌ッス、僕は今からブラマジガールに「今晚からしばらくの間飯ぬ」喜んで手伝わせて貰うッス」

「よろしい」

「うう…京哉君ズルいッス…」

『ムー』

おつ、久しぶりスチームロイド

S i d e 藍

「ここが…レッド寮…」

所々くたびれてまるでボロボロのアパート…

「素敵な場所…」

海の景色は良いし…隣の食堂も良い感じ…欠点は校舎から遠い部分かな…

「私以外は来ていない…かな？」

レッド寮に来る前に入学式行っただし…

「お、翔。良い感じじゃないか」

「そうツスカ？」

「将来料理人出来るんじゃないかね？」

「いや、それは無いツスよ…」

「いや、コレが出来るなら結構料理出来るぞ」

…食堂が賑やかですね…歓迎会ですか？

「入ろう…」

私は食堂に行きました

S i d e 京哉

「失礼します…」

お、藍が入って来たか

「よっ、久しぶりだな藍」

「久しぶり…京哉さん…先輩の方がいい？」

「んゝ任せる、気にしないし」

いやあ分かった時はびっくりしたよ全く

「京哉君誰ツスカ？」

「ああ、彼女は日下部藍。レッド寮に所属するんだって」

「え！？彼女ってまさか君が噂の娘！？…何でレッド寮に？」

「私は点数が悪かったから…校長にお願いした…」

「へえ…そうなんスか、僕は丸藤翔。よろしくね藍ちゃん」

「よろしく願います…丸藤先輩」

それじゃあ用意を続けますか

「翔、十代呼んで来てくれ」

「わかつたッス」

「藍は部屋があるからそっちに。山本葵って先生来なかったか？」

「呼んだ京ちゃん？」

うおおい！びっくりした！

「な、なんや自分！そないな所から現れよつて！」

「何で関西弁なの……？」

「やってみたかったから……まあそんな事より藍の部屋は？」

「案内するわね♪」

「よ、よろしくお願いします……」

全く…相変わらず神出鬼没だな葵姉は

「あ、そうそう。1人編入生が来るはずだけど京ちゃん見た？」

「いや、見てないけど」

「わかった、京ちゃん料理よろしくね」

葵姉は藍を引き連れて部屋に案内して行った。それにしても

「編入生……ねえ」

ま……気にしたらダメか

S i d e ? ? ?

…何処だここ…校舎に向かつてるはずなのにいつこうにつかない…
っーかよ…

「マジこは何処なんだあああああああああああああああああ
ああああああ！」

虚しく声が響くだけじゃねえかよ……

S i d e 京哉

む？誰かの雄叫びが聞こえたんだが…気のせいかな？

「5人かあ…今年の新入生は優秀なんだな」

「そうですねアニキ。けどアニキを超える奴はいねえツスよ」

あんまりそういうのは止めてくれよ…また目つけられる

「やっぱり京哉君の方が美味しいわあ」

「そうだね、京哉はもう一流シェフを越えてるよね」

「ボクも教えて貰おうかなあ」

「私も教わりたいです」

「あら、コレ私の口に合うわ」

…なんでコイツ等が居るんだよ…

「5人共、女子寮の方は？」

『料理が美味しく無いから此方に来た』

シンクロして言いやがった…

「お前等作った奴の気持ちを」だってあれより京哉君の方が美味し

いもん。当たり前や」…さいですか…」

今度シェフの皆様と一緒に料理しよかな…

「立花食わねえのか!？」

「食わないなら俺達で食っちゃうぜ京哉!」

ちきしょう…作った奴の気持ちを…考えてくれよ…

「しかしまた腕を上げたようだな京哉」

「京ちゃんなら何処に行っても重宝されるよね」

「まあレッド寮の皆に飯を作っただけで」

しかも皆嬉々として食ってくれるから良いよなあ…

「相変わらず美味しいですね京哉君」

「京哉ちゃん私にも今度教えてくれよ」

「いやいや、トメさんには負けますよ」

俺が一流の美味しいレストランシェフならばトメさんはお袋の味だけ

らな…あつ、そうだ

「万丈目」

「さん、だ。何のようだ京哉」

「食った後デュエルしないか？お前とは久々にしたいし後輩達にも見せたいしな」

「成る程な…良いだろう、今回こそ俺様が叩きのめしてやる！」

「おつ、京哉デュエルするのか？」

「食事の後な」

「くう！楽しみだぜ！」

それじゃあ準備するか…デッキはアレだな

第五十六話　そして時は遡り…入学式！（後書き）

京「さて、皆様先ほどは申し訳ない。それじゃあ先ずは藍の設定…
といきたいがまだデュエルをしていないから待つてほしい。数話進
んで発表だそうだ」

藍「そうですか…残念」

京「帝やヒナタ、暗奈に龍牙、凧の提供オリキヤ設定は…こちらの
独断でよろしいのでしょうか皆様？」

喬「良いんじゃないかな？」

京「せっかくの提供なんだから無下には出来ないし」

涼「そうですね。皆様ありがとうございます！」

京「さて、これから何ですが少しアンケートを取りたいと思います」
凧「出来れば皆答えてほしいな」

京「アンケートはこれから何ですが…」

1、オリジナル街道まっしぐら

2、無い脳をフル活用しオリジナル話無しで原作を進め

3、とりあえず京哉ハーレムを完成させる

4、キャラクター投票でも勝手に行え

5、多作品の先生方に無謀にクロスオーバーを依頼してこい

ちなみに全部の依頼とかの仕切りは京哉だぞ」キラッ！by作者

京「…ちよつと殺してくる…」

倭「落ち着くんや京哉君！読者の皆は必ず作者を痛め付ける選択するから！」

京「…まあ冗談だ。作者は大会が近い為に急筆するのでアンケートは10月16日まで募集します」

藍「今まで感想を書いて無い方もアンケートを出来ればお願いします…」

京「それではまたお会いしましょう！」

皆！サラダバー！

京「来たか！作者狩り始め！」

『了解！』

ちよつ！まつ！あぎやあああああああああああ！

第五十七話 サンダーになって強くなるものかな（前書き）

テストテストテストテスト…ようやく投稿出来ました…

それではどうぞ！

第五十七話 サンダーになって強くなるものかな

「遅すぎだ!」

「すまんすまん」

デッキ取りに行つてたから遅れちまつた

「よし、始めるか。楽しもうぜ万丈目!」

「さん、だ!敗者の汚名を返上してやる!」

万丈目はどれだけ強くなつてるか楽しみだぜ!

「二人共ガンバレ!」

「楽しいデュエルを見せるよー!」

「京哉君、万丈目君頑張つてー!」

「頑張つて下さいアニキ!」

「京哉君応援してるでー!」

「京哉、ファイト」

「京哉君頑張つてね!」

「ファイトです京哉さん!」

「じゃあ私も京哉を応援しましょ」

いやあ観客がいつもよりいっぱいいたら嬉しいよなあ……緊張するけど

「くっ!なんで奴ばかり……」

『まあ良いじゃない兄貴い〜』

『兄貴にはオイラ達が居るじゃんか〜』

『そうだよ〜』

「ええい!五月蠅い雑魚共!始めるぞ京哉!」

「ああ!」

「「デュエル!」」

京哉LP4000

万丈目LP4000

「俺から行くぜ！ドロー！」

よし、まずはコイツだぜ

「カラクリ兵 式参六を召喚！」

カラクリ兵 式参六 攻1400

「ソイツは師匠と戦った時に使った奴か！特性は分かってるぞ！」

「だが経験してみなきゃわかんねえよ！そして永続魔法カラクリ解体新書を発動！カードを2枚伏せターン終了！」

「俺のターン、ドロー！」

さあどうくるよ万丈目

「俺は仮面竜を召喚！」

仮面竜 攻1400

「バトルだ！仮面竜で式参六に攻撃！」

「式参六の効果発動！式参六が攻撃表示で攻撃対象になった時守備表示に変更する！そして伏せカード発動！カラクリ屋敷！カラクリと名の付いたモンスターの表示形式が変わった時に発動可能！フィールド上のカードを破壊する！仮面竜を破壊する！」

空間が出来カラクリ屋敷に侵入した仮面竜があらゆる方向から来た銃弾をくらい破壊された

「くっ！カードを2枚伏せターン終了だ！」

「よし、俺のターンドロー！」

む…コイツかあ…どうしょ

「カラクリ商人壱七七召喚！」

カラクリ商人 壱七七 攻500

「壹七七の効果発動、デッキからカラクリと名のつくカードを手札に加えデッキをシャッフル、俺は時限カラクリ爆弾を手札に加える！」

後はオートシャッフル♪…マジ頑張ってくれ海馬、いちいち抜いてさしてたら面倒なだけだ

「そしてバトル！2体でダイレクトアタック！」

「甘い！畏発動！聖なるバリアミラーフォース！貴様の攻撃モンスターを全滅させる！」

あちゃ～やられちまったか…

「カードを伏せてターン終了だ」

S i d e 葵

うう～お皿洗いで遅れちゃってる～いっつもああいう所で嫌なクジ引くんだもん…あつ、今回はじゃんけんか

「ようやく終わった～！京ちゃんのデュエル見に行かなきゃ～！」

見た所まだ3ターン目くらいで次は万丈目君だったわ

「…先生…お疲れ様です…」

藍ちゃんが労いの言葉をかけてくれた

「藍ちゃん、今どうなってる？」

「京哉先輩がカラクリというモンスターを出して攻撃ですが万丈目先輩にミラーフォースで破壊されました…」

やっぱり京ちゃんはお姉ちゃん思い！！

「お姉ちゃん嬉しいなあ…作ったカードを使ってくれて…およろ…」

「え…？アレを先生が作ったんですか…？」
「そうよ、私カードデザイナーでもあるんだ」
「そっぴいえば最近京ちゃんとデュエルして無いなあ…今度誘っちゃおう」

Side 京哉

「俺様のターンドロー！」

さて、次は何が来るかな

「魔法カード浅すぎた墓穴を発動！お互い墓地に存在するモンスターをセット状態で特殊召喚する！」

生け贄か？なら奴が来るな

「俺はセットした仮面竜を生け贄にアームドドラゴンL5を召喚！」

アームドドラゴンL5 攻2400

「早速お出ましか！」

「アームドドラゴンL5でセットモンスターに攻撃！」

「セットモンスターはカラクリ兵 貳参六！効果によりカラクリ武者 六参壱八を特殊召喚！」

カラクリ武者 六参壱八 攻1800

「ターン終了時にアームドドラゴンL5を墓地に送りデッキからアームドドラゴンL7を特殊召喚！ターン終了」

アームドドラゴンL7 攻2800

くっそ…L7を出させちゃった

「俺のターンドロ―！」

よし、これなら行ける！」

「カラクリ参謀 式四八召喚！効果発動！参謀は召喚時にフィール
ド上のモンスター１体の表示形式を変更出来る！アームドドラゴン
を守備に変更する！」

「何い！？」

アームドドラゴンＬ７ 守１０００

カラクリ参謀 式四八

攻５００

「バトル！カラクリ武者 六参壱八で攻撃！」

「クソ！俺様のアームドドラゴンが！」

「まだまだいくぜ、参謀でダイレクトアタック！」

「くっ！」

万丈目 LP4000 ↓ 3500

「よし、ターン終了」

「俺のターンドロ―！…俺にもまだツキはあるようだな」

「何？」

「伏せカード発動！レベル調整！俺は墓地からアームドドラゴン
Ｌ７を特殊召喚する！ただし貴様は２枚ドロ―だ！さあ引け！」

「ドロ―！」

おっ、コイツは…

「更にアームドドラゴンＬ７を生け贄にアームドドラゴンＬ１０を
特殊召喚だ！」

アームドドラゴンＬ１０ 攻３０００

「げっ！まずっ！」

「アームドラゴンＬ１０の効果発動！手札を１枚捨て相手フィールド上のモンスターを破壊する！」

「くっそ！」

やられちまったか！なんつー破壊力…

「アームドラゴンダイレクトアタックだ！」

「うぐう！」

京哉ＬＰ４０００↓１０００

「ターン終了！ハッハッハ！逆転だな京哉！」

「ハッ！これから更に逆転すんだよ！俺のターンドロー！」
来たぜ！逆転カード！

「おろかな埋葬を発動！デッキからモンスターを墓地に送る！俺はカラクリ忍者 参参丸を墓地に送る！そして墓地には５枚のカラクリが揃ったぜ万丈目！」

「どうゆう事だ！」

「こういう事さ！手札からカラクリ將軍 九九八壱を特殊召喚！」

カラクリ將軍 九九八壱 攻２７００

「何！？だが攻撃力はこつちが上だ！」

「甘いぜ！カラクリ將軍の効果発動！手札を１枚捨てデッキからカラクリと名のつくモンスターを特殊召喚する！俺はカラクリ七十一を特殊召喚！」

カラクリ七十一 攻３８００

「なっ！攻撃力３８００だと！？」

「スッゲー！強そうだぜ！？」

「効果発動！七－十はカラクリカウンターが無いと攻撃出来ないが手札からカラクリと名のつくカードを1枚捨てる事でカラクリカウンターを乗せる事が出来る！俺はカラクリ商人を墓地に送りカウンターを乗せる！」

カウンター1

「そしてカウンターを取り除き七－十でアームドラゴンに攻撃！」「うっ！」

万丈目LP3500↓2700

「終了だ！カラクリ將軍でダイレクトアタック！」

「うわああああ！」

万丈目LP2700↓0

「よし！俺の勝ちだ万丈目！」

「くっ！マグレだ！次は勝つ！」

「いやぁ有難い2ドローだったぜ」

「京哉！次は俺とやろうぜ！」

「いや、立花俺だ！俺とやろうぜ！」

「はぁ…しまった…」

「寝たいから…断る！」

そう言っただけ俺は自分の部屋に行き籠城モードになった…十代達がひたすらドアを叩く音が聞こえて怖かった

翌日ドアを見ると無数の手形があったからマジびっくりした…その

原因の張本人だが…

「……………」

「ホントにごめんなさい京ちゃん！反省してるから口聞いって！」
暫く罰しました

第五十七話 サンダーになって強くなるものかな（後書き）

えゝ皆様アンケートありがとうございます！

とりあえず一番多かった本編でちよいちよいオリジナルを入れる事に決まりました。まさかの意見でしたが…次は飛ばして十代脱走する巻にしようかな

第五十八話 初めて鬱になるかと思った…（前書き）

今回は新規キャラ登場とネオスペースのお話です。ネオスは最初ですが…

第五十八話 初めて鬱になるかと思った…

さて…皆、非常に厄介な事が起こった。十代がエド・フェニックスに敗北してデュエルが出来なくなった…それでその十代だが行方を眩ましてしまったんだなあ…んで今搜索中だ

「…ふう…全くアイツは…仕方ないつか…」

何処に行けば居るんだろうな、まあ予想はつくがな

…ここか…やっぱな

「こんな夜中に船旅か十代？」

「っ！…京哉か…」

「強かったか？エド・フェニックスは」

「…ああ…」

「そうか…」

ならそろそろみたいだな…

「十代、ちよつと来てくれ。話がある」

「なんだ？」

そして俺達は森に着いた

「この辺りで良いな」

「話って何だよ…」

「まあ待つてろ、もうちよいで来る」

「来るって…！！京哉！あれ！」

十代が指を指した方を見ると小さな隕石が此方に来た
「あれだ」

「あれって京哉早く…うわああああ！」
俺達は隕石に巻き込まれた

そして宇宙空間…俺は目の前のウルト…ゲフンゲフン！銀の戦士の
目の前に居る

「ありがとう京哉」

「何、礼は海兄によりしく。早く作り上げたのは海兄だしな」

「だが君は十代を連れて来てくれた、皆の代表として礼を言わせて
くれ」

「…それより、ここで十代をしつかりと元気付けてくれ」

「ああ、任せてくれ」

「頼むぜ、新しい十代の力。ネオス」

ネオスは頷きネオスペースに戻って行った

S i d e 海度

…ようやく…ようやく来たぜ！あつ、関係無いな。どうやら京哉は
十代とネオスを合わせる準備が出来たようだな

「おかえり京哉」

「海兄、今十代はネオスペースに居るよ」

「早かったな、流石精霊達の主だ」

「それは関係無いって海兄」

さてと、使いこなすかこなさないかはお前に掛かってるぞ遊城十代

S i d e 京哉

さて、十代失踪事件（俺は皆には内緒にしておいた）から数日後、また厄介事が増えた。新しく教頭に来たナポレオンとか言う先生がクロノス先生と共闘してレッド寮を潰すって話だ。勿論葵姉は猛反対だけどな

「はあ…そんなに落ちこぼれて言いやがって…」

今レッドは俺、翔、トシ、龍牙に男子ざっと10人…そして

「よう京哉！来てやったぜ」

…コイツ、新しく来た…何だっけ…風か何かの名前だったはずだが…

「風だよ！月読 風！言ってただろ！？」

「人の心を読むな」

「まあ月読の野郎だから勝手に読むな」

「んだとお！？」

「やるかあ！？」

「五月蠅い！黙らないと飯取りあ『すいませんでしたあ！！』…はあ…」

「てめえ等アニキにあまり負担かけんじゃねえよ！」

『んだとお！？「飯」すいません！！』

龍牙と風が非つつつつつつ常に仲が悪い！風が来た時なんだが…

「新しい転入生、月読 風君がレッド寮に入寮になりました！」

「風だ、よろしくな！」

「ん…風君の部屋は…龍牙君と同じでお願いね」

「勿論だぜ！」

とまでは良かったんだが…

「てめえふざけんなよ!!」

「んだとお!!」

部屋に入って5分で仲が悪くなった

「どつどうしたの!？」

「うるせえぞ!何喧嘩してんだよ!」

「…どうしたの?」

「あらあら?どうかしたの?」

すさまじい喧嘩をしていた

「龍牙君と凧君が喧嘩を始めたんです…それで…」

報告した男子は二人の隣の部屋

「ええい!貴様等静まれ!

「「うるせえ黙ってろ!!」」

「ぐ…」

万丈目が一蹴された…お疲れ…

「…はあ…関係無いから帰る」

「京哉君!止めてくれッス!」

「関係無いからやだ…」

俺はさっさと戻って行った

「…まれ…のっ…」

「…れが…に…」

まだやってる…報告から20分がたったのに

「あの…先輩…」

「どうした、藍?」

「いえ…喧嘩…いいんですか…?」

「いいも何も俺には全く関係無いし仮にレッド寮が潰れたりしたら
アイツ等に直してもらっし」

それに止めに行くのにスゲー面倒だし

S i d e 龍牙

「ここが俺達の部屋だ」

「へえ」

新しく来た月読を部屋に案内したんだ

「ん？このデッキお前の？」

「ああ、俺のだけ月読」

「ふん…見るかぎり俺の方が強いな」

その言葉にむつと来たんだ

「いや、俺が強い」

「いや、俺だ」

「俺だ」

俺達は次第に口論となっていき…

「ならリアルファイトだ！！」

「望む所だぜ！！」

S i d e 京哉

「バカだろお前等！？何でリアルファイトに持ち込むんだよ！！」

「だって…」

「なあ…」

「デッキの競い合いならデュエルしろよ！！」

「「そうか！それがあつた！！」」

このバカ共が…はあ…

「もう…何かいいや…助言したから早く外でやれ…」

「おう、サンキュー立花！」

「つしゃー！さつさとやろっぜ！」
2人は意気揚々と出ていった

それじゃあ最初に戻るが…デュエルの結果、凧が校長に呼ばれて中断となった…

「お前等何でそんなに仲が悪いんだよ…」

「コイツが悪い」

意味わからない所でハモリやがって…

「もうしんどい…寝る…」

「後片付けは任せて下さい先輩…おやすみなさい…」

「ああ…」

いい夢見れるかな…最近それすら危ういような気がする…

…その晩なんだが…

「お前下行けよ！」

「てめえこそ下だよ！」

…ベッドの事でかなり揉めていた…うるせえ…明日の飯は抜きにしよう

「京哉！なんで飯作んねんだ！」

「立花飯〜！」

…もう誰か助けて…

「ヘルパレード！」

「はあっ！」

「ぐわあああああ！」

「すまない主殿…」

「昨日から引き続きすみません…」

「大丈夫…気にしてないから大丈夫…」

俺は朝にアスモディウスと風の精霊のエアトスに慰められていた…
良かった…ストッパーがいた

「さつて、飯作るか」

俺はボロボロの2人を無視して食堂に行った

第五十八話 初めて鬱になるかと思った…（後書き）

紅さま、リュウガさま申し訳ありませんでした

こういうキャラが欲しかった為に2人をあのポジションにさせてしまいました…永遠に仲が悪い訳では無いのであしからず…

第五十九話 忍び寄る闇、そして挑戦者（前書き）

私は帰って来たあああああああああああああああああああああ
あ！

京哉「あつそ、今までネタに「言わせねえよ！！」困って更新止めてた上に風邪引きやがって。しかも長いんだよ、そんなんで声「言わせねえよ！それは絶対言わせねえよ！」優目指そうなんて思ったな」

ちくしょおおおおおおおおおおお！言いやがってええええええ！

京「ホントに皆様申し訳ありませんでした…それでは最新話をどうぞ」

第五十九話 忍び寄る闇、そして挑戦者

「何だよこれ…」

十代が後2日で帰ってくると連絡が入った時に精霊界に飛び込んで来た情報…

「戦士達の里が…壊滅してやがる…」

見渡す限り瓦礫の山だった…

「我々が来た時にはこうなっていたのだ」

そう話かけたのは隣に居たデミス。コイツも俺を支持する数少ない悪魔族の1人だ

「フリードや皆は!?!」

「たまたまヒーロー達の所へある用事で全員向かっていたから無事だ」

良かった…皆無事なんだな…

「死者が居ないのが幸いだが…ここはどうする主」

「先ずは復興させよう。近くの各種族達の協力を得て行っ」

「任せよ主。現れよ地縛霊」

バクラが使った地縛霊が3匹(?)地面から出てきた

「…あのさ、相変わらず怖いんだが…」

「慣れる主」

…デミスは無理難題をおっしやる!怖いじゃん。地面から意味不明なのが出るんだよ?

「まあ…彼らが一番早いから良いけど」

数多くある伝令役の中で謎に最速の地縛霊…やっぱり地面の中泳いでるのか?以前聞いたなら「生きてる奴が憎い」なんて10匹から5連呼したからマジびつくりした

「伝文内容は主と話を通りだ。ここから近い里に全て伝えよ」

デミスが言っと地縛霊達は地面に潜った

「さて、後は2、3分待つだけだ主」

「なん…だと…」

「主も大変だな」

地縛霊が帰って来たら1匹だけどこからともかく手紙を渡してきたから読んでみたら…

『主自ら足を運ばれよ 追伸 待ってるからね、ダーリン、by貴方のアマゾネス一族より』

…って書かれてた

「まあ…主、頑張れ」

「何を頑張るんだよ…」

今度水晶の占い師に占いして貰うかなあ…

「まあ…とりあえず赴くか…魔法使いと獣戦士の方によろしく」

「うむ」

早く行くか…大変な事態だしな…

「主様！お待ちしてこちらへ！」

到着すると吹き矢兵が出迎えてくれた。素晴らしい笑顔と共に

「ああ…頼む…」

自然とテンション下がるなあ…

「ダーリン！」

アマゾネスの女王にあった瞬間にダイヴされた

「止めろつての！」

「連れないねえダーリン」

「女王様、私も！」

側近の聖戦士も抱きついて来やがった！

「止めろおおおお！」

「ダーリンごめんね？」

「すみません……」

ハア……ハア……し、死ぬかと思った……

「お前等は……俺を殺す気が……？」

「そんなことないよダーリン！」

「ホントにすいませんでした……」

ちくせう……何で俺はこんな貧乏くじばつか引かされるんだよ……

「まあいい……それより俺を寄越した理由は？」

「それは勿論ダーリンとラヴラヴ「帰る」じよ、冗談だよダーリン

！」

「とりあえず伝える事は地縛霊が伝えただろう」

「勿論了解さ。けどちよっと頼みがあつて」

「頼み？」

女王が指を鳴らすと聖戦士が1つのデッキを持って来た

「アマゾネスデッキか？」

「ご名答！さつすがダーリン！」

……なんかダーリンダーリン言われて気分悪いんだけど……気にしたら負けか

「このデッキの所有者を決めて欲しいの。ダーリンでも良いけどね」

「わかった。それじゃあ最初の依頼通り頼む」

「任せてダーリン！」

とりあえず向こうに帰るとしますかね

S i d e 帝

さてと、立花京哉を探しに来たのは良いけどレッド寮は誰も居ないみたいだな

「帝君、居ないみたい…」

「うーん…」

先輩（主にプライドの高い）に聞いたら皮肉を言っていたし…しかも称号が『サイレントキラー』とか『レッドの2強』とか『炎の料理人』とか…最後のは関係あるのかよ

「はあ…ようやく戻れたぜ」

寮の裏から聞こえた声…

「ヒナタ、行くぞ」

「えっ、み、帝君！」

S i d e 京哉

私は帰って来たあああああ！…なんて言っても誰も居ないしなあ

「帰ってアオイ達の調s「見つけた、立花京哉先輩」ん？」

振り返るとオベリスクブルーの服装を来た1組の男女が居た

「初めまして、オベリスクブルー1年夜神 帝です」

「初めまして、先輩。光明院 ヒナタです」

「ああ、よろしく。さっき帝君は見つけたと言っていたが俺に用か？」

「ええ先輩。俺とデュエルしてください」

またか…アレを豪語した日から1年オベリスクブルーの高飛車共か

ら何度も受けたからなあ…全て叩きのめして。だけど…
「……………」

この夜神…帝君は今までの奴と比べると良い目をしている

「良いよ。だけど今日を含めた数日間事情があって出来ないから出来るようになったら此方からメールをしよう」

「…わかりました、それでは」

さてと、楽しいデュエルが出来そうだぜ

S i d e 帝

「帝君、優しそうな人ですね」

「ああ」

凄いプレッシャーを感じた…今まで感じた事は無かったのに…

「いい勝負が出来そうですね」

「そうだな、応援頼むぜヒナタ」

「はい！」

さて、見極めだからアレで行くか

S i d e 京哉

あの襲撃事件から5日がたった。犯人は捕まえるどころか未だに解らずじまいだ。被害は他には無かったのが奇跡のレベルだったが

「遅かったな十代」

「ああ、けどちゃんと扱えるようになったぜ！」

俺が調査している時に此方へ帰還してエドにリベンジ出来たんだって
「ホントに良かったドン！」

おお！初めてティラノ剣山君が会話に入れた

「運営が俺の存在を忘れていたドン！」

「それは言ったら駄目ツスよ剣山君！」

「運営つてなんだ？」

「気にするな十代」

こればかりは気にしたら負けだからな

「そうだ、夜神君との約束があつたな」

メールをかきかきつと

「誰だそいつ？」

「アニキ少しの間いなかったから知らないんす」

「中等部じゃなくて試験を受けて1発ブルーに入つた奴ザウルス」

「へえ〜んじゃデュエルも強いんじゃないのか!？」

まあそのデュエルは俺がするんだけどね…後はアマゾネスデッキをどうするかな…

「それより京哉！久しぶりに京哉の飯食わせてくれよ！」

「そうだなあ…いっちよ豪勢にやろうか」

「賛成ツス！」

「初めて京哉先輩のご飯が食えるザウルス！」

「アニキ！俺も手伝いやすぜ！」

おっ、いきなり出てきた!？

「俺の不意をついて出てくるなんてやるようになったなトシ」

「先輩…それ関係無いよ…」

まあ確かに関係無いな

「それじゃ作るか。トシ、藍、手伝ってくれ」

「勿論ですぜ！」

「はい…わかりました」

さあて、久々に本気を出すかな

「…もうさ…」

「気にしたらあかんよ京哉君」

ホントになんで俺が豪勢にするの解るの？葵姉じゃあるまいし

「なんと言つか…最近解ってきたというか…」

「十代君が帰って来たって聞いて京哉君ならこうするってボクたち予想が出来たから」

「最近京哉さんの行動が徐々にですけど」

…なんという葵姉スキル

「だって私が教えたもん♪」

「そんなの教えるなよ葵姉！」

「あら、便利よ。このスキル」

「ってお前もか暗奈！」

なんで要らないスキルを覚えさせるんだよ葵姉は！

『必要スキルだよ！』

「口を揃えて言うなよ！」

「良いなあ…」

「俺も教えて欲しいツス！」

「って藍、トシ！何言ってんだ！逆を取れば変態だぞ！」

「変態じゃ無いもん！仮に変態だとしても変態という名の淑女だもん！」

「結論は変態じゃねえかよ！」

「諦める京哉、葵は変態だからな」

「だから海兄さん！私は変態じゃ無くて…」

「言わなくて良いよ！」

食堂でそんな会話をし笑いが絶えなかった。さって、明日は帝君とのデュエルだな

第五十九話 忍び寄る闇、そして挑戦者（後書き）

…グスングスン…

京哉「ふざけてるからそうなるんだよ」

ちくせう…Xセイバー完成までシンクロ込みで後12枚じゃないか…

京「そつちかよ！先に謝れよ！」

はいはいすいませんでしたー

京「ちゃんと謝れよ！」

謝ってるよ！心のそこはな！

京「はあ…もういい…すみません皆様。作者がこんなゴミでカスでガキっぽい奴で」

それは他にゴミでカスでガキっぽい奴に失礼だ

京「それお前の言葉の方が失礼だからな」

そーなのかー

京「ウザいから死ね」

だが断「るなゴミ作者」サーセンwww

京「んで次はどーするんだ？」

超番外編ですね。後修正はまた後程に

京「それでは皆、またな」

XXセイバーヒュンレイって女の子かな？

京「知るかよ」

胸が見えないから解らん

京「変態だなお前」

ありがとう、君に出会えて良かった

京「誉めてねえよ」

第六十話 どうでもいい事ってそんなに覚えて無いよな（前書き）

帝君とのデュエル前のお話です！

ではどうぶどー！

第六十話 どうでもいい事ってそんなに覚えて無いよな

「京ちゃん私とデュエルしよ」

「…は？」

帝君とのデュエルの前日の午後、部屋でデッキを試行錯誤していたら葵姉が来てこの一言だ

「ねーねーしようよー！」

「まあ別に構わな「やったー！それじゃ外でしよ」えっ、ちよっ
！」

引っ張るなあああああ！

「それじゃ京ちゃん！楽しもうね」

「まだデッキが「デュエル」いや聞けよ！」

「私のターンドロー！」

って勝手に始めるなあああああ！

「おろかな埋葬2枚発動、デッキから幻獣クロスウイングを2枚を墓地に送って幻獣ワイルドホーンを召喚してターン終了」

幻獣ワイルドホーン 攻1700 ↓ 2300

「京ちゃんのターンだよ」

「いやだからさ、デッキがまだ中途半端なんだから終わってからしてくれよ」

まだ決まっていなかったから考えさせて「…グスン…」え？

「京ちゃんは…お姉ちゃんと…グスン…デュエルしたくないの…？」

不味い！葵姉が泣き始めた！誰が泣かしやがったんだ！…って俺かあ…なんてやってる場合じゃねえ！

「葵姉、悪かったから泣くのやめてくれ」

「グスッ…ヒック…」

「まだ崩して無いのがあるから大丈夫だって、やるからさ」

「京ちゃんのターンだよ」

「切り替え早っ!」

「おおい! 倭!

「いつ出てきたんだよ!」

「勿論さつきやで、藍もいつしよやから」

「先輩こんにちは…」

「何かもう…まあ…いいや…」

「それじゃやるぜ、ドロー。カードを2枚セットしてモンスターセ
ットしてターン終了」

京哉LP4000

葵LP4000

「京ちゃんありがと、私のターンドロー! 幻獣王カゼル召喚して
攻撃しようかな」

幻獣王カゼル 攻1500 ↓ 2100

「ワイルドホーンで攻撃、ブレイクホーン!」

2300は痛いから…

「伏せカード発動、和睦の使者!」

ダメージは断るぜ!

「そしてセットモンスターはメタモルポット」

「ええっ!?!」

メタモルポットが舌を使って俺達の手札を喰らった
「お互いに手札を捨て5枚ドローだ」

おつ、これは良い感じだな

「ターン終了…京ちゃん酷いよぉ」

「まあ運が悪かったって事だよ葵姉、俺のターンドロー。戦姫—イザナミを召喚」

戦姫—イザナミ 攻1900

『全く…葵は何やっていますの』

「ごめんねイザナミちゃん」

『そんなのは良いですわ、さつさと進めますわよ』

「はいよ、そして神剣—イザナギを装備」

戦姫—イザナミ 攻1900↓2400

「バトル、イザナミでワイルドホーンに攻撃！」

『はあっ！』

「イザナミちゃんには悪いけど収縮を発動！」

「収縮にチェーンしてオネスト！」

イザナミ 攻2400↓4700↓3750

「ええっ！？きゃっ！」

葵LP4000↓2550

「そしてイザナミの効果でレベル分×200攻撃力が上がりイザナギでレベル分×200ダメージでカード1枚伏せてターン終了だ」

イザナギ 攻3750↓2400↓3200

葵LP2550↓1750

「うっ、私のターンドロー、幻獣王カゼルを生け贄にして幻獣ロツクリザード召喚するね！」

幻獣ロツクリザード 攻2200↓2800

「うーん…まずいな」

『何がですの？攻撃力は私の方が上ですわ』

「京ちゃんあたり…！地砕き使っね」

『ちよっ！京哉！私を守りなさい！』

「うん、それ無理。」

『ちよっとおおおお！』

ドーン！！

「ついでに地割れも使ってこれで京ちゃんはがら空きだね、ロツクリザードで攻撃！ファントムブレイク！」

「痛っ！」

アイツ思い切り突っ込んで来やがった！痛い…

京哉LP4000↓1200

「ターン終了っ」

「ヤバいなあ…俺のターンドロー！地砕き返し！という訳で地砕き！」

これでだいたいは挽回出来るな

「あ、ロツクリザードの効果発動。このカードがカード効果で破壊された時に相手に2000ポイントのダメージを与えるよ」

「…彘？」

「…そんな効果あつたんだ…」

「京ちゃん知らなかったの？」

「大抵攻撃で潰されるし」

「京哉君、ウチでも知ってたでそれ…」

「先輩意外と抜けてるんですね…」

み、皆…しどい…だってコイツ一度も効果破壊してないもん

『京哉！何で守らないのよ！！』

「いや、伏せは使いきった後だったし伏せたの普通の魔法カードだったし」

『ブラフにも程がありますわ！』

「あんな効果があるって知ってたら別の伏せてたよ！」

このアホ姫が！ちった考える！

『誰がアホ姫よ！！』

「お前だよお前！！」

『なんですって！やはりアナタとは決着をつけないといけないわね！！』

「やってやろうじゃねえかよ！精霊界行くぞコラア！」今まで耐えに耐えてきた怨み辛みを叩き込んでやるぜ！！

「京ちゃんとイザナミちゃんの勝負たのしそー。見に行こ！」

「葵さん！ウチも行くで！」

「私もいきます…精霊界に興味があるので…」

「おらおらおらおらおらあ！」

「むだむだむだむだむだですわあ！」

俺の剣撃を受け流してんじゃねえよおおおお！

「素直に食らえやあああああ！」

「私には通用しませんわあああああ！」

「京ちゃんイザナミちゃん頑張って〜」

「京哉君、手え抜いとるなあ…」

「なーなー、きょーやなにしてるんだ〜？」

「先輩はイザナミと勝負してるんだよ」

「さあ始まりました恒例の喧嘩！誰に賭けるんだい？」「なら私は

京哉さんに賭けます！」

「私も主様に賭けます！」

「オレツチはイザナミ様だ！」

「オラもだべ！」

「うおおおおおおお！」

「はあああああああああ！」

俺の方が美味しい料理を作るんだあああああああ！

「京ちゃんいつもより張り切ってるね〜」

「いやもうあれは張り切るレベルちゃうやろ！？」

「あれ、料理のスピードじゃ無いですよね…？」

「京哉さん頑張ってください！」

「マスター頑張れ〜」

「京ちゃんのご飯美味いぞ〜！」

「懐かしいネタやなあそれ」

「よく解らないですが…」「ほら食べよイザナミい…食って俺に降参しろよお…」

「あら、京哉こそ降参すべきですわ…私の料理こそアナタを屈伏さ

せるのよ…」

「先輩が大人気無いのがわかりました…」

「ぜー…はー…」

「はあ…はあ…」

その後多種多様な勝負をしたが決着はつか無かった

「これが最後だな…」

「そうですね…」

「どんな勝負かな？」

「あれだけ激しい戦いやったら最後は凄いいんやろなあ」

「ワクワク…ドキドキ…」

これが最後の勝負だイザナミ！

「行くぞおおおおお！」

「行きますわあああああ！」

「「最初はグー！じゃんけんほい！」
そして…」

俺
グー

イザナミ
パー

「やりましたわあああああ！」

「ちきしょおおおおお！」

「あちゃゝ京ちゃん負けちゃった！」

「しょぼっ！最後じゃんけんとかしょぼっ！」

「あはは…」

「お前えええええ！」

「おーほっほっ！これで125勝124敗ですわね」

「たった1勝だろうが！」

「ですが約束ですわ！先に125勝した方が相手の言うことを聞く
つて！」

「くっそおおおおおおお！」

あんな約束するんじゃないや無かつたあああああああああ！

第六十話 どうでもいい事ってそんなに覚えて無いよな（後書き）

姫『ふんふんふん♪』

ご機嫌だなイザナミ

姫『ようやく京哉を…』

聞いちゃあいねえなこの娘

姫『どうしましょう…京哉はどのような髪型とか服が好みかしら…？』

ちなみに京哉はポニーテールが好きなんだよ

姫『ポニーテールに決め…ま…』

後…京哉は若干派手目の方が『何故アナタが居るのよおおおお！』
ぐぎやあああああ！

姫『はあ…はあ…これで良いですわ…それでは皆様、ご機嫌よう…
派手目…やっぱり…私の此方が…』

第六十一話 やっぱりデュエルは…良いものだ！（前書き）

よし、この調子でどんどん更新出来るように頑張ります！

第六十一話 やっぱりデュエルは…良いものだ！

ただ校内のデュエルリング。周りには大勢の観客だ

「まさか授業で当たるとは…」

「まあ良いじゃないですか。わざわざ出向く手間が省けましたし」

「そうだな」

「それでは、デュエルを始めて下さい」

…葵姉嬉しそうだな。毎度の事か

「それじゃ楽しいデュエルをしようぜ！」

「やりましょうか！」

「「デュエル！！」」

S i d e 帝

「俺から貰います！ドロー！」

よし、先手は取った。いくら試しとは言えやっぱり全力じゃ無いと失礼だからな

「二重召喚を発動！ダブルコストン召喚！そしてダブルコストンを生け贄に魑魅魍魎の王ぬらりひょんを召喚！」

魑魅魍魎の王ぬらりひょん 攻3200 ↓ 3400

「へえ…早速切札かあ」

「そしてぬらりひょんは自分の墓地に眠るモンスター1体につき攻撃力と守備力が200ポイントがアップする！カードを2枚伏せてターン終了！」

さあ先輩、これを倒してみてくれよ！

S i d e 凜

帝君の場には3400の妖怪の王が…京哉君…大丈夫かな？

「帝君が全力…珍しいです」

ヒナタちゃんが呟いた、帝君の幼なじみ…だったっけ。良いなあ…
ボクたちよく解らない部分もあるし…幼なじみならよく解ってるんだろうなあ」

「凜先輩…聞こえてますよ？」

「ふえっ！？どつどこから！？」

「そつやなあ…幼なじみぐらいからやな」

「丸聞こえだったよ凜」

「うう／＼／／」

「皆羨ましいのはいつしよですよ凜さん」

そんなに聞こえてたのかな…？

S i d e 京哉

すげえな…いきなりかあ…

「俺のターンドロー！」

「その瞬間針虫の巣を発動！自分のデッキから5枚墓地に送る！」
そして送ったのは全てモンスターか

「送ったのが全てモンスターだった為ぬらりひよんの攻撃力は1000アップする！」

魑魅魍魎の王ぬらりひょん 攻3400↓4400

「4400…強いなあ…モンスターをセットしてカードを3枚セットしてターン終了だ」

「終了時に伏せカード発動！妖魔の援軍！ライフを1000払い墓地のレベル4以下の妖怪を2体特殊召喚する！墓地のカラス天狗と陰魔羅鬼を特殊召喚する！」

帝LP4000↓3000

カラス天狗 攻1400

陰魔羅鬼 攻1200

魑魅魍魎の王ぬらりひょん 攻4400↓4000

「更にカラス天狗の効果破壊！墓地から特殊召喚に成功した時、相手モンスターを1体破壊する！セットモンスターを破壊！」

壁がなくなってしまったか…やるな

「破壊されたクリッターの効果発動、デッキから攻撃力1500以下のモンスターを手札に加える。俺はオネストを手札に加える」「そして陰魔羅鬼の効果発動！墓地から特殊召喚に成功した時1枚ドローする！そして俺のターンドロー！」

さて、次はどんな展開を見せてくれよ！

Side帝

先輩のフィールドはモンスター無しのセットのみ…なら「強欲な壺を発動！カードを2枚ドロー！」

来た！これで勝てる！

「カラス天狗と陰魔羅鬼を生け贄に鞍馬の鴉天狗を召喚！」

鞍馬の鴉天狗 攻2200

魑魅魍魎の王ぬりひょん 攻4000↓4400

「鴉天狗の効果発動！1ターンに1度相手フィールドの魔法、罫を1枚破壊する！俺は2番目のカードだ！」

「伏せカード発動！天罰！カードを1枚墓地に送って効果を無効にして破壊する！」ハズレか！……だけど逆に墓地にいったのはラッキーだ！

「魔法カード死者蘇生を発動！勿論鞍馬の鴉天狗を蘇生！そして1番目のを破壊する！」

「伏せカード発動！威嚇する咆哮！」

くっ！また外した！

「ならカードを2枚伏せてターン終了！」

「けどこのフィールドはそうそう倒せない、どうする？先輩

Side京哉

「俺のターンドロー！」

盛り上がって来たぜ！

「伏せカード発動！リビングデッドの呼び声！墓地のクリッターを蘇生！帝君！このターンで決着をつけよう！」

「何っ！？」

「強欲な壺を発動！カードを2枚ドロー！」

姫、来たか！遅かったな

「戦姫―イザナミ召喚!」

戦姫―イザナミ 攻1900

『一言多いですわ!』

「わりいわりい。んじゃ行くぜ、クリッターでぬらりひょんに攻撃!」

玉砕されたのは言うまでもないか…可哀想に

京哉LP4000↓600

「わざわざライフを減らしてまでサーチ…まさか!」

「そのまさかだ、クリッターの効果でオネストを手札に、そしてイザナミでぬらりひょんに攻撃!」

『行きますわよ!』

今回はきちんと守ってやるぜ姫!

「手札からオネスト発動!チェーンを組んでもう1枚発動!」

Side帝

くそ…まさかそんな捨て身を仕掛けるなんて…

「負けかあ…」

まあ…予想外過ぎたけどな。そういえばこのデッキで負けたのは初めてだったなあ

帝LP3000↓0

「流石ですね先輩…」

「いや、帝君も十分な強さだったよ。それよりぬらりひょんと鞍馬の鴉天狗は初めて見るカードだけど……」

「あ、これ等は俺の作ったカードです。カードデザインが趣味の二環なんで」

「へえ……葵姉なんか涙目だな」

「むっ、京ちゃんどういう意味？」

葵先生が少し怒り気味で先輩に迫った…苗字違うのに姉さんって変だな

「私なんか京ちゃんに対して愛情込めて作ってるもん！」

「はいはい」

立花先輩は頭を撫でて宥めた……この殺気は……

「先輩、早く逃げた方が身のためですよ」

「…大丈夫、そのつもり。それじゃまたな」

「ええ、またやりましょう」

先輩はダツシユで逃げていった

Side
京哉[illegible]

ただ今葵姉信者から絶賛逃亡中！

「待つバカは居ねえよ！」

全く：俺が何をしたっていうんだよ。いつも通りの事をしたのにそれがまずいんですよ京哉様！」

「ええっ！？何でだよアオイ！？」

何でもです！

拗ねてしまった…それより明日の朝までずっと逃亡だ！

しかし寮は包围されており朝になっても包围網は解けなかったため三沢の部屋で過ごす事になってしまった。そして…

「アニキの勝利が見たかったッス！遊城と緋炎と月読がサボってたせいで見れなかったんスよ！」

葵姉が状況を收拾し 寮に帰って来た時にトシが言った台詞だ。状況を説明すると…十代が恒例のサボりで龍牙と凧が恒例の喧嘩でどっか行つてその3人を探すのをクロノスに頼まれたそうだ

「残念だったなトシ」

「残念じゃ無いッスよ…」

「午前中実技だったのか！ちくしょ〜」

「やんのかぁ？」

「ああ？」

… 1週間飯抜き決定だなこいつ等

第六十一話 やっぱりデュエルは…良いものだ！（後書き）

今回もイザナミ大活躍！イザナミフィーバー！

京哉「良かったな姫、出番が増えて」

姫「え、ええ…」

京「どうした姫？」

姫「な、何もありませんわ！」

京「？まあいいや。次の予定は？」

光の結社だな、のである2人が光の結社に…これ以上は秘密。それでは！

第六十二話 光と結社の合わせ技（前書き）

うっざーい光の結社のお話に入りました。まあ… 斎王との接点は0
ですがね

ではどうぞ！

第六十二話 光と結社の合わせ技

最近京哉君が構ってくれない…この前も…

「京哉君、ちょっといい？」

「どうした凜？」

「うん、ちよつとデツキの事で「ちよつと良いですか？立花君」

「委員長、どうした？」

「先程の授業ここが解らなくて教えて貰いに来ましたので」

「ああ、これはこうで…こうなるからだ」

「成る程、そうでしたか…ありがとうございます。後授業にはしっかり出て下さいね」

「はいはい…ええつと凜、デツキの相談「立花君！私のデツキ見て」
「あ、宮田。どれどれ…良い感じじゃないか。これなら大丈夫だな」

「えへへ、ありがと」

「ああ。それで凜…あれ？」

その時もボクは立ち去った…京哉君は倭ちゃんや喬ちゃん、涼ちゃんとはよく一緒に居るのに…

「…もつとアプローチしきゃダメだなあ」

頑張らなきゃ！誰にも負けないようにね

「その願い、我が叶えてやろうか？」

「…え？」

声が聞こえた方を見るとフードを被った人が居た…

「いい人形を見つけたぞ…」

「誰…一体誰なの？」

「お前の姿借りるぞ」

「え？きやあああああ！」

何が…ボクの…頭に…

「き…よう…や…く…」

S i d e 京哉

最近光の結社とか言う輩が現れた、しかも万丈目と明日香が入っていた…まあどういいう類いかはだいたい予想はつくがな。催眠術の辺りだろうな

「それより、凜が居ないな」

ここ最近話とかしていない、今日は一緒に居ようと思ったんだけどな
『キヨウヤ！』

「リア？っ！お前その姿！」

凜と一緒に居るはずだったリアがボロボロの姿になって来た

『お願いキヨウヤ…リンを…リンを…』

「凜がどうした！？」

『リンを…アタシは守れなかった…』

とりあえず精霊界で休んで貰わないと…

「アキト！」

『どうした旦那…リア！なんでこんなに…』

「とりあえず精霊界で休ませてくれ」

『解ったぜ旦那！しっかりしろよリア！』

凜…どこなんだ…何があつたんだ！

S i d e 暗奈

上手い具合に乗り込めたわね…

「でも私に白は似合わないわね」

光の結社…やはり悪しき光が来たわね…

「とりあえず内部調査から開始しましょう」

何かあつたら京哉が来てくれるしね

「やっぱり斎王に取り憑いているみたいね…それで潜入してるようね…」

ならあのカードは…「何をしてるの暗奈ちゃん？」っ！

「凜…その姿は…」

「暗奈ちゃんも光の結社に？」

「ええ…まあ…」

「へえ…まあいいよ。今は見逃してあげる…私は斎王の手伝いしないとね」

凜はそう言つて立ち去つた…一人称が変わつてるわ…しかも今斎王つて…

「斎王の洗脳…つてわけじゃ無いようね…」

もう少し調査しましょう…何か解るかもしれないわね…

S i d e 京哉

…驚いた…先ずはその一言だ

「凜…何で白い制服着ているんだ？」「簡単な事だよ…私は光の結

社に自ら入ったんだよ」

「…誰かに負けたのか？」

「聞こえて無かったみたいだね、私は自ら入ったって信じられない…何で…入ったんだよ…」

「凜ちゃん何でや！？何で入ったんや！」

「斎王の行う事を達成する為」

「斎王の目的…だと…」

「凜…目的って何？」

「喬ちゃんでも教えられないよ…」

不敵に笑みを浮かべる凜…

「それじゃ私は行くね…次会うときは京哉君…デュエルをする時だからね」

そして立ち去ってしまった…

「京哉さん…」

どういう事なんだ…一体…何故だ…

「斎王が原因じゃ無いなら一体誰が…」

許さねえ…必ず叩き潰してやる…！

「はあ…」

『それで19回目だよお兄ちゃん』

『無理ありません…親しい友が敵に回ってしまったのですから』

『くそっ！原因は一体なんだよ』

『京哉様…』

…どうすればいいんだ…どうすれば…

『主、考えていても仕方ありません…』

「カイト…」

『うじうじ考えるのは京哉らしくありませんわよ！』

「姫…そうだな」

まずは行動しなきゃな…

「でも…はあ…」

『うー考えてすぎなのよ!』

「考えるだろ…晩御飯のレシピ」

『『『『『『え?』』』』』』

「何にしょ…」

『もしかしてお兄ちゃん、寮に戻ってからのため息って…』

『ああ、晩御飯を何しようかなってな』

『京哉殿…』

『だ、旦那…』

『アナタは…!…もういいですわ…』

とりあえず…食堂の食料を見てくるかな

S i d e ア オ イ

『…アオイ』

『解っています』

無理して誤魔化していますね…京哉様…今まで無かった事ですし…

『どれだけ辛くても…』

『主を守るのが我等の使命…』

今力になれなくても…助ける時には必ず力になります

S i d e 京哉

「ごちゃごちゃ考えても仕方ないな、とりあえず今度に賭けるしかねえな…気晴らしに誰かとデュエルしようかな」

「あ、先輩…」

「よう、藍」

「…そういえば藍とはデュエルしてないなあ」

「なあ、俺とデュエルしないか？」

「私とですか…？」

「ああ」

藍が考え始めた。間でも悪いのか？

「わかりました…良いですよ…」

「すまないな、飯前だつて言うのに」

「いえ…ですが条件…といえますか提案があります…」

「提案？」

その提案…それは

『レッド寮だけで大会？』

俺はレッド寮に居た皆に伝えた。勿論強制じゃ無い

「すっげー！面白そうじゃん！」

「そうだな遊城！」

「まっ、優勝は俺様が頂くけどな！」

十代、龍牙、凧はノリノリだな

「俺はアニキが参加するなら参加しやす」

トシはほぼ決定と…

「僕はいいかな…」

「僕も…」

「おいおい、皆参加しようぜ！」

「参加しても遊城くん達に負けちゃうし…」

…ふむ、彼らには勇気を与えないとな

「よし、君達のデッキを貸してくれないか？俺が強化をしよう」

「ホ、ホントに！？」

「ああ」

「ありがとうございます！立花先輩！」

「だからデッキの調整も兼ねて明日のレッド寮大会は出てくれよ」

「はい！」

さてと、食事が終わった後はデッキ弄りしようかな…え？強制じゃないのかって？調整してくれただから強制じゃ無いよ、頼みだよ

「へえ…彼の切札はサイコショッカーかあ」

これならサイコショッカーを守る必要があるな

「ボルテックスとかひどくに弱いから…」

「先輩…どうでしたか？」

デッキを弄っていたら藍が入ってきた

「皆やるって」

「そう…ですか…」

「ところで何であんなの考えたんだ？」

普通にダメならダメって断ればいいのにな

「先輩が落ち込んでたから…」

…はあ、敵わないなあ…葵姉もそうだったけどさ。何ですぐバれるんだろ

「まあ…気晴らしにはなると思っから嬉しいけど…心配してくれてありがとな」

「うん…それじゃ先輩…明日」

「ああ」

さてと、残りを完成させるか

第六十二話 光と結社の合わせ技（後書き）

そして後悔はしていない…

ただ今バイトがしたくてしたくて…いわゆる金が無いと言っ奴ですね

頑張ってバイト探しますか…勿論執筆もね
それでは！

第六十三話 レッド寮No.1デュエル大会…だったけど…（前書き）

指摘受けたので変更しました…これで大丈夫なハズ…

ではどうぞ

第六十三話 レッド寮No.1デュエル大会…だったけど…

「…南に5人、東に3人…西には指揮役1、戦闘要員3…1つは真下か…」

…な…んてね。屋根の上からカツコよく言っただけだよ。とは言っても光の結社の奴が見えた方角をただ言っただけで真下が嘘なだけど
「ノ。スカツコイイよなあ」

「先輩…いつ下りるんですか…？」

おっと、皆を待つ為に上でノ。ス的な事してたんだった

「わりいわりい、よつと」

さて、皆揃ってるようだな

「よし皆、コイツを引いてくれ。それで同じ番号同士で戦ってくれ」

「よつしやあ！まずは俺が引くぜ！」

龍牙が最初に引き

「へへっ、すげえ楽しみだぜ！」

次に十代が引き

「俺も楽しませて貰うかな」

凧が引き…

「アニキとは最後に当たりたいぜ」

トシが取り他の生徒も引いていき

「京哉先輩とは最後に当たりたいですね…」

藍が引き俺が最後の1枚を取った

「さて、皆取ったな。それじゃ皆番号を見て1番の奴等から最初にしていこう」

そして最初のデュエルは…

「俺だな」

「よし、俺だぜ」

トシと凧が最初のデュエルだ

「それじゃ実況を海度兄に、解説を葵姉と三沢にやってもらうか」

「ああ、任せてくれ」

「勿論♪」

「京哉…俺の存在を覚えてるのはお前だけだよ…」
わざわざ実況解説席まで作ったからな

「それじゃ審判は俺がやるドン」

剣山も協力してくれたから嬉しいなあ

「それじゃあデュエル開始ドン！」

「「デュエル！！」」

利光LP4000

凧LP4000

「俺から行くぜ！ドロー！」

先行はトシ…後は実況よろしく

Side実況

「さて、最初はドラゴンデッキを使う利光からだ」

「ドラゴンデッキは圧倒的パワーを展開するデッキだからね」

「凧は自分のモンスターをいかに倒されずに上級に繋ぐかがポイントですよ」

Sideデュエリスト

「俺はサファイアドラゴンを召喚！」

サファイアドラゴン 攻1900

「カードを2枚伏せてターン終了だ」

「俺のターンドロー！自分の墓地にモンスターがいない時に特殊召喚できる。俺はガーディアンエアトスを特殊召喚！頼むぜエル」

『任せて下さい風』

ガーディアンエアトス 攻2500

「げっ、早速かよ……」

「更に精霊の姫巫女召喚！」

『参ります！』

精霊の姫巫女 攻1700

「更に姫巫女がいるかぎり俺のフィールド上のモンスターは攻撃力1000上がるぜ！」

ガーディアンエアトス 攻2500 ↓ 3500

精霊の姫巫女 攻1700 ↓ 2700

「ちよっ！おまつ！」

「二人とも行けえ！」

「終わるの早すぎるだろおおおお！」

利光LP4000 ↓ 0

S i d e 実況

「なかなか早く終わったな」

「姫巫女の召喚が鍵だったね」

「風のデッキは見たところ風属性と言ったところですね」

S i d e デュエリスト

「おいおい、早すぎじゃねえか利光」

「うるせえ！あんなの来られたら無理だったの！」

「それじゃ次の対戦を。2番は早く向かいあってくれ」

「よっし！俺だな！」

「よ、よろしく龍牙君！」

「「デュエル！！」」

龍牙LP4000

レッドALP4000

「僕から、ドロー！モンスターをセットしてカードを2枚伏せてターン終了！」

S i d e 実況

「次は龍牙か」

「堕天使＋天使のハイビートだね」

「しかもヴァルハラがあれば速攻で出てきますからあの生徒に防ぎ
きれるかな」

S i d e デュエリスト

「俺のターンドロー！ヴァルハラを発動、堕天使アスモディウス特
殊召喚！」

『なかなか面白そうな企画だな』

「だな！アスモディウスの効果発動！デッキからスペルビアを墓地
に送るぜ！そしておろかな埋葬でアテナを墓地に送りジェルエンデ
ュオ召喚！死者蘇生を発動！アテナを特殊召喚！アテナの効果でジ
エルエンデュオを墓地に送りスペルビアを特殊召喚！スペルビアの
効果によりジェルエンデュオを蘇生！これで揃ったぜ！」

堕天使アスモディウス 攻3000

アテナ 攻2600

堕天使スペルビア 攻2900

ジェルエンデュオ 攻1700

S i d e 実況

「早速汚な」

「兄さん漢字違っよ！」

「1ターンで上級3体とは流石だな、レッドに居るのが勿体無いくらいだ」Sideデュエリスト

「行くぜ！アテナで攻撃！」

「ええっと、モンスターはアステカの石像でダメージステップに伏せていたD2シールドを発動し守備力を2倍、収縮もアテナ対象に発動。手札から牙城のガーディアンを3枚墓地に送って守備力4500アップして…」

アステカの石像 守2000 ↓4000 ↓8500

アテナ 攻2600 ↓1300

「マ、マジかよおおおおおおお！」

龍牙LP4000 ↓0

Side実況

「おーアステカ軸の反射デッキか」

「あー！京ちゃんにあげたカード！」

「何とも綺麗に決まった反射1ターンキルだ」

Sideデュエリスト

「京哉君！ありがとう！このデッキで始めて勝てたよ！」

「信じたからその引きが出来たんだよ。ハイ次3番」

「私です…」

「僕だ」

「それじゃ始めるザウルス！」

「デュエル…」

「デュエル！」

藍LP4000

レッドBLP4000

「私のターン…ドロー…私は二重召喚を発動、クイーンズナイトとキングスナイトを召喚…キングスナイトの効果でデッキからジャックスナイトを特殊召喚します…ターン終了です…」

クイーンズナイト 攻1500

キングスナイト 攻1600

ジャックスナイト 攻1900

「僕のターンドロ―！僕はモンスターをセットしてカードを1枚伏せてターン終了」

Side実況

「藍のデッキは三銃士のようなな」

「三銃士はジャックが手札に来たらつまるよね」

「ですが融合先のアルカナナイトは強い。まだ融合が無い様に見えますが…」

S i d e デュエリスト

「私のターン…ドロー、融合を発動します。場のキング、クイーン、ジャックを融合しアルカナナイトジョーカーを融合召喚します…」

アルカナナイトジョーカー 攻3800

「バトル…アルカナナイトジョーカーでセットモンスターを攻撃します…」

「伏せカード発動！炸裂装甲！」

「アルカナナイトジョーカーの効果発動します…手札から罠を捨てこのカードを対象にした罠を無効にします…」

「うわっ！」「そして融合解除発動…アルカナナイトジョーカーを融合デッキに戻しキング、ジャック、クイーンを特殊召喚しダイレクトアタックです…」

「うわああああああ！」

レッドBLP4000↓0

「ありがとうございました…」

S i d e 実況

「おゝこれまた綺麗な1キル」

「こんなの海馬くん以来で驚きだよ」

「海馬瀬人をそう呼ぶ葵先生の方が驚きですよ…」

S i d e 京哉

ええつと十代のデュエルはカットで…

「最後は俺だな」

他に2人分あったが2人とも課題があつて出来ないとの事…だから

「相手が居ない…」

「心を読むな藍…」

「ならば久々に俺が相手しようかな」海兄が立ち上がりそう言った

「あゝまあそれもいいな」

「ならやろうか」

海兄は俺と向かい腰のデッキケースからデッキを取り出しディスクにはめた

「デュエル!!」

京哉LP4000

海度LP4000

「俺から行くぞ。ドロ―! 装備魔法未来融合フューチャーフュージョンを発動! デッキに眠るサイバードラゴン3体と全ての機械族を墓地に送りキメラテックオーバードラゴンを融合召喚! キメラテックオーバードラゴンの効果で自壊し更に手札抹殺を発動!」

早速…か…1万越えが来る…!

「そしてオーバーロードフュージョンを発動! 墓地のサイバードラゴン3体と機械族モンスター22枚、計25枚を除外し融合召喚! 来い、キメラテックオーバードラゴン!」

キメラテックオーバードラゴン 攻20000

「ターン終了だ」

「早速……20000！」

「さあ京哉、この壁を抜けてみる！」

抜けてみる…か…200000なんてモンスター出されたら…

「燃えてくるぜ！俺のターン、ドロー！カードを4枚セット！シャインエンジェル守備表示で召喚ターン終了！」

シャインエンジェル 守800

Side
実況

「来たあああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ！海度兄のキメラあ
ああああああああああああああああ！京ちゃん頑張
つて！」

「海度先生相手に叫んで京哉に対しては普通の応援って……」

Side
海度

ほう……リクルートか……だがリクルートはさせん！

「俺のターンドロー！俺はキメラテックオーバードラゴンにメテオ
ストライクを装備、バトル！シャインエンジェルに攻撃！エヴォリ
ューションバースト！」

「伏せカード発動！ガードブロック！ダメージを無効にし1ドロ―

！そしてシャインエンジェルの効果でシャインエンジェルを特殊召喚！」

シャインエンジェル 攻1400

「ならば続けて攻撃！エヴォリューションバースト！」

「再びガードブロック！1ドロー！そしてシャインエンジェルを特殊召喚！」

「まだまだあ！エヴォリューションバースト！」「またガードブロック！そしてサイレントソードマンLV3特殊召喚！」

サイレントソードマンLV3 攻1000

「そして最後だ25連打あ！」

「攻撃の無力化発動！」

ちっ、全部止められてしまったじゃないかよ…

「ターン終了だ」

「俺のターンドロー！スタンバイフェイズ時にサイレントソードマンLV3を墓地に送りサイレントソードマンLV5を特殊召喚！強欲な壺を発動、2枚ドロー！更に手札からレベルアップ！発動！サイレントソードマンLV5を墓地に送りデッキからサイレントソードマンLV7を特殊召喚！」

『義兄上殿が相手ですか…』

「頼むぜカイト」

『御意！』

サイレントソードマンLV7 攻2800

「厄介なのが来たなあおい」

『精霊界に来て貰えますか？問題が発生しましたので…』

「問題…だと…？解った…」

残念だ…戦えるチャンスだったのにな

「全く…主も楽しやねえや」

さて、行つて来ますかね

第六十三話 レッド寮No.1デュエル大会…だったけど…（後書き）

ふっふっふ…

京哉「だから気持ち悪い」

だつて！

京「Nレアなんだから1ボックス買って当たるか解らんだろ？」

駄菓子菓子！おれは当てるんだ！

京「はいはい…」

第六十四話 親の心、子知らず。人の心は解らないもの（前書き）

さ…最近文が不調なり…

頑張れ、俺！

まあ今回も不満ならすみません…

ではどうぞ！

第六十四話 親の心、子知らず。人の心は解らないもの

俺はアオイに呼ばれて精霊界に来たが…

「結局問題は何だ？」

「実はその…あの…」

アオイの口がこもる。何か言いにくい事なのか？

「まあいいや。とりあえずその場所連れてってくれ」

「わかりました」

そして到着。この場所って…

「あのさ、ここって…」

「はい、アリスの故郷でもある氷の里です」

この場所めちゃくちゃ寒いからあんまり好まないんだよなあ

「あつ！お兄ちゃん！」

里の入口に居るとアリスが走ってきた…って何で走ってる？

「助けてお兄ちゃん！」

「えっ？ちよっ！」

アリスが俺の背中に隠れた。その理由は…

「姫様！いい加減にして下さい！」

コールドエンチャンターが走ってきた。どうやらアリスを追いかけていたようだ

「あつ！主様！」

「ここでも通ってるのかよ…」

「精霊界の主ですから」

「主様ありがとうございます！姫様を捕まえて下さって…」

「いや、捕まえてはいないんだが…」

「お兄ちゃん！後はお願い！」

「させません！アイスフリーズ！」

「コールドエンチャントーは杖から魔法を使ってアリスの足を凍らせた
「あつ足が！」

「ようやくです…」

「うつ動け私の足！足！何故動かん！」

「そんな木星帰りのふざけた事しないで女王の所に行きますよ！」

「やーだー！お兄ちゃん！」

「アリスが首根っこ掴まれて引っ張られてる…意外と力あるんだな…
まあ仕方ない、ここは助けてやるか

「エンチャントー、ちよつと理由を聞きたいんだが…」

「そうですね、主様をお兄ちゃんと呼ぶ理由も聞きたいのでどうぞ
あら？招かれてしまったんだけど…まあいいや

「ありがと、行こうかアオイ」

「はい」

「ううゝ！放してゝ！」

「氷の女王様、姫様と主様をお連れしました」

「ご苦労様、あら主様。こんな寒い所まで来ましたね」

「ああ、アオイから来てくれて頼まれたんだが…」

「ぶうゝ」

「何か問題がだんだん解ってきたんだが…」

「アリス、いい加減に里から出るのを止めなさい。アナタの身を思
っているのよ？」

「でも私はお兄ちゃんがマスターなの！マスターの傍にいるのは当
然でしょ！？」

「あれ？俺マスター扱いされてるんだけど…」

「いや、俺マスターじゃ無いが…」

「しかし私はアナタが心配なのよ…」

「お母様は心配しすぎなの！それに私がお母様の娘って立場だけで皆私を特別扱いして！」

「それは仕方ありませんよ、次の女王なんですから」

「ぜつつつつつたにならないもん！！」

「俺の事無視？ねえねえ、無視なのか？」

「京哉様、この場所から出た方が良いかもしれません…」

「そつだな…」

アオイと俺は声を潜めて口論の火種がこちらに来る前に決めたが…

「お兄ちゃんと絶対居る！」

火種はやはり飛んできてしまった。アリスが俺の腕をしっかりと掴んでいる

「確かに主様は強いかも知れないわ…でもアナタが墓地に行った時の事を思うと私は辛いよ…」

「どうせそれも自分の威厳を守る為でしょ！」

「姫様！」

「アリスかなり言うよなあ…なんか羨ましい…前の喧嘩の時も感じたし

「仕方ないわ…アリス、私とデュエルしなさい」

「っ！」

ん？女王の一言でアリスが苦しそうな表情をした

「アナタが勝ったら私はなにも言わないわ、でも私が勝ったらもう里から出ないでちょうだい」

「…解った…でもデツキは組ませて」

「ええ、出来しだいいつでも良いわ」

何かまた展開がアレを思い出して来たんだが…

「後主様の力を借りてはいけないわ」

「…解った…」

アリスは俺から離れて去っていった。それにコールドエンチャントも着いて行った

「ごめんなさい、見苦しい所を…」

「いや、親が娘を心配するのは当然だと思う」

「ありがとう、こちらで部屋も用意するわ」

「ああ、ありがとう」

俺は指示された部屋に向かって行った。アオイは何か話があるって行つたけど気にしたら行けないな

P i P i P i …

「ん？カイザーからだ…」

久々にカイザーからメールを受けた。そういえば最近不調なんだつたな。内容はこうだった

『久しぶりだな京哉。最近お前も知ってる通り俺は勝っていない…だからお前に喝を入れてもらおうと思つてな。明後日デュエルアカデミアに戻るから俺とデュエルして欲しい』

喝…ねえ。入れるものあるかな…とりあえずやってみるか

「わかりました…と」

送信！カイザーとは久々に会うなあ

私は帰ってきたあ！…ごめん、今2日後な

「十代達は居ないのかな…」

一度レッド寮に行つたが誰もいなかった。あり得ないとは思つが光の結社の奴等から…

「大丈夫とは思うけど」

まあ港でカイザーを待つとしようかな

そして3時間後…

「ロン、立直一発三暗対々ドラが…赤込みの8だな」

「うげっ！飛ばされた！」

「それは読めませんね主」「まだ開始3順ですよ京哉殿」

暇すぎて暇すぎて港の倉庫を漁ったら麻雀牌と自動卓を見つけたから中でカイトとアキトとフェルで麻雀を2時間やってたんだ

「では次は5万スタートの10万返しやりますか？」

「よし！次こそダンナを飛ばすぜ！」

「じゃあ飛ばされないようにするか」

「逆に京哉殿なら飛ばしますよ」

P i P i P i …

ん？通信じゃまいか

「カイザーからだ、もうすぐ着くつて」

「わかりました、なら我等は戻りましょう」

「またやりましょうか京哉殿」

「次はダンナを絶対飛ばすぜ！」

3人はカードに戻って行つた…実体化？してたよ。まあ何故かはまた後程

「さて、カイザーを待つかな」

S i d e アリス

話は精霊界に戻って…うゝあんなの言われてムカついたから言つち

やったけど…どうしょ…私デッキとか無いよ

「アリス、ちよつと良いですか？」

「あ、アオイさん！」

アオイさんが入って来た。あれ？お兄ちゃんと帰ったはずじゃ…

「京哉様からです。余りカードだからプレゼントする、だそうです」

「えっ！？」

アオイさんが大きめのトランクを持って来た…

「ありがとうアオイさん！」

「お礼は京哉様に、早く作りあげましょう！」

ありがとうお兄ちゃん！絶対に勝つね！

第六十四話 親の心、子知らず。人の心は解らないもの（後書き）

今日バイトの面接があつたんだ…

京哉「それで？」

それだけ…合否は5日以内だつて

京「乙」

ですよ…最近調子悪いのでねえ…よし休もう

京「ダメだ」

何故だ！？

京「読者に失礼だからな」

む…なら読者に質問！休んで良いですか？

京「ダメに決まってるだろうが」

それは、読者の独断です。それでは！

京「読者のみんな、これは振りだ。ダメだつていう振りなんだ。作者に言ってくれ」

京「D A M E D A っ。ちなみに次は超番外編な」

超番外編 スキマに落とされた決闘者 パート1（前書き）

今回は番外編です！

実はアクセス数がなんと80万を越えたので書かせていただきました。2パートに別けようと思います
これからもこの小説をお願いします！

京哉が序盤壊れます

超番外編 スキマに落とされた決闘者 パート1

ハイみなさん、京哉DATH！え？なんでそんなにテンション高いかつて？何とですね…今俺の目の前に…

「貴方が立花京哉かしら？」

スキマ妖怪の八雲紫が居るんです！！

イヤツフううううう！

「聞いているの？」

おっと…平常心、平常心、平常心…Hey！Joshin！

「ああ…すまない、いきなり出てきたしその…聞いていたのより美人だったから」

よくネットでバハア呼ばわりされてるけど結構美人さんだよ

「あら、ありがとう。ところで聞いてたってどういう事かしら？」

ヤバイ！ネットで知ってました、なんか言えねえ！

「いや、あの…そう！親戚が昔貴女のような美人さんを見たって聞いたから貴女が出てきた時にもしやと思って…」

全力で嘘です、ハイ。これで誤魔化せるか！？

「ふうん…まあいいわ」

行いいいたあああああああ！

「ところで貴方に来て欲しい所があるの」

「来て欲しい所？」

「ええ」

いーよいーよ！地獄以外ならどこでもいーよ！

「まあ… 大丈夫な場所なら」
「妥当ラインだよなこの台詞！」
「なら了承という訳で」

すかつ…

「え？」

ヒュー…

「嘘おおおおお！」

お、落ちてるううううう！

「後から行くわね」

うひゃあああああああ！

うひゃあああああああ！本物のスキマじゃまいか！テンション上がるううううう！… あつ！アオイ達忘れた！… どうしよう…

Side 行けなかった精霊陣

「京哉様あああああああ！」

「お兄ちゃあああああああん！」

「主iiiiiiii！」

「ダンナあああああああ！」

「京哉殿おおおおお！」

「きつ… 京哉… は、早く帰ってきなさいよおおおおお！／／／」

S i d e 落下している京哉

ひゃああうまい！　いいい！

「いてえっ！」

油断して落ちてたら着いてしまった…け…ケツが痛い…

「何処だここは…」

「ここはただの草原よ」

「へ…っておうい！」

「あらあら、良い感じに驚くわね♪」

ゆかりんに驚かされてしまった…Y a t t a n e !

「んでここで俺は何をすれば良いんだ？」

「まあちよつと待っててもうすぐで来るから」

誰が何しに来るんだ…まさかみよんな辻斬り剣士とかやまざな様とかユユサマとかはたまたまゆうかりん…まさかA Y A C H A N E !

「そっいえば名前は…」

「八雲　紫よ」

「ああ、よろしく八雲「ゆかりん」は？」

「ゆかりんって呼んで」

可愛いアダ名じゃまいか！

「じゃあゆかりんで。ハートとか居る？」

「それはもつと親密になつてからお願ひするわ」

この分だとビンボー巫女お！とか来るのかな？いやいや個人的にはやはりユユサマが来て欲しいしみよんな辻斬り剣士「いつてえ！」

とハッピーセットだな…うん

「いつてえ…相変わらず荒いんだよ紫！」

「あらごめんなさい龍二」

…え？あ、あるうゑ？

「か、海馬？」

海馬（？）が落ちてきたんだけど？

「くっそ…あれ？お前誰だ？」

「俺は立花京哉、ゆかりんに連れて来られた」

「へ…俺は青山龍二、デュエリストだ」

「龍二…！」

海馬に似た男、龍二が呼ばれた方を見ると…

「なん…だと…」

魔理沙、レミリア、フランドールが来た

「大丈夫だった龍二？」

「ああ、大丈夫だ」

「全く…紫には困ったものね」

「本当だぜ、んで…コイツは？」

魔理沙が俺を指差してきた…失礼D A Z E

「立花京哉、ゆかりんに落とされた奴」

「へ…情けない奴だな」

いや、いきなり開けられたら無理だから

「私は霧雨魔理沙、よろしくな」

「レミリア・スカーレットよ」

「フランドール・スカーレットだよ。ちなみに龍二の奥さん♪」

「あつ！フラン！私が奥さんだぜ！」

「何を言ってるの2人共、私に決まってるわ」

いきなり奥さん宣告した…い、イタイ…

「ところでゆかりん、俺と龍二を連れて来た理由は？」

「えっと…退屈だったから？」

なんというはた迷惑な妖怪なんだ…

「何か目的があるだろうが…」

「じゃあデュエルして頂戴。龍二を相手に京哉がどれだけ行けるか試したいのよ」

「構わないけど…デツキを忘れてしまった…乙…」

「なら私が用意するわ」

ゆかりんはスキマを開くと段ボールが2箱出てきた…ってこれ俺の部屋のカードじゃねえかよ！

「デッキが入って無いんだが…」

「余りから作って頂戴。デッキを取りたかったけど取れなかったのよ」

ゆかりんは扇子を口元でちよつと開き言った。絶対に嘘だな

「それ嘘だる紫」

「ホントよ」

「きつとただ面倒だっただけね」

「まあいいや。さつさと作るさ」

「禁止制限とかはどうする京哉」

「そうだな…そっちに合わせるよ龍二」こちとら作る方だから比較的に楽だし

「ならコレが禁止制限リストよ」

「ゆかりんどうも」

座り込みゆかりんから貰ったリストを見ていくか…強欲と施しが禁止だと…しかも早すぎた埋葬までが禁止…イレカエル禁止だど！？あり得ないいいい！ソサラが準制限！？地砕き、地割れ、闇の仮面が制限解除！？マジあり得ないいいい！

「何かアイツいろいろシヨック受けてるな」

「そんなに差があるのかしら？」

「きつと別の世界から来たんだろつ、服装もオシリスレッドだし」

「龍二、オシリスレッドって？」

「デュエルアカデミアって言う学校があつてな、その制服がランクによって別れてるんだ」

「へー、そんな学校があつたんだな」

「そのランクがオシリスレッド、ライイエロー、オベリスクブル」となつて居るんだ」

「じゃあ京哉は一番下つて訳ね」

「それなら龍二が楽勝で勝てるね」

「いや、レッドでもめちゃくちや強い生徒とか居るんだ。京哉がどれくらい強いかわかった訳じゃ無いからな」

「でもあの様子じゃ決まった様なものだぜ？」

「るー…」

「諦めなさい京哉」

ゆかりんが俺の肩に手を置き慰めてくれてる…優しいなあゆかりん…

「そうだな…そうしよう…」

うう…さらばカエルデッキ…

少年デッキ制作中…

「やっと半分だ…」

ラスト20枚だなあ

「きよつ、京哉！これ…余って無いか？」

そういつて龍二が出て来たカードは封印の黄金櫃。最近海馬が使いにいくと言って効果を変更したんだっけ（海馬権限とペガサスによりOCG効果に変更）

「ああ良いよ。結構あったし」

「サンキュー京哉！」

黄金櫃たしか15枚ぐらいあったような気がするし…

「そんなに必要だったのか？」

「ああ！俺の所じゃ限定で結構な値段がしたからさ…いやあ良かった！」

へ…やっぱり俺と龍二の世界とは全然違うんだな

「京哉！私はこれにいたくぜ！」

「ああ良いよ」

魔理紗は…黒の魔法神官か

「私はこれを貰うわ」

「それも構わないよ」

レミリアが出してきたカードはダークネフティス

「じゃあ京哉！私はこれ！」

「問題無いよ」

フランはクリスティアを出してきた

「しかし大量にあるな京哉のカードって」

「まあ勿体無いからレッドやイエローの奴に譲ったりトレードしたり出来ない子供達に送ったりしてるからな」

「ちなみに今までどれくらい送ったんだ？」

「んゝ1000万は越えてるな」

「よくそんなにレシピがあるわね…」

「まあインスピレーションが大半だけど」

「でも京哉は今まで作ってきたデッキを紙に書いて置いてるわ」

ゆかりんが紙に書いている今までのデッキレシピが書いている手帳を取り出した…って！

「ゆかりん止めい！」

「あら、こんなにたくさんのデッキレシピから私のデッキくらい選ばせて頂戴」

む…なら仕方ないが…

「んゝこの次元剣闘獣は面白そうね」

「ああ、あれはかなり強かったなあ…剣闘獣の特性がデッキに返してが多いからモンスターはあんまり墓地去らないんだ」

「私は裂け目に注目しただけよ」

「さいですか…」

ゆかりん結構酷い…まあそういう着眼点は良いと思うようん

「でも特性も解ったわ、ありがとう京哉」

「どうも。さて、作るかな」

後半分だから頑張りましょうかね

超番外編 スキマに落とされた決闘者 パート1（後書き）

此度はStar Dust先生の小説、『遊戯王デュエルモンスターズ〜決闘者と理想郷〜』のコラボです！

この小説も面白いので是非ご覧下さい！

また葦切先生の小説でもこの小説とコラボをさせて頂きました！
そちらもご覧下さい！

超番外編 スキマに落とされた決闘者 (前書き)

デュエルシーンです！

事前に謝ろう…Star Dust先生すみません…

結果はこうです…ではどうぞ！

超番外編 スキマに落とされた決闘者

「ようやく出来た…」

はあ…ようやくだったなあ…ゆかりんのデッキと平行して作ってたからなあ…疲れた訳じゃ無いようん

「ゆかりん出来たぜ」

「あらありがと」

「それじゃ早速しようぜ京哉」

「そうだな」

さてと…あ、デュエルディスクも忘れた

「ゆかりん、ディスクも頼む」

「勿論あるわよ」

そう言つてゆかりんは俺のディスクを取り出した

「サンキュ」

「おつ、龍二と京哉のデュエルが始まるぜ!」

「まあ龍二が勝つわね」

「龍二頑張れ!」

ディスクにはめてつと、龍二はどんなデッキは何だろうな

「デュエル!!」

京哉LP4000

龍二LP4000

「俺のターン!ドロ!」

あ…先攻取られた

「仮面竜を守備表示で召喚!カードを1枚伏せてターン終了!」

仮面竜 守1200

「俺のターン！ドロー！」

龍二は…ドラゴンデッキか？

「磁石の戦士αを召喚！」

磁石の戦士α 攻1400

「とりあえず殴っておくか、磁石の戦士αで攻撃！」

伏せカードは発動するのか？

「仮面竜の効果発動！デッキから攻撃力1500以下のドラゴン族を特殊召喚する！俺は再び仮面竜を特殊召喚！」

「ならカードを2枚伏せてターン終了」

「俺のターン、ドロー！」

ドラゴンデッキならまずアレがいてもおかしくは無いが…

「仮面竜を除外して手札からレッドアイズダークネスメタルドラゴンを特殊召喚！」

レッドアイズダークネスメタルドラゴン 攻2800

うわぁ… やっぱり入ってたか… 前から思っていたけどコイツ制限に行くかも知れないな…

「レッドアイズダークネスメタルドラゴンの効果発動！…長いからレダメだ！1ターンに1度手札または墓地からドラゴン族を特殊召喚する！」

これこれ、これがとてつもなく強すぎる

「俺は手札から青眼の白竜を特殊召喚！」

青眼の白龍 攻3000

「更に手札から滅雷龍の誕生を発動！青眼の白龍を墓地に送りデッ

キ、手札から青眼の雷龍を特殊召喚する！デッキに眠りし我が僕よ！今こそ現れる！青眼の雷龍特殊召喚！」

青眼の雷龍 攻3500

す…すげえ…これが龍二のエース！

「青眼の雷龍の効果発動！1ターンに1度フィールド上のカードを1枚破壊する！俺は左側の伏せカードを破壊！」

「伏せカード発動！ホーリーライフバリア！手札を1枚をコストにこのターンの破壊とダメージを無効にする！」

「ちっ、ならターン終了」

危ねえ…しかしあの青眼は強いなあ…

「俺のターン、ドロー！」

よし、来たか！これでパーツは揃った

「俺はフィールドの磁石の戦士αと手札の磁石の戦士β、磁石の戦士γを墓地に送り合体させる！磁石の戦士、エルゴフォーム！」

磁石の戦士達はバラバラになり合体を始めた

「エルゴフォーム？」

「そう言ったらかつこいいじゃん。現れる！磁石の戦士マグネット・バルキリオン！」

磁石の戦士マグネット・バルキリオン 攻3500

「くっ、レダメを越えた！」

「行くぜ！レダメに攻撃！マグネットセイバー！」

マグネット・バルキリオンが斬りかかった

「くっ！」

龍二LP4000↓3300

「ターン終了！」

「俺のターン！ドロー！青眼の雷龍の効果発動！マグネット・バルキリオンを破壊！」

「今だ！伏せカード発動！マグネット・フォース！このターン岩石族または機械族への魔法、罫、モンスター効果の対象をフィールド上のモンスターに変更する！効果対象を青眼の雷龍に変更する！」

「くっ！青眼の雷龍が…」

このカードは遊戯が神を破ったカードでもある。話には聞いてたけど強いなあ…これ

「なら…俺は永続魔法、未来融合フューチャーフュージョンを発動！デッキから融合素材を墓地に送り2ターン後に特殊召喚する！俺はF・G・Dを選択、ドラゴンを5体墓地に送る」

これなんだよ…龍二の世界じゃ装備魔法じゃ無かったんだ…びつくりしたよ。送ったのは…青眼2枚、ミラーージュ、アックスドラゴ2枚か

「更に魔法カード龍の鏡を発動！墓地の青眼の白龍を3枚除外して現れる！青眼の究極竜！」

青眼の究極竜 攻4500

「行くぜ！青眼の究極竜で攻撃！アルティメットバーストお！」

「うぐあっ！」京哉LP4000↓3000

「ターン終了だ」

「良いぞ龍二！」

「その調子よ」

「頑張つて龍二！」

「おう！」

くっ…やるなあ…流石社長似の姿だし社長似の青眼デッキだ…

「苦戦してるわね京哉」

「まあね、だけどここからだぜ」

「期待してるわ」

ゆかりんからも応援貰ったし、勝てるか？

「俺のターン、ドロー！」

引いたカードは…壺の中の魔導書！

「俺は手札から壺の中の魔導書を発動！お互い3枚ドロー！」

「ドロー！」

む…これの引きは行ける！

「俺は手札からおろかな埋葬を発動！デッキからモンスターを1体墓地に送る！俺はアステカの石像を墓地へ！そしてカードを伏せ手札から天よりの宝札を発動！互いはカードを6枚になるまでドローする！6枚ドロー！」

このカードは龍二の所と効果が違ってたどつするか話した結果俺側の効果が適用されたんだ

「俺は3枚だ」

「ドロー！」

よし、読み通りの手札だ！

「更に魔法カード手札抹殺！お互い手札を捨て、捨てた枚数をドロイする！」

「手札交換！？」

「ドロー！」

「まだまだあ！速攻魔法発動！手札断札！お互い手札を2枚捨て2枚ドロイする！」

「くっ…また手札交換…」

「ドロー！」

「もう1発手札断札！」

「ええ！？嘘だろ！？」

「手札増強からの手札交換多すぎよ…」

「頑張つて龍二！」

ここまで引きが良いのは俺も焦ったよ…

「ドロー！」

よし、これだ！これ待っていた！

「更に魔法カード墓穴の道連れを発動！お互い手札を確認し1枚選択して捨て1枚ドローする！」

「くっ…それか…」

龍二の手札は…爆裂疾風弾、死者蘇生、龍の鏡、マテリアルドラゴン、アームドドラゴンLV3…

「俺は龍の鏡を選択！」

「解った…そっちの手札は…」

俺の手札は…死者蘇生とメガロツクドラゴン

「…俺はメガロツクドラゴンを選択する」

まあ…そうだろうな…

「ドロー！」

よし来たか、もう1枚！

「俺は墓地の磁石の戦士α、β、γの3枚にアステカの石像、激昂のムカムカ2枚にゴルゴロ3枚を除外！現れる！メガロツクドラゴン！」

メガロツクドラゴン 攻？

「くっ…さっき引いたのか…」

「まあな、もう1枚引いたのはびっくりしたよ。メガロツクドラゴンは除外したモンスター。攻撃力×700。俺は9枚除外した為…」

「攻撃力は…6300！」

メガロツクドラゴン 攻6300

「更に死者蘇生を発動！墓地のマグネット・バルキリオンを特殊召喚！一度召喚したから条件は満たしている！」

「くっ…負けた…かな」

「この攻撃が通ればね。メガロツクドラゴンで青眼の究極竜を攻撃

「ロックブラスト！」
「くううううう！」

龍二LP3300↓1500

「これでフィニッシュ！マグネット・バルキリオンでダイレクトアタック！エルゴ…エンド！」

「ぐああああああ！」

龍二LP1500↓0

「ガッチャ！楽しいデュエルだったぜ！」
おつと…思わず言っちゃったよ

「くそ…負けたかあ」

「残念だったな龍二」

「まあ後は任せなさい」

「私達が敵討ちするね」

…え？ドコト…？

「さて…龍二にはデュエルで勝負したが…」

「私達には弾幕で勝負よ…」

「龍二の為にも…勝たせてもらうね」

おいしいいいいい！何で弾幕なんだよおおおおお！

「ゆかりん助けて！！」

「流石に3人相手はお断りするわ。それに私今から龍二とデュエルするから」

うわああああああん！ゆかりんのバガあああああ！

「ちくしよおおおおお！」

「さあ…」

「私達と…」

「勝負しよ…」

前にはゆかりんの顔。膝枕か

「ああ、問題無い…龍二達は？」

「帰ったわ、反省とあの娘達の説教とリベンジを言って帰ったわ」
「リベンジか…また俺も龍二とやりたいな」

「そうか…そろそろ起きるか」

「あら残念」

さて、もう帰らないとアイツ等が心配するな

「俺も帰るよゆかりん」

「解ったわ、またいつか会いましょ」

ゆかりんはスキマを開いてくれた

「ああ、またな」

「暇なら遊びに行くわね」

「毎日は勘弁してくれよ？それじゃな」

「ええ」

俺はスキマに入りレッド寮に戻った

まあ…その帰った後アオイ達から抱きしめられたな

超番外編 スキマに落とされた決闘者（後書き）

これでコラボを終了します

まだまだコラボをして欲しい方がいれば言ってください、此方は大歓迎です

それでは！

第六十五話 それぞれの心（前書き）

はい！本編の続きです！

ホントの時間軸ではヘルカイザーは既になつて居ますが…そこは二次小説くおりにという事で流して下さい…ではどうぞ！

第六十五話 それぞれの心

「ようカイザー」

「待たせたな京哉」

久しぶりにカイザーに会った、うゝん…感じが前よりは…ちよつとな

「あんまり待たせるのも悪いし…早く始めようぜ」

「ああ」

俺達はデュエルディスクを起動した

「「デュエル!!」」

S i d e アオイ

日にちは今日の今朝、アリスはようやくデッキを完成しました

「ありがとうアオイさん!」

「いえ、私はアドバイスをしたまでです」

京哉様のデュエル相手とかやっていますし私自身やりますので構成は理解しています

「それではアリス、氷の女王様に挑みましょう」

「はい!お兄ちゃんと居るために必ず勝つ!」

京哉様…アリスを応援してして下さい

S i d e 京哉

京哉LP4000

カイザーLP4000

「俺から貰う、ドロー！」

何…？カイザーが先攻をとった？

「サイバーエスパーを守備表示で召喚、カードを2枚伏せてターン終了だ」

サイバーエスパー 守1800

…サイバーエスパーを守備表示…？何か弱腰だな…

「俺のターンドロー！」

1800か…今俺の手札にはイザナミか…なら攻めるか

「戦姫―イザナミを召喚！」

戦姫―イザナミ 攻1900

「久しぶりに活躍出来そうですわ」

頑張ってくれよ姫

「行くぜカイザー！イザナミでサイバーエスパーを攻撃！」

「行きますわよ！はあっ！」

「くっ…伏せカード発動！バイロッドサクリファイス！手札からサイバーオーガを特殊召喚！」

サイバーオーガ 攻1900

「イザナミの効果で破壊したモンスターのレベル×200の攻撃力が上がる！カードを2枚伏せてターン終了！」

戦姫―イザナミ 攻1900↓2700

「くっ…俺のターン、ドロー！」
…次はどう来るんだカイザー？

S i d e アリス

「来ましたねアリス…」

私は今お母様の前にいる…女王の娘や後継者としてではなく…お兄ちゃんと同じデュエリストとして！

「約束は守ってねお母様」

「解ってるわ…それじゃ始めましょう…」

「「デュエル！」」

アリスLP4000

氷の女王LP4000

「私の先攻！ドロー！」

先攻は貰ったよ！

「モンスターをセットしてカードを2枚セットしてターン終了！」

「私のターンね、ドロー。私はコールドエンチャターを召喚するわ」

コールドエンチャター 攻1600

「そしてコールドエンチャターの効果発動、手札を1枚捨ててフィールド上のモンスターにアイスカウンターを乗せる。私は2枚捨

てコールドエンチャンターに2つ乗せるわ。そしてコールドエンチャンターの攻撃力はフィールド上のアイスカウンター1つにつき攻撃力は300ポイント上がるわ」

アイスカウンター 2

コールドエンチャンター 攻1600 ↓ 2200

「いきなり… 上級クラス…」

「行くわよ、コールドエンチャンターでセットモンスターに攻撃よ」
くっ… セットしていた水晶の占い師が… けど！

「水晶の占い師の効果発動！ デッキの1から2枚ドローしてそのうちの1枚を手札に加えて1枚はデッキの1番下に送る！ ドロー！」

引いたカードは… 私自身と… 死者蘇生…

「私は死者蘇生を手札に加える！」

「私はカードを伏せてターン終了よ」

まだ始まったばかり… 倒す機会はまだあるんだ！

Side 京哉

「俺のターン、ドロー！」

… カイザー？ どうした… 攻めに欠けるぞ…

「くっ… サイバーオーガを守備表示に変更しカードを2枚伏せてターン終了だ…」

「俺のターン、ドロー」

… あの伏せカード… 試してみようか

「イザナミでサイバーオーガを攻撃！」

『はあっ！』

「伏せカード発動！聖なるバリアミラーフォース！」

「甘い！伏せカード発動！王宮のお触れ！畏カードの効果を無効！」

「ぐ……」

どうしたカイザー……何故こんなに……

「イザナミの効果で攻撃力が更に上がる」

戦姫―イザナミ 攻2500↓3500

「そして手札から大嵐を発動！フィールド上の魔法、畏を破壊する！」

さてカイザー……フィールドはから空きだぜ？

S i d e アリス

「私のターン、ドロー！」

引いたカードは……スクリーチ……コレじゃダメだ

「モンスターをセットしてターン終了！」

「私のターン、ドロー」

セットしたモンスターはペンギンナイトメア、この子さえ守りきつたら私にまだ勝機はある！

「伏せカード発動、極寒の氷柱。自分のフィールドに氷の柱を出現させ更に魂をふきこむ彫刻家を発動。極寒の氷柱で出した氷の柱を自分フィールド上のモンスター1体と同じ姿のモンスターを1体作り出すわ。更に追加でもう1枚魂をふきこむ彫刻家を発動、2体のコールドエンチャンターを作る」

コールドエンチャンター
氷の柱

攻0

「そして作り出したコールドエンチャントを生け贄に私自身を召喚」

氷の女王 攻2900

「お母様の…切札…」

「アリス、行くわよ私自身でセットモンスターに攻撃。コールドブリザード！」

「伏せカード発動！和睦の使者！このターン戦闘破壊はされずダメージ受けない！そしてセットモンスターはペンギンナイトメア！このモンスターがリバーシした時相手フィールド上のカードを手札に戻す！」

どうしよう…やっぱりここは氷の女王を…でも…

「コールドエンチャントを手札に戻す！」

「私のターンは終了よ…アリス、このままだと私に勝てないわ」

「解らないよお母様、私は今までお兄ちゃんのデュエルを間近で見ってきた。お兄ちゃんはどんな絶望的な状況でも勝ったもん」

「彼と貴女は違うわ…」

「でもお兄ちゃんは信じてる。私達を信じてくれる。だから私は…私達はその期待に答える！」

Side京哉

「俺の…ターン…」

カイザーの手が止まった…

「…カイザー？」

「ダメだ…俺は…勝てない…」

「どうしたんだカイザー？らしくないよ」

「俺の手札、場は0…お前の場には上級レベルのモンスター…俺には勝てはしない…」

「カイザー、自分のデッキを信じないと」

「…ダメなんだ…！」

仕方ない…俺が今思う事を言うか

「丸藤亮！てめえはその程度だったのか！？」

「…京哉…」

「俺はあの卒業デュエルの日、アンタとのデュエルは楽しかった！誰よりも俺は楽しめた！それはアンタがデッキを信賴しているからこそだ！」

「だが…俺は…」

「信じてる仲間で負ける事を恐れてんじゃねえ！」

「っ！」

「俺はコイツ等で何度も敗北を経験してきた！だけど俺はそんな事でも楽しめた！それは信じているからだ！今もそうだ！そしてこれから俺は信じて突き進む！」

『京哉…貴方は…』

「…俺は…」

「勝つことだけを求めるな！勝利をリスペクトするな！アンタが目指す本当のリスペクトは何だよ！？」

「俺が…本当にしたいのは…相手をリスペクトするデュエル…」

「ならまずは自分のカードを…仲間を信じろよ！アンタしかサイバ―達は扱えない！誰よりもアンタが一番扱えるんだ！だから信じろよ！カードはアンタを信じてるんだ！そして全力で戦うからこそそのリスペクトだろ…！だから見せてくれよ！カイザーの全力を…！」

「…俺のターン…」

デッキの上に手をやりカイザーは目を閉じ…

「ドロー！」

カードを引いた

「…京哉、感謝する…お前の一言が無ければ俺はコイツを引かなかった…」

何を引いたんだ…？

「俺は魔法カード天よりの宝札を発動！お互いは手札が6枚になるようにドローする！」

ここでそのカードかあ…

「流石だよカイザー…この状況でそれを引くなんて」

「京哉の言葉があつてこそだ」

カイザーは6枚、俺は3枚ドロー。さて、ここからが勝負だカイザー！！

S i d e アリス

「私のターン！ドロー！」

来た！この子だ！

「私はヒゲアンコウを召喚！」

ヒゲアンコウ 攻1500

「更に二重召喚を発動！このターン2度通常召喚が出来る！」

「壁モンスターを増やす気？」

「違うよ！スクリーチを召喚！」

スクリーチ 攻1500

ここから勝負！行くよ、お母様！

第六十五話 それぞれの心（後書き）

ようやくテストが終わった…。どうみても死亡フラグビンビンですが。
もう1、2話書いてまた番外編です…。すみません、多くて
それではまた！

第六十六話 絆と決着と取り戻すべきもの（前書き）

決着です！

最近忙しくて忙しくて…

ではどうぞー！

第六十六話 絆と決着と取り戻すべきもの

カイザーはようやくエンジンがかかったみたいだな、ここからが見せ場だ！

「更に魔法カード発動！パワーボンド！手札又は自分フィールド上のモンスターを融合し攻撃力を倍にする！手札のサイバードラゴン3枚を融合！こい！サイバーエンドドラゴン！」

サイバーエンドドラゴン 攻4000 ↓ 8000

「流石カイザー…という訳だな…」

「行くぞ京哉！」

「こいカイザー！」

「サイバーエンドドラゴンで攻撃！エターナルエヴォリューションバーストォ！」

「京哉！」

わかってるつての姫！

「更に速攻魔法リミッター解除！自分フィールド上の機械族モンスターの攻撃力を全て倍にする！」

サイバーエンドドラゴン 攻8000 ↓ 16000

「カイザー！これで終幕と行こうぜ！手札からオネストを捨てて発動！追加でもう1枚！」

イザナミ 攻3700 ↓ 19700 ↓ 35700

「くっ！ここまで…か…」

「カイザー！」

「っ！？」

「このデュエルは換算しない！次やるときは必ず勝つ！」

「ああ！望むところだ！俺も負けはしない！」

カイザーLP4000↓0

Sideアリス

「行くよお母様！スクリーチで氷の女王に攻撃！」

スクリーチはお母様に対して飛んだんだけど杖からの波動で消滅しちゃった…ごめんね…

アリスLP4000↓2800

「自爆…？何の為に…それにダメージが…」

「ペンギンナイトメアの効果は手札に返すだけじゃ無く水属性モンスターへの攻撃を200アップするんだ！そしてスクリーチの犠牲は無駄にはしないよ！スクリーチの効果発動！デッキから水属性モンスターを2枚墓地に送る！私は青氷の白夜龍と私自身を墓地に！」
これで出来た！私が勝つ方法を！

「伏せカード発動！リビンググデッドの呼び声！」

「っ！まさか…」

「そのまさかだよ！青氷の白夜龍を墓地から特殊召喚！」

青氷の白夜龍 攻3000↓3200

「…これがアリスの…」

「私の切札であって…私とお兄ちゃんとの絆！」

アオイさんが私に渡してくれたんだ…京哉様からのプレゼントって…だから私の絆だよ！」

「行くよ！青氷の白夜龍で氷の女王に攻撃！アイスバースト！」

「うっ！氷の女王の効果は今使えないわね…」

氷の女王LP4000↓3700

「そしてヒゲアンコウで攻撃！」

ヒゲアンコウ 攻1500↓1700

「くっ…」

氷の女王LP3700↓2000

「ターン終了！」

「私のターン…やるわねアリス。私はここまで押されるとは思わなかったわ」

「諦めなさい心はお兄ちゃんから学んだものだよ」

お兄ちゃんからはいろんなのを学んだ。だから私はお兄ちゃんとまだ居たいんだ

「でも貴女は私に勝てるかしら？私は命削りの宝札を発動。手札が5枚になるようにドロし5ターン後に墓地に送る」

そしてお母様は4枚カードを引いた

「そしてコールドエンチャターを召喚、効果を使い手札を1枚捨てペンギンナイトメアにアイスカウンターを1つ乗せる。そして魔法カード洗脳ブレインコントロールを発動、ヒゲアンコウのコントロールを得る。ヒゲアンコウとそして生け贄に捧げてアイスブリザ

ードマスターを特殊召喚するわ」

アイスブリザードマスター 攻2500

氷の女王LP2000↓1200

「更にアイスブリザードマスターの効果発動、1ターンに1度フィールド上のモンスターにアイスカウンターを乗せる事ができる」

攻撃力は青氷の白夜龍の方が上なのに…何でお母様は…

「そしてアイスブリザードマスターのもう1つの効果を発動。このカードを生け贄にしフィールド上のアイスカウンターが乗っているモンスターを破壊する」

「そ、それじゃあ…」

「青氷の白夜龍とペンギンナイトメアは破壊」

くうっ！青氷の白夜龍が…ごめんねお兄ちゃん…

「更に魔法カード強欲な壺を発動、カードを2枚ドロ。早すぎた埋葬を発動、アイスブリザードマスターを蘇生するわ」

氷の女王LP1200↓400

「アイスブリザードマスターでダイレクトアタック」

「くうっ！」

アリスLP2800↓300

「カードを1枚伏せてターン終了」

「私のターン！ドロ！」

私の手札には死者蘇生がある…でもあの伏せカード…そして手札にはモンスターがいない…これなら！

「私は強欲な壺を発動！」

このドロに私は賭ける！お願いお兄ちゃん…力を貸して！

「ドロー！」

引いたカードは…死者転生と…2枚目のペンギンナイトメア！

「私はペンギンナイトメアを攻撃表示で召喚！」

ペンギンナイトメア 攻900 ↓ 1100

「そして魔法カード死者転生を発動！手札を1枚捨てて墓地から私自身を手札に加える！そして二重召喚発動！もう1体通常召喚出来る！そして死者蘇生を発動！」

「青氷の白夜龍かしら？」

「違うよ…私は水晶の占い師を特殊召喚！そして水晶の占い師を生け贄に私自身を召喚！」

ブリザードプリンセス 攻2800 ↓ 3000

「ブリザードプリンセスは魔法使い1体で出てくるモンスター…」

「そして召喚ターン相手は魔法、罫を発動できない！行くよ！私自身でアイスブリザードマスターを攻撃！アイスクラッシュハンマー！」

アイスブリザードマスターを…お母様に勝った…やったよ…お兄ちゃん！

氷の女王LP400 ↓ 0

「…アリス…約束ね」

「お母様…」

「彼なら大丈夫と思うわ、頑張りなさいアリス」

「はい！」

「後ライバル多いみたいだからそつちも頑張りなさい」

…お母様には隠し事は出来ないような気がしてきた…

Side 京哉

「京哉、感謝する。俺はもう大丈夫だ」

「良かったよカイザー。次のデュエル楽しみにしているからな
良かった良かった。これでカイザーは勝ち上げれるな

「しかしカイザー、人が全然居ないんだが知らないか？」

ちよつとカイザーに聞いてみた。誰も居ないからびつくりしたよ…
まあ光の何とかが数人居たけどな

「…確か修学旅行だ…吹雪が言っていたな」

…は？今カイザーは何だつて…？

「すまんカイザー…もう1度頼む…」

「修学旅行だ」

…え、何それ？嘘だよ。嘘だよ。嘘だよ。ってよバーニィ！

「ホントかカイザー…」

「ああ」

ホントだった…こ、粉バナナ！（これは罠だ）行きたかった…修学
旅行…

「鮫島校長から京哉を連れて来るよう頼まれているから聞いている
ものだと思うたが…」

「いや、連れてくれるなら…大丈夫なんだが…用意の前に少し待つ
てくれないか？」

「どうしたんだ？」

「まだやらなきゃいけないからな…出てきたらどうだ凜？いや、凜
の身体を借りている奴」

そう言つて灯台の方を見ると…

「へえ…気づいていたんだ…流石京哉君」

凜が姿を表した…多分数人居たのはこれが原因だな

「御託はいい、さつさとやるぞ…凜は返して貰う」

「解ってるよ京哉君」

俺達はディスクを起動させた

「京哉！」

「カイザー、これは口外しないでくれ…頼む」

「ああ…だが負けるなよ」

「解ってる…」

ようやくだ…必ず取り戻す…待っていてくれ…凜！

第六十六話 絆と決着と取り戻すべきもの（後書き）

どうでしたか？

次はコラボをして黒凜とのデュエルです！

申し訳ありませんが竜王先生、もう少しお待ち下さい
そして蛇先生、まだまだですのでお待ち下さい…

では！

超番外編 出会いとモンスターと決闘とときどき魔法（前書き）

今回は竜王先生の作品、闇を狩る少年とのコラボです！

今回も主人公のなぞの能力が発揮します！

ではどうぞ！

超番外編 出会いとモンスターと決闘とときどき魔法

は…今日も平和だねえ…

「ご機嫌よう京哉」

…訂正。全然平和じゃ無くなっちゃった

「ゆかりん、何か用か？」

「ええ、また貴方に会ってもらいたい人が居るの」

「そんな事は絶対にさせません！」

「お兄ちゃんは絶対連れて行かせないもん！」

「そうですわ！」

アオイ、アリス、姫が実体化し俺に抱きついた…つか狭い！レッ
ド寮の俺の部屋だぞ！

「うゝん…そうねゝ…もし着いてきてくれたら事が済み次第京哉と
2人きりでデート…って言うのはどうかしら？」

「…京哉様と…」

「…2人きりで…」

「…デート…」

3人の顔が赤くなっちゃった。…そんなに俺とのデートって恥ずか
しいのか？別に一緒に出掛けるだけじゃん

「でも先着1名だから早くしないと盗られるわねゝ」

その言葉を聞いたとたん…3人は離れて

「必ず私が行きます！」

「お兄ちゃんとは私が行くの！」

「いいえ！私ですわ！」

各々の得物を取り出した…って！

「待て待て待て！お前等狭い中で暴れようとするな！」

俺はそれぞれに手刀をかました。手加減してないよ？まず俺の格闘
技に手刀なんか無いから元々威力が低い

「いたっ…すみません…」

「お兄ちゃん痛い…」

「…うう…」

…そんなに痛かったかな？罪悪感出てきた…

「とりあえず別の何かで決めろよ…」

「ならじゃんけんです！3回先取した人が…」

「お兄ちゃんとデートが出来るって訳で」

「…それじゃ…いきますわよ…」

「「「さいしょはグー！じゃんけんはい！あいこではい！あいこではい！」」」

…先取って負けたほうか？やっぱり俺と出掛けるのが恥ずかしいのか…まあ出掛けて食べ物とか聞いてくる男なんか恥ずかしいよなあ
「それじゃ行きましょ京哉」

「え？でも…」

「いいからいいから行きましょ」

「えっと…いいのかな…」

そして到着…つと。今回は森…かな？

「ゆかりん、ここどこ…ってあれ？」

ゆかりんが居ない…誰かまた呼んだのか？

『ダンナ、どうします？』

「アキト、どうしようか…まあ暇ならPSPでモンハン3rdやるか」

『そりや良い案ですぜダンナ』

アキトは実体化した。ちなみに何故出来るかと言うと信頼度によるらしく信頼度が高ければ高い程実体時間が長いらしい。俺の精霊達の場合は1年は持つって。しかも実体化しても食事等はしたいときにする為実体時間中丸々何も飲まず食わずで生きれるらしい。時間

がたつと自然にカードに戻って数日カードにいなきやいけないがこれでも信頼度で変わるって。俺の場合は1時間だって…何このチータ
ー…マジサーセンw

「何やるよ？」

「ジ。オ。ガ2頭にしましょうぜ。これでようやくHR6なんで」

「あゝちようどジ。オ。ガ行きたかったし行くか」

今日こそ碧玉ゲットだぜ！

「ば…バカな…」

こ、碧玉0だと…これで15回目だぞ…

「ダ、ダンナ…すまねえ…」

対してアキトは15回全て出現…だと…

「こっ…粉バナナ…」

ちくせう…陰謀か…陰謀なのか！？力。コンめ！！

「と、とりあえずダンナ…もう1回…」

『ギャオオオオオ！』

もう1回クエストに行こうとしていたら急に咆哮が聞こえた

「なんだ今の咆哮！？」

「ダンナ！ありやソリッドビジョンじゃねえ！」

咆哮が聞こえた方を見ると1匹の緑の恐竜が現れた…まさかあれは…

「イ。ル。。。だと！？」

「なんでこんな所にイビ。。。ヨーが！？てかマジ居たのか！？」

「とりあえず構えるぞアキト！」

「了解だぜダンナ！」

イ。ルジ。。。に喰われるのだけは勘弁だ！早速この切れ味、試させてもらう！

「うおりやあああああああ！」

。ビ。ジョーの顔面に1発入れたら即部位破壊！社長…これ威力高

過ぎな…

「食らいやがれや！」

アキトが足下に2発入れて倒れる…このイ。ル。ヨ。ー弱くね？

「行くぞアキト！」

「了解だダンナ！」

切り上げ切り落とし顔面突き刺しいい！

「はあああああああ！」

最後にアキトが胴にめった切り！

『ギャオオオオ…』

イビ。ジ。ーはくたばった

「これで終わりかな…というかデュエルディスクが血で汚れて無いのがよく解らん…」

「ダンナなら打撃だけで行けたんじゃ…？」

…これなら行けそうだったな…

「とりあえずさ…これどうしようか？」

「私に任せて」

ゆかりんがスキマから現れた

「今の今まで何してたんだゆかりん？」

「ちよつともう1人が見つからなくてね…言わなかったの反省してるからその殺気を込めた笑顔は止めて頂戴」

殺気？出してないよ。ただ笑顔で迫っていったただだよ？怒ってないよ？イ。。。ヨ。ーが居るの聞いてないただだよ

「事後処理は任せなさい…街の方に送っておくわ」

そう言ってイ。ル。ヨ。ーがスキマに落ちた…まあいいか

「ところで会ってもらいたい人ってのは？」

「んゝまだ居ないのかしら？探してくるわ」

ゆかりんがスキマに入って行った…まあ言わなかったけど殺気がビンビン感じるんだけど…その瞬間…

ヒュン！

「よつと！」

細長い何かが飛んできたが軽く回避した…槍か？

「ほう…私のレーヴァテインを避けるとはな」

レーヴァテインだったのか…確か…神話で…誰だったかな…しかもレーヴァテインって形状が不明だったはずだけど

「ダンナ！大丈夫か！？」

「ああ、問題無い」

「人間にしてはやるではないか」

そこへ現れたのは…レミリアの亜種だった

「亜種では無いわ！」

「人の心を読むな」

「…まあ良い。先程のモンスターを倒した腕前見せてもらおうか」

そいつは1本の剣を出現させた。レーヴァテインを使えるって事は神話の武器を複製出来るって事だ。つまりあの剣はかの有名なエクスカリバー又はその元となるカリバーンの可能性がある

「ダンナ！俺に任せてくれ！」

「貴様には用は無い。その男に用がある」

「ダンナには手出しはさせるか！」

いや、アイツはアキトと一緒に倒したんだが…

「ええっと…とりあえずアキト、剣をしまってください」

「ダンナ！だけど…」

「大丈夫大丈夫、多分あつちも收拾がつくって」

「ジャバウォック！何してるんだよ！？」

「りよ、竜馬！これはその…」

「とりあえず謝って！すみません！ホントすみません！」

1人の少年が現れた…推定年齢は9歳くらいだな

「ああいいよ。そっちのレミリア亜種が満足してからでいいから」

「我はレミリア亜種では無いわ！」

「とりあえず謝って！」

…この少年…なかなかやるようだな。なんというか…そんな感じがする

「むむむ…ではデュエルだ！竜馬とデュエルで勝てば謝ろう！」

「なんでそんなに上からなんだよ！」

デュエルか…この少年は竜馬って言うみたいだな

「竜馬君、デュエルしようか。ちようど君も出来るらしいしね」

「ええ！？いいんですか！？」

「ああ、デュエルなら大歓迎さ」

竜馬君は多少戸惑ってはいたが…

「わかりました…やりましょう」

「オッケー、アキト」

「了解だダンナ」

アキトは実体化を終了しカードに戻って行った

「…カードの精霊…」

「どうかしたかい？」

「いっいいえ！何もありません！」

「そっか。あつ、俺は立花京哉よろしくな」

「俺は魔神竜馬です！」

うゝん…いい子だな。こういう子は将来が楽しみだな

「それじゃ始めようか」

俺はディスクをデュエルモード…簡単に言えば納刀だけだね。まあ

いいや、とりあえずなおしたって事で

「無々、能力発動。決闘^{デュエル}」

『わかりました、能力発動。決闘^{デュエル}』

そう竜馬君が言うつと機械音声が復唱し金色の腕環がデュエルディスクになった…何だあの便利機能は…

「分解してみたい…」

『ゾクっ！京哉さん物騒な事言わなかったですか？』

「…いや、言つて無いよ」

『そつ、そうですか…私は無々つて言います。よろしくお願いしますま

す
』

「ああよろしく」

あ、危なかった…分解して調べたい感を口に出してしまった…

「じゃ、始めましょう京哉さん！」

「楽しいデュエルにしよう、竜馬君！」

「「デュエル!!」」

超番外編 出会いとモンスターと決闘とときどき魔法（後書き）

これで前編は終了です

次は後編です

竜王先生の作品はなのは主体ですが他の原作もありますのでとても面白いので是非ご覧下さい！

超番外編　ときどき魔法で決闘大半（前書き）

事前に謝ります… 竜王先生、申し訳ありません…

後半のジャバウォックが本編と違うような気がします…

超番外編 ときどき魔法で決闘大半

京哉LP4000

竜馬LP4000

「俺から行きます！ドロー！」

先攻は竜馬君に取られた。竜馬君はどんなデッキだろうな

「BF―蒼炎のシュラを召喚！」

BF―蒼炎のシュラ 攻1800

ぶつ、ブラックフェザー！？聞いたこと無いカードだ！

「そして手札からBF―黒槍のブラストとチューナーモンスター、

BF―疾風のゲイルを特殊召喚！」

BF―黒槍のブラスト 攻1700

BF―疾風のゲイル 攻1300

チューナーだつて！？またシンクロ召喚が見れるのか！？ああ、わくわくしてきた！

「レベル4の蒼炎のシュラにレベル3疾風のゲイルをチューニング！」

竜馬君の言葉に疾風のゲイルと呼ばれるモンスターは輪を作りその輪の中にシュラと呼ばれるモンスターが入った

「黒き旋風よ、天空へ駆け上がる翼となれ！シンクロ召喚！BF―アーマードウィング！」

BF―アーマードウイング 攻2500

「すげえ！召喚から特殊召喚まで繋げてそこからシンクロ！すげえな！」

「ターン終了です」

「すげえ！すげえよ竜馬君！」

「ええと…BFはこういう性質なんで…」

「俺も負けらんねえ！俺のターン、ドロー！」

「この手札ならアキトが出せるな！」

「切り込み隊長を守備表示で召喚！効果でミスティックソードマンLV4を特殊召喚！」

切り込み隊長 守400

ミスティックソードマンLV4 攻1900

「行くぜ！ミスティックソードマンで黒槍のブラストを攻撃！」

「コイツでアキトを出させてもらう！」

「くっ…」

竜馬LP4000↓3800

「カードを1枚伏せてターン終了！そしてミスティックソードマンLV4を墓地に送りミスティックソードマンLV6を特殊召喚！出番だ、アキト！」

『了解だぜダンナ！』

ミスティックソードマンLV6 攻2300

「俺のターン、ドロー！」

「さあどう来る？竜馬君！」

「カードを2枚伏せてモンスターをセット、アーマードウイングで切り込み隊長を攻撃！ブラックハリケン！」

隊長が身を挺してアキトを守った…隊長おおおおお！…ごめん、心で叫びたかっただけ

「ターン終了です！」

「隊長の思いは無駄には出来ない！俺のターン！ドロー！」
引いたカードは…ふむ…これなら…

「モンスターをセットしてカードを1枚伏せて、アキトでセットモンスターを攻撃！」

『了解だぜダンナ！はあっ！』

セットモンスターは…そのまま破壊させてもらおうか！

「アキトの効果はセットモンスターをダメージ計算無しに破壊する！そしてその効果で破壊した時墓地に送らずデッキの一番上に置く！」

『リターンリバーさだぜ！』

…名前が微みょん…流石カス作者だ（俺は関係ない！）

「ドローが封じられた！？」

「ターン終了だ！」

「それならセットはしない！俺のターン、ドロー！俺はチューナーモンスター、エフェクトヴェーラーを召喚！」

エフェクトヴェーラー 攻0

チューナーモンスター！来るかシンクロ！？楽しみだ！

「レベル7のアーマードウイングにレベル1のエフェクトヴェーラーをチューニング！集いし願いが新たに輝く星となる！光差す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ、スターダストドラゴン！」

スターダストドラゴン 攻2500

まっ、眩しいドラゴンだ！目が、目があああ！

『ダンナ！ふざけてる場合じゃねえ！』

「…すまん、やりたかった」

「？まあいいや、行きます！スターダストドラゴンでアキトさんに攻撃！シユーティングソニック！」

「早速出てきて悪いがご退場願おうか！伏せカード発動！次元幽閉！」

「それは断りますよ！伏せカード発動！バスターモード！」

バスターモードだと！？また新しいカードか！？

「スターダストドラゴンをリリースしデッキからスターダストドラゴン／バスターを特殊召喚！」

スターダストドラゴン／バスター 攻3000

「す、ノバスター！？それに…姿が…」

後リリースってどういう事だ？

「行きます！スターダストドラゴン／バスターで攻撃します！アサルソニックバーン！」

くっ…そこまでのカードは予想外だったけど…

「ならそいつもご退場願おう！伏せカード発動！収縮！フィールド上のモンスター1体の元々の攻撃力を半分にする！対象は勿論スターダストドラゴン／バスター！」

「その瞬間スターダストドラゴン／バスターの効果発動！このカードをリリースする事で相手が発動した魔法、罫、モンスター効果を無効にする！ヴィクティムサンクチュアリ！」

スターダストドラゴン／バスターは光となって消えた…ってかそんな厄介な効果があったんだな…

「そしてカードを1枚伏せてターン終了です、この時自身の効果でリリースしたスターダストドラゴン／バスターを墓地から特殊召喚します」

はあ！？何その超絶チート能力！？

「くっそ…厄介過ぎるな」

「すみません…こういうカードなんで…」

「竜馬！あんまり謝る必要は無かるう！」

レミリア亜種が竜馬君に文句を言ってきた

「だからレミリア亜種では無い！」

「はいはい…それじゃ俺のターンだ！ドロー！」

どうする…どうやってあのモンスターを倒そうか…ん？リリース…
そつえば墓地に送りとは言って無い…という事は…よし、試してみるか！

「手札から装備魔法団結の力を発動！そして団結の力にチェーンし
永続異生け贄封じの仮面を発動！」

「くっ…」

どうする、チェーンで無効にするか？仮にしたとしてもセットモン
スターのメタモルポットを反転召喚すれば負けるよ…

「通します…」

「オッケー、そしてメタモルポットを反転召喚しお互い手札を捨て
5枚ドロー！」

よし、思ったよりも良い感じの手札だ

「更に団結の力によりアキトの攻撃力はアップする！」

ミスティックソードマンLV6 攻2300 ↓ 3900

「行くぞ、アキト！スターダストドラゴンノバスターを攻撃！虎牙
刃斬！」

『うおりやああああ！』

「…まだまだだな」

『…酷いぜダンナ』

「ううっ！」

竜馬LP3800↓2900

「スターダストドラゴンノバスターの効果発動！」

まだ効果があったのか！？

「このカードが破壊された時墓地からスターダストドラゴンを特殊召喚する！」

星屑の竜が帰ってきた…ホント厄介な奴だよ君は！

「カードを1枚伏せてターン終了だ」

やるべき事はやった…後はどう来る！？

「俺のターン！ドロー！京哉さん、この決闘俺の勝ちです！」

「そりゃ早計だぜ竜馬君！」

「見せますよ！俺は金華猫を召喚する！」

金華猫 攻400

「金華猫の効果発動！召喚、リバーズに成功した時墓地からレベル1モンスターを特殊召喚する！墓地からチューナーモンスター、救世竜セイヴァードラゴン特殊召喚！」

救世竜セイヴァードラゴン 攻0

「…まさかまた…」

「あるんですよシンクロが！レベル8のスターダストドラゴンにレベル1の金華猫、レベル1のセイヴァードラゴンをチューニング！まだあったのかよ！すっげえ楽しみだぜ！」

「集いし願いが新たな奇跡を照らし出す、光差す道となれ！シンクロ召喚、光来せよ！セイヴァースタードラゴン！」

セイヴァースタードラゴン 攻3800

うおおおお！スターダストの更なる進化形そして目が、目があああ
あ！

「これで終わりです！セイヴァースタードラゴンでメタモルポット
に攻撃！シューティングブラスターソニック！」

だが、メタモルポットは生かさせてもらう！

「伏せカード発動！聖なるバリアミラーフォース！」

「させません！伏せカード発動、神の宣告！ライフを半分コストに
ミラーフォースの発動を無効！」

「マジかよ！？」

「そしてダメージ計算時に伏せカード発動！ライジングエナジー！
手札を1枚捨てセイヴァースターの攻撃力を1500アップさせま
す！」

セイヴァースタードラゴン 攻3800 ↓ 5300

マジか…くっそ…ここまでか…

京哉LP4000 ↓ 0

「ちつくしよゝ負けたゝ」

「ありがとうございました！とても楽しかったです」

いやホント楽しかったなゝうん

「竜馬が勝ったから我は謝る必要は無いな」

「いや謝れって！」

…この子結構苦勞するな将来は

「では貴様は我と戦ってもらおう」「いや何でだよ！京哉さん、戦
う必要はありませんから！」

んゝどうしようかなゝ？格闘技の方が鈍ってるかもしれないし

「よし、相手になるうかな」

「ええ！？京哉さん！？」

「事前に謝るよ…友達傷つけるからごめんな」

「いえ！コイツは人間じゃないんで…いやいや、その前に負けたりしたら…」

「いやあ大丈夫、負けるのには馴れてる」

「いや、そういう事では…」

むう…なら一体どういう事なんだ？

「ダンナの身を案じてるんですって」

「ああそういう事。大丈夫、死ぬことは無いよ…多分」

「今最後に多分って言いましたよね！？」

「大丈夫だって」

「ですが…」

「ええい！本人が大丈夫って言うてるから良いでは無いか！？許可せねばこの写真を幻想郷にてばら蒔くぞ！」

「コイツ…人の弱味につけこみやがって…京哉さん！思い切りやっ
て下さい！」

写真で…それにどっちだよ竜馬君…

超番外編　ときどき魔法で決闘大半（後書き）

戦闘描写の練習を含めて次を書くため3つに分けました。
次話は今後の執筆に生かそうと思います

超番外編 魔法とリアルファイト（前書き）

む…難しい…かなり苦戦の末に出来ました…

ですがまだまだな部分があるのでこれでは満足できません。とりあ

えず…今回はこんな感じですね。

ではどうぞ

超番外編 魔法とリアルファイト

さて、レミリア亜種「レミリア亜種では無いわ!」…とりあえずジヤバウオックとやらの挑戦を受けたんだけど…

「貴様、その武器は使わぬのか?」

「使わないけど?」

今俺は専用グローブを着けている。社長がせっかく作ってくれたんだから使わないとね

「貴様我を舐めているのか?」

「いや、これでも本気なんだけど…」

久々に格闘技するからテンション上げてるんだが…やっぱりオラワクワクすつぞ!とか言わないと乗ってくれないのか?これだからゆとりは…

「ダンナもその世代だろ…」

「アキト、心を読むな」

まあ久々なんだからてけとーに戦っててけとーに参ったとか言ったらいいか

「まあ良い、無理矢理でも使わせてやろう」

「はいはい…」

ジヤバウオックは剣を作り出す…と言えいいのか…とりあえず剣を今持つてる。魔法の事は竜馬君から聞いてたけど魔法って便利だね

「頑張ってください京哉さん!」

いやそんな期待をしないでくれ…完璧負けるから

「む…では…行くぞ」

その言葉の後ジヤバウオックは一瞬で近づき切りかかって来た

「こわっ」

避けれない事はないからとりあえずちよつと下がり避けた。やっぱり真剣じゃ無いか、前髪がちよつと切れちまった

「ふっ！」

次は突き、これも避けられない事もない

「おお」

左半身をずらした。というかまだ構えてないんだけど…

「貴様、何故構えん！」

「構えようとしたら攻撃したんだろうが」

そう言ったがジャバウオックは攻撃の手を緩めてくれない。避けるのに一苦勞だよ…

「ならば避けながら構えろ！」

「無理難題をおっしゃるね！」

とりあえず距離を取ろうかなっと！

「ようやく構える気になったか」

「構える気って…とりあえず次来たら反撃でもするよ」

ウォーミングアップは出来た事だし…いっちょやりますかね

「言っただ、はあっ！」

突っ込んできた…攻撃が直線だな…ジャバウオック…とりあえず…

「…やるか」

「何…ぐあっ!？」

俺は蹴り上げた。威力もあつたが元々小柄な体格な為少し宙に浮いた…そこに

「はあっ！」

踵落としを食らわした。踵落としは…どっちかと言うとネリチャギだな。普通なら真下に落とすが当てにいった場所をずらしてジャバウオックを飛ばした

「ぐうっ！やるでは無いか！」

ジャバウオックは空中で体制を立て直した…というか飛んでる。セコッ！まあ足が届く距離だから良いけどさ

「これならどうだ！」

ジャバウオックは剣を…なおしたで良いのか？まあいいや。とりあえず武器を変えた。赤い…槍、どう見てもあれってFa。eに出て

きたゲ。ボ。グじゃ無いかよ…一撃必殺だっけ？

「ジャバウオック！それ使ったら京哉さんが死んじまう！」

…竜馬君の言葉で理解した…。イ。ル。じゃないかよ…

「くらえ！ゲイ・ボルグ！！」

…投げてきた、ええ投げてきました。だから…

「踏み込む…」

「なっ…ぐはあっ！」

前進して右で腹に1発入れた。綺麗に決まったからびっくりした。後気のせいだろうかかなり身体能力が上がってるんだけど…だって1回の前進で瞬。みたいに近づいたんだよ？

「貴…様…！」

「追加のもう1つ！」

左でストレート！まあ正拳突きの方が正しいけど

「ぐああああああああ！」

ジャバウオックは飛ばされ、その時木が2本程薙ぎ倒された…え？何この威力。社長…一体何やってんだよ…

「ぐう…うう…」

「…何か罪悪感出てきた…社長、このグローブだけでどんだけ身体強化するんだよ…」

北。百。拳とかその内か。は。波とか出来るんじゃない？

「油断していたとは言えここまで押されるとは…」

「油断は命取りだぜ？」

「ならば我も本気を出そうでは無いか」

何それ…そっちは構えろとか言って本気じゃ無いって…まあアレで本気だったらもうボッコボコにしてるしな

「壊れた世界へようこそ（アリス・イン・ブrouクンワールド）発動！」

その言葉の後に周囲が一瞬にして真っ暗になった

「これは…魔法の類いか？」

しかし発動とか言ってたけど…まさか懐かしのイ。セ。スとかだった

たりして。やだよそんな宗教じみた集団に入ってる奴と戦ってたなんて

『この世界は我の心情にて風景が変わる。言わば我の世界だ』

成る程ね、自らの土俵の上で戦うって事か

「しかし…こつも暗いと見えないなあ」

慣れるまで待つしか無いかな…

『では行くぞ…』

「ぐあああつ！」

何だ…？いきなり背中が…

「ぐ…何処に…」

『こつちだ』

「うぐう！」

み、右腕…くそう…全然見えねえしわからんぞ…

「く…いや待てよ…触感はあるんだ…」

成る程…ね…とりあえず次に賭けないと不味いな…

『そろそろだな、これで終わりだ』

次は…左側！

「そこだあああ！」

俺は何かを掴んだ。左肩辺りにまだ刺さってるからな

「せえい！」

そのまま…ええと…確か稲妻落としだっけ？とりあえず押さえつけた
『ぐっ！』

頭に声が響いた…ビンゴっぽいけど…お、視界が晴れた

「…ちっ…何故解った…」

「触感があつたからな」

ただど出血多量にいろんな所に傷…こりゃ死ぬぞ…

「とりあえず…何故…首を…狙わなかった…？」

「竜馬から念話で頼まれたからだ。竜馬の優しさに感謝しろよ」

そう…させて…もらおうか…な…

「…うう…」

あれ…？また膝枕…目の前にゆかりん…何このデジャヴ…それに竜馬君達が居ないな

「あら、起きたの？」

「ああ…竜馬君達は？」

「帰ったわ、貴方の傷を治してからね。それにしてもあの娘に勝つなんて凄いわ」

「いや、どう見ても本気じゃ無いだろあっち…」

まずアレなら初撃で首は取られてたし

「それもそうね」

はあ…ホント貧乏くじよく引くな

「後あの娘から伝言で再戦を待っているですって」

「勘弁してくれ…」

次だとマジ死んでしまうっての

「そろそろ帰るか…」

「そう、残念…」

こんな所で寝てたらまた何か来るに決まってるじゃん…

「よつと…」

ホントだ、立ち上がったけど腕とか肩とか全然痛くないし出血もしてねえ

「魔法って凄いな」

「そうね、まあ貴方の強さも魔法クラスだけど」

…趣味で鍛えてただけなのに魔法クラスとか言われたよ…

「それじゃ行きましょ」

俺達はスキマに入って行った

「到ちや『死ねええええええ』うぎやあああああああ！」

「きよ、京哉様!？」

「お兄ちゃん!？ご、ごめんね!？」

「あ、あの女かと思つて…」

アオイ、アリス、姫からそれぞれの得物で攻撃された…うう…不幸だ…

超番外編 魔法とリアルファイト（後書き）

竜王先生、ジャバウォックの能力はアレで良いのでしょうか…心情としては闇をイメージしたんですが…

そして次は凜とのデュエルです

ではまた

第六十七話 心に眠る深い闇（前書き）

本編です！

こんなので大丈夫なんだろうか…明日には次話を書けるよう頑張ります！

ではどうぞ！

第六十七話 心に眠る深い闇

俺の前には今凜の姿をした奴がいる

「…さつさと返してもらおうか…」

「返す？京哉君…私は私だよ？」

「…現れないなら無理にでも出す！」

「…いくよ…京哉君？」

「「デュエル！」」

京哉LP4000

凜？LP4000

「俺からだ、ドロー！」

必ず助けるからな、待っていてくれ！

「俺は切り込み隊長を召喚！」

切り込み隊長 攻1200

「そして効果によりミスティックソードマンLV4特殊召喚！」

ミスティックソードマンLV4 攻1900

「そして魔法カード、レベルアップ！を発動！ミスティックソードマンLV4を墓地に送りデッキからミスティックソードマンLV6を特殊召喚！こい、アキト！」

『よっしゃあ！』

ミスティックソードマンLV6 攻2300

「カードを2枚伏せターン終了だ！」

「私のターン、ドロー」

「…？何だ…急に空気が重くなってきた…」

「私はモンスターをセットしてカードを5枚伏せてターン終了」

「…俺のターン、ドロー！」

あの伏せカード…一体何が当たりだ…

「アキトでセットモンスターに攻撃！」

「伏せカード発動、月の書。その精霊をセットさせるよ」

『うおっ！すまないダンナ！一時抜ける！』

セットか…なら次は隊長だ！

「切り込み隊長で攻撃！」

「セットモンスターは…」

伏せカードを使わずに通した…そしてあは…

「メタモルポットだよ。お互い手札を捨て5枚ドロー」

くっ…メタモルポットだったのか…

「…俺はコマンドナイトを守備表示で召喚してターン終了だ」

コマンドナイト 守1900

切り込み隊長 攻1200 ↓ 1600

「私のターン、ドロー。私は神獣王バルバロス召喚。妥協召喚だから攻撃力は1900だよ」

神獣王バルバロス 攻1900

「バトルだよ、バルバロスでその精霊に攻撃」

アキトを殺らせる訳には！

「伏せカード発動！和睦の使者！このターン俺のモンスターは戦闘

で破壊されずダメージも無い！」

『助かったぜダンナ！』

「ああ！」

「仕方ないなあ…ターン終了」

「俺のターン、ドロー！」

ここは一気に攻撃するしか無い！

「アキト！神獣王を討て！」

『了解だぜ！うおおおお！』

アキトが振り下ろした剣はバルバロスを斬った

凜？LP4000↓3200

「くっ…凄いね、京哉君。だけど…これで揃ったよ」

これで揃った…だと？どういう意味だ…

「伏せカード発動、レベル・レジストウォール。自分フィールド上のモンスターが戦闘破壊時そのモンスターと同じレベルになるようにデッキから2体以上守備表示で特殊召喚する」

ビッグシールドガードナー 守2600

魂を削る死霊 守200

大木炭18 守2100

「破壊されたバルバロスはレベル8…デッキからレベル4のビッグシールドガードナー、レベル3の魂を削る死霊、レベル1の大木炭18…しかも俺のモンスターじゃ倒せないか…カードを2枚伏せターン終了だ」

しかし…あの3体をどうする気なんだ…

S i d e アオイ

「帰還の準備は終わりですね」

早く京哉様の所に戻らないと…

「アリス、出来ましたか？」

「アオイさん、私は大丈夫だよ。早くお兄ちゃんの所に戻ろう！」

「そうですね」

私達が部屋から出ようとした時コールドエンチャーさんとお会った

「姫様、コレを…」

「これってお母様のデッキ…」

「女王様は貴女様を後継者に決めました。その証としてお受け取り下さい」

アリスは最初戸惑っていましたが…

「…解った」

決心しデッキを受け取りました

「それでは、里の門までお見送り致します」

「ありがとうございます」

そろそろ帰りますね、京哉様

私達は里を出て2kmくらい進んだ時…

「…いきなり天気が悪くなってきたね」

「そうですね」

夜と思う程でしたね…とても嫌な予感がします

「早く行きましょう。京哉様が待ってますし」

「そうだね」

私達は進もうと思った時…それは来ました

S i d e 京哉

「私のターン、ドロー」

やはり空気が重くなっている…それもさっきよりもだ

「…そう、もう出番なんだね…」

出番？どういう意味なんだ…？

「私は3体のモンスターを生け贄にします」

「何!？」

3体を生け贄だと!？

「これが私の切札…いや、今の私自身。降臨せよ…邪神アバター」

S i d e アオイ

「うう…今のは…」

私の視界が一瞬にして真っ暗になったのは覚えていましたが…そう
だ!

「アリス!？」

アリスは一体何処に行ったの!？

「アオイさん!」

呼ばれた方を見るとアリスが居ました…良かった…

「大丈夫ですかアリス!？」

「大丈夫だよ!今のは何なの?」

「わかりませんが…あれは…」

周りを見渡していると1体のモンスターが中に浮いていました…容
姿は見えないですね

「あつちは…」

「お母様！」

アリスは里の方に走り出しました。私もいっしょですよ

「そんな…」

「お母様…」

里は壊滅していました…何も無く…ただ建物の瓦礫だけ…私が見た姿も無いです

「そんな…氷の女王様…」

「お母様…嘘だよ…ねえ…お母様…お母様！お母様あああああ
あ！」

壊滅している里の中…アリスの悲痛な叫びがこだましました…私も…これは許せません…

S i d e 京哉

邪神アバター 攻？

「な…何だこれは…」

「邪神アバター…私自身であり私の心」

「何…？」

凜の心だと…どういう意味なんだ？

『ダンナ…アレからすげえヤバイオーラが出てるぜ』

「…ああ、俺も感じる」

「そしてアバターはフィールド上にいる一番攻撃力の高いモンスター
の攻撃力+100の数値の攻撃力となる」

邪神アバター 攻2800

「姿が…」

『俺！？』

アバターは黒い渦を巻きアキトの姿へ変わった

「バトル、アバターで切り込み隊長を攻撃。深淵斬烈」

アバターの一刀の下に隊長が切られてしまった

「ぐう！」

京哉LP4000↓2800

「ターン終了」

くっ…なんてカードだ…

「京哉、大丈夫か！？」

「大丈夫だカイザー…」

とりあえずこの状況を打破しないと…

「俺のターン、ドロー！」

…引いたのは…2枚目のコマンドナイト…

「俺はコマンドナイトを守備表示で召喚！これにより更に攻撃力がアップする！」

コマンドナイト×2 攻1200↓2000

ミスティックソードマンLV6 攻2700↓3100

「だけどこの時アバターの攻撃力も変わる」

邪神アバター 攻2800↓3200

「俺はミスティックソードマンを守備表示に変更してターン終了だ……」

「私のターン、ドロー。私はライティングボルテックスを発動」

『くそっ！すまねえダンナー！！』

「くっ……アキト……」

まずい……このままじゃ負ける……どうすればいいんだ……

第六十七話 心に眠る深い闇（後書き）

…というわけでした。まあ今更ですが作者にはデッサンを組むセンスが全くございません。実際に作るところなるみたいな感じなんで…

明日には次話を書けるように頑張ります！

第六十八話 負けない心（前書き）

あけましておめでとうございます！

昨年本作品を見て頂いた方、そしてこれから読む皆様！どうぞよろしく願います！

年末年始と忙しく宣言日に完成せず本日完成いたしました！

ちょっと内容が微妙になりつつある最近ですが新年という事で今回の話以降自分を奮い起こして頑張ります！

第六十八話 負けない心

今俺のフィールドにはモンスターは無く凜の方は邪神がフィールドを制圧している…高攻撃力を出されたら…負ける！

「…ターン終了…」

何…？一体どういう事だ…

「良かったね京哉君…手札に出せるモンスターがいなかったから何も出せなかったよ」

…運が良かったって事か…くそ…なんか舐められる気がする

「俺のターン、ドロー！」

…よし、こいつならばいけるぜ！

「ならず者傭兵部隊を召喚！そして生け贄にしてアバターを破壊する！」

「伏せカード発動、闇の幻影。闇属性モンスターを対象とする魔法、罨、モンスター効果を無効にして破壊する」

くっ…コレでもダメか…なら…

「まだ…伏せカードがある！伏せカード発動！」

…？反応しないだど！？

「無駄だよ、アバターが召喚されたら2ターンは魔法、罨を発動は出来ない」

そんな効果があったか…だがこのターンを終了すれば使える

「カードを3枚伏せてターン終了だ…」

「私のターン、ドロー」

このターンからようやく使える！

「私は終末の騎士を召喚」

終末の騎士 攻1400

「終末の騎士の効果発動、デッキから闇属性モンスターをデッキに

送る。私は不死武士を墓地へ…そしてアバターの攻撃力は1400
+100となる」

アバター 攻1500

くっ…また化けやがったか！

「そして大嵐を発動。フィールド上の魔法、罫を破壊する」
大嵐で破壊されるくらいならば…

「自ら墓地に送らせてもらっ！伏せカード発動、非常食！自分フィールドにセットしている魔法、罫を全て墓地に送り4000ポイントを回復させてもらっ！」

京哉LP2800↓6800

よし！これで邪神からの攻撃も耐えられる！

「…私は終末の騎士とアバターでダイレクトアタック」
「ぐあっ！」

京哉LP5800↓3900

「ターン終了」

「俺のターン！」

ライフは削れても邪神が倒せなきゃ意味が無い…

「ドロー！」

「キョウヤ！」

リア！？なんで俺のデッキに…

「俺が入れたんですダンナ…」

「お願いキョウヤ！アタシもリンを助けて！だから…」

「…俺は魔法カード強欲な壺を発動！2枚ドロー！」

「キョウヤ！お願い！」

『ダンナ!』

「俺は…リアを召喚!」

荒野の女戦士 攻1100

『ありがとうキョウヤ!』

凜と一緒に助けよう!期待してるぜ、リア!

「…雑魚の精霊か…」

「リアは雑魚じゃない!凜の大切な仲間だ!」

「貴様のその考えが我を呼び覚ますきっかけとなったのだ」

「どういう意味だ!？」

「くくく…1つ良いことを教えてやろう…アバターを倒さぬ限りこの女は解放出来ぬ…もっとも効果破壊では無く…攻撃によってだな」

「…攻撃限定か…くつ…くくく…」

『キョウヤ…?』

「くくく…くつくつ…」

「…心が折れたか?所詮は容易き心よ」

心が折れた?いや…全く違うな…

「見えたんだよ…攻略方法がな」

これしか無いな…待っててくれ、凜!

Side 凜

…ここは何処…?周りは真っ暗で何も無い…見えないよ…怖い…

『怖れるな…今貴様が欲するものが手に入る前だ』

ボクが…欲しいもの…ボクが…一番願った事は…京哉君と居ること…

『我を受け入れよ…さすれば欲するものが貴様の手に…』

京哉君が…ずっと…ずっとボクの傍に…
『我なら…君の欲しいものになれる…だから俺を受け入れて欲しい』
京哉君…ボクは…貴方を…

Side 京哉

「行くぞ！俺は魔法カード、命削りの宝札を発動！カードを5枚になるようにドローし5ターン後全ての手札を墓地に捨てる！」
これで引けるか…賭けてみる！

「ドロー！」

…くっ…来ない…か…だけど必ず引く！それまで耐えるんだ！

「カードを3枚セットしてターン終了だ！」

「私のターン…ドロー。貴様等の仲間なぞ我が力にて叩きふせる！
アバターよ、行けい！」

「させるかよ！伏せカード発動！攻撃の無力化！」

アバターの剣が渦に呑み込まれていった

「ターン終了」

「俺のターンだ！ドロー！」

まだ防戦一方だな…どうする…

「カードを伏せターン終了だ」

やはり…コレしか無いか…

「私のターン！ドロー！切り裂けアバターよ！」

「まだまだ！攻撃の無力化をもう1枚！」

「しつこい奴よ！魔法カード、デビルズサンクチュアリを発動！」
奴の場に魔法陣が形成され魔法陣から銀色の人形が現れた

デビルメタルトークン 攻0

「ターン終了」

「俺のターン！ドロー！」

くっ…これも違う！まだ引かないのか！？

「ターン終了…」

「くくく…キーカードを引かぬようだな…我的ターン！ドロー！デビルメタルトークンの維持コストを払う！」

凜LP3200↓2200

「そしてアバターで攻撃！」

「伏せカード発動！ホーリーライフバリア！手札を1枚捨てこのターンのダメージを0にする！」

これで最後…か…1枚はブラフ…次のドローしかない！

「ターン終了だ…くくく…」

「俺のターン…」

ここで引かなければ…引くんだ…必ず！

「凜…力を貸してくれ…」

Side 凜

「京哉…君…」

「俺なら君の傍にずっといれる。だから…」

…違う…この人じゃない…

「他の誰よりも君が…」

…違う…違う…違う！この人じゃ…

「貴方は京哉君じゃ無い！京哉君は…ボクが好きな人は…ボクだけを見ない！」

「だけど彼は…」

「確かに京哉君は鈍感だしボクを見ない時もある！」

例えそれでも…そんな時でも…

「京哉君が…好きだから！今ボクを助けようとしてくれる京哉君が！」

だから…だから…ボクは！

「ボクは…負けない！」

Side 京哉

！？…今…凜の声が聞こえた…

「どうした？我に恐怖したか？」

…そうか…凜も…戦ってるんだな…

「俺のターン…だったな…」

凜も戦ってるんだったら…俺も負けないぜ！

「ドロー！」

…来たか…借りるぜ、凜

「カードを1枚伏せ魔法カード死者蘇生を発動！また出番だぜ、アキト！」

『っしやあああああ！』

ミスティックソードマンLV6 攻2300

「今更そんな雑魚を出したところでアバターが上がるだけだ」

アバター 攻2300

これで…俺の勝ちだ…三沢じゃ無いが勝利の方程式が完成した。行くぞアバター！

第六十八話 負けない心（後書き）

今回も自分としては微妙でした…ですから次話は頑張っていきます！

第六十九話 闇との決着（前書き）

お待たせしましたあああああ！

京哉「遅い」

いやもうマジすいません…いろいろと忙しくて…

京哉「しかしようやく終わったぞ」

ええ…めっちゃめっちゃ呆気なく散るアバター…流石OCG仕様（笑）

京哉「出来は最悪ですがご勘弁を…では」

第六十九話 闇との決着

ようやく引いたキーカード。コレで…叩く！

「更にリアに団結の力を装備！2体いるから1600アップ！」

荒野の女戦士 攻1100 ↓ 2700

「愚かな！まだ解らぬか！」

アバター 攻2700

「アタシ…ね…」

「ハッハッハ！貴様がいくら足掻こうが邪神には勝てぬ！例え神であろうとな！」

「…アキト、終末の騎士を攻撃！」

「了解だ、ダンナ！はあっ！」

アキトからの一撃で騎士を破壊した

「かすり傷だな」

凜LP3200 ↓ 2300

「ターン終了だ、来いよ邪神。次で終幕と行こうぜ！」

Side 凜

「ならば…貴様を取り込ませてもらう！」

アバターがボクを覆ってきた…負けない…京哉君が戦ってくれてる

から！

『その意気はよし、儂が助けようぞ』

「え…？」

その声が聞こえた時、アバターはボクから下がっていった

『貴様！我を裏切るのか！！』

『裏切るも無い。儂は京哉殿との誓いがあるからな』

…ボクの後ろには…バルバロス_{ur}が居た

S i d e 京哉

「ならば貴様の要求通り消してやろう！我のターン！ドロー！行けアバター！あの精霊を消し去れ！」

ふっ…かかったな、阿保が！

「お前は今攻撃宣言をしたな…それが貴様の終わりだ！」

凜からの借り物はリアだけじゃねえぜ！

「伏せカード発動！スキルドレイン！」

「何だと！？」

京哉 L P 2 9 0 0

アバター 攻 0

「さあ…純粋な殴りあいといこうか。リア！」

『もちろんだよキョウヤ！』

コレで終わりだ、アバター！

「馬鹿な！我が分身が…神をも上回るアバターが！」

「寝言を言うのなら寝て言いってな。さっさと凜を返してもらっぜ」

『リンを…返せええええええ！』

アバターがリアが放つ一刀の下に沈黙した

凜LP2300↓0

Side凜

『貴様あああああ！姿を出してやった恩を忘れたかあああああ
！』

『僕の忠誠はただ一人、京哉殿のみだ』

今バルバロスurがボクを前にたって守ってくれている

「バルバロス…」

『安心せい、僕は京哉殿が勝つ残り僅かな時間の間又シを守る』

「ありがとう…」

ありがとうバルバロス…そして京哉君…

『ええい！邪魔だバルバロス！』

『残念ながら壁扱いを受けるのは慣れているから邪魔をして当然だ』

アバターがいつの間にかバルバロスと同じ姿になっていて

『そろそろだな』

アバターがどんどん消えて行く…

『京哉殿の勝利だ、さあ消えるがいい！』

『何故だ！こんな…こんな馬鹿なあああああああ！』

アバターは…跡形も無くボクの心から消えた。

ボクも起きよう…そして…京哉君と一緒に…

Side京哉

…大丈夫っぽいよな？大丈夫と願いたいが…

「…そうか…」

船の中でアオイから全て聞いた。コレで2つ目…しかも今回は全滅…か…

「アリスは…まあ大丈夫じゃ無いな…」

『そうですね…京哉様』

「何？」

『怒って…ますか？何も出来ない自分自身に…』

「…そうだな…今すぐ自分を殺したい気分だ…」

何が主だよ…何も出来なきゃ意味無いじゃねえか…

「ふう…」

これからアリスにどういう顔で会えば良いんだろう…やっぱりそこに居なかったとしても役に立たなかった俺の事も恨んでるだろうな…

『京哉様…』

アオイが後ろから俺を抱きしめてきた…暖かいな

『私も同じで何も出来ませんでした…気づけば…という感じで…ですが私はこの思いは必ず忘れません』

「アオイ…」

『醜い復讐…ですが必ずやり遂げます…アリスも同じ気持ですよ』

…復讐…か…まあ俺も同じ気持だからな…この代償は高くつくぜ…

襲撃者さんよ

S i d e アリス

…目が痛い…どれくらい泣いたんだろう…もう涙も出ないよ…

「あれ…アリス？」

『あ…』

ふと声をした方を見ると凜さんが居た

『お兄ちゃん助けれたんだね…』

「うん、アリスも心配かけてごめんね」

本来なら素直に喜ぶべきんだけど…今出来ない…そう考えていると凜さんが私の隣に座った

「…アリス、ボクは何かあったかなんて聞かない…けどそこで立ち止まったり諦めたら駄目だと思っうよ？」

『凜さん…』

「協力がいるならボクも手伝っし…だから、ね？」

…そうだ、泣いてるだけじゃ駄目なんだ…お母様が渡してくれたのはデッキだけじゃないんだ…

『ありがとう凜さん…私、吹っ切れたよ』

「うん…」

『リーン！こっち手伝って〜！』

「解った！それじゃアリス、またね」

『うん』

凜さんはお兄ちゃんの部屋から出ていった

『そうだよ…泣いてるだけじゃダメだよ…』

必ず…必ず仇を討つよ…お母様

S i d e 京哉

カイザーと俺とはある船内に居た…ちなみに今俺の手元にはアバタがある

「さっきペガサス会長と連絡したら何者かに盗まれたってさ」

「そうか、それでそのカードは返すのか？」

「いや…コイツはあつたらまた暴走するだろう…だから今破る」

そう言つて俺は引き裂いた。　　そういえば俺ってなかなか酷い奴だな…

「どうした京哉？」

「いや…ちよつと考え事さ…すまないがもう寝るよ」

「そうか、ならば俺も寝るとしよう」

出た時間が昼だからなあ…向こうに着くのは深夜くらいかな

第六十九話 闇との決着（後書き）

京哉「流石は無能だな」

だつて殴りあい〃コレしか出ないもん！

京哉「まあ奴ならば仕方ないか」

そして次は重大発表をしようと思うんだ

京哉「あつそ」

…冷たいなあい…もうちよつとおゝとか言えよ

京哉「まあ所詮お前だからねえ」

…ちくせう…お前も俺のダチも俺をヴァ力にしゃがって…今に見て
ろよおおおおお！

京哉「あつ、行っちゃったな…まあいいや。それじゃあな」

今回は、重大発表！（前書き）

さあ重大発表です。これは皆様のご協力を得たいと思います。どうぞご理解とご協力をお願い致します！

今回は、重大発表！

はい！皆さん！

京哉「作者のテンションとタイトルキモい」

倭「ただでさえ気持ち悪いのにそれに磨きかけたらアカンよ」

喬「邪魔なだけだね」

凜「そうだね」

涼「さつさと始めて下さい！」

藍「気持ち悪いだけです…」

…まあそれは置いてと…

京哉「置いてくな」

実はですね、そろそろキャラクターランキング投票をやるうと思つてね

倭「今更やなくなんでなん？」

…実はですね…アクセス数が100万を突破いたしました！イエイ皆拍手！パチパチパチパチ…ってあれ？何で皆固まつてるんだ？

京哉「…は…」

…は？は、がどうし『はああああああ！？』うわお！うるせえ！京哉「てめえなんで今更そんな事を言うんだよ！」

倭「そうや！遅すぎにも程があるで！」

だっているいろと忙しくて…

喬「言い訳はいいよ！」

凜「ちゃんと確認してよ！」

涼「そんな事だからヘタレとか言われるんですよ！」

藍「ついでにバナナドリルも…！」

ヘタレとかバナナドリルとか関係無いじゃんかよ！

京哉「黙れ！この駄作者が！アオイ、カイト、アキト、アリス、姫、フェル！」

アオイ「了解です！」

以上の人物から3名を選んで投票して下さい。1位には3ぴちゅーんを、2位には2ぴちゅーんを、3位には1ぴちゅーんです！
海度「つまり人物を3人選べって事か」

葵「時期はどうするの？」

明日から始めましょう！明日から2月1日までです！皆さん必ず投票して下さい！それでは！

京哉「ガンダムファイトオ！レディイイイイ…」

全員『ゴおおおおお！』

それ違うよ！Gガンダムだよ！

今回は、重大発表！（後書き）

誠にアクセスをありがとうございます！

期限は2月1日までなので皆様投票をよろしくお願い致します！

第七十話 その頃…修学旅行組は（前書き）

…どうも…バイトの面接に落ちた作者です…

京哉「…それだけはザマアって言えないな…貯めなきゃ駄目だもんな」

だがまだ行ける場所があるんだからチャンスはある！

京哉「そうだな、プラスで行こう」

それでは！どうぞ！

第七十話 その頃…修学旅行組は

Side 倭

はあ…京哉君と凜ちゃんと行きたかったなあ…ホンマに大変やな主
って

「おいおい、いつまでため息ついてんだよ坂上」

「うるさいわ…京哉君と更なる親密な道に行こうとしてんねんで…
今回こそチャンスやんか！」

「先輩の言い分は解りますが…」

そっぴえば日向って帝君と付き合ってるんやっただけ…そういう噂
を聞いたわ

「日向さんって帝さんと付き合っているんですか？」

「え？／／／」

涼ちゃんの一言で今いる帝君以外のメンバー全員が振り返った。涼
ちゃんストレートやなあ

「ええと…その…／／／」

「涼先輩…日向が困ってるので…」

「そっぴだよ涼」

ウチも気になる所やなあ…

「そっぴえば木原先輩、遊城先輩達から別れましたけど何処か行く
んですか？」

「まあな。アニキが必ず武藤遊戯が住む家には行くべきって言っ
たからな」

「なのになさっきからかなり入り組んだ道に入ってねえか？」

「月読の野郎には賛同したくないけど俺も思うぜ」

そっぴえばそっぴやな…何か暗い道にどんどん入っとる気がするわ…

「…ヤバイ…」

「ヤバイって何がヤバイのよ？」

「…あれ？暗奈ちゃんいつの間におったんや？」

「さつき合流したのよ。もしかして道に迷ったのかしら？」

「…その通り…」

『ええええええええ！』

このアホ今まで何やつとつてん！

「地図見せ地図！」

「ちよつ！坂上！」

…え？何処進んどるん…全く解らんねんけど…

「…フレイおるか？」

『いるよ』

「ちよい亀のゲーム屋って所上から見といて欲しいねんけど」

『はいはい』

…コレに頼るしか無いわな…

S i d e 喬

…やつと着いたよ…利光が迷いに迷って…フレイが居なかったら危なかったね

「…ここが決闘者王の家か…」

「思ったよりちっさいな」

「うゝん…店員は居ないみたいだが…ん？」

帝が何か見つけたみたい…店に入って行った

S i d e 帝

おいおい…何でアイツがここに居るんだよ…

「光輝！」

「兄さん！？」

そう、俺の弟の光輝が店の中に居たんだ

「光輝君？」

「あつ、日向お姉さん。お久しぶりです」

「何だ？帝の知り合いか？」

そうだ、紹介をしておかないとな

「天宮光輝、俺の弟だ」

「初めまして、自分は天宮光輝と言います。兄がいつもお世話になってます」

「礼儀正しい子やな。ウチは坂上倭やで」

「私は神谷喬、よろしくね」

「私は如月涼です」

「日下部藍…よろしく…」

「私は黒原暗奈よ」

「俺は緋焰龍牙だぜ！」

「俺は月読凧だ！」

「…木原利光…」

木原先輩いつまで凹んでるんですか…

Side 凧

あれ？何で俺Side何だ…

「…何か嫌な感じがする…」

このオーラが原因だ…振り向いちゃいけない…振り向いたら死ぬかも知れねえ

「な…ぎ…」

この声…そしてこのオーラ…ギギギと音を立て振り返ると…

「も…桃…」

「お久しぶりですね風♪」

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ…こんな所をコイツ等に（主に龍牙）見られたら
「あつ、桃さん！」

「光輝君お疲れさま、そろそろ双六さんが帰ってきますから私と風とでお店番やつておきますね♪風、行きましょ」

首根っこ掴まれた！誰か助け…

「ほなウチ等は決闘者王の所縁の場所を回るか。それじゃあ風、彼女さんとごゆっくり」

その言葉で皆退出して行つた…ノおおおおおお！

「氣遣いありがとうございまゝす…それじゃあ風…ウフフ…」
こつなつたら…タイミングを見計らつて脱出だ！

Side 喬

今光輝君の案内でいろいろ回っている所です

「そつといえば光輝君は何で店番をしていたの？」

「双六さんがデュエルアカデミアの人を案内しに行くと言ってましたのでたまたま来ていた僕が店番をしていたんです」

「客とかよく来なかったわね」

「それが幸いで僕は仕事という仕事は何もしていませんよ」

「そつなんだ…」

店番するだけでも十分偉いと思うけど…

「それより如月涼さんが居るといふ事は立花京哉さんも来ているんですよね！？京哉さんは何処に居ますか！？」

…京哉の大ファンなんだ…そつといえば京哉ってファンがいっぱい居るよね。最近京哉が襲われないように京哉ファンクラブが暗躍して

るっ
てい
う噂
だも
ん

「来ていませんよ？私用があるそうで……」

「そうですか…残念です…デュエルを申し込もうと思ったのですが」

⋮
⋮
⋮
⋮

「まあ立花なら多分来るさ。それより俺とデュエルしようぜ！」

「デュエルですか？」

龍牙が嬉しそうに聞いた。そういえば光輝君のデッキって何だろうね…？

「僕は構いませんよ。ここからだとか河川敷が近いのでそこで行いませんか？」

「よっしゃ！皆良いよな！」

「ウチは構わんよ」

「私も良いよ」

「私も同じですね」

「良いですよ……」

「光輝がどれだけ強くなつたか見ものだな」

「頑張ってね光輝君」

Side 𠄎

…よし、そろそろチャンスだな…そろり…

「何処に行くんですか風呂？」

「見つかった!？」

「双六さんはまだ帰って来るのが遅いので…ウフフ…」

だ……誰か助けてくれえええええ！

Side 倭

「着きましたよ」

場所はあのデュエリストキングが始めて神と戦った場所や

「よし！早速始めようぜ！」

「よろしくお願いします」

「デュエル！」

「俺から行くぜ！ドロー！」

先攻は龍牙君からや。今回はどう回るんやろな

「あちゃゝ…手がわりいなこりやあ…手札から永続魔法神の居城ヴアルハラを発動！そして効果によりアテナを特殊召喚！ターン終了だ」

…あれ？珍しい事もあんなにな。そないに回って無いのって

「それでは僕のターンです、ドロー」

光輝はどんなデッキを使うんやろな

「手札からライトロード・ビースト ウォルフを捨ててソーラーエクスチェンジを発動します。デッキから2枚ドローしデッキから2枚墓地へ送ります」

「ライトロード…」

「何だ、ただの墓地肥やしじゃねえか」

…え？龍牙君この意味解って無いんか…？

「墓地に送られたのはライトロード・サモナー ルミナスとライトロード・ドルイド オルクスです、そして手札からおろかな埋葬を発動。ライトロード・シーフ ライニヤンを墓地に送ります」

「…成る程、もう終わりか」

「御愁傷様です…」

…手札にありそうな予感がするんやけど…

「そして墓地にライトロードと名の付いたモンスターが4種類存在しますので手札から裁きの龍を特殊召喚します」

裁きの龍 攻3000

「何だコイツすげえ!!」

「それでは…裁きの龍の効果を発動します。ライフを1000支払
いフィールド上のこのカード以外のカードを破壊します」「はああ
ああああ!？」

あゝあゝしかも光輝君はまだ召喚してへんからなゝゝ1キル確定やなゝゝ
「そしてもう1体裁きの龍を出して2体でダイレクトアタック…で
終了です」

「嘘おおおおお!？」

…アカンやん…まあライトロード相手はしゃーないか

「緋焰さん、ありがとございました」

「ライトロードとか初めて相手した…」

「龍牙…また前の授業サボってた？ライトロードの説明だったのに
…」

「…い、いつ？」

「アレは確か…5日前の海度さんの授業でしたね」

…そういえば京哉君はライトロードの特性とか知つとるんかな…ま
あ京哉君なら何とかなるやろな。あゝ来るなら早よう来てえなゝゝ京
哉君ゝ

第七十話 その頃…修学旅行組は（後書き）

ところで皆さん、リアルでデッキを作ってる人でファンデッキを作ってる方居ますかね？

京哉「どうしたんだ？いきなり」

いやね、一言でファンデッキっていったいあるじゃん。キャラデッキとか

京哉「まあ理想の勝ち方的な？」

まあ何でもいいよ。それでさ…俺のファンデッキなんだけど…

京哉「ふむふむ」

デッキタイトルが食材なんだよ

京哉「…う、うん…良いと思うよ…」

ちなみに切札はハングリーバーガー

京哉「……………」

それでプチトマボーって言うチューナーが入るんだけど…どうせならシンクロモンスターを入れたい

京哉「…それで？」

…食材関係又はそれに近いシンクロモンスターは無いかなと…

京哉「…無いんじゃない？」

まあ他にも食材関係モンスターは無いか聞きたいのもあったけど

京哉「…まあこんなだけよろしく…」

キャラ投票も待つてまゝす！

第七十一話 部屋が無いだと！？俺の家で大丈夫か？（前書き）

前回新規に現れたオリキヤ、光輝と桃香はリュウガ様と紅様の投稿でした

今更ながらお礼を述べます。ありがとうございました。

今回は京哉側が中心ですね

ではどうぞ！

第七十一話 部屋が無いだと！？俺の家で大丈夫か？

Side 葵

皆、元気？葵だよ！今京ちゃんの為にホテルの部屋の交渉してるんだけど…

「どういう事ですか？何故後からの方は駄目なんですか？」

「ですから全てそちらの学校の…特に白い制服の方でいっぱいなんですよ」

この通り全然進まないの…このホテルの人は解って無い！あんな白いゴミよりも京ちゃんの方が凄いつて事が！

「でも「ストップだ葵」兄さん！」

「すまない、此方の人数ミスだ。部屋の用意は構わない」

「はあ…」

「だから忘れてくれ。ほら葵、行くぞ」

「ちよつ、兄さん！」

あゝもう！兄さんも何考えてるの！？

そして今食事中…何とかレッドの皆をホテルには入れた。食事は各寮被らないように順番で食べているんだけど…

「ちよつと…兄さん…」

「お前の言い分も解るけど仕方ないって」

「でも…やっぱり京ちゃんと一緒のホテルが良かったな…」

ううゝ京ちゃんがとっても恋しいよ

「アイツと一緒にならお前が襲うだろうが…」

「襲って無いもん！可愛い寝顔をしてる京ちゃんが誘ってるんだもん！」

京ちゃんの寝顔つてとっつっつっても可愛いんだよ！あんなの見たら堪らないよ！

「何回阻止された？」

「…全部」

京ちゃんとってもガードが堅いの…この前なんかね…

『にゅふふ…京ちゃんの寝顔』

『…ん…む…』

『はう』

『…む…ぐう…』

『…もう我慢出来ない！ダイヴー！』

『…はっ！』

『あうっ！』

『…何だ夢か…いい時間だし起きるか…ふわあ』

つて起きられたんだ…頭の方にダイヴしたからベッドとキス…でも京ちゃんいい匂いだっ たよ…

「おゝい、おゝい」

「にゅふふ…京ちゃん」

「…駄目だこりゃ」

S i d e 京哉

よう皆、京哉だ。さっき海兄からメールがあって俺と凜の部屋は確

保出来なかったって。葵姉に至っては白いクソゴミウジ虫が居るからちよつと掃除してくるってメールが来た。まあ返信が無い辺り海兄に止められたっばいけど

「どうしようかな」

「京哉君あんまり困って無いよね？」

まあ遊戯の家も近いし双六さんに交渉したら絶対OKくれるし城之内のカツチャンと静香さんに至っては無断出入り許可あるしな

「俺の家にしよう」

「えっ？そっその…／／あの…／／／」

さあ早く向かうとしようかな

S i d e 凜

「さあ着いた」

「…着いちゃった…／／／」

どうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしよう
どうしよう！京哉君のお家に着いちゃった…しかもとてつもなく大きい…ううゝどうしようゝ…御家族の方にどう挨拶しようゝ…やっぱり初めまして…かな？その後は…京哉君の彼女です…かな？ううゝボクの収入源とか…ってこれは男の人だ…将来の夢…とかかな？欲しい子供の人数とか…違う違う違う！ううゝ…

S i d e 京哉

家に着くなり凜がぶつぶつ言い始めた。そんなにホテルの方が良いのか…あんまり帰っていないけど一応彼等が居るから大丈夫だけど

「それじゃあ入るけど…もしホテルの方が良いなら俺の方で予約しようか？」

「うっん！京哉君のお家で断然良いよ！」

またぶつぶつ言い始めた…無理して言ってるのかな？

Side 凜

「さあどうぞ」

「お…邪魔します…」

うっ…緊張するよ…。家族の誰かに会ったら挨拶の後どうしよう…
「まあそこに座ってくれ。飯は何でもいいかな？」

「う、うん…／＼／」

京哉君はキッチンの方に行った。それにしても広いなあ…しかも3
回建て…

「あっちゃ…食材が無いのを忘れてたなあ。ちょっと買ってくるから待っててくれるか？」

「それならボクも…」

「いや、すぐ前にあるから大丈夫だよ。10分程で戻ってくるよ。
じゃ、留守番よろしく」

「あつ、京哉君！」

行っちゃった…うっ…京哉君が居たら京哉君に頼ろうと思ったんだ
けど…

「……………」

なんだろう…全然落ち着かない…

「誰も居ない…のかな？」

ふとボクが本棚を見ると薄いアルバムがあった

「…見ちゃったら駄目だよな…」

…でも…とっても見たい…凄く見たい

「ごめんね京哉君…」

好奇心に負けちゃった…

「…幼い頃の京哉君…可愛い／＼／」

は…とても可愛い…な

「でも…一人や葵さん達と一緒に家族で撮ってないみたい…」

撮影者かな？でもそれなら他人に任せればいいし…

「あんまり追求しない方が良いよね…あつ」

写真が1枚落ちちゃった…

「え…何…これ…」

男性一人と京哉君が写ってるんだけど…男性の顔がペンでぐちゃぐちゃにされてる…

「何でこんなのが…？」

「…見たな？」

声が聞こえた…振り返ると京哉君が居た

「き、京哉君…」

京哉君が迫って来た…ど、どうしよう…怖くて逃げれない…

「人の秘密を見た奴は…」

だっ…誰か…

「こうしてやる！」

「いひゃい！ひょうひゃふんいひゃいひょー！（訳、痛い！京哉君
痛いよー！）」

頬を引っ張られちゃった…痛いよー

「深く追求しないか？」

「ひひゃい！ひまひえん！（訳、しない！しません！）」

「よろしい」

ううゝ頬が痛いよゝ。でも勝手に見たボクが悪いんだけど…

S i d e 京哉

只今立花家は食事後なり。ちなみにグラタンにポテトサラダだった。難しかったなあ…細切れチーズの作り方。それにしても見られたか…俺の黒歴史だから見て欲しく無かったんだけど仕方ないか

「あの…京哉君」

「何？」

「聞いたら駄目かな…？」凜の奴深く追求しないって言ってるなら聞くなよ…

「まあ簡単に言わないからな。後他言無用」

「うん…」

俺個人としてはあんまり言いたく無いんだがな

「アイツは俺のオヤジみたいな奴。詳しくは知らない」

「そうなんだ…」

俺だってあんなカスの話はあんまりしたくないし

「はい、質問終わり。風呂沸いてるけどどうする？」

「うゝん…それじゃあ先に入るね京哉君」

「解った。それじゃあ場所はあっちだから」

「うん」

凜は着替えを持って浴室に向かった

「…アイツか…」

『主…』

カイトとフェルが心配そうな顔で現れた

「…どうかしたのか？」

『いえ、京哉殿がその男性との縁を聞きました』

「カイト、話したのか？」

『申し訳ありません…』

まあ家族だから知って当たり前だからな…

「構わないが…」

『他言無用ですな』

「ああ」

奴は今でも精霊狩りをしているだろうな…昔は全く意味が解らなかったが今は解る。必ず俺は家族を守らないとな…

「皆の部屋を準備でもするか」

『皆…という事はもしかして我々も入っています？』

「当たり前だろ？飯の時皆居なかったから先に食べさせてもらったが…」

『…時々京哉殿が解らなくなりますね』

…？全く解らない人ではないだろ…？

「とりあえず部屋の準備しておくから皆呼んで飯を食っててくれ」

『御意、頂きましょう』

『アオイ殿からも京哉殿の手料理は素晴らしいと聞いていましたから楽しみですね』

アオイそんな事言っていたのか…まあ美味しいと言ってくれるのは嬉しいな

「…今度新しいのに挑戦してみようかな」

それだつたらまた食材用意するか

第七十一話 部屋が無いだど！？俺の家で大丈夫か？（後書き）

思つたより投票が無い…

京哉「まあ…見られてないからじゃ無いか？それかもう飽きられたか」

いや、皆様忙しいだけだ。そうだ、うんそうだ

京哉「…それでどうするんだ？」

時期を延ばす。そうしよう

京哉「いつまで？」

まだ決めて無い…次の話で発表するよ

京哉「そうか、それでは読者の皆様。投票を待っています」

第七十二話 それぞれの用事とちよっぴりのミス（前書き）

修学旅行の続きです！

後延長日付を龍夜様の案で2月10日が最終となりました。
皆様のご投票お待ちしております

ではどうぞ！

第七十二話 それぞれの用事とちよっぴりのミス

S i d e 京哉

「…何だこれ…」

「何だろうね…」

おはよう皆、京哉だ。朝起きたらでっかい段ボールが玄関にあつてさ…送り主の名前がミスターRって書いてたんだ…誰だよRって中身は見た感じはカードだが…」

「ボク宛にもある…」

「…とりあえず部屋に運ぶか」

「ボクも手伝うね」

うーん…今度ペガサス会長とか葵姉に聞いてみよう

S i d e 葵

おはよう皆…葵だよ。うう…クソカスゴミウジ下郎虫以下共叩けなかったよ…兄さんが止めさえしなきゃ…

「先生、今日何処に行くんだよ」

「…うう…」

十代君…今度課題増やすから

「まあ今日は自由だからな何処に行ってもいいが俺か葵には連絡取れるようにしろよ」

「よっしゃー！じゃあまた双六さんに会いに行こうぜ！」

「あつ、アニキ！」

「待つて欲しいザウルス！」

「緋焰と月読はどうする？」

「俺は神谷と一緒に行くぜ！」

「俺は部屋に籠る…出たらまた桃香に絡まれる…」

…京ちゃんに会いたいよ…そうだ！

「会いに行けば良いじゃない！そうなれば早速…」

「駄目だ葵。俺達はペガサス会長に会いに行かなきゃいけないだろ」

「やだ！京ちゃんに会いに行く！」

京ちゃんのお家に行くんだ！

「わがまま言うなよ…そうだ、アイツに電話するか」

兄さんはそう言って電話をし始めた。今の内に…

「おう、京哉か？」

「もしもし京ちゃん！お姉ちゃんだよお姉ちゃん！」

Side 海度

携帯かつさられた…まあ後は京哉に説得して貰うか

「京哉、葵を説得してくれ。ペガサス会長の所に行かないって聞かないんだ」

さっさと話して携帯を取り返して貰うか

「あつ！ちよつと兄さん！」

『海兄も大変だな…とりあえず葵姉に替わって』

「はいよ。葵、京哉がかわ…もしもし京ちゃん！今お家だよね？今から行つて良い？」…

そういえばいつから葵は京哉に弱くなつたんだ？

「うん解つた！じゃあ後でね！ほら兄さん！さっさと行つてさっさと仕事終わらせよ！」

…そして京哉はいつの間に葵をコントロール出来るようになったん

だ？

S i d e 京哉

さて、朝食も済んだ事だし…これからどうしよう

「京哉君、今日皆はどうするの？」

「今日は自由行動って言うてたからいろいろ回っているんじゃないか？」

「そっか…じゃあボク等も何処かに行かない？」

「うん…そうするか」

家に居てもただ暇なだけだしな

と言っていたけど何処に行こうか全く考えて無かったな…

「とりあえず繁華街の方に行こうか」

「うん」

凜が俺の左腕に抱きつき俺は歩きだしたが…凜達の間では抱きつく事が流行ってるのか？

S i d e 凜

ボク達は繁華街に着いて今いろいろ見ている所なんだけど…

「京哉君行きたい場所って無い？」

「無いな…あんまりこの辺り来ないし。凜は？」

「ボクも無いかな」

こんな調子で目的も無く歩いているんだ…でもこれはこれで楽しいから良いんだ

「おっ…これは…」

京哉君はとある店に貼ってあった1枚の貼り紙に目が止まった

「京哉君、何見てるの？」

「ん？ちよつとな…」

そこには…『来れ！ロマンを夢見たデュエリスト！グレートコンボを見せつけよ！』って書いてあったの

「日付は…今日かあ…」

「京哉君出るの？」

「どうしようか？飛び入り参加とかしていいのかな？」

「でも受け付けは本日12時までって書いてるよ？」

「今は…10時30分か…いや、凜と行くよ。せつかく出掛けてるのに俺1人で楽しむのは良くないからさ」

ボクとしては京哉君がデュエルしているのは大好きなんだけどもあ…

「ボクは大丈夫だよ。京哉君がデュエルしている姿が好きだもん」

「でもなあ…」

「ほらほら、早く登録に行こ」

「ちよつ、ちよつと！」

ボクは京哉君と一緒に店に入って行った

S i d e 京哉

「それじゃあこれが場所と開始時間だから時間までに来てください」
「はい」

1枚の大会の貼り紙が気になってちよつと見ていたら凜に押し切られて参加となつただけ…

「それにしてもかの有名な立花京哉君がウチの店に来てくれるなんて嬉しいです！写真とサインお願いして良いですか！？」

「ええ、まあ…」

「ありがとうございます！」

店員がどうも俺のファンらしく俺が店に入って来た時の表情はかなり嬉々としていたな…

「それじゃあここにサインをお願いします！」

いつの間にか売られていた俺のプロマイドを店員は取り出した

「はあ…」

こんなの何処が売り出したんだよ…裏面には…海馬コーポレーション…

「…はいどうぞ」

あのアホ社長が…今度叩き伏せてやる…

S i d e 藍

…あつ、皆さんこんにちは…藍です…今私達は遊城先輩や倭先輩と一緒に決闘者王の所縁の場所をいろいろまわっている所です…

「一通り回ったんとちゃう？」

「そうだな、どっかで飯にしようぜ」

「何処にするんスか？」

「やっぱりバイキングドン！」

「いや、今日は和食だぜ！なっ？神谷！」

「私は何でも…」

「久しぶりに京哉さんの手料理を食べたいですね…」

「京哉先輩のは…反則レベルですから…」

…そういえば京哉先輩から童実野町のお勧め店をガイドマップで教えてもらいましたね…あの時の先輩の無邪気な顔はとても良かったです…／／／

「あの…京哉先輩からお勧めのお店を書いてあるガイドマップがあるんですが…」

「ホントか!？」

「流石京哉君や、そういうのきっちり調べとるで」

「ホント仲間思いの人ツス…」

「立花先輩に感謝ザウルス!」

「仕方無く行つてやるか…」

「仕方無くなら龍牙は行かなくていいよ?私達は行くけど…」

「勿論行かせていただきましょう!」

「京哉さんのお勧め…とても楽しみです!」

「やつぱりアニキは他の奴とは違うぜ!」

「本当ね」

…あれ?人数が増えていませんか??

「つてトツシーも暗奈ちゃんもいきなり現れよつたな!？」

「何言つてんだよ!アニキが勧めた店は絶対に行かなきゃアニキに失礼じゃねえか!」

「…暗奈先輩は…?」

「私は丁度用事が終わったから来たのよ」

「そうなんですか…」

そういえば暗奈先輩つてとても不思議ですね…いろいろな所から現れますし…

「それより早く行こうぜ」

「待つてよアニキ」

遊城先輩が速く行ってしまった…場所は知っているんでしょうか…?

S i d e 倭

藍が持つとった京哉君ガイド（倭が今命名）に従ってとある店に着いてんだけど…

「なんやこのボロっちいのは…」

「倭、それはあんまり言わない方が…」

しかも暖簾に書いとるのがカタカナでカワサキ…確か京哉君に勧められて見たアニメに全く同じのが出とったで…確かカーナビ…かなんかやったと思うで。んで同じカワサキっちゅー名前の店があつてんだけどそのアニメ上めっちゃ不味い話やったで…

「そこまで言う程ボロくないぜ？逆に俺はこういう店の方が好きだぜ」

「確かにちよつと古い所は隠れた名店って良く聞くッス」

「でも実際不味いかもしれないドン…」

「とりあえず入ってみようぜ坂上」

「そうやな」

まあたまたまやろ、良くある話や。とりあえずウチは扉を開けた「いらっしやーい、レストランカワス」

ピシャッ

「倭さん、どうしたんですか？」

アカン…絶対ここアカン…なんでまんまアニメの姿やねん！

「入らないんですか…？」

「なあ…ここ替えへん？」

「なんでだよ坂上？」

「なんか嫌な雰囲気出しとって…」

「…そうかしら？」

「とりあえず入ろうぜ」

十代君を筆頭に皆入ってった…ううゝ皆入ったらウチも入らなアカンやんかゝ

「しゃーない…入るか…」

結果…言わずもがな…アニメ通りやった…皆あの味に全滅したで…
京哉君なんでここ勧めたんや…

第七十二話 それぞれの用事とちよっぴりのミス（後書き）

えゝ投票提示者にアリスを入れ忘れて居ました…誠に申し訳ありません。

再度投票対象のご確認を致します

京哉、倭、喬、凜、涼、藍、アオイ、カイト、アキト、アリス、姫、
フェル、利光、海度、葵、帝、龍牙、凧、日向

です。今回は人と精霊は混合で行います

此方のミスでしたので変更は勿論有ります。誠に申し訳ありませんでした

超番外編 2人のお姫様（前書き）

今回は蛇様の小説、遊戯王、鋼鉄の旅人とのコラボです！

前後編でいきたいと思います

ではどうぞ！

超番外編 2人のお姫様

Side 京哉

「お兄ちゃん♪」

「アリス」

只今精霊界。まあ問題も終わらして帰ろうとしてた時さ。またあのカブトムシ不倫しやがってさ。どれだけ女好きなんだよ

「お兄ちゃん今から帰る所かな？」

「ああ、問題も終わったしな」

「そっか、私も用事終わったし一緒に帰ろっ」

「そうするか」

とまあその帰りだったんだが…

ぼふん！

「けほっけほっ… なっ何この煙？」

「げほっげほっ… アリスちよっと下がって…」

「うん」

「ふっ！」

俺は居合いで煙を消し去った。すると…

「やあ、君が京哉君かい？」

…子供が1人「子供って思うなよ！」…そして心を読んで「心を読んできやがったって思ったでしょ？」…何コイツ…

「そしてさっき何コイツって思ったでしょ」

「まあな」

「…まあいいや。私は神様だよ」
「…は？神様？神様って言うって…あの神様だよな？」
「…あの野球の？」
「そうそう私は野球の…ってそれは稲尾だよ！」
「じゃあ代打の…」
「それは八木！」
「違うよお兄ちゃん、あの神龍を蘇生出来る…」
「それはピツコロと別れた神様！」
「え…じゃあ山坂と湖の権化」
「それは神奈子！確かに神様だけどさ！」
「なら守矢に…」
「諏訪有りって違うよ！」
「じゃあ現神人？」
「それ人入ってるじゃん！？」
「それじゃあ秋の姉妹？」
「それも違うって！」
「ナズのご主人様？」
「毘沙門天の星ちゃん違う！」
「あ、解ったよお兄ちゃん！」
「本当に！？」
「六十年目の東方裁判！」
「ヤマザナドウ違あああああああう！」

しばらくお待ち下さい

「はあ…はあ…お、お嬢さん…」
「パンツ履いてません」
「どっひゅーんって違うよ！」

いろいろボケてみたんだがコイツ素晴らしくツツコミを入れる…ただ者じゃ無いなコイツ

「それで仮様だっけ？」

「神だよ！ゴツド！へアー！ペーパーのかみ！」

「ゴツドへアーペーパーって名前の？」

「違う違う違う！」

「略してゴヘーパーだね」

「いやいやいやいや！名前じゃ無いし略さ無くてもいいよ！」

「え？略して言った方が良好いよね普通？」

「まあ略した方が言いやすいし」

「言いやすいけど名前じゃない！」

名前じゃないのか…じゃあ何がゴツドへアーペーパーなんだろう

「…もういいよ…疲れた…」

「お兄ちゃん、ボケれなくなつたよ」

「残念だ…それじゃあ本題に入ってくれ」

神様だか仮様だか何だか知らないけどさ

「…何か失礼な事考え無かつた？」

「いや」

「…まあいつか。えつと…いきなりだけど平行世界って「信じる」即答！」

それでも何人ともデュエルしたんだ。あれで信じないって言う奴は海馬以上のアホかマヌケだ

「それなら話が早いからいいよ。私の世界にいるデュエリストとデュエルして欲しいんだ」

おつ、平行世界の住人とまたデュエル出来るのか。良いことだ
「それならそうと早く言ってくれば良いのに」

「ホントだね」

「いや、君達が言わせてくれ無かつたからだろ！？」

「「そーなのかー」」

「くっ…何かムカつく…」

これはこれは…伊勢界もとい異世界の方だけどかなり弄りがいのある人を見つけたぞ

「あ、デュエルするにあたっていくつか条件つけていいかな？」

「ん？」

「まず第1にブリザードプリンスを切札的存在として使用」

「えっ、何で？」

「向こうもブリザードプリンスのモンスターを使用するからね」

「成る程ね、それでもう1つは？」

「本気でやる事」

…何言つてんだこの神様。当たり前じゃないか

「当たり前の事を言ってるじゃねえよ」

「そうだね。ごめんよ」

「お兄ちゃんが手を抜く時はゲームの時だけだもんね」

「まあな」

「いやそれも駄目でしょ…」

だって俺が本気出したら面白く無いって皆言うもん

「まあいつか。それじゃあ私側の世界のデュエリストを呼ぶよ」

パチンッ！

「…あああああふげっ！」

自称神が指を鳴らすと空に空間が出来てそこから1人の男が落ちてきて地面にぶつかった。痛そうだなおい

「何すんだよ仮様！」

「痛そうだったね、ごめんよ。それより紹介しよう、彼が今回の君の相手である立花京哉君。そして京哉君の相手がこの彼、鋼野龍一だよ」

「…何か釈然としないがまあいいや。鋼野龍一だ」

…身長ちよつと高いな…それとも俺が小さいだけか？

「俺は立花京哉、それでどうする？此方は客人をもてなす義務があるんだが？」

「？一体どういう意味だ？」

「また始まったお兄ちゃんの悪い癖…」

「プリン！？お前お兄ちゃんってどういう「ご主人様私は此方だわさ」…あれ？」

「まあそういう事だよ龍一」

向こうも精霊はブリザードプリンセス。だから切札指定か

「あー！お兄ちゃん、私だよ！」

「ご主人様、コイツ等誰だわさ」

「ああ、別世界の人間さ。紹介するよ、俺の精霊のブリザードプリンセスのプリンだ」

「よろしくだわさ」

「よろしくねプリン」私はアリスだよ

…自分が自分に握手…正確にはブリザードプリンセスがブリザードプリンセスにだけど。なかなか滑稽だな

「まあ立ち話も何だし座るか」

「座るって…何処に座るんだ？」

「そこに某狸レベルの便利人間が居るじゃないか」

そう言つて俺は仮様…もとい神様を指差した

「私は人間じゃ無くて神様だよ！」

「何でも良いよ。椅子とテーブル、後しっかりした台があればいいよ」

「…え？」

「出して」

「…もしかしてドラと間違つて無い？」

「間違つて無いよ。とりあえず人数分よろしく」

「…解つた…」

観念したようで龍一君が現れたように出てきた…お母さんそんな

荒い子に育てた覚えは無いわよ！

「アンタに育てられた記憶無いよ！」「良いツッコミだが心を読んだから減点だ」

「何の！？」

これはこれは…素晴らしく楽しい奴だよ君は！

「あのさ…そろそろいいか？」

「おっと、すまないな。準備しよう」

「…あのさ」

「龍一君、これだけはツッコまないでくれ」

今俺はクレープを作っている。え？材料？機具？さあ何の話でしょう。全てポケットから出したよ俺は

「…ちなみに聞くけどそれ何枚目？」

「952枚目」

「…すまねえ」

「気にすんな」

その理由はさつきから山の量を食べるプリンに問題があった

「プリン凄く食べるね…」

「これ美味しいからいくら食べても大丈夫だわさ」

「神でも無理だよこんなの…」

今プリンの前にある皿には500個のクレープが置いてある。それ以前に同皿452個を平らげその前にはパフェ26個を完食している。ふふふ…デカ盛りを突破されたのは驚きだが久々に萌えげふんげふん、燃えてくるじゃないか…

「後でしっかり代金請求しておくからな…龍一君」

「ちよちよちよ！マジかよ、あの量だぜ！？払うのキツすぎる！」

「ああ、材料代金だからな」

「マジかよ！」

「安心しろ、材料費は軽く見積もってこれくらいだ」

俺は電卓を取り出し弾き数字を出した。その数字を見て龍一君は真っ青になってプリンを宥めに行った

「プリン、もう止めてくれ！これ以上はダメだ！」

「何故だわさ？」

「俺が破綻してしまう！」

「でも京哉はどれだけ食べても良いって言うてただわさ」

…軽い冗談だったのにここまでとは…面白いなあ龍一君の世界ってのは

「お兄ちゃん、あんまりいじめちゃだめだよ！」

「流石にちょっとやり過ぎたか」

まあ3265万なんて誰も払えないしね。さって、それじゃあ俺の分も作ろうかな

超番外編 2人のお姫様（後書き）

次はデュエル中心です

蛇様、神様弄り過ぎてすみませんでした…多々解らないネタはスル
ーでお願いします

超番外編 攻撃はパワーだぜ！（前書き）

遅れました…いやもうマジすみません…

バイトの云々でようやく決定しました…
ではどうぞ

「ああ！始めようか！」

俺達は向かいあった。良いデュエルになるといいな

「デュエル！！」

京哉LP4000

龍一LP4000

「俺から始めるぜ！ドロー！」

先行とられたか…一体どんなデッキなんだろうか…

「魔導戦士ブレイカーを召喚！」

魔導戦士ブレイカー 攻1600

「魔導戦士ブレイカーが召喚に成功した時ブレイカー自身に魔力カウンターを1乗せる！ブレイカーは自身の魔力カウンター1につき攻撃力が300ポイントアップする。カードを2枚伏せてターン終了だ」

魔力カウンター1

魔導戦士ブレイカー 攻1600 ↓ 1900

だいたい魔力カウンターデッキと思うけど…元々万能モンスターだからカオスモンスターを出す為の布石か…

「俺のターン、ドロー！」

手札は良好って…まあ前のデッキからアオイとフェルを抜いてちょっと弄っただけだからあんまり変わらないけどさ

「王立魔法図書館を守備表示で召喚！」

「更にフィールド魔法魔法都市エンデュミオンを発動！」

「やはり魔力カウンターか……」

「さつて……早速飛ばすぜ！魔法カードを発動した事により王立魔法図書館の効果により魔力カウンターが王立魔法図書館に乗る！そして魔法カードトゥーンのもくじを発動！デッキからトゥーンと名の付いたカードを手札に加える！そして魔法都市にカウンターが乗る！そしてトゥーンのもくじを手札に、更に発動！トゥーンのもくじを手札に！そして王立魔法図書館に魔力カウンターが3つ乗っている事で効果発動！魔力カウンターを3つ取り除き1ドロー！そしてトゥーンのもくじを更に発動！最後にトゥーン仮面魔導士を手札に加える！そして王立魔法図書館と魔法都市に魔力カウンターが乗る！」

「流石魔力カウンターと言うべきか……」

「つて言ってもここで終わりなんだよなあ……」

「カードを2枚伏せてターン終了」

魔力カウンター

王立 1

魔法都市 3

「ガンガンに行くなあ」

「まあね」

「それじゃあ俺も便乗しようかな。俺のターン、ドロー！おつ、京哉。俺は一步お前の上を行かせてもらおう！」

「へえ、やってみな！」

「行くぜ、まずはブレイカーの効果発動！自身に乗っている魔力カ

ウンターを取り除き相手の魔法、罾を1枚破壊する！俺は…」
どれを破壊する？魔法都市は魔力カウンターを取り除けば破壊は免れるぜ？

「魔法都市を破壊！」

「ならば魔法都市エンデュミオンの効果により魔力カウンターを取り除き破壊を無効にする！魔法都市のカウンターを取り除く！」

魔力カウンター

ブレイカー 0

魔法都市 2

「そしてブレイカーを生け贄にプリンを召喚！」

ブリザードプリンセス 攻2800

「それじゃあ暴れるだわさ」

わーお…早速来やがったか…

「更に永続魔法一族の結束を発動！」

マジかよ！あれ持ってるのか！？

「選択される種族は勿論魔法使い！魔法使い族モンスターの攻撃力は800ポイントアップする！更に永続魔法、魔法族の結界を発動！更に追加で二重召喚発動！クルセイダー・オブ・エンデュミオンを召喚！」

クルセイダー・オブ・エンデュミオン 攻1900 ↓ 2700

ブリザードプリンセス 攻2800 ↓ 3600

「魔法が発動した事で魔力カウンターが乗るけど…不味いなこりゃあ…」

魔力カウンター

魔法都市 5

王立魔法図書館 3

あの伏せがマジシャンズサークルじゃ無いのを祈りたいが…

「バトル！クルセイダー・オブ・エンデュミオンで王立魔法図書館を攻撃！」

伏せてあったミラーフォースが腐ってしまっ「この瞬間伏せカード発動！」

まさか…

「マジシャンズサークル！お互いデッキから攻撃力2000以下の魔法使い族モンスターを特殊召喚する！そして追加でもう1枚だ！」

…ここで決めて来るのか…ここは慎重にモンスターを選ばないと…

「俺はマジシャンズヴァルキリアを2体特殊召喚！」

マジシャンズヴァルキリア 攻1600 ↓ 2400

「なら…俺は見習い魔術士と…闇紅の魔導士を特殊召喚！」

見習い魔術士 攻400

闇紅の魔導師 攻1700

「見習い魔術士の効果発動！召喚、反転召喚、特殊召喚された時自分フィールド上のモンスターに魔力カウンターを乗せる！闇紅の魔

導師に1つ乗せ闇紅の魔導師の効果で魔力カウンター1につき攻撃力が300ポイント上がる!」

魔力カウンター

闇紅の魔導士 1 攻1700↓2000

「バトルは続行している、王立魔法図書館を潰すぜ!」

「だが自分フィールド上に魔力カウンターが乗っているモンスターが破壊した時モンスターに乗っている魔力カウンターを全て魔法都市にさせる!」

魔法都市 8

「構わねえ!次はプリンで見習い魔術士を攻撃だ!アイスエイジハ
ンマー!」

「さつさと潰してまた食べるだわ」

「ぐうつ!」

京哉LP4000↓800

「だが…見習い魔術士が破壊された時デッキからレベル2以下のモ
ンスターをセットで特殊召喚する!」

特殊召喚したモンスターは水晶の占い師…コイツに賭けるしかない
な…

「マジシャンズヴァルキリアでセットモンスターへ攻撃!」

「セットモンスターは水晶の占い師、デッキの上から2枚確認しど
ちらかを手札に加えもう1枚をデッキの一番下に戻す!」

確認した2枚は…神聖魔導王エンデュミオンと…壺の中の魔術書か…

「俺は壺の中の魔術書を手札に加える!」

この3ドローに賭けてみるか…

「ラストだ！もう1体のマジシャンズヴァルキリアで闇紅の魔導師に攻撃！」

京哉LP800↓400

「…ギリギリ…って所か？」

「仕留めれ無かったなあ…ターン終了だ」

さって…ギリギリだが…ここからが勝負だぜ！

超番外編 攻撃はパワーだぜ！（後書き）

これでデュエル前半は終了しました。次は後半ですな

遅くなりましたが…投票していただきありがとうございました。次話の更新〓投票の総計が終了なので次はとても遅れます

作者の都合も込みなのでご了承下さい

なるべく早くやるようにはします

では

超番外編 パワーが相手ならこっちはアビリティ！（前書き）

…短い！！

アホみたいにデュエルシーンが短い！

今回はマジ情けない…ではどうぞ…

超番外編 パワーが相手ならこっちはアビリティ！

京哉LP400

龍一LP4000

さつて…反撃する気満々だけど正直このライフ差はやばい…3ドロ
ーに賭けても良いが…

「俺のターンドロー！」

…おつ…これは…ちよつとは戦線がマシになるな

「俺は魔法都市エンデュミオンのカウンターを6取り除く！」

「げ…まさか…」

「そのまさかさ！現れる、神聖魔導王エンデュミオン！」

神聖魔導王エンデュミオン 攻2700

魔法都市 カウンター9↓3

「この特殊召喚に成功したエンデュミオンの効果で墓地の魔法カ
ードを1枚手札に加える。墓地のトゥーンのもくじを手札に加え、エ
ンデュミオンの第二効果発動！」

「第二効果…手札から魔法を捨てフィールド上のカードを破壊…だ
っけ？」

「そのとおりだ！」

「けどここは慎重に選ばないといけないな…本来壊したいのはマジ
シャンズヴァルキリアだが…一族の結束かプリンという選択肢があ
る…よし

「トゥーンのもくじをコストとして一族の結束を破壊！」

「くっ…」

クルセイダーオブエンデュミオン 攻2700 ↓1900

プリン 攻3600 ↓2800

マジシャンズヴァルキリア×2 攻2400 ↓1600

「そして魔法カード壺の中の魔術書を発動！お互いカードを3枚ドローする！」

「ドロー！！」

魔法都市 カウンター4

よし！引いた！

「魔法カード地割れを発動！マジシャンズヴァルキリアを破壊！」

「くっそ…」

これで突破口は開いた！利子をつけて返す！！

「まだ通常召喚は俺はやってないからさせて貰うぜ、コールド・エンチャンターを召喚！」

コールド・エンチャンター 攻1600

「…嫌な予感が…」

「コールド・エンチャンターの効果発動！手札を1枚捨てる事に攻撃力を300アップさせる！手札を2枚捨て攻撃力を600アップ！」

コールド・エンチャンター 攻1600 ↓2200

「うわ…越えられた…」

「バトル！コールド・エンチャンターでマジシャンズヴァルキリアに攻撃！」

「ぐ…！」

龍一LP4000↓3400

「そしてエンデュミオンでクルセイダーオブエンデュミオンを攻撃！」

…どうでも良いけど自分と名前が似てるモンスターを攻撃するのに躊躇いとか無いのだろうか…？十代のスパークマンとか恋する乙女が相手の時なんかコミカルだったらしいぞ

「うぐ…」

うん、躊躇うとか全く無かった。ウチのエンデュミオンは涼しい顔して潰してた

龍一LP3400↓2600

『あらら…もう私一人だわさ』

「そして追加の速攻魔法発動！デイメンションマジック！」

「嘘お！？」

「コールド・エンチャンターを生け贄にアリスを特殊召喚！」

『はい！お兄ちゃんのピンチに颯爽と登場！！』

アリス 攻2800

「デイメンションマジックの第二効果でプリンを破壊！」

『コールドマジック！』

『寒いだわさ…！』

「プリン…ってお前ブリザードプリンセスだろうが…！」

…確かに。ブリザードのお姫様だもんな…寒いはおかしいな

「これで止めだ！アイスクラッシュハンマー！」
『でええええい！』

「くそおおおおお！！！」

龍一LP2600↓0

「ちくしょー！負けたー！」

あ…危ねえ…ギリギリだ…

「おおー凄い凄い、龍一に勝つなんて」

「やはり俺様を使えば…！」

「無理だつての！」…次回闘う機会があればラハールと戦ってみた
いな

「ならば立花京哉！俺様と勝負だ！」

…またこの展開かよ…いい加減うんざりだよ…

「それにしても京哉は強いなあ」

「いや、あのマジシャンズサークルで出すモンスターが間違っていたら負けていたな。ギリギリだぜこっち」

ホント危なかった…3ドローに賭けて正解だったよ

「俺様を無視するな！」

「それじゃあ食事会の続きやるか」

「それだけは…「やるだわさ」ちよっ！」

「よし、皆も食べるよな？」

「もちろんです！」

「主の甘菓子には美味ですから頂きましょう」

「ダンナ！俺のは辛味をよろしく！」

「アキト殿、それは甘菓子の意味が無いのでは？」

「私のは当然甘く作りなさい京哉」

「お兄ちゃん私もー！」

まあだいたいこのメンバーは味の好みが解るな…っーか辛いのか
作った事ねえ…

「私も甘く願います」

仮様の「神様だよ！」だから心読むな…

「俺様もよこせ！」

…確かラハールって機械族だよな…食べるのか？

「あら、私にもただただけるかしら？」

「…いつも通りだな、ゆかりん…」

「良いじゃない、面白そうなものに寄るのは基本よ」

…俺が面白い訳が無いだろうが…まあいいや、さっさと作ろうか。
また材料費を龍一君に請求しよう

「もう満足だわさ」

「そうですか…」

よよと龍一君が財布を開きプリンの隣で泣いている。…まあ請求
はまたの機会にしよう

「いやぁこれで満足だよ京哉君。ありがとう」

「どうも。満足していただき光栄だね」

…そうだ、自称神様なんだから神様から請求しよう

「なあ神様」

「嫌だよ」

「何も言ってないぞ俺」

「いやいや私心読めるからね！？」

「えらくケチな神様だなおい。良いじゃないかよ！10億飛んで3
54万ぐらい」

「金額上がってる！？」

ホント少ししか使えない神様だなおい…

「失礼な事考えたね今！？」

「いや、考えて無いよ」

いやぁホント楽しいなあ神様弄りってw

「う…うう…ちくしょおおおお！」

あ、神様が走ってどっか行った。どうしよう…やり過ぎた

「あら、仮様どこか行っただわさ」

「本当だ…」

…まあなんとかなるでしょ。神様なんだし

「…ただいま」

神様が謎にボロボロとなつて帰って来た

「もうお開きにする所だけど？」

「食べに帰って来た訳じゃ無いよ！」

なんだ…実はまだ残ってたんだけど…まあいいや

「そろそろ龍一も帰らないとね」

「そうだ…忘れてた…」

「そうか。また機会でもあれば闘おうぜ」

「次は負けないからな！」

「それじゃあ開くよ」

神様が指を鳴らすと再びワームホールが開いた

「私の能力を使うなんて許せないわね」

…ついでにゆかりんに目つけられた。神様ザマアw…気のせいかな？

キャラが崩壊し始めてるような…

「それじゃあね」

「またな！」

龍一君と神様は帰って行った…またな、か…

「またな龍一君」

また会える日を楽しみにしておこう

「あれ？ご主人様はどこだわさ」

「…ゆかりんよろしく」

「はいはい」

超番外編 パワーが相手ならこっちはアビリティ！（後書き）

今回は後悔はしているけれど反省はしない！！

紅煌蒼は今ドローゴーに夢中なんだ

いやこれホントなんです。ただ作るのに平和のオッサンが足りない
…くっそ…

後アマゾネスも作成したいんですよえ…鎖使いがあゝ…皆様は作成したいデッキとありますか？

では

第七十三話 特殊勝利に走った結果がコレだよ！（前書き）

ミスでした…これも全て羽蛾が悪い！（笑）

では修正版です

第七十三話 特殊勝利に走った結果がコレだよ！

Side 京哉

只今昼の13時である広場…名前は忘れた。しかし非つつつつつ常に疲れてる…実はさっき食べに行った店が問題なんだよ…

〈回想Time〉

「そついえばもうお昼時だね」

「そうだな、何処で飯にする？」

「ん…そつだ！この近くに新しくレストランが出来たからそこに行こ」

「へえ…じゃあ行くか」

「うん」

「ここだよ」

「結構小さいんだな」

「これでも美味しいって評判だよ？」

「とりあえず入ってみるか」

「いらっしやいませ、何名様でしょうか？」

「2名で」

「かしこまりました」

〈回想中断〉

まあここまではどう見ても普通だ問題は次からなんだ

〈再回想Time〉

「お待たせいたしました。オムライスとナポリタンです」
「ども」
「美味しそうだね」
「それじゃあ食うか」
「うん、いただきます」

「…ねえ京哉君」
「ん？」
「ボクの気のせいと思うけどあんまり美味しく無いね」
「…いや、普通に美味しいんだけど？」
「そうかな？昨日の京哉君のご飯の方が美味しかったし…」
「そんな事は「失礼ですねお客様！」…やっぱ…」
「私の料理に文句があるのでしょうか！？」
「文句では無いですけど…味に何か足りないような…」
「凜…いえ、とても美味しいですよ」
「貴方に言われまして貴方の彼女さんが納得していません！でしたら貴方と私で勝負致しましょう！」
「あ、それいいね京哉君」

「いやいやいやいやいや！おかしいでしょうが！？」
「今貴方方以外にお客様は居ますからその方々から厳正な審査の下
行いましょう！」

く回想終了く

…とまあこんな感じで12品料理して全勝…あの店の店長から追
出されたし…

「お疲れさま京哉君」

「…いや、もう何も言うまい…」
「？」

とりあえずデュエルの準備だな…グレートなコンボとか言われても
全く思いつかねえや…とりあえずエクゾディアで…いいや。…幻の
カード扱いだけど

「早速デッキを組もうかな」

「どんなデッキにするの？」

「内緒さ」

「えー教えてよ」

「今ここで教えちゃ面白く無いじゃん」

まあ多分皆びつくりするだろうな

「立花京哉さん、次なので準備の方をお願いします」

おっと、そろそろか即席で回るかな？

S i d e 凉

「酷い目におーたわ…」

「本当ですね…」

「まだ気分が悪い…」

「うう…京哉先輩恨みますよ…」

「今までいろいろな食べ物を食べて来たけどアレはもう食べ物では無いわ…」

「もう何も食べたく無いツス…」

「俺もだドン…」

…京哉さん…今度お返しさせてもらいますね…うう…

「…あれ、遊城は何処行つた？」

…本当です。十代さんが居なくなりました

「おい、皆〜！」「アニキ何処に行つてたんスか？」

「あつちでデュエルがやってるから見に行こうぜ！」

そう言つて十代さんは元気に走つて行きました。何故あの味を食べたのにあんなに元気なんでしょうね…とりあえず行きましようか

ある広場に着きました…が何やらデュエルを行っているようですね

「それじゃあ僕は右手に盾を左手に剣を發動して攻撃！」

「むう…だが仕留められなかったのは減点対象だ！」

…なんでしょう、アカデミアを思い出しますね。大会のタイトルがコンボがどうか…

「くっそ〜こんなのがあつたなんて知らなかったぜ！俺も出たかった！」

「俺の相棒達なら1ターンで終わらせれるな」

…この2人決闘が絡むと元気になりますよね

「…凜？」

「えっ…？今…」

「凜！」

「あつ、喬ちゃ…わっ！」

本当に居ました、凜さんです…しかも普通に帰っていますし…でも

いつ戻ったんでしょう？

「良かった…本当に良かった…」

「喬ちゃん…」

「ホンマ心配したんやで…」

「倭ちゃん…」

「戻って本当に嬉しいです…」

「涼ちゃん…ありがとう皆」

「何だが解らないけど先輩が帰って来たらしいから良かったドン！」

「…あつちは感動の再会なのにこっちは…」

「おおおおおお！今のすげえな！」

「こっちもすげえぜ遊城！」

「…雰囲気ぶち壊しねあの2人」

「…空気読みましようよ両先輩…」

Side 京哉

おつ、凜が再会出来たっぽいな

「さあ皆様方、ここでスペシャルゲストと登場です！あの武藤遊戯と海馬瀬人が認めた現代における決闘のカリスマ！立花京哉の登場だ！」

…は？今なんて言った？カリスマ？誰が？

「さあ皆様！京哉コールいきましよう！」

『京哉！京哉！京哉！京哉！京哉！京哉！京哉！』

コールとか止めてくれ！だいたいあのアホ社長また余計な事しやがつたな！

「…ども…立花京哉『きやああああああ！京哉様あああああああー！』…はは…」

ちくしよおおおおおお！海馬ああああああ覚えておけやああ

あああああ！

「それでは京哉さんとは今大会の優勝者と戦っていただきます！京哉さんより素晴らしいコンボを出せた場合挑戦者の優勝となりますので！」

…いや、それが基本的な勝利条件じゃないか？

「それでは優勝者とのデュエルです！優勝者はインセクター羽賀選手！」

…空耳だ、そうだ。そう思うでしょう。羽賀とか気のせい「ひよっひよっひよっ。何だよ遊戯と城之内の腰巾着じゃないか」…気のせいで現実は思わせてくれなかった…

「あとMC！俺様は羽蛾だって言ってるだろ？」

「すみません歯ケ選手」

「羽蛾だ！」

…葉画よ、弄られてる事に気付け。ただ名前ミスじゃ無いという事を。ほら、あそこの群衆凄い笑いかけじゃないか

「とりあえず遊戯や城之内と戦えないならお前と遊んでやるよ腰巾着。ひよひよひよ」

あんまり調子乗ると怒られるぞ？あそこの殺気放出5人組＋俺の背後の殺気放出精霊達に

「ソレハソレハオソレオオイ。カノウウメイナハガサントデュエルデキルナンテコウエイデス。竜崎戦の後のデュエリストキングダム」の1回戦で敗れた後全く白星を上げなかったからねえ」

その言葉に周りがドツと笑いが起こった。最初はコイツ等を可哀想とは思ってたけど城之内の話を全部聞いたからコイツと竜崎は嫌う…というか元々嫌い

「ソレニシテモアノ頗訛サンガチイサナタイカイニデテルノハオカシイト思いますね」

『あはははははは！』

「だっ黙れ！アイツ等が負けなければ俺だってこんなには出て無いよ！」

敗北理由は相手が悪かったからかよ…ガキかコイツは。あ、身長はガキだった」

「丸聞こえた！」

「それは失礼」

「と、とりあえず両選手デュエルディスクを起動させて下さい！」

「お前を絶対泣かせてやるぜ！」

「キモ…」

「デュエル！」

おおっ…この手札は…神は言っている…1ターンで終わらせると

「俺様の先攻ドロ―！代打バッターを召喚、更にトゲトゲの殺虫剤を発動して代打バッターを破壊！手札からインセクト女王を召喚！出番だ女王様〜！」

代打バッターアアアアアアアアア！普通名前から考えて破壊されるかわりにとかの効果じゃないと名前の意味無い気がするぞ！

『あら京哉様じゃない』

…ああ、インセクト女王の精霊じゃないか。羽蛾の精霊だったのか…持たれる奴があんなので可哀想に

『本当にそう思うでしょ〜？で、今日は娘に対する返答かしら？』

女王よ、この状況で返答何か出来ないって…そして心を読むな

「更に儀式魔法高等儀式術を発動！デツキからネオバグを2体墓地に送ってジャベリンビートルを儀式召喚！」

『これは京哉殿、久々ですな』

…いやホント所有者的な意味で可哀想に…

「更に魔法カード強欲な壺を発動！カードを2枚ドロ―しそして虫除けバリアー発動！カードを伏せてターン終了だ！」

オレ流マインドスキャン発動！伏せはDNA改造手術デース…って何をやってるんだ俺は

「ひよっひよっひよっ！どうだい俺様の「俺のターンドロ―」聞けよ！」

「…ふむ…手札から魔法カード強欲な壺を発動、カードを2枚ドロ

「。おろかな埋葬を発動し暗黒のマンティコアを墓地に送る」

「おっと、ツツコミで忘れてたけど永続罫DNA改造手術を発動する。勿論選択は昆虫だけだな！」

「だけど速攻魔法サイクロン発動」

「だけどこの2体には勝てないよひよひよ」

「そーなのかい。俺は永続魔法生還の宝札を2枚発動してエンドフエイズに入る」

「おいおい、モンスター出さなくて良いのかい？まあ出した所で「墓地の暗黒のマンティコアの効果発動」だから「このカードが墓地に送られたターンのエンドフェイズに手札かフィールドから獣、獣戦士、鳥獣族モンスターを墓地に送り蘇生させる」

そんなモンスター蘇生させた所で「俺は手札から暗黒のマンティコアを墓地に送り墓地のマンティコアを蘇生。さらに2枚の生還の宝札の効果で2ドロ」だから聞けって言ってるだろ！？」

小者の話何か聞いてられるか。無視無視。…インセクターだけに「更にさっき墓地に送ったマンティコアの効果でフィールドのマンティコアを墓地に送りまた2ドロ」

さあ皆、ドロループの始まりだよ！

「お、おい…まさか…」

「更に…」

少年ドロ一中

「そしてドロ。おっ」

「今度はなんだよ…」

「エクゾディア揃った」

「はあ？」

「ほい」

俺は手札見せると背後からエクゾディアの凄まじい気配を感じた

「エクゾディア、とりあえず羽蛾だけにエクゾードフレイム」

おお、頷いてくれた。そういえば遊戯も使ってたんだっけエクゾディア

「うわあああああああ！女王様、ジャベリンビートル！守ってくれ」

『どうする？』

『嫌よ』

『じゃあ避けるか』

『そうね』

あ、2人が羽蛾から離れた。哀れな…まあ全然良心は痛まないけど

「えつちよっ…うわあああああああ！」

言わずもがな…羽蛾にクリーンヒット。痛そうだなアイツ。どっちかと熱そうか

「おおー！決まったあああああああ！やはり立花京哉は強かったあああああああ！」

「み、認めない！こんなのは認めない！」

…リベンジとか言つなよ…こちとらこういう特殊勝利しかないからな

「リベンジだ！デッキ変えろ！」

やっぱり…仕方ない…相手してやるか…

その後…

「ほいウィジャ盤成立」

「うわあああああああ！」

誰も…

「ほい20ターンたった」

「うそおおおおお！」

羽蛾の姿を…

「ラストバトル発動。さあ攻撃力2350以上を出してみな」

「また負けたああああああ！」

見たものはいない…

「ヴィクトリードラゴンでダイレクトアタック。はいマッチ勝利」

「は…はは…」

はあ…もう夕方だし観客ほとんど帰ったし。居ても目を輝かす十代と龍牙、凜に喬に倭に涼に藍。呆れる翔と剣山に退屈そうにする杏奈しか居ないからなあ

「マッチ勝利したからもう相手しないからな」

…とりあえず帰ろう…そろそろ晩飯の時間だ

「…そういえばトシは一緒に無いか？」

「…ああ！忘れとる！！！」

第七十三話 特殊勝利に走った結果がコレだよ！（後書き）

もーね、「い」から始まり「う」で終わる奴があんな発言しやがってもうウザい！

という事で皆様、お身体にお気をつけ下さい。

第七十四話 皆も最初を見つめて初期をやるっ(前書き)

はい皆様おはようございます(笑)。修学旅行はさっさと終わりました。超手抜きで(笑)。やっぱり日常が普通に書きやすい…という事でどうぞ！

第七十四話 皆も最初を見つめて初期をやるう

S i d e ???

「よく集まってくれた皆」

「我等は敵対しているのに何故呼んだ？」

「確かに我々は敵対してきた。今もそうだ…しかし我等には共通する敵が居ろう？」

「共通の敵だと…？」

「そう…立花京哉だ」

「…なるほど…その共通の敵を討とうと我等を呼んだ訳だ」

「ならば話は早い。奴を討つまで共闘いたそう」

「…」「我等の女神様の為に…！」「…」「…」

S i d e 京哉

…なんだこのタイトルは？いや、気にしたら負けか。今修学旅行から帰った翌日の俺の部屋だ…え？話が早いって？作者に言え作者にそんなことよりあの次の日に十代が江戸と共に光のなんたらの教祖の妹に会ったらしい。塞翁だっけ？子安だっけ？忘れたけどなんか止めて欲しいって伝えられたってさ。後俺は終焉を迎える存在だから関わるなどか言われたんだが…

「気にすんなよ京哉」

「勝手にそんなレッテル貼られて関わるなって言われたらイラッて来るだろうが…」

「あんまり気にしてたらはげるッスよ」

「おい丸藤！アニキに何言ってるんだ！」

…まあ今日もこんな感じに楽しい日が続きそうだ…

ボタン！！

「見つけたぞ！立花京哉！」

「なっなんスか！？」

いきなりドアが開くと白い制服を着た奴等が数人入って来た。えつと…

「…白の氣志團だっけ？」

「違う！我々は光の結社だ！」

「ここから少し遊びます」

「光の戦士？」

「違う！」

「それはウ。トラ。ンですぜアニキ」

「あつ、そうか。ちなみに十代達はなにが好き？俺は断然レ。とパードだけど」

「俺はタ。ウとテ。ガだぜ」

「僕はガ。アとマ。クスッスね」

「俺はエ。スとネ。スッス」

「おつ、なかなかマニアックな部分と言ったなトシ。じゃあ仮面。イ。ーは？俺は勿論B。ackとR。だけどな」

「うゝん…俺はやっぱリク。ガだな」

「僕はブ。イドと。王ッス」

「真が一番印象強いッスよ俺は」

「確かに真は印象が強いな、直接生えてくるからなあ」

「ならガ。ダムはどうだよ京哉？俺は勿論Gだぜ！」

「俺は全般的に好きだがキ。・ヤ。トは嫌いだ」

「あのキャラは確かにチートツスよねえ」

「主人公はシ。・ア。力で続けて欲しかったなあ…」

「ちなみに一番好きなキャラはダントツでグ。ハムだな」

「面白いよなアイツ!!」

「ブ。ドーの時はかつこよかったツスよね」

「特に俺映画なんて泣きましたよアニキ…」

「あの自爆特攻はかつこよかったなあ…」

「それより京哉の声ってグラ。ムに似てるよな？」

「…そうか？今まで気にしなかったけど…？」

「試しに迷台詞1回言ってみてよ京哉君」

「なら…こほん。初めましてだな、ガ。ダム!!」

「おお！そっくりだぜ!!」

「君の存在に心を奪われた男だ！」

「やべえアニキ！マジそっくりツス！」

「抱きしめたいな、ガン。ム!!」

「目の前にグ。ハムがいるみたいツス！」

「なら最後はこの台詞で…今日の私は、阿修羅すら凌駕する存在だ

!!」

「「「おお!!!!」」」

「この間わずか5分」

「…それで何か用？」

「気のせいかな？コイツ等呆然としてるが…」

「…そつそうだ！我々は貴様にデュエルを挑む者だ！」

「…はあ？」

「光の結社って負けたら白髪になるって十代から聞いていたけど？」

「どーするんだ京哉？」

「ちなみに拒否をした場合貴様は敗北とみなし我々の女神様である
坂上倭さん」

「神谷喬さん」

「赤坂凜さん」

「如月涼さん」

「山本葵先生と」

「『『『接触及び会話、を全面的に』』』」

「よし黙れカス共。まとめて相手するからさつさと出ろ」

俺の制限は全然構わないけど葵姉の行動に制限をつけるのは許さん

「なっならば話は早い！」

「外で待機しているぞ！」

「さつさと行けカス共」

さつて…さつさと終わらしてなんか見るか…

「このデュエル終わったら何かするか？」

「なら丸藤がクロ。ク。ワーやろうぜ」

「ええ！？」

「おおっ！？それ面白そうだな！」

「ちよっ！アニキ！」

「ならそれ決定、準備よろしく」

「わかりやしたアニキ！」

「ちよっ！京哉君！」

『京哉様、どうかしたんですか？』

「まあいろいろとな。今回はさつさと終わらせるから」

『そうですか…』

さつて…相手は…え？なにあの人数…こっち1人だぞ…

「…アオイ」

『はい？』

「10分で終わらすから期待してるよ」

『はい！』

さつて…さつさと片付けるか！！

S i d e 葵

「ふんふんふん」

ようやく仕事終わったよ。早く京ちゃん分補給しよっと。その為に昨日の帰ってからすぐケーキも作ってるし

「京ちゃんと一緒なのは楽しみだなあ」

「サイレントマジシャンLV8でダイレクトアタック！」

『京哉様の敵は徹底的に叩きます！！』

「……うわああああああ！！」「……」

あつ、サイレントバーニング！じゃあ京ちゃん今デュエル中なんだ
「もう終わったみたいだね」

早くいこお

S i d e 京哉

はい終わり。宗教団体はお断りだなうん、ドアの前に書いておこう

「アオイ、お疲れ様」

『いえ、京哉様の為なら』

「ありがと、また頼むよ」

『はい!』

さつて、翔のク。ツク。ワーを見ようかな

「京ちゃああああああん!!」

「へぶう!!」

葵姉の…突撃が…鳩尾に…しかも地面に倒された…い、痛い…

「あ、葵姉…」

「えへへ」

えへへ…じゃ無いよ…全くこの人は、いつもいつも抱きついてきて

…それじゃ他の人と結婚出来ないぞ

「良いも〜ん。私には京ちゃんがいるも〜ん」

「心を読まないで頂きたい…」

「それより京ちゃん部屋の行ってこれ食べよ」

この箱…ケーキか。丁度十代達が居るし

「それじゃあ先に部屋行っててよ」

「はい!」

葵姉は元気にレッド寮駆けて行った。俺は皿でも食堂から借りるか

「あつちよつ!」

「丸藤そこ左だつて!」

「いけいけ翔!」

…あれ?クロ。ク。ワーからバ。オ1リメイクに変わってる…

「ク。ツ。タ。ーじゃ無いのか?」

「あれ地味だから私が替えたの」

…出たよ葵姉スキル、地味ゲー替え。…スキルじゃ無いか、地味嫌
いって特性か

「あつ!また食べられ…アーツ!!」

「やられたな…ちなみに翔、最初の選択肢って何にした?」

「うう…確か山を登るのは大変みたいな選択にしたツス」

「最高難易度乙」

「ええ！？」

大丈夫、某酒飲みだつてそれでクリアした。君も出来るさ……根気があれば

「それより俺の分のケーキは？」

[illegible]

何故目を逸らしている…はっ！まさか…！

「俺の分が…無い…だと…」

…何故だ…せつかく皿まで持って来たというのに…

「貴様等ああああああ！」

「「「「「
申し訳ございませんんんんんん！」「」

「コントローラーを取れ！俺のア○クでピッコロしてやるぜ！！」

今日は寝かさねええええええええ！！

「い い い い い い い い い い
「
「
「
「
ひ
「
「
「
「

「これで120勝！！」

ヒヤツハアアアアアア！今の俺は止まらねええええええ
ええええ！

「京哉様！やめて下さい！もう皆様のライフは0です！」

「HANASE!」

食い物の恨み、この程度で終われるかあああああああ！

第七十五話 アニメによく居る金持ちって馬鹿っぽい息子が多いよね（前書き）

今回も遊びに入ります

遊びを書くのが楽しくて仕方ない今日この頃…さすがに次はデュエルを入れますけど

ではどうぞ！

第七十五話 アニメによく居る金持ちって馬鹿っぽい息子が多いよね

S i d e 京哉

「は… 今日も真っ白な授業風景は終わりだな」

やっとおワタ授業。右に目をやると一面真っ白なりい！… オメガキモス…

「さつて… 寮で何をやるのかなあ…」

また格ゲーのK。Fの全国ネットでKCさん探してフルボッコしようかなあ… あの人ル。ールばかりだけどさ。途中途中に『粉碎、玉砕、大喝采！』とか『強靱、無敵、最強！』とか書いてくるからウザいんだけどなあ… まあル。ール以外は普通の腕だし

「立花京哉！今日も「宗教団体はお断り。はい帰った帰った！」うるさい！いい加減「はいはい悪霊退散！」へぶう！」

懐から『借金返済』と書かれたお札サイズの紙を顔面に叩きつけてやっただよ

「おっと、借金返済だからお前俺に返済しろよ」

「何がだよ！？」

「しめて1750000円になります」

「いやなんの借金だよ！？」

「いいからさつさと払え。1人2000円ずつ借りてこい」

「う… うわああああああん！」

あ… 何処かに逃げた。まあいっか、楽しかったし。そういえば黒いとなんて宗教団体だっけ…

「ミサイル団だっけ…？ランチャー団だっけ…？まあいいや」

今日は十代と釣りにするか… 釣竿あったっけ？前に卍上目がムシヤクシヤして折りやがったからな… 今度Gコザッキー送りつけてやる

…十代も翔もトシも居なかった…喬達も居ないし…くっそ…寂しく一人でやってるよ！

「ん？なんだあのへり…」

あ、ヘリポートに降りた…海馬か？海馬だったらジェット機使うか。それ以前に海馬だったらドロップキックかましてやる

「…あれ誰だ？」

金髪のとりあえずよく解らん奴が現れた。あつ、此方に気付いた。見なかった事にしよう

「おい、そこのお前！」

「今日はどこで釣ろうかなあ…」

「お前だお前！」

…五月蠅い奴だ…挽き肉にして今晚のおかずにしてやるのか？

「…何か用か？」

「用があるから声をかけた！」

「此方は用が無いから。じゃ」

「待て！」

そいつは下りてきて俺を掴んで来た。キモ

「まだ何か？」

「お前クズのオシリスレッドだろ？僕の妹を知ってるな？」

「知らん」

「嘘つけ！」

ホントに知らないのに嘘つけとか失礼な上にコイツ馬鹿だろ？

「じゃあその妹の特徴とかは？」

「全ての面に置いて僕の理想の女性だ！」

…俺が聞いたの特徴だよな？…つか妹が理想の女性っておかしくないか？

「じゃあアンタの理想の女性を詳しく…」

「僕の妹！」

駄目だコイツ…誰か散弾銃かマグナムをくれ、コイツの頭をぶつ飛ばしたい

「…はあ、ホントもう駄目だコイツ…」

「良いからさっさと教えろ！」

アンタの妹なぞ知らんって！…そうだ！

「その妹から何か聞いてないの？例えば…親しい人の名前とか…」

「親しい名前…そうだ！立花京哉！」

…俺の事ですわかります。…妹とかホント知らんぞ…

「妹がわからないならそいつに会わせる！」

…こういう奴に絡むのは面倒だから適当にあしらうか

「あっちに行けば会えるよ、髪型はクラゲっぽい髪型の人さ」

「わかった！例としてコレをやるう！さらばだ！」

そいつはカードを俺に渡してレッド寮に行った。ちなみに指定したのは十代、反省も後悔もしてないぞ。ケーキの恨みは恐ろしいからな…ふふふ…

「…ちなみにカードは…」

サンダーボルト

「禁止カードじゃねえか…」

…禁止ファイルに入れるか…これで25枚目…いらね

「さって、釣り始めるか」

俺流釣り場サーチ、発動！！ぶよぶよぶよぶよぶよぶよぶよぶよぶよぶよぶよ…

「今日は一番奥でいいや」

Side 喬

…よ、ようやく逃げれた…またファンクラブの人達に襲われたけど
とりあえず逃げ切れたみたい

「……じつからいね……」

ブルー寮はまた囲まれてると思うし……

「……京哉の所に決定だね」

今日は釣りに行くなってたってたっけ…どこでしているんだろ…と
りあえずレッド寮に行こう

Side
利紀

「あ……アニキiiiiiiiiiii！」

[illegible]

「また利紀が暴走した!？」

「利紀君落ちて着いて！」

「れ、冷静になるドン！」

五月蠅ええええええ！アニキに嫌われたら俺は…俺はあああああ
あああああああ！

「首を吊らせてええええええええええ！」

こうなったら……アニキの部屋で吊るぞおおおおお！

「見つけたぞ立花京哉！」

「あん？」

遊城の部屋から出ようとした時金髪の野郎が入って来た。つーか遊城とアニキを間違えんな！！

「えっと…誰だお前？」

「妹をたぶらかす奴に名乗る名前なんか無い！！」

「妹？誰ツスか？」

「貴様に妹の名を出す必要は無い！」

「えらく意味不明な人ザウルス…」

全くだ…そもそもアニキと遊城を間違えてる時点で意味不明な奴だぜ！

「関係無い！僕とデュエルしろ立花京哉！」

金髪野郎が遊城にデュエルを申し出た。つーか遊城とアニキを（ry

「俺は京哉じゃ無いけどデュエルを挑まれたら受けるのがデュエリストだぜ！」

「なら話が早い！外で待つぞ！立花京哉！」

金髪野郎は外に出て行った。だから遊城と（ry

「大丈夫ツスカアニキ？」

「大丈夫だろ？それにしてもわくわくするぜ！」

「せっかくなら観客を呼ぶドン！」

…アニキiiiiiiiiiiii！

Side 京哉

「へえ…あれ、お坊ちゃんだったんだ」

「左様で…破天荒な御方でございます」「あんなのに仕えるなんてじいさんもしんどいだろうなあ…」

「ほっほっほ…旦那様にもよく言われております」

今へりから降りてきた執事のじいさんと話してるんだ。三嶋カンパニーって所の跡継ぎらしい。んで妹って言うのがその父親の弟さん

の一人娘…いわゆる従兄弟だな。代々跡継ぎ条件として従兄弟と結婚すると決められているらしい…でも妹は此方で好きな人が出来て…今に至るって

「おっ、じいさんの方が引いてる」

「そのようすな、ほっ！」

じいさんが右手を上げると5匹程一気に釣れた。珍しいなあ…

「おや？立花様の方も引いておりますよ」

「おっ、ホントだ。しかも重い…よつとぉ！」

俺が両手を使って引き上げたのは…マグロだった。謎の当たりkr tkr！

「マグロでございますな」

「…なんだろう、こんなに簡単に釣ってしまったってマグロ漁船の方々に凄く謝りたい…」

「ほっほっほっ…」

…まあいつか。とりあえず今日は刺身確定だなうん

「マグロは焼いても美味でございます」

「マグロ焼きか…というか会社の会長さんに焼きマグロって…」

「三嶋様と旦那様は貧困の幼少時代を送ってられました。マグロの兜焼きでも大喜びでいただきますよ」

…金持ちに豪華な食事という偏見を持ってすいませんでした…それだけ辛かったんだな

「じゃあ半分は焼こうかな？」

「ほっほっほっ…」

とりあえずこのじいさんの話は楽しかった。また来てもらうか…このじいさんだけ

「…今日はもういいか。寮に帰るか」

「私も涉様を迎えに行きましょうか」

ならじいさんと一緒の方向だな、また何か話ながら行くか

「…っかあの金髪渉て言っんだな」
「そうです、三嶋渉様でございます」
「すっげアホ臭のする名前と容姿だった…」
「と、申しますと？」
「容姿と名前が合っつてこと」
「ほっほっほっ…」

第七十五話 アニメによく居る金持ちって馬鹿っぽい息子が多いよね（後書き）

…投稿して気付いたんだけど…投票結果まだ伝えて無いや…とりあえず次の七十六話を終えて発表します。

では！

今回の一言

アマゾネスを作るのを決定したけど鎖使いが店に無さすぎ泣いた

第七十六話 タイミングを考えて効果を使おう（前書き）

はい、最近頭が痛い作者です。どう痛いかは皆様のご判断にお任せします

ようやく出来たアマゾネス。誰も周りで持って無い鎖使いに皆の表情が無表情な件について抗議したい

某王国では店長がすっかり驚いてくれますし…皆冷たい…（泣）
まあ頑張っていきますよー！

ではどうぞ！

第七十六話 タイミングを考えて効果を使おう

S i d e 喬

ようやく着いた…改めて思ったけど校舎からレッド寮って遠いね…あれ、なんだろう？何かたくさん人が集まってる

「あ、喬ちゃん」

「凜。皆どうしたの？」

「なんや港から金髪の人が来たらしく十代君がその相手するらしいんよ」

「…金髪？」

なんだろう…嫌な予感がする。金髪の人で知り合いは1人居るけど…

「その方が十代さんを京哉さんと勘違いしてるらしく…」

…当たった…勘違いって言ったらあの人しか居ない…

「はあ…」

「どうかしましたか先輩…？」

「多分あの人だ…」

覗いて見ると…やっぱり…馬鹿だった

「よう神谷！ようやく来たか！」

「おい凜…神谷に気安く話しかけてんじゃねえ…」

「なんだあ…また殺るかあ？」

…もう助けて京哉…

S i d e 京哉

ん？誰か助けを呼んだ気がしたが…

「どうか致しましたか立花様？」

「いや、気のせいだったよ」

とりあえずあと少ししたらレッド寮だな

「おや？あれは渉様」

「えっ…じいさん見えるの？」

「ほっほっほっ…視力を鍛えておりますゆえ」

…どうやったらここから見える視力になるんだ？ここからレッド寮まで500mあるぞ…

「何してる？」

「負けていますね。アレはライフポイントを0にされたようです」

「何でわかつたんだ？」

「渉様は負けてしまえますと頭を抱えて上半身を回転させますゆえ」
…想像してみよう…キモッ！！そんな奴が次期社長かよ…会社の命運尽きたんじゃ無いか？

「…先を進もう…」

「わかりました」

「な、何だって！？君は立花京哉じゃ無いか！？」

「だから違うって言ってるだろ？」

「勘違いしすぎッスよ」

「はた迷惑ザウルス」

「そ（ry」

あれ？トシさつき喋ったのか？…まあいいや

「やあ京哉」

「三沢、この騒ぎは何だよ？」

「ん？何でもキミを探してたお金持ちの彼が十代に挑んだらしい」

へえ…って俺が原因だったなそれ。だから言っただろ？ケー（ry
「ところで三沢、お前は大丈夫そうで良かったよ」

「大丈夫だが誰にも相手にされて無いんだ…俺は相当存在が無いらしい」

「元氣出せよ三沢、らしくないぜ？」

「…だが…」

「あのなあ…何で目立ちたいんだよ、別に目立たなくても良いじゃねえか」

「しかし…」

「お前は俺達からすれば縁の下の力持ち、例え目立たなくてもお前にはありがたく思ってるよ」

「…京哉…ありがとう」

「…その画面の前の君！事前に言っておくが俺は男色家では無い、勘違いはするなよ！」

「…攻めは京哉先輩…受けは三沢先輩…良いネタです…」

待てやゴラああああああああああ！誰だ今良いネタって言った奴！出てこいやあ！

「ところで京哉、そちらの人は？」

「あ、ああ…あの金髪に仕えてるじいさん」

あんなのに仕わされてるから可哀想だ…なんて事は言わないでおこう
「お嬢様がお世話になっております」

「はあ…」

「ああああああああああ！見つけたぞ！その少年！」
うわ、また面倒なのに声掛けられた…

「君の話とは違うじゃ無いか！」

だって俺の事だもん。違うのは当たり前だ

「あつ、京哉」

「えっ!？」

…出会うタイミング悪いなあ喬…バレちゃったじゃないか

「な、なら君が立花京哉か!？」

「ああ、そうだけど？」

「……………」

金髪がポカーンとしている…まさに間抜け面だな

「お嬢様、お久しぶりでございます」

「え…志木さん…」

…このじいさん志木って名前なんだ…って

「お嬢様あ？」

思わず声が裏返ってしまった…って事は…

「この金髪って…」

「…私の従兄弟」

…マジか…喬なんて頭いいし冷静だぞ

「それよりお嬢様、涉様にお声掛けをお願い致します」

「あ、うん」

なんだ？喬が声掛けたら何か起こるのか？

「早く起きて、涉」

…しかし何も起こらなかった。そういえばちょっと前に龍牙が同じことを言ってもらって発狂してたっけ

「喬様」

「うう…あっちじゃないと起きないみたい…京哉がいるから恥ずかしいのに…」

あっち？呼び方にも何かあるのか？…か俺がいて恥ずかしい呼び方で起きるなんて最低だぞ

「…早く起きて

お兄ちゃん」

その時…京哉に電流が走る

「ぐふあああああああ！」

「京哉!？」

な…なんて威力なんだ…今の一言でもう出せる血液が…

「京哉君なんで血吐いたの？」

「アカン…それは強すぎやで…」

「確かに喬さんって妹という感じがしますよね」

…駄目だ…意識が遠退いてゆく…

「さよなら…現世…」

という脳内やりとりをわずか0.05で行なった。確かに妹属性は強い、現に龍牙とかうひょー!とか言つて騒いでるしシスコンの奴なら「きよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!」やつぱり起きた

「僕に会いたかったよ!！」

「私は会いたく無かった」

「それじゃあ帰ろうか!」

「帰らない」

「帰ったら早速準備だ!」

「帰らない」

「志木さん!早くお爺様と会長に伝達して!」

「志木さんしなくていいよ」

「畏まりましたお嬢様」

…結論、この金髪は部下の人からも従姉妹からも好かれてない

「な、何故なんだ!？」

「私はまだ学校に居たいから」

「良いじゃないか!プロなんて僕が裏から回せば…」

「そんなのでプロリーグには行きたくない。それに…」

喬が俺にちらつと視線を送ってきた。なんだ?俺の顔に何か付いてるのか?

「…とりあえず私は帰らない」

「な…なな…」

はい金髪お疲れ様。あれ？龍牙の口から人魂みたいなのが出てるぞ？まあいつか

「喬って家が富豪だったんだな」

「京哉には負けるよ？」

アレは会長の計らいと海馬のアホの給料があつたのが原因だ。会長の計らいの分はデッキを作っては遊べない子供達に送ってるけど…
アイツの気持はよくは知らねえよ

「立花京哉！僕とデュエルしろ！」

「…あ、まだ居たの？」

…従姉妹からまだ居たのは…心が痛いぞ

「まだ居たさ、喬と帰るまでは居るよ。それより僕とデュエルしろ！」

「はいはい…」

「おっ、次は京哉か！？」

「次はどんな１ターンキルが出るか楽しみだなあ」

「立花先輩なら先行１ターンキル出来るドン！」

「やったれ京哉君！」

「いつもの速さ期待してるからね！」

「今回も楽しみです」

「…ワクワク…」

「アニキ行け！」

「負けんじゃねえぞ京哉！」

「…立花には勝って欲しくは無いが…立花が負けたら…」

…なんぞこのプレッシャー…化け物か！？…喬は…

「頑張つて…京哉…」

…うん、頑張ります…期待した目をして欲しくは無かった

「それじゃあ…始めるか」

「ギッタンギッタンにしてやる！」

…なんだろう、生まれて初めてギッタンギッタンって言葉を聞いた気がする

「デュエル！」

…あれ？ライフが書かれてない…しかもこのデッキ試作で作ったダイスポットじゃん

「俺のターンドロー」

…モンスター居ねえ…まあいつか。とりあえず手札伏せるか

「カードを5枚伏せてターン終了」

「あつはつはつは！アレだけ勝つと豪語していて伏せカードだけかい？」

…俺は勝つとか豪語して無いし。コイツかなり面倒な奴だな

「僕のターンドロー！これは良いカードを引いた！」

この状況だったら大嵐かハリケーンだな

「装備魔法未来融合フューチャーフュージョン発動！デッキから5枚ドラゴンを墓地に送ってF・G・Dを融合召喚！そして墓地には閻属性モンスターが3体、ダーク・アームド・ドラゴンを特殊召喚！更に龍の鏡を発動！墓地のドラゴンを全て除外して2枚目のF・G・Dを融合召喚！」

…金持ち定番乙…F・G・Dを起用するよな皆。俺ドラゴン使わないからトシとか帝君とかにプレゼントしたし。そういえば帝君がかなり驚いて5回程返品希望してきたぞ

「そしてスタンピング・クラッシュを発動！真ん中のカードを破壊！」

「…手札1枚コストにカウンター罫発動、アヌビスの裁き。スタンピング・クラッシュを無効にしF・G・Dを破壊して攻撃力分ダメージを与える」

「え？」

…もうオワタ。てか結局良いカードって何だよ…しかも普通にダム

ドの効果使えよ。そつちなら確實3枚は潰せたぞ

「…終わったのか？」

「呆気ないツスね」

「確かに1ターンキルだったドン…」

「…おもんな…」

「あつという間だったね…」

「何故ダーク・アームド・ドラゴンの効果を使わなかったのでしょう？」

「…使ってたら3枚は破壊出来ましたよね…」

「流石ツスアニキ！」

「立花が…立花が…」

「おいおい、もう終わりかよ」

「…つわぁ…酷い言われようだなおい…で、肝心の喬は…」

「流石京哉だね」

「…従姉妹からも慰められないとは…」

「なァ喬…流石にあの金髪を慰めた方が良いんじゃないか？」

「大丈夫だよ、アレはそんなに脆くないよ」

「…か、可哀想に…今だけは同情する…」

「そ、それじゃあデュエルも終わったし…」

「立花様、ちよつとよろしいですか？」

「どうした志木さん？」

「ほっほっほっ…先ほどと同じで構いませんぞ。次は私とデュエルさせていただきますせんか？」

「じいさんと？」

「左様でございます。久々に御強そうな方々がおりますしお嬢様から立花様の御話を御伺っておりますゆえ」

「そっじいさんが言うつと喬は赤くなつた。…そんなに恥ずかしい事を伝えてるのか？」

「まあ良いよ、それよりデッキ取ってくるから待っててくれよ」
「わかりました」

じいさんがデュエルするなんて知らなかったなあ。ま、次は楽しめるかな？

第七十六話 タイミングを考えて効果を使おう（後書き）

最近ゴヨウが禁止に御用された事を友達とよく話してます。どう見てもエクシーズが原因でしょ、アレは。もしレベル6のエクシーズ出すのに相手の6を奪えばいいし…とりあえず他にモンスターが居れば御用して即エクシーズに飛べるのが原因と考えてますが…皆様どうでしょう？

ではこの辺で、皆も一緒に…スイッチオン！

作者の一言

プリズマーをゴールドかストラクで再録キボンヌ！

お待たせしました、結果発表！（前書き）

タイトル通りです！

投票して下さった皆様ありがとうございます！

お待たせしました、結果発表！

京哉「ようやくだな作者」

ああ…ようやく出せたんだ、忙しかったよ…

京哉「まあ…今回だけは見逃してやろう」

ありがとう京哉…さつて、それじゃあ結果発表を行なう…前にポイントの復讐…もとい復習を行います

京哉「今変な事考え無かったか？」

イエ、ナニモカンガエテナイデス…仇をとるのです

京哉「関係無いなそれは」

そーなのか…始めましょうか。簡潔に言つと1位が5P、2位が3P、3位が1Pとなります。これは逆転させやすくするためですね
京哉「それで発表は何位からするんだ？」

5位から1位まで行います

京哉「ボーナス話は何位からだ？」

3位から1位ですね。5位からでも構わないんだけど…まあ希望があればやろうかな

京哉「成る程ね」

それじゃあ発表…行ってみよう！

京哉「第5位は…」

じゃんじゃかじゃんじゃかじゃんじゃかじゃん！

5位…山本葵

葵「やったー！」

京哉「葵姉が5位か」

俺個人としてもびっくりだったよ

葵「京ちゃんとのラブラブ話をちゃんと書いてね」

いや、書くのは3位からだから…

京哉「ごめんな葵姉」

葵「んゝ残念…」

それじゃあ次、4位の発表！

京哉「第4位の発表！第4位は…」

じゃんじゃかじゃんじゃかじゃんじゃかじゃん！

4位…アリス

アリス「私！？」

京哉「やったなアリス！」

アリス「うん！3位には入れなかったのは残念だなあ」

京哉「仕方ないさ」

それじゃあ次、行ってみよう！

京哉「入賞、第3位は…」

じゃんじゃかじゃんじゃかじゃんじゃかじゃんじゃか
じゃん！

3位…赤坂凜

凜「ボクだ！投票してくれてありがとう！」

京哉「ボーナス話確定おめでとう！」

凜「ありがとう京哉君！」

京哉「×凜か…どう書こうかなあ…」

京哉「×を入れるな…次だ次」

さあお次は待望の第2位だ！

京哉「第2位は…」

じゃんじゃかじゃんじゃかじゃんじゃかじゃんじゃか
じゃんじゃかじゃん！

2位…アオイ

アオイ「私ですか？」

そうだ！精霊の中じゃダントツのトップだ！

京哉「アオイは最初から結構人気が高かったみたいだな」

アオイ「皆様ありがとうございます」

京哉×アオイは書きやすいな…

京哉「変な風にしたら殺っちまうぞ」

わかってるって。さあラストだ！

京哉「静チカキヤランキング第1位は…」

じゃんじゃかじゃんじゃかじゃんじゃかじゃんじゃか
じゃんじゃかじゃんじゃかじゃんじゃかじゃんじゃか
じゃん！

1位…立花京哉

京哉「俺！？」

そうだお前だ！というかお前のボーナス話って普段の生活だろうが！

京哉「ボーナスなのかアレ！？」

だから違う方向の話を書かせて貰う！

京哉「…どういう方向だよ…」

そういう方向だよ！

京哉「意味不明だ…まあいいや。今回ご協力して下さいましてありがとうございます」

まだ静かなる力は続きます！作者自身頑張ってよい作品としますの
でこれからも応援よろしく願います！

京哉「それでは本編で会いましょう、さようなら！」

ちなみに1つ…姫と涼と海度には1票も無かった

涼「知らない情報を漏らさないで下さい！」

海度「個人情報を守れよ！」

姫「最低ですわ！」

利紀「この墮作者！」

…ごめん、利紀は（存在）忘れてた

お待たせしました、結果発表！（後書き）

これからも我が駄作品をよろしくお願いします！

ちなみにコラボとかも受け付けてますよゝ

作者の一言

効果モンスターの効果なんて無効だ！

デイスカリ舐めんな！

第七十七話 この御老体…強いぞ（前書き）

今回は早く書けた！

Y a t t a n e

後カードショップ行ったらデスカリが1枚230円で3枚購入出来ました！

やったね！

それでは本編をどうぞ！

第七十七話 この御老体…強いぞ

Side 京哉

「お待たせじいさん」

あのデッキはしばし封印に決定した。事故率が高すぎる

「それでは始めましょうか」

「…あれ？じいさんデュエルディスクは？」

執事服のままでディスクを付ける素振りすら見せないが…

「立花様は御強い方なので本気で行こうと思えますゆえ…」

…本気じゃ無いと困るっての…俺が面白くない

「京哉気をつけて…志木さん凄く強いから」

…マジか…それはすげえ楽しみだ

「それじゃあ早速始めようぜ！」

「お手柔らかにお願いします」

「デュエル！」

京哉LP4000

志木LP4000

「俺のターン、ドロー！」

…動かない…なんだ？本気って言って何も無いのか？

「シャインエンジェルを守備表示で召喚、カードを1枚伏せてターン終了だ」

シャインエンジェル 守備800

「では…私のターンですね」
そう言うといじいさんは…

「ふんっ！」

上着を右手で脱いだ。…かつこいい…その下にコート型…デュエルディスクだと…？

「かつこいいなあ…」

…おっと、思わず言ってしまった…しかもクロノス先生が使ってるのよりかなり小型……つか最早あればデュエルジャケット…俺から見て右側はデッキと墓地…左はモンスターと魔法罫…

「ドロー！」

く…かつこいい…かなりかつこいいぞ！

「私は手札から魔法カード二重召喚を発動！そして六武衆―ヤイチ、見参！」

六武衆―ヤイチ 攻1300

「そして六武衆―イロウ、見参！」

六武衆―イロウ 攻1700

「六武衆…だと…？」

じいさん…アンタかつこ良すぎるぜ…

「そして手札から速攻魔法月の書！シャインエンジェルを裏に！そしてヤイチの能力発揮！この将以外の六武衆と名のつくモンスターが居る時1ターンに1度攻撃しない代わりに相手の伏している支援カードを破壊する！射ぬけ、ヤイチ！」

ヤイチが射ぬいたカードはガードブロック…やっぱりアイツみたいには行かないか…

「ガードブロックですか…手札補充カードですな」

「ご名答、しかし六武衆は厄介な…」

「流石立花様、六武衆を知ってましたか」

「まあな」

かなり強いなこりゃ…だがこのデッキは俺の家族が居る、負ける訳にはいかない！

「それでは続きを…皆、戦である！イロウよ、敵を切り裂け」

…確かイロウの効果は…裏を無条件破壊だったな

「イロウは伏する敵を叩く能力がある！」

やっぱり…まいったな、リクルートが出来ないか

「ちっ…」

「カードを1枚伏せてターン終了でございます」

六武衆は2体居て発揮出来るモンスター…なら

「数を減らせばいいが…俺のターン、ドロー！」

さつきは裏にされて効果破壊されたからな…なら…

「マシユマロンを守備表示で召喚！」

マシユマロン 守500

これでターンは稼げるな…念のためセットはしておこう

「カードを2枚伏せてターン終了だ」

「私のターン、ドロー。マシユマロンは戦闘破壊されないモンスター

…ならば再び効果破壊を狙うまででございます」

「何…？」

「六武衆―ザンジ見参！」

六武衆―ザンジ 攻1800

「ザンジは…確かダメージステップ終了後に破壊するモンスターか！」

「その通りでございます、ではヤイチで伏せを破壊させて頂く！対象は右、放て！」

チツ…ミラーフォースが…流石だ、じいさん

「更に…場に六武衆が居るときこの方が参上致します。六武衆の師範見参！」

六武衆の師範 攻2100

「何っ!？」

「では…戦じゃ！ザンジよ、行けい！」

ザンジの放つ一閃をマシユマロンは耐えるも…

「ザンジよ、さようなまやかしは切り伏せよ！」

追加の一閃で真つ二つになってしまった…チツ！

「イロウ、師範よ！追撃せよ！」

「ぐう！」

京哉LP4000↓200

イロウ、師範の順番で斬られた…なら

「伏せカード発動、ダメージコンデンサー！手札からモンスターを捨てデッキから師範の攻撃力2100以下のモンスターを特殊召喚する！頼むぜ、姫！」

『わかってますわ!』

戦姫―イザナミ 攻1900

「精霊…ですな」

…っ！？このじいさん精霊が見えるのか…？

「そうですね…ターン終了でございます」

…まあいい、皆を傷つけるなら後で叩くだけだ

「俺のターン、ドロー！」

手札は2枚…さて、どう挽回するか…

S i d e 倭

…京哉君が珍しく押されとる…掛けてきた罠をあの人全部潰しとる

「喬ちゃん…あの人めっちゃ強ない？」

「うん、だって私と涉がタッグを組んでも勝てないもん…」

「何回くらい挑んだのですか？」「個々で12回、タッグで18回挑んだよ」

30連勝って強すぎやろそれ！？

「京哉君勝てるかな…？」

「行け志木さん！妹をたぶらかすそんな奴殺してしまえ〜！」

「…なあ喬ちゃん」

「わかつてる…」

後で融爆でコイツ消し飛ばしたろ…

S i d e 帝

しまったなあ…遅れたよ…木原先輩から面白いのが見れるからレッ
ド寮に来いよってメール受けた時は先生の手伝いだっただけからなあ
「後少しだから頑張って日向」

「は、はい…」

おっ、皆さんが集まってるからアレか

「すみません木原先輩…遅れました」

「やっと来たかよ、アニキのデュエルにはちゃんと間に合わせろよ！」

「すみません…」

この人はかなり上から言うけど実際俺も立花先輩のデュエルは見ててもかなり楽しい。次は何を引くのか…次はどう展開するのか…見ている方もドキドキする

「今どういう状況なんですか？」

「京哉が押されてるぜ」

見てみると…月読先輩の言うとおりみたいだ、相手は六武衆か…

「かなり厳しいようですね。相手は4体、先輩は1体…ボードアドバンテージは相手が上ですね」

確かに日向の言う通り。だが…

「立花先輩はたった1回のドローで逆転するからまだ解らないよ」
頑張って下さいよ先輩

Side 京哉

姫を出したのまでは良いが…やはりザンジが邪魔か…

「ザンジをなんとかしないと…」

引いたのは収縮か…しかしヤイチは攻撃表示のまま…誘ってるな

「さて、どうしたものか…」

やはり伏せが怪しいが…手札は収縮、フリード…この2枚じゃ…いや、コイツが居るじゃないか！

「お決まりになりましたか？」

「ああ！放浪の勇者フリードを召喚！」

放浪の勇者フリード 攻1700

「放浪の勇者フリードの効果発動！墓地の光属性モンスターを2枚除外しフィールド除外のフリードより攻撃力が高いモンスターを破壊する！ザンジを破壊する！」

フリードは右手を握ると光を溜め…待てフリード！そのままだと…シャイ。ングファイ。ガーだ！

ガシッ、ズガーン

…あ、ありのままに起こった話を話すぜ！フリードの右手が光りそのまま突撃してザンジの頭部を掴みそのままザンジを破壊したんだ！似非とか物真似とかそんなちやちなものじゃねえ…フリードのもっとかつこいい片鱗を味わったぜ…

「ザンジが倒されましたか…」

「邪魔なザンジは倒した！フリードでヤイチを攻撃！」

あ、次は剣を…ま、待てフリード！そのまま光を出すな！シャ。ニングファイ。ガーソ。ドになってる！

「ここで伏せを使いましょう、速攻魔法六武衆の理！ヤイチを墓地に送りザンジを墓地より復活させる！ザンジ見参！」

六武衆―ザンジ 攻1800

…またザンジか…ん？待てよ、六武衆って破壊される代わりに他の六武衆を身代わりに出来る効果が…

「成る程…フリードの効果で墓地を開けさせてヤイチを攻撃の圈に使ったのか…」

「左様」

やっぱりやるなあじいさん…

「それじゃあ攻撃は…師範！行け、フリード！」

「師範の方が攻撃が上ですが？」

「ダメージ計算時速攻魔法発動！収縮！対象は師範！」

六武衆の師範 攻2100 ↓ 1050

「むう！やりますな…」

志木LP4000 ↓ 3350

「そしてイザナミでイロウに攻撃！」

『はあっ！』

志木LP3350 ↓ 3150

「イザナミの効果発動！イザナミがモンスターを戦闘で破壊した時破壊したモンスターのレベル×200攻撃力を上げる！イロウのレベルは4、よって攻撃力は800アップ！」

イザナミ 攻1900 ↓ 2700

「ターン終了だ！」

「私のターン、ドロー！…ふむ…では私は戦を仕掛けましょう」

自爆特攻か…フリードを狙うか…

「フリードに攻撃！」

やはりフリードを狙って来たか！

「くっ！」

京哉LP200 ↓ 100

「カードを伏せターン終了でございます」

残りライフは100…か…かなり絶望的なライフだけど…

「かなり楽しくなって来たぜ！」

「私も久々に決闘者の心が高揚しております」

このドロ―で戦況がどうなるかと考えたらわくわくしてきたぜ！

「よっし！燃えてきたぜ！」

まだこの決闘は終わらねえぜ！

「俺のターン、ドロ―！」

ここからが反撃パーティーの始まりだ！

第七十七話 この御老体…強いぞ（後書き）

今回は対六武衆前半です。いやぁ六武は強い強い

真じゃ無いだけマシですがそれでも強い。実は最初は門を入れるか迷ってましたね…結果的には入れてませんが

それでは！

作者の一言

スリーブと収縮が足りない件について…どーしよう！

…ストラク買えは聞かないよ！！（笑）

第七十八話 六武衆は強かったなあ…（前書き）

凄く悩んだ結果がこれだよ!!

今回はこんな終わりかたで良かったのかなあ…

まあいいや。ではどうぞ！

第七十八話 六武衆は強かったなあ…

Side 京哉

京哉LP100

志木LP3150

さて…今こんな状況だ。手札は相手も同じく0で魔法罫も同じく無し…此方に居るのは姫だけだ。しかしザンジが邪魔すぎる

「さて…どうしたものか…」

引いたのは強欲な壺…とりあえず使うか

「魔法カード強欲な壺を発動！カードを2枚ドロー！」

…成る程…ね…これはまだ行けるな

「手札から魔法カード地割れを発動！相手フィールド上の攻撃力が一番低いモンスターを破壊する！じいさんの場にはザンジのみ！よってザンジを破壊する！」

「ドロークカードに破壊カード…やりますな…」

よし、これで道は開いた！攻めるのみ！

「イザナミでダイレクトアタック！」

『ハッ！』

「くっ！」

志木LP3150↓450

「カードを伏せターン終了だ」

「私のターン、ドローク…立花様、鉄壁モードとはご存知でございませうかな？」

「鉄壁モード？」

「旦那様が後考案いたした名前でございます。自分のライフが500を切った時に起こる現象でございます。かの決闘王も鉄壁モードにて何度も勝利を掴んでおります」

「…今の俺達も鉄壁モードだろ？」

「そうでございます。私は強欲な壺を発動し2枚ドロー致します…ふむ」

満足している顔…良いの引いたなじいさん？

「カードを1枚伏せ命削りの宝札を発動、手札が5枚になるまでドローし5ターン後手札を全て墓地に送ります」

…ここで手札増強カード…！

「そして六武衆―ヤリザを守備表示で特殊召喚します」

六武衆―ヤリザ 守500

「カードを更に1枚伏せターン終了でございます」

「俺のターン、ドロー！」

…俺のドローも捨てたものじゃ無いな…

「手札から魔法カード、命削りの宝札を発動！手札が5枚になるようにドローする！」

S i d e 凉

…凄いです…あの2人のデュエルは…本当に凄い…相手が全力くれば此方も全力で対抗する…相手がドローカードを使用すれば此方もドローカードを使用する…喬さんの執事さんはとても強い…ですが京哉さんはライフが100になりながらもしっかり渡り合う…

「凄いです…」

「志木さん相手に…ここまで相手出来るのは凄いよ京哉」
…私はまだまだ強くない…だけど…私は貴方に追い付きたい！
「だから好きになってしまったんですよ…私」

S i d e 京哉

「そこでドローカードですか…」
「そして手札から魔法カード死者蘇生を発動！墓地よりマシユマロンを特殊召喚！そして生け贄にささげサイレントソードマンLV5を召喚！」

サイレントソードマンLV5 攻2300

「バトル！サイレントソードマンでヤリザを攻撃！」
よし、サイレントソードマンの攻撃は通った！

「続けてイザナミでダイレクトアタック！」

『これで終わらせますわ！！』

「伏せカードを発動、ガードブロックでございます」

「ちっ！カードを2枚伏せターン終了だ！」

「ならば立花様のターン終了時に畏カード、究極背水の陣を発動させましょう」

究極…背水の陣…？アレは知らないが…六武衆専用カードか？

「ライフを100になるよう支払い墓地から六武衆を各種1体ずつ可能な限り特殊召喚します」

…成る程…あのライフは問題にはならないが下手すると莫大なコストと引き替えて事か

「私はザンジ、ヤイチ、師範、ヤリザを特殊召喚致します」

六武衆―ザンジ 攻1800

六武衆―ヤイチ 攻1300

六武衆―ヤリザ 攻1000

六武衆の師範 攻2100

「くっ…」

「そして私のターン、ドロ―…久々にこのカードを使う時が来ましたな」

「何…？」

「まさか…立花先輩！奴です！」

「大將軍 紫炎、出陣！」

大將軍 紫炎 攻2500

「紫炎？」

「おや？立花様はこのカードの存在はご存知では無いのですか？」

「ああ…」

六武衆を知つてると言っても少し前に会長の持っていた資料だけだから…しかしその時は紫炎は無かったが…

「さて…それでは戦と行きましょう、ザンジで攻撃！」

「何っ！？」

ダメージ確定しているのに攻撃だと！？

「伏せカード発動！攻撃の無力化！」

ザンジの斬撃を渦が吸収していった…使う必要も無いとは思ったが念には念を…ってね

「戦は終了いたしました…ならばヤイチの能力にて射抜け！」

2枚目の攻撃の無力化が破壊されたか…

「ほほう…もう1つも攻撃の無力化でしたか」

和睦を伏せたかったけどヤイチが居たしな

「ではカードを伏せターン終了でございます」

「まずい…か…ボードアドバンテージは向こうが上、しかもモンスターを効果破壊するザンジと伏せを破壊するヤイチがいる

「ホント厄介なモンスターだよ！俺のターン、ドロー！」

「レベルアップ！…しかしここでやっても…最後の賭けに出てみるか
「魔法カード発動、天使の施し！3枚ドローし手札を2枚捨てる！」
逆転を信じてみるしか無い！引くんだ…」

「ドロー！」

よし、このカードなら…いける！

「手札を2枚捨てる…そしてカードを2枚伏せターン終了」

「私のターン、ドロー…ではヤイチの能力にてそちらを破壊致します」

「なら効果にチェーンをし和睦の使者発動！」

危ない…ダメージはこれで免れた…

「では戦と行きましょう、行けいザンジ！」

また…ダメージ覚悟で攻撃だと！？

「この時に速攻魔法、収縮をイザナミに使用致します」

戦姫―イザナミ 攻2700↓1750

「体が！？」

「イザナミからロリナミに…」

「そんな話ではありませんわ！」

「そしてザンジの能力にてイザナミを破壊致します」

「くっ…京哉…」

「イザナミ！」

…すまない…お前の犠牲は無駄にはしないからな…

「ふむ…それでは私はヤイチ、ヤリザ、師範を守備表示に変更して

ターン終了でございます」

「ならエンドフェイズに伏せ発動！」

ERRORが発生しました、発動出来ません

「何！？」

「紫炎はフィールド上に居る限り相手は魔法、罠は1度しか発動出来ません」

「そんな効果が…」

…ホント厄介なモンスターだよ…六武衆は

「…いけると思ってたけど…厳しい…か…」

…レベルアップ！は既に墓地へ送った…伏せを次に使えばそのターンには発動出来ない…

「俺のターン…ドロー！」

…やっぱり俺の引きは…十代程じゃ無いか…

「…ターン終了」

「私のターン、ドロー。では…射ぬけ、ヤイチ！」

王宮のお触れが破壊されてしまったな…

「そして戦である！紫炎でサイレントソードマンに攻撃！」

…俺の罠に掛かった、じいさん！

「ダメージ計算時手札からオネストを墓地に送り発動！サイレントソードマンの攻撃力に紫炎の攻撃力を追加させる！」

「ぬ…！」

サイレントソードマンLV5 攻2300↓4800

「さあ迎えうつて！」

「私の負け…ですな…」

志木LP100↓0

…はあ…なんか凄く疲れた…

「お疲れ様、京哉」

「京哉君かつこ良かったよ」

「久しぶりに燃えとつたもんな」

「まあ…な」

いやあ…こんなに燃えまくつたのは久々だなホント

「流石京哉だぜ、ガツチャ！ナイスデュエルだぜ！」

…なんだろう、十代のガツチャを久々に聞いた

「流石でございます立花様」

じいさんがいつの間にかスーツに着替えてる…早いな

「危なかった…伏せはお触れだったしな…オネスト引かなきゃマジ負けてたよ」

「ほっほっほっ」

あゝ…良いデュエルだっ「疲弊してる今こそ！立花京哉！お前にデュエルを申し込む！」…

「…なあ風」

「なんだよ京哉？」

「…代わって」

「嫌だな」

…ケチだなコイツ…前に飯を貸したじゃねえかよ

「俺じゃ無くて龍牙のバカに代わってやれよ」

「誰がバガだゴル」ラ ああああああ！」

「…そうだな、龍牙」

「あんだよ立花？」

「代わって」

「ぜってーやだ」

…コイツ等め…そうだ、トシだ。トシに代わろう

「龍牙、京哉と代わってあげて？」

「よし立花！俺が奴とデュエルしてやる！」

「…龍牙先輩単純…」

「龍牙さんらしいですね」

…いやもう今日はマジ疲れたな…

「アニキお疲れ様ッス！何かしましようか？」

「いや、今はいい…」

「わかりやした！何か飲み物買つてきやす！」

…そんなの誰も頼んじゃ…行っちゃった

「お疲れ様です立花先輩」

「凄くわくわくしました」

「ああ、ありがと。そういえば帝君はあの紫炎つてカード知ってたのか？」

「ええ、会長が見せてくれましたから」

「じゃあ後で創られたカードか」

「そりゃ知らねーか…」

「何がですか？」

「ん？まあいろいろ「うわああああああ！」…アイツまた負けたのか」

「緋焰先輩に１ターンキルをくらってますね」

…なんだろう、そろそろ可哀想に見えて来た

「く…くそおおおおおおおおおおおおおおおおお！
あつ、逃げた…ちなみに逃げた理由としてこの場に居た皆に敗北したんだ。ちなみに俺に再チャレンジしてアイツは１ターンキルくらった

「あら…」

「いつもの事だから良いよ」

…良いのかよ…いくらあんまり好きじゃ無くても慰めようぜ…

「本日は突然申し訳ありませんでした」

「いやいや、また来てくれよじいさん」

「ほっほっほっ…では私はこれで」

「志木さん、父さんによろしく」

「畏まりましたお嬢様」

じいさんは港の方に歩いて行つた

「…さつてそろそろ飯作るか」

「あつ、手伝うよ京哉君」

「うちも最近腕上がつて来たから見てみてや京哉君」

「腕が上がつたなら見せて貰おうかな倭」

「え？」

今日の晩飯は倭に決定だな

S i d e ? ? ?

ブルブル…

「私だ」

『旦那様、志木でございます』

「おう、待つて居たぞ。で、どうだ？」

『…はつきり申し上げますと申し分ありません』

「…そうか、わかった。ご苦労だった」

『はい、後お嬢様から…』

「なんだ？」

『…元気で良かった…です』

「ふふ、そうか」

『では、私は涉様を御送りしてそちらに行きます』

「ああ」

『それでは失礼致します』

ピッ！

「…元気そうで良かった立花京哉…そしてすまない…辛いものを君に与えてしまったな…」

奴はまだ見つけてはいないようだが…

「奴が見つける前に私が君を確保しなければ…な」

第七十八話 六武衆は強かったなあ…（後書き）

新ターミナルでアナザーネオスが入ってるのに思わず興奮してしまいました…

後はプリズマーさえ揃えばネオスデッキの準備が完了するじえ！

ではでは！

第七十九話 デッキの特性は人それぞれ（前書き）

やあ皆、私だ

…はいどうも、一度作者が言ってみたい台詞の一つです。今回は日時＋真ん中ちょいギャグ入ります

ではどうぞ！

第七十九話 デッキの特性は人それぞれ

Side 京哉

「…え？デッキを見て欲しい？」

「はい…最近勝てないので…」

授業終了後、日向ちゃんがデッキの相談をしてきんだ。…後京哉のちゃん付けはキモいって言ったの誰だ？

「帝君には相談したのかい？」

「はい…ですが帝君は立花先輩に聞いた方が的確だって…」

…いや、帝君も十分なデッキ構築と思うぞ

「あ、帝君の場合だと墓地肥やし重視になるので…」

…墓地活用万歳な奴なんだ帝君って

「まあ良いよ、デッキ見せてくれない？」

「はい」

…さてと、どれどれ…

少年閲覧中…

「…成る程ね」

はつきり言おう、よく今まで頑張ってきたな。かなりパワー不足だ
「女性モンスターで縛ってきたようだな…」

「は、はい…」

「ちなみに今までの勝利方法は？」

「え、えっと…れ、連合軍を使用して…」

「コマンドナイトの底上げか」

「はい…」

…いやホント今までよく頑張って来てるよ…

「なら…このデッキを渡すか」

彼女達から受け貰ったのは良いが今まで一回も使って無いしな

「先輩、そのデッキは…？」

「まあ見てみなよ」

「はあ…」

少女閲覧中…

「…あ、アマゾネスですか…」

「ああ、結構強いぞそのデッキ。ほぼ戦士族だし。連合軍もコマン
ドナイトも効果適用するぞ」

「……………」

日向ちゃんは熱心にカードを見始めた。テキストを読んでいるよう
だな。後京哉がちゃん付けは（ry

「それでどう？」

「…良いんですか？凄く強いですよこのデッキ」

「ああ、俺は使って無いし使ってくれた方がカード達が喜ぶしな」

『まあダーリンが言うなら仕方ないか』

…ダーリンとか言うな。まあこれで強くなってくれたらいいな

「あ、ありがとうございます！」

「それじゃデッキの特性を教えるよ」

「はい！」

少年説明中…

「…成る程…鎖使いを相手に送ったりしハンドスチールとハンドピーピングですか」

「そ。それで相手の場にあるモンスターを貰ったり破壊して送りつけたりね」

「…でもそれってズルく無いですか？」

「…まあ相手の手札を見るという事は手札次第では相手の戦術が丸見えって事になるな」

「…嫌われるような気がします…」

ふむ…確かに嫌われるかもな…強制転移とかなら自分の強力モンスターが相手に奪われた挙句に手札まで奪われて…だもんな。アマゾネスの里なんかあった時にはボードアドバンテージが有利なるし

「なら強制転移やマジックボックス辺りを抜こう。そもそも鎖使いの効果自体使うには1500というコストがいるからね。ライフ回復さえ無ければ多く使えて2回、ひょっとしたら1回も使えない状態で引くかもしれない」

「そうですね」

本来なら一族の結束とか入れたいんだけど俺は持って無いし葵姉に言っても自分で当てるの一言だし。だいたいなんでパックじゃ無くてドローパンに入れてるんだよ！しかも具無しパンか納豆パンに！「おっ、こんな時間か。俺はそろそろ寮に帰るよ。夕飯の支度しなきゃな」

「あつ、すみません…気付いて無くて…」

「良いよ良いよ、デッキの相談なんていつでも乗るよ。それじゃそのデッキを自分なりに強化して使ってくれよな」

「はい、ありがとうございました」

さてと…今日の夕飯は何にすつかな

「あーっ！剣山君また僕の唐揚げをー！」

「へへへー！早く食べない丸藤先輩が悪いんだドン！」

「何をー！」

「あつ、月読てめえ！俺が楽しみに置いていたカキフライを食いやがつて！」

「さつさと食べないてめえが悪いんだよ龍牙！」

「全く…騒がしい奴等だな」

「ん？なんだエド、エビフライ食わねえのか？だったら俺が食つてやるよ」

「十代！ボクのエビフライを勝手に食べるな！」

…うるせえ…すげうるせえ…静かに食えよ…

「…っ！かなんでお前が普通に居るんだよ！エド・フェニックス！」

「い、良いだろう！ボクがここに居ようと居まいと！」

…はっはゝん…コイツ俺の料理に釣られて来たな？

「別に京哉の料理が美味いつて聞いて来た訳じゃ無いからなー！」

…もろ俺の料理に釣られてんじゃん

「…というかアニキとエド・フェニックスは知り合いなんスか？」

「…まあな…」

「2年前俺を1ヶ月間ストーキングしてた」

「ストーキングじゃ無い！観察だ！」

「嘘つけ！毎日英語の手紙や俺の家の前に居たじゃないかよ！」

「それはお前に用があつたからだ！」

用があるならインターホン鳴らせよ！しかも手紙にI Like Youなんて書いていた時なんざゾツとしたぞ！

「…エド・フェニックスと京哉先輩…クスッ…イイネタを見つけました…」

…誰だ今イイネタなんて言った奴は！俺は男色家では無い！

「そんな事してたのか！？」

「最低ツスね…」

「最年少プロのイメージががた落ちザウルス…」

「なっ、ちがつ！」

いや、違わねえよ…1ヶ月間コイツの視線にどれだけ苦しめられたか…学校を丸々1ヶ月休んだんだぞ

「あーっ！京ちゃんの手作り食べてるー！」

…ここで更に面倒な事になるぞ…

「そう！ボクはこの人に京哉の強さを聞いて1ヶ月アイツを観察していたんだ！」

「うにゅ？」

「いや、うにゅ？じゃ無くて…」

またこの駄姉さんは…もしかして私より京ちゃんの方が強いよ…なんて言ってたんだらうけど

「あ、不死鳥さんだ」

「ボクは不死鳥じゃない！あの日から言っているだろ！？」

「だってフェニックスって言いつらし長いもん」

「不死鳥もフェニックスも文字数は対して変わらないぞ葵姉…」

「ん…じゃあ全部日本人っぽくしよう！江戸不死鳥、決定！」

「勝手に人の名前を変えるな！」

…とまあこんな感じで今日の晩飯は終わったよ

「…え？デッキをまた見て欲しい？」

「はい、作ったのは良いのですが…」

「どれどれ…」

…ふむふむ…え？何これ、結束とか普通に3枚入ってるし連合軍も入ってる…サーチする増援もあるし…里も入ってる

「…強…」

「え？」

「ああ、いや…結構強いよなこれ」

「そ、そうですか？」

…うん、マジ超パワーデッキと化した…怖…

「まあ…とりあえずこれで戦ってみたかな？」

「いえ…」

「なら海兄に頼むか」

「え？海度先生にですか？」

「ああ」

海兄はいい練習相手になるしね

「…なん…だと…」

部屋の前に白い服を来ている宗教団体が居やがる…しかも人数はざつと15人くらいで海兄の部屋の前に佇んでやがる…

「あれ…どうしますか先輩…？」

「…応援を頼むか」

PDAを出してつと…トシと帝君を呼ぼうか

「…内容は…」

ちよつと大袈裟に書くか。どういう内容に…

「…ニヤリ…送信つと」

「あ、あの先輩…？」

これでよし、帝君の来た時の顔が楽しみだな

第七十九話 デッキの特性は人それぞれ（後書き）

もう一度言います、京哉は男色家です

京哉「違っわボケ！」

アイダホ！！な、何するだー！

京哉「勝手に男色家にすんじゃねえよ！」

お前知らないのか！？お前がモデルのBL同人がこの作品中にかなり出回ってるんだぞ！

京哉「な、なん…だと…」

証拠見せると言っても俺はBLは好まないから証拠なんて所持して無いからな！

京哉「…じゃあそれはてめえの嘘となるよな？」

安心しろ、書いている犯人はきちんと番外編で書く！それじゃ！

京哉「あっ！こら逃げんじゃねえ！」

ちなみにエドと葵が知り合いな理由はこの次に書く！

京哉「さりげに予告してんじゃねえ！」

第八十話 宗教団体はもう嫌い（前書き）

さて、さっさと書いて嬉しいZ E （キラッ

今回から出血シーン等が出ますので残酷な云々を小説自体に追加しました

ではどうぞ！

第八十話 宗教団体はもう嫌い

Side 京哉

「来やしたぜアニキ！」

「来てくれたかトシ」

「そりゃあアニキが呼ぶ所なら例え火の中だろうと水の中だろうと地獄だろうと来させてもらいますよ！」

いや流石にそんなどう見ても死にますよ的な場所には呼ばないけどさ…

「さて、後は帝君だけだが『ぐわああああああ！』何だ何だ！？」

今扉の前から声が！？…ごめん、悲鳴って言おうと思ったけどどう聞いても悲鳴に聞こえなかったよ…

「あ、先輩。遅かったですね」

「帝君！」

「大丈夫か日向？」

「うん…」

「良かった」

…おお、見ると宗教団体が伸びてるじゃないか。帝君がやったみたいだな

「…アニキ良くこの空気に溶け込んでますね…」

「え、何が？」

「いや、まあ…何でも無いッス…」

？トシは急にどうしたんだろうか…まあいいか

「…そっぴゃアニキ知ってます？あの二人恋人同士で付き合ってるの」

「え？そうだったんだ、知らなかったなあ。いつぐらいから？」
「…修学旅行が終わって数日後に光明院が夜神に告ったんスよ」
「へえゝそんな素振りしてなかったんだけどな」
「…アニキ二人のキスシーン前に俺と見たツスよね？」
「キスシーン…？いつか見たっけ？」
「覚えて無いなあ…」
「…そ、そうツスカ…」
まあそれより…早く海兄と会いに行くか

S i d e 海度

「先生、今日こそ僕のキモチを受け止めて下さい！」
「…はあ…」
「…ええ？ああ、開始が遅れたな。海度だ。今校内で発生した白い暴徒の男子生徒一人から告白を受けた、彼でもう16人目だ…疲れるよ…」
「海兄、入るよ」
「京哉か…」
「…良いタイミングに来てくれたな…京哉」
「貴様！我等の山本先生と会話するな！！」
「…海兄」
「何も言つな、しかし京哉」
「わかってる」
「…俺は同性愛者では無いからな、勘違いするな」
「こ、コイツ等…」
「それで京哉、今回の用事は？」
「ああ、日向ちゃんのデッキが完成したから海兄に相手して欲しくて」

「は、はい！」

成る程…それなら相手をしようかな

「先生！そんなクズ女なんか僕で十分です！」

「ああ？」

「ひい！」

帝の逆鱗に触れたなアレは。可哀想に…

「こらこら帝君、それじゃあこうしよう。日向ちゃんとその宗教同性野郎がデュエルして勝った方が海兄の相手をして貰えるって事で…ほら日向ちゃん」

「は、はい！頑張ります！」

「帝君は応援してあげてくれよ」

「勿論ですよ」

「良いだろう！速攻で地獄に叩き落としてやる！」

…ありやりや…つてしかもここでやるのか！？

「おい京哉、やめてくれ！部屋が…」

「「デュエル！！」」

…ああ…始まってしまった…

S i d e 京哉

「さて、帰るか」

「あれ、アニキ帰るんですかい？」

「ああ、もう勝ち負けはわかってるしここに居る必要無いし」

「そうッスか…？」

「そうだ」

アレだけのパワーと信じる心があれば十分だし何より帝君が居るしね

「さて、帰って何かするか」

「付き合いますよアニキ！」

『私も何かする〜！』

「なら後で実体化しろよアリス」

『うん！』

…アリスも元気になって良かったよ

S i d e 龍牙

…くつそー…あんな賭けするんじゃない無かったぜ…

「よう龍牙、これでバトラね？」

「ああ？んなもんするかよ！」

「へえ…俺に負けるのが怖いんだな？」

「けっ、誰が！やってやるよ！」

「どうせなら賭けやろうぜ、ドローパン5個だ」

「吠え面かくなよ！」

「くつそおおおおおー！」

「へっへっ5連勝だぜ、ほらさっさと行ってきな」

「この…野郎…」

「…はあ…」

すっげー凹む…今月ヤバいのに…

「…貴様」

「ああ？」

なんだコイツ…フード被ってる…かなり怪しいな

「…私とデュエルしろ」

「はあ？何を言ってるやがる？てめえみたいな不審者と誰がやるかよ」
全く…見るからに怪しいじゃねえかよ

「ほう…なら貴様の精霊の首を代わりに頂こうか」

「なに…？」

そいつが半歩右に寄ると…

「デウス！？」

『龍牙…すまない…』

「くくく…」

こ、このクソ野郎…俺の精霊を…デウスを…相棒を捕まえやがって！

『龍牙！私の事は良い、逃げるんだ！』

「はっ！相棒を残して逃げ出すかよ！それこそ月読に舐められる！」

「…ふん…出来損ないが…」

「んだとお！」

この野郎！ふざけやがって、ぶっ飛ばしてやる！

「デュエルをするのだからこれは必要だろう、返してやろう」

「くっ…」

「大丈夫か！？」

『ああ、私は大丈夫だ』

「デッキで休んでくれ」

『ああ』

「遺言は残したか？」

「それはこっちの台詞だ！」

「デューエル！」

Side 海度

「これで終わりです！アマゾネスの女王でダイレクトアタック！」

『いい加減くだばっちまいな！』

「うわああああああ！」

白い同性愛者LP2000↓0

…なかなかパワーがあるなああのデッキ。だが俺のサイバーには勝てるかな？

「ん…？」

「どうしたんですか先生？」

「いや…」

なんだ…急に外の空気が澱んだ…嫌な予感がする…

「帝君が居たおかげで勝てました…」

「いや、今のは日向が頑張ったからだよ」

「帝君…／／／」

…そしてお前等は俺に見せつけるな…成績下げろぞ

Side 龍牙

龍牙LP4000

????LP4000

「俺からだ！ドロー！」

絶対勝つ！こんな奴は絶対許さねえ！

「俺は手札から神の居城―ヴァルハラを発動！そしてヴァルハラの効果でアテナを特殊召喚！」

アテナ 攻2600

「フィールド魔法、天空の聖域を発動！そしてモンスターをセットしてターン終了だ！」

セットモンスターはマシユマロン！ボコボコにしてやるから来いよ！

「…私のターン、ドロー。私はカードを5枚伏せターン終了」

こっコイツ…魔法、罫のカードのセットだけだと…ふざけやがって！

「俺のターンドロー！俺はジェルエンデュオ召喚！」

ジェルエンデュオ 攻1700

「そしてアテナの効果破壊！天使族モンスターが召喚、特殊召喚される度に相手に600ポイントのダメージを与える！天使の裁き！」

「伏せ発動、地獄の扉越し銃。効果ダメージを相手に与える」

「うぐ！」

龍牙LP4000↓3400

な…なんだこの痛み…マジで銃弾をくらっ…

「っ…！」

ちっ血が…出ているだと…

「くくく…」

「て、てめえ…俺に何をした!」

「さあ?何だろうねえ…ダメージを受けた事によりジェルエンデュオは自壊する」

くつ…くつそがあああああああ!

「バトルだ!アテナでダイレクトアタック!神の槍!」

「畏発動、獄炎。手札を1枚コストに攻撃モンスターを破壊し破壊したモンスターの攻撃力の半分を相手ライフに与える」

「ぐあああああああ!」

あ…熱い…い、一体…何だってんだよお…

「ターン終了かい?」

「ぐ…て、てめえ…」

「何も無いなら私のターン、ドロー。くくく…まだ始まったばかりだ…楽しませてくれよ出来損ない…私との

闇のデュエルに」

第八十話 宗教団体はもう嫌い（後書き）

さて、どうでしたか？

龍牙が何故出来損ない呼ばわりを受けているのか、それは今後の話に関係があります。乞うご期待下さい！

それでは！

第八十一話 信頼の力（前書き）

かなり調整しました…しかも今回は微妙な内容…手札と場の問題が発生しまくりました

ではどうぞ！

第八十一話 信頼の力

Side 龍牙

龍牙LP2100

???LP4000

闇のデュエル…だと？

「私のターン、ドロー。カードを1枚伏せターン終了」

コイツ…また伏せカードのみ…

「俺のターンドロー！」

これ以上舐められてたまるかってんだ！

「手札から強欲な壺を発動！カードを2枚ドロー！」

スペルビアと貪欲な壺…まだ必要は無いか

「死者蘇生を発動！アテナを蘇生！さらにマシユマロンを反転召喚！そしてアテナの効果でてめえに600ダメージだ！」

「ふん…カウンター罨発動、黒板消しの罨。私へのダメージは0にし貴様は手札を1枚捨てる」

ありがてえ、スペルビアを墓地に送らせて貰う

「ならアテナの効果発動！マシユマロンを墓地に送り墮天使スペルビアを墓地より特殊召喚する！こい、スペルビア！」

「罨発動、電闇石火。モンスター1体の特殊召喚を無効にする」
くっ…スペルビアどこるかアテナすら効果出ねえ…

「弱気になるなよ俺…行くぜ！アテナでダイレクトアタック！」

「伏せカード発動、攻撃の無力化」

くっそお！またダメージが入らねえ！

「ターン終了だ！」

「私のターンドロー。手札から魔法カード強欲な壺を発動、カードを2枚ドロー。そしてカードを2枚伏せターン終了」

「クソ野郎がああああ！俺の夕アアアアアアアアア
アン！ド口オオオオオオ！」

来たか相棒！一緒に奴を叩き潰すぞ！

「俺はヘカテリスを召喚！そしてアテナの効果でめえにダメージだ！」

「伏せ発動、フュージョン・ガード。効果ダメージを無効にし融合デッキからランダムにモンスターを墓地に送る」

「伏せ発動、聖なるバリアミラーフォース」

使アスモディウスを特殊召喚する！」

墮天使アスモディウス 攻3000

Side
京哉

ズキイ！

「ぐっ！！」

「アニキ？」

なんだ…この痛みは…心臓が…痛い…

「ぐあ…が…」

「アニキ！？」

くっ…くそお…一体…どうしたんだ…俺の身体は…

S i d e 暗奈

「っ！」

『暗奈！』

「わかってるわ！」

ようやく…ようやく見つけたわ…私の仇を…

「パパ…ママ…仇を討つね…」

S i d e 龍牙

なんだ…空気が急に変わった…？

「私のターン、ドロー。ふむ…私は命削りの宝札を発動、互いの手札が5枚になるようにドローする。私は5枚ドロー」ここでドローカード…コイツ何をする気なんだ？

「そして魔法カードを2枚セット。そしてもう1枚のセットカードも魔法だ」

「なっ！？自分の伏せカードをバラすだと！？」

コイツ何考えてやがる！？

「そして3枚魔法カードを墓地に送り降雷皇ハモンを特殊召喚する」

降雷皇ハモン 攻4000

S i d e 京哉

「ぐ…ぐあ…！」

「アニキ！アニキ…！」

ま、また空気が…しかも…この感じは…

「感じる…奴が…」

「アニキ！？何が居るんですか！？」

「…幻魔…幻魔を…感じる…」

駄目だ…もう…意識が…

S i d e 龍牙

「な、なんだコイツは…！？」

デカくて…しかも強い…一体なんだよコイツは…

「ハモンは三幻魔の1体。そして私が精霊を狩る為の道具だ」

道具…だと…完全にコイツ精霊じゃねえかよ…それを道具だと！

「バトルに入りハモンで攻撃、失楽の霹靂」

『うぐあああああああ！』

「があああああああ！」

か…雷が…身体に…

Side 風

「ちっ！あの馬鹿何処に居るんだよ！」

帰りが遅えから見に来たけどよ…一体何処に…

『風！』

「どうしたエル！？」

『あっちの方で嫌な感じが…』

「嫌な感じ？」

『私も感じます…悪意を…』

全く…どうなってやがる！？

「とりあえず急ごう！」

『はい！』

着いた…龍牙デュエルしているのか？それに重い空気とあのモンスター…

「おい龍牙！」

「…んだよ…」

「っ！？」

何でコイツ怪我してるんだよ…それにあの相手…

「お前その怪我！」

「てめえにや…関係ねえよ…」

「関係ねえ訳ねえだろうが！」

コイツ…そんな身体になるまで戦いやがって！

「ほう…私や決闘王以外純粹に精霊が使える奴がいるとは本当のようだな」

「なんだと!？」

奴は一体何者なんだよ!？何でこんな事をしてんだよ!

「くくく…そして降雷皇ハモンの効果発動、モンスターを戦闘破壊した時相手ライフに1000のダメージを与える。地獄の贖罪」

「ぐわああああああ!」

「龍牙!」

クソっ!どうすれば良いんだよ!？

S i d e 葵

「…何だろうアレ…」

黒くて丸い…凄く嫌な予感がする…何かの…誰かの殺意のようなものが…

「葵先生!」

「アレ?木原く…っ!？」

え…担がれてるの…京…ちゃん…?

「先生、アニキが…アニキが!」

「…っ、木原君!至急保健室に!」

「でも保健室は白い奴等が居て…」

「いいから早く!じゃないと…じゃないと京ちゃんが!」

絶対死なせちゃ駄目…生きて…京ちゃん!

S i d e 龍牙

「が…はっ…」

身体が…身体が…焼ける…

龍牙LP1100↓100

「風前の灯火…だな、出来損ない」

「龍牙！」

「…っせえ…な…」

デウスは…破壊…されて…しまったが…

「アスモデウスは…フィールド上で…破壊された時…アスモトクンと…デウストクンを…特殊召喚する…」

アスモトクン 守1300

デウストクン 守1200

「ふん…ターンは終了だ」

ぐ…くそ…だ、駄目だ…これじゃ…勝てない…

Side 葵

保健室保健室…こつちだ！

「鮎川先生！」

「葵先生？どうかしましたか？」

「あつ、山本先生だ！」

「本当だ、先生！」

「先生！是非僕達の寮の管理を…」

「先生！ベッドを早く空けて下さい！アニキが…」

「立花京哉！とその子分！」

…ゴミ共が…今は京ちゃんに絡むな…

「大変！早くベッドに…」

「丁度弱っているし今の奴なら叩けるぞ！」

「ささ、山本先生と鮎川先生は…」

「黙りなさい！！此方には病人が居るの！！元気な人はさっさと出ていきなさい！！」

この間から…鬱陶しい！！いい加減邪魔なのよ！！

「う…あ…」

「鮎川先生早く！」

「え、ええ！此方に！」

「せ、先生…」

「さっさと出ていきなさい…と言ったの聞こえなかった？」

「ひいひいひい！」

虫けら共め…うざいのよ…

S i d e 龍牙

「…がはっ…はっ…」

ぐ…マジ血を…吐いたじゃねえかよ…

「エル！カジツ！ディウスを守れ！」

「…そ…それが…」

『う…動けません…』

「なっ…俺も…動けねえ…だと…」

あの月読のバカ…勝手に…捕まりやがって…

「…どうした出来損ない。貴様のターンだ」

ちき…しょう…ここまで…だったのか…

『引け…龍牙！』

「っ！？」

今の…今の声は…立花…か…？

『お前の…お前達…の力…お前達の全てをぶつけて奴を潰すんだ！』

…そうだ…諦めるかよ…相棒を奪われて…たまるかよ…！！

「…俺の…ターン…」

お前の…お前の引き…借りるぜ…立花！

「ドロオオオオオオオ！」

S i d e ? ? ?

…奴め…相変わらず面倒な真似をしてくれる…今回は退くでしょう
「魔法カード貪欲な壺を発動！墓地のジェルエンデュオ、マシユマ
ロン、スペルビア、アテナ、アスモディウスをデッキに戻しシャッ
フルし2枚ドローする！」

しかしこの学園は素晴らしい…あの者以外にも純粋な精霊使いが居
る…しかもその内の一人は正しき闇の力を使う者…奴はユベルに任
せるとしよう

「そしてアスモトークン、ディウストークンを生け贄に蒼き翼の人
造天使―ストライクフリーダムを召喚！」

蒼き翼の人造天使―ストライクフリーダム 攻2900

「更に魔法カード、ハイマツトフルバーストを発動！相手は手札2
枚と相手フィールド上のカードを全て墓地に送る！消し飛ばせ！」

…残念だが止めは次の機会としよう

「このカードを発動したターンはストライクフリーダムは攻撃出来
ない…ターン終了だ」

「さて…時間のようだ」

「んだと!？」

「貴様の力はわかった。次の相手は貴様だ、純粹種」

「!？」

「さらばだ」

くくく…次は楽しませてくれよ…

Side 風

「く…つそお!!」

何も出来ないのがこんなに悔しいなんて思わなかった…

「龍牙!」

「…何しに来たんだよ…」

「嫌な感じがしたから来たが…お前なんでそんなにボロボロに…」

「…へっ…俺が…知るか…よ…」

「龍牙!」

やべえ!龍牙が…早く保健室に行かねえと!

「風!」

「十代!」

良いタイミングに来たな十代!

「なんで龍牙がボロボロに…」

「それより保健室に連れていくのに手伝ってくれ!」

「あ、ああ!」

くたばんじゃねえぞ龍牙!

第八十一話 信頼の力（後書き）

さて…次回の話は？

京哉「京哉だ、次は俺の身体秘密だな。後俺と龍牙と後一人の關係と龍牙の出来損ない理由が判明する。相変わらずアイツはぶっ飛び設定が大好きだからこんなの遊戯王じゃねえ！ってなるが許して欲しいな。じゃ」

第八十二話 京哉の秘密（前書き）

修正しました！

誤字脱字等なんでやるんだろ…

第八十二話 京哉の秘密

S i d e 葵

「…心拍数も正常になったみたいだし…大丈夫ね」

「…良かった…」

ホントに良かったよ京ちゃん…

「ア…アニキ…生きてて…嬉しいツス…」

「…木原君、ちょっと来て貰っていい？」

「え？まあ…いいツスけど…」

「ありがと、それじゃあ鮎川先生。京ちゃんを「鮎川先生！龍牙を診てくれ！」…凧君…十代君」

「葵先生！龍牙の奴が…」

「…鮎川先生、お願いできますか？診たところ精神的なダメージが大きいので」

「え、ええ…」

「何言つてんだよ先生！龍牙はボロボロなんだぜ！？」

「それについて話がありますから私に…」葵さん！京哉君が倒れたつて…」…良いタイミングですね凧ちゃん。他の皆も居る？」

「はい…」

「でも…話つて何ですか？」

「京哉さんの…お話ですか？」

「…とりあえずレッド寮の食堂で話します」

…兄さんにも言っておかないと…

S i d e ????

「…素晴らしい…」

私が以前に設定した闇の力の発動をエラーとして消し去るとは…くく…私の予想を超えている…これ程素晴らしいものは無い！

「やはり貴様は完璧だ…身体能力から精霊の力…」

「ぶきゃきゃ…僕個人としては憎いの一言なんですがね」

「…誰のおかげでここに居れる思っている」

「わかってますよ、ぶきゃきゃ」

鬱陶しい奴め…立花京哉に恨みがあると聞いて利用しようと考えて闇の力を授けたのだが…やはり使えぬな

「しかしこの島を調べるとここまでの数の純粹種が居るとはな…」

『十代…十代は…』

「静かにしろユベル。貴様の目的はいずれ達成させてやる」

『……………』

…ふん…静かになったか…たった少しの破片で話すとは私の力は強すぎたか…

「いや…」私の力”では無いな…”私達の力”だな…立花京哉」

S i d e 海度

…そうか、もうバラすつもりか…

「帝、日向。レッド寮に行くぞ」

「…何故ですか？」

「大事な話だ」

「はあ…」

…京哉、お前は自分がどういう存在か…感じ始めてるんじゃないだ

ろくな？

「お待たせ葵」

「此方も京ちゃんと龍牙君以外は皆居るよ」

案外早く集まつてるじゃないか。ま、京哉の嫁候補ならすぐ集まるか
「葵先生、それで話つてなんだよ」

…十代も呼んでいたのか…

「…京ちゃんの事。私達が知っている事全て話すね」

「…京哉の身体、能力、そして力…全てはある1人の人間の思考から始まった…」

「その人は精霊の存在を知っている…いや、感じる事が出来るが正しいね」

「そして同時に触る事も出来る」

「…京哉と…一緒…」

そう…アイツは精霊に触れる事が出来る…それが奴に似てきた…という事に捉えられる

「そしてその人はある事を考えた…この力は自分しか使えない…自分分は特別な存在なんだ…」と

「でも葵さん、ウチ等も見えるで？」

「…そう…そいつはそこに驚愕をした。俺の他にも見える奴が居ると」

「それに気付いたのは決闘王、武藤遊戯のアレだよ」

「性格が急に変わったりしたアレですか？」

…確か3000年の魂が…って奴だな

「奴にはもう1人の存在が見えて居た。そして次にこう考えた…この力を独占しようとな…」

「どうやって…ですか？」

「最初にしたのは人に精霊の力を与えるという事だったの。精霊の

力を集積させて人に投与させるって方法」

「だけどそれは失敗だった…投与をしたものの投与した人間には見える事は無かった…」

「…酷いです…」

「なんて最低な奴だ！」

「無理矢理に力を与えた結果は暴走しその人は廃人になりかけてね…その後助手に放棄を命じたの」

「なんて奴ですかソイツ…自分の勝手で…しかも人間を放棄なんて言つて！」

「しかも力の暴走が原因で記憶を失ってしまった」

「可哀想…」

「次に始めたのは精霊の魂自体を身体に取り込ませる事だったの…」「精霊の魂を取り込ませたら精霊と同化するんじゃないかと考えてたんだ」

「実験台には廃人にさせられかけた子のお兄さんが選ばれたんだ」

「…なあ先生、なんでその兄弟はそこに居たんだ？」

「簡単な話だよ十代君、拉致されたんだ」

「拉致だつて!？」

「ああ、そしてその実験も成功に見えた…」

「でもまた失敗してしまった…」

「見える事は出来た…しかし触れる事が出来なかったんだ」

「同じく助手に廃棄を命じた…しかも次は記憶を無理矢理消してね」

「…もう…酷すぎます…」

そう…アレはもはや人間の行動じゃなかった…

「でもね、助手の人は廃棄はしなかったんだ」

「どういう事ですか？」

「2人を別々の孤児院に預けたんだ。接触して記憶が戻り2人が廃人になってはいけないし別々にする事で追跡をされない為もあった」「そうなんだ…」

「それでその人は最後に考えたんだ…自分の血縁を作り出せば自分

のクローンを作ってしまったえばそのまま力を移せる…ってね」

「…それってまさか…」

「そう…京哉は…立花京哉は…」

その人間のクローンだ」

Side 京哉

「うう…ん…あ、あれ…？」

今…俺何処に居るんだ？

「確か…心臓が急に痛み出して…幻魔を感じて…」

…駄目だ、そこから全く記憶が無いな…

「身体は正常に動くし…」『京哉様ああああああ！』へばう！

！

『大丈夫ですか！？生きてますよね！？本当に生きてますよね！？』

「生きてる！生きてるから退いてくれ！」

『あ…う…すみません…』

『だから言っただじゃねえかよ。ダンナは不死身だって』

『そういうアキっちも焦ってたよね』

『なっ…そ…それは…お前もだろアリス！？』

『勿論皆を呼びに行ったの私だもん！お兄ちゃんを心配するのは基本だよ！』

『全く…普段からだらない貴方が悪いんですわ』

『ふふ…そういう貴女もご心配そうな顔をしていたじゃないですか』

『なっ…そ、それは…』

『いい加減素直になったらどうですか？』

『うつう五月蠅いすわ!』

…? 姫の素直とか全く想像出来ないぞ?

『主、御身体の具合は如何ですか?』

「まあまあ… って所だな」

『そうですか、しかし倒れた原因は一体…』

「心臓が急に痛み出して… 幻魔を感じて… 今に至るって所だな」

『… そうですか…』

まあまた下らない奴等なら叩き潰すけどな

「… それじゃあ帰ろうかな」

皆何処に行ったんだろ?

まあ探すのも面倒だからレッド寮に来てしまったけど…

「… だ」

おっ、海兄の声じゃ無いか、食堂の方が

『耳良いですね京哉様』

「まあたまたまだろうな」

(… 後は鈍感さえ無ければ良いんですが…) さて、それじゃ開けようかな

「… それでその人の名前は?」

「… 本名は不明だけどその人は不知火って名乗ってたみたい」

… 何…? 不知火… だと…? 何で葵姉が奴の話を…

「じゃあ… 京哉君は…」

「ああ… 不知火の… クローンだ」

… え…? 今… なんて… 俺が… クロー… ン…?

『主、如何しました?』

嘘だ… そんなの嘘だ… 俺が… 奴だなんて… 母さんは… 昔に母さんは… 似ているだけだって…

『お兄ちゃん? どうかした?』

母さんを殺して…自分の快樂の為に精霊を殺している奴の…クロー
ン…？

『何しているのよ京哉？』

…俺は…違う…俺は…奴じゃ…

『くくく…京哉、貴様は私だ』

「違う…違う…！」

『主？』

「俺は…俺は…！」

S i d e 葵

「京…ちゃん…？」

「えっ…っ…！」

なんで…今ここにいるの？保健室の方で寝てたはずじゃ…

「…今の話…本当…？なあ…嘘だよな…葵姉…？海兄…？」

「それは…」

『本当の話だ立花京哉』

え…？今の声は…誰なの？

『闇よ…』

「え…きやああああああ…！」

「凜ちゃん！」

「な、何これ…」

「身体が…沈んで行つとる…！」

「う、動けません…」

一体…くっ！？私にも…！」

「なんだよこれ…！」

「ぐ…俺も動けん！」

「先生、凜、喬、倭、涼！」

駄目…動いて…京ちゃんだけは…京ちゃんだけは！

「アニキ！！早く逃げて…」

『逃がしはせん！』

「…俺は…」

「京哉！」

「京ちゃん！」

『京哉様！』

「俺は…俺だ！！」

S i d e ???

「うぬう！！」

く…奴め…まだ私の邪魔をするか！

「ぷきゃきゃ…あれえ…どうしたんですか？」

「黙れ」

今なら奪えると感じたが…まさか私のコントロールを無効にすると
は…

「やはり素晴らしい…ますます気に入ったぞ！！」

確實私の手に置かせてもらうぞ…立花京哉！」

「不知火様…僕この大会に出て良いですか？」

「好きにするが良い…だが出来損ないは潰せ」

「はい」

…出来損ないは…名前は龍牙だったな…弟もそうだったが全く駄目
な奴だ

「弟は…光輝と言ったか…」

役に立たない人間だった…

「さあ京哉…私にさらなる力を見せる」

第八十二話 京哉の秘密（後書き）

自分が恨めしくて仕方ないなあ…

消える俺の誤字脱字！

チェンジゲッター！…関係無いね

番外編 バレちゃった…（前書き）

皆様お待ちかねの番外編でございます

今回は藍の趣味が露呈します

ではどうぞ！

番外編 バレちゃった…

Side 藍

… あっ、お久しぶりです… 藍です… 今京哉先輩の部屋で遊んで居ます…

「うわっ！ やってくれたな三沢！」

「まだまだ甘いな京哉、戦は常に一手二手先を読むものだ」

「そうしている三沢の野郎にアニキ仇討ちボム！」

「しまったああああああ！！！」

「… それでは木原先輩に…」

「ああああああああ！！！」

「ついでの漁夫の利！！！」

「あっ…」

… ゲームをやっています… ゲーム名は… 爆弾男ってゲームです…

「よし逃げる！ 後54秒だ！」

「逃がさないぞ京哉！」

「アニキの援護をしたいけど今は逃げた方が「もらいました…」 うわああああああああ！！！」

… 木原先輩はコレで最下位ですね…

「よし、後30秒… 「逃がさないと言っただろ？」 しまったああああああああ！！！」

京哉先輩も終わり… 後はエアーマンことみさーわ先輩ですね…

「三沢ああああああ！！！」

「”さん” を付けろよデコスケ… しまった！」

「終わりです…」

「うわああああああ！！！」

… コレで私の総合優勝ですね…

「くっ…京哉から借りたア。ヲを見るんじゃない無かった…」

「わかってるじゃないか、流石三沢だ。さて、最下位の人には優勝者から言われた事をするんだ」

「…何にしましょうか…？」

「くう…アニキにならまだしも後輩且つ女に命令されるなんて…」

「トシ、そんな事言うな。日本は夫が嫁に任せっきりの亭主関白がある程遅れているんだ。世界の歴史を見てみると女性が国を統治した時期だつてあるんだぞ」

「す、すみませんッス…」

「解れば良いよ」

しゅん、とした木原先輩に京哉先輩が笑顔を見せた…これは良いのを思い付きました…

「…木原先輩…」

「なんだよ？」

「…京哉先輩を襲つて下さい…」

…あれ…？木原先輩が止まっちゃった…さっきの一言まづかったかな…？

「アニキイイイイイ！！」

…あ、木原先輩がル。ンダイヴ…

「あ、そうだ三沢。前に借りたアレ返すよ」

…あ、京哉先輩が移動した…

「へぶう！」

…木原先輩南無…

「え〜っと…たしか此方に入れてたな…あつたあつた…って何してるんだトシ？」

…京哉先輩と木原先輩…これはいいネタです…

「…京哉先輩…」

「ん？どうした？」

「少し気分が悪いので帰ります…」

「大丈夫か？無理そうなら運ぶけど…」

「いえ…大丈夫です…それでは…」

「ああ、気をつけて」

…早速手掛けましょうか…

…着いた…え？寮は下とかじゃ無いのかって…？違いますよ…私が居る所は私の仕事場…地下室です…どうやって作ったかは秘密です…女の子には秘密がたくさんありますから…

「…新しいネタ…攻めは京哉先輩…受けは木原先輩…」

早く原稿に書きましょう…あつ、私実はBL小説作家なんです…京哉先輩はかなりネタが浮かびますので…

「…アニキ…トシ…みたいな感じは飽きましたし…鬼畜攻めにしよう…」

…ちょっと待って…逆って言うのも…良いかも…

「弟分の気持ちに気付かない兄貴分…その気持ちに「藍大丈夫か？」…兄貴分を襲ってしまい「おい」そして兄貴分は…」

「藍！」

「五月蠅いで…す…よ…」

「体調が悪いなら寝ていなよ…勉強か？」

なんでここに居るんですか…京哉先輩…

「え…あれ…私…鍵掛けてましたよね…？」

「ああ、でもぶつぶつと声が聞こえたから無理矢理でも開けて入った」

「…ここ地下室ですよ…？」

「ああ、入口らしき付近を見つけたから開けた」

「…いえ…地下から聞こえたんですか？」

「ああ、下から聞こえた時はかなり焦ったけど」

「…無視はしようとしなかったんですか…？」

「何言ってるんだよ、藍が心配に決まってる」

「…なんででしょう…京哉先輩の一言はどう聞いても不法侵入なんです…ずるいですね…」
「…と言うか何故地下から聞こえたのでしょうか…？」

「まあ藍も元氣そうだし帰るとするよ」

「…判りました…」

「…良かったです…バレてないですね…」

「ああ、後はいこれ」

「…京哉先輩が私に渡してきたのは…私の原稿…って！」

「あ…え…？…何処に有ったんですか…？」

「え？部屋に普通に落ちてたぞ？」

「…しまった…しかもアレは”京哉先輩×海度先生”の原稿…」

「…あ、あの…それ…中身見ましたか…？」

「見たよ」

「…おわった…元ネタがバレてしまった…しかも私が同人小説作家って事が京哉先輩に…」

「いやあ誰のかわからなかったから最後にあつた名前だけ見させて貰ったから」

「…え？…名前…だけ？もしかして…中身は…？」

「あ、あの…具体的な中身は…？」

「え？まだ未完成みたいだったから見てないよ。そもそも完成してないのを勝手に見たら失礼だし」

「…やりました…まだバレてませんね…」

「でも意外だったな、藍が小説作家だったなんて」

「ええ…まあ…同人ですが…」

「いや、同人でも書いてるの事が凄いよ」

「…ありがとうございます…」

「それじゃあ元気そうだけどしつかり休めよ」

「…はい…」

…先輩行っちゃった…バレてないから良かった…

「…ねえ藍ちゃん、これなあに？」

「え…」

「ねえねえ、京ちゃん×十代君ってどういう事？京ちゃん×兄さん
ってどういう事？」

「…あ、葵先生…」

…この人に見つかってしまった…悪夢だ…

「ん…先生よく解らないから藍ちゃん教えてねえ…」

「…え…遠慮し…」

「…！…！」

その後…先輩が来て宥めてくれました…

番外編 バレちゃった…（後書き）

日下部 藍のプロフィールです

名前 くさかべ 日下部 あい 藍

身長 144

体重 秘密です…

BWH いわゆるロリです…

容姿 深緑がかったロングストレート。目は細いがネタを見つけると笑顔でしっかり開く

使用デッキ 三銃士 ???

設定 元祖女子レッドで京哉達の1つ下。基本もの静かではあるがかなりの腐女子で同人小説を書いている（本来は漫画が書きたいが絵が壊滅的に下手）。使用デッキは2種類あるが三銃士を優先的に使用する（本人曰く1軍じゃ結果が見えるから面白く無いそうだ）。ちなみに精霊が見えない為に京哉の精霊との会話が独り言に聞こえる。小説はネット販売しており一月3万本売れてるそう（3万が本人の限界）。ちなみに芸術的のセンスがかなり壊滅的で楽器を持たせると5分で粉々になる（笑）京哉に対しては興味深い、の評価である

京哉「ちなみになんで涼は体重バラしたんだ？」

涼「京哉さんに隠す程の体重はしてませんから」

凜・喬・倭『うぐ…』

第八十三話 やっぱりデュエルが大事（前書き）

いや… もう課題しねえ！

6月入ってから学校の課題に逐われてます…

今はようやく落ち着いたので書きかけだったのをようやく完了しました… でもまだある…

相変わらずの駄文ですがお許してください

第八十三話 やっぱりデュエルが大事

Side 京哉

「はあ……」

「コレで何回目のため息だろ……あの時勢いで出ていったからなあ……」

「はあ……はあ……」

「京哉……君……？」

「……俺は俺だ……俺なんだ……」

「……京ちゃん……」

「……海兄」

「なんだ？」

「……少しの間出ないから……」

「……そうか」

「……何かあったらアオイかアリスに頼む」

「……なんて言ってさ……結局着く場所は精霊界だもんな……」

「……そのキミ、ボクと契約してヴァンパイアになろうよ。今ならジエネシスになれるよ」

「……兄上、主殿は今元気ありません。ですからあまりそういう絡みは避けるべきかと」

「……かーっ、ダメダメカース！そういう時にこそ笑顔で居なきゃいけ

ないんだよ！」

「意味ありませんわお兄様」

…でたヴァンパイアトリオ。やっぱり来た場所が悪かったか…

「…なんでアンデットワールドに来たんだろ…」

「それも運命さ！さあ早く契約しよう！」

「俺がヴァンパイアになったら誰がこの世界を護るんだよ…」

「もちろんボク達ヴァンパイア一族さ！」

…そんな事したら侵略行為として他からブツ潰されるぞ

「見つけましたぞ坊っちゃま！」

「ノ、ノーブル爺！」

「また抜け出しましたな！今日こそみっちり指導させて頂きますぞ
！」

「なんでボクだけ！？カースやレディだって連れて行こうよ！」

「私はやるべき事は既にやりましたので」

「アタシも」

「だったら主クンも一緒に…」

「ヤダ」

「こっこの人でなし！」

だって俺ヴァンパイアじゃ無いしこの前ロードのやること代わりに
やったし

「さあ行きますぞ！」

「は、離せ！」

ああ、さらばロード…お前の事は忘れておくぞ

「まあお兄様の言う通りだけどあんまり考え過ぎるのも良くないわ」

「…そうだな」

それにしても…今日で6日過ぎたが…あっちは何してるかな

S i d e ア オ イ

「…って事で京ちゃんに渡してね」

「はい、お任せ下さい」

こちらアオイ、人間界の方です。葵様からある…なんでしょう…メダルですかね？本日からジエネクスというプロまで参加する大会を行うのでその大会に必要な物らしいです

「…京ちゃんの方はどうだった？」

「今はアンデットワールドに入って過ごしています。でも京哉様はクローンって事には気にして無いみたいです」

「…そっか」

そうです…あの方はアレよりも素晴らしくて優しい方なんです…これぐらいでは挫けません

「それでは葵様、私はこれで失礼しますね」

「うん、京ちゃんにお願いね」

ここ数日の出来事も報告しなければ…、それでは行きましょう

S i d e 京哉

「…なあカース」

「なんでしよう？」

「…これ絶対子守じゃ無いよな？」

「主殿、何を仰います。子守に見えますよ」

…嘘つけ…どう見てもこれは喰われてるじゃねえか…

「だ」

「ほら、ベビーも喜んでいます故…」

「喰われてるって！これすげえ痛いから！」

「うゝ」

カブ

「あにやあああああああ！」

「主らしく無い叫び方ですわねえ」

「だって普通に叫んだら泣いたじゃん！！そんなの叫べるかよ！！」

「こんなの誰かに見られたら面倒だよ！」

「もう見られてますわ」

「え……」

「……あの……」

「うわあああああああ！アオイかよおおおおおお！」

「これはなアオイ……」

「誰との子供ですか？」

「え、何？この人のオーラ怖い……」

「いや、勘違いしてるから……誰かの子供じゃ無くてだな……」

「……そうなんですか……信じましょう……」

「なんでブラックなテンションなんだよ！？怖いよ！」

「いえ……京哉様の女誑しは今に始まった事じゃ無いので無視してま
したが……」

「俺は抗議する！女誑しでは無い！」

「流石に誰かと子供が出来るまでに発展しましたか……」

「うわあ……聞いてないよこの人……すげえめんどくせえ……」

「少しお話を聞かせて頂きましょう……」

「くっ……完璧に駄目だこの人！どうする……そつだ！」

「カース、レディ！助け……って居ない！？」

「しかもベビーもいつの間にか消えてるー！？」

「よし、落ち着こうかアオ……サイレントバーニングー！」あぎや

「あああああああ……！」

「…それで話はなんだよ…」

「は、はい。あちらでジエネックスという大会の出場資格としての…後…その…」

「俺の方は無視してくださいー」

「…うう…そ、その…」

…葵姉を筆頭にアイツ等はなんですぐに勘違いするんだよ…

「とりあえず早く」

「はい…」

「…うわ、メンドくさ…」

何それ？地球を潰すレーザーとかジエネ。スかよ…

「十代様が一応防ぎましたが…」

「宗教団体がまだ欲しがってるって訳か」

「…かそんな兵器造るなよ…なんたら王子」

「ま、ジエネックスって方は面白そうだから参加しようかな」

「…そうですか…」

確かカイザーが最近のプロのレベルが低下しつつあるって言ったたな…

「…京哉様」

「何？」

「私達は貴方の味方です。例えどれだけの人からも嫌われても…私達は貴方の下に必ず「はいストップ」え？」

「俺はそういうのは考えて無いから。皆俺との立場は同等だからな」

「…はい」

さて、そろそろあっちに戻ろうか

「…京ちゃんの記憶？」

「はい…少し矛盾する点があったので」

「確かに京哉君がクローンは事実やけど前に言っとった事とクローンの時期があつて無いんですよ」

「京哉の14歳までの記憶はほとんど偽りだ」

兄さん…そんなにストレートに言わなくても…しかもここ私の部屋だよ？なんでいるの？

「海馬瀬人が知っていた理由は海馬コーポレーションが技術提供をしていたからだ」

「…でも先生達京哉君を知ってるって…」

「実は俺達は京哉が混乱しないように振る舞っていたんだ、実際に初めてあったのはアイツが14の冬ぐらいの時期だ。ま、あの時コイツは京哉に惚れたんだってさ」

「だって京ちゃん可愛いじゃな〜い〜すっごく私のピンポイントだも〜ん」

「…何かわかりませんが少し悔しいですね…」

あの時からずっと抱き続けてたも〜ん、流石の京ちゃんだけは誰にも譲れないからね！

「ま、そういう事さ。だがアイツが築いたこの数年はアイツだけのものだ」

…早く京ちゃん帰って来ないかな…？

「ただいま」

『…あれえ？』

「あん？何だよ皆して雀が水鉄砲をくらった顔して」

京ちゃん、それを言うなら鷹が口ケットランチャーをくらった顔だ

よ。あれ？違うかな？

「京哉…しばらく帰らないんじゃない？」

「何言ってるんだよ！大会やるなら戻るに決まってるじゃん！-」

「もしかしてその為に戻ってきたんか…？」

「当たり前！」

「クスッ…京哉君らしいね」

「そうですね」

ああ…もう駄目だ…5日間よく頑張った私…

「京ちゃああああああああああああん！！-」

「あ、そうそう。ジエネックスの詳しいルール教えて海兄」

すべしっ！

「…痛い…」

避けられて…顔…打った…

S i d e ???

うわぁ…面倒くさいなあ…なんで俺がこんなのに参加しなきゃなら
ないんだよ…

「くっ…やっぱりくじ引きなんざしなきゃ良かったぜ…」
しかも目標はアイツ等だろ…ホント面倒くさいなあ

「ま、退屈しのぎにやなるか…」

久々のデュエルだ、楽しませろよ…偽者クン

第八十三話 やっぱりデュエルが大事（後書き）

ところで皆様デビルズゲート買いました？

作者は買いました。すごくキモいです。闇の誘惑に誘惑されて3つ買いましたもん。それよりも…聞いてくださいよ！1440円もしためちゃくちゃふつくしいユウサマスリーブがあったので迷いに迷って買ったら700円で新しいユウサマスリーブ売ってたんですよ！！かなり啞然としました…買いましたけどネ…

次は多分課題終了後に投稿致しますハイ

では！

作者の一言

デュエルの動画をUPしたいのですが画質向上の仕方を知っていたら教えて下さい！！メッセージにてお待ちします！

第八十四話 太陽神降臨（前書き）

どうも…お待たせしました

遅れたのは課題＋諸事情です…

ですがこれからは普段通り行けそうです！

ではどうぞ！

第八十四話 太陽神降臨

Side 京哉

「…なんで持つてる奴は誰も相手してくれないんだよ…」

「ハハハッ！ 普段相手してるからだぜ立花！」

「…そうですか…」

くっそ…挑んでくる全員白いし参加資格のメダル1人しか持って無かったし…

「それにしても龍牙、お前もう動いて良いのか？」

「ハッ！ あんなの怪我の内に入るかよ！」

「良く言っぜ…昨日の夜起きたくせに」

「へっ、まあな」

「それじゃコレが参加資格な」

「おお！ サンキュー立花！ 早速デュエルしてくるぜ！」

「さつさとやられんなよ、特に風と」

「わかってらあ！」

…はあ…行っただか。相変わらず元気だなおい…

『おいヘタレ』

「…なあお前等、勝手に出てくるなよ…」

『何、カードの中でオシリス達と話すのは飽きたから』

「話始めるって言って5分しか経って無い上に内容がかなり不謹慎だぞ」

『伊達に神は名乗っては無い、我々の話はそんなノリがデフォルトだ』

中坊かよ…ああ、ものすごくイラって来たよ…駄幻神共が…

「まあいい、早く殺って…もとい、誰かとやって来るか」

『なら今回我を出せ、まだ1度も小「言わせねえよお！」…「ならば

出せ』

「はいはい…プロが相手ならやるよ」
「さっさと行こ…」

S i d e ???

ようやく始めたかあ…あー面倒…

「不知火様…終わったので帰って良いですか？」

『駄目だ、奴等の情報を集めてからだ』

「え…面倒くさい…」

『やれ』

…やっぱりこの人嫌い…僕は面倒なの嫌だしなあ…

「わかった…」

『情報が入り次第連絡しろ、G』

「うん…」

さっさとあの人デュエル終わってよ…

S i d e 京哉

「あ、京ちゃん…」

「あれ？葵姉ここで何してるんだ？」

「ペガサス会長に言われて調査をね」

「調査？何か探してるのか？」

「うん、ちよつとね」

…？まあ言えない事情なら俺が首を突っ込むわけにはいかないな

「俺にも連絡欲しかったなあ」
「京ちゃんにはジエネックスを楽しんで欲しいから…」
…ホント感謝しますよペガサス会長…
「…って私が頼んだんだ」
「…まあとりあえず楽しんでくる」
「あーっ！京ちゃん信じて無い〜！」
…だって葵姉は常に俺にひいきするからなあ
「見つけましたヨ、Ms・葵」
「ん？」
なんだコイツ…スーツを着てるし…右胸にはI2社のマークがあるぞ？しかも白髪おかつぱ…（笑）
「…リヴェルさん…」
「OH！私を覚えててくれてたんですネ！」
「…覚えさせられたんですけど…」
「やはり私と貴女とは結ばれる運命ナンですネ！」
うわコイツ結ばれる運命とか言ってる…オオ、イタイイタイ
「…またですか？その件はお断りしましたけど」
「私は諦めて無いヨ！」
「諦めて下さい、迷惑です」
うわ、今思えば俺蚊帳の外じゃん…まあいいか
「それじゃ葵姉、俺は行くよ」
「あ、うん。頑張つてね京ちゃん」
「お」
「待ちたまえ君！」
「あん？」
うわぁ…今の奴に声かけられた…無視してくれよ…
「君はMs・葵の何かネ？」
「何って…義理の弟みたいなポジション」
「私の未来の旦那様だよな」
「違う」

葵姉のそういう言動は誤解を生むから止めて頂きたいよ…

「ノオオオオオオオオオ！！！！私は認めたくないああああああ
イー！！」

…やっぱりこうなった…もう説明するのはヤダよ…

「…俺寮に帰って良い？」

「良いんじゃないかな？私も帰るし…京ちゃんの所に遊びに行つていくし」

「いや仕事あるでしょアナタ」

「今日は担当場所終わつたからいいの」

「いや良くないよお姉様？どうせいつものサボ」サボって無いもん！
！」

「思考を読むなよ…」

「京ちゃんに関して解らない事は何も無い！」

だからそれかなり怖いって…まあ言っても無駄だし…

「その君！」

「…あ、まだ居たんだ」

「居たさ！葵さんを賭けてデュエルしろ！」

「よし選べ、じわじわなぶられたいかそれとも一瞬でやられるか…
今回は貴様を選ばせてやる」

葵姉を賭事に使うとは…貴様は俺を怒らせたぞゴミが！

「ふん！私が勝さ、フランス君が私に譲ってくれたカードでネ！」

「京ちゃん頑張つて」

「勿論だ」

「勝つたら葵さんから離れるヨ！」

「「デュエル！！」」

京哉LP4000

リヴェルLP4000

「俺が先行を貰う！ドロー！」

さて、この手札なら出さずに済むか

「モンスターをセットしカードを2枚伏せターン終了だ」

「私のターン、ドロー！…ふむ…」

さつさとしろよ…今長引くのは嫌いだ

「私は切り込み隊長を攻撃表示で召喚、更に効果でもう1体特殊召喚する」

切り込み隊長 攻1200×2

「ロック…逃げるのに必死だな…」

「ふっ…コレは勝利の為さ、ターン終了」

「言ってる…俺のターン、ドロー」

さて、ロックは正直不味い…しかも今は打開策が無し…か…

「モンスターをセットしてターン終了」

「私のターン、ドロー…さて、貴方にこのデッキの切札をお見せしますよう力」

「…今の見せましようどうやって発音したんだ」

「ウルサイ！良いから見てろ！ラーの使徒を召喚！」

ラーの使徒 攻1100

「…聞いた事の無いカード…」

「ラーの使徒の効果発動！同名カードを2枚手札に加えるヨ。更に二重召喚を発動！これにより追加で召喚します！三体のモンスターをリリース！」

何…？バルバロスか…ギルフォードか？

「現れなさい！ラーの翼神竜！」

ラーの翼神竜 攻???

「ラー…だと？」

「あー！それだ！」

これ葵姉の…探しものかよ…だが何故奴がラーを…

「そして神を従わせるフィールド魔法発動！神縛りの塚！」

岩が現れそこから鎖が飛び出しラーに絡みついた…可哀想だなあ…

「…はあ…」

「どうしたんだイ？もしかして私のラーに「それ何処から手に入れたの！？」これはだねMs・葵、フランツ君が私に協力してくれたからサ」

「…なあ葵姉、あのラーって…」

「うん、偽物…」

成る程…ね…偽物なら遠慮は無いな。もっとも本物も遠慮しないがな

「ハッハッハ！私のラーは強いだろウ！」

「いや、全然」

「ふん、強がりを言ってロ！ラーの第2の効果を発動！ライフを1にしその差を攻撃力にする！」

リヴェルLP4000↓1

ラーの翼神竜 攻??? ↓3999

…うわ、アイツ目だけフィールドに残って体を融合させやがった…キモい

「…魔法の筒ワロス…w」

「残念だったネ！ラーに魔法も畏も効かないヨ！ラーの攻撃！ゴツドブレイズキャノン！」

うわ…最初の狙って来やがった…

「セットモンスターは…魂を狩る死霊、このモンスターは戦闘では

破壊出来ない」

「面倒なカードダ、カードを伏せターン終了！」

「俺のターン、ドロ」

『京哉！退屈だったぞ！』

…つわ…ここで更に面倒な…ん？確か相手はラーだったな

「よし、面白いものを見せてやる」

「まあ例え見せて頂いても私のラーには叶いませんよ」

「へっ…伏せカード発動、アポピスの化身、特殊召喚！」

アポピスの化身 攻1600

「攻撃表示？血迷いましたネ」

「更にモンスターを3体生け贄に捧げる！主との契約の下に…天より現し、大地を照らせ！降臨せよ、ラーの翼神竜！」

ラーの翼神竜 攻3000

『ふい…なんと清々しい気分…やはり大空は素早い…』

…なんか聞いた事ある台詞だなおい…

「なっ、何故攻撃力が3000!？」

「魂を狩る死霊が攻撃力は300、セットモンスターが1100、アポピスが1600だからだ」

「しっしかし私のラーには及ばない！」

「ラーの第3の能力を発動！ライフを1000払い相手モンスターを破壊する！ゴッドフェニックス！」

『我のコピーは我と違い翼の艶が無い！そして吸引力も無い！消える！』

…消し去る理由が小さすぎる…っ！か吸引力って…まあいいか

京哉LP4000↓3000

「私のラーがあああああああ！！…なんてね…伏せカード発動！
！神秘の中華鍋！」

リヴェルLP4000

…成る程…使い捨てか…とことん俺を怒らせたいようだな

「リヴェルさん酷い！」

「何を言う葵、勝てば良いのですヨ」

そして親しくも無いのに葵姉を呼び捨てにした…許せん

「…このターンで終わりだ」

「何を言う、君は計算が出来ないのかイ？」

「手札から死者蘇生を発動、貴様の墓地に眠るラーを蘇生させる」

ラーの翼神竜 攻??? 攻???

「…まつまさか…」

「2体目のラーの効果発動、俺のライフを1にし攻撃力に加算する」

京哉LP3000↓1

ラーの翼神竜 攻??? ↓2999

「こ…こんな事…」

「終わりだ！ツインゴッドブレイズキャノン！…精神は壊さない程度に」

『仕方ない…だが神を縛った罪は重い！失せよ！』

「うぎやあああああああ！！！」

リヴェルLP4000↓0

「敗因はただ一つ…てめえは俺を怒らせた…」

…さてと…あ、これ葵姉に渡さねえと…

「はい」

「ありがとう京ちゃん、今からペガサス会長に渡しに行くね」

…来てたのかよ…じゃあ俺も会いに行きますか

「…う、ううん…私は一体…」

…チツ…勝手に起きやがって…

「京哉君！今ラーが居らんかった!？」

「倭か、俺が叩いた」

「えー！ウチ見たかったのにいゝ！」

「文句を言う「そこのお嬢さん！私とお付き合いを」…」

「えー…何か特典あるんか？」

「勿論！私はI2社の者で年収は24億「アンタは嫌や」ノオオオオオオオオオ！何故!？」

「京哉君の方がもつと金なら持つとるよね？」

「…いや…月収ランダムだし…蓄えで40兆前後だぜ？」

…だって海馬と会長が合計。。。億円入れるから…

「それに京哉君はウチを大切にしてくれるし」

「…ノオオオオオオオオオ！！」

あつ…走って何処かに行った…まあメダルは落としたみたいだから
いいか…2枚か…これで合計4枚だな

第八十四話 太陽神降臨（後書き）

今回は頑張った、うん頑張った

もうすぐ携帯を買い換える予定です

…機種変はここ大丈夫かな…？某ゲームサイトみたいに再登録とかしないよね…まあ気にしないで行こう！

では

第八十五話 帰って来たぞ帰って来たぞ♪（前書き）

いきなりのミス…ダメだぁ…俺なんとかしなきゃ…

第八十五話 帰って来たぞ帰って来たぞ♪

S i d e 暗奈

「駄目…ね…見当たらないわ」

やはり単独で闇を探するのは難しいわね…でもこれは私の使命…必ず成し遂げないと…

『あまり気落ちするな杏奈』

「わかってるわ」

さて、この辺りはもういいとして…お腹すいた…

…この所調査ばかりで何も食べて無かったわね」

…京哉何処かしら？久しぶりに何か食べさせて貰わないと

S i d e 京哉

「！」

「どうした京哉？」

「いや…気のせいだ」

何かいろんな意味で嫌な感じがしたんが…

「ふーん、それより早く飯作ってくれよ！」

「相変わらずだよな十代」

「ただホント早く飯を作らないと…」

「京哉！さつさと飯を持ってこい！」

「…はあ…」

「帰ってきた万丈目がうるさいんだよ…ん？」

「帰ってきた万丈目…だと…？」

「なんだ？俺様が居たら困る事があるのか？」

「…万所梅、名前変えろ」

「何故俺様が変わねばならん！しかも変えて言うな！」

「許せん！貴様みたいなまがい物は潰してくれる！」

勝手に帰り。ンの名前に似せやがって…例え世界が許しても俺が許さんぞ！

「ええい！訳がわからんぞ！」

「とりあえず京哉落ち着けよ、こついう時はデュエルで…」

「よし来い万次郎！俺が完膚無きまでに叩いてくれる！」

「万次郎では無い！鬱陶しい、俺様がさっさと叩いてやる！」

「いいぞー！」

『…よろしいのでしょうか…？』

『ならアオイ、私が誰か呼んできます』

『フェル、お願いできますか？』

『わかりました』

Side 風

…海度先生に呼び出されたけど俺に何の用だろうな…

「入るぜ先生」

「よう風」

「何の用だよ？」

「まあちよつと話さ」

「話？」

「ああ」

…成績は普通だし…もしかして龍牙との喧嘩の話か？

「ん…何というかな…まあ率直に聞くがデュエルは楽しいか？」

「っ！」

駄目だ駄目だ！思い出すな俺…

「ああ、楽しんでるぜ」

「…成る程、じゃあこれ持っていけ」

そう言つて海度先生は小さな箱を渡して来た

「何だこれ？」「開けてびっくり玉手箱…まあ俺からは以上だ、帰つていいぞ」

…何が言いたかつたんだ？まあ帰るか…

side 京哉

「うらああああ！アキトで止めだああああ！」

『久々の出番だぜええええ！』

「うわああああ！」

万偶巢LP1250↓0

っし！万偶巢をぎたぎたにしてやったぜ！

「お前は今から万偶巢だ！」

「誰がマンガースだ！」

「お前が帰ってきた万上目とか名乗るから悪い！」

「誰も名乗っていない！」

なにっおう！？コイツ敗者のくせにまだ言い張るのか…！

「いい加減「いい加減にしなあい」どうふあ！？」うおおおお

お…！頭がああああ！頭がああああ！

「た、助かったよ黒原君…」

「だらしないわね万偶巢」

あ…暗奈めえ…俺の後頭部殴りやがって…めちゃくちゃ痛い…

「全く…器が小さい男ね」

「ほ…ほっとけ…」

「それより京哉、ご飯いただけるかしら？」

「…わかった」

「あら、案外素直ね？」

拒否したらどーせまた殴るだろうが…

「当たり前よ」

「人の心を読まないでくれるかな？」

「いいから早く作りなさい」

はあ…いつか絶対仕返ししてやるかな…

side ???

うーん、迷っちゃったなあ… 1人になるんじゃ無かったなあ…
レ
イって人と別れてしまったし…どこだろう…うう…木が多いよ

「お…お腹空いた…」

あ…もう…ダメだあ…倒れそう…

「何か…いい匂いがする…」

こっちだ…頑張るんだ、僕…

side 京哉

今レッド寮前だ…え、なんでかって？それはだね

「京哉、さつさと持って来なさい」

暗奈が外で食べましようとか言っただからだ。ちなみに…

「相変わらずの腕前やなあ京哉君」

「羨ましい…」

「真似出来ないもんね」

「レベルが高いですよ」

「わーい！京ちゃんの手作りだー！」

皆さん勢ぞろいですはい…まあ楽なのは…

「京哉ー！手伝ってくれー！」

「くっ…なんで俺様までが…」

「アニキの手伝いと言っくんじゃなかった…」

「丸藤先輩早くするドン！」

「アニキ！どうしたらいいッスか！？」

「神谷にオレの手料理見せてやる！」

…と、まあ風以外は手伝ってくれてるからだ。風は気が乗らないらしいな

「…今俺抜けてもバレない「さつさと作りなさい」ことは無さそうだ、うむ」

諦めて作るう…もうカップ麺出してもバレない「手抜きだと殺すわ」…なんてことは無いからキッチンと作るうか

「メインは十代達が作ってるから俺はサブを」うわああああああああああ！フライパンからファイヤああああああああ！」…駄目だアイツ等なんとかしないと…」

今度から料理教えておいた方がいいよな絶対…

ガサガサッ！

「ん？」

今こつちから物音が聞こえたんだが…気のせいかな？

ガサガサッ！

「まただ…」

次…物音がなつた場所はあそこか…少し近づいてアレをやるう、新ネタだぜ？

ガサガサッ！

「貴様見ているな！」

ふっ…姿勢、角度、キレ、そして指…完璧だな

「あ、あの…」

「…え？」

大人しそうな少年が出てきた…ちょっと今のはやりすぎた（ネタ的な意味で）

「あの！」

「はい？」

「立花京哉さんですか！？」

「ああ…そうだけど…」

…まさかこの少年、さっきのを使って俺を脅す気なのか！？

「本物だ…僕天宮光輝って言います！ああ本物の京哉さんに会えるなんて夢のようだ！」

「はあ…」

服装から見て外から来たっぽいけど…これくらいのプロなんて居たかな？

「あのさ…」

「すみません！これにサインいただけますか！？」

「え？ああ、いいよ」

サインねだってくるあたりプロじゃないか。サインなんて書いた事無いんだけど…まあ適当に書くしかないか

「はい、どうぞ」

「うわあ、ありがとうございます！」

すげーキラキラした目で俺のサインを見てるよ、ちょっと照れる…

グウ

「あ…すみません…」

「あ…腹減ってるんだ」

「はい…かなり迷ってたので…」

む、それは駄目だな。若いのに何も食べていないなんて

「寮が近くにあって今から飯を食べるんだ。良かったら食べないかい？」

「いいんですか？」

「ああ、迷惑じゃ無かったらね」

まあ作るのに迷惑な奴らが既に数人居るんだけどね

「…すみません、ご相伴預からせていただきます」

「どうぞどうぞ、他に俺の友人が何人が居るけど気にしないでくれ」

「はあ…何かすみません」「気にしないってね。さて行こうか」
とりあえず早く行かないと暗奈がうるさいしな…

そつえば調理場は鎮火したかな？

s i d e 調理場

「うわあああああああああ！」

「水をかけるからどけ、十代！」

ばしゃあ！！

「消えて無いッスよ万丈目君！」

「なら土をかけるドン！」

「バカか剣山！んな事全く意味ねえよ！」

「とりあえず消火器とつて来るからなんとかしろー！」

地獄絵図となっていた…

第八十五話 帰って来たぞ帰って来たぞ♪（後書き）

もう少し注意力が必要だなあ…

第八十六話 組織と接触（前書き）

はい、皆様こんばんは！

またスリープの数が増えた紅煌蒼です

ろくに使わないのに数だけ順調に集まっております（笑）あゆ屋め！

まあそれは置いときましょう。最近買いたいのが多すぎて大変で…
とりあえず今月は自重し来月にはPSPとガンネクは買いますね

後はなのはとヴァイスかなあ… 限定版で

カードではVisionと遊戯王を買いますから… オオ、金ガ、金ガ…

まあ前置きはこれぐらいで終了しましょう、では本編どうぞ！

第八十六話 組織と接触

side ???

「おい、指令がきたぞ」

「はあ？めんどくせー」

「文句言っちゃ駄目だよ」

けっ、毎回毎回意味無い指令ばかり出して来やがって…あの爺め

…

「なんて来たんですか？」

「…完成体との接触だつてさ」

「何！？」

良いチャンスだぜ！そんなチャンスをどれだけ待ってたか！！

「おい！俺が先に仕掛けさせてもらうぞ！！」

「お前は別指令だ」

「はあ！？」

「接触はGが行う。お前は私と共に出来損ないの抹殺だ」

「ふざんけんな！今までどれだけ暇で無意味な指令をやらされてたか！」

今までの鬱憤を晴らす機会だつてのにあのクソ爺！！

「落ち着け、お前は我々の切札だ。そう簡単に出てもらつては困る」

「だからつてよ！！」

「奴は1度デュエルを見ると確実に戦術を把握して来る、それで看破されちゃ話にならないからな」

「ちっ！」

「ごめんね」

あのクソ爺め…まあいいさ、奴に俺は勝つ。そして爺へ復讐してや

る…覚悟している、立花京哉

side 京哉

「つくしつ!!」

「風邪ですか？」

「いや…多分違う」

まあ大方誰かが噂してるんだろう、気にしないでおう

「それにしても美味しいよなあこれ」

「そうだねアニキ」

「今日ほど簡単なものが美味しいと思った事は無いドン！」

「缶切り使っただけだしな。ほら万丈目も食べよ」「すげーうめえよ
!!」

「…貴様等乾パンでよくそんな感想が出来るな…」

あつ、調理班は調理場（俺の部屋）を大変な事にしたから一週間朝
昼晩の食事は乾パンオンリーになった。炭と化した飯を喰わされた
上に葵姉からかなり怒られてた、ちなみに監視不十分として俺も罰
があるのだが…

「絶対に駄目です！」

「葵先生ばかりズルいですよ」

「ボク達も一緒がいいです！」

「葵先生権限使い過ぎや！」

「やーだー！罰だから仕方ないんだよー！」

なんか1週間葵姉と一緒にいるとかふざけた内容の罰に対しての抗
議を喬達がしている所だ

「モテモテですね京哉さん」

「いや、全くモテ無いぞ？」

帝君とかの方が女子からの受けがかなり良いぞ。最近だと風も女子から人気らしいしな

「…すごく意外です…」

「何が？」

「あ、いえ…」

何だろう？まあ気にしない方が良さだろう

「ところで君もジエネックスの参加者かい？」

「あ、はい！たまたま勝ち上がったので…」

「いや、たまたまでも勝ち上がれているから十分強いよ」

俺普通に負けるんじゃないかな？まあこの大会勝っても俺にはこれといった望みは…あつたな

P I P I P I …

「何か鳴ってますよ京哉さん」

「ああ、PDAだ」

誰だよ…また下らん宗教団体からのメールとかだったら即叩きにくからな

「！？」

「どうかしましたか？」「光輝君、すまないがちょっと抜ける。なんとかごまかして欲しい」

「はあ…わかりました」

さて…目的の奴が向こうから来たみたいだな…

s i d e ???

「…うん…」

「G、どうかしましたか？」

「僕ことうのあんまり好きじゃないなあ」

「まあ目的の為ですからねえ」

でも何かで人を釣るのはやだな。堂々と戦いたいもん

「それにしてもこの子何処から連れて来たの？」

「まー気にしないで下さいよー」

うん…どう見てもドリアドだね…精霊はやっぱり居たんだね

「それよりG、作戦通りにして下さいよ」

「はい」

京哉君は強いかな？

side 京哉

廃寮に到着つと…さて、敵さんはどちらにいるかな…

「とりあえず入るか」

今回はアイツ等は連れて来て無いから1人か…まあそっちの方が良い

『お兄ちゃんみーつけた』

「…何で居るんだよアリス…」

『だってお兄ちゃんすごく険しい顔してたから…それにお母様のようになつて欲しく無くて…』

…そうか…アリスはアリスなりに考えてついて来たのか…邪険にするわけにはいかないか

「…そのかわりいきなり殴りにいくのは止めるよ」

『お兄ちゃん私の事そんな風に見てたんだ…』

「…違うのか？」『違うもん!』

そうか違うのか…もしかして魔法使いより戦士族として戦った方がいいんじゃないかな？

『大問題だよ！』

「心を読むな」

『お兄ちゃんの考えくらい解るよ』

単純な考えですみませんでしたー。最近心読まれまくってるからポーカーフェイス練習するでしょう

「さて、心が和む冗談は終わってさっさと行こうか」

『…お兄ちゃん、今日これ使って』

「これは…」

『…お願い』

…アリスの心からの願いだ、断るわけにはいかない…

「使わせて貰うぜ」

『うん！』

「それじゃあ行こうか」

待つてろよ…手下から貴様の居場所を吐かせてやるからな…

side G

んゝ暇だゝ。何かないかなゝ

「ねえムカデンダー、何か食べ物無い？」

「私やムカデンダーじゃ無いですよー、Mドンドならあります」

「えゝ昨日もそれだったよゝ。しかもムカデンダーいつも同じのしか買わないよねゝ」

「いーじゃないですかー、レタスバーガー」

パンとレタスだけのハンバーガーなんかいらないよゝ

「それにしてもこの子なかなか起きないねゝ」

「確かに寝過ぎですねー。つついてみましょー」

それは止めた方がいいと思うよ。起きたらマズいし

「っーん」

『はむう』

「食べられたー！」

ん。だから止めた方がいいって言ったのに。それは言っていないや

「今で場所がバレちゃうかもよ」 「バレないでs」 見つけたぞ
バレちゃいましたー」

あ。あ。見つかっちゃった。いつもいらない行動ばかりして

「お前がメールの送り主だな？」

『ドリアードは返してもらっよう！』

「どうするの？」

「Gー！後は頼みますぞー！」

またさっさと逃げた。いつもだから気にしないけど

「…いいのか？相棒はさっさと逃げたけど」

「い。よ。いつもだからね」

『何か抜けた人だね』

「ありがと」

『誉めてないんだけど…』

いつも皆から言われてる事だから慣れたよ

「…やはり精霊は見えるか…」

「見えないとこのお仕事出来ないからね。僕本当はこんな事した
く無いんだよ、卑怯だしね」

『やってるのにやりたくないって矛盾してるよ！』

「指令だからね」

「その指令を出してるのは誰だ？」

「それは秘密なんだ」

言っちゃダメって言われてるからね。特に京哉君はダメだよ

「成る程、なら俺とデュエルしろ。負けた場合ドリアードを解放し

洗いざらい話して貰う」

「いゝよ」

楽しみだな、あの年から京哉君の話はずっと聞いてたもん

「それじゃあ僕が勝つたら、どうしようかな」

「何でもいい、始めよう」

京哉君って意外と気がはいんだね、のんびりでいいのに

「それじゃあやる」

「行くぞ」

「デュエル！（デュエル）」

京哉LP4000

GLP4000

side風

…先生が貰ったカード…あのペガサス・J・クロフォードが俺にくれたカード…

「…だあああああ！ダメだ…全然わかんねえ！」

何が理由でコイツを渡したんだよ！モンスターの姿ねえし！！

「…京哉に聞か」

アイツなら何か聞いてるかも知れねえしな…

「…絶対反対です！」

「ヤードー！！」

…また下らねえ事で喧嘩してる。京哉は…居ねえか

「あつ、凧さん！」

「あれ？光輝、どうしてここに居るんだ？」

「ジエネックスの参加者として来たんです」

…まああのデッキなら軽く来れるだろうな。そうだ

「京哉は何処か知らないか？」「京哉さんなら何処かへ行きました。何か急いでるようでしたが…」

「そうか、サンキュー」

とりあえずメールもしてみるか、また変な奴らに絡まれてるかもしれないが…アイツなら何とかするだろ

第八十六話 組織と接触（後書き）

ガジャルグ欲しいなあ…あつ、タジャトルでは無いですよ？

最近の日課は朝8時から始まる再放送の金田一の少年の事件簿を見る事ですね（むしろ1日の始まりが金田一w）。朝の子供放送（つばい名前だった気が…）で放送なんですが…金田一は子供向けじゃ無いだろwww

子供は間違いなくコナンを選ぶでしょうな。金田一は大きくなってわかる面白さですからね

皆さんは推理系なら何が好きですか？推理系アニメ等見た事無い場合はおすすめしますよ

では！

第八十七話 忍び寄る闇の恐怖（前書き）

どうも、最近眠すぎる作者です

来週にPSPを購入に走ります。ちなみにビータでは無いですよ

言うことあんまり無いや…ではござい！

第八十七話 忍び寄る闇の恐怖

side 京哉

京哉LP4000

GLP4000

「僕から行くね、ドロ」

名前がGとか言う奴が先攻だ…名前の由来は不明だがデッキ内容はいかほどか…

「僕はガガギゴを攻撃表示で出すね」

ガガギゴ 攻1850

ガガギゴか…このシリーズは攻撃力は中途半端だがだいたいの下級は普通に叩ける。まあまずガガギゴシリーズは微妙だが俺は好きだ。そういえばコイツはコザツキーが原因で暴走するんだっただ…まああの世界では俺はコザツキーを更生させたがな

「カードを1枚伏せてターン終了」

「なら俺のターン、ドロ」

ふむ…どうするか…手札にガガギゴを倒せるカードが無いな…まあとりあえずは様子見でもしようか

「モンスターをセット、カードを1枚伏せてターン終了だ」

「僕のターンドロ。うん、どうしようかな」

…この喋り方は素か？いや、相手を苛立たせる策かもしれない。とりあえず落ち着け俺…

「それじゃあ、手札からアトランティスの戦士の効果使うね」
アトランティスの戦士…やはりガガギゴ系爬虫類か。ガガガギゴ
が手札にあれば出してくるが…

「伝説の都アトランティスを手札に加えて、グラナドラ召喚」

グラナドラ 攻1900

「グラナドラは召喚、特殊召喚したらライフを1000回復するんだよ」…知ってる…本当にこの喋り方鬱陶しい…イライラする…

GLP4000↓5000

「それじゃあバトルフェイズに入って攻撃するね、グラナドラ攻撃」

「セットモンスターはペンギンソルジャー、リバー効果によりグラナドラとガガギゴを手札に戻す」

「それじゃあ僕はターン終了」

…とりあえず落ち着け、冷静に行くんだ。アイツの居場所を見つける為に！

「俺のターン、ドロー」

奴の場には伏せカードが1枚…召喚に対して発動する罠ならばちょっとマズいが…

「ここは臆せず突っ走る！コールドエンチャントを召喚！」

コールドエンチャント 攻1600

「コールドエンチャントの効果発動！手札を1枚捨て、フィールド上の表側のモンスターにアイスカウンターを1つ乗せる！俺は手札を全て捨て、コールドエンチャント自身にアイスカウンターを4つ乗せる！」

アイスカウンター 0 ↓ 4

「更にコールドエンチャーターはアイスカウンターの数×300の攻撃力を得る」

コールドエンチャーター 攻1600 ↓ 2800

「更に伏せカード発動！天よりの宝札！互いに手札が6枚になるようにドローする！」

「手札が増えないから嬉しくないな」

よし！いける手札だ、このターンで仕留める！

「更に魔法カード死者蘇生を発動！墓地から青氷の白夜龍を特殊召喚！」

青氷の白夜龍 攻3000

「綺麗なドラゴンだね」

「行くぜ！コールドエンチャーターでダイレクトアタック！ブリザードストーム！」

「うわあ」

GLP5000 ↓ 2200

「これで終わりだ！青氷の白夜龍でダイレクトアタック！ブリザードバーン！」

「うわあー！」

side 風

全く…どこに行っただ？連絡もつかねえし…

「ここまで来たら大丈夫ですねー」

いきなりフードを被った奴が出てきやがった…どう見ても怪しいが

…

「まーったく、怖い人ですね立花京哉って人は」

！？…何故アイツ京哉の事知ってんだよ…聞いてみつか

「なあアンタ」

「ん？おおー！こんな所に調査対象が！？」

は？調査対象？何言ってるんだコイツ…

「どーしましょー。とりあえず逃げましょ「何かわかんねえが逃がさねえ」あらー、捕まりましたー」

…なんかすげえ呆氣ないが…まあいい。聞くとしようか

「お前京哉の居場所知ってるのか？」

「そりゃー知ってますよー。あそこの古ーい建物ですよ」

…案外すんなり言っただな。どう痛めつけるか考えてたんだが…

「そうか、後俺が調査対象か聞かせて貰おうか」

「それは言えませんねー」「成る程、じゃあ無理やり吐かせるか」

「あわわー、肉体言語は…」

ん？急にコイツの声のトーンが変わった…

「いけませんよ？」

「な！？」

掴んでた筈なのになんで後ろに居るんだよ！？

「それではさよーならー」

くっそ…妙な奴め…掴んでたのは人形だし…

「とりあえず京哉に会つか…」

…あれ？京哉君おらへんな、いつの間に抜けたんやろ

「倭、どうしたの？」

「京哉君おらんゝって思つて」

「ホントね…何処行つたのかしら？」

また精霊界やるか？行くんやったら言つて欲しいわ…

「！？」

「暗奈ちゃんどないしたん？」

「来る…」なんや？何か感じたんか？…まさか暗奈ちゃんニユータイプ！？」

「…お前か、俺の闇を見つけたのは」

なんや？フードコート着た人が出てきよつたけど…

「目標及び遊城十代と他の調査対象を確認」

「なんだ？俺達に用か？」

「見つけたぞ出来損ない」

出来損ない？龍牙君に言つたみたいやけど…

「てめえ…まさかあの野郎の仲間か！？」

仲間？あの野郎？アカン、全く付いて行けん…

「ようやく…ようやく見つけたわ…」

「暗奈さん？」

「パパとママの仇…奴は何処！？」

…なんやろ、ウチら居つたらアカンよな…

「…誰が答えるかよ、こつちはさつさと立花京哉を抹殺したいんだ。てめえには用は無い」「なんですって…」

…京哉君…抹殺？ふざけんなや…ウチはそんなんせん…

「さつさと来い出来損ない、俺とデュエルだ」

「アカンで！そんなんウチ等が「私が相手になります！」え…？」

「何？」

「京哉さんと龍牙さんを抹殺なんてさせません！龍牙さんの前に私が相手になります！」

涼ちゃんが大きく言い放った…皆も気持ちはおんなじみたいやな

「コイツは対象外だ、無視しろ」

「解っている、俺の相手は「残念ながらダメよ」何？」

「今半径50mは私の闇に包みアナタを捉えたわ…逃がす訳にはいかない」

…便利やな闇って…まあウチらは絶対頼らんけど

「…仕方ねえ、おい俺に合わせろ」「解っている」

「涼、準備はいいかしら？」

「はい！」

「頑張れ涼、暗奈！」

「アニキの為に負けんじゃねえぞ！」

2人共、頑張つてな…

side???

「私だ」

『旦那様、志木でございます』

「おう、どうした」

『あの人の研究施設を発見しました』

「何？…資料はあったか？」

『申し訳ありませんが…』

「そうか…」

流石は立花博士…そういうのは全て捨てあるか…

『ですが恐ろしい計画は発見いたしました』

「どういふのだ？」

『デュエルエナジーという力を利用し異世界の扉を開くというのでございます』

「異世界だと！？」

立花博士はまだあの事を実行するつもりなのか！？

「…とりあえず全て調査終了次第立花京哉の身柄を保護するんだ」
『わかりました、それでは』

マズい…博士が京哉の力を吸収したら…京哉は…

「それだけは避けねば…」

彼の母との約束の為に…

第八十七話 忍び寄る闇の恐怖（後書き）

あれ？この作品の方向が最近おかしくなったような…まあいいか

そろそろ組織の方との対決です、残念ながらバーロー展開はありません

ちなみに質問なんですけど武装神姫って面白いですか？やってみたいんですが買つかどうか迷ってます。情報下さいな、では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6790k/>

遊戯王GX 静かなる力

2011年11月28日00時48分発行